

フェンリルに勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない

ノシ棒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

加賀美リョウタロウ。

後の世に、最強のゴツドイーター“神狩人”と称されることになる、一人の男の物語である――。

※当SSはArcadia様のチラシの裏に投稿していたものを改訂したものです。Arcadia様内にありました当SSは削除してあります。

目次

ごつどいーたー：2 4 噛	G E 2	486
ごつどいーたー：2 3 噛	G E 2	464
ごつどいーたー：2 2 噛	G E 2	434
ごつどいーたー：2 1 噛	G E 2	413
ごつどいーたー：2 0 噛	G E 2	383
ごつどいーたー：1 9 噛	G E 2	356
ごつどいーたー：1 8 噛	G E 2	343
ごつどいーたー：1 7 噛	G E 2	325
ごつどいーたー：1 6 噛	G E 2	305
ごつどいーたー：1 5 噛	G E 2	284
ごつどいーたー：1 4 噛		268
ごつどいーたー：1 3 噛		244
ごつどいーたー：1 2 噛		221
ごつどいーたー：1 1 噛		201
ごつどいーたー：1 0 噛	F o r 2	179
ごつどいーたー：9 噛		167
ごつどいーたー：8 噛		144
ごつどいーたー：7 噛		115
ごつどいーたー：6 噛		98
ごつどいーたー：5 噛		79
ごつどいーたー：4 噛		58
ごつどいーたー：3 噛		41
ごつどいーたー：2 噛		21
ごつどいーたー：1 噛	G E ↓ B	1

ごっどいーたー…27 嚙
G
E
2

ごっどいーたー…26 嚙
G
E
2

ごっどいーたー…25 嚙
G
E
2

554 533 512

ゴッドイーター：1 噛 GE↓B

ペイラー・榊の遺した著書の中に、次のような一節が記されている。
『当時、ただでさえ数の少ない“新型”において、彼は輪を掛けて異端
だった——』

幾度となく世界を救い、多くの伝説を残したフェンリル極東支部第一
戦闘部隊。

その部隊長を長年務め上げたある男の名は、“ゴッドイーター”達
の一種の信仰とさえなっていた。

今や“神”は地上に降り立ち、人を喰らう存在となった。

流星の如く現れた若き英雄に、人々が救いを求めたのは、自然な流
れであったと言えよう。

『流星の如く、とは我ながら言いえて妙だと思うよ。彼が放った一筋
の光が、誰もが永遠に続くと思っていた夜を斬り裂いたんだ』

榊がその男の事を語る際、決まって星に例えるのは、榊がスターゲ
イザーと呼ばれる所以だろう。

彼を流星と称したのも榊なりの皮肉なのかもしれない。彼はきつ
と、それこそ流星のように流れて、堕ちて、消えてしまいたかったに
違いない。死にたがり、というよりも、生き急いでいるように見える、
そんな戦い振りだった。一瞬の内に命を燃やし尽くし、閃光のように
輝いて人々の心を照らし、そして静かに消えていく。彼は自分がそん
な人生を歩むと、そう覚悟していた節があった。

それをさせなかったのが榊と、彼を支えた仲間達である。

中でも、かつて“アラガミ”への復讐に狂った少女が、彼の支えと
なるためにもっとも尽力したというのだから、人生とはどうなるか解
らない。とは榊の言である。

榊が彼に出会ったのは……否、榊が彼を一方的に知るようになった
のは、彼の新型“神機”適合実験に立ち会ったのが最初だった。

そう……実験だ。

新型はその複雑な内部機構のために、搭載されている“オラクル細
胞”の配列が特殊な物となっている。

新型の絶対数が少ないのは、複雑化に比例して増大するコスト面についての問題もあったが、何よりも特殊なオラクル細胞に適合できる人材がほとんどいなかったことにある。

オラクル細胞に親和性を持つ人間は珍しくはない。だがその大抵は、旧型のオラクル細胞……単純な細胞配列に対してしか、適合資格はなかったのだ。

それは新型神機が複数のアラガミのデータを元に構成されているためであった。

そもそも神機そのものが人為的に調整されたアラガミと言っても過言ではなく、未だ完全には解明出来ないような代物である。新型とは、よりアラガミに近い、理論から現物まで作った側にとっても混沌としていて、非常に謎の多い神機だった。

理論も解らないものをただ「使える」から、という理由で戦力に加えなくてはならないほど、人類が追い込まれていたとも言えよう。

——西暦2071年。

世界は神々、アラガミによって喰い荒され続けていた。

当時より数十年前、北欧地域にて発見された新種の単細胞……オラクル細胞。

初めはアメーバ状でしかなかったそれは、半年後にはミミズ程の大きさにまで成長し、そして一年後には、異形の化物となって大陸を滅ぼした。

オラクル細胞は爆発的に発生、増殖を繰り返し、地球上のあらゆる構成物質を「捕食」しながら急激な進化を遂げ、凶暴な生命体として多様に分岐したのである。

人々はその多様性と脅威に畏怖を込めて、極東の八百万信仰になぞらえ、アラガミ、と呼んだ。

アラガミは一個の生命体に見えて、その実はオラクル細胞の集合体である。群体がアラガミの本質だった。

あらゆる全てのもの……生物から無生物までを捕喰するオラクル細胞から形成される身体には、既存の兵器は一切の効果が無なかったのである。銃弾を撃ち込む端から吸収されていく様は、悪夢としか言

いようがない。

“食べ残し”である人類には、もはや終焉を待つ以外に道は無いと思われた。

そんな時、同じくオラクル細胞を埋め込んだ生体兵器、神機が生科学企業“フェンリル”によって開発される。

オラクル細胞に抗するには、オラクル細胞を用いるしかなかったのだ。

そして自らの体内にオラクル細胞を摂取し、神機と自らを連結させるゴッドイーターが編成されたのである。

人類の対抗手段は、神機を操るゴッドイーターのみ。

限られた土地に築かれた壁の内側へと人々は身を潜め、旧時代の戦闘、つまりは生身での“狩り”を繰り返していた。

戦力の補充は、人類にとつて最優先事項であつたのは言うまでもないだろう。

国という概念が崩壊した今、アラガミ防壁に囲まれた局地都市“ハイク”を建造し、それらの統治機構としても働いているフェンリルの命に逆らう事は許されなかつた。

配給を受けている限り、適合する“偏食因子”が発見されたのならば、ゴッドイーターとして使命を背負うことを拒むなど出来ないのだ。

ただの一般人でしかなかった彼もまた、喰うか喰われるかのゴッドイーター候補として、フェンリルによって選ばれた者の一人であつた。

彼が見出されたきっかけは、外壁より侵入したアラガミに襲われた際に負った傷の、治療のため受けた血液検査からだつた、との資料が残っている。

黒髪、黒目。身長は平均よりやや高め。顔つきは柔らかいが、目立って美形という訳でもない。

容姿として取り上げるのはその程度しかない。

前歴は無職。

荷物運びやガレキ集めなど、日銭を得てその日暮らしの生活をして

いたらしい。

何故これほどの人物が市井に紛れて生きて来たのか、と誰もが首を捻ったが、彼の仲間達からすれば、それこそが彼の望みだったのだと口を揃えたことだろう。

本来、彼は闘争を好む性質ではない。

彼はアラガミに追い込まれ、死の危険に常にさらされながらも、それでもたくましく生き抜く人々の暮らしを愛していたのだ。

だから自分をその中に置きたいのは当然の事だ、と。

だが榊の意見は違う。

彼は待っていたのだ、とそう思っている。

ある意味、彼自身が彼一人の身の内に収まり切れないその才能の被害者であったのだらう。

彼は理解していたはずだ。自分が特別であるということ。

ならば彼は、自らに相応しい武器……新型神機が世に生み出されるその時まで力を蓄え、雌伏の時を過ごしていたと考えるのが自然である。

新型の開発情報は外に漏れることは一切なく、それを彼が知り得ることは絶対に無かったはずだが、しかし榊はそう感じていた。

彼は信じていたからだ。人の可能性を。必ず、アラガミを打倒し得る刃を、人は手に入れると。

そして、事実そうだった。

彼の行動に偶然はない。

かつての歴史に名を残す武将たちが、自らが動くべき機が訪れるまで座して待っていた、というエピソードは山のようにある。彼もきつと、そうなのだ、とそう榊は理解していた。

それも、彼を観察してようやく理解できた一端でしかないのだが。当初、榊は彼を哀れな生贄としか見てはいなかった。

治療の際に行った血液検査により、彼は神機の適性因子を保有していることが判明した。

多くの例に漏れず、単純な細胞配列である、旧型神機への適性因子だ。

そしてフェンリルの決断が下された。彼は、「新型神機の」適合実験に選出されてしまったのだ。

未だ未知の部分の多い新型である。適合者の選出には慎重を機せねばならなかった。だが、フェンリルはデータを欲していたのである。

今後の戦況に置いて、新型が神機の主流となっていくのは間違いない。

しかし適合段階において、その者が適合に失敗した場合、一体何が起きるのか。それは誰にも解らなかった。

旧型の神機では、非適合者は神機に喰い潰され、肉塊と為り果てるのみである。

現在はコンピュータ選出の精度も上がり、適合審査中の事故は希ではあるが、それでもゼロではなかった。

それも適合審査は軽いパッチテスト程度である、として公共電波で告知されているのだから、フェンリルがどれだけ適合審査に重きを置いているかは理解できよう。

最悪、新型の適合に失敗した者は、アラガミ化することも想定内であった。

早急に調査せねばならない。

では、どうやって？

簡単である。意図的に非適合者を選出し、適合審査に掛ければよいのだ。

つまり、彼が新型の適合者として選ばれたのは、不幸な偶然でしかなかったのである。

生贄だったのだ。彼は。

もつと言ってしまったえば、榊でさえも目を見張る程の彼の適合率の高さは、旧型神機をしてのものであり、そのため新型への適合は絶対に不可能であると思われていたのだ。

そして実験当日。

榊は自らは観察者であると、そうでしかないと本分を強く意識し、痛む良心を誤魔化しながら、ドームの中にいる彼の姿を見降ろしてい

た。

灰色の空間に連れ込まれた彼への第一印象は、影が薄い男、というのが正直なところ。まるで空気のような、と榊は思った。

退院してすぐの病み上がりで、着の身着のまままで連行されたのだから無理もないが、どうにも彼からは意思というものが感じられなかったのだ。

それがまったく動じずにこちらを警戒していた、彼の冷静さの現れである。榊が思い至るのは、もう少しの時間が必要になるのだが。

そこは、常はゴッドイーター達の訓練室として使われる部屋である。

特殊合金の壁で四方を囲まれた部屋ならば、アラガミの成り損ないが一体暴れる程度、どうとでもなる。

部屋の外には現職のゴッドイーター達を待機させてあった。

隣にいる雨宮ツバキには、不幸な事故だった、という目撃証言を言わせるためだけに、極東支部初の新型適合審査であるということだけを知らせて連れて来ていた。

お膳立ては整っていた。

自らが断頭台に上げられたのを知ることもなく、人々を守るのだと期待に胸を膨らませる若者を、そうと知って、そうとは知らせず、よつてたかつて殺そうとしている。

そして、当時の支部長と榊達による監視の中、彼へおびやかな建前だけの説明が行われ、公開処刑が始まった。

哀れみを込め、それでも余す所なくこれから起きるであろう事を記憶しよう、彼を見る。

ふ、と。

一瞬、彼が顔を上げた。

その時彼が何と口にしたかは解らなかった。

ただ、唇の動きを読む限りでは「ありがとうございます」と、彼はそう言っていた。

支部長が気付いた様子はない。

彼は、榊のみを見詰め、そして再び視線を前に戻していた。自らが振るう事になる、神機へと。

——後のことである。榊が、あの時何故礼を述べたのか、と彼に問うたが、彼は曖昧に笑って答えなかった。

これも榊が、彼が自分の運命を自覚していたことを思わせる、判断材料であった。

彼の選出にあたっては、榊も少なからず関係していた。否、むしろ、彼をと決定したのは、榊である。

支部長は誰でもよいというスタンスだったが、榊は違った。流れる涙は少ない方がいい。家族血縁友人関係に至るその人物の人間関係を全て洗い、孤独に生きる者、つまりは彼のような人間を使えと支部長に意見していた。

そして彼はそれら条件に完全に一致していたのだった。

科学のために。人類の未来のために。

その二つの言葉を免罪符に、自身の罪悪感を薄れさせたことを自覚しながら。

つまり、榊もまた、一体何が起きるのかという好奇心を抑えることが出来なかったということだ。

実体を見せぬフェンリル本社を悪し様に指差すことは出来ない、榊は自嘲するしかなかった。科学者の業である。

支部長に促された彼が、静かに神機との接続機へと手を差し入れた。

巨大な鉄の箱を上下二分割にしたような装置には、中に神機が——

——アラガミを殺すために人が磨いた、牙が収まっている。

剣に、銃に、盾。三つの種の異なる兵器がそれぞれ融合したような、巨大な鉄塊。

これら三形態を自在に使い分ける、新型神機である。

手を置く部分には、ネジを締めるナットを半分に分ったような腕輪の片側が。ここに手を入れることとなる。そして入れたが最後、彼は人ならぬモノへと変質し、ゴッドイーター達に狩り殺されるのだ。

榊には、人の反逆の希望が詰っているはずのその箱が、ギロチンの

ようにも見えた。

命を刈り取る装置という意味合いでは、全く同一の代物であるのだから、その印象も間違つてはいないだろう。

油圧ポンプが軋む音。

大きな金属音を立て、装置が結合された。

神機の結合機と共に、彼の命運も閉ざされる……かに見えた。

神機結合の際のオラクル細胞注入は、人間に強大な力を与えることになる。

膂力の強化、反射神経の増大。

いつてしまえば、半分人を辞め、アラガミに近しい存在へと肉体改造をするということだ。

当然、それには苦痛が伴うこととなる。

しかし彼は、平然としていた。

平然と、である。

苦痛にのたうち回る様子も、予想されていた人からの大きな逸脱も、まるで見られない。

そして結合機が開かれ、適合審査の結果は——成功。

極東支部初の、新型神機使いの誕生である。

高い旧型細胞への適合率は、そのまま新型機への適合率へと置き換わっていた。

異常事態である。

否、これをただ異常と言ってしまうのもどうだろう。先も述べたが、新型は未知の領域が多い神機であったのだ。

新型神機を持つ新たなゴッドイーターは誕生したが、しかし実験の主旨としては、失敗である。

結局、新型「が」非適合者をどうしてしまうのかは解らずじまいだった。

フェンリル上層部としては当然、面白くない。

今回の実験は、本部からの指令だったのだ。

極東支部に命令が下つたのは、当時の支部長が必要であれば道徳に反する行いをするのに、何の躊躇もない人物であったからだろう。

そして新たにゴッドイーターとなつてしまつた彼に対するフェンリルの風当たりは、露骨だつた。

碌な訓練もさせず、即座に実戦投入である。

彼と同チームに配属されたもう一人の新人……旧型神機適合者であつたが、こちらは神機の取り扱いや基礎教練は修めさせられていたというのに、彼にはその期間すら与えられなかつたのだ。

これにはフェンリルにとっては「事故」の目撃者とするべく実験

——それを当人には実験と伝えられてはいなかつたが——

——に参加させていた雨宮ツバキが、教官として人としても異を唱えていた。悪い意味合いでの目撃者となつた彼女の言など、取り上げられることもなく意見具申は無視された。

なんとか榊の権限により帰投率一位のリンドウ班にねじ込んだはよかつたが、彼にのみ、初任務をこなした後もインターバルを挟まずに、息を吐かせぬような連続戦闘任務が待っていた。

神機に選ばれたと言つてもいい、特異な状況下でゴッドイーターとなつた彼の戦闘データ取得、という名目で本部が下した決。

それは、前線での全戦闘作戦参加、であつた。

露骨な抹殺指令である。

本部の息が掛かつていたのだから、リンドウがどれだけ拒否しようとも受理されることはなく、そして彼に付き合わされる形で激務を負わされる事となつたもう部隊員達には、手を合わせるしかない。

第一部隊任務は当然のこと、第二、第三部隊の戦闘作戦にまで駆りだされ、時には彼一人で、単独任務に当たることも少なくはなかつた。だが彼は、まるで戦うことがゴッドイーターとなつた自らの使命なのだ、と言わんばかりに、全ての任を勤め上げたのである。

同時に、本部が名目上要請していた戦闘データも十二分な物を彼は提出していた。

彼の戦闘法は特殊であり、戦闘毎にあらゆる武器種、銃種を組み換えて出撃するのを繰り返す、というスタンスを執っていたからだ。

新型には形状の組み換え機能も備わっていたが、一部でも変えてしまえばバランスや重量の変化が激しく、それはもう別の神機となるも

同然である。

通常のゴッドイーターでは一つの神機に慣れるまでに時間が掛かるといふのに、彼はそれを完全に無視していた。

あらゆる武器、銃、盾をまるで自身の肉体の延長として扱っていたのである。

この点だけでも、榊でなくとも彼を異端と言いたくもなるだろう。ここまで完璧な戦闘データを提示されては、本部もぐうの音も出なかった。しばらくして彼への干渉はなりを潜めていった。

そして様々な事件を経て、彼はリンドウに代わって第一部隊隊長に任命されることとなる。

『異端なんて、正に彼のためにあるような言葉だね。彼はきつと、神を殺すために地へと堕ちた、救いの禍星だったのさ』

榊が彼を期待の新星だと見なしたのと、同時期のことであった。彼の名は、加賀美リョウタロウ。

後の世に、最強のゴッドイーター「神狩人」と称されることになる、その人である――。



ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない。

いくら俺の特技がやせ我慢だったとしても、限度というものがある。

まず休みがない。

給料が安い。

同僚にアレな奴が多すぎる。

そして飯がまずい……これは食べるだけありがたいけれど。

エトセトラエトセトラ、挙げれば切りが無いが、まあここらはどこの会社にだってあることだ。

労災が下りるだけ良い方、と言えなくもない。

問題はそんなことじゃあない。

そもそも就職した——させられた経緯がおかしい。アラガミの襲撃でちよつと怪我して入院して、やつと退院したぜと家で寝ていたら、何人ものとてもカタギとは見えない黒服達が押し入って来て「来い」の一言。

背広にはやたらとオサレな狼のエンブレムが。

今や実質世界を支配する、フェンリルの社章である。

何故ここにフェンリルが？ などと混乱していると、無理矢理トラックに押し込まれていた。

このご時世、フェンリルに逆らう馬鹿はいやしない。

俺がこうして悠々自適の自宅警備員をしていられたのも、フェンリルのおかげである。もちろん皮肉だ。

就職という概念すら危ぶまれるような場所であることを、お偉いさん方は知らないのだろう。

ほつたて小屋エリアの住人なんてそんなものである。

働きたくても働けない。腹は減る一方。身を守ってくれるアラガミ防壁も、毎日眺めていたら息が詰る。

不満は募るが、じゃあとフェンリル職員に文句でも言うような度胸もない。壁の外に出されたら、即アラガミに食われる自信がある。

だから来いと言われたら行くしかないのだ。

トラックに揺られ、そして連れてこられたのが、フェンリル極東支部。通称、アナグラ。

ゴッドイーター達の寝床である。

ゴッドイーター——アラガミと戦う者達。

世界中がアラガミに食い荒らされているというのに、それでも人間が滅びを迎えてはいないのは、彼等のおかげといてもいいだろう。

しかし、なぜ俺はここに連れて来られたのだろう。猛烈に嫌な予感がする。それしかない。

疑問を挟む余地なく、あれよという間に神機適合審査である。

なんだ、この超展開は。

呆然としていると、何だか偉そうな人が登場。ありがたい演説をし

てくれているが、聞く余裕なんかなかった。

どうしてこうなった、と天を仰ぐと、そこには――女神が、いた。

上着からこぼれ落ちんばかりの、いやもう半分まろび出ている、禁断の果实よ。

おい、その眼鏡のおっさん邪魔だどいてくれ。

念を送っていたら通じたのか、おっさんが半歩下がってくれた。

「ありがとう」、と小さく礼を言っておく。

これで俺は後10年は戦える……などと、思っていたら。

本当に戦わされる羽目になりましたとき。

「おい、警報だ!」

「解つてますつて! 行こうぜ、リーダー!」

「行きましょう! リョウ!」

名前を呼ばれて我に返る。

そうだね。

今日も今日とて、愉快的仲間達と一緒にアラガミ退治。

そう、俺の仕事はアラガミと命を掛けて戦うこと。

世界一なりたくない職業、ゴッドイーターなのであった。

任務遂行は死守なんだけ。

死ぬ気で頑張られて意味じゃない。死んでもやり遂げろつてことだ。

すごいだろ。

つまり逃走は許されないってことだ。

そいつは暗に、逃げたら解つてるな? ということでもある。

任官初日、リンドウさんはガチガチになった俺の気を解そうと、やばくなったら逃げろなんてギャグをかましてくれたけどね。

笑えるだろ?

笑っておくれよ。

ははは、はは……。

― 出撃嘆願書その他諸々をカウンターへ提出しに行くと、受付のヒバリ嬢が、「頑張って下さい」と頬笑み掛けてくれる。

天使のような微笑みの裏には、計りしれない黒さが潜んでいることを俺は知っている。

この娘、可愛い顔してトンデモない。

俺が稼いだお給料を、こっそり着服してやがるのだ。

ゴツドイーターの給料は歩合制。

頑張れば頑張った分だけ金が貰えるシステムだが、定額でない分の流れや使い道への管理があやふやなのである。その隙をこの娘は突いたのだ。

解ついても強く言えないのは、俺が弱味を握られているからだ。

この娘と初めてあった時、俺の前方不注意で正面衝突してしまったのである。

後は……解るな？

彼女の胸をがつつりと掴む、セクハラ男が一人。

一応は企業の体裁をしているだけに、こういう事件にだけはやたらと厳しいフェンリルだ。

セクハラで捕まえられるのだけは勘弁してください。

俺が社会の底辺のフナムシであっても、なけなしのプライドくらいある。

そういう訳で、彼女に給料を貢ぐのを止められないのであった。

口止め料である。

ヒバリ嬢の笑みが怖くてたまらない。

「リョウ、顔色が悪いように見えますけれど、大丈夫ですか？」

ああ、アリサ。

今日も良い下乳だけふんげふん。

んんっ、げふんっ、げほげほ。

何でもないよ。

うん、もう平気平気。

むしろみなぎってきた。

今の俺は神だつて殺せるね。

「ならいいのですが……」

肩にそつと手を置いてくれるアリサ。

労わりの気持ちの流れ込んでくる。

新型同士の「感応現象」というやつらしい。

しかしあれだね。

アナグラの奴らはみんなド派手な格好してるね。

俺？ 俺は任官した時に配給された制服を着てるよ。

それしか服がないからね。

私服どころか私物まで、ここに越してくる時全部手違いで処分されちゃったから。ちきしょん。

おかげで遅寝遅起きな不健康生活を送っていた俺が、見違えたように超ストイックな修験者生活をするようになりました。

あ、やばい、泣けてきた。

つらいなあ。

「リヨウ……」

ああ、うん、出撃ね。

おお、近場じゃないか。この分だと徒歩でいけるね。

さあみんな今日もお仕事がんばろう。

無理してるんじゃないかって？

してるよ。

ヤケクソだよ。

毎日お腹がシクシク痛むんだよ。

今日もきつと神機様がハッスルしちやって生きた心地がしないんだ。

そうに決まってる。

本当に、もう俺は限界かもしれない。



「いつてらっしやい。どうか、ご無事で」

ヒバリは戦場へと赴く彼等の背を見送って、深く頭を下げた。

防衛班や偵察半、アラガミと戦うには多くの人員が必要であるが、しかしこうして自分たちが無事で暮らせるのは、前線で戦う彼等のおかげであるとヒバリは信じている。

積極的自衛という第一部隊の任務によるものではない。

彼等の気高い精神が、見るものにそう感じさせるのだ。

否、彼等を率いる彼の魂が、と言うべきか。

ヒバリは慣れた手つきで、いつものようにコンソールを叩く。

孤児院のリストを開き、送金しますかのタブに、イエスと打ち込んだ。

名義は加賀美リョウタロウ。

彼が任務中に稼いだ金銭は、全て慈善団体に募金される手はずとなっていた。

命を掛けて稼いだお金なのに、自由に自分のために使ってもいいはずなのに、彼はそれをしない。

ヒバリの前方不注意で廊下でぶつかってしまったのが、リョウタロウとの初めての出会いだった。

その時のリョウタロウはとても急いでいた様子で、ミッションカウンターに給与の振込み口座番号のメモ書きを残し、逃げるようにして去っていった。

ゴッドイーターには秘密主義や個人主義者が多く、給金のやり取りをミッションカウンターで行う者がほとんどである。

リョウタロウもまた手続きのために訪れたのであろうが、とヒバリは首を傾げながらカウンターに座り、コンソールを立ち上げた。

ヒバリはミッションカウンター担当職員、兼ゴッドイーター補充要員であった。

よほど急いで書いたのであろう走り書きのメモは文字がかすれ、口座認証できるかと焦りもしたが、その通り打ち込んでみれば驚愕がヒバリの背筋を駆け巡った。

告げられた口座は、アラガミ被害によって孤児となった子供達のための施設団体のものだった。

全額、などと彼は言っていたが、流石にそんなことは出来ず、ヒバ

りは定額を施設へと寄付する手続きをすることにした。

残りは、フェンリルから各個人にあてられた社員専用口座に振込されるように設定した。

こちらは金銭の扱いに不精のゴツドイーター用に、嚴重な管理の下、ミツシヨンカウンター担当者に番号等の閲覧が許可されたものである。

カウンターから調べたりリョウタロウの口座番号と、孤児保護施設の口座番号は似たものであったため、ヒバリは打ち込みを二度ほど間違えたことを覚えている。

ヒバリの善意によって行われた手続きは、しかし彼にとって非常に不服だったようだ。

口座の送金記録を見た彼は、ヒバリを何か言いた気に睨みつけていたのだ。

まるで、金などいらないと訴えるかのように。

ヒバリからしてみれば、訳が解らなかつた。

それは彼が血肉を削って稼いだ金なのだ。自由に使う権利があるはずなのに。

しばらくしてリョウタロウを観察する内、ヒバリは気付いた。

彼が私服を着ている姿を見た事がないことに。

任官時に何着か配給される制服を、着回しているのだろう。

聞けば、私物すら部屋に持ち込んでいないらしい。

きつと、ほとんど全部を寄付してしまったからに違いなかつた。

ヒバリはその日、人知れずカウンターの影で泣いた。

ゴツドイーター達は、皆多かれ少なかれ、主張の激しい人物達である。

自分がいつ死ぬか解らないのだから、誰かの記憶や記録に残りたいと、奇抜な言動や格好をしたがっているのだ。

冗談のように三枚目的な格好を付けたがる男もいるが、彼のあの態度も全てポーズである。

だがリョウタロウには、個性というものがまるで無かつた。優しさが服を着て歩いているような男だつた。

優しい人、というのは人として最大の賛辞であるが、しかし優しさだけしか取り柄がないのだとも言える。

リョウタロウは、ただゴッドイーターという機能を果たすためだけの、一個の装置のように己の身を置いていた。

きっと彼は、自分が幸せであることと、すべき使命を切り離してしまったのだろう。ヒバリはそう思った。

ツバキ教官が常々口にしていた言葉がある。

任務に私情を挟むな――。

それは大いに同意する所であるが、しかし彼を見ていると、思ってしまうのだ。

誰かを守りたいと思う心も、綺麗な場所を守りたいという気持ちも、すべて私情ではないのか、と。

ならば、任務を完全にこなすには、それを完遂するだけの装置とやらなくては。

機械の器に閉じ込めた神でしか、アラガミを滅ぼせないというのなら。

その機械によってのみ人々の平和がまもられるというのなら。

神機を振るうのは、人である必要があるのか。

ただ、戦う。それだけで十分ではないか。

それでこそ多くを救えるのではないか。

彼の信念が、見えたような気がした。

「どうか、どうかリョウタロウさんに救いが訪れますよう。お願いします、神様……」

ヒバリは一心に、産まれて初めて神へと祈りを捧げた。



腕が軽い。

まるで神機が羽のようだ。

目の前には、女性の半身を風船に括りつけたようなアラガミ……ザイゴート。

中世の拷問器具の様な硬質な体躯を持ったアラガミ……コクーンメイデン。

それら二匹とは一線を画する巨体を誇る、見上げる程の巨大な鉄蠍のアラガミ……ボルグ・カムラン。

ザイゴートやコクーンメイデンの援護射撃をかい潜り、討伐対象であるボルグ・カムランの胴体へと斬りつける。

うおおおお——ッ！

「すっげ……あんな激しい攻撃を一発ももらわずに張り付いてる」
違うからね？

これ、雄叫びじゃないからね？

悲鳴だから。絶叫ですから！

全部紙一重で避けてるもんだから、本当に生きた心地がしない。うう、でも止められちゃうと本当に死んじゃうんだもんなあ。

俺の体は、今、俺の意思で動いてはいないのだった。

気分はアクションゲームのキャラクターである。ゲームとかやったことないけど。

あつちに行け、こうしろ、といった大雑把な命令は下すことが出来ても、細かい身体の制動は完全に乗っ取られている。

神機を握ると必ずこんな風になるのだ。

視点が俯瞰カメラのように、自分を頭上から見下ろすように広がっていく。

オート攻撃にオートガード。

全自動戦闘である。

しかも俺の意識がついていけないくらいの超高速戦闘だ。

これ、確実にオラクル細胞が脳に影響及ぼしてるよね？ 神機が俺の身体のつとってるよね？

でも正直に言っちゃうとメガネの人に解剖されそうで怖い。

うう、本当、頑張ってくださいお願いします神機様。

「おいコウタ、馬鹿みたいに口開けてんな。俺達も加勢するぞ」

「わかってるって！」

ああ、ソーマ。

俺の味方は君だけだよ。

アリサは俺の邪魔をしたくないって言って、周囲の哨戒するとかで早々にどっか行っちゃやしきさあ。

見捨てられた？

俺、見捨てられたの？

ねえアリサ、君本当は俺のこと嫌いなんですよ？

あれかな、過去を見ちやっただから、とか？

いやでも、それはおあいこ……でもないな。男女の差ってやつか。そりゃ当然女の子の思い出の方が価値ありますよね。

女の子のプライベート覗いたら普通に駄目だよな。

嫌われるのも当然じゃん……うわー泣きそう。

「くっそ、リョウ！ ヴァジュラがそっち行つたぞ！」

「雑魚共は任せとけ。お前はそいつらを仕留めろ！」

おいしい、二体同時とかこれなんて無理ゲー？

あとコウタ。

お願いだからもつとよく見て。

ライオンのような巨大なネコ科動物の身体に、髭を蓄えた厳めしい人間の頭――。

それヴァジュラちゃう。

ディアウスや。

ヴァジュラの上位種や。

今相手してるこれも普通のボルグ・カムランじゃなくて何か赤いしさあ。

三倍速いような気がするよ。

「こっちは任せとけ！」

「ああ、お前は全力で戦え！」

止めろよ。

コクーンメイデンに二人掛かりとか。

こっち来てくれよ。

仲間だろ。

ちくしょう。

ぎゃーす、という鳴き声が聞こえる。

これは確実にロックオンされたな。

はは、ははは……。

「へへっ、あいつ笑ってやがる。やっばすっげえの」

そうだねすごいね。人間って恐怖が振り切れると、笑えてくるんだからね。

自分の意思を離れて足が前に進んでいく。

今日も神機様は絶好調である。

お願い誰かたすけて。

もう俺は本当に限界かもしれない――。

ここはかつて、新横浜と呼ばれた都市であつたらしい。らしい、としか言えないのは、都市機能を有していた以前の姿をこの場に居る二人が知らないからだ。

二人が産まれる以前にはもう、一帯が砂漠地帯と為り果てていて、多くの《アラガミ》が餌を求めて徘徊する危険地域と化していた。

この場に足を踏み入れる者がいたとしたら、その者の正気を疑うしかない。

そんな地で、フェンリル正式制服を着た特別特徴もない青年と、ローズグレイの髪をしたやや露出の多い服装の少女とが、取り乱した様子もなく黄土色の砂上にしつかりと足を着けていた。

二人の肩には、剣と銃が融合したような巨大な機械の塊……『神機』が担がれている。

彼等こそ『ゴッドイーター』——。アラガミの跋扈する世界で唯一の抵抗手段である、人間の守護者達だ。

——因縁か。

青年の小さな呟きが、風に乗って少女の耳へと届く。

因縁という言葉を聞けば、何が思い浮かぶだろう。

『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』は、《ディアウス・ピター》の顔を思い浮かべる。

《ディアウス・ピター》——帝王の名を冠する、《ヴァジユラ》種の最上位に位置する個体。

黒い獅子の身体に、豊かな髭を蓄えた人面を持つ、人面獣身のアラガミである。

通常のヴァジユラとは姿形も戦闘力も一線を隔するそのアラガミは、ゴッドイーター達の間では恐怖の代名詞として語られていた。

出会えば、命はないと。

それにはアリサも頷くしかない。感情は別として、だが。

ヴァジユラ、というものが、ある一つの壁としてゴッドイーター達の前に存在している。

その上位個体ともなれば、多くのゴッドイーターが絶望を抱いたと

しても、それはむしろ当然の反応だろう。

精神的にももちろん実力としても、ゴッドイーターにとつてヴァジユラとは、超えねばならない大きな壁として立塞がっているのだ。初めから精神的にフィルターがかかっているようなものだ。であるならば、神らしく一種の信仰として存るディアウス・ピターを、ヴァジユラと見間違えたとしても、まあ、納得はいく。

悪態を吐くことを止めるまでには至らないが。

「いい加減な仕事を……偵察班は何をやってるんですか」

青年は肩をすくめただけだった。

ディアウス・ピター来襲の報を受け出撃したアリサ達だったが、到着してみれば、そこには黒い巨体は無く。

朽ち果てたビル群が並び立つ砂漠には、ヴァジユラの群れが闊歩するのみだった。

太陽光の反射の加減で、揺らめく空気が視界を滲ませる。ヴァジユラの群れが黒く燃えているかのように見えた。

体毛の色を錯覚したのだろう、とアリサは偵察班のミスであると判断した。

とはいっても数が数だ。脅威であることには違いない。

アイコンタクト——青年の瞳に自分の顔が映る。そして自分の瞳には、青年の顔が映っている。

アリサは青年と二人、並び立ってヴァジユラへと襲いかかった。

状況はすぐさま乱戦となり、戦力の少ないこちらは、ほとんど彼一人が戦っているようなものとなった。

それは戦いというよりも、舞いのようにも見えた。

神前に捧げる舞踏——否、武踏であるか。

体術のレベルが違いすぎる。自分では、付いていけない高みにあった。

下手に踏み入れれば邪魔になるところか、誤射をしまいかねない。

アリサに出来たことといえば、彼が的にならないようあぶれたヴァジユラ達の囮となることと、合間に回復弾を撃つことくらいのもの

だ。

悔しさにアリサは齒噛みする。

彼を羨んでいるのではない。

何の役にも立てない自分を恨んでいるのだ。

一体、二体——彼が剣を振るう度、巨体に傷が刻まれ、そして地へ崩れ落ちていく。

三体目は口内に銃口を差し込まれ、喉奥を吹き飛ばされていた。

淡々と捕喰形態へと神機を変化させ、倒したヴァジュラからコアを抜きとっていく。その動きは、寒気がするほどに正確だった。

最後の一体が存命中であり、今もこちらを狙っているというのに捕喰を優先させている様は、恐怖など微塵も感じてはいないように見えた。

では自分はどうなのだろう、とアリサはヴァジュラと対峙し、思う。今でこそ何とか倒せる相手となったが、縦に裂けた瞳孔に睨みつけられれば、身体は僅かに硬直した。

獅子の頭は人面のそれとは掛け離れているというのに、それでもアリサは思い出してしまうのだ。

人を模した厳めしい顔。

ぞろりと生えそろった乱喰い歯。

下顎から滴るどす黒い血と、ぬめり落ちる内臓の一部。

扉の隙間からじっとこちらを見詰めている、赤い眼を。

その度にアリサは叫び声を上げそうになる。

あるいは、怨嗟の唸りを。

憎悪——。

それがアリサの、ゴッドイーターとして原点だった。

封じたはずの記憶はなおも蘇る。

かつて、親友を喰い殺したヴァジュラの姿。

それが当時の衝撃をそのままに、両親を喰い殺したディアウス・ピターの姿へと重なって見える。

怒りで息は乱れ、視界が赤く染まる。

神機を握る手はがたがたと震え、自分が逃げ出したいのか、戦いた

いのか、そうなるとアリサにはもう、解らなくなってしまうのだ。憎しみは別の何か、重い感情へと変わり、身体を縛り付けていく。重い。そんな目に見え無い何か、重ねられていくばかりだ。

それでもアリサが自分を見失わないでいられるのは、彼に依るところが大きい。

彼の羽織ったジャケットの深い青を見て、乱れた心を落ち着かせる。

ヴァジュラの群れ最後の一体が今、斬り伏せられた。

誰よりも強く、誰よりも優しく、どんなに辛くても決して立ち止まらない、彼。

彼はどんな気持ちで戦っているのだろう。

アリサは神機に捕喰させている彼の背へと手を伸ばし掛け、そして下ろした。

怖い、と思った。彼の心の内を知ることが。

『感応現象』というものがある。

『新型』同士が触れ合った際に、接触した者の間で、記憶や感情の交信が行われるという現象である。言ってしまうえば、相手の心が読めるということだ。

ディアウス・ピターにまつわる因縁は、もはやアリサだけのものではない。

そのアラガミは、前隊長の仇ともなっていた。

それも、アリサが原因となって、だ。

錯乱したアリサが射線を乱し、前隊長をガレキの向こう側へと閉じ込め、単独での戦闘を強いさせてしまったのだ。

そして————M I A 《戦闘中行方不明》判定。

死体が発見されることはなく、残ったのは神機と『腕輪』のみ。それが示すことは、もはや望みは無い、ということだった。

ゴッドイーター達は、神機から供給されるオラクル細胞によって肉体強化がなされている。

ゴッドイーターとは、人為的なアラガミであると言ってもいい。

オラクル細胞に食い殺されて不定形な肉塊とならぬよう、もしくは

真にアラガミ化せぬよう、腕輪……『P53アームドインプラント』から投与される『P53偏食因子』によつて、神器のオラクル細胞を制御しているのだ。

それが失われたということは、つまりは、死しかないということである。

彼によつて討伐されたディアウス・ピターの体内から腕輪が見つかったという報告は、皆に絶望をもたらすものであった。

表には出してはいなかったが、サクヤも、ツバキも、皆アリサに思うところがあったはずなのだ。

情報封鎖をされてはいたが、噂は流れるもの。

ゴツドイーター達の中には噂を聞き付け、面と向かつてアリサを罵倒する者もいた。

裏切り者、と。

彼等の罵詈雑言は何も悪意から出たものではなく、全ては第一部隊前隊長の事を想つての事だとは、感応現象などなくとも理解できるところだった。

平時は人の良い彼等にそこまでの事を言わせてしまった自分の所業を、アリサは深く後悔した。

ソーマも、コウタも、初めはアリサとどう接したらいいのか、戸惑っていた様子だった。無理もない、と思う。

だからアリサは、彼等に掛けられる言葉を、自分を見る困惑の視線を、全て受けとめた。

これは罰なのだ。

彼等の心の内を少しでも軽くすることが、自分に許された唯一の贖罪であるのだと。

だというのに。

そんな中、彼は全く変わらない態度でアリサに接した。

彼だけが、アリサを同じゴツドイーターとして、仲間として、変わらずに慮ってくれたのだ。

それまで自分でもドン引きだと思うくらいに酷い態度を取っていたというのに、である。

崩れてしまうと思った。

思った時にはもう、手遅れだった。

ぼろぼろと崩れた心が、両の眼から零れて落ちていくのをアリサは感じた。

前線に復帰しても、しばらくは病室のベッドの上で過ごすことが多かった自分を見舞う者は、いつしか彼のみとなっていた。

そして眠りに就いては悲鳴を上げて飛び起きる自分の手を、彼はずっと握っていてくれていた。

一人では眠れないなどと寝言をぬかす自分に、仕方ないなど苦笑して。そうして一晩中手を繋ぎ、ベッド脇に腰掛け、彼は自分のことを見守っていてくれたのだ。

その手の温かさをアリサは忘れない。

だが——と、アリサは考える。

彼も、本当は自分の事を、憎んでいるのではないだろうか——と。

感応現象で彼から流れ込んで来るのは、過去の映像と、感情の熱だけだ。

写真データに、その時に彼が喜怒哀楽の何を感じていたかというテキストを張り付けただけの、情報量の少ないものでしかない。

新型神機への適合率の高さが影響しているのだろう、とは榊博士の言だ。

水が高い場所から低い場所に流れるように、新型神器の感応現象によつてやり取りされる情報は、完全に相互のものという訳ではないらしい。

アリサと比するまでもない程に、彼の適合率が高い。それは、彼が初めて新型神機に触れた日にはもう、変型タイムが一秒を切っていたのが証明していることだ。

同じ新型使いといえど、彼はアリサの上位存在であり、感応現象における情報流入もその情報量や質は、下位であるアリサには制限されたものしか伝わらないのである。

握られた手から温かさが流れ込んで来ることは感じた。

だが、正確に彼が何を思っているのかは、アリサにはまったく解らなかつた。

ソーマなどはそれで十分だろう、と言っていたが、アリサとしては安心出来るものではない。心を読み合えるのだから、余計に。いつそ知らなければよかつたとさえ思う。

穏やかに微笑んではいても、寡黙な性質の彼である。

口数は多い方ではなく、胸の内を行動で表すような人格だった。

その彼が、あの事件を境に、執拗にディアウス・ピターを追うようになったのだ。

それも、一人で。

ディアウス・ピターは、『接触禁忌』に数えられるアラガミである。

接触禁忌とは、保有するオラクル細胞による感応波が強大なため、通常の神機使いではオラクル細胞に不調が発生する可能性があるとして、一定以上の素質が備わった神器使いでなければ戦闘の禁止、回避が推奨される特殊なアラガミのことだ。

読んで字の如く、である。

アリサがディアウス・ピターと対峙したのは、前隊長の腕輪と神器回収のために、特例として出撃が許可されたその一回限り。

接触そのものを禁忌とされるアラガミ。それが接触禁忌なのである。

だが彼に限っては、隊長のみに課せられる特務、という大義を盾に、ディアウス・ピターの単独討伐の命が幾度も下っている。

特務は秘匿されて然るものであるが、こと彼の対ディアウス・ピターの戦歴においては、まるであてつけのように開示されていた。

上層部の嫌がらせだろう、とは、これも榊の言である。

開示されたスコアはもう10体以上を記録していて、そこまでの執着を露わにする彼が何もアリサに感じていないなどとは、信じられなかつた。

あの温かさが、新隊長に任命された彼の、義務としてのものだったのではないか。

感応現象によって彼の心の一端に触れたことが、アリサにそう思わ

せていた。

そう思わずにはいられなかった。

聞けば、彼も家族をアラガミ被害で亡くしたというではないか。そしてその光景を、幼い頃の彼は一部始終見せ付けられたという。

憎んだだろう。憎悪しただろう。そして世界に絶望したはずだ。

同じ新型神機使いで、しかも始まりまで同じ。

アリサは奇妙な運命を感じずにはいられなかった。

ただし、彼と自分の行き着いた先は、まるで真逆だった。

片や、新型機の変型時にどうしても発生する隙を埋めるための空中変型や、連激捕食なる新戦術を編み出し、今や極東支部の前線部隊で隊長を任せられる程にも成長した、元無名の新人。

片や、鳴物入りで配属されたはいいが対人関係の構築能力が低く、しかも任務中に取り乱し前隊長を戦死させた、元期待の新人。

彼が自分と同類なのかもしれないなどと、どうして思ったのだろう。勘違いも甚だしく、恥知らずも極まる自惚れである。

彼と自分とは何もかもが大違いではないか。

自分は憎しみに任せて世界を拒絶したが、彼は世界を愛していた。

それは決してアラガミに屈したのでも、絶望を受け入れ諦めたのでもない。

彼はあるがままに、世界に対して、己の足で立っていた。

限られた時を人々の暮らしに寄り添って生き抜こうと、彼は決めたのだ。

神に喰われるのが人の運命ならば、そんな世界の中で幸せを見付け、世を愛し生きていくことそれ自体が、運命への反逆であると言えるよう。

それは我欲を満たすための復讐ではない。

それは道を示すことなのだ。

彼が示した道を、後に続く者が踏み締めて往くのだ。

かつて、自分を希望なのだと言ってくれた人がいた。

その人は正しく、真っ直ぐで、素晴らしい女性だったが、アリサはその言葉にだけは頷けなかった。

なぜなら自分は、彼女の言葉を最悪の形で裏切ってしまったからだ。

自分は希望とはなれなかった。

道なき道を往く彼の背は眩しく、あれこそがきつと、本当の希望という名の光なのだ、とアリサは思っている。

だから、もし、もしもだ。

彼に失望されてしまっていたら、どうしよう。

彼は単独での任務を希望していたのに、無理矢理付いて来て役立つはずだった私のことを、邪魔だと思っていたら、どうしよう。

希望に見放されてしまったら、どうしよう。

私はいつたい、どうなってしまうのだろうか。

今度こそ壊れて、消えてしまうのではないか――。

―― エリツ……アリサ！ 上だ！

彼の叫ぶ声がした。

注意力が散漫となっていたツケが、もう回って来たようだ。

いいや、これは報いなのかもしれない。

アリサの視界に映ったのは、一面の黒。

錆びた鉄のような生臭い臭気を孕んだ風が頬を撫で、一瞬の後、衝撃。

悲鳴を上げるよりも早く、アリサの体は宙を舞っていた。

身体に激痛の灼熱を感じながら、流れていく視界に、必死の形相で

手を伸ばす彼の姿が。

痛い。

やられた。

何に。

わからない。

わからないけれど、悲しい。

とても悲しい。

彼の手に、届かなかった。

何度も触れ合ったはずなのに、通じ合えたはずなのに、何て近くて、遠いのだろう。

アリサの意識は悲しみの海に吞まれ、暗がりへと沈んでいった。



もういいかい。

「まあだだよ」

もういい……かい。

「まあだだよ」

もうい……か……い。

「まあだだよ」

も……か……。

「まあだだよ」

……い。

「まあだだよ」

消えていく声。

だけど、私は、今も、ここにいて。

誰か、私を。

私を、ここから――。

「残念、それは私の役じゃない。まだここに来るのは早いよ。まったく、あれだけ言ったのに、忘れちゃった？ ドン引きだぞ！」

あなたは、誰？

—— о р е н е м о р е , в ы п ь е ш ь д о д

На………忘れないで、アリサ。私はここにいるよ――



意識が戻る。

しかしアリサには、これが現実であるという実感が無かった。呆とした頭で身体を起こそうとし、しかし身体が動かずに、失敗した。

どうやら自分は、瓦礫に埋もれてしまっているようだ。

視界が悪く、隙間からしか外の様子を伺えない。

頭の上にまで瓦礫が積まれていた。崩れた鉄骨が支えとなって、他の瓦礫よりアリサの身体を奇跡的に避けてはいたが、それも何時まで保つか。

神機の柄の感触は、手の内には無い。

どこかに弾き飛ばされてしまったようだ。

アリサは小さくか細い吐息を、唇の隙間から少しづつ漏らしている。

音を立てないように。

気付かれないように。

すぐ近くに、あれが居る。

「やめて……」

悪い夢を見ていた。

ならばこれも夢か。

悪夢はまだ続いているのか。

「やめて……たべないで……」

ガツガツと、何かを食む音が聞こえる。

「パパとママを、たべないでえ……」

近付いてくる、足音。

クローゼットの中から動けない自分。

扉の隙間からこちらを覗きこむ、真つ赤な眼――。

ひい、とアリサの喉が鳴った。

見間違えようもない。

それは両親の仇と、同じ顔。

ディアウス・ピターの人面だったのだから。

偵察班はディアウス・ピターの存在を、見落とした訳ではなかったのだ。

「いや、いやいやいや、いやあああああ！ いやっ、いやあつ！ ああつ、やだっ！ こないでえー！」

じいっとこちらを覗きこむ、ディアウス・ピターの顔が。

舌なめずりをして、涎を垂らして、耳まで裂けた真つ赤な啞内を開きながら。

身動きの取れない獲物へと、喰らい付こうと歩み寄って来ている。

「いやっ！ いやっ！ あけないで、たべないで！ あああああああああつ！」

ディアウス・ピターの巨体が瓦礫を踏み締め、アリサの身体を圧迫する。

敵めしい髭面が近付く。

夢で見たあの光景よりも、ずっと近くに。

眼を閉じてしまいたい。これは夢だと、そう信じたい。

しかしアリサは限界にまで眼を見開いて、閉じることは出来なかった。

狂ったように上がる叫び声は、自分でも止められない。

隙間から除くアリサの頭に喰らい付かんと、ディアウス・ピターが顎を大きく開き、乱喰い歯を覗かせた。

アラガミにしてみれば、こんなに生きの良い獲物を逃す手はないのだろう。

人面を模した顔が、運が良い、と醜い喜悦に歪んだように見えた。

このままでは、喰われてしまう。アリサは思った。

自分はお行儀よく残さずに食べられてしまう。

クローゼットの中、一人で閉じこもったままに。

一人で――。

「あけない……で……誰も……こない、で……」

その時、アリサに浮かんだのは、彼の顔だった。

視界一杯にディアウス・ピターの人面を映しながら、しかしアリサが思い浮かべていたのは、彼の優しい微笑みだった。

いままでアリサは、扉を開けないでくれと、誰も来ないでくれと、そう叫んでいた。

ずっと一人だった。

一人きりだった。

そう思っていた。

でも――。

――俺がいるよ。ここにいる。

彼の声が、聞こえたような気がした。

「あ……ああああああつ！ 助けて、リョウつ！ 助けてええつ！

リョウウウツ！」

自分はここにいる。だから早く見つけて、と。

クローゼットの中から身を乗り出して。

アリサは初めて、心の底から叫んだ。

瓦礫が崩れるのも気にせず、必死になって手を伸ばした。

伸ばした手に、ディアウス・ピターが喰らい付こうとした――

――その瞬間だった。

オラクルバレットの閃光。

黒い人面が真横にずれ、吹き飛んでいった。

巨体を追うように駆ける男の影が躍り出る。

それは全身から黄金のオーラを立ち登らせた、極東支部第一部隊

長――加賀美リョウタロウだった。

リョウタロウの全身から黄金の、神機から黒いオーラが噴き上が

る。オラクル細胞を燃やすことによる身体機能の活性化。

『神機解放《バースト》』という、限られたゴッドイーターのみに許さ

れた、切札である。

特に彼の神機解放の効果は著しく、鬼神もかくやという奮迅の活躍

が、彼が最強のゴッドイーターなのではないか、と噂される一端とも

なっている。

こうなればディアウス・ピターの命運は決まったも同然であり、数

十秒後、戦闘音が静まりかえったことが全てを知らせていた。

姿は見えずとも、不思議とアリサは彼の勝利を確信していた。

ディアウス・ピターのそれとは違う、静かな足音が近付く。

――見付けた、アリサ。

瓦礫の、クローゼットの隙間には、彼の頬笑みが待っていて。みつけた、とアリサは彼の言葉を繰り返す。

「あ、あ……みつ、けた？ みつけてくれた……の？」

——— そうだよ。アナグラに帰ろう、アリサ。

「もう、おそとに、でもいいの？」

——— ああ。ほら、出ておいで。

みつけた。

みつかったやつた。

みつけてもらえた。

見付かったなら、かくれんぼはもうお終い。

私はもう、隠れていなくてもいいんだ。

彼の手を取る。

伝わる、温かな気持ち。

どうして気付かなかったんだろう。

どうして疑ってしまったんだろう。

彼はこんなにも、私のことを想ってくれていたというのに。

——— また泣いてるのか、アリサ。

苦笑して、彼は言った。

「女の子の泣き顔を見て笑うなんて、ドン引きです……ばか」

アリサも、泣きながら笑った。

本当は解っていたのだ。

自分はずっと、クローゼットの中から救いだしてくれる誰かを待っ

ていた。

それではいけない。それは間違いなのだ。

見付かって、かくれんぼが終わったのなら、自分の足で出て行かな

いと。

恐怖を、乗り越えないと。

だから、暗闇の中から一歩、踏み出そう。

大丈夫。

光は眩しくて、眼を焼くかもしれないけれど。醜いものを曝け出し、見せ付けられるかもしれないけれど。

そこにはきつと、彼が待っていてくれるのだから。
そうしてアリサは、自らの手で、クローゼットの扉を開けた。
光射す世界へと、彼に手を引かれて、アリサは踏み出す。
眩しい太陽にアリサは眼を細めた。

「оре не море, выпьешь до дна 《ゴーレ・ニエ・モーレ、ブイピエシ・ダ・ドウナー》」

悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる——。
でも、海のように大きな悲しみだったなら、飲み干すには難しいかもしれない。

小さく、細かく、砕く必要がある。

そして今、ようやく悲しみは粉々に打ち砕かれた。

打ち砕いたのは、彼。

するりとアリサを苦しめていた悲しみの欠片が、喉を通っていくのを感じた。

あの人達が言った通りだ。

時間は掛かったけれど、悲しみはすっかり飲み干せる。

「パパ、ママ……『オレーシャ』」

アリサは繋いだ手に力を込めた。温かい気持ちが伝わり、飲み干した悲しみが熱へと変わる。

「私はもう、大丈夫だよ」

胸が熱い。

もう一度、アリサは大丈夫だと、空の雲を見上げて呟いた。

「この人の手は、温かいから……だから私は」

——何か言った？ アリサ。

「なんでもないですっ！」

私はアラガミなんかには負けはしない。自分にだって、負けはしない。
い。

たくさんの辛いことや苦しいことが、これから先にはあるのかもしれないけれど、きつと大丈夫だと確信していた。

目を拭いながら、止まらない涙がおかしくて笑う。

アリサはもう、一人ではないのだから。



ううつ、心が荒むなあ。

もう何度目になるんだろう。十回は越してるはず。

黒い髭面はもう見たくないよう。

神機様も食傷気味で嫌がってるしさあ。最近はさつさと終わらせたいのか、前足チクチクしかしてくれなくなったもん。

後牙三つか……先は長いなあ。

うー、ストレスが溜まる。

アナグラに帰っても書類が山積みに残ってるし。

隊長になったんだから前隊長の遺した書類の処理してね、とかもうね。

いややりますよ、そりや。

企業戦士なので。

でもねリンドウさん。あんたに一言、言わせて欲しい。

あんたね、書類仕事サボりすぎでしょう。

あれですか、イケナイ夜の残業ですか？

仕事をサボってはサクヤさんとお楽しみタイムですね。解ります。

何なん？

あの人何なん？

新しく隊長になったからって、前隊長の部屋を掃除もせずにそのまま使わせるとか、何なん？

もろいい考えるの疲れたってベッドに倒れこんだら、何あれ、男の汗の臭いにまじって、女ものの香水の臭いがしたんですけど？

ていうかサクヤさんが使ってる香水だよ！

ベッドの下には女ものの下着が放り込んであったよ！ 黒だったよ！

お楽しみでしたか？ お楽しみでしたねえ!?

確かにあの乳は男として放ってはおけない。
気持ち解りますよ。

でもね、一応隊長だったんだから、お仕事の責任くらいは果たしまし
しょうよ。

俺のやつてる書類仕事の大半が、前隊長からの引継ぎ用件とか何な
ん!?

俺に全部押しつけて逝ってくれやがりました……ちきしょん。
癒しだ。癒しが必要だ。

よし、アリサの下乳を見て癒されよう。

男はおっぱいがあれば頑張れる生き物だから。

俺は言い訳せん!

おっぱいがあれば、頑張れる!

……ああ、癒されるなあ。

アナグラ所属ゴッドイーター女子のおっぱい率は高すぎると思
います。

上乳下乳横乳中乳なんでもござれだぜひゃつはー!

中身まで美人揃いときてるんだからもう、たまりませぬな。

個人的な理由でディアウス連戦に付き合わせるのも悪いかと単
独出撃を繰り返して俺に、この子は付いて来てくれたし。

危なくなると回復弾撃つてくれるし。

アリサ・ザ・ヒットマン! ロシアの殺し屋恐ろしやー!

そう思っていた時期が俺にもありました。

過去の自分を捕食してやりたい。

いやほら、二人きりで特訓したいとか言われたらさ、すわこんどは
俺の番かも、とか思っちゃっても仕方ないよね? ね? あ、気付い
てらっしやらない? ななな、何でもないよ? 本当だよ?

わーかわいい笑顔。

太陽みたいにかう、ほにやりって笑うね、アリサは。

良い子やー。

うちのロシアっ娘はホンマ良い子やー。

手も柔らかくて気持ちいいーなー。

おっと、感応現象。

これは……喜び？

嬉しい。ありがとう。そんな感情の波が流れ込んで来る。

うん、何か知らんが悩みが解決したみたいでよかった。

俺がそうだったからかもしれないけれど、辛い思いをした子には幸せになってほしいから。

俺も嬉しいな。アリサが嬉しいと俺も嬉しいよって、伝われー。

そーれ感応現象ーゆんゆんゆん。

ちらりと横を見れば、目が合ったアリサがまた、ほにやりと笑ってくれる。

白い歯を見せ、目がなくなるくらいのとろりとした笑み。

可愛いなあ。

ずっと手を握ってたいけど、これ以上はセクハラになっちゃうよなあ。

名残惜しいけど手を離さないよ。

「あっ……」

どうしたの？

お腹いたいなの？

砂漠でもおへそを出しっぱにしてちや駄目だよ。

そっか、何でもないのか。よかった。

さあ、早く帰ろう。

「はい。あの、お願いが、あるんですけど」

うん、いいよ。

俺に出来ることなら。

「気が向いたらでいいんです。その、また、手を握ってくれませんか……？」

……ああ、そうか。

洗脳の影響が残っていて、まだ不安定なのか。

あのヤブ医者め。

今度会ったら、酷いめにあわせてやる。

アジン・ドウヴァ・トゥリーって数えながらな。

その間に懺悔しやがれ。俺に祈れ。

ああ、ごめんごめんアリサ、お願いね。

もちろん、いいよ。

俺なんかの手でよかつたら、いつでも握ってよ。

俺からはいかないからね？

セクハラになっちゃうから！

「はい……ありがとうございます」

おおう、さつそくか。

役得役得。

みなぎってきた。

あと10戦くらいはあの髭面を見るのを耐えられそうだ。

お前との因縁はまだまだ続きそうだなあ、ディアウスさんよお……

！

いいだろう。お前達の日撃情報が無くなるまで狩って狩って狩り

尽くして、根絶やしにしてくれるわ！

ひゃっはー！ ゴッドイーター業は本当に地獄だぜえー！ フウ

ハハー！

ごめん、強がり言った。

うん……また、なんだ。

このディアウスからも、牙、出なかつたんだ……。

また、こいつと戦わないといけないのか……。

本当に、俺はもう、限界かもしれない。

ぐっつどいーたー…3 噛

実を言うと、とヨハネス・フォン・シツクザールは前置いて語り始めた。

「私は人類の行く末を、そう悲観してはいないんだ」

片手に濃紅色のワインをくゆらせて。

儂げな響きを孕んだ声。

冷酷に見えてその実内面は烈火のような、この男に似つかわしくない、そんな表情をしながら。

「知っているか、ペイラー。ある実験の話しだ…細菌に死滅処理を施すという、極めて単純な実験だ。

他全ての細菌は死滅したが、ある固体だけは、いかなる処置を施したとて死ぬことはなかったという」

「アラガミの始まり、オラクル細胞を発見した実験のことを言っているのかい？ ヨハン」

「似ているが、違う。もつとずっと古い時代の実験さ。言っただろう？ いかなる処置を…と。」

アラガミ…オラクル細胞はオラクル細胞によって捕食される。それは死と定義してもいいだろう。ゴッドイーターはアラガミにとっての死、そのものだ。

消滅することのないオラクル細胞に、死の定義を当てはめることなどナンセンスだが…」

「いや、興味深い。続けてくれ」

「不滅のオラクル細胞を持つアラガミにも死は訪れる。殺す方法がある。だが旧時代に行われた実験にある、その細菌は、いかなる手段を持ってしても殺すことが出来なかった。

切り刻んでも、焼いても、本来の姿へと還元してしまう。死なないんだ。ここまですらオラクル細胞のそれと同じだが…最終的に、ありえざる現象を発生させ、死そのものを回避するに至った」

「ありえざる現象、とは何だい？」

「自らに向けられた攻撃を物理的にありえない方向へと捻じ曲げた。

消滅が確認されたが数日後に復活していた。確実に消滅するであろう劇薬を運んでいた研究者が、突如として昏倒した。スプリングラーの誤作動で実験が中止となった……」

「オカルト染みてる」

「純然たる、事実だ」

ヨハネスはワインで舌尖を湿らせると、俯き、微笑んだ。

今にも崩れてしまいそうな、泣き出す前の子供のような、そんな笑みだった。

「研究者を志す前……まだ顕微鏡をのぞいていただけの少年だった頃に、父の書斎で見つけた資料に記されていたのを覚えている。あれが私の研究者としての原点だった」

「ヨハン、それは」

「どんな手を使っても死なず、時には周囲の環境すら捻じ曲げ、死を回避する。奇跡を自在に操る存在……まるで、神だ。」

そう、不死の存在には、不死の存在をぶつけるしかない。さすれば、真の不滅がどちらであるか、自ずと解る。

ゴツドイーターではない。ゴツドイーターでは不足なんだ。だから、私は……」

「死なない細菌があるなら、死なない人間だっているはずだ。そう言いたいのかい？　つまり、ソーマ君は」

「あれには悪いことをしたと思っている」

「珍しいね……君が素直に間違いを認めるなんて」

「過ちは過ち以外の何物でもないさ」

「そうだね、その通りだ……なら、もう少しソーマ君に目をかけてやつてもいいんじゃないかい？」

「勘違いしているようだな、ペイラー。あれは対アラガミのカウンターとしては成功例だ。カウンターとしてはな。あれではアラガミを滅ぼすことはできない」

ペイラーが訝しげにヨハネスを見やる。

ヨハネスは虚空に向かって独白を続けた。

「追い詰められた人々の希望となるべく、息子には奇跡を宿そうとし

た。あの細菌のように、神の如く人間を創り出そうとした。だが、人間だった。

あれは……あの子は、どこまでも人間だった。私のエゴで、ただ強い力を得てしまっただけの人間なんだ……私と、アイーシャの子だ……」

「ヨハン……」

「ソーマは、人々を守る存在として産まれた。私とアイーシャは、我が子をアラガミを滅ぼすものとしようとしたというのに……子供はいつだって親の手を離れていくものだな」

「ヨハン、ワインはもうそれくらいにしたほうがいい。飲み過ぎだよ」「いいんだ、ペイラー。私とて酔いたい時はある。ソーマは……親の押し付けと、自らが背負った使命に板ばさみになっている。

あの子は守る者だ。だが、私のエゴと、アラガミとなった母によって、それを認められないのだろう。

だから私は、あの子を『カルネアデスの板』の、守人に……」

ヨハネスは、はつと、何か失言を取り繕うかのように口元を押えろと、目を閉じて深く息を吐いた。

「すまない、ペイラー。君の言う通り、飲み過ぎたようだ。こんなものに頼らなければ、感傷に浸ることも出来ない。ままならないものだ」「いや、いいんだ。そういう時もあるだろう。今日は8月28日……アイーシャの……いや、ソーマ君の誕生日だったね」

ああ、と諦めたかの用に一瞬笑ったヨハネスは、次の瞬間には常の傲岸不遜でいて不敵な態度へと立ち戻っていた。

それがこの不器用な男なりの、愛する人を悼む姿であることを、ペイラーは理解していた。

何も言わずに立ち去ってやるのが、友人としての優しさであろう。

「私は見つけたぞ、ペイラー」

ヨハネスの私室から立ち去るペイラーの背にヨハネスが投げ掛けた。

「天文学的な遺伝確率の下に産まれる存在。時には奇跡さえ起こし、死を遠ざける存在。もはや死のないのではなく、死ねない存在。その

存在を前にしては、アラガミなど、欠けた似姿でしかない」

「欠けた、似姿だつて？」

「人から産まれし、真なる神——」

——アラッヒトガミ。

と、ヨハネスは虚空を睨み付けて囁いた。

「皮肉だな……何もかも。ならば私は、自らの責務を果たすまで」

「ヨハン、君は……いや、アラヒトガミとは、まさか、*彼*のこと……なのかい？」

黙して語らず。

固く閉じられた瞳が、それ以上の会話を全て拒んでいた。

血の気が失せた蒼白な頬には、アルコールの熱は微塵も残っていない。
い。

それは、ペイラーも同じである。

不気味な沈黙だけがそこにあった。

炎の匂いが染み付き、焦げ付き、むせ返るような。



うおおおッ、しゃああああい！

帝王牙と——っただ——！！

おおおいやエイツシャオラー——！！

へへうへへへ……これでやつと獣剣の強化が出来るぜ……。

長かった、本当に長かった。

何度も何度も心が折れそうになった……でも俺はやったぜ！ やりとげたぜ！

ヒバリ嬢に吸い取られていくなけなしの給料を貯め、趣味のものなんて一つも買わず、食費を切り詰めまくって武器を揃える毎日さ。

使える武器種はもうもう全種類コンプリートするくらいの勢だよ。

か、勘違いしないでよねっ。

すごいすごい言われるけど、何でも使つていかないと死んじゃうんだからねっ。

別に褒められたいからやってるんじゃないんだからねっ。

いや、マジで。

普通ゴッドイーターって、自分のメイン武器種決めたら、それ極めてくものでしょ。

使用武器の適性みて任務あてられるのが普通なのに、なぜか俺は適性外のアラガミをばんばんあてられるものだから、次々武器を使い分けていけないと普通に死ぬる。

なんなの……陰謀なの？

フェンリル本社は俺を殺そうとしてるの……？

今日だって、偶然カノンの流れ弾が飛んでこなけりや危なかったし。

いかんいかん、ネガティブ思考はやめよう。

今日は獣剣が次のステップに進んだ祝いだ。

材料集めに比べて、強化は一瞬。

さすがリツカ、いい腕してる。

たまにハグしてくれるし、ホンマうちの技術班は世界一や！

おお……おお、これが獣剣の輝き！

ふ、ふおつ、ふおお……ふつくしい……！

かっこいいだけじゃない。なんとこれ、麻痺効果まで付いてるっていう。

ショートソードの手数。麻痺効果。これ以上のシナジィのある武器もないだろう。

これでアラガミと戦うのも少しは楽で安全に……。

えっ、ちよつ、神器さん？

なんで装備せずにクロークに戻すの？

は？ 獣剣は甘え……？

麻痺とかヌルゲー……？

いや、じゃあなんで作ったっていう……あ、そうですか。

彼らはフェンリル極東支部に所属する、ゴツドイーター第一部隊の隊員である。

第一部隊の主な任務は、アラガミ防御壁外周に近づくアラガミの、強襲殲滅。

壁に囲われた都市に近づくアラガミを、片端から殺し尽くしていく直接戦闘任務。言わば、予防対策であり、最前線を任される部隊である。

その第一部隊に課された使命とは、積極的自衛という任務の性質上、防衛班のように専守的に人々の命を守るといよりは、人間の生括圏を広げていく攻勢防衛という意味合いの方が強い。

「希望の火を守る、か」

臭い言い方だな、と青年の一人……ソーマは、無線に送られる信号でもう一人の青年の位置を確認し、口の端を釣り上げた。

彼はかつて、ソーマにこう言ったことがある。

——なあ、一人で戦おうだなんて、そう思っているのなら、やめた方がいい。俺と一緒にいこう。

黙れ、とソーマはその時、彼に言い返し、胸ぐらを掴み、壁に叩きつけた。

ソーマの戦う理由は、もっと個人的なものからだった。

怒りや憎しみや、そんな感情からだった。

そう思っていたはずだった。そうでなくてはならなかった。

彼は、そんなソーマの胸の内を見透かしたようにして、再び口を開いた。

——人はそんなに弱くない。放っておいてもしぶとく生きていくさ。俺たちはただ与えられた任務をこなせば、それでいいんだ。

だから余計なことをする必要も、考える必要もない。それ以外に、何が必要なんだ？　なあソーマ、お前は一体、何に苦しんでいるんだ？

苦しんでいる、などと。

ソーマの身にまつわる特別な事情のことなど、その時の彼は少しも

知らなかったはずなのに。

自分すらも見ないようになってきた、自らの胸の内を暴かれ、ソーマは激昂した。

彼を殴りとばし、周囲の制止を振り切って馬乗りになり、殴って、殴って、そうして自分をじつと見つめる瞳に、手を止めた。

———こんな程度じゃ俺はどうにもならないよ。もっと強く殴れよ。本気でやれ。

ソーマの膂力は一般人はもちろん、通常のゴッドイーターと比べても一線を隔すものがある。

だが彼は淡々としているくせに、本当にしぶとかったのである。本気で、全力でやれと言っているのだ。

すぐ死ぬ奴らなんかと一緒に戦えるか、とソーマはいつも周囲を突き放してきた。

ソーマにとって、仲間意識は重荷でしかなかった。

他人を信頼しても、死という最悪の形で絆は消えてしまう。

そうして次から次へと新たに補充される人員と、コミュニケーションを一から取らなくてはならなくなる。それはとても疲れるのだ。

はじめまして。

こんにちは。

さようなら。

お前の事は忘れない。

そんな風に何度も繰り返される儀式に耐えられるよう、ソーマは出ていかなかった。

何故ならば、自分はアラガミと戦うために産まれたのだから。アラガミを滅ぼすために産まれたのだから。

人との絆を築き、守るためには出来ていないのだから。

だからソーマは一人でいようと決めた。他人など不要と考えた。

そうしなければ、戦い続けることが出来ないから。

そうしなければ、母を———父の———。

———大丈夫さ、俺は死なないから。

静かな瞳で、確信を持って彼は言う。

こんなことを言う男が、今まで居ただろうか。

何も考えるな。ただ、戦えと。きつとその先に答えはあるのだと。

そして戦うのならば——共に。

自分が理想とする在り方を口にする彼は、正にその生き方を体現していた。

任務中は冷静沈着。機械のように正確な動作。的確な指示。

どれを取っても、6年も前から前線で戦っている自分を遙かに超えている。

それでいて彼は、人としての情を捨ててはいなかった。

——気にするなよ、ソーマ。俺はゴッドイーターだ。

お前もそうだろう。そう言っているようにも聞こえた。

だから一緒に戦おう。お前も、何もかも守ってやる。そして生き抜いてやる。だから、お前も。

俺と同じものとなれ。真なるゴッドイーターに。

言外に含まれた意志は、確かにソーマに届いた。

——見た目より頑丈なんだ。だからほら、もう一発キツイのを頼むよ。任務サボれるくらいのをさ。さあ、本気でやれ。

お前よりも強いんだから死なないのだ、と言いた気に、殴られて腫れた顔に浮かべる、勝ち誇った笑み。

その通りだった。

ソーマは拳を振り上げた。

肩の上まで掲げられた拳は、ぶるぶると震えて、力なく地に落ちた。

チクシヨウ、とソーマは負け惜しみを言うしかなかった。

この男には勝てないと、ソーマが思い知った瞬間だった。

ソーマも、彼の言葉を全て鵜呑みにした訳ではない。あのリンドウだっていなくなってしまうのだ。戦場に絶対などない。

だが、しかし。

彼が自分達のリーダーとして在る間くらいは、こいつの話を、ある程度はまあ、聞き留めてやろうか。

不思議と素直にそう思えてしまう。

「おい。まだか」

—— まだだ、もう少し。

「チツ……おい、リーダー。もう一度聞くが、お前、ほとんど道具を持っていなかったろ。そんな装備で大丈夫か？」

—— 大丈夫だ、問題ない……たぶん。

「たぶんって、おい」

—— 初期装備なんだ、これ。笑えるだろ。

彼にはある悪癖があることをソーマは知っている。

自分を追い込む悪癖だ。

勝ちが積み重なれば、全てが崩れていってしまうとでもいう、強迫観念を抱いているかのようだった。

今回もその悪癖が発揮されたようだ。

彼の装備しているのは、訓練用のナイフにシールド、そして制御装置。

訓練用とはいえ、戦闘のためにつくられた本物だ。戦えないことはないが、当然威力は心許ないものである。

時折彼は、こうして自分自身を縛って遊ぶかのような、そんな奇行をしでかす。

その時は決まって、頬を釣り上げて笑いながら、戦いに身を置いているのだ。

「お前が今どんな顔をしているか、想像がつく。ムカつく面だ」

—— 君ね、もう少し年上を敬おうとかいう気持ちは無いの？

「うるせえ馬鹿野郎。ちよつと早く産まれたくらいで、デカイ面しやがって。帰ったら覚えてろ」

—— 解ったよ。帰ったら、また一緒にクラシックでも聞こう。今度は俺が酒の飲み方を教えてやるからさ。興味あるんだろ？

「……ふん。いい加減その癖を何とかするんだな。アリサがまた泣くぞ」

何で俺が後でフォローしなきゃいけないんだ、とソーマは自分の頬が釣り上がるのを自覚する。

彼の悪癖を強く止めるように言えない理由が、これだ。
つられて笑ってしまふのだ。自分も。

彼と肩を並べて戦うことが楽しいと、そう思ってしまう自分がいた。

『はいはい、無駄口はそこまで。アリサがヤキモチ焼いちやってもう、すごい顔してるわよ。ソーマがリヨウを独り占めしてるー、って』

耳にかけた骨伝導イヤホンから、繋ぎ放しにしていた無線連絡が届く。

『ふえあつ!? さ、サクヤさん! いい加減なこと言わないでください! そんなこと無いです、あ、有り得るはずがありません!』

『本当に?』

『そ、それは……』

———そっか、やっぱり俺、嫌われてたんだ……。

『いや、それは違くてですね! 本当は逆で、あの、その』

———逆? どういうこと?

『う、ううーっ! もうっ、リヨウの馬鹿! 脳味噌コウタ並! ドン引き! ドン引きですっ! 通信終わり!』

『あらら、怒られちゃったわね、リヨウ』

———脳味噌バカラリーって言われた……。

「そいつについては同情してやる」

『……コウタ君、やっぱりそんな扱いなんだ』

第一部隊の面々は全員がつくりと肩をおとした。

一人は少女に嫌われたと誤解し、一人はやれやれまたかと辟易し、一人は尊敬する彼に最大級の侮辱を吐いてしまった後悔に、一人は基地にて待機中であるもう一人の少年の扱いの悪さに。

随分と温くなったものだ、とソーマはフードをかぶり直す。

だが、嫌な気分ではない。

悪くない。

まったく、悪くはなかった。

砂の波の音と潮の臭いを嗅ぎながら、ソーマは身を屈めた。

アラガミの通った道は全てが無毛の大地と化すか、荒れ果てるかの

どちらかしかない。それでも海は変わらないのだから、おかしい気分だった。

こんな光景を目の当たりにしては、終末思想も蔓延る訳だ、とソーマは皮肉気に頬を釣り上げた。

終末思想も、ある種の救いなのであることは否定しない。いつそ何もかも全てを壊してくれたなら、諦めもつくという考えは、人類共通のものだろう。

生命の再分配と、地球の再生だったか。

波間に漂う木の板だか何だか知らんが、トチ狂ったことを。

ソーマは彼の言葉を思い出す。人間は良い意味で生き汚い生物である。地獄であつても、人はしぶとく生きていける。

アナグラに暮らす人々の顔を思い出す。

ろくに関わりを持たずとしなかった自分にも、笑いかけてくれた人々。

彼の言う通りだと思った。

これから先、どれだけの陰謀や事件、新たなノヴァが産まれこれ以上の地獄が創造されたとしても、人はしぶとく生きていくのだろう。

今の自分ならば、そう信じられる。

彼は初めから解っていたのだろう。

こんな地獄にあつて、人々が笑つていられること。それが希望なのだ。

ゴッドイーターが希望の光であるなどと、勘違いも甚だしい。

アナグラのラウンジにて、あいつの戦う背中に希望が見える、と口を滑らせてしまったことがある。

一番最初に反応したのは、アリサだった。

アリサは鼻をならし胸を反らしながら、自慢気に言った。

彼が希望なんて、あなたは勘違いをしている。

町を見なさい。そこに希望がある。

彼はそれを、初めから知っていた。

私たちの仕事は輝くことじゃなくて、希望の火を守ることなんだ。何故お前が自信満々に答えるのだ、とコータに突っ込まれて赤くな

るアリサだったが、アリサの答えはソーマの内にすんと落ち着いた。

なるほど、と思った。

あれがゴッドイーターの真の姿か。

6年も戦い続けてそんなことも解らないなんて、馬鹿か俺は。

あいつが俺を易々と超えていったのも、当然のことだ。

単純なことだった。

人々を守ることに、それがゴッドイーターの使命なのだ。当然のことだった。

それ以上も、以下もない。その他の理由など不要であるのだ。

私心は捨てる、というツバキの教えが、ゴッドイーターの真理を表していた。

戦っている間は、たとえそれが何者であろうとも、バケモノであったとしても、ゴッドイーターなのだ。

怒りや憎しみといった、戦いに理由を持ち込んではいけない。単純に思えて、これが難しい。アラガミに憎しみを持たない者など、探すのが困難なご時世なのだから。

だが、彼はどうなのだろうか。

彼の戦う姿に、ソーマは尊さを感じていた。

だがそれと同時に、恐ろしさも感じていた。背筋がうすら寒くなるような感覚だった。

彼は憎しみや怒りを持たずに戦っている。

そして、それ以外の全ても捨てようとしているようにも見えてならなかった。いずれ愛や優しさでさえも。

彼は加賀美リョウタロウではなく、『ゴッドイーター』という現象か、装置になるうとしているのではないだろうか。

そう思えてならなかった。

戦闘中に倒れた仲間リンクエイドを施すのは、ほとんどが彼だ。これが防衛作戦であったり偵察であったのなら、何の問題もない。

しかしそれが最前線での任務中とあれば、話は別。

リンクエイドとは、自らのオラクル細胞を他者に注入し、活力を与

える技術なのである。

つまり、自分の命を分け与えているに等しい。

身を隠す隙も場所もなく、撤退も許されない中でアラガミの猛攻に耐えながらのリンクエイドは、正気の沙汰ではなかった。

そんな最中でリンクエイドをして回る彼に恩義を感じ、アナグラ所属のゴッドイーターは彼にだけはリンクエイドを何としてもしようと試みる。

ソーマもそうだった。

何度も助けられたし、彼が未熟だった頃は、助けもした。

しかし最近は助けられる一方だった。

出撃する度に洗練されていく彼の動き。

彼が戦う姿は、これが唯の作業だと、そう言っているかのよう。

それを悪しと言うつもりはない。

戦いを舐めているのかと、そんなことをこと彼に限って言うことなど、絶対に出来ないことだ。

だが、彼の戦いを見ていると、皆恐怖を感じてしまうのだ。

彼自身が怖いのではない。彼が何か別の、自然と頭を垂れなくなるような存在になってしまうような気がして。ああやって優しく微笑んでいてくれる彼が、今にも消えてしまいそうな気がして。怖い。

畏怖というやつだ。

あるいは、彼を失った自分達がどうなってしまうのか……という恐ろしさか。

かつての自分ならばそんなことは無かっただろうに。

やはり、随分と温くなったものだ。

ソーマは神機を握り締めた。

『純白』の神機は確かな手応えをソーマの掌に伝えてくれる。

そういえば、『シオ』もあいつに随分と懐いていた。

似た者同士、か。

薄らと昇り始めた月を見上げながら、ソーマは通信機に集中する。

機は近い。

「まだか。いつでもいけるぞ」

——よし、今だ！ 頼んだぞ、ソーマ！

「任せておけ！」

雄叫びを上げ、飛び出す。

一人で戦うなど言っておきながら、単独出撃を繰り返している馬鹿に見せ付けてやろうではないか。

お前の背中を預けられるのは、自分達だけだということを。



「うおおおおおおー！」

よしてきたソーマ、リンクエイドな。

久しぶりの共同任務だから、にいちやんちよつと張り切っちゃやうぞう。

はいすいませんアラガミさん、そこちよつと通りますよ。

「ぬおおおおおー！」

はいはい、リンクエイドリリンクエイド。

「フオオ——ッ！」

へへっ……俺の回復薬はまだ1セットあるぜ……！

「ぐ、がふっ、ぐ、う、うう、うおおおおおー！」

ていうかなんで俺以外の誰もリンクエイドしようとしなんだよ
こんちきしょん。

何なの？ リンクエイドした後って、回復薬がぶ飲みしないといけないんだよ？

俺の事を薬箱と勘違いしてるんじゃないやなろうか。薬代も馬鹿にならないんだぞ。

何これイジメなの？

俺を破産させようとしてるの？

ヒバリ嬢に貢がされて懐事情が火の車だつてのに。

アリサ、サクヤさん、もっと回復弾撃ってくださいよお願いします。

素材も出ないし、もう俺は心が折れそうだよ……。
無だ、心を無にしなればやっていけない。
私心を消すのだ、とマイ女神ツバキさんも言っていたじゃないか。
無心無心。

……やばい、作業感が増して来た。

でも今日は俺の素材集めのためだけに、わざわざ皆が付き合ってくれてるんだから、良い顔をしてないと失礼だ。

スマイルスマイル。

「へ、へへっ、そうだな、お前もそう思うか。これからが楽しくなってくる所だ。行くぜ！ うおおおッ！」

お前はもういい……！ もう……休めっ……！ 休めっ……！
ソーマっ……！

本当にごめんよソーマ。

サリエル15連戦とか馬鹿な苦行に付き合わせちゃって。

他の皆みたく、ローテーションしてくれたりいいのに。

良い奴だよお前、本当に良い奴だ。

俺が入社したての頃も面倒を見てくれたのはソーマだったよな。

うん、本当にもうね、あんまりにも待遇が悪過ぎて俺が鬱入っちゃった時も、ぶん殴って立ち直らせてくれたのはソーマだったし。

お前一人で出撃して素材独り占めするんじゃないやねえよ、もういつそ殺しておくれよー、ってへらへら笑ってた俺。

うわあ、ドン引きだ。

ソーマも気持ち悪くて泣きそうになってたし。

ごめんなソーマ。

でもリンクエイドはそろそろ勘弁な。

「すまねえ……。足、引っ張っちゃまったな」

いいさ、相棒。お互い様だろう？ 俺がやばくなったらお前が助けてくれよ。

「……ああ！ 任せろ、お前の背中、俺が守ってやる」

さあ、一気に畳みかけるぞ！

「うおおおおっ！」

うおおおおっ！

頑張れソーマ！ 頑張れ俺の神機様ー！

超他人任せだけどごめんね！

さあ今度こそ出ろよ縮光体ーーーーーっ！

ぐっどいーたー：4 噛

後に最強のゴッドイーター、神狩人と称されることになる彼の半生は、波乱と争乱に彩られていた。

人々を守り続けた彼を、後に続く者達は皆、尊敬と畏怖の念を持って語る。

とてもああは生きられない、と。あんな、己を殺すように生きることなど、と。

ゴッドイーターとは、彼のことだ。ゴッドイーターとは、彼のためにある言葉だ。

真なるゴッドイーターと、その後に残る全てのゴッドイーター達は、そう語り継いでいった。

だが彼と共に戦場を駆け抜けた仲間達は、何を馬鹿など一笑に付すのみであった。

彼の生き様が、戦いだけの悲劇である訳がない。

それは彼が誰よりも優しく強い男であったと、そう知るが故。

皆が灯す希望の火を守り続けた彼は、間違いなく幸せであったと、仲間たちは知っていたからだ。

神狩人の伝説を語る上で欠かせない数多のエピソードを、幾つかかい摘んで挙げよう。

最強のゴッドイーター『神狩人』と称される、一人の男の物語を――



『e p, デッドアングル・エイマー』

「お、おいおい、嘘だろ……死角から襲いかかってきたザイゴートの群れを、見もせず撃ち落とすなんて」

「ああ、まるで背中に目が付いてるみてえだ」

うおおおつ！

何これ強化パーツ着けてから神機様が超反応するんですけど！

体感じゃ常時オートエイム状態だけれど、いや今回のこれは何か凄
いぞ！

凄い、いつもよりもオートエイム！ 意味解んないね！

うん、凄い！

凄い怖い！

ぐりんぐりん腕が動きます。

うおおおつ！

「へへっ、頼もしいじゃん、うちのリーダーはぎー！」

これ悲鳴ですから！

鼻の下擦ってないで助けんか脳味噌バカラリーー！

「また誰かがバガラリーのことバカラリーーって言った気がしたぞ！

バカじゃないって！ バガ、ラリーー！」

はいはいバガラリー。

知ってるぞ。

それ、腐ったお姉様達にも大人気だったアニメでしょ？

熱い男同士の友情がとかで……。

なんか、最近アナグラの居住区歩いてると、ソーマと俺どつちを前
にするか後ろにするかって、お姉様達のヒソヒソ話が聞こえてくるの
を思い出したよ……。

うん……。

「コウタはコウタだな」

「ちよ、ちよつとソーマ君、あんまりコウタ君のこと、コウタって言う
のやめてあげましょ？ 最近アナグラ中に広がって、流行語になっ
てるわよ」

「そうですよ！ コウタのことコウタって言うのやめましょよ。
ね、リーダー」

お、おう。

強く生きろ、コウタ。



『e p, バレットの魔術師』

「内臓を破壊し尽くすようなあのバレット、凄い破壊力でしたね！
リーダー！」

う、うん。ありがとうアリサ……。

俺はあまりものグロさにグロッキー寸前だよ……。

内臓破壊弾じゃんあれ……アラガミ汁ぶっしやーなってたよ。

「ノータイムでの超長距離多重精密射撃……流石ね。私が教えることはもう、何も無いようね。少し寂しいけれど、誇らしいわ」

いやジーナさん。これもバレットいじっただけですからね？

角度とか誘導とか付けて。

多重にレーザーが重なるようにしただけですから。

あとは神器様のエイム力のおかげで。

あの、どうしてそんな、胸の空いてるところを押さえてるんですか？

「見えない弾丸に撃ち抜かれてしまったのよ。気にしないでいいわ。でも、偶に気に掛けてくれると嬉しいわ」

それ矛盾してるような。

「むむ、むむむ……！ もう水着で出撃するしかないというの……？

私に力をください、パパ、ママ、オレーシャ……！」

アリサ、何を唸って。

「あのあの！ 逃げていく相手をモルターで殲滅したあのバレット、私にも教えてもらえないでしょうか！」

カノン・ダイバー。

貴様は駄目だ。



『e p, カリスマ——無視出来ぬ存在感』

「ほう……」

薄暗い部屋の中、モニタの光源に照らされながら、ヨハネス・シツクザールは感嘆の吐息を漏らした。

画面に映っているのは彼、加賀美リョウタロウが部隊を率いる姿。どうやら雨宮リンドウが抜けた穴を、彼で補填したことは間違いではなかったようだ。

彼が非常に戦闘能力の高い神機使いであることは承知していたが、良き兵士が良き指導者足りえらるゝとは限らない。

だが今回は当りを引いたらしい。

素晴らしい、とヨハネスは満足そうに頷いた。

「彼の協力が得られるならば、エイジス計画の更なる展開が見込めるだろう。そろそろ、特務を任せてもいい頃合いか。

彼ならばこの計画の真意を理解出来るだろう。あるいは、計画の破壊を望んだとしても——。

「死なぬ運命を背負ったもの」としては、さて、どうするだろうな。決して死なぬ、異能。特殊な生存体……か。

フフ……人とは解らないものだ、アイーシャ。ソーマがその役目を負うとばかり思っていたが、最後に立ちはだかるのは彼かもしれないとは。

リョウタロウ君、君が再生後の地球で人類の新しき指導者と成ることを期待しよう」

ヨハネスはしきりに可笑しそうに含み笑いを零すと、新たな第一部隊長となったゴッドイーターの腕輪に呼び出し信号を送信した。

「——さん。リョウタロウさん！」

であるからして、私は新リーダーとして粉骨碎身の覚悟で、君たちも……ああ、どうしたかね、ヒバリ君。

「支部長から招集命令が掛かっています」

そうか。

皆、就任演説はまた後だ。

ありがとう、ヒバリ君。

「そんな……止めてください！ 君だなんて、言わないで下さい！ 無理しなくていいんです、そんな、無理矢理に口調を変えてまで、リーダーになろうとなんてしなくても。」

リンドウさんの代りになろうなんて、しなくても……！」
そうか……すまないな。

意識してのことではなかったが、君を傷つけてしまったようだ。
謝罪をしたいが、時間も無い。

また後で話そう。

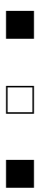
「あ……リョウタロウさ……やつぱり、リンドウさんと同型のシールドを装備し始めたのも、自分を責めて……」

俯いて唇を噛むヒバリの姿を彼本人が見たら、こう言っただろう。
神機様の影響です。こんなのは本当の俺ではないんです、と。

悶えながら言っただはずだ。

リンドウの装備していたシールド、イヴェイダー。

付与スキルは、カリスマと存在感——。



『e p, 特異点との共存』

「りよー、元気かー！」

おおっと、シオか。

今日も元気だなあ。

最近神機様の無茶振りに慣れてきたせいかな、身体も鍛わってお前の突進を受けとめられるようになってきたよ。

うん……こんなこと絶対、誰にも言えないけどね。

リンドウさんのシールドの時といい、確実にこれ、神器様の影響が

脳に出てるよね。

神器様が俺の身体操作してるとかなんかもうね。脳がね。あれだよね。

感応波の影響なんでしようね。

いやーこれバレたら解剖されちゃうかなー。

ははは、うん。

隠さなきゃ。

「んふー」

頭擦りつけちゃってまあ、ほんとに子犬（シオ）みたいだな。

ソーマもしやれた名前付けちゃって。

よしよし。

「んー、りよーはだめって言わないの、か？」

何が？

「すきな人にはぎゅーってするといいつて、さくやが言ってた！

ソーマにぎゅーってすると、やめろって怒る。りよーは怒らない。どうして？」

んー、妹みたい、だからかなあ。

「いもうとって何？」

えーと、血縁とか家族って言っても想像が難しいかな。

そうだな……自分よりもちいさい女の子、って意味さ。

「おー！ りよーは小さい女の子が好きなのか！」

「え……う？」

がちやーん、と食器が落ちる音。

入口を見れば、アリサが凄い顔をして立っていた。

絶望から憤怒、不安から悲嘆へと表情が目まぐるしく変わっていきく。

「ど、どういうことですか、リョウ！ ちつ、小さい女の子が好きだなんて、そんな！」

え……ああつ！

違う、誤解だ！ そういう意味じゃない！

「ドン引きー・ドン引きー・ドン引きですー！」

痛い、痛いって！

止めて、皿を投げないで！

トレイで叩かないで！

「15歳はもう守備範囲外なんですか！ 部屋が片付けられない子は駄目なんですか！ 最近胸の成長痛に悩まされてる子は論外なんですか！

仕方ないでしょう!? ロシアの服は、日本の洗剤で洗ったら縮んじゃうのに！ なんのためにこんな、小さい服を着ると……!」

ちよ、やめっ！

「りよーがなー、シオのこと、いもうとみたいで好きーって」

「え……? あ、小さい女の子って、もしかして、そういう意味で……」

そうそう！

小さい子ってそういう意味ね！

いやあ、アリサがシオ語に精通してて助かったよ。

「うう、すみません。私、早とちりしてたみたいで……自分にドン引きです……」

「りよー。アリさいじめちや駄目だぞ。好きならぎゅーってしないと、だな！ シオもまたぎゅーってしたい!」

「す、すきって……え? また? え? どういうことですか、リヨウ?」

わ、わあ怖い顔。

ほ、ほらスマイルスマイル!

リーダードン引きしちゃうなー、なんちゃって。

「そうですね。よかったですね、リヨウ。小さい子をぎゅーって出来て」

何その目でかつ!

目つき悪っ!

ごごご、ごめんなさい!

シオ、頼むからフォローしてくれえ!

「んとな、さつきりよーにぎゅーってしてもらってた! なんか、気分いいな!」

「へえ……」

あ、これ駄目なやつだ。

アリサが掴んでる壁のところが指の形に陥没してるもん。

「だからアリサもぎゅーってしてもらえ、な！」

「ええっ！ ええと、その」

なんだ……何を俺はされるんだ……？

ちらちらこつちを見るあの目……あれは、獲物を見る眼だ！

俺には解る。

人を撃つたことのある奴の眼だ！

「シオ、知ってる、ぞ！ コウタが言ってた！ 妹スキー、ぞくせい？

ってやつだな！ 言葉、覚えた！」

コウタああああ！

お前ほんとコウタ！

コウタは本当にコウタだなこのコウタ！

何言ってるんだよコウタのコウタ！！！！

「妹スキー……」

あの、アリサ、さん？

何でそんな、決意を込めた顔して……俺の服を引っ張ってるんですか？

お願い殴らないで！

痛いのは嫌です！ 痛いのは嫌です！

「あの、あの、あの！ おっ、お……」

お……？

「おにい、ちや……」

ごめんコウタ。

もうコウタのことコウタって言うのやめるわ。

わいの妹は世界一やー！

「わ、ひゃっ！ リヨ、リヨウ！ あのっ！ わ、わっ……わふ」

「なー？ 気分いいなー？ ぎゅーって、なー？」

あ、あわわ、つい勢いで。

ごめんこれセクハラ……。

「だめです！」

「ファツ!？」

社会的死、到来!？」

「はなれたら、だめです……から」

「ふふー、気分いいなー」

やばい何が起こってるんだ俺はなにかしたのかまたヒバリさんの陰謀か無料でハグしてくれるマイ天使はリツカだけだったはずツバキさんもたまにしてくれるけどあれは直属の上官としての部下へのスキンシップ的な意味であああ――。



『e p, 鬼教官』

今日はよろしくな、アネットにフェデリコ。

危なくなったらフォローするから、安心してくれ。

「はい、ありがとうございます！ 先輩、質問してもよろしいでしょうか！」

ああ、何でも聞いてくれ。

「自分はゴッドイーターとなって実戦経験がまだ浅いのですが、その、緊張してしまつて。先輩は心を落ち着けるのに、どうしていましたか？」

そうだなあ。

リンドウさんは何て言つてたっけ……そうだ、空だ。

そう、空を見上げるんだ。

「空、ですか」

そう。

そうすると落ち着くから。

「ありがとうございます！ やってみます！」

うんでも戦闘中に空を見上げるのは止めようね。

って言ってる側から上を見てあああ。

クアドリガの腹ミサイルが！ ミサイルが！

「ぐわあー！」

フエデリコー！

「さすがです！ 日本のことわざに、獅子はわが子を谷底へと突き落とし這い上がらせる、というものがあると聞きました！ それですね！」

それですね、じゃなくて！

「あの、リヨウ先輩。私にも精神統一法を教えてくださいなのですが！」
アネット、お前もか！

フエデリコ吹っ飛んでるのに余裕だな！ リンクエイドー！

君は心落ち着かせる方法とか、知らなくてもいいんじゃないんですかね！

「あれはどうでもいいですから、是非に！」

あれとか……いや是非にって言われても……。

うう、フエデリコの二の舞を踏ませる訳には……そうだ！
数を数えるといい。

ほら、よく言うだろ？ 素数を数えると落ち着くってさ。

日本のコミックが元になった格言らしいけど、あながち的外れじゃないと思う。

普段とは違う方法で、数を数えてみるというのは。

外国語とかでき。

「なるほど、やってみます！ 外国語で、ですね！」
うんうん。

役に立てたようで、よかったよかった。

「アジン、ドウバ、トゥリー」

「ああああああ……」

アリサが崩れ落ちたアー！



『ep, GOD—EATER…BURST』

視界にノイズが奔る。

時間を掻き巻く音がする。

ああ、こんなにも簡単に、世界は反転していくものか。

『今ですよ。これを逃すと、もう、倒せないかもしれない。さあ……この剣を……リンドウに突き立ててください……!』

やめてくれ。

『まだ、迷っているんですか？ 貴方は、もう……決断したんじゃないんですか……?』

やめろ。やめてくれ——。

「あれは……リンドウの神器?!」

「神器が、ひとりでに動いてやがる……!」

「だめだ……リョウ！ だめだ！ それを使っちゃだめだ！」

仲間の叫ぶ、声。

目の奥が熱い。

頭がガンガンする。

喉は干上がってカラカラだ。

雄叫びを上げる機能しかないはずのゴッドイーターの声帯は、内なる悲鳴に切り裂かれて。

痛い。

ひどく、痛む。

魂が、絶望の叫びを上げている。

知っているからだ。

“それ”を使えば、破滅が訪れることを。

覚悟など、出来ている訳がない。

なぜならば——。

——それ痛いやつだって、知ってるからね？

痛いやつなんですよ？

俺、知ってるよ？

それ、めっちゃめっちゃ痛いやつでしょ？
知ってるよ、それ。知ってるよ。

リヨウタロウ知ってるよ？

「だめええええ！ リヨウターーツ！」

いや、やらないからね!?

何その俺が自殺志願者みたいな、こう、飛び降りる寸前の奴を止めるみたいな叫び！

『決断が遅ければ、余計な犠牲が生まれるだけだ！ リンドウに仲間を殺させたいんですか!?!』

そんな事言われてもやらないからあ！

お願いだから俺がやる前提で話を進めないで！

「リヨウ……もう俺は……覚悟は、できてる……」

リンドウさんあんたまで!?

俺は覚悟とか出来てないからね!?

なにその覚悟って!?! 夏の新品とかなの!?

覚悟って俺が今まで生きてきた人生の中で、使ったことない単語なんですけどお!?

『さあ！ この血生臭い連鎖から……彼を解放してやってください……!』

「リヨウ……お前は、いい奴だな……悪かった、お前は、駄目だ。やつちやいけない、奴だ……」

リンドウさん……。

「ここから……逃げろ……っ!!」

だから！ 逃げたら！ 俺！ 処刑されますよねえ!?

あんた初めて会った時からブラックジョークばかり飛ばしやがって！

逃げたら処刑されちゃうでしょうが!!

行くのも駄目、引くのも駄目。

ダブルバインドだよちきしょん……!!

どうしたらいいの俺、どうするの!?!

「これはっ……命令だ……!!」

はああ!?

なんなん!?

こいつ、なんなん!?

俺の自由意志は無いの!?

『早く!! この剣で、リンドウを刺すんだ!!』

う、お、あ、んわああああ! もおおおおお!

もおおおお!

わかったよこんちきしよんん!

——うあああああつ!!!

「あつあああつ! 嫌あつ! だめつ……だめえ!」

「やめろ、アリサ! 近付くんじゃねえ!」

「嫌あああつ! リヨウ! リヨウ! 嫌ああああつ!」

なんこれ超痛い!

ほらやっぱりこれ超痛い!

言った通りじゃん! 言った通りじゃんかあ!

「リヨウの手が!」

アイエエエ手エ!? 手エナンデ!? 俺の手がああ!?

労災下りるのこれヒバリさ……!ん!

「お願い……リヨウ君……! リンドウを……! あの人を……!」

ていうかなんで俺がこんな目にあわなきゃいかんの!?

それもこれも全部あの人のせいじゃん!

ふざけんじゃねえし!

責任とれしマジで!

「私のところに、返してえ……」

……。

神器、解放——。

「逃げるなあつ!!!」

声帯が、こんなにも大きく震えたのは、ゴツドイーターになってから初めてかもしれない。

「……生きることから、逃げるな！」

そうだ。

逃げるな。

サクヤさんのために。

ツバキさんのために。

ソーマ、コウタ、アリサ……あなたの帰りを待つ、全ての人のために！

「これは……命令だ！」

もちろん、俺のためにもだ！

あなたの残した書類仕事、全部自分で片付けてもらうからな！

これは命令だ！

絶対死なせん！

絶対だ！

なんかいきなり隊長にさせられたのも！

書類の山が少しも減らないのも！

ベッドがずっとサクヤさんの香水の臭いがしてるから床で寝るはめになって背中が毎日痛いのも！

あれもこれもそれも全部！ アンタのせいじゃろがい！

責任とれ……否、とらしてやる！

積年の恨み……晴らさしておくべきかああああ！

「うおおおおおおお！」

うおおおおおッ！ 神器二刀流！

くらえ！

必殺！

テコの原理イイイイ！

くばあ！



『ありがとう——』

もう、いいのか……？

『リヨウはすごいや。僕はもう、諦めていたのに……うん。十分だよ……僕は……十分、報われた……』

そうか。

『また、会えるよ。きっとまた会える。その時は、ねえ、リヨウ——』

気が早いやつだなあ……。

またな——。



ハッピーエンド、めでたしめでたし、かな。

あー……死ぬかと思った。

「おい、リヨウも目え覚ましたぞ！ リヨウ、しっかりしろ！」
痛い痛い、ソーマ痛い。

ゆさぶらないで痛い。

なんだよ、ソーマ。

「お前……！ 俺は、俺はな……！」
なあ、ソーマ。

歌が聞こえたよ。

シオの歌が。

「俺は……ちくしょう……俺は……」

そんな顔して見送ってくれたんなら、きつと、シオも幸せだったと思う。

「うおおおん！ リョーウー！ 心配したよー！」

はいはいコウタ。

俺のジャケットで鼻水ふくのやめてね。

「俺っ、俺リヨウがあのまま、死んじゃうんじゃないかって！ 手も何

かアラガミみたいになってたし！ てか元に戻ってるし！　なんか、もう、なんかああ……」

なんだろうな。

俺も何が何だかわかんないや。

「俺っ、神様に、いっぱいお祈りしたんだ。アラガミじゃない、母さんが言ってた昔の、ほんとうの神様に。リヨウとリンドウさんを返してくださいって。」

そしたら俺、なんか影でコウタって言われて笑われてるのに、胸はって俺はコウタだつて、答えるつて……うおおおん！」

お前は今、泣いてもいい。

泣いていいんだ、コウタ。

「リヨウ」

わ、わああリサ。

超無表情だね。まるで能面みたいだよ！

はっはっは。

「……」

あの……何か、リアクションを、していただかないと、こちらも困るといいますか、その。

「あなたが、リンドウさんの神器を持ち出した時、私の心臓は凍りついたようになりました」

おわっ！

あ、お、怒ってない？

「私、自分のことしか考えてなかったのかもしれない。つぐなうための戦いだと、そう思っていました。自分のことだけを、考えて。でもやっと、サクヤさんの気持ち、私にも解りました。こんな気持ちに、させていただなんて」

え、えーつと。

「こんなの……1秒だって、耐えられない」

がらん、と地に落ちる神器。

へたりこむアリサ。

疲れ切ったように、細く、長く、吐息を絞り出す。

「よかった……よかった……あなたが無事で、よかった……！」
アリサ。

「何もいりません……何もいらぬから……あなたが無事でいてくれ
たら、それだけで……」

うん。

「怖くて……怖くて！　ずっと、手が、身体が、震えて止まらなくて！
大丈夫だってわかってるのに、もし、あなたがあのままって、そう
思うと……！」

うん。

「どうして笑ってるんですか！　どれだけ私が……どれだけ……ッ
！」

ごめん。

「どうして、あなたはそんな……！　いつも、いつもいつもいつも、い
つも！　痛いって言えばいいじゃないですか！　苦しいって言えば
いいじゃないですか！　つらいって、逃げ出したいって、言えばいい
じゃないですか！　どうして、あなたはそんなに……」

言ってるさ。

いつも、しんどいって。

逃げ出したって、言ってるよ。

「嘘です……嘘ですよ、そんなの！」

いや、マジで。

嘘とかじゃなくて、マジで。

「あなたはいつもそう！　初めて会った時と同じ、穏やかな笑みで、痛
みも悲しみも苦しみも、全て胸にしまい込んで……！」

う、うん？

胸にしまいこん……うん？

まあ、アリサはもう少し胸をしまった方がいい……んん！　げふん
げふん、ごほん！　ごふん！　げふん！

「どうしてそんなに、世界を癒すように、見つめていられるんですか
……！」

そりゃあ……ほら、あれだよ。

「リンドウ……！ リンドウ……！」

「よう、サクヤ……ただいま」

「ただいまじゃないわよ！ 馬鹿っ！ 馬鹿あ……！」

ああ、うん。

たぶん、愛ってやつだよ。

愛だよ、愛。

この世界で一番、大事なとき。

人間だけがもってる、宝物だよ。

「この世界で一番……人間だけの……」

この世界はもう、どこもかしこも地獄になっちゃったけど。

でも、愛に溢れてる。

大丈夫、きつと世界は、きれいなままさ。

「あ……」

うおわっ！

ちよっ、なんでここで泣くの!?

「わかり、ませ……なみだ……出て……なんで、とまらな……あっ」

ああ、だめだめ。

手でごしごししない。赤くなっちゃうから。

女の子なんだから、顔は気をつけなきや。

ほら、こうやって、優しくぬぐってやらないと。

「リョウ……私、やっと……やっとわかったことがあるんです」

アリサ？

あの、涙、拭かないと。

手、つかまれたら、その。

わあ、ほっぺたぶにぶに……。

「お願い……もう少しだけ、このままで。もう少しだけ……」

なんか、こういうの前にもあったような。

えっと、それで何がわかったの？

「あれですよ……ね？」

あれ？

リンドウさんと、サクヤさん？

どゆこと？

「ドン引きってことですーだ！ リヨウのバカラリー！」

なぜにホワイ？

まあ、笑ってるんだし、いいか。

「バガラリーだよ！ って、リヨウ！ 大変だ！」

お、おう！

どうしたコウタ！

「公共放送の懐かしのアニメ総集編に、バガラリーが出るんだ！ もうすぐ放送時間がきちやう！」

「やっぱりコウタはコウタか……」

お、おう。

「帰ろう、みんな！ アナグラに！」

……そうだな。

うん、帰ろう。

アナグラに。

「帰ったらどうします？ あつ、サクヤさんと結婚式しちやうとか！」

「も、もうコウタ君ったら、気が早いわよ、もう……！」

「そうだなあ……まずは姉上にどやされないと……ああ、憂鬱だ」

心配しなくてもいいですよ。

お二人には幸せな未来しかきませんから。

子供もね、女の子ですよ。たぶん。

「なんだか、不思議ね。あなたにそう言われると、本当に女の子が産まれてくるみたい」

おや、そういうの、否定しないんですか？

「こ、こらっ！ からかわないの！」

「あー、前向きに善処するってことで」

はは……いやあしかし、産まれる前の子にプロポーズ受けたら、それはどうなんだろう。

「おい、お前今、聞き捨てならん単語が聞こえたぞ」

さあ帰ろう！

「おい！ リヨウ！ お前……あつ、もしかして隊長押し付けちゃっ

たこと怒ってる?」

はっはっはーさあ帰るぞー。

帰ってバガラリー見なきゃなー。

「へへ、ソーマも俺達とバガラリーな!」

「はあ? 何で俺まで……おい、コウタ! 待てこら!」

「みんなー! 先行っちゃうよー! ほら、リヨウも!」

はいはい。

アリサ、行こう。

一緒に、な?

「はい!」

みんなで、帰ろう。

家に帰ろう。

俺達の家に――。

「今はまだ、溢れる想いが大切すぎて、言葉にならないけれど……いつかきつと伝えますから。私の気持ち。あなたに教えてもらった……世界で一番大事な――」



『e p, f o r 2』

「世界各地を飛び回っていた君を、ここに呼び戻した理由を話そう」
すごく……嫌な予感がします。

榊さんの顔、おれ最近、見分けがつくようになってきましたよ。

それ、やばいこと話す時の顔ですよ?

ここまで付いて来てくれたツバキさんとか、もうすっごい暗い顔してましたもん。

すまない、って俺の耳のとなでなでして慰めてくれましたもん。

今から話すのって、やばいことですよね!?

「君がアナグラを離れていた間に、君のゴッドイーターとしての登録情報をすり替えておいた。今の君は、加賀美リヨウタロウであって、

非なる存在」

待って、話が見えない。

待って。

「加賀美リョウタロウは、〃今も変わらず極東支部から離れて欧州で活動中〃。いいね?」

アツハイ。

「君は、防壁外の集落を中心にアラガミ退治を請け負い金品を巻き上げる、傭兵ゴッドイーター……血で染めた赤い肩、赤い肩をした鉄の悪魔、悪名高き吸血部隊の隊員として」

やめて。

お願いだから、やめて。

それ以上口を開くなら、例え榊さんでも手を上げることが辞さない。

「それじゃあ、在野で新たに見出された、新人ってことで」

それなら、まあ。

何か上手いこと乗せられたような。

ああ……赤紙が届いたあの日のことが、今よみがえる……。

「君には、新米ゴッドイーターとして、とある場所へ潜り込んでもらいたい。そう、スパイ活動だよ!」

色んなことがあつたけど。

もう一度だけ、言わせて欲しい。

「目標は、独立移動要塞……その名も、フライヤ——!」

フェンリルに勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない。

ぐつどいーたー：5 啣

降り注ぐ雨を……あふれだした贖罪の泉を止めることなどできん。

——ヨハネス・フォン・シツクザール。

□ ■ □

今日もまた、赤い雨がふる。

□ ■ □

加賀美リヨウタロウ。(以下、甲と記す)

元、フェンリル傘下ではない非合法の運び屋。

アナグラに搬入されるアラガミ防壁修繕のための余剰資源を横流しし、外壁に点在する居住区へと運び日銭を稼いでいた。

仕事の達成率は120%超である。(アラガミに食われた同僚の資材をも請け負い、納入を完遂させているため100%以上の達成率) 運び屋団体と共に、限りなく生存率の低い地区に何度も足を踏み入れてなお、その度に一人だけ生き残っている。(この時期に、死神というあだ名がつく)

アナグラから各地に点在する居住区へと、単独での資材搬入の最中にアラガミの群に襲われ、負傷。

全身火傷、脊椎損傷、頭蓋陥没、大腿骨複雑骨折等、その他大小無数の傷を負うも完治。(闇医者による治療であつたため医療記録が残されていない。甲のバイタル分析の結果から、短期間で治癒したと推測される)

患者から無断で血や臓器を抜き取り売買していた闇医者の手により、血液および血管と筋繊維が採取され、フェンリルへと流れ着く。

フェンリル内ビッグデータ、適合候補者リストへと登録。

旧型神機への適合率が高い偏食因子が発見され、新型神機適合実験の被検体として選定される。

新型神機の拒絶反応実験に失敗。

実験機となった新型神機に、極めて高次元での適合を果たす。

適合後のバイタルチェックにより、新型神機使い特有の感応現象に適した脳構造であったことが判明。

神機との間に、オラクル細胞が発するオラクルエネルギーを解した何らかの相互干渉が確立している模様。詳細不明。(神機使いには、神機の精の夢をみた、等の報告例がある。神機に人格はあるはずもないが、恐らくはこれに類似した現象であると推測される)

以降、フェンリル本社から極東支部に『新型使いの任務失敗による栄誉の死があったのではないか』と幾度となく確認が入るも、全て誤報として報告される。(本社からの歪曲な抹殺指令を、ペイラー・神が情報操作を行い抹消していた模様)

その後、新型機の実働データ採集という名目の、本部からの前線での全戦闘参加に任を続行。(現在まで続く120%以上の達成率。前線だけでなく後方の戦闘任務もこなしているため)

甲が極東支部に配属されてからの略歴は以下。

手違いにより初等訓練が施されず、そのまま出撃。

初出撃では、ベテランの神機使いが死亡する程の激戦を切り抜ける。

壁外任務においては、ゴツドイーター以前の経歴を活かし、フェンリルに隔意を持つ住民達との軋轢を緩和。

甲、軽度の栄養失調に。(甲の職場改善アンケートには、調理師の配属を願う旨が毎回書き込まれている。栄養失調となった原因は、給与の9割を孤児院へと寄付し金欠に陥ったため。甲はこの寄付を初回任務が終了してから現在に至るまで続けている)

以降着実に戦果を重ねていくも、大型アラガミ討伐の任を受けた際、手違いにより他神機使いと任務のバツテイングが発生する。(同エリアに同時にミッションが入ることはありえない。ミッション受

注システムのエラーであると推測される)

ミツシヨン中、隊長に同行していたもう一人の新型使いが錯乱し、銃弾を暴発。(新型使い、ロシア支部から派遣されたアリサ・イリーニチナ・アミエーラ。隊長、雨宮リンドウ)

隊長が侵入していた建造物の天井が崩落し、追いつけていた接触禁忌種と隊長とを単独で閉じ込めてしまった末での結果である。

この戦闘により、所属部隊の隊長がM I A判定。

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ、精神に変調をきたし一時戦線離脱。

甲はアリサ・イリーニチナ・アミエーラの回復に尽力す。(アリサ・イリーニチナ・アミエーラは甲を依存対象とすることで錯乱から回復)

雨宮リンドウM I A判定により、甲に第一部隊隊長を後任する命が下る。(前隊長の搜索打ち切りによる。神機と腕輪の搜索すらされないことに、甲の不满は目に見えて蓄積されていた)

甲、第一部隊隊長就任。

同時に、フェンリル本社からの強制出撃命令は撤回され、極東支部長ヨハネス・フォン・シツクザール直属の特務執行員となる。

この時期より甲の戦闘における奇行が目立つようになる。(単一のアラガミを執拗に付け狙う。何も無い空間に向けて武器を振り回す。あらゆる武器種の持ち込み。ショートソードを振った慣性だけで地面を滑り移動する。など)

甲によりジーンマップのように複雑であったオラクルバレットの調整が、ある程度の体系に分けられる。(本来オラクルバレットの調整は、アミーバや絵の具のようにフィジカルなものである。甲はこれを、各属性、レーザー、装飾弾丸、制御、など体系付け分析し、分類した)

偉業であるが、特務執行員という秘匿性の高い立場である故に、本社からの表彰が取り下げられる。

同時期にゴッドイーター連続出撃記録更新、スコアランカーになる。(同上の理由のため、非公式)

甲の隊長就任パーティに本人がハブられる。その事をミツシヨン前のブリーフィングで知る。一週間寝込み、アナグラの全任務に支障をきたす。(パーティの一件は甲の単独任務癡を、仲間達が気遣った模様)

人的被害はなかったものの、甲の戦闘力をあてにした作戦が全中止となり、『エイジス計画』に莫大な遅れと補償が重なる。

ヨハネス・フォン・シツクザール、後送の危機。一ゴツドイーターの行動が、支部長クラスの進退を左右する初の事態に。(ヨハネス・フォン・シツクザールがペイラー・榊の情報操作に抵抗もせず欧州へ一時飛ばされていたのは、この釈明のためであると推測される)

一時的にペイラー・榊の指揮下へ。

部隊単位での任務に復帰。

任務遂行中、ひとりの少女を保護。

アラガミの死骸を食おうとしていたその少女もまた、アラガミであつた。

アラガミは捕食したものの特性を取り込み、姿を変えていく。進化の過程で人間に似たモノの姿となっていた。

脳に位置する部分も確認され、さらには偏食因子がそうさせるのか、その少女は人間に食性を向けることはなかった。

捕食の危険がないとされ、ペイラー・榊の要望により、甲ら第一部隊によって支部内にあるペイラーの研究室に匿うことに。

どんどんと知能を身に付けていく少女。自らの名を『シオ』と口にする。(ソーマ・シツクザール命名)

シオの食料、つまりはアラガミの死骸を補給するため、連日連夜出撃を繰り返す。(甲の単独行動癡が手が付けられないレベルになる)

甲の書類処理能力がある種のブレイクスルーを迎え、専門オペレーター並みとなる。(この時期から書類の内容にも余裕が見られ、部隊員のコードネームを、ハダカエプロン、ロシアノコロシヤ、ムツツリロリコン、バカラリー、などに隊長権限で改名しようとするジョークが見える)

ヨハネス・フォン・シツクザール、極東支部へと帰還。(何らかのト

ラウマがあつたのか、甲による二人だけの帰還祝いパーティが行われた模様)

ペイラー・榊の厳命により、支部長にさえシオの存在は秘匿される。特務再開。『特異点』の捜索が命じられる。

極東支部内の一般居住区にさえ、アラガミの襲撃を許すことが頻繁に発生。

出撃回数が激化する。(甲にとって一度の出撃で5つ以上のミッションをこなすことが普通。前線任務、特務、防衛任務、調査斥侯、間引き等あらゆる任務を同時に請け負っていた。極東支部内においてもこのスコアは異常である)

任務中、雨宮リンドウの腕輪から発せられる位置ビーコンを受信。捜索再開。

雨宮リンドウの神機と腕輪が、アラガミの体内より発見される。(これにより雨宮リンドウKIA判定。神機は保管所にて新たな適合者を待つことに)

第一部隊所属の橘サクヤ、腕輪を鍵とした、雨宮リンドウの個人データベース内を捜索。

エイジス計画の裏に何らかの陰謀を見出すも、これを甲へ報告せず。(甲を氣遣つてのことであつたが、甲曰くそんなに前隊長がいいのか、と後に一週間程寝込む遠因となる)

シオ、特異点として覚醒。

サクヤ、アリサ兩名の単身独断でのエイジス島潜入調査により、『アーク計画』が判明。

『終末捕食』へのカウントダウンが始まる。(アラガミ同士が喰い合い、進化し続けることにより、最終的に地球そのものまで捕食してしまうとされる現象)

アーク計画首謀者であるヨハネス・フォン・シツクザールの、終末捕食を利用し、破壊された地球環境を一度リセット、再生しようとする目論見が暴かれる。

ヨハネスは、エイジス島で育成していた巨大アラガミ「ノヴァ」を終末捕食の引き金とし、強制的に終末捕食を発動、ゴッドイーターや

技術者、科学者等、選ばれた人類を一時的に宇宙へと避難させ、地球がリセットされるのを待つ。

これがアーク計画の全貌であると語る。(ノヴァ起動のキーとして、特異点であるシオのコアを必要としていた)

アーク計画、アナグラ内にて公表。

極東支部、内部分裂寸前となる。

人類の大半を見捨てる計画に、甲は一定の理解を示すも、反対の立場を貫く。(搭乗チケットを同部隊員、藤木コウタの家族に譲り、搭乗者リストの改竄も行っている)

第一部隊によるノヴァ破壊作戦強行。

アナグラ所属の全ゴッドイーター全職員に秘匿されていたの独断作戦であった。(しかし竹田ヒバリ、雨宮ツバキらは事前に甲より作戦内容を知らされ、職員の混乱を収めるよう尽力した)

シオ、コアを摘出され、ノヴァに捕食される。

ヨハネス・フォン・シツクザール、アルダノーヴァと一体化。

第一部隊、交戦開始。

壊滅寸前まで追い込まれるも、甲による、人型神機とも言えるアルダノーヴァ女神・男神に感応波ジャック。「相互関係」を結合崩壊。

暴走状態に陥ったアルダノーヴァを、甲が単独撃破。

ヨハネス・フォン・シツクザール、人類の未来と希望を託し、オラクルの輝きに散る。

亡き妻と、地獄を歩み続ける息子への愛情を、友と信頼する直属の部下へ託して。

アルダノーヴァを撃破するも、終末捕食は止まらず。

崩壊するエイジス島の中、シオの声が響く。

コアを捕食されても、その意思がノヴァ内部で生き続けていたのだ。

シオは、地球を内部から捕食しかけているノヴァを表層から強制的に引き剥がし、地球から遠ざけるために月に向かうと甲らへと告げる。

そのために、枷となったその「抜け殻」を断ち切らねばならない、

と。

神機によつて、自らを捕食せよと、ソーマへと懇願する。

ソーマ、震える声にて了承す。

シオを捕食し終えたその神機は、純白の色に染まっていた。

「ありがとう みんな」とシオは、月へと旅立つて行つた。

こうして終末捕食の危機は去つた。

だが、アラガミの脅威は依然続いている。

ヨハネスはエイジス島内にて作業中に不慮の事故で死亡したと処理され、既に宇宙船に乗り込んでいた人々も元の生活に戻つていった。

人類の絶滅を恐れるあまり、一部の人間だけでも生き延びさせることを選んだヨハネス。

同じく、人類が減ぶことを恐れたが、アラガミと人類は共存できるという希望をシオに見出した、第一部隊の面々。そして甲。

どちらが正しいかはわからぬまま。

ゴツドイーター達は今日もまた、アラガミと戦い続ける。

□ ■ □

「あらすじはこんな感じでどうだろうか?」

いや、あの長すぎませんかね、ここまで。

「もちろんヨハンやシオちゃんのかだりは削除するとして。どうだい、我ながら良い出来だと思っただけど、どうかな?」

どうかな言われましたも。

この原稿なんなんですか。

これ見せるためにわざわざ俺を欧州から呼び戻したんですか。

「おや、お気に召さない? 確かに、全体的に君の影が薄くなつてしまったのがどうかかなと思つているんだが。これじゃソーマ君が主人公だね、ははは」

いや、ははは、って。

そもそも、誰ですかねこの甲とかいう頭がパーンしてる奴。箇条書きにされたの改めてみると、本当どうかしてると思うこいつ。

ええと、なになに。

任務評価SSS+を20回以上達成。

1種のアラガミにつき討伐数100体以上。

任務コード『鬼神竜帝』、評価SSS+、無補給無傷での達成。

開発可能な全近接武器、全銃身、全シールド、その他を独力により取得。（合計150種類以上所持）

など。

ハハッ、ワロス。

「これでも削ったほうなんだけどね。だからいまいち、凄いなだけだ。どう、目立たなくなっちゃったんだ」

いやそりゃこんなに盛ったら……えっ？

削……っ……た？

えっ？ あれっ……あっ！

あああー……。

「本当のことを書いてしまうと、あまりにも現実味が無くなってしまつて……」

本当の事書くと逆にうそ臭くなるとか一体……。

あの、榊さん？　なんで眼鏡とるんですか？　なんで目頭揉んでるんですか？

俺、榊さんが眼鏡とつたとこ初めて見たんですけど。

なんでそんな、どうしようもないなこいつ、みたいなリアクションしてるんですか？

ねえ、ちよつと。

「いや、でも、ねえ？　君、報告サボっていたり、ヒバリ君と共謀して討伐スコアを他人に譲り渡したりしていたでしょう？

いい機会だから私の方で一度君の戦績を洗い出したんだが、うん……」

ちよつと！

何で最後の方の言葉濁すんですか？

わかっているでしょ？　みたいな目しないでくれませんかね！

それヒバリさん一人でやってるやつですからね!?

「わかってますから」って何かカウンターで毎回カチャカチャやって……俺からどんだけ搾り取ろうと……。

コウタにチケツト上げたくだりとかも、あいつがトイレから帰ってきてハンカチ持ってないって言うから渡そうとしたら、間違えて搭乗パス渡しちゃっただけですから！

なんかツバキさんがそれ見てたみたいで、悪ノリして、搭乗者リストまで書き換えちゃったしさあ……。

しかも俺の部屋まで来て、俺の端末使って。

足が付くじゃん！　それバレたら首吹っ飛ぶの俺ですよねえ!!

その後掃除したり洗濯したりご飯作ってくれたりしたけども、そんなに俺騙されないからね!?

でも添い寝はまたしてくださいお願いします！

「まさか私も、アナグラ内に流れている君の噂が、ほぼ事実であったとは知らなかったんだよ……：ディアウス・ピターとプリティヴィ・マータを同時に相手する？　複数の接触禁忌種を同時に？　理由がお小遣い稼ぎ？」

何を言っているのかわからなかったし、何を言われているのかわからなかった……：なんだか、その、ごめんね？」

やめて！

泣けてくるから！　やめて！

「いくらミッション受注が任意制といっても、第一種接触禁忌種を単独で何度も狩りに行っていたとは、私もさすがに予想外だったよ……。

君が食堂でジャイアントとうもろこしを頬張っていた姿はよく見かけていたが、まさかノヴァの亜種を狩った帰りでした、なんて誰も思っわけないじゃないか。

困るよ、そういう時は一声かけてくれないと。アリサ君やツバキ君

たちが怒る理由もわかるね、まったく」

え、なんでこれ、俺が怒られる流れに。

「ごめんなさい、は？」

「ごめんなさい……」。

「はい、よろしい。では渡した原稿に目を通しておいでくれたまえ。特に甲の項目のところを頼むよ」

うわー、これはひどい。

ざっと見ただけでもこの甲とかいうのひどい。

甲って誰なんでしょうね、ほんと。

俺だよ……これ……俺のことだよ、これ……。

ワーカーホリックを超えた何かになりつつある俺だよ……。

神機様がかつてに動いてミッション上から下まで連続ポチポチするからあ……。

「うん、次回作はちゃんと君を中心にした一連の大活躍を、相応しい描写で描いていくことにしよう。任せてくれたまえ！」

やめて！

お願いだから、やめて！

「そういえば欧州でも大活躍だったそうじゃないか」

ええ、まあ。

活躍したつていうか、楽勝だったんですよ、ええ。楽勝でしたとも……。

だって相手が、ハガンコンゴウとかだけだったし。

「そこで『だけ』なんて言葉が出てくる時点で、君も極東に染まってるね。いや、この流れを作ったのは君か。」

他の支部じゃあ普通、第二種接触禁忌種なんて現れたら、絶望的事態だからね。私も他国の支部に行った時に感覚のズレをいつも指摘されるよ。君たちを見てるとどうもね」

なんかその辺、俺全くわかってなくて。

欧州で第二の接触禁忌が出てきたときに、みんな「もうお終いだ！」って取り乱してたのを横に、俺だけ今日のランチメニューとか食堂で聞いてたりして。

そしたら俺、何かすごい怖がられちゃって……。

極東支部がおかしいんだって、そこで初めて知りましたよ。

いやあ、向こうは平穩だった……。

ミッシェンも数日に一回だし、接触禁忌種とか探してもいないし、ヴァジユラの群とかもないし……。

「極東は地獄の釜の底の底、そこにこびり付いたコゲ付きよりもなお黒い者共が住まう地だ。そう言われているらしいね。極東上がり“が一種のステータスだとか”

もうやだ極東！

「おそらく君が極東一有名なゴッドイーターなんじゃないかな。地獄の獄卒長として。第一部隊は精鋭を集めるものだからね」

もうやだ極東！

「ゴッドイーターの情報は秘匿されるものだし、君は立場が特殊なものになってしまったから、個人情報ももらえることはないさ。

第一部隊隊長という立場が目立つだけで、君の名前や顔を知っている者は少ないだろう。第一部隊隊長という名が、一人歩きしている状態だ。

君も、本社の登録データに私がすこし手を加えて、たまに別人になってもらったりしているしね」

新しい戸籍がなんかいきなり出来てたりしたのは……。

いや、もう深く考えないようにしよう。

欧州じゃあ、極東支部の第一部隊隊長ってどんな奴か？って質問山ほどうけましたよ。

お前よりイカレてる奴とかいるの？とか、お前よりヤバイ奴がいるとか嘘だろ？って。

泣きたい。

「ところでソレの着心地はどうだい？」

ハハハははハ。

言わなくても解るでしょう？

「そうか、それはよかった！ 気に入ってくれたようで嬉しいよ」
んなわけあるかあ！

何か勘違いされる前に言いますけどね。

俺が離れてる間、職員さんも結構増えましたよね。

「そうだね。アーク計画の影響で、人員が大きく入れ替わったからね」
後ろ暗い奴全部飛ばした人が何をしれつと……まあ、だからこう、
離れてた間に人が増えたおかげで初対面の人が一杯いるわけなん
ですよ。

「そのの一体何が不都合なんだい？ だから皆が君を受け入れてく
るよう、君のために筆をとったというのに」

そののせいですよ！ やめてくれませんかね！

何か俺が、アラガミ殺すことだけが生きがいの殺戮マシンになっ
ちやつてるから！ やめてくれませんかね!?

最近アナグラの中で、新しい職員さんとすれ違うと、ヒツ、て悲鳴
上げられちやつてるんですけど知ってます!?

これ確実にあんたが装着するように厳命してきたコレと、自費出版
してるアナグラ広報のせいでしょ！

なんなんだよ『連続ノンフィクション小説：ゴツドイーター』神狩
人』って！

誰だよここに出てる加賀美リョウタロウ君って！

ドン引きするくらいの出撃回数に任務達成率に戦闘内容じゃん！
最近はずつと無傷で任務達成とかつて……事実だけど！

こんなん本当にいたら化け物でしょ、化け物！ 誰だよこいつ！
あああ……だから俺だつてばよおお……。

神機様がやれつて言うからああ……俺を無理矢理引き摺るか
らああ……。

「いやあ、すごく人気があるように見えるんだけどねえ」

ソーマが俺のことすごい不憫な目で見てくるんですよ。
肩ぽんつて。ジュースまでおごつてくれましたよ！

「何かあったら相談しろ」って。

そんなんする奴じゃなかったけどものすごい気遣いしてくれるん
ですよ！

なんかもう、なんか！

心が痛い…………!

「そうか……ソーマ君もまるくなつたね。君のおかげかな」
「そうだけど違うでしょうが！」

「いったい何が問題なんだい。似合っているし、いいじゃないか」
「似合う似合わないの問題じゃないでしょうが……！」

「そのキグルミ」

はいきた！

さっきの理由に加えて、これで俺の地位が不動になりましたよ！
言い訳不可能のキワモノ枠だよ！

ファンシーカワイー！

ピンクのウサちゃんは今日もアラガミをぶつ殺すよ！

ホラーだよ!!

キグルミがアラガミ返り血塗れで細切れにしてるとか、ホラーだよ

!!

欧州での任務一発目からこれ着てやってましたからね。
向こうでの評価もそろおかしい奴つてなりますよ！

なんでこんなん送りつけてきたし！

一職員が権力に逆らえるわけじゃないでしょうがもおお……！！

「でも、そういうの、好きなんだろう？」

支部長権限での命令されたら断れないでしょうが！

決して！ 断じて！ ちよっとクセになってきたからとかそういう
うのじゃないんだからねっ！

ていうかこれ普通のキグルミじゃないでしょ。中身異様にメカメ
カしいですし。

機械の塊にガワ着せただけじゃないですかこれ。

俺だってヒーロースーツとかならまだ許せたのに。

何なんですこれ？

「ヨハンの遺したものの……正確には、私が欧州に飛ばした時に譲渡さ
れたものなんだがね。『神機兵』という人型兵器の雛形さ」

ああ、確かそれ、欧州遠征中に色々聞きましたよ。

なんだっけ、無人化目指してるんだっけ。

制御が甘くて、まだろくに使えないとか何とか。

そういうのが配備されたら俺達も楽になるのになあ。

「いずれ公開されるとしても、現時点ではまだ極秘情報のはずなんだけどね、それ」

やぶ蛇だった……。

「せっかくだし、こちらで無人制御のためのデータ取りや、機体の問題点を改善してあげようかなと。そうしてくれと、頼まれた気がしたんだ。ヨハンが遺した仕事に紛れこんでいたのを見てね……」

榊さん……。

「それに有人操作はかなり負担がかかるそうだからね。対アラガミとの実地データを取るのには、極東が一番さ！」

え、これ、このキグルミ危ないやつなん？

「大丈夫さ、ただの無人機用のデータを取るための機具だよ。今はまだ」

今はまだ!?

「見た目が悪いから、私が外見をかわいくしてみたんだ」

スルーするのやめてくれませんか!?

「もうしばらく戦闘データを蓄積してくれたら、脱いでもいいからね。いずれは君の戦闘データを反映し、キグルミ型の無人神機兵を私は作ってみせるよ!」

嫌な予感しかしない……!!

でも、本当に完成したら嬉しいな。

アーク計画の影響でアラガミがやたらめつたら極東には寄ってくるし。

それに合わせて優秀なゴッドイーターや研究者も呼び寄せるものだから、生活基準が上がって、アラガミがいても良い生活ができるって人が増えて。

それを狙ってアラガミが増えて。

堂々巡りですよ。

「少し、疲れた様子だね」

ええ、ちよつと。

欧州でこなした最後の任務、引きずってまして。

「何かあったのかい？」

このキグルミ着て、居住区回ってる時に……ちよっと。

ピンクのウサちゃんだーって、女の子が抱きついてきてくれて。

「いいことじゃないか。やはり私のセンスは世界一だね」

俺の……ピンクのウサギがアラガミを倒す絵を描いてて、ウサちやん達が戦ってくれるから私たちは安心ですって。

ありがとうって。

手紙、書いてくれてて。

「小さな子からのファンレター、いいじゃないか」

それが、アラガミの腹の中から出てきました。

俺は間に合わなかった。

それだけです。

「……そうかい」

生き残った人が、言っていました。

助けてウサちゃんって。

最後まであの子は、俺を呼んでたって。

「リョウタロウ君」

あの子だけが死んだんです。

アラガミから助かりたいために、周りの大人たちが、アラガミの目の前に放り投げたから。

あの子が食われてる間に、皆逃げたんだ。

犠牲者が一人でよかったって、ミッションリザルトの数字を見て、

事務処理の職員さんは言っただけ。

俺は……なんなんだろう。

いつも考えてしまう。

考えちやだめなのに、嫌な考えが頭の中に浮かんでくる。

命の重さは同じでも、価値は同じじゃあないんだ。

クズと無垢な子供の命が等しいなんて思えない。

あんなのを守るために、ゴッドイーターは命をかけなきゃいけないのか。

ヨハネス前支部長の意思は正しかった。

でも俺は、ゴッドイーターの使命……全ての人を等しく守る、そのためのだけに。

人類のために英断を下した、本物の英雄を手にかけて……。

「長旅から帰ってきてすぐに呼び出して悪かったね。疲れだろう？」

下がってよろしい。キグルミも脱いでいいよ。あとはこちらでやっておくから、ゆっくり休みなさい」

失礼します……。

その、次の任地はどこですか？

「女神の森……ネモス・ディアナ。対アラガミ装甲壁に囲まれた、ミニエイジスとも呼べる場所さ。君には新たな任が下るまで、そこで要人警護や、資材搬入の護衛をしてもらうことになる」

了解しました。

「クレイドルの皆とすれ違いになるね。だが、忘れないでほしい。リョウタロウ君。どれだけの悲劇が訪れようと、君は決して一人ではない。いいね」

ええ、大丈夫です。

少しこたえただけですから。

一眠りすればすつかり、元通りですよ。

「微力ながら私もいる。そのことも忘れないでくれたまえ。もしよければ、一緒にお茶なんてどうだろう。ちようどこに新たな味に改良した初恋ジュースが」

失礼しました！

上司のパワハラも茶飯インシデント。

部隊長クラスも陰険なイジメを受けるよ！ サツバツ！

フエンリル極東支部はあなたの参加を待っています！

俺の代わりに……！ 誰か……誰か……！

でも、冗談抜きにして。

そろそろ、本当に限界だ。



「あつ、リヨウタロウ君？ リヨウタロウくん？ ……あらら、フラれてしまったね」

榊は苦笑しながら、デスクに並ぶ幾重ものモニターへと向かう。

眼鏡に青いモニターの反射光が映り込み、その奥にある、細長い目を照らす。

「ヨハン……君のしたことの是非を問うには、人類はまだ若すぎる。彼を見ているとね、そう思うんだ。」

大いに悩み、悔やみ、答えが出ぬままに、ただ生きる。

人は自立して生きていくことになった。神に頼らず、自らの手で。

地獄だよ。ここは、地獄だ。

だが彼は、地獄のままであれど。死んだ方がマシだという世界で、全ての人間に、死なせないことを強要した。その傲慢。死ぬことを許さない、その懺悔。

いかほどのものか……スターゲイザー【傍観者】である私が、何かを言う資格などないことは、解っているんだけどね」

数分、何がしかのコードを打ち込んでいた榊だったが、身が入らなかったのか、細く息を吐き出すと椅子に深く背を預けた。

「寡黙で、微笑みを絶やさず、鋼の精神を持ち……完璧なゴツドイーターだ。」

でもそれは、作られた仮面だよ。

きつと、胸の内では叫んでいるはずだ。理不尽に悶え苦しんでいるはずだ。私に対する愚痴だって、それはもう盛大に吐き出しているかもしれない」

榊のモニターには、ドーム状に防壁に覆われた居住区。ネモス・ディアナの画像が。

その遠方の空には、赤い雲が。

不吉な予感を見る者に与える……視界に入るだけで背筋を逆撫でされるような、赤い雲が写されていた。

「赤乱雲……赤い雨……ネモス・ディアナは、ヨハンの政策によって極東支部から追いやられた人々が暮らす場所だ。みなフェンリルを憎悪している。

クレイドルの皆も、理解を得られたのは一部だけ。受け入れられたのではない。事実上の撤退だ。そんな場所に、私は君を追い込むんだ。

P73 偏食因子の、後天的投与……ヨハン、あの時と同じ、嫌な予感がするよ。終末捕食が、また起きるかもしれない。それも、誰も望まない形で。

だから私は、科学者にあるまじき、勘に頼った行いをしよう。そう……あの時と同じように。賭けに出よう」

榊の組まれた両手に、額が乗せられる。

まるで祈るように。

「ヨハン……君が言う通り、彼が何をしても決して死なない、異能の運命を持った生存体ならば。きっと、きっと神の見ている暗い夢を打ち砕いてくれる。私もそう信じることに決めた。

彼が、私達が追い求めた、救いの凶星……現人神「アラヒトガミ」なのだ」と

その祈りは何に向けてのものなのか。

「赤い雨の謎は解明されなくてはならない。解決の糸口さえ見えない不治の病など、あつてはならない。これは試練だ……リョウタロウ君。私を恨んでくれ」

赤乱雲から降る、赤い雨。

赤い雨にうたれれば、不治の病に罹患する。

致死率は100%。

雨が当たった箇所を中心に、黒い蜘蛛状の痣が浮かび上がり、激痛を発し……そして、死亡する。

今はまだ極致的な現象に過ぎないが、榊の予測では、いずれ世界規模で発生する、未曾有の自然災害となるだろう。

アラガミに加え、赤乱雲だ。人類にはこの二つの脅威を耐え抜く力は、残されていない。

もし、である。

もし、自身に打たれた毒、劇薬……与えられた死の運命を全て捻じ曲げ、生き抜く存在があったとしたら。

赤い雨にうたれれば、どうなるだろう。

自身の体内で何らかの変化を無理矢理引き起こし、無害なものへと変えてしまうのではないだろうか。

未だあの雨の何が作用しているのかすらわからない状態だ。

彼の体を調べることによって、その毒性を解明するための、手がかりとなるのではないだろうか。

機神兵のデータとりなど、ただの建前だ。

彼の全身いたるところのデータをモニタリングするためのものだ。健康時と、雨にうたれてからのデータ、両者の比較が必要だ。

そのデータが、無人機にも搭載可能なものとなると、それだけのこと。

それだけのことに、たった一人の男に、多大な負担を背負わせる。

本人にそうとは知らせず、世界の命運を背負わせて。

悲劇のるつぼに放り込むのだ。

これは試練だ必要なことであるのだと、自分に嘘をついて。

「ヨハン……君も、こんな気持ちだったのかい」

返答はない。

かつてこの椅子に腰掛けていた男ならば、どう答えただろうか。

神は無性に、あの時ヨハネスと一緒に飲んだワインを、もう一度飲みみたいと思った。

ぐっどいーたー：6 噛

やってきました女神の森「ネモス・ディアナ」！

アラガミ防壁に囲まれた、緑が残る街！

やっぱり、人間には緑が大事だと思うんだ。荒野じゃ人の心だつて荒むよ。

へへ……俺、ネモス・ディアナにいったら、街の人と一杯仲良くするんだ。

こいよアラガミ！ オラクル細胞なんか捨ててかかってこい！

そして訪れるハートフル展開！

最後は住民の人達と涙ながらにお別れするんだ。またくるよ忘れないぜ、つて！

よし、俺、全力でゴツドイーターしちゃうぜ！

そう思っていた時期が、俺にもありました。

わああーい……きつうーい……。

風当たりがきつうーい……。

「また余所者が」「極東の」「役立たず」「あいつらがアラガミを連れて来てるんじゃない」とか、そんなボソボソ言ってるのがすごい聞こえてくる。

うん、お腹痛い。

ちよつと待って、こんなに風当たり強いとか、俺も初めての経験なんですけど。

確か少し前に極東支部との間に提携が結ばれて、物資とか搬入されたんじゃなかったっけ？

歓迎ムードだったって聞いたけど、何でこんな……ちよつ、痛い！

痛い痛い石痛い。

石投げないで痛いからあ！

そらフェンリルの駒とか犬とか、ゴツドイーターがそんな好かれてないのはわかってますけどね！

でも命削ってやりたくもない戦働きとかしてるんだから、もうちよい優しくしてくれてもいいでしょ！

感謝しろとかまでは言わないから、優しくしてもさあ！
優しく……優しくしてえ……。

おい誰ださつきから俺の尻に執拗に石を当ててる奴！
しまいにやキレるぞオラア！

くらええええええ！

神回避イイイイ！

□ ■ □

女神の森【ネモス・デアナ】。

三年前、エイジス島建設の技術者であった葦原総統が建設を始めた、対アラガミ防壁に囲まれた居住区……私の故郷。

もう珍しくなってしまった、森に囲まれた地。

それも、壁の内側だけだけれど。

壁がなかった頃は、皆肩を寄せ合って、アラガミの恐怖に震えていた。

でも私は、周りにいる大人の方が怖くて、いつも泣いていたのを覚えてる。

「極東の奴らのせいで」、私が子守唄代わりにいつも聞いていた台詞だ。

怖くて、怖くて……だから、歌を唄った。

私の歌は——何かから、逃れるためにあったのだ。

今日、また新しく極東支部から、ゴツドイーターが派遣されるらしい。

アリサさんやソーマさん達は、一時避難で滞在していただけ。正式に、この街にも守護がおかれるようになった。その足がかりなのだとか。

幼馴染のサツキと、話のタネに、ということまで、様子を見に行くことにした。

正面入り口ゲートから真っ直ぐ先、人が集まる広場に居るのだとか。

あまり、街の空気が良くないのがわかる。

「あいつらのせいだ」

また、囁き声が聞こえた。

「人は愚かな生き物さ」そう言って、おじいちゃんが笑っていたのを思い出す。

物に心は左右され、受けた恩もすぐに忘れ、支援がなくなればそれを恨みに思う。

「この街にだって非はある」これもおじいちゃんが言っていたこと。

捨てられる理由がある。そう聞こえて、私はまた怖くなって……。

そんなおじいちゃんも、つい先日、死んでしまった。

アラガミに襲われて。

私はまた歌を唄った。

泣くことはなかった。

「うっ……!?!」

サツキの短い悲鳴に我に返ると、いつの間にか、人の輪がぼつかりと開いた場所に辿り着いていた。

ざわざわと、恐怖と不安がないまぜになったような、そんなざわめきが続いている。

その人の輪の中心に——何かが、いた。

少し斜めに傾いた、ピンク色のキグルミが——。

耳がくたびれて折れ、身体は元は鮮やかなピンク色だったんだろうけども、薄汚れて色が斑になっている。

目は虚ろで、どこを見ているのかもわからない。

だらりと両手は下がり、どこか疲れた様子にも見えた。

そんなキグルミが、高速で、左右に、残像を残しながら移動し続けている。

反復横とびをしているんだろうか？

それにしては、まったく足が動いた様子に見えない。

率直に言って、怖い。

「ひいこっち見たー！」

ぐりん、と首から上だけがこちらを向く。

「ちよつ、くんな！ こっちくんな！」

スイー、と先ほどの独特な移動方法で、滑るように近付いてくるキグルミ。

人間の出せる速度ではないし、そもそも人間はそんなふうには動けない。

私達がリアクションをする前に、がっしりと手を握られる。

——よろしくお願いします。

ファンシーな見た目にはそぐわない、落ち着いた、男の人の声。

キグルミの腕には、特徴的な、ゴッドイーターの腕輪が。

彼が、正式に配属されたゴッドイーターなんだ。

「たった一人かよ、ふざけやがって」吐き捨てるような誰かの声が聞こえた。

心がまた、ざわめいた。

「ちよつ、ちよつ、ちよーつと！ おさわりは許可をとつてからにしてくれませんかねえ？ ほら、離れて離れ……見た目キモッ！」

サツキ、だめだよそんなこと言っちゃ。

この人は私たちを守ってくれるために、やってきてくれた人なんだから。

ほら、しゅんとしちやった。

「いや、いくらゴッドイーターだからって、これ完璧に不審者でしょ」

——芸が、できます。怖くないです。

「芸って……どんな？ いや、やっぱりやらなくていいです」

——よ、よいこのみんな、みんな！ あっ、あっ、あっ、あつつまれえ〜！

「うわあ何も言っていないのに始め出した」

——ようし、みんな素直だ、素直が一番成長するぞう……そんな成長期のみんなでゴッドイーターのうたを歌おうかな！ いえーい！

「えらいドギツイのがきちやいましたね……」

——ゴッドイーターのーうたーみんなであうたおうー。
「うわ、子供たちが……だめだめ！ 変な人に近づいたらだめって教
わったでしょ！ こらガキんちよ共！ ダメだって……ああー抱き
ついちゃってるし、振り付けまで」

——YO！ YO！ シエケ！ YO！ シエケYO！
「情操教育に悪すぎるでしょうが！ いつもユノの歌を聴いてたから
耳が……この音痴！ やめなさい！ やめろ！ もう帰れ！」

——受け入れられようと頑張って歌までうたったのに、帰
れとか言われたでござる。ここ歌とか流行ってるって聞いて、超練習
してきたというのに……解せぬ。

サツキとキグルミの彼が言い合いを始める。

その横で私は。

「ちよつと、ユノ！ あなたも笑ってないで、この馬鹿ゴッドイーター
になんとか言ってやってくれませんかね！」

私は……私は。

すぐく、おかしくなつて、吹き出してしまっていた。

自分以外の歌を、久しぶりに聞いた気が、した。

歌をあんなに楽しく歌える人が、いたなんて。

私は、私の歌が慰みになればと思つて、歌っていた。

静かに聞き入ってくれる人がいたのは、素直に嬉しかった。

皆、落ち着いたような、安らかな顔となっていた。

でも……それだけ。

そこから先は、何もない。

気が付けば、私は彼の手を、こちらから取っていた。

顔を見せて欲しいと頼みながら。

——加賀美リョウタロウです。

キグルミの頭を外して、彼は答えた。

静かな声に似合う、穏やかな顔付きで。

「えっ……ちよつと……ユノ、あなたまさか……！」

子供たちが「ユノ顔赤い」「ほんとだまつかだ！」と笑っている。

私の歌では、子供たちに笑みを与えることは出来なかった。

加賀美リヨウタロウ——さん。

初めて会ったばかりの、極東からやってきたゴッドイーター。その人となりは、まだよくわからないけれど。子供たちの笑顔が、全ての答えに思えた。

□ ■ □

えいつえいつ。

えいえい、そやーっ。

「ユノ、あなた何してるんですか？」

振り付けを、覚えてるんです。

ワン、ツー、ワンツー、ごーなな。

ごっどいーたーのーうたー。

「趣味悪すぎでしょ……ほんと」

中々いい歌ですよ？

子供向けだから、大人には合わないかもしれないけれど。

「そういうことを言ってるんじゃないんですけどねえ……はあ」

ほら、サツキも一緒にやろ？

コンゴウのポーズ！

うほーい。

「嫁入り前の娘がやめなさい！」

じゃあ、誘うサリエルのポーズ？

「ユノが極東からきたゴッドイーターに毒された……ほんともう極東はろくでもないことばかりしてくれて！ まったく！」

サツキ、どこ行くの？

「あのゴッドイーターのところに文句言いに行つてやるんですよ！」

こんな夜遅くに？

あ……もう！

私も後を追いかける。

こうして塔を自由に出入りできるようになったのも、最近のことだ。

壁ができる前はそうじゃなかった。

三年前、父さん——葦原総統は、エイジス島から帰ってきて、変わってしまった。

私をこの塔に押し込めて、ずっと政務に取り掛かっていた。

フェンリルに恨みをぶつけるように。

私はこの塔から街を見下ろして、いつも鬱屈した思いを抱いていた。

自分一人だけ守られて、街を見下ろしている。

籠の鳥のように扱われ、お前は他の者と違うのだと言われているような気分だった。

こんな世の中になって、甘いことを言っているという自覚はある。でも、生きていくだけで、良いなんて。

安全な暮らしができるだけで幸せだなんて。

私にはどうしても思えなかった。

贅沢を言っているのだろうか。

甘やかされた女の意見なのだろうか。

私は……。

「ちよつと！ リヨウタロウさん！ あなたウチのユノに何を教えちゃっててくれるんですかね！」

——しーっ、静かに。やっと寝付いたところから。

静かに、と口元に指を立てるリヨウタロウさんは、キグルミを着ていなかった。

今日はキグルミを着ていないんですね、と言うと「それ以上、言わないでくれ」と深刻そうな顔をして俯いてしまった。

聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか。

きつと、私たちには言えない任務に関わるものなのだろう。

「ああ……子供たちですか」

サツキの声がリヨウタロウさんの手元を見て、小さくなる。

リヨウタロウさんは、眠る子供たちの中心で、すがりついて目を閉

じている女の子の頭を、ゆっくりと撫でていた。

優しく、優しく――。

「この前、アラガミの襲撃があつたんですよ。それでたくさんの人が死んだんです」

――この子たちは、それで？

「ええ、孤児になつたんです。私たちの祖父も……。フェンリルが神機兵を派遣してくれたら、極東支部のゴツドイーター達がもつと早くきてくれたら、ねえ？ どう思います？

この子たちのことを見て、かわいそうだつて、胸が痛みますか？ それはなぜ？ 自分達の罪だと、そう思っているからでは？」

静止の声を上げる前に、彼が指を口に当てた。

サツキの舌打ちだけが、夜の帳に響いた。

――なぜ、この子たちは、大人を頼らないんだろう。

リョウタロウさんが、女の子の髪を撫でながら、ぽつりと言った。

――たかだかここに来て数週間の俺のところには群がるのは、なぜだと思う？

「それは……」

――俺がゴツドイーターだから、守ってもらえると？ そうじゃない。子供は純粹だ。傷付いた子は、特に。

「この大人たちに、近付きたくないからだ」と、そう言いたいんですか？」

――どうかな。でもあなただって、この大人たちの一人だ。

サツキは何かあきらめるようにして大きく息を吐き出すと、パイプ椅子に力なく腰掛けた。

ぎしりと椅子の錆が軋む音がした。

その通りだ、と私も思った。

広場の一角に建てられたほつた小屋に、アラガミ襲撃によって家を失った人、家族を失った人達が身を寄せ合っている。

リョウタロウさんも、この小屋が並び立つ広場の隅に場所をとり、生活していた。

聞くところによれば、まともな食事も出されていないのだとか。
露骨な嫌がらせだと思う。

父さんに直談判をしに行っても、政治的なつきあいや取り決めで、
これは仕方のないことなのだと言われた。

「なんですこれ……ギョアア！」

サツキがテーブルの上においてあった箱を何気なしに開ける。

一気に顔が真っ青になり、箱を放り出した。

中からは、大きな何かの幼虫が、何匹もうぞうぞとはい出ていた。

——ああ、俺の明日の弁当が。

「はあ!? 弁当!? これが!？」

——うん。ほら、おいしい。

「ギョアアッ! 食べたあ！」

サツキ、うるさいよ。

もう。

「ぬぐぐ……いやでもこれ、あなた配給はどうなったんですか? あ
あ、ゴツドイーターだから足りませんね。そうですね、すみませんね
大した食事も用意できずに」

——はい、きゆう?

「正式に配備されたゴツドイーターなんだから、毎日あなただけに用
意された配給物資があるはずでしょう」

——えっ。

「んん? ちょっと、まさか……嘘でしょう? 今まで何を食べてた
んです?」

——なんかそこら辺に生えてる草の根っことか、虫とか。
「移動とか、神機の整備はどうしてるんですか?」

——移動は、普通に走ってるけど。神機は整備班がたまに
くるから、そこに預けてる。

「移動手段もなし、極東からの人員だけがサポートしているですって
……? こちらでの支援が打ち切られているということ……?」
まったく、どいつもこいつもー!」

ああ、まただ。

またこの感じだ。

嫌な感情が、胸の中に湧きあがってくる。

やはり、という思いが。

やっぱり、そうだったんだ。

「あいつの食事に、汚物を混ぜてやったぜ」なんて、嘘だと思っていた。でも本当だったんだ。

今じゃ、食べ物を出しもしないなんて。

——— どうした、ユノちゃ……さん。

リヨウタロウさんは、どうしてゴツドイーターになったんですか？色んなひとからいじわるされて、非難されて……全部、あなたのことじゃないじゃないですか。

命をかけて戦って、こんな仕打ちをうけて……それでも、なぜ。

——— あー……俺が、ゴツドイーターになったのは、正直なりゆきだよ。ある日突然、紙っぺら1枚が届くんだ。

おめでどう、君はゴツドイーターに選ばれましたって。

覚えてるよ。怖くて怖くて、震えながら寝た。これは夢だ、悪い夢なんだって。引き摺られて連れていかれるまで、駄々を捏ねて、自分の家に閉じ籠ってた。

だって、無理だよ。

それまで普通に暮らしてたのに、ある日突然、君は選ばれたんだけ武器を持たされて化け物と戦わされるんだ。人喰いの化け物と殺し合いをしらって。

無理だよ、そんなの。明日もまた、今日と同じ日が続くと思ってた。

その日暮らして、適当に職を見つけてさ……いい加減、無職も恥かしかったし。

そういう明日がくるものとはかり思ってた。

そんな、なんでもない明日がさ……。

「無職、だったんですか？」

——— うん。一昔前の職が溢れてた時代はフリーターなんて呼ばれてたらしいけど、今はそんなものなんかないでしょ。俺のいた所は腹をすかせてどうしようもない奴ばかりいたから、汚い仕事を

持ち込まれても、喜んで飛びついたさ。俺もね。

「汚い仕事、というと、何をしていたんです？」

——物資の横流しの手伝いとかね。思い出したよ。俺はここに何度も来たことがある。子供の頃から、運び屋の手伝いとかもしてたんだ。運んでたのは、壁だった。

アラガミ防壁なんてちよろまかしてたんだ、護衛なんて付けられるわけがない。金を握らされて使い捨てにされたんだよ、俺達は。ここ
の総統さんにね。

「三年前に行われた対アラガミ防壁の建設には、あなたも関わっていませんか……かなり無茶なことをしたと聞いてはいましたが」

——恨んじやいないよ。二束三文だったけど、それで喜び勇んで手を上げたような奴らさ。それでも中にはそこそこ成功する奴もいる。

そいつらと一緒に、運輸業で何か一発立ち上げようって、話してたんだ。その矢先だよ、ゴッドイーターなんてのにさせられたのは。

ゴッドイーターになったことに後悔してるとか、そういうのはなかったよ。そもそも拒否権なんてないし。嫌だなんて思っても、さ。アリサ達もここに来たんだって？　じゃあ聞いたんじやないかな。皆を守るために私は戦う、とか。

「あなたは違うんですか？　あなたの戦う理由は」

——最初は、死にたくないから戦ってるだけだった。今は……なんだろう、わかんなくなっちゃよ。

「はっ、お気楽なことですね。武器使えるっただけのフェンリルの駒に成り下がって、恥かしくないんです？」

——うん。それも、何も考えられなくなった。ただこれだけは言えるよ。顔も知らない誰かを守るためだとか、使命感でやってるんじゃない。そういうの求められても、その、困る。幻滅させて悪いけれど。

悪いついでに、あんまりそういうの、他のゴッドイーターに言わないでやってほしい。ゴッドイーターはさ、ほら、どんどんその、低年齢化していつてるから。

「どういう意味です？ お仲間を庇いたいんですか？」

——ゴッドイーターは死亡率が高い。だから、次々に補填してかなきゃいけない。新しく連れてこられるのは、年端もいかない、子供って言えるくらいの奴らだ。

最近そんなのばかりだ。極東にやってくる新入りは若いんだよ。すごく。

言えるか？ 役目だから、仕事だから、食わせてもらってるんだから、命かけて戦えって。

私たちのために死ぬのが当然ですよ、つてき。

子供相手に、言えるか？

「それは……」

——たまらなく嫌になるよ。自分よりもずっと年下のゴッドイーターが、皆を守りたいんです、なんて張り切ってる姿をみるのは。

笑って犠牲になりに行くんだ。持たざる人々の犠牲にさ……。自分の命、未来、全部差し出して、戦えと言われるんだ。誰かを守るためにつて。

武器を取るのとは当たり前だ。人を守る仕事は尊いものだ。だから皆、納得したような顔して、死んでいくんだ。

さつさとアラガミを殺せよ役立たず、なんて言われて。

頼むよ。お願いだから。俺には唾を吐きかけても、石を投げつけても、糞入りの飯を食わせてもいいからさ、これからここに来るだろう、幼いゴッドイーター達には、お願いだからそういうの、全部遠ざけてやってくれ。

人を守るものにさせられた子供たちには……人の悪意に触れるには、まだ早い。

あなたは報道関係の仕事をしていたんだろ？ 言葉でわかるよ。

そうさ、あなたの言葉が、みんなの言葉になるんだ。

それを忘れないでやってほしい。

「そんなの……あなたに言われずとも、わかっていますよー」

サツキが声を荒げ、椅子を跳ね飛ばすようにして飛び出していく。

ごめんなさい。頭を下げた。

サツキも、口が悪いだけで、根が悪い人じゃないの。でも、おじいちゃんが死んで……それで。

——大丈夫、わかっているから。生きるのって、つらいなあ。儂げに笑うリヨウタロウさんの、笑みが、胸を刺す。

私は……私は……。

——ああ、しまったな。うるさくしすぎた。

子供たちがむずがって、目を擦り始めた。

リヨウタロウさんも、どうしたらいいか慌てている。

——この子たち、夜うなされて、悲鳴を上げて飛び起きて暴れるんだ。手が付けられないって、預かり所も放り出したらしい。

私は……。

考えるよりも早く、口が開いていた。

——これは、子守歌……？

私には、これくらいしかできないけれど。

それでも、少しでも、慰めになるのなら。

——みんな穏やかな顔してる。ありがとう、君のおかげだ。

ありがとう、だなんて。

やめてください。

私なんて。

——それでも言うさ。ありがとう。

みんな、勘違いしてるんです。

私のことを、悲しみを救ってくれる聖女だなんて言う人も……。みんなが言う程、私、良い子じゃないんです。

私だって、汚いことを考えるし、嫌なことだって考えもします。

その、い、いやらしいことだって……。

色んなことを考える、普通の女の子なんです。

みんな、勘違いしてるんですよ……。

——俺もそうさ。そこら辺にいる、普通の男さ。八つ当たりしにきた女を、冷たくあしらうくらいなの。

あつ……サツキの、その。

——サツキさんには、ごめんって伝えておいて。あーあ、やっちゃったなあ……あの人がすごい美人なのになあ……嫌われちゃったかあ……。

きっと大丈夫ですよ。

サツキはああやって、叱ってくれる人が好きですから。

おじいちゃんくらいしか、サツキのこと、叱ってくれる人はいませんでしたから……。

——そつか。よっぽどいいおじいさんだったんだ。

ええ、とつても。

私たち、似てますよね。

私は塔に。

あなたはゴッドイーターという枷に囚われていて。

——泣きたくても、泣けない。

……はい。

——じゃあ、さ。誰かのために泣いてやればいいんじゃないかな。

誰かの、ために……？

——そう。自分のために泣けないなら、泣けないやつのに、泣いてやればいい。受け売りだけどね。イサムとジョニーの。

もうっ。

途中まですごく格好良かったのに、最後で台無しですよ。

イサムさんと、ジョニーさんも、ゴッドイーターのお友達ですか？

——いや、あいつらはもつと凄い奴らさ。世界を救った二人だ。漢の中の漢だよ。

すごいなあ……そんなふうに見える相手がいるなんて。

男の子同士の友情って、なんだか格好良いですね。

誰かの代わりに涙を流す。

そんなふうには、うん、できたらいいなあ。

——できるさ、きつと。君は最初の一步を踏み出す勇気が

その、私のこと、ユノって呼んでください。

——了解、ユノ。俺のことも、好きに呼んでくれ。それじゃ行ってくる。

はい……はい！

いつてらっしやい、リヨウ君！

私の声、届いたかな？

残像だけを残し、去っていくリヨウ君。

どうか、無事に帰ってきて。

「おにいちゃん、ゴッドイーターをしにいったの？」

不安気にこちらを見る女の子。

はっと気付く。

リヨウ君は、ゴッドイーターを“しにいった”のだ。

それは簡単なことで。

でも私にとっては大切なこと。

大丈夫よ、と言って、抱き締める。

大丈夫。大丈夫よ。

あの人がいる限り……ゴッドイーターがいる限り。

世界はきつと綺麗なままだから。

雨の臭いが、すぐそこまで近付いてきていた——。

□
■
□

自分のために泣けないなら、泣けないやつ代わりに、泣いてやればいい。

なんつってなーんつって！

うへへうへうへ！ 言っちゃった！ 言っちゃったぜ！

一度は言ってみたいカツコイイ台詞！

ああ……超気持ちいい……！

ありがとうバガラー！

主人公イサムに、そのライバルジヨニー！

観ていてよかったバガラリー！

サンキューコウタ！

よーし！

待ってろアラガミ！

今すぐに行つてやるからな！

徒歩で！！

徒歩で……。

ぐっどいーたー：7 噛

おおむね期待通りの成果と言えよう。

榊は薄暗い研究室の中、無表情に細い目を尖らせた。

吐息は冷たく、凍えるようだ。心が……魂が芯から凍り付いているからだ。

悪鬼の所業である。

己を省みて、榊は自身をそう評する。そして、何を今更、と思うのだ。

『P-73 偏食因子』——『マーナガラム計画』。

かの偏食因子をこの世に生み出したのは、この自分ではないか。

胎児の段階での偏食因子組み込み。その成功例は、ソーマ・シツクザール、ただ一例のみ。

この言い回しはつまり——その後も実験が行われた、ということを示している。

ヨハネス・シツクザールの強行により、その妻と胎児が実験体として捧げられた。それが全ての実験の始まりだった。

ゴッドイーターの、始まりの。

あの時、ヨハネスに強く反対しなかったのはなぜだろうか。姿をくらませるだけで、あの若き夫婦を止めようとはしなかったのは、なぜだろうか。

開発者としての立場から制止させることは十分にできたはずなのに。現場に現れもせず放置したのは、なぜか。

免罪符のように、ヨハネスに安産のお守り……後にゴッドイーター達に投与されるP-53 偏食因子の前身を渡したのは、なぜか。

答えはわかっていた。

好奇心、である。

あの時、心のどこかに、自分が作り出したこの因子を人間に投与したらどうなるか……と、ほんの少しでも思わなかっただろうか。

そして、失敗するとも、予想できていなかっただろうか。

二つの偏食因子を同時にテストできると——。

「業……だね」

人の原罪、業は他の命を奪い喰うことであるという。

全ては喰うこと……飢えを満たすことに通じる。

すなわち、科学者は己の知識欲という飢えを満たすために、その全ての行動理念が傾けられるのだ。

意識的に、無意識的に。

己の行いは、しかし自覚できぬものが根底にあるのだろう。それに気付くのが遅すぎた。

P-53 偏食因子を完成させる折り、参考としたデータは、フェンリル本社から送られてきたもの。

ケース・アイーシャに続く、P-73 偏食因子の投与にて肉塊となつて死亡した、数多の母子のデータだった。

それらデータを分析していくにつれ罪の意識に苛まれ、いつしか顔には笑みしか浮かばないようになった。

これは人類に必要な行いであると、そう自分自身に言い聞かせながら。

「榊博士！ これはどういうことですか！」

自問を繰り返す榊の下に、勢いよく研究室のドアを開け飛び込んでくる少女が。

橘・リツカ。

極東支部神機整備班に所属する整備士の、中枢を担う少女だ。

未だ年若いというのに、その腕は誰もが一目置くものである。

榊もまた、研究者ではなく技術者として、脱帽せざるを得ない技術が彼女の腕に秘められている。

「ああリツカ君。えっと、このまえの資材のことだったかな？ いや

あ、ごめんごめん！ 実は発注を忘れてしまつて……」

「それじゃありません！」

頬を高潮させ、書類を机へと叩き付けるリツカ。

珍しいことだ、と榊は驚きを覚えた。

神機の整備には細心の注意と集中力が必要だ。神機整備班の面々は、そうした作業を繰り返す内、非常に落ち着いた人格を有する者達

ばかりとなったのだ。リツカもその一人である。

だが同時に、彼のことだろうな、と予想もつく。

心が鉄と油で出来ているような少女を激昂させる事案のほとんどが、彼についてのことだからだ。

「これ……リヨウのバイタル、どういうことですか！　こんな絶対安静じゃない！　こんな状態でネモス・ディアナに向かわせたの!？」
「ああ、なんだそのことか」

案の定、である。

「なんだじゃありませんよ！　うちの整備班がネモス・ディアナの防壁調査に行った報告、受けてないんですか？　あそこの住人は今、集団ヒステリーを起こしてるんですよ!？」

「リツカ君。君も落ち着いて。今、説明するから」

「……納得できる説明を、お願いします」

「そうだね……さて、どこから話そうか」

「初めからです」

「構わないが、君にそれを聞く覚悟はあるのかね？」

これもまた、業である。

拳をぎゅつと握って、何かに耐えるような、そんな顔をこの少女にさせてしまうとは。

遅かれ早かれ周囲には漏れることであるとは思っていた。

整備班にはゴッドイーターのバイタル情報は隠せない。

「リヨウタロウ君は欧州からこちら、極東開発の任という建前で呼び戻された。そこまではいいかい？」

ならば、呼び戻すからには納得できる理由が必要だった。本部の直轄領……欧州で重要なポジションに就いていたゴッドイーターを動かすに足る理由がね」

「ネモス・ディアナに送った理由……赤い雨ですなね？」

「鋭いね。ネモス・ディアナは、ここ極東支部からそう遠く離れてはいない場所にある。極東一帯は、かつて関東地方と呼ばれていた。

南と東が海に面し、北と西が山岳地帯で囲まれている……南からの湿った風が山際に当って、雨雲が溜まり、降雨量がとても多い地域と

して知られていたんだ。

元々ネモス・ディアナはその雨が降りやすい地形を利用して、緑化を勧めていた居住地だったんだよ。多雨多湿の地に根付く木々は、保水量が多くてとても強いんだ。

深く広く根を張った木々は、複雑に絡み合って地盤をしつかりと掴み、固める。ネモス・ディアナは雨と木によって守られた土地なんだ」「その雨が今は、赤い雨に変わった……」

「そう。極東地域一帯で頻発している異常気象……赤乱雲から降る、赤い雨。その雨に濡れた箇所には、黒い蜘蛛のような痣が浮かび、激痛を発し……やがて死に至る、不治の病だ。

致死率100%の雨。当然、極東の多雨地域には、より多く降り注ぐことになる。一つの理由がこれさ。極東から発し、やがて全世界に広がるであろうと予測できる赤い雨の調査。

“終末捕食”の行われた極東が発生源なんだ。本部も無視はできないだろう。何らかの関連性を連想しないかい？ 私はそうだよ。そう報告もした。

これが終末捕食に繋がる現象なのだとしたら、極東の最高戦力を投入してもおかしくはないだろう？ 同時に発生した感応種への対応もある。その対応マニュアルの作成も必要だからね」

「赤い雨と、感応種への同時対応は、リョウくらいしか出来ませんからね」

「悪いことに、どうも対アラガミ防壁の偏食因子の配列が、シユウ感応種が好むものであるみたいだね。よくあることだよ。オラクル細胞の嗜好を分析し、アラガミには捕喰され辛い物質で構築されているはずの壁が、新種にとっては大好物！ なんてことはね」

「たまたまシユウ感応種にとっては、ネモス・ディアナの壁が好物だったということですか……」

「早急にシユウ感応種のオラクル細胞を分析し、構成物質を更新、コンバートしなければならぬ。それはゴッドイーターにしか出来ないが、現状、ソーマ君しか感応種には対処できていない。神機が機能停止してしまうんだから、どうにもならないんだ。」

だが、新型使いの中でも最上位の感応能力を持つリヨウタロウ君ならば、どうだろうか。ソーマ君は特殊ケースでしかないが、リヨウタロウ君の戦闘法を解析し、一般化させていけば、確実に対応マニュアルが作れるんだ。

リヨウタロウ君をネモス・ディアナに派遣するのは、必要不可欠であることだったんだ」

なるほど、とリツカは頷く。

苦しい言い訳だが、榊がそうであると断言すれば、通らなくはない。

ゴッドイーターの産みの親とも言うべき、榊であるならば。

リツカは恐らくは、そう思っているのだろう。

目的は話せども、その手段は語られていないことに気付かぬまま。

これは決して明かせぬと、榊は胸の奥にしまいこむことにした。

まさかこの少女に、赤い雨のデータを採るために、リヨウタロウに雨を浴びせようなどとは、口が裂けても言えないことだった。

そしてネモス・ディアナに派遣した理由についても、半分ほどしか語ってはいない。

感応種に狙われやすい防壁となってしまうているのだから、そこに滞在していれば、向こうからやってくる寸法だ。

戦闘データの採集にはもってこいだが、それだけが理由というわけではない。

「納得は……できません。でも、せめて生活環境の改善は必要だと思います」

「集団ヒステリー……当然だね。新種のアラガミと赤い雨によって、アラガミ防壁に囲まれた居住区は楽園などではなくなった。アラガミから身を守るための外壁は、絶望の『るつぼ』と化した。女神の森【ネモス・ディアナ】は今や、ディストピアとなつたんだ」

「死の恐怖による過負荷、ストレスが、閉鎖空間における負の連鎖を引き起こす。典型的な集団ヒステリーの症状だと思えます。とにかく外から来たものを攻撃しなければ、精神の安定をはかれない。それが解っていないながら、傷付いて帰ってきた彼を、なぜ……」

「さらなるストレスをかけ、追い詰めるため……と言ったら、君は納得

するかい？」

「——ッ!!」

「冗談だよ！ 冗談だから、そのスパナを下ろしてくれないか。ゆっくり、そう、ゆっくりと」

「口が過ぎたと反省する。」

笑えないジョークを言うなどヨハネスから言われ続けていたのを思い出した。

相手が純粹であればあるほど、受け入れられないものなのだろう。ブラックジョークという奴は。

「でもね、君は怒るかもしれないけれど、半分ほど本気なんだ」

「理由を！ お願ひします……!」

「君は新型使い達の間精神……メンタル面について、どう思う？」

「普通のゴツドイーターと、私たちとそう変わらないと思いますけれど」

「そうだね。その働きは、我々と同じ、変わらないだろう。では伸び率はどうか。精神の成熟度合い、成長率は」

「成長率……?」

「アリサ君を例にあげよう。彼女はアナグラにやってきた当初は、言っではなんだが、その精神性は幼稚なものだった。他者を見下し、決め付け、遠ざけて……それは洗脳によって思考にロックがかかっていたからだ。」

だがそれが解かれてからはどうだろう。極めて短期間に、彼女は驚く程の内面的成長を遂げた。たくさんの事件が起きてそれどころではなくなくなってしまったが、冷静に考えればありえないと思わないかい？」

「でも、それじゃソーマ君だって変わりましたよ?」

「ソーマ君は、あれは変わったというよりも、自分を出せるようになったんだろうね。そんなに劇的に、かつ急激に変わったわけじゃない。成長という観点から見れば、普通の範囲内だ。」

だがアリサ君は違う。たった数週間で、まるで別人のようになってしまった。リョウタロウ君とすごした数週間で、何年も年を重ねたよ

うな、精神性の成熟をみせた。人は、あんなに劇的に変わるものだろうか？」

「どういうことなんですか？」

「精神の変容……進化と言ってもいい。新型使いは、心が『柔らかい存在なんだ』

「リヨウも、アリサちゃんと同じように、心が変容してるってこと……？」

「リョウタロウ君はゴッドイーターとして経験を重ねる毎に、異様な心的タフネスを得た。ゴッドイーターに定期的に行われるストレスチェックテストでね、彼は毎回、異常値を示しているんだ」

「ベテランになって度胸がついたとか、そういうことじゃないんですか？」

「それでも死と常に向き合っているのがゴッドイーターだ。恐怖を感じるのは当たり前さ。それはテストにちゃんと反映されるものだよ。リョウタロウ君だって、戦うことへの恐怖は感じているんだ……だが」

「榊博士？ でも、どうしたんです？」

「果たして、我々の知る彼は、『本当の彼』なのだろうか」

薄く笑っている榊。

リツカの背筋が震える。

いつも通りの胡散臭い笑みに固定された表情が、不吉を運ぶ死神の笑みのように見えた。

「寡黙で、柔らかな笑みを絶やさず、どんな悲劇にみまわれても決して折れず、悲しみを背負って戦う戦士……それが我々の知る加賀美リョウタロウだ。極東の最高戦力、ゴッドイーターの鏡のような『人物像』。出来すぎだとは思わないかい？」

「博士は、リヨウが本心を見せてないって、そう思ってるんですか？」
「アリサ君や、最近次々と配備されるようになった他の新型使いの皆には、感応現象が発生した際には報告をするように命じている。もちろんリョウタロウ君にもだ。各々が提出した感応現象のデータを比較すると、面白いことが解る。」

他の新型使いの間ではかなりプライベートに入り込んだ意識のやりとりが行われているのに比べ、リョウタロウ君に対しては、極めて浅い層でのやりとりしか行われることがない。

今、どんな感情を抱いているのか。彼への感応現象で垣間見えるのは、それくらいらしい」

「でも、それはたぶん、リョウの適合率が高いからじゃ……」

「新型使い達の感応現象が、言語を介さないイメージによる新たな相互理解を得た次世代の新人類……ニュータイプのコミュニケーションであるとするならば、あまりにも一方的すぎるとは思わないかい？

彼の感応性能が上位にあるのなら、一方的に情報を吸い上げていることになる。情報の出入をコントロール出来ているのだとしたら、意図的に本心を明かさないように情報の出力を絞っているのでは、と」

「リョウは、リョウです……」

「その胸の内を表に出さないが故に、強く優しい人間であるにとられることを忘れてはいけない。たとえ神の視点であったとしても、彼の心の内を読み解くような存在がいたとしても、表に出ているものは、眼に見えるものは、彼の本心であると言えるのだろうか。

誰の心をも開き絆を結ぶ彼が、その実、誰とも通じ合うことはない。誰にも解らないさ……誰にもね。君の知る加賀美リョウタロウは、果たして……」

「リョウは、リョウです！ 私の知ってるリョウは、リョウだから……」

「……すまなかった、いじわるを言うつもりはなかったんだ。泣かないでくれ」

鼻をすすり上げる音に、榊は慌てて眼鏡を押し上げた。

どこか超然としていたリツカには、思わぬ激情があった。

それも彼の優しさが引き出したものだ。

そう、信じた。

だが、あらゆる可能性を予測しておかねばならないのが、支部長という立場の人間であり、そして研究者というものだ。

楔は打ち込まれた。

「心理テストの結果ではね、特に問題はなかったんだよ。精神機能は正常と出た……戦闘中をのぞいてね。戦闘中、彼はどこか乖離しているような……世界を見下ろしているような視点を得たらしい。」

だから「良く解る」のだと。ゴツドイーターによくある、戦闘時ストレスの防衛反応かとも思われたが、そうじゃない。そうなれば日常生活の方にも影響が出て然り。心が耐えられるわけがないんだ。

だがテストではその他すべての数値は正常。異常値だよ。正常だからこそね。彼は人の領域を超えつつあるのかもしれない……」

「それは、確かにリヨウの戦績は現実離れしているけど、でもそれでリヨウの心までおかしいだなんて、そんなこと……!」

「いや、すまない。そういうつもりじゃなかったんだ。重要なのは、テストの結果が示していることは、何か彼が大きなストレスを感じるたびに、それを乗り越えるように新たな力を身に付けてきた、ということだ。」

連撃捕喰、空中変型、バレットエディット、装備からフィードバックされる特殊効果、……様々な力を」

「だからネモス・ディアナで迫害を受けさせることで、新しい力に目覚めさせよう? 何を考えてるんですか! そんなこと!」

「必要だからだよ。彼には力が……戦うための力が必要なんだ。フェンリル本社の陰謀と戦うための、力がね」

「フェンリル本社の……陰謀……!?!」

リツカが緊張で喉を鳴らした音が聞こえる。

「さあ、リツカ君。ここから先を聞く覚悟はあるかい?」

一呼吸もおかずに、リツカは答えた。

イエスであると。

「彼が……リヨウタロウ君が欧州で何をして、何を見てきたか。どうしてツバキ君やリンドウ君を置いて、一人で帰ってきたのか、君には想像できるかい?」

「それは、榊博士の命令じゃないんですか? サテライト居住区の建築ノウハウを取り入れるために、前例であるネモス・ディアナを保護するため。そして赤い雨のデータを採取するため……」

「そう。だがなぜリンドウ君やツバキ君は欧州に滞在したままなのか。引き上げさせるなら全員一緒のはずでしょう?」

「それは……ええと、なぜなんですか?」

「それには、欧州で彼が経験したことを語らなければならぬ」

その答えに榊は満足そうに頷いた。

リツカの想像が及ばないことに、彼女の純粋さを見た気分だった。

それでいい。彼女は、彼女達はそれでいいのだ。

榊は両手を机の上に組むと、静かにリツカを見据えた。

細く鋭い両目から除く眼光が、卓上に飾られた日本刀のように、リツカを貫く。

「欧州で彼がしていたことは、再殺部隊の編成及び、先頭に立つてその任務を遂行することだった」

「再殺、部隊……」

「アラガミとの戦闘中に腕輪が破損し、アラガミ化してしまったゴツドイーターへの“処置”……それは、本来であればそのゴツドイーターが所属していた部隊の、部隊長が行うものだ。

だが全てがその例に収まるわけがない。あるいは情が深すぎて、あるいは状況が許さずに、あるいは部隊長含め全員がアラガミ化したら、そんな何かの要因があつて、処置を行うことが困難となった時……再殺部隊が動く」

「リョウが、再殺部隊の隊長をしていたつていうんですか? 彼が、そんな……」

「始めは本当にただの遠征だった。報告書を見ても、お客様対応で歓迎されていたらしい。だがある日、その場に出くわしてしまった。決定的なその場にね……。要請を受け救援に行った部隊が、全員半アラガミ化してしまっていたらしい。」

ツバキ君は司令塔としてその場におらず、そしてリンドウ君は対応が遅れてしまった。無理もない。自分自身が“そう”だったからだ。偶然、リョウタロウ君に助けられただけだと、そう思っているはずだ。

助けてくれ、死にたくない。そう命乞いされたら、いくらリンドウ君が優れた指揮官であつたとしても動けないだろう。一瞬判断が

鈍ったんだろうね。自分がそうだったのだから、リヨウタロウ君なら彼らを救えるかも……そうも思ったかもしれない」

「リヨウは、どうなったんですか？ 彼はいつたい、どんな決断を……」

「ツバキ君からの秘匿通信に、全てが書かれていたよ。彼に対して何もしてやる事が出来なかったと、悔恨と自責の念に塗れたね……」

欧州は、はつきりと言ってアラガミ事情は極東よりもぬるい場所だよ。だから年少のゴッドイーターの訓練が多く、場所で行われている。そこから各支部に新任が派遣されていく仕組みだね。

遠征では最初は、そんな彼らの教導を行っていたそうだ。リヨウタロウ君はそれはもう慕われていたそうだよ。まるで本当の兄弟のよう」

「リヨウらしいや……」

先の間答から引き摺っているらしい。

リヨウタロウをリヨウタロウであるとする言葉が漏れた。

「非公式とされたがね。欧州では強力なアラガミの出現頻度は低く、また同じ姿のアラガミであつても極東のそれよりもずっと非力だ。そんなアラガミを相手する内に、新任のゴッドイーター達は慢心を抱くようになる。」

これはどれだけ口で注意されても、訓練を受けても、どうにかなるものじゃない。人の心の隙さ。年少組もその例に漏れることはなかったらしい。そして、悲劇は起きた。

引き際を誤り、全員が腕輪を破損させられた。腕輪の構成素材を好んで狙う偏食傾向を持ったアラガミがいたらしい……手遅れだったそうだ。そして、リヨウタロウ君は神機を手にした。

ブラスト銃身の特性を生かした旧型神機でも使える新機能、オラクルリザーブの概念は、そんな中で彼が編み出したらしい。追い詰められ、新たな力に目覚めたんだ」

「欧州からオラクルリザーブの新技术が送られてきたけれど、リヨウが作り出したなんて……でも、じゃありヨウは！」

「奇跡は2度は起きなかった。そういうことだろう」

欧州でリヨウタロウは地獄を見た。
それを榊は知っている。

説明を省いたが、本当はもつとずっと後ろ暗い事態に陥っていたらしい。

フェンリル本社による隠蔽、*「ゴッドイーターチルドレン」*への人体実験、リヨウタロウ自身の判断ミス……挙げればキリが無い。

彼自身の口からも聞いた。

リヨウタロウは再殺の最中、アラガミ化したゴッドイーターのうち、一人を逃がしてしまったという。

単純なミスであったかもしれないし、その一人が、リヨウタロウが最も心を交わした教え子であったからかもしれない。

リヨウタロウ自身にもわからないことだそうだ。

それについて榊は責めることはなかった。人の心は、行いは、単純なものではないのだから。

その後は、まさに悲劇の連鎖だった。

逃げた教え子が自我を失い、近隣の居住区を襲い始め、そしてリヨウタロウが大事にしていた少女を食い殺した。

アラガミの腹の中から手紙が出て来た。リヨウタロウはそう語った。そのアラガミが元は何であったかを言わずに。

大切な人が、大切な人を殺してしまった。

それも、自分のミスで。

やり切れなかっただろう。珍しく、榊の前で愚痴を零すくらいには。

そして、理解してもいたはずだ。

それがフェンリル本社によって仕組まれたものである可能性が高いということ。

かつて本社がソーマの*「二人目」*を作り出そうとしたように、リンドウの*「サブ」*を作り出そうとしたのだ。それをリヨウタロウは察知していた。リンドウもまた。だからリンドウは動けなかった。代わりに、リヨウタロウが動くしかなかった。

その地域に滞在していたゴッドイーターが年少組みばかりであつ

たことも災いした。

リヨウタロウは経験あるゴツドイーターとして、リンドウを押し退け、自分が臨時的に再殺部隊の任に就いたのだ。

初めからおかしな人事でもあった。

リンドウはソーマに次ぐ特殊な存在となった。それを欧州へ寄越せというのだ。警戒して当然である。

リヨウタロウの再殺部隊就任も、現場判断による臨時的人事であるとされた、それもいやらしい謀だ。

つまりこの流れは、初めから仕組まれていたということだ。

「リヨウタロウ君はその部隊員を全員殺処分し、そしてフェンリル本社に完全にマークされた」

「じゃあ、リヨウだけこっちに戻ってきたのは……」

「私が強引にねじ込んだのさ。欧州ではリンドウ君が変わり身に……本来は彼が本命だったのだろうけれど。そしてツバキ君は事務方で現地で情報操作をし、その活動を支援し続けている。」

リヨウタロウ君の足跡を消そうともしているらしいが、かばい切ることではできなかったようだ。欧州で彼の立てた功績が大きすぎた。正規のゴツドイーター同士の戦闘経験まで、彼は積んでしまったんだ。『アーサソール』、覚えているかい？」

「ガーランド・シツクザール……前支部長の連れて来た部隊でしたよね」

ガーランド・シツクザール。

ヨハネスの弟であり、ソーマの叔父である。

今でこそ前支部長といえばヨハネスを指すことがほとんどだが、本来はガーランドがそう呼ばれるべきである。

「いなかったこと」にされた、前支部長だ。

ガーランドが起こした事件については、ここでは語るのをよそう。重要なのは、彼がその折りに引き連れてきた本部付きの部隊――

――『アーサソール』である。

その全てが新型使いで構成されており、強力な感応波を用いてアラガミを支配下に置く特殊能力を持った部隊だった。

「確か、感応波によってアラガミを支配して兵器化しようとした……アラガミに対する感応、能力？ 感応種に似てる……？」

「気付いたようだね、リツカ君」

アーサソールらは『新世界統一計画』……その中枢に、最も強く優れたゴッドイーターであるリョウタロウを据えようとした事件を引き起こしたが、フエンリル本社からはガーランドによるテロリズムであるとして、無理矢理に事態を収束されたのは記憶に新しい。

似ている、とは思わないだろうか。

最近になって頻出する、感応種の持つ能力に。

リツカは気付いたようだ。顔面蒼白にして、喘ぐようにして口を開け閉めしている。

そう、本部直属の部隊であったアーサソールと、感応種は、非常に似た能力を有しているのだ。

「リョウタロウ君率いる再殺部隊も激化する戦いの中、一人減り、二人減り……皮肉なのが、最も多かった死因がアラガミ化であったことだ。その全てにリョウタロウ君は処置を施した。映像記録があるよ。観て見るかい？ 後ろから引きずり倒して、首を掻き切る……」

「やめてください……！ もうやめてー！」

「そして、生き残った再殺部隊とアーサソールが衝突した。何があつてそうだったかは、情報が錯綜していて定かではないが……そこは重要ではない。どうせでつち上げの理由しか出てこないだろう。」

「ゴッドイーターによる待遇改善を求めたクーデター」のニュース……最近多くなつたね。リョウタロウ君の巻き込まれた事件もまた、クーデターとして処理された。

ゴッドイーターによるクーデターなんて馬鹿げているね。彼らは首輪をはめられてるんだ。因子が尽きれば、人として死ぬしかない。

当然、クーデターは鎮圧するものさ……その中でゴッドイーターの死者が出て、おかしくはない。

情報操作だよ。ヨハネスが事故死したとされたのと同じようにね。

その中で起きた真実は、伏せられてしまった。いったい、何が起き

たか。

アラガミ化していない正規のゴッドイーター同士が、十全な機能を有する神機を振るい合い、殺し合い……生き残ったのはリヨウタロウ君だった」

「リヨウが、人を……！」

「アーサソールの目的は果たされた」

アーサソールは、かつて極東支部にて活動していた頃があった。

まだその部隊員が三人しかいなかった頃。リンドウが現役で隊長をしていた時代、まだアーサソールが正常に対接触禁忌種専門部隊として稼働していた頃の話だ。

リヨウタロウは、その部隊員と面識があった。接触禁忌種の討伐支援も行っていたというのだから、当時からリヨウタロウの戦闘力は際立っていたことが伺える。

『ギース』、そして『マルグリット』……彼らもまた、フェンリル本社の陰謀の犠牲者だ。

リヨウタロウが巻き込まれつつある――。

「アーサソールは本来、オラクル細胞を用いた技術による、人間の精神面への干渉技術を確立するためのモルモット部隊だった。同じく人間の精神に干渉する、強い捕喰場を持った接触禁忌種を専門に討伐することでデータを収集していたんだ。

その目的は、ゴッドイーターを中枢に他の存在を支配する『王』を産み出すこと……人間の進化にあると言い換えてもいい」

「人の、進化……」

「彼にもたせたキグルミのジャミング機能が上手く作用したようだね。本社には未だ漏れていないことだが、リヨウタロウ君はその時に捕喰したはずだ……神機を」

「神機による、神機の捕喰?! そんな、まさか!」

「『スサノオ』という第一種接触禁忌種……神機使い殺し【ゴッドイーターキラー】というアラガミがいる。神機を好んで捕喰する偏食傾向を持つアラガミだ。なら神機だって、神機を捕喰できるはずだ」
「でも、偏食場が干渉しあって『共食い』は出来ないはずじゃ……!」

「それは神機を理解していなければ出ない言葉だね。流石だよ、リツカ君。無意識に神機はアラガミと近い生息を持つと確信しているんだ……だが別の側面を忘れてはならない。アラガミは進化するということを」

「リヨウの神機も、進化したというんですか？ 新型のオラクル細胞は、所有者の脳に入り込んで、一部の神経細胞と結合して共存しているから……リヨウ自身もそうだった、ってことですか？」

「さて……心が脳の作用だというのなら、神機が『混じった』脳は果たして人のそれと同じであると言えるだろうか。その心は……」

新型機のオラクル細胞は、それを持つ者の脳神経に入り込み、神経細胞と結合し共存していることが判明している。

つまり、新型使いにも偏食場があり、お互いの偏食場が干渉し脳波が繋がってしまうことが感応現象の正体であるという。

本社の極秘データベースにある情報であるが、リツカは独力でその答えにたどり着いたのであろう。

人間の脳内で共存する存在。もはやそれを神機と称していいものかどうか、榊には解らなかった。

通常の新機用であるならば、問題のないレベルなのかもしれない。

だが、リヨウタロウ並みの適合率であった者にとっては、その限りではないのではないか。

人と神機の相互関係は、人が基点である。例えば、リヨウタロウのような特別な脳によって『喚起』されたのならば、他の神機もまた進化を促され、相互進化の渦の中に入り込むかもしれない。

リンドウの神機をリヨウタロウが用いた際、そこに人と同じ意思が宿っていたというのは、あながちリヨウタロウの妄想ではないのかもしれない。

喚起されたのだ、と仮定するならば。

これは狙われるに足る理由だ。

多くの、そして様々な研究仮定が一瞬で脳裏に浮かぶ。

これが進化。

これが可能性なのだ。
なんと甘美なことか。

その輝きは、薄暗い場所に生きる者を強烈に惹き付ける。
「計器には、従来の神機であるとししか出てこないからね。だが私は、彼の持つ神機が新たなステージへと昇華したとししか思えないんだ。そして、彼もまた。」

この前本部へ出張した時に、リョウタロウ君のことを絶賛されたよ。裁判にかけられ処罰を受けることになったはずの北の賢者……アドルフ・フィーネ・ビュラーからね。彼こそが「アルティメット・ゴッドイーター」だと」

沈黙が降りる。
踏み込んではいならない、禁忌の領域へ入り込んでしまったと、本能が警鐘を鳴らしている。

爪先から底冷えのする冷気が、じわじわと総身を蝕んでいくのを感じる。

「狙われるのはリョウタロウ君だと、解っていたというのにね。だから「お守り」として、キグルミまで持たせたというのに……私はまるで進歩していない。また繰り返してしまった」

だが——神は天を仰いだ。

「本人の希望と、極東に無くてはならない最高戦力であるとして留め置いてはいるが、それもいつまでもつか……。甘かったよ。欧州はフェンリル本社のお膝元だ。あそこでは常に陰謀が渦巻いている」「そんな、じゃありョウは、いつかフェンリル本社に連れ戻されて、生贄にされるってことですか!？」

「いいや、それはない。それだけは、絶対に、私がさせない」
断言する。

細い目が、眼球が露になるほど見開かれている。
神の暗い、宇宙のような瞳を正面から見つめて、リツカは知らず息を呑んだ。

「ゴッドイーター同士の戦いでは、彼も無傷でとはいかなかった。立って歩いていることが奇跡なほどの傷を負った。アラガミとの戦

いではないから記録には残らないが、とても大きな傷だよ、それは。体も、心も……彼は大きく傷付いた。

そんな彼を、フエンリル本社の意向を無視してまで連れ帰ったのはなぜだと思う？ リンドウ君とツバキ君の強い勧めがあったからだと？ 違う。

彼を守り、そしていずれ来るであろう、フエンリル本社との戦いに對抗する力を身に付けさせるためだ。

それは孤独な戦いとなるだろう。全と一、大いなる存在とただの一人が戦うことになるだろう。仲間の力は必要だ。支えは必要だ。だが、最後は彼が一人で挑まなければならない。そんな戦いになるはずだ。

あのまま欧州に置いておくことはできなかつた。今のままでは――

「リョウは、負けてしまう……！」

「私は彼を守り、そして鍛えなくてはならない。たとえそのために、彼自身が血を流すことになったとしても」

「ヨハネスは悲観主義者【ペシミスト】であつた。

ガーランドは利己主義者【エゴイスト】であつた。

ならば私は、なんだろうか。

決まっている、理想主義者【イデアリスト】だ。ロマンチストと言ひ換えてもいい。

スターゲイザーなどと呼ばれてはいるが、何ということはない。

星を見て想いを馳せる、美しいものに身勝手な願いを寄せるしか能の無い人間なのだ、私は。

結局のところ、リョウタロウの現在の処遇は、榊による予測と理想の押し付けであつた。

「榊博士……なぜそれを、私に聞かせてくれたんですか？」

「いずれ……私も、表舞台から退場させられるかもしれない。そう
なつた時、彼を支える人間が必要だ。技術を持った者が。君がそうであつて欲しいと、そう願っているよ」

リツカはしばらくの間目を閉じて、静かに胸に手を当てていた。

瞳が開かれる。

その眼には、憂いと、悲しみと、そして同情の輝きが湛えられていた。

「その……榊博士のしていることは、納得は出来ても、同意はできません。私はやつぱり、リヨウには負担をかけたくありません。でもそのまま欧州にいたら、酷い目にあつていたんだとしたら……これから先も、リヨウの行く先が戦いの日々なのだとしたら……」

私は、博士を信じたいと思います。榊博士はリヨウを守ってくれたから。私は、神機整備士として、力の限り彼のサポートをするだけです」

「そうかね……ありがとう、リツカ君」

「いいえ……博士の想いは、きつとリヨウも解っていると思います」

「そうだと、いいね」

彼女のような若人がいる限り、きつと人類の未来は明るいだらう。

その確信がある。

先頭に立つのは、きつと彼だ。

ロマンチストの面目躍如である。榊にはそのビジョンが見えていた。

「彼が極東にいる隙に、私も全力で事にあたろう。情報操作、隠蔽、なんでもするつもりだよ。本部の目を眩ませるために、架空の人事を行ってもいい。新しい戸籍も用意した。リツカ君には……」

「わかってます。引き続き、『第三世代』の調査分析を行います」

「頼んだよ。もし彼に適合する神機が見つければ……さて、変異した脳によって、ニュートラルなはずの神機は進化の可能性を喚起されるか否か……そこではつきりとする」

暗い表情で退出するリツカを見送り、榊は再び物思いに耽る。

リツカも整備班の中樞を担うようになった。それなりの権限を持つている。こうして情報を明け渡せば、後は自分の裁量の許される中で、自発的に動いてくれることだろう。

さしあたっては、彼女の亡き父親が研究設計していたという支援機の開発を再開するのではないだろうか。先日の資材の申請は、一見し

た限りでは支援機のためのものであると思われる。

彼女もまた、リヨウタロウを守り、支えることによって、彼が地獄へと突き進む背を押すことになるのだ。

地獄への道は善意で満ちているとは、誰が言った言葉だろうか。

リヨウタロウが絶望に彩られた道を歩むと知っていながら。リツカは己の腕を振るう以外にはない。

「業……だね」

コンピュータのファンの音が室内に木霊する。

榊は静かに眼を閉じた。

□ ■ □

『こんな感じで、こっちは変わりなしだよ。そっちはどう？ 一人で大変じゃない？』

——— ありがとう、リツカ。特に困ったことはないかなあ。

『本当に？ ネモスディアナって結構広いつて聞くけど、どう？』

——— そうだな、手が足りないってのは事実かな。まだ感応種は出て来てないけど、こども広い土地じゃ、俺一人だとカバー出来なくなるかもしれないから。

『わかるよおお！』

——— うおおい？

『うんうん、わかるよおお！ 一人で広い土地をカバーするのは大変だよねえ。実は、広域支援のための試作機が組みあがったんだけど』

——— え、いや、いいよ。

『遠慮しなくていいって！ もうすぐ支援部隊が編成されるから、一緒に送るからね！ それまでの辛抱だよ！』

——— いや、だから。

『わかるよおお……うんうん、一人だと大変だよね……わかるよおお』
それじゃあ頑張れリヨウ、と元気の良いエコーを残して通信終わ

り。

全然わかってないよおお。

あの子全然わかってないよおお。

支援機とか送られてきても迷惑なだけなんですけど……。だってデータ採って送らなきゃいけないじゃん。使わないっていう選択肢ないじゃん。

技術職の想定と現場での実際の使用で食い違いが起きるのは宿命みたいなもんだけど。

なんかリツカの試作機とか新技術試すのって俺ばかりのような気が。

気のせいでしょうかね、サツキさん。

「通信終わったなら機材返してくれませんか？ 電気代だってタダじゃないんですけど？」

「もう、サツキったら！ ごめんねリョウ君。この前からサツキ、拗ねちゃってて」

「はーん、ユノも彼の味方ですか。ふーん」

「も、もう！ サツキ！」

——あ、ごめん。ラジオつけっぱなしにしちゃってた。電気代が……。

「別に冗談ですから、真に受けないでくださいよそんなの。それにしても、公共放送もいつも同じことしか言わないですよね」

「またゴッドイーターのクーデターだって……」

「それ、デマですよ。ゴッドイーターが待遇改善を求めてクーデターを起こしています。このニュース、最近とくに頻繁に流れてるんですけど、知ってます？ フェンリルお得意の情報操作ですよ」

——ああ、隠蔽か。ゴッドイーターが何らかの大規模な事件に関わって死んだ時、それを誤魔化すためにそういうニュースがよく流れるらしいね。俺の時もあったから、わかるよ。

「俺の時……？ あ、ちよつとー」

——さーてと、メールの確認、つと。

PDAオープン。

マイ・ベストフレンドソーマきゅんからのメールだ！

メールアドレスが俺とコウタとアリサくらいしか登録されていないソーマからのメールだ！

登録件数は俺の勝ちだな、ソーマよ。

基地の女性職員からの黄色い声援は間違いなくソーマが上ですけどね……。

ええと、なにになに。

『送信者：ソーマ』

お前にメール送るのも久しぶりだな。

こつちに帰ってきてきたんなら一言くらいあつてもいいんじゃないかねえか？』

『送信者：ソーマ』

また同じ部隊に配属されたな。これからもよろしく頼む。

そつちでの任務が終わってからでいいから、アリサにでもメッセージを送ってやってくれ。

自分から送れないとかなんとか、うるさいんだ。そろそろ俺も引く』

『送信者：ソーマ』

すまん。できるだけ早くたのむ。アリサがやばい』

『送信者：ソーマ』

アリサがたゞとうw31@32、「おーー』

『送信者：ソーマ』

』

『送信者：ソーマ』

あいつ！ ふっぎけんな！ ヘリをジャックしようとしやがった！』

『送信者：ソーマ』

お前、苦勞してたんだな。臨時だが部隊長がこんな激務とはな……お前の後を継いだコウタもやつれていってるらしい。疲れが溜まる体が重い』

『送信者：ソーマ』

アリ

たす

け

』

『送信者：ソーマ

アリサと同じ任務地に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない』

そつ閉じ。

いや俺も部隊長やってた時、ほんとしんどかったからね！

人間関係で。

部隊長だから周りとうまいことやらなきゃいけないっていうのに、社交性ゼロの奴らばかりだったから。

その筆頭がソーマ、お前だったな。

ククク、お前も苦勞するがいい……！ 俺と同じ苦勞を味わうがい

い！

頑張れよ、ソーマ！

「リョウタロウさん？ 何にやにやしてるんです？」

—— いやあ、友達からのメールが来てて。

「えっ……あなたに友達とかいるんですか？ 同じゴツドイーターの？ そんなんで？」

「だ、だめだよサツキ！ そんな事言ったら」

「いやでも、誰も付いていけないでしょこの人。ネモスディアナの端から端までダッシュとかしちゃうんですよ？ そりゃ極東支部ほどじゃないですけど、どんだけ広いと思ってるんですか、ここ。私がトラック貸さなきゃどうしてたんだか」

「私は大丈夫だもん！ ねっ、リョウ君」

その氣遣いが痛いです。

なんかもういたたまれない。

俺、そんなに変なのかなあ。

「ほ、ほら、向こうで皆で遊ぼう？ 子供たちも待つてるから、ね？」
この切ない思い、歌に込めて。

ようし皆、一緒に歌おうか！

「またあのわけわかんない踊りと歌を聞かされるハメになるんですね……」

——僕たちGEくあなた達にーついていく。

今日も、運ぶ、闘う、守る、そしてく食べられるく。

連れていかれて、闘わされて、食べられてく。

でも、私たち「愛してくれ」とは言わないよく——。

「ちよつと！この前のことは謝りますから、その歌やめてくれません？ 嫌味ですか!」

——寝ずに考えたGE（ゴツドイーター）ソングが大不評だった件……泣きたい。

「ユノの顔がボーリング球みたいになってるんですけど!」

——わあ疲労度MAXみたいな顔。あるある、俺も資材調達のクルージングとか、レア掘り周回マラソンとか延々やらされた時にそんな顔になったなつた。大丈夫大丈夫。ここからが本番だ。

「だから！ あなたって人は！ あああもおお!」

ガシガシと頭を搔くサツキさん。

おっぱいが揺れる揺れる、ヤッター!

ゴツドイーターやってて良かったアア!

何かもう、こつちに呼び戻された時は陰謀かと思っただけど。

榊さんがまた何かたくらんでるのかと思っただけど。

これだけで俺は明日も明後日も戦えます!

いや、ホント榊さん、黒くない?

だって極東の支部長ってこう、毎回なんていうか、アレでしょ?

マッドサイエンティスト兼陰謀家でしょ?

ダブルシックスザールに続いて榊さんも変な噂あるしさあ。得たいの知れないもの一杯作ってるとかって。

ソーマの産まれがどうかの実験も、榊さんが作った因子とかが元で行われたんだし。

シオの扱いとかでも、支部内で堂々と陰謀めぐらせてたし……。

俺のキグルミもこれ危ない奴なんじゃないの?

赤い雨への防護機能があるって本当なの?

特務で雨中戦闘しろって言われてるから、雨じゃんじゃん降ってても気にせず神機様振り回してたけど、地味にこれ雨が染みてきてるし

……。

本当に大丈夫なんですかね榊さん。

足のところか雨がたまつてたぼたぼになるんだけど榊さん。

肌触り悪すぎてやだもう。

ぐちよぐちよになつて超不快。

いや、榊さん悪い人じゃないんだけどね。

でもこう、ね？

何か色々考えちやうでしょ？

今までが今までだったから、ね？ 警戒するのは仕方ないよね？

こちらら元小市民だったから！ ね!?

ああーもう、やだなー、無駄な疑いとか持つちやったりする自分が。

もう欧州行きたい。

あつちは陰謀とかと無縁だったからなー。

欧州はさあ、アラガミの出現頻度とかもそんな高くないから、何か

あつたらその時だけ頑張つて仕事したらよかつたからなあ。

ナントカ計画とか、エイジス島とか何もなかつたから、カルビーの

板？ とか何もなかつたし。

頭からつぼにして戦つてたらそれでよかつたし。

本社の思惑とか色々あつたんだろうけど、極東ほどじゃないでしょ

絶対。極東がおかしいんだって、絶対！

そりゃ酷い目にだつてあつたけど、そんなのどこだつて同じで
しよ。

どこもかしこも地獄なら、余計なこと考えないですむとこがいい
よ。うん。

ああ、何も考えたくない。

何にも考えずに戦えたらなあ……。

なんていうかも、ブラジャーのワイヤーになりたい。

サツキさんのおっぱいを支えるブラジャーのワイヤーになりたい。

俺、将来の夢はブラジャーになることなんだ。へへ……。

そしたら何も考えずにおっぱいのことだけ考えてたらいいしさ。

「あーもう、この人いつたいなんなのよ、もう！ 扱い難いつたら！」

揺れるおっぱい。

まさか……ノーブラ、だと!?

「なんなんですか、こっちはっかり見て。ムカツクんならムカツクつて言えればいいでしょ」

——自覚はあったんだ?

「はん。見てて苛立つんですよ、あなたたちゴツドイーターは。つらいんならつらいつて言えればいいでしょうに」

——サツキさんは……。

「なんです? 最後まで言ってくださいよ、それとも何か言いづらいことでもあるんです?」

——いや、その……いい女つてのは、こういう人のことを言うんだなって。

「……はあ?」

——自分にあたればいいなんてさ、中々言えないよ、そんなこと。サツキさんの言ってることはさ、胸に溜めたもの全部受け止めてやるから、ドンと来いつてことでしょ?

「あーらら、口説いてるんですか? 勘違いもはなはだしいつたら。そういう男つてモテませんよ」

——ご、ごめんなさい。うん、モテないよね……うん……モテない……うん……知ってた。

「ユノの前で言う台詞じゃないでしょ、まったく……」

なんかいいなあ、こういうの。

うん、難しいことは考えたくないなあ。

命のやり取りしながら考え事しなきゃいけないなんて、ぞつとするよ。

こんな馬鹿な話ししながら、ちよこつと良い思いなんかしてさ。それで十分なんだよ。

もうホント苦手。

何か裏があるんじゃないのつて勘繰るとかもう、ホント苦手。

なんぼしんどい目にあつても、ガチンコやつたほうがまだ気が楽だよ。

相手が人間だとかでもさ。それはそれでいいよ。

そんなの外壁育ちの俺からしてみれば、日常茶飯事チャメシインシデントなわけで。

食い物の奪い合いとかそりやもうえげつなかったからなあ。

刺した刺された。死んだ死なせた。殺した殺された……。

なんだかなあ。思い出すと嫌になる。

「リヨウ君ー」

おおあ、びつくりした！

わあ、ユノすごい顔してる。

あれ……なんかすごい泣きそうなんだけど、俺何かしちやっただっばい？

あれか？ ゴツドイーターの歌ver2がお気に召さなかったのか？

でもせっかく作ったんだし俺も披露したかったし。

音痴なのは許してお願い！

「うう、リヨウ君……がんばったね。がんばったね……」

うわあああああいハグキター……！

なんだかわかんないけどヤッター……！

ユノちゃんの薄い服おっぱいの感触ヤッター……！

極東じゃハグが流行ってるんだよねヤッター……！

「よしよし……リヨウ君、がんばったね。よしよし……」

やっぱり極東サイコー！

よく考えたら欧州とかイイコト一個もなかった！

「何を考えてるのかわからない」とか「本心を隠してる」とか色々言われてたし！

なんか避けられてたし！

何だかんだでこっちは友達もいるし！

俺もう一生極東にいるぜうひよおおおおう！

俺を極東に戻してくれた榊さんは超サイコー！

陰謀とかないナイ！

極東はクリーンな職場です！

ありがとう榊さん！

「リョウ君の体……傷だらけ……こんなに、いっぱい」

——いやあ、体の傷はさ、ほら俺、ゴツドイーターだから。すぐ治っちゃうんだ。

「でも、痛かったでしょう？」

——でも、もう痛くないよ。痛くない。痛くないんだ。

「リョウ君……！」

「まったく、なんでこんな人がゴツドイーターなんかになっちゃったんでしょーねー……似合わないでしょ、ゴツドイーターなんて。ふん」

密着ヤツター！

「あーあー、子供たちまで……お団子になっちゃってもう。お気楽なことぞ」

私も僕もと子供たちまで！

ぎゅうぎゅうにくっついてユノとの密着度がさらにドン！

女神の森は……楽園はここにあったんや！

「ほーんと、能天気になつちやってるんだから、もう……」

どこの世界でも、国でも、きつと子供たちは純粹だと思う。

子供たちが笑っていられるなら、それが全部だと思う。

世界はまだ、きつと、大丈夫。

子供が笑って暮らせるような、幸せに溢れてる。

だから俺は、それを守るよ。

ゴツドイーターなんかになっちゃったけど、本当は戦いたくなんかないけど、でもやるよ。

俺はやるよ。

こうやって、お兄ちゃんお兄ちゃんって、慕ってくれる子供たちを守るよ。

世界の守護者とは名乗れないけれど、子供の味方には、なりたいたって思ってる。

みんなで歌をうたって、手を叩いて、踊って……そんなちっぽけな幸せを守るためなら、俺は血を流してもいいって、そう思える。

戦うよ。

俺は、戦い続ける。

この小さな幸せを守るために。

幸せなんかすぐ壊れて消えるって、知ってるのにね。

「ぐっどいいーたー…8 噛

答えは出ている。

□ ■ □

———ところでこれを見て欲しい。こいつをどう思う？

「すごく…大きいですね、それ。サイズ合っていないんじゃないですか？」

———いやあ、こうやってベルトで締めればいけるし。どう

? どう？

「ふふ、リョウ君にすごく似合ってるね」

———そう？ そう思う？ やっぱそう思っちゃう？ い

やー！ 俺も！ 俺も、実はそう思ってたんだよねー！ たっはー！

似合ってるかー！ たっはー！

「はいはい。ま、フェンリルの制服よりも、麦わら帽かぶってるほうがあなたにはお似合いですよ」

———いいよね！ 農作業スタイルって！

「ねえ、リョウ君。今日は何をするの？」

———よく聞いてくれましたマイ助手ユノ君。さあ、次にこれを見てくれ！

「えと、はい先生。これ、幼木ですよ？ 今日植林作業をするんですか？」

———そう、でもただの細っこい木じゃない。なんとこれ、リンゴの木なのです！

「わああー！ これ全部、リンゴの木なの？」

やっべ気持ちいい。超気持ちいい。ちよー気持ちいい。

すごいすごいと手を叩くユノちゃんのリアクションに、鼻がのびるのびる。

この子知ってるわー男の喜ばせ方知ってるわー魔性の女になるわー。

大量のf c（フェンリルクレジット）はたいて購入したかいがありましたわ。

ヒバリさんに搾取されながらもコツコツとためたヘソクリが吹っ飛んだけど、俺は後悔していない。

見よ、このリンゴの苗木を。

バイオ栽培されたものだけど、その分強く根を張る、お手入れ簡単の品種を選んだのだ。

俺のポケットマネーと引き換えに。

ランク10の武器よりお高いとかどうにかしてると思ったけど、俺は後悔していない。

手が滑って桁をひとつ間違えちゃったけど、後悔してなどいない。してないっいたらしてないんだい。

「ああ、なるほど。考えましたね」

「サツキ？ えと、何かわかったの？」

「この人、子供たちにこれ、リンゴの木を植えさせるつもりなんですよ。確かリングゴは、実をつけるまで5年はかかるはず。

あの子たちが大人になる頃、色々使えるでしょうね。親をなくし、扱い難さに捨てられて、鼻つまみ者になってしまった子供たち。でも実利があれば、受け入れられますからね」

お、おう！

え、いや、そこまで考えては……。

俺、リングゴって食べたことなくて、その……。

先行投資っていうか、その。

女神の森にきたんだし、せっかくだから俺も植林作業とかやってみたいなーって。

だったら食べれるものがないかなって、その。

「わあ……！ リョウ君はやっぱりすごいなあ」

いや計算通りだ。

俺の計算はすごい。なんていうかもう、すごい。すごいすぎる。

これは未来への投資なんだ！
リンゴっていいよな。

赤くて、まあるくて……こう、おっぱいを思い浮かべるような造詣
をしているし。

きつと食けると甘くておいしいんだろうし。

ほら、たしか歌とか詩とかにもリンゴをモチーフにしたのいっぱい
あるし。

リンゴの詩とか俺もう大好き。

落ちたっていいじゃない、リンゴだもの……これニュートンさんの
詩だっけ？

とにかくリンゴ最高！

植えようぜ、みんな！

「きゃっ、こーら、みんな押さないの！」

「ええい、ガキンちよども、さわんなさわんな！ ほら、順番だから！」

ああーいいよーこれいいよおおー！

子供たちにもみくちやにされる美女二人……最高の画だと思いま
す！

ツンデレサツキさんはグラマー最高だし。

意外とノリの良いユノちゃんは可愛くて最高だし。

農作業スタイル超似合ってる俺も最高。

植林とか、たぶんこういうの、ネモス・ディアナしか出来ないから
なあ。

いやー、これもゴツドイーターやっててよかったーって思う一瞬だ
よ。

この前アラガミと戦ったときに森の一角吹き飛ばしちゃったから、
弁償的な意味でやたら高いリンゴの木を植林しようって考えたのは、
うん、正解だったな。

ナチ総統すごい目がピクピクしてたもん。あれぜったい切れてた
もん。

「私は怒ってなどいない。私を怒らせたらいしたものだ」とか言っ
てたけど、切れてるんですかって聞いたらピクピクしてたもん。あれ

絶対切れてたもん。

でも、久しぶりに会ったなあ、ナチ総統……いや、ナチ現場監督。俺がまだその日暮らしのバイトばかりしてた子供の頃、ここで働いた時にお世話になったんだよね。

世間って思ったより狭かったんだなあ。

「まさか君が生きていて、ゴツドイーターなんぞになっていたとはな」って、ナチ総統も驚いてたもんなあ。

こつちもまさか、あのキツイけど色々親切にしてくれた親方が、総統になってるなんて思ってもみなかった。

覚えててくれたんだって、ちよつと嬉しくなったよ。

あの時も大変だったなあ。オウガテイルの群が押し寄せてきたから、俺がトラツクに資材山盛りにして囷になって、ここから引き離したんだっけ。

意外と逃げ切れちゃったもんだから、この資材どうしよってなつて、よし着服し……有効利用しようってなつて。夢の我が家を建てる

でも罪悪感もあったから、ここに戻るに戻れなくて、それっきりだったんだよな。

貴重な重機を初運転でオシヤカにしちやっただからってのもあります。ハイ。

「んー」

どしたの、ユノちゃん。

「えへへ」

ああああんもおおお！

かーわーいーいーいー！ かーわーいーいーいー！

「リヨウ君と父さんが知り合いだったなんて。なんだか不思議」

「ほんとですよ。あなた、ゴツドイーターになる前は何してたんですか?」

えっと、確か。

極東で両親がアラガミに喰われてから……えーっと、何だったかな。

外国にあるフェンリルの養護施設？ に入れられるって、ヘリに乗せられて。

なんやかんやで海外であったドンパチに巻き込まれて。

ああ、そういうえばそこで核の炉心が爆発した瞬間も見たな。チカツと光ってきれいだったなあ。次の瞬間に爆風で吹っ飛んでそれどころじゃなかったけど。

あの時、ソーマとかツバキさんが現場にいて戦ってたんだっけ。

あとリンドウさんも。

「え、嘘でしょ？ それって、旧人類文明最後の反攻作戦のこと……？ その場に居合わせたって、はあ!？」

アラガミが核爆発を捕食しなけりゃ死んでたなあ。

放射線も危なかっただろうし、いやそれだけはアラガミのおかげかも。

ハッハッハ。

「いや、ハッハッハじゃないでしょー！」

でもほら、こうやって生きてピンピンしてるし。

ラッキーラッキー。

「そういうことじゃ！ ないでしょ！ あああもおおー！」

その後はユーラシア大陸が子供一人で暮らせるような場所じゃなくなっちゃったから、命からがら密航繰り返し返して極東に逆戻り。

生きる術を色んな人から教えてもらって、その日暮らしの始まりや。

そしてゴッドイーターになったに至る、と。

「絶対途中すつとばしてるでしょ、それ！ ここ建造する時にアラガミの大群相手に大立ち回りの子供がいたって、ナチ叔父さんから聞いてはいたけど……波乱万丈ってレベルじゃないでしょもう！」

「でもほらサツキ、リョウ君だから。しょうがないよ？」

「ああもう、なんだかそれで納得できる自分が憎い……」

「毎回気付いたら事件の中心にいたりして」

「毎回人助けとかしちやったりしてたんでしようね」

「リョウ君だからね」

「リョウタロウさんですからねえ」

えっ、何その生暖かい目。

待って、お願い待って。

絶対二人とも何か勘違いしてるって！

俺、巻き込まれただけだからね？

確かに事件とか事故とか、両手と足の指を足しても足りないくらいに遭遇してるけど、でも巻き込まれただけだからね？

はいはい、って何でそんなリアクションするし!?

待って絶対勘違いしてるってば。毎回ひーこら言いながら情けなく逃げてたんだって！

何そのヒーローみたいな奴！

あああ……俺じゃんかあ……。なんか成り行きでそうなってただけなのに……。

でもホント、中身こんなだからね？

だって、俺だよ？

リョウタロウだよ？

開けてびっくりがっかりの、リョウタロウクオリティだよ？

「よーっしー！ みんな、リンゴの木を植えよー！」

「はいはい、まあ、私もヒマですし、手伝ってあげますよっ」と

ぐぬぬ……納得いかない。

盛大にスルーされたし……。

「ほんと、似合ってますよあなたには。血まみれよりも、土まみれのほうがうれしいでしょ」

うん。

やっぱり、サツキさんはいい女だなあ。

極東にはいい女が多すぎて困るよ。

男なんてかたなしだし、俺なんてもう、まぶしくて自分が恥かしくなっちゃうくらいだ。

あ。こんないい女の横に並べるくらいに、カッコイイ男になりたいなあ。

あーあ、まだまだだなあ、俺。

まだまだ、だよ、うん。

だって、こんな無駄なことしたって、意味なんてないんじゃないかって、気を抜くとすぐそう思っちゃうから。

“おじさん”……やっぱり、俺はまだまだみたいですよ。

まだ俺は、あなたの言う“ゴッドイーター”にはなれそうにない。あなたが救った鼻たれの泣き虫が、今じゃゴッドイーターだ。何かあるかわからんし、生きてみるもんだと言ったあなたの言葉は正しかった。本当に何かがあるかわからないものです。

ゴッドイーターなんて俺がやっていけるわけないと思っていたけど、どうにかこうにか、しがみついていますよ。

でもあなたみたいなゴッドイーターには、どうしてもなれそうにありません。

「ゴッドイーターは人の盾であり剣なんだからよ、誰かに顔向けできないような顔でいちやあ駄目だ。どんなことがあっても、笑ってなきやな」……なんて。

命の価値は平等だけど、命の重さは誰もが同じだなんて、俺はどうしても思えませんでした。

どうしようもないやつだっています。そんな助けたくもないやつを、命をかけて守らなきゃいけない。部下に守って死ねと命じなくてはいけない。

つらいです。どうしようもなく。

ただ戦っていればいいだけの時は、もう過ぎてしまった。

知らぬ振りを続けるのも限界です。知ってはいけないこと、知りたくもないことばかり目にしてしまった。

おじさん、今、とてもあなたに会いたいです。

アナグラを出て、今でも誰かのために働き続けるあなたに。

あなたはどうして、そんなに傷付いても、笑っていられたんですか。人に石を投げられ、唾を吐きかけられても……どうして。

最初期のピストル型神機で、スサノオを退けたあなたの姿は、子供の眼には眩しすぎた。

だいじょうぶか、と笑って振り向いたあなたの姿が今でも忘れられ

ない。

腕が……ゴッドイーターを続けられないくらいに傷を負ったというのに、その原因を作った馬鹿な子供に、笑いかけてくれたのはなぜなんですか。

怖くて、怖くて、俺はゴッドイーターになんかなれないと思ったけど。あなたのように、なんでもないさと笑える男になりたいと、思っていたのに。

あなたのような本物のゴッドイーターには、俺はなれない。

ああ……今日もまた、いやな天気だ。

曇っているのか、晴れているのか、よくわからない曖昧な天気。

俺みたいなの……。

「リョウ君？ どうしたの？」

——ごめんごめん、すぐ行くから。なんでもないよ。

「ちよつと、サボらないでくださいよ。あなたが言い出したんでしょ。あーもう、手がドロドロ……あなただけ軍手とかしちやつて、ずるいですよ」

——あわわ、ごめんなさい。どうぞ。

「これ、最初に気配りできるかどうか、男の真価ですよなー」
「もうサツキつたら……わぶー！」

——ユノにも軍手と、はい、これ。

「わ……麦わら帽子ー！」

「ん、よろしい。それでいいんですよ、それで」

——ちよつとはカツコイイって、思ってくれたり？

「何言ってるんだか……でもまあ、私が見た中じゃ、そこそこいい線いってるんじゃないですかね？ こんな世界で、明日のために何かを残そうだなんて、普通考えられませんから」

——明日の、ために。

「リングですよ、リングの木。実が成るまで時間かかるってこと、知ってたでしょ。あなたはあの子たちがこれから先、リングの実が成るまで自分達だけで生きていけると信じてたから、そんなチョイスをしたんですよ」

———　　「そっか、そうなの、かな。」

「呆れた、無意識ですか。悩んだ顔しちやって、自分のことなのに自分が一番よくわかってないんですね。答えなんて考えなくったってね、あなたみたいな人は最初からもってるんですよ、そんなの。ここに聞けばいいでしょ、ここに」

言つて、サツキさんは俺の胸をトンと指で突く。

胸の奥まで響く痛みは、サツキさんの細く長く伸びた爪のせいではない。

———　　「答えは、あるのかな。」

「さあ？　　いつちよ前に悩んだって無駄ですよ。どうせあなたはもう、解ってるはずですよ。苛立つだけですからいつもみたいに能天気でしたらいんですよ。あなたは」

「サツキは相変わらずけなしてるのか元気付けようとしてるのか、わかんないなあ」

「ムカついてるだけですよーだ」

「ね、リョウ君。嬉しいんだよ、サツキは。ほら、自分にあたつてほし
いって、この前……」

「そー！　　こそこそ話ししない！」

「ふふ、サツキもよっぽどリョウ君のことが気に入ったんだね。こんなに誰かに肩入れするサツキ、初めて見たもの」

「ちよっと、私だけにやらせないでくださいよ！　　サボってないで、二人ともはやくこっちにきなさい！」

———　　「もう、俺は、答えを……なんだろう、わかんないや。わかんなくなつたな……。」

考えてもしかたがないことなのかもしれない。

サツキさんが言うのなら、そうだと信じよう。

きつと……選択の時がこなければ、その瞬間がこなければ、わからないことだから。

とりあえず。

今日は、植林作業に勤しもう。



その日は朝から曇天だった。

積乱雲というのは、海からくる暖かく湿った空気が、上昇気流によって堆積した末に起きる現象である。

ネモス・ディアナに限らず、極東地区はかつて関東とよばれた地域にある。北には山脈、南には海。多雨多湿であり、積乱雲が発生しやすい条件が整った地域でもあった。

ただ、空を覆う雲が全て赤い雨を降らすわけではない。

朱色の雨であるのだから、それを含む雲もまた、当然のように血の色をしている。

赤い雨を降らす、赤い雲——『赤乱雲』である。

空を見上げれば、天には雲。

積乱雲状に積みあがった分厚い雲ではあったが、色は白。

まばらに空は晴れ、青を覗かせていた。

「先輩、空、青いですし、雲も赤くないツスね。ここ数日このままですし、今日も大丈夫ツスカね」

——— 何かあるかわからないから、油断しないように。装備点検。フォーマンセルで出撃用意。レインコートは各自準備。いいね。

「ウツス！ 今日も部隊引率お願いしまツス先輩！」

先輩、と呼ばれ、リョウタロウは神機の保護ケースから手を離し振り向いた。

ゴッドイーターの先達を、階級に関係なく「先輩」と呼ぶのが極東の流儀である。

討伐スコアの差はあれど、ここでは命を掛けて戦ったその時間を評価されるのだ。

旧日本の文化、年功序列というものを引き摺っているらしいが、リョウタロウは良い名残りであると思っっている。

ゴッドイーターの評価の全ては、その身を捧げた年月に尽きる。浮き足だった新人に、視線で釘を刺す。

バンドナを着けた年若いゴッドイーターは、「わかってますって」と肩を竦めた。

「そいや先輩、今日はアレ、どうしたんスか？ 先輩のトレードマーク」

——ああ、キグルミね。オーバーホールに出したんだ。データのフィードバックも必要だとかで、一度こっちに送ってくれて、リツカがさ。

「リツカさんツスか。そんで代わりに送られてきたのが、このデツカイ機械、と。いやあ、愛されてるツスねえ」

——本当にそう思うか……？ 俺と替わってくれない？ いや、マジで。

「い、いやあ、ははは……でも今までは先輩一人に任せきりだったんスから、俺達にも働かせてくださいよ。ね！」

茶化してはいるが、その様子には気が抜けたような態度は一切ない。

瞳はギラギラとして獣の輝きを灯しており、歴戦の戦士である貫禄を醸していた。

これが、極東のゴッドイーターである。心強い味方であった。

ようやく極東支部のシフトが整い、ゴッドイーター達の派遣体勢が組まれたのであった。

リヨウタロウと合流し、未だ一週間程しか経っていないものの、何年もバディを組んだかのようなチームワークをアラガミとの戦いに発揮している。

他国よりも圧倒的に強い固体を相手取らねばならない極東のゴッドイーター達は、短時間で戦士として熟成されるのだ。

それが良いか悪いかは、必要であるという理由に駆られ誰も考えられぬまま。

「また今日もちまつこいの相手ツスカねえ。噂の感応種っていうの、

俺まだ見たことないんすよ」

ここ連日、小型のアラガミの襲撃が立て続けに起きていた。小型といえど、アラガミは脅威だ。それも、防護壁を狙った、これまでにない偏食傾向を持っていた。

見た目はただのザイゴート、オウガテイルにしか見えずとも、やはり地域によつて個体差があるのだろう。

榊から伝え聞いていたシユウ感応種の姿は、ここに派遣されてはや数ヶ月、リヨウタロウも未だ目にしてはいなかった。

拍子抜け、というのが正直な感想である。

そんな時がまた一番危ないのだということなど、この場にいる全てのゴツドイーターは承知していることだった。

油断はない。

だが、承知していたとしても、避けえぬ事態がある。

想定外の事態とは、想定外であるが故に起き得るのだから。

「観測機のチェック……クリア。赤乱雲の反応なしッス。目視にも赤は確認できませんッス。問題なしッスねえ」

——望遠レンズ！ 映像確認！ 雲の隙間に何かいるぞ！

「え……あ、アラガミ反応！」

リヨウタロウの怒声に遅れ、アラガミの反応を知らせる警戒音が観測機から鳴り響く。

モニターに移されたのは、空を滑空する数匹のアラガミ。

シユウの飛行編隊だ。

「シユウが群を作るなんて……いや、これは、シユウじゃない！」

シユウの群、その先頭を滑るように飛んでいるアラガミは、既存データに無いオラクル反応を示していると観測機が吐き出す。

そのアラガミは、妖艶な女の姿をしていた。

口元にはたおやかな笑みを携えて、翠色の羽毛に覆われた両羽に風を孕ませ、矢のように堕ちて来る。

「新種……新種だ！」

人面鳥身の、『新種』である。

「先輩ッ!!」

リョウタロウは新種の姿を目視するや否や、アラガミ防壁の壁面の突起を足がかりに、壁を垂直に駆け上がった。

先手必勝の理である。防壁の縁に立ち、跳躍。身を空へと踊らせる。

新種へと振るわれる刃。

防護ケースを払われ、牙を剥いた神機が唸り声を上げる。

——神機が……！ 感応種かアツ！

不自然な格好で、糸が切れた人形のように墜落したのは、しかしリョウタロウだった。

壁を蹴り勢いを削ぐも、廃材を薙ぎ倒しながら土に身体を打ち付けた。

あれは、ただの新種ではない。

赤い雨を浴び、凶暴化し、最も危険な進化を遂げた新種……『感応種』だ。

そして、それは『シユウ変異種』として報告されていた感応種でもなかった。

リョウタロウ達が認識していたシユウ感応種は、通常のシユウの背中に、触手状の器官が生えたものである。

接触距離にまで到達すると、口器から周囲のオラクル細胞に何らかの影響を及ぼす偏食場もしくは感応波を発生させる、と報告があがっていた。

対処法方としては、認識外からの遠距離射撃、あるいは感応波を発生させる前に近接攻撃にて叩く。この二通りである。

感応種は周囲のアラガミを統率し、凶暴化させる能力を有していた。

神機もまた、オラクル細胞の塊……人造のアラガミである。

リョウタロウの神機は、感応種的能力により制御不能に陥ったのだ。

だが、それはこれまでの報告にはありえないほどの距離、そして強度である。

リョウタロウほどの適合率を持つゴッドイーターが、一瞬の抵抗も出来ずただ墜とされるなどと。

ソーマとアリサがネモス・ディアナで交戦したシユウ変異種には、近接距離での能力圏しか確認されていないはずだというのに。

新種の美しい唇から、人間の耳には聞こえぬ音の波が迸る。

「そんな……嘘だろ!? この距離で神機が!?!」

「こんなの報告にない!」

「まさか……進化したって言うの!? こんな短期間に!?!」

考えられることはただ一つ。

シユウ変異種が進化した……すなわち、*“*感応種として完成した*”*のだ。

影響強度、範囲……全てがシユウ変異種とは桁違いだ。

それは後に、*“*蠱惑の妖婦——『イエン・ツイー』と名付けられるアラガミである。*”*

感応種の能力圏内に捕らわれた旧型、新型おりませたゴッドイーター達の部隊は、狙い撃ちにせんとして構えていた銃口を地面に擦りつけ、歯噛みするのみ。

神機は重さにして20キログラム程度である。ゴッドイーターの腕力であるならば、枯れ枝のように振り回すことが出来るはずだ。

だが、重い。

神機が、まるで地面に縫い付けられたように、鉛のように、重く感じる。

これは神機とゴッドイーターとが、その制御に神経接続が行われていることに起因する。

神機の変型やオラクル制御を、ゴッドイーターは自らの神経を通して、脳からの命令によって行っている。

ここに神機のオラクル細胞を直接操作されたのだとしたら、神経系を丸ごと遮断されたに等しいこととなる。

筋力でどうこうとなる問題ではないのだ。

啞然とするゴッドイーター達の頭上を、シユウの編隊が素通りしていく。

何の抵抗も許されず、侵入された――。

――小型種が来るぞ！ 迎撃態勢！

瞬間、防壁が地鳴りを上げて揺らぐ。

オウガテイルの群が……否、こちらも新種だ。

翠色のオウガテイル達が、防壁に喰らい付いていた。

感応種的能力圏内から脱したのか、神機が回復する。

しかしそれは同時に、感応種がネモス・ディアナの中心区へと進撃したことを示している。

――近接部隊はオウガテイル種の迎撃！ 銃撃部隊は俺

について影響範囲外から狙撃、をオツ……！

言いかけ、リヨウタロウは身を翻した。

全身を捻り切る程の必死さに、部隊員達は一瞬、目を白黒とさせる。

――総員退避！ 退避――！

しかしすぐにその理由を“身に染みて”理解した。

「冷たっ……え、何これ」

「雨……赤い……!?!」

「え、嘘……嘘でしょお!? 嫌ア!」

「赤い雨だ……赤い雨が降ってきたぞ!」

ぽつぽつと、地面に跳ね返る雨音。

雨だ――赤い、雨が降ってくる。

馬鹿な。リヨウタロウは天を睨んだ。

今も空は青が覗いている。

雲は白い……否。風に流された雲の“中”から、赤い雲が顔を覗かせていた。

積乱雲の中核に、赤い雲が内蔵されていたのだ。

畏だ。これは、自然が仕掛けた罠である。

雲が風に流され、横に長く削られて状態が不安定となり、雨粒だけが乗って飛んでくるといふ現象……天気雨だ。

地球が今、リヨウタロウ達に牙を剥いたのである。

――全員雨天装備着用オ！ チイイツ……！

一気に雨音が強くなっていく。

逃げ惑うゴツドイーター達が、一人、また一人と足を止めた。

雨に全身が濡れていた。己の命運が尽きたことを、悟ったからだつた。

リョウタロウは家屋の軒先へと飛び込んだ。だが、墜ち来る雨粒の方が早い。

この一滴が、致死性の毒である。

赤い雨が、リョウタロウの命を奪わんと死神の鎌の如く襲い掛かる。

「うおおおッ！ セーフ！」

しかし、雨が頬を濡らすよりも早く、影がリョウタロウを庇うように覆っていた。

それは出撃前にリョウタロウと談話をしていた、年若いバンダナを巻いたゴツドイーターだった。

流血したように、顔面を赤い雨で真っ赤に濡らした――。

「すみません、俺達もう、手遅れみたいツス。神機はギリギリ動くんで、ここは俺達にまかせて、先に行ってください」

――お前達……！

「大丈夫ですって！ そんなすぐには死にませんから！ 雨で死んじゃうけど……でも、どうせ死ぬなら俺、ゴツドイーターとして、俺！ くそつ、足が、震え、くそつ、震えるなよ、くそつ！」

――すぐに戻って検査を……！

「うるせえんスよ！ ここは俺達の死線だ！ あんたじゃない！ あんたもゴツドイーターなら、行けよ！ 行くんだよ！ 行けえええッ！」

――すまん！

「いいんスよ、それで……みんな、走ってく先輩の後姿に、憧れてたんスから――」

リョウタロウはバックパックから赤い雨対策が施されたレインコートを着用すると、移送用のカーゴトラックへと走る。

背後に聞こえる戦闘音に耐えながら。

空を旋回する新種達へと、リョウタロウはトラックのハンドルを

切った。

新種達が地上に降りようとしなのは、獲物を見定めているからだ。

ハンドルを叩く。天を睨むリョウタロウの奥歯が、ギリリと鳴った。

——— 二手に別れた……！

シユウの編隊が、二手に別れ飛んでいく。

感応種一体と、通常のシユウの群それぞれに。

シユウ通常種は居住区へ。

各々が偏食傾向を持つのがアラガミであるが、しかし共通するところがある。人間を喰うという点である。

アラガミの食性からして、人の多くいる場所へと集まることは当然のことだ。

そして、郊外に向けて降下していく感応種。

これは偏食傾向に沿った行動であると考えられる。

郊外……リョウタロウの、借り宿があつた場所だ。

すなわち———。

——— どうしたらいい……どうしたらいいんだ……！

苦悩に歪むリョウタロウの顔。

リョウタロウは理解していた。

選択の時がきたのだと。

——— 俺は……俺は……！

刹那の間……リョウタロウの脳裏に多くの場面が流れて消えた。

絆を結んだ仲間達。

死にゆく同胞。

戦ってきたアラガミ。

倒した敵。

ありがとうと言ってくれた人。

罵声を吐く誰か。

守るべき者。

守りたくもない奴。

見詰めてきたたくさんの終わり。

そして――自分の始まり。

“一番最初”のゴッドイーターがくれた言葉。

『俺がどうしてゴッドイーターになったかって？ そりゃあ、お前――』

アクセルを強く踏み込む。

速度メーターは既に限界まで吹っ切れている。エンジンは熱く金切り声を上げていた。

リョウタロウの眼が、決意に染まる。

トラックは全速力で、“シユウの群れへと”突っ込んでいった。

□ ■ □

「よう、坊主。お前、また泣いてたのか？ は……よせやい。こんなもん、傷の内にもはいんねえや」

――でも、おじさん、腕が。

「いいんだよこんなもん……大したことねえ。大したことねえのさ」

――おじさんのともだちが、みんな、たべられて。

「そうだな、死んじまったな。みんないいやつだったよ」

――ぼくが、ぼくのせいで、みんな。

「お前のせいじゃないさ。死にかけの赤ん坊たちのためにミルクを運んで、アラガミの群生地を踏み入れたガキを、誰が責められる？

お前は立派さ。他の誰にも出来ないことをやったんだ」

――ぼくのせいで、ぼくの……。

「なあ、坊主よう。聞いてくれないか」

――おじさん……。

「俺はさあ、ゴッドイーターになったんだ。自分から志願しよう。そしたらなんでえ、軍からゴッドイーターに志願したのは、俺が最初ときたもんだ。」

鼻で笑ったさ。どいつもこいつも、意気地のない奴らばっかだつてな。

でもよ、違ったんだ。意気地のない奴は俺だったんだ。

ぶるっちまうんだよ。アラガミを前にすると、足が震えるんだ。こんなちやちな玩具一丁で、あんな馬鹿でかい奴を相手にしなきゃなんねえんだ。

人間なんて、ちっぽけなものさ。どうにもならん化け物の前にや、喰われてお終いだ。それを強く感じたよ。

でもよ、一番怖いのは、アラガミじゃなかったんだ」

——アラガミよりも怖いものが、あるの？

「それは……人間さ。俺が一番怖かったのは、人だった。言うんだよ、みんなが俺を指さしてさ。

『お前がもつと早くきていれば』、『役立たず』、『どうしてお前が生きて娘が死ぬんだ』、『家族を返せ』、『消えてしまえ』……。

失敗を重ねる度に、守ってきたはずの人々の言葉が、重くのしかかる」

——じゃあ、どうしておじさんは戦うの？ そんなにこわいののに、ひどいことを言われても、どうして。

「さあなあ、何でだろうなあ。俺にもよくわからん。後悔もしたし、辞めたいなんて思うのもしよっちゆうだ。

でもよ、なんつうか、最近少しわかってきたんだ。いや……思い出したんだよ。俺が軍隊に入った理由をさ。だから俺は、ゴッドイーターなんて得体の知れないものに手を上げてよ」

——おじさんは、どうしてゴッドイーターになったの？

「話の腰を折るなよお前……俺がどうしてゴッドイーターになったかって？ そりゃあ、お前——」

——おじさん？

「……なあ、お前さ、明日世界が終わっちまうんだとしたら、どうする？」

——あした、世界が終わるとしたら？

「明日全部消えてなくなっちまうんだから、何をしたって無駄だと思

うか？ 刹那的に快樂に耽るべきか？ どう思う？」

—— わかんないよ、そんなの……。

「そうかい。ま、そうだよなあ……」

—— でも、もし明日、ぜんぶなくなっちゃうんだってなっても、ぼくはたぶん、今日と同じ日が続けるとおもう。

「おい坊主、お前やめとけよ。こぼれた粉ミルクなんぞ、砂が混じっちゃまって使いものにならねえ。すくっても無駄だぞ」

—— 意味なんてなくても、つづけるんだ。つづけるんだ……。

「坊主……お前」

—— でも、どうしてこんなにつらいんだろう。昨日と同じ今日のはずなのに。つらいんだ、いつも。生きるのが、つらい。

「そうかい……そうだな……そうなんだよ……ああ、ああ……そうだよな」

—— おじさん、どうして笑っているの？

「俺ってえ奴がくつだらねえからさ。つまらん男だよ、俺は。」

世の中もアラガミであふれ返ってるし、人の心まで荒んでるときた。

あーあ、いつそ世界なんてよう、一度きれいまっさらになっちゃまったらいいんじゃないかねえかとも思っちゃまう。

たぶん皆、そう思ってるんだろうぜ。だからどいつもこいつも言うんだ、無駄なことなんて辞めちまえて、さ」

—— ……。

「でもよ、こうも思うんだ。人は無駄な努力を続けてるんだろう。そんな無駄なことをしたって意味がない、そう考えてもるんだろう。

でもみんな、出来ることなら、今日と同じクソくだらない日を過ごしたい……つてさ。

過ごさせてやりたかったよ。生きるはずだった今日を。つまんねえ毎日を。俺は失敗した……失敗を重ねすぎた……」

—— おじさん……。

「悲しいことに、今の時代、一人でそれを守ることではできんらしい。協

力しあうことだつて、人は忘れちまつたようだ。

だから誰かが立ち上がらなきゃならん。

どんな悲劇にも、理不尽にも、大したことはないさと笑えるような奴がな。

そうすりやそいつの後をついて、また誰かが立ち上がってくれるかもしれない。

続いていくんだ。きつと。なんでもない日々がただ過ぎ去つていくように。

俺はそう信じることにした。それが俺の理由だ。

いつか花が咲き、実を結ぶことを信じることにしたんだ。

希望の木を植えること。俺が、ゴッドイーターに志願した理由だ。そんな、くつだらなないガキの理想じみた理由なんだ。無駄なあがきつてやつさ」

——価値のない日々を、守るため……。

「守るべき者、守りたくもない奴……取捨選択の時は、何時だつてそこにあり続ける。

今日を続けていくには、人の力が必要だ。それは残酷に、数字として目の前に迫ってくる。

明日をくれてやれなかつたやつもいるさ……。

ゴッドイーターは、“みんな”を守らなきゃいけないんだ。

老いも若いも、関係ない。例えそれが子供であつたとしても……俺は切り捨ててきた。全部を救うことはできない。できないのさ……」

——ぼくが生きてるのは、うんがよかつたから？

「そうだ。悪いが、ここに嘘は吐けん。他に守らにやならん奴がいなかつたから、お前だけだつたから、お前は助けられたんだ。

ゴッドイーターだけが命の天秤に乗ることはない。そんな命の価値を計る天秤から降りた奴等が、ゴッドイーターっていう馬鹿野郎なんだ」

——ぼくは、これからどうやって生きてたら……。

「いいか、坊主、よく聞け。お前は偶然、運良く命を拾つた。だからよく考えるんだ。考えて生きろ。その命の使い道を考えるんだ。」

より多くの命を生かすために使え。明日のために……「まだ見ぬ名前も知らない誰かが」明日を迎えられるために、選択し続ける。

それを続ければ、その痛みは、お前の心を切り刻むだろう。

だが笑え！

なんでもないさと言うように、笑え！

嘘でもいい。それが仮面だつていいさ。お前をみて、誰もが勘違いするくらいに……笑うんだ！

そいつが希望になる！ お前の笑い顔を見た奴等が、お前がいるから大丈夫だと、そう思うようになる！

そして、いずれはお前自身の希望にもなる。そう信じ続けるんだ！

諦めるな！ 負けるな！ たとえ胸の傷が痛んだとしても！ 逃げるんじゃない！ そいつから逃げてしまえば、お前は一生、負け続けることになる」

——にげ、ない。

「そうだ！ 逃げるな！ 信じることから……逃げるな！」

——信じることから、逃げるな……！

「それでいい。生きなきゃいけないのが正しさだろう。正しいことは、つらいことだ。「正しいことは、いつだって間違ってる」。だが、逃げるな。どんな選択をしたとしても、正しさに負けるんじゃない」

——ぼくも、ゴッドイーターになれますか？ おじさんみたいな。

「やめろ。せつかく拾った命を、捨てていくんじゃないやねえ。それこそ、俺達がやったことが無駄になっちゃう。ゴッドイーターになんかなるんじゃないやねえぞ。」

だが……ゴッドイーターになんかならなくても、ゴッドイーターのように生きることが出来る。お前はそうやって生きろ。いいな。

それは心を切り裂くような生き方だ……だが笑え、大丈夫さと言って、笑うんだ！」

——「みんな」が、ぼくをみて笑ってくれるように？

「そうだ。後でお前に、俺の好きな言葉を教えてやる。俺はそれを支えに生きてきたし、お前もそうなると思ってる。そう、信じるんだ。」

心配するな、たったの一言さ。たったの一言でも人生は変わる。せつかく拾った命だ、生きてみるもんだ……」

——おじさんは、英雄っていう、人ですか？

「やめてくれ。俺はただの……ただのよう」

——おじさんの名前、きいてもいいですか？

『百田ゲン』——ただの、ゴツドイーターさ」

ゴッドイーター：9 噛

一瞬意識が途切れていたようだ。

トラックの異常な揺れの中、リョウタロウは目頭に力を入れた。動きが鈍い神機では、いくら通常種であつたとしてもシユウの群れを片付けるのに短時間で、という訳にはいかなかった。

赤い雨もある。特殊処理が施されたレインコートは、本来近接戦闘に耐え得る代物ではない。破けてしまえば、それだけで死が潜り込んでくる。

鉛のような神機を繰り、乱戦にあつて敵の攻撃を全て避けきつて、敵を全撃破せねばならないという条件的縛りのある戦い。

リョウタロウをして無茶と言うべき神機の酷使をせねば、通らない戦いだつた。

シールドは罅割れ、銃身はひしゃげ、ブレードは刃筋が欠けてしまっている。

オラクルの輝きが失せた神機は、リョウタロウの求めに静かな沈黙を返すのみ。

一呼吸後、リョウタロウは大きく咳き込んだ。
喀血。

リョウタロウを代表とする神機との適合率が高いゴッドイーターは、それゆえに大きな力を引き出すことが出来る。

だがその分、肉体にかかる負担も膨大なものとなる。

限界を超える神機解放の振り返し、脳神経への負荷によるフィードバック現象である。

これまでリョウタロウはこの反動を、投薬によって抑え付けていた。

適用外の使用を繰り返しては、身体が崩壊してしまう。

神機の制御を失った状態で、強制的に捕食、神機解放(バースト)状態へと移行させたのである。

呼吸は乱れ、眼は霞み、視界は揺れる。

身体中を流れる血液が逆流するようだ。

途切れる意識を繋ぎ合せ、リョウタロウはトラックを走らせる。
身体が重い——それは、感応種の能力圏に足を踏み入れた
からではない。

予感がする。行つてはならないという予感が。

そこに辿り着いてしまえば、絶望を眼にすると、確信がある。
そしてリョウタロウは、郊外の広場へ……感応種の元へとたどり着
いた。

——ああ。

周りの家屋は全て薙ぎ倒されていた。

郊外にあるのは、ネモス・ディアナにあつても、鼻つまみ者達の住
処。

特にこの一角は、親を失くし孤児院にも受け入れられず、扱いに
困つて放置された子供たちの住居があつた場所だ。

——ああ、ああ……。

単体で郊外に飛び去つた理由。
偏食傾向。

邪魔のいらぬ狩り場。

まとまらぬ、取り留めの無い思考が脳裏をぐるぐると駆け巡る。

——ああ……。

新種のアラガミが。

リョウタロウの住処の屋根を引き剥がし。

スナツク菓子のような気軽さで、「中身」をつまみ出して。

その口元が、真っ赤に染まり。

妖艶に、微笑んで。

——あああああああああああッ!!

リョウタロウの思考が真っ白に漂白される。

アクセルを蹴り付けるように踏み込む。エンジンから煙が上がる。
衝突、衝撃。

感応種は軽々とトラックの突撃を、その巨大な羽で受け止めてい
た。

赤いルージュを引いた口元が、弧を描く。

リョウタロウは口付けるようにして、割れたフロントガラスから飛び出した。

そこは感應種の最大能力圏である。オラクルエネルギーの火花が散り、神機がフリーズする。

ゴムの切れるような音。

そして……一閃。

リョウタロウは持ち上がらぬはずの、動かぬはずの神機を振り抜いていた。

腕の筋繊維が、骨が、内側から捻り折れる音がする。

食い縛った奥歯が割れ、胃に落ちていく。

何故神機がリョウタロウの求めに応じたのか。稼働状態にまで引き上げられたのか。それは解らない。

だが、沈黙していたはずの神機は、オラクルの炎を吹き上げ、燃えている。

怒りに、燃えている。

神機に意思が宿るならば、それは間違いなく、リョウタロウと同じ感情を抱いていた。

刃毀れだらけのブレードが、神機は動かぬと高を括り隙だらけだった感應種的美貌へと喰い込んだ。

頭部命中。

結合崩壊。

振り抜かれた神機。そのシールドの半分が碎け散り、ブレードが半ばから押し折れた。

銃身は端から役立たずで、バレットはとうに尽きている。

神機の生態部分から、どろりと黒く濁った粘液が垂れ落ちた。

神機が暴走危険域に突入し始めた兆候である。

これ以上は……。

「にい……ちや……」

か細く、幼い声が聞こえた。

「みんな……まもれな……ごめ……」

声は掠れるように消えていく。

手足を千切り取られた少女がいた。

子供たちのリーダー。寂しいと泣く子らの親代わりになろうと奮闘していた少女だった。

半壊した家屋の中が見えた。見えてしまった。

スタングレネードのピン。ホールドトラップの残りカス。リヨウタロウがもしもの時にと与えておいた、道具類の使用痕。

戦っていたのだ。子供たちは。自分だけの力で。

そうやって生きていつて欲しいと、リヨウタロウが願った通りに。リヨウタロウの助けを、信じて。

倒れ伏す全ての子供たちの身体の、どこか一部が欠落している。

アラガミの偏食傾向である。人体の一部への偏食傾向など初めての例だろう。

これがこの新種全てに共通する傾向であるのか、それともこの固体に限った傾向であるのか、それはわからない。

だが、息はある。痛みに呻く声が聞こえた。子供たちの胸が、肩が上下している。

生きているのだ——だがリヨウタロウは安堵に笑うことは出来なかった。

引き剥がされた屋根から、赤い雨が、傷付いた子供たちへと降り注いで——。

——なんでだ。

レインコートに隠れたリヨウタロウの表情は、ようとして知れない。

——この子供たちがいったい、何をした。

奇跡を願ってはいけなのだろうか。

リヨウタロウは、ここに車を走らせるまでの間、ずっと祈り続けていた。

ゴッドイーターにあるまじき考え、別の場所に感応種が降りて、そこで……とさえ。

——神よオツ！ この子供たちが一体、何をしたアアツ！

これは罪なのだろうか。

選択をしたリョウタロウの。

十人ばかりの子供たちと、数百人の住人を天秤に掛け……そしてリョウタロウは選択した。

榊博士はかつてこう言った。私は小を殺し、大を生かすロジックを認めない、と。

認めないだけで、それが必要不可欠であり何処にでも有り得ることであることは、否定しないまま。

己の心が、精神が、軋む音が聞こえる。

ああ、俺は、選択を間違えたのだろうか。

「

アラガミの、美しい唇から、人間には理解不可能な旋律が送った。

何かを語りかけるように。

その美貌に大きな傷を受けたアラガミは、しかし微笑みを絶やさずにリョウタロウへと向き合っていた。

全ての悲しみを、苦しみを、受け入れるように。

ああ、人から離れたゴッドイーター達と、真つ直ぐに向き合ってくるのは、アラガミだけなのか。

地を駆ける。空を翔ける。

そこには地球上どこでも見られる光景があった。

ゴッドイーターとアラガミとが殺し合う光景が。

リョウタロウの神機が再び誤作動を起こす。オラクルの輝きが神機からとうとう消え失せた。

これでは物理的に決することはできても、すぐに再生してしまうだけだ。

オラクル細胞の結合を絶つことは出来ない。

———どうして……どうして言うことを聞いてくれないん

だ！ お前は！ お前は、俺の、俺を……！

その叫びはもはや、悲鳴に等しいものであった。

神機は活性状態と不活性化を行き来し、まるで安定しない。

決定打が無い……何か、手を打たねば。

地面に広がる赤は、天から降る雨の色だけではない。子供たちの命

の色だ。

何とかしなければ。何とか……何とかしなければ。

焦りは失態に通ず。

リヨウタロウの足を、神機の重みが絡め取った。

動きの止まったリヨウタロウを、“羽拳”が強かに打ち据える。

神機の“本体”でそれを受けるも、身体は鞠のように地面を跳ね、土に塗れていく。

転がるリヨウタロウの目に、潰れたトラックの荷台が映った。

アラガミの追撃が迫る。

両の羽を広げ、抱き締めるかのように叩き付ける攻撃。

リヨウタロウの身体は吹き飛ばされ、トラックの荷台へと突き刺さる。

沈黙……トラックの荷台へと叩き込まれたリヨウタロウの気配が消えた。

仕留めたか。舌なめずりをしつつ新種がにじり寄る。

巨大な爪先を器用に使ってカーゴの保護シートを剥がしていく。果実の皮を剥がすように。

もうたまらないと顎をかつと開けば、荷台には期待した通りのリヨウタロウの姿が……そして、巨大な機械群が積み込まれていた。

——リンクサポート……デバイス。

試々作機、と銘打たれたその機械の刻印を、無意識にリヨウタロウの舌が拾う。

リンクサポートデバイス。

それは、リツカが送ると述べていた支援機であった。

荷台の全てを埋め尽くす巨大な機械群からは、腕輪と神機に接続するための簡素なコードが数本垂れ下がっている。いずれは遠隔操作へと切り替えるのだろう。

手早くコードを装着しながら、デバイスの電源を叩き起こす。

仕様書は受け取り時に流し読みしたのみ。しかし、その機能だけ把握していれば十分である。

リンクサポート・デバイス。

それは、神機の力を機械的に引き出し、一定区域に影響させる新技術。

リツカの持てる技能全てを注ぎ込んだ、集大成である。

神機はゴッドイーターを適合率という形で選んでいる。人が神機を選ぶのではない。神機が人を選ぶのだ。

そのため、偏食因子への適正が認められたとしても、ゴッドイーターとなれる者は数少ない。

死蔵される神機の数の方が、圧倒的に多いのが現状であった。

ここにリツカは着眼を得た。

神機は人造のアラガミである。それはすなわち、神機毎に「個性」というものが存在するということだ。

この使われぬ神機の個性……オラクル細胞からなるエネルギーを、機械的に引き出し、散布することが出来たのだとしたら、それは現場でゴッドイーター達の支えとなるのではないか。そう考えたのである。

つまり、神機によるオラクルエネルギーの広域放射……「感応種の持つ影響力と同じ」効果を、機械的に発生させることが可能だと言い換えてもいいだろう。

偏食波には、オラクルの波を。

これだ。これに賭けるしかない。

一瞬の判断によって、リョウタロウはリンクサポート・デバイスに神器を突き入れていた。

腕輪に連動したスターター機構が、デバイスに火を入れる。

リンクサポート・デバイスとは、神機の「特性を引き出す」機能を持つ。

つまり、神機が本来持つ力を限界を超えて引き出すということだ。しかし、半壊した状態の神機で使用すれば、どうなってしまうのか。差し込んだ柄から伝わる振動が、その先を予想させる。

——なあ、俺さ、お前に謝らなきゃいけないことがあるんだ。

新種がアラガミの本能を剥き出しに襲い来る。

神機が激しく振動する。

生体部分が黒い粘膜を撒き散らした。

折れた刃を、割れたシールドを、ひしやげた銃身を、
“神機が”覆い尽くしていく。

——名前……付けてやりたいって、ずっと思ってたんだ。
いつも先延ばしにしてごめん。今からでも、遅くないかな？

告げる。

——お前の名前は『——』。

その名を聞いたのは、リヨウタロウと、神機のみ。

一際大きな神機の震え。それは歓喜の震えであったようにリヨウ
タロウは感じた。

絆である。根拠は無い。しかしそう感じた。

人と、神機の間には、確かに絆が結ばれているのだと。

その瞬間である。

リヨウタロウの視界にノイズが奔る。感応現象による視界ジャツ
ク、イメージの伝達である。

これは、神機のイメージなのだろうか。

そこは戦場だった。

これまでリヨウタロウが経験してきた全ての戦場がそこにはあつ
た。

同じ戦場に、たくさん戦士が立っていた。

否、一人の戦士が……多くの戦士の姿を持っていた。写真をコマ送
りするかのように、次の瞬間には一人の戦士が、異なる姿の戦士へと
変貌していた。

何人もの腕輪を付けた戦士が……ゴッドイーターがそこにいた。

男、女。青年、少年。

兄妹の戦士、半アラガミの戦士。

菓子の神機を持った戦士、美女を模した生きる神機を持った戦士。
数多のゴッドイーター達の姿を、リヨウタロウは瞬間、幻視した。

彼等の姿形、特性、性別や産まれは全て異なるものであった。

だが、彼等にはただ一つの共通点があった。

姿形は違えど、その手の内にある神機が全て同じものであるという、共通点が。

異なる世界であった。

だが生きている。懸命に生きている。

ゴッドイーター達が、生きている。

俺だ。あのゴッドイーター達は、俺なんだ。

何の理由もなく、確信を抱く。

あの戦士たちは、別の世界に生きる俺だ。

一目で理解した。

みな、笑みを浮かべる度に、魂が涙していた。

大丈夫だ、と自らに言い聞かせて。

身を斬るような苦しみの中、それでも生きていた。

自分自身さえ勘違いさせられない、嘘をつきながら。

彼らがふとこちらを振り向いた。

その手に同じ神機を持って。

たくさんの「プレイヤー」の瞳の中に、リョウタロウの姿が映る。

彼らが差し伸べた手を握る。

感応現象。

彼らの目に映る、自分の目に映る「世界」が広がって――

人はこんなにも弱く、儂く、愚かで、醜く。

地球はこんなにも冷たく、残酷で、痛みにあふれ、矛盾に満ちてい

て。

ああ、なんて「世界」は、こんなにも美しいんだろう。

恐れが消えていく。

焦りが、胸の奥にこびり付いていた徒労感が消えていく。

繰り返すのだ。

何度でも、何度でも。

それがたとえ、無駄だと解つていても。

悲劇に塗れていても。

――ゲンさん……俺は、なります。ようやく今、ここで、こ

れから。これから俺は、選択をし続けます。希望の木を植えるために。だから、これから、これから俺は……！

視界が現実を映し出す。

今の光景は一体何だったのだろうか。脳が作り出した都合の良い白昼夢であつたのだろうか。

考察を挟む余地もなく、新種が目の前に迫っていた。

イグニツション。

リンクサポート・デバイス、起動。

新種から放たれた偏食波と、神機から放たれるオラクルエネルギーとかぶつかり合う。

目に見えない力の波が喰い合い、絡み合い、火花と異音を撒き散らす。

打ち勝ったのは、リョウタロウの神機。

新種は仰け反り、大きな隙を晒す。

勝機。

——俺は……ゴッドイーターだ！

この瞬間、リョウタロウは……その神機は、『ゴッドイーター』として己の使命を遂行せんとしていた。

その慟哭を刃に乗せて。

正しくリョウタロウと神機は、今まさに一心同体……否、〃人神同体〃となっていた。

胸の痛みを武器にして。

リンクサポート・デバイスが黒煙を上げる。

想定外の出力を吐き出したためだ。

接続された神機に致命的な損傷が生じたことを示すアラートが、けたたましく鳴り響く。

無視だ。そんなものは鳴らしておけばいい。

構わないさ、と黒い粘膜を垂れ流す神機が言ったような気がした。行こうぜ、と。

リョウタロウは腹の底から雄叫びを上げた。

リンクサポート・デバイスを鞘の様にして振り払い、その内側から

神機が姿を現した。

黒い。

黒い、神機であった。

まるで人の全ての業を背負ったかのような、黒い……眩く、尊い輝きに包まれた神機であった。

神機の生体部分が、ブレードやシールドの欠損を補い、“己自身”を武器としていた。

完全に暴走している。

神機の専門家ならば、一目見てそう評しただろう。榊でさえ、同じ分析を下すかもしれない。

だがその神機はリョウタロウを呑み込むことはない。

なぜならば、リョウタロウは、神機は、今一つとなっているのだから。

ゴッドイーターに。

『Thank You For Playing——SAY
ONARA R—You』

リンクサポート・デバイスが瓦解する寸前、液晶モニターが煌いたような気がした。

ああ、さよならだ。

さよなら、相棒。

胸の痛みを武器にして。

『壊刃マインドベイン』……吼ゆる。

——『無尽ノ太刀・蒼』。



【ネモス・ディアナ：第二次感応種防衛戦】
犠牲者少数。

内、ほとんどが極東支部より派遣されたゴッドイーターである。

ネモス・デアナの犠牲者は、身寄りを失った幼児のみ。瀕死の重傷を負うも、医療センターへと搬送される。

以下、極東支部所属ゴツドイーターの被害状況を述べる。

極東支部第一部隊隊含む13名。

内、殉職者5名。『黒蛛病』罹患者4名。重傷者2名。軽症者2名。

特別筆記事項：加賀美リョウタロウ。
軽症。

神機全損、破棄処分。

ぐっどいーたー：10 噛 For 2

アラガミの襲撃から三日。

今日もまた、朝が来た。いつもと変わらぬ朝が。

どこからか工業油の臭いに混じって、朝餉を作る匂いが漂ってくる。

ネモス・ディアナは活気を取り戻し、人々は束の間の平和の中に安堵の笑みを浮かべ、懸命に生きていた。

喪失と再生。アラガミが発生して以来、地球上で幾度となく繰り返されてきた光景だ。

幾度壊されようとも、喰われようとも。人の営みは変わらない。

それもまた、ある種の戦いであるとも言える。

ゴッドイーターは、そんな「戦う者達」を守るために創り出された存在だ。

戦い、守り、そして喰われていく……例え誰にも感謝されずとも。愛してくれと言うことはない。

ここにも一人ゴッドイーターがいた。

それは、戦いが終わり、そして戦う力を失ったゴッドイーターだった。

彼は折れた腕を包帯で括り、片腕を土塗れにして土を掘り続けている。

一心不乱と言うに相応しい有様で、作業に没頭していた。

「リョウ……君。その……」

無心に土を掘るリョウタロウに、ユノは何と声をかけたらいいのか、解らずにいた。

後ろには、同じように声をかけられず、口を尖らせて手持ち無沙汰ですといった風なサツキが。

———あの子達に、「ワクチン」を打ってきた。

「『ワクチン』って……それちよつと、リョウタロウさん、あなたまさか」

———『ワクチン』さ。

サツキの指摘に一言だけ返したりヨウタロウに、ユノは言葉を飲み込んだ。

ユノは知っている。

アラガミや“流行り病”にやられ、もうどうしようもない者へと“ワクチン”を打ち、“楽にしてやる”のだということを。

リョウタロウがナチ総統……父へと今回のアラガミ襲撃の報告に出向いた折に、何かの話しをし、そして自らがワクチンを打つと申し出たことを。

この三日間、彼はどんな思いをしたのだろうか。

それを考えるだけで、ユノは胸が張り裂けるような気持ちになる。

仲間達の死の報告を受け、命を救った子供たちは感染の危険性から医師に手術を断念され、そして自らの手で……。

その決断の、選択の苦しみはいかほどのものか。

闇だ。

闇が彼方まで広がっている。

葦原ユノという少女は、世界を知らずにいた。

病的な気質のある父に、幼少期から世間と隔離されて生きてきたユノにとって、外界にはもっと希望があるものだとばかり思っていた。

ユノとて人類の危機的状况は弁えている。壁の向こうは夢で溢れているなどと、そんな楽観的な思いは抱いていない。

だが、これほどか。

これほどまで救がないものなのか。世界には。

ユノという世界知らずの少女は、リョウタロウという男を通して世界を見た。

そして世界の厳しさ、冷たさ、恐ろしさを知った。知ってしまったのだ。

曇り空は依然として晴れ渡ることはない。

だが、太陽が覗いたその瞬間が最も危ないのだと、先日の天気雨から皆理解している。

分厚い雲の中に、赤が混じっていたら。そう考えると、恐ろしくて外には出られない。

暗がりの中、無力な少女はただ震えるしか出来なかった。

——あいつらに言ったんだ。

震える己の両肩を抱くユノに背を向けたまま、リョウタロウは言った。

土を掘り続けながら、額に滲んだ汗を拭って。

——すぐによくなくなる。明日には元気になるから、また木を植えよう。あの時の続きをしようって。

背筋を伸ばして腰を叩くリョウタロウ。

ユノは下唇を噛んだ。

血の味を舌先に感じた。

「ハッ……それで、あの子たちに明日なんかこなかったわけですが」

——うん。

「あなたが遅れたせいだね。そこんどこわかってるんですか？」

——うん。わかってる。

「じゃあなんでそうやって暢気に木なんて植えてるんですか、あなたは。そんな風に……」

サツキはリョウタロウの肩に手を置いて、なおも作業を続けようとしたリョウタロウを振り向かせて言う。

「なんて顔で、笑ってるんですか……」

リョウタロウはいつも優しい笑みを浮かべていた。

その笑みにどれだけユノは勇気を貰っただろう。

いつかきつと、世界に羽ばたいてみたいと思える程に。

だからユノは思ったのだ。この途切れそうな笑みを浮かべている人物は、本当にリョウタロウなのかと。

笑みとはもつと、暖かく、そして穏やかなものであると思っていた。それしか知らないことが、ユノが物を知らないことの所以であるのだろうか。

リョウタロウの笑みは、切なく、苦しく、ユノの胸を締め上げた。

——強い子たちだったよ。みんな知ってた。意識が戻って、俺を見て、ワクチンのことも解ってた。でも笑ったんだ。ありがとうって。ここにきて初めてだったよ。ありがとうって言われたの

は。

「……引退しなさい。あなたはもう、ゴッドイーターを続けてはいけない」

人を茶化す癖のあるサツキが、何時になく真剣な顔付きで諭すようにして言った。

辞めることはない、リヨウタロウは小さく首を振って答えた。

——迷って、苦しんで、泣いて……世界のあんまりもの厳しさに折れそうになった時は、ある言葉を思い出すんだ。俺の恩人が、くれた言葉を。

サツキさんの言った通りだった。そう言って、リヨウタロウは再び作業へと戻る。

——それが俺の答えだよ。答えはもう、出ていたんだ。

「それは、何……？　お願い、教えて」

ユノの問いかけは、好奇心に駆られたからでも、リヨウタロウを思いやつてのものでもない。

それは切実な、世界の寒さに震える少女の、恐怖心から来るものであった。

リヨウタロウは、雲の隙間から射し込む輝きを、眼を細めて仰ぎながら言った。

雲が晴れていく。

——『たとえば明日世界が終わるとしても、私はリンゴの木を植える』——。

その瞬間、ユノの胸に到来した感情を、魂の震えを何と言い表せばいいだろうか。

世界が一瞬でクリアに、色鮮やかに彩られていく。

闇の彼方から、遠く小鳥の歌が響く。

狂える心の嵐が止んだ。

心に、魂に、穏やかな風が舞い込んだ。

それは歌となってユノに届く。

光りだ。

光りが雲の隙間から、リヨウタロウを、世界を照らしている。

輝きに向かうリョウタロウの眼。

悲しみを見詰めたその瞳は、優しさを湛えていて。

「ああ——」

明日世界が終わるのだとしたら、今日、リンゴの木を植えたところで意味など無い。

実が結ぶことを知ることもなく、世界が終わってしまうのだ。

それは無駄な行いであると断じることができる。

言えるだろうか。同じことが。

リンゴの木も、それを植えた人も、実りを待つ人々も、そして世界そのものも全てが無になって消えてしまうとしても。

それでも、私は今日、リンゴの木を植えるのだと。

「ああ、ああ——」

それは無駄な努力かもしれない。

それでも。

全てが無駄になるとわかっているとしても、最後まで静かにやり遂げる。

それが人の営みで。

そして世界へと立ち向かう、勇気なのだ。

ユノは今、断言できる。

心に勇気が灯った、今ならば。

その火はリョウタロウが灯したものだ。

心が、魂が理解した。

勇気の断片（かけら）さえあれば、未来は私たちを見捨てることはない。

リョウタロウはそれを、初めから知っていたのだ。

絶望を拭った瞳に、慈しみを宿して。

ユノは微笑みを浮かべようとして、しかし失敗した。

想いが両の眼から零れ出していく。

今まさに、ユノもまた、答えを得たのだ。

「ああ、ああ、あああ……ッ！」

天を仰ぐリョウタロウの背を、ユノは掻き抱く。

心の赴くままに、ユノは胸を、喉を振るわせた。

最も古い歌とは、感情の迸りである。心を抑えきれぬ女の涙と、叫びであるという。

原初の歌（アリア）が響く。

リヨウタロウは天を仰ぎ、サツキは眼鏡を外して目元を拭った。

ユノの声に隠れるように、ここにも始まりの歌があった。

ああ、世界中に届けたい。

ユノは心からそう思った。

どうか耳を澄まし、聞いて欲しいと。

たとえ明日がこなくても。

この世界が闇に包まれているのだとしても。

闇の彼方から声が聞こえるはずだ。

ユノには聞こえていた。

リヨウタロウの背から聞こえる心臓の音。

とくとくと、静かに脈打つその音は、眼を閉じた暗闇の中にあるユ

ノにとって、一筋の光りのように感じる。

それはリヨウタロウの心の声が聞こえるかのようにだった。

ああ、光りの声が呼んでいる。

失くした日々の向こう側から。

夜明けの声が呼んでいる。

あの新しい風のほとりで。

ユノは理解した。わかったのだ。

明日を照らすものは太陽じゃない。

心に在る一筋の希望……光なのだ。

その光を信じて、ただ歩き出せばいい。

空が晴れていく。

世界が光りに満ちていく。

ユノは新たな夜明けを見た。

サツキは闇に立ち向かう男の強さを知った。

光りは全ての上に訪れ、昨日の涙を空に還すのだと。

いつもと変わらぬ日々を守るために。

どれだけの失敗を重ねようとも。悔しさに打ちひしがれようとも。

守ったはずの人々に疎まれようとも。

たとえ来る未来に終末捕喰が待ち受けていようとも。明日が終わりを迎えようとも。

ユノは一つの答えを得た。確信を得た。

きつとリヨウタロウは、リンゴの木を植え続けていくのだということ。

『光のアリア』が、ネモス・ディアナを優しく包み込む。

リヨウタロウの背に、この世で最も清らかな雨が降り続けていた。

□ ■ □

よう、という気安い呼び止めに、リヨウタロウは思わず足を止めた。極東支部職員用に設けられた出入ゲートの脇に、片腕をローブで隠した初老の男がもたれ掛かるようにして立っている。

白髪が混じった髪に、深い皺と無精髭が蓄えられた漢臭い顔を忘れることは出来ない。

かつてリヨウタロウが憧れた、今も記憶の中に眩く存在し続ける漢。

始まりのゴッドイーター。

——— ゲンさん。どうしてここに？

「ひよっこ共の教導の一貫でな。お前さんの戦闘データののおかげで、感応種対応マニユアルが出来上がったもんだから、ちよいと揉んでやりにきたぜ」

——— そう、ですか。でも俺、ほとんど何も出来ませんでしたよ。感応種は普通のゴッドイーターじゃ歯が立たない。

「まあマニユアルつつつてもあれだ、罔になっておびき寄せて、スタングレネード炊いて尻尾巻いて逃げろっただけだがな」

——— 打つ手なし、ですか。

「腐るなよ。罔もゴッドイーターにしか出来ない仕事さ」

リョウタロウは、何かを言わんとして口を何度か開いて閉じてを繰り返し、しかし決意したように一度だけ強く唇を結んでから言った。

——— 教導で来られたのなら、感応種襲来のデータ読まれましたよね？

「おう、報告書はみたさ。まあな、惨いもんだ……手足を縛って戦えて言ってるようなものだ、あれは」

——— 俺、思ったんです。アラガミ被害は増加の一方を辿っているのは、世界中で悲劇的な事例が絶えないのは……その、あんまりにも、出来すぎてるって。

「気付いたか」

深い溜息と共に、ゲンは無精髭をざらりと撫でた。

背筋に氷を突き込まれたような感覚。

リョウタロウの肌が悪寒に粟立った。

「相手が獣同然なら、人類はここまで追い詰められちゃいない。罨を仕掛けて、追い払えばそれで済む話だ……だが、そうはならない。奴等はいつも、人類の想像の上を行く。

それはなぜか解るか？　なあ……お前、アラガミの目を真つ直ぐ前から見詰めたことは、あるか？　そこに映された自分の顔を見て、何か感じたことは？」

——— そんな、まさか、でもそれは。

馬鹿な。

そうは思っても、しかしありえない、とリョウタロウは完全に否定することは出来ずにいた。

——— アラガミが、知性を持って……戦術行動を執っているなんて。

「仮定の一つとしか言えんがな。だがお前は知っているはずだ。禁忌種に近付けば近付くほど、アラガミは人の似姿となっていく。

知能だって、獣のそれとはかけ離れているはずだ。人間により近いものへ……いずれは、心を搭載したアラガミだって出てくるかもしれない」

ゲンの指摘に、リョウタロウは一瞬はっと息を飲む。

心を持ったアラガミ……月の輝きを見上げる度に思い出すのは、彼女のことだ。

月が緑化した原因そのものとなった、心あるアラガミの少女。

その名を、『シオ』という、真つ白な女の子のことを。

そう、女の子、だ。

リョウタロウは、彼女と関わった全てのものは、彼女をヒトであると認識していた。

アラガミであって、人の境界を踏み越えた存在。

神機ですら意思を持つというのに、アラガミが知能を持ってない道理があるだろうか。

ゴッドイーターとなり任務を繰り返す内に、おかしい、という疑問が湧き上がる瞬間が何度もあった。

戦闘中にレーダーの網を搔い潜るかのようにして、急に戦闘域へと乱入してくる中型種。

データにないアラガミの強襲。

本来生息域の重ならないはずのアラガミの共闘。

相反する属性を持つアラガミの共存。

こちらが嫌がるような行動を……作戦の裏側を搔く、想定外の行動をアラガミが執ったことを、リョウタロウは幾度となく経験している。

アラガミは進化する存在であれば、進化途上の道筋を模索する行動なのだ。そう榊が説明したことを覚えている。

科学者の視点からすれば、その通りであるだろう。科学的な分析からすれば。

だが。

もしそれが、アラガミの知性による行動であるとしたら。

こちらの“嫌がる行動”……すなわち、“戦術行動”を執らんとした結果なのだとしたら。

模索しているのは、“人類の攻略法”であるのだとしたら。

ゴッドイーター殺しとも言うべき感応種の能力は、つまりは。

「どうにも、出来すぎた悲劇つてえのが在り過ぎる。ゴッドイーター

は常に選択を迫られるものだが、それにしたって、家族と仲間のどちらを取るかなんていう嫌らしい天秤ばかりじゃねえか」

リヨウタロウの目の前にも、その天秤は何度も現れた。

慕ってくれた教え子か、懐いてくれた少女か。

冷たい数多くの住民達か、温かな少数の子供たちか。

まるで、どちらを生贄にするのか、と問いかけてくるように。

アラガミの全ての行動は、その天秤を作り出すためにあるようにしか思えない。

ならばきつと、アラガミには悪意のOSが搭載されているに違いない。

「苦しめる」ということが、人類を衰退させるに最も効率がよいのだと。

邪悪な知性を感じる。

もつと巨大な……「地球規模」の何かの意思が、アラガミを通じて人類を滅ぼさんとしているかのようだ。

「悲劇という手段を使って」。

「まるで『神』のような存在がいて、世界を終わらせよう終わらせようとしているみてえだ……そのために邪魔な人間の、『意志の力』を削ごうとしている。そんな風を感じるぜ。」

「こりや俺の考えすぎかね？ それとも、考えが足りないのか？ ぞつとしねえよな……」

——地球が、人を滅ぼそうとしてるっていうんですか？

アラガミを使って……悲劇を起こせば、人を最も効率良く滅らせるから……。

「赤い雨もそうだ。ありやもしかすると、地球が人を滅らすために降らしているのかもしれない。ま、勘だがな」

百田ゲンという初老の男は、物事の本質を見抜く力に優れている。それは経験が為せる術であるのかもしれない。本人の言う通り、ただの当てずっぽうの勘であるかもしれない。

だが、ゲンという男が口にすれば、ただの勘という言葉が持つ重みは、まるで異なるものとなる。

リョウタロウの両肩に、ずしりと重力が……地球の意思が押し掛かったような気がした。

「で、だ。お前はどうするよ」

——俺は。

「もしこれが星の意思なのだとしたら……人に死すべしと地球が言っているんだとしたら、お前はとうするんだ？」

——俺は、負けたくない。負けたくないです。

「それでいい」

男臭く笑うゲンは、それ以上を語ることはなかった。

男の決意を問うことに、多くの言葉は不要である。

「そういや、赤い雨に関しても色々わかったようだぜ。偏食因子が関係しているのか、赤い雨への抵抗力がゴッドイーターにはあるらしい。」

皮膚からの二次感染がしにくいとか、発症してから死ぬまでの期間が長いってだけだが、それがわかっただけでも大きな進歩だ。

榊博士の言うことにや、これもお前のデータからわかったことらしい。正式にこの病は『黒蛛病（こくしゅびょう）』と名付けられたんだと」

——黒い、蜘蛛みたいな痣が浮かび上がるからですね。

安直ではあるが、理解しやすい名前だ。

黒い蜘蛛は不吉の現れである。

死を運ぶ黒い蜘蛛……恐れは危機感につながり、赤い雨への民間対応はより一層進展することだろう。

雨が降りそうになつたらすぐに家に帰る、これだけでも大きな違いだ。

「それで、お前さんこのまま帰っちゃうのか？ 誰にも、何も言わずによ」

ゲンの不意の言葉に、リョウタロウは一瞬返す言葉を失った。

それは凶星を突かれたからではない。

全て解っているという様に、ゲンが苦笑を浮かべていたからだつた。

「ゴッドイーターがたった一人で、逃げるように街を出て行くのはな……女が理由か、それとも『膝小僧を擦り剥いたか』のどっちかだつて相場が決まつてる。」

「そうやって転んで立ち上がった……かさぶたをこさえてくのがゴッドイーターつてやつだ。つれえなあ」

だが、とゲンは不思議な感情を浮かべた眼で、リョウタロウを見る。その灰色の目に浮かんでいるのは、なんだろう。

まるでリョウタロウが、ゴッドイーターが守るべき対象を見るかのような。

「負けたくない、か。その意気だ。地球によ、『かかって来い』と言つてやれ」

——はい。もう少しだけ、頑張ってみます。

「ああ、お前なら出来るさ。お前ならな……。それじゃあよ、最後まで格好付けていきな。また、極東でな」

手刀を切るゲンに頭を下げて、リョウタロウはゲートを潜る。

このまま外部のピックアップポイントまで徒歩だ。

神機を失ってしまった今後に不安はある。

だが、やれることは沢山あるはずだ。

さしあたっては、ここに来る前に急遽隊長職を押し付けてしまったコウタのサポートか。

メールで今朝、正式に隊長権限が移譲されたと報せがきた。正式な書類は今夜にでも送られてくるだろう。

これで名実共に、ヒラに戻ったことになる。

神機を破損させることは、ゴッドイーターとしては眼も当てられない程の失態だ。

大ポ力をやらかした人員を、また取り上げることもないだろう。

ゲンやツバキのように、後進を育てる、新たな道を歩むのもいいだろう。

政治機構や物資運搬、兵站を学びたいと言っていたアリサの個人教師をしてやるのもいい。

まだまだ、戦いは終わりそうにない。

たとえ神機が無くなったとしても。

それでも自分は、ゴツドイーターなのだから。

「しかし、本当に何が起きるかわからんもんだな」

立ち去るリヨウタロウの背に、独り言としては大きすぎるゲンの眩
きがぶつけられた。

振り向くなどという意図を読み取り、リヨウタロウは背を向けたま
ま、首を傾げる。

「あの時助けた子供が、今じゃ極東にこの人ありと謳われるゴツド
イーターになっちまうなんてよ」

——ゲン、さん。俺のこと、気付いて……。

「よくやったな、坊主」。お前は立派だよ。良いゴツドイーターに
なった。本当にな」

リヨウタロウは一瞬だけぽかんと唾然とした表情となった。

視線が左右に、誤魔化すように揺れた。自分に相応しくない宝石を
渡されたような、価値あるものをどう扱ったらよいのか解らない。そ
んな様子だった。

そしてリヨウタロウは、震える手を眼に当てた。

顔を拭うようにして、ネモス・ディアナを去っていく。

誰もその顔を見る者はいなかった。

リヨウタロウはたくさんのものを失った。

失い続けて、それでも戦うのだろう。

これから先も失い続け、戦い続けていくのだろう。

ほんの少しの報いを支えにして。

「男の涙は見ないフリをするもんだぜ。さ、お嬢ちゃん、家に帰りな」

「……気付いてたんですね」

「まあな。だから俺が出て行ってやったんだがな。あの坊主はやたら
と鋭いからな」

「リヨウ君は黙って出て行ってしまっただって、わかってました。羨
ましいです。私は、何も言えなくて……」

「追いかけてな」

「えっ……っ？」

「今じゃなくてもいい。お前さんのやり方でな。あいつはゴツドイーターだからよ、戦う以外の生き方はもうできねえ。」

だから、何か伝えたいことがあるなら、追いかけていかなきゃいけねえ。戦いの場にな」

「戦いの、場……」

「確か、お前さん歌が得意なんだって？　じゃあそいつを武器に、世界に繰り出してみるといい。戦いにいくんだ。行きな、お前さんの戦いへ。戦え。そうすればきつと、どこかで会えるだろうさ」

「私は……私も、戦えるでしょうか。リヨウ君みたいに」

「それを決めるのは、お前さん次第だ。一つ良い言葉を教えてやる。夜が怖ければ歩かねばならない……一歩、歩けば一歩分、朝が近くなるのだから。つてな」

「それは……ええ、素敵な言葉ですね。そつか。うん。ただ、歩きだせばいいんだ」

「若い内は何でもやってみるもんさ」

「まだまだ現役に見えますよ？」

「世辞なんぞ言うんじゃないやねえやい。まったく、俺も焼きが回ったもんだな……若いもんの色恋の世話までするたあな」

「色恋なんて！　その、そんなこと、その……」

「好いた男と同じ世界を見れるのが、きつといい女ってやつなのさ。世界を見りゃあ、きつと素直に頷けるようになるさ」

「はい……はい！　私も、踏み出そうと思います。リヨウ君みたいに、諦めずに……だからきつと、また！　リヨウ君に会うために！」



しかし、こう、ハグしてもらったときの背中感触。
えがったのう……えがったのう！

発展性を残した素晴らしいおっぱいだった！

ありがとう極東。ありがとうネモス・ディアナ！

しんどいことも一杯あったけど、まあそれは他の所でも同じことがあったわけで。

アフターケア最高。あの柔らかさだけで全てが救われた気がします。

うおおお、み、な、ぎ、つ、て、き、たああああああ！

こいよ地球！ かかってこいやあ！

地球まじでイージー！

あいつ自然災害しか攻撃手段ないから、俺の格闘戦にもつれ込めば楽勝。超余裕。

溶けた氷の中に恐竜がいても球乗り仕込み。

ぱっかーん！ 地球割っちゃう！

リヨウタロウ勝利宣言。

とっても簡単！

「でさー、エリナとエミールがさあ……ねえリヨウ、聞いてんの？」

はいはい、コウタ。

聞いている聞いている。

上田妹と上田2号が仲悪いんだっけ。

俺ほとんど面識ないんだけど……っていうか2号はともかく、極東の新人達に普通に俺、避けられてるみたいだし。

なんかソーマから聞くとところによると、俺の名前が出てくると特に上田妹が拒絶反応出ちゃうとかなんとか、それほんとなの？

今の第一部隊ってどうなってるの？

「なんだよそれ！ ちょっと離れてたらもう他人事かよ！ 俺、リヨウが隊長やれっていうから、色々頑張ろうって思ってたのに。リヨウが隊長だったから、俺……俺……！」

コウタ……。

「どうして欧州から帰って来たと思ったらいきなり俺に隊長やれなんて言って、そしたらまた欧州に行っちゃって、そんでいつの間にかまた帰ってきて……えっ、マジでリヨウのスケジュールどうなってるの？」

いきなり素にならないでくれませんか？

いや、ほんと俺もどうなつてんのかと榊さんを問い詰めたい。小一時間ほど問い詰めたい。

でも命令されたら従うしかないのが下っ端の悲しいところですよ……。

「この報告書おかしくね？ 一人で一個師団並みの戦果とか、ん？ は？ え？ えっ、これおかしくね？」

はっはっは、お前も隊長になった自覚があるようだな。

あれだけ書類見ることにも触ることも嫌がってたコウタ君が、ほんともう見違えるようになってちやつて。

隊長権限とかで見たくもない陰謀書類とかばんばん回つてきちやつてもう大変だぞ！

「いや、ネモス・ディアナにうちの新人たち研修に行かせるんだから、先任の活動くらい確認するって……ええと、向こうでリヨウは、朝起きて飯食つてトレーニングして出撃して出撃して出撃して、そんで帰つてきて飯食つて寝る前に出撃して寝てた？ ネモス・ディアナでも以下略？ ん、んん？」

何かおかしな点でも？

あるよね？ おかしな点、あるよね？

ほら、聞いていいよ。聞けよ。

働きすぎじゃね？ って言えよ。

言ってくれよう……聞いてくれないと泣くぞう……。

恥も外聞もない泣き方するぞう……絶対めんどくさいぞう……。

全部神機様がやれつていったからあ……。

うおおん神機様あ……。

「まあ、リヨウだしなあ」

スルーするのやめてくれませんか!?

その、俺だしな、みたいなセリフ、常套句になつてんじゃん！

やめて！ お願い！

「その、神機のこと、残念だったな。でも俺さ、あんまり心配してないんだ。たぶんリヨウはまた、ゴッドイーターを続けることになるよ。

ゴッドイーターじゃないリヨウなんて、想像つかないもん」

それは喜んでいいんですかね？

ゴッドイーターやるぜーって言ったけどさあ。

天職じゃないと思うのは変わらなすんだよね。

あんまり向いてないんだろうなあ俺。

神機様もいなくなっちゃったし、これからは自分で全部やってかないと。

そうじゃなきゃ、神機様だつて安心してさ……。

「それより聞いてくれよ。俺、隊長としてやっていけるのかなあ。リヨウが戻ってくるまで、極東を守るんだつて、そう思つて頑張つてきたけど……なんか自信失くしちゃうな。リヨウみたいにくまく皆をまとめられないや」

まとめてた覚えはないけどね。

ソーマとかアリサの顔色があがつた覚えはありますけどね。

あいつら扱い難しすぎなもの。

だからコウタ君、君に魔法の言葉を教えてあげよう。

「魔法の言葉？」

初期アリサよりマシ！ ソーマよりマシ！

「た、確かに」

納得してくれたようだね。

部隊員達の中が悪くてどうしようもないつてなつた時、ぜひこの言葉を思い出してくれたまえ。

それがお前の支えとなつて、未来へ進む標となるだろう。

「でもほんと、あの頃のこと思い出すとリヨウは苦労してたよなあ。俺さ、やっぱリヨウに隊長でいてもらいたかつたなあ」

やめてください。

せつかく押し付けげふんげふん！

楽になつげふんげふん！

もう勘弁してほしげふんげふん！

海外に引つ張られていくようになつちやつたから、極東を守る人間が必要だつた。

相応しいって思ったから、アリサでもソーマでもなく、コウタ。お前を指名したんだ。

いや決してあの二人に隊長やらせるのは流石にないわーと思ったからでもコウタなら頭悪いしメンタルも強いし適当にそれっぽい理屈言えば断らんだろうと思ったからでもないぞ！

でも最初の内が大変だつていうのは、その通りだな。

コウタも色々やらされて駆けずり回ってるんだろ？

特務はほんと、大変だよなあ。

隊長下りても特務漬けとか、なんなんだよほんと。

リンドウさんとかレンに「パパは外にすんでて、お家に遊びにくるの？」って言われてガチへこみしてたし。

「んん？ 特務……？ ん、んん？」

ん、んん？

え、ちよつと、何その反応。

まさか。

「いや、第一部隊の隊長が特務やらされるとか、ソーマと前支部長じゃあるまいし、そんなの都市伝説つしよ。ないない、ありえないって」

はああああ？

はああああ!?

何それ、何この感情？

何で隊長なのに特務がないの？

納得いかないし！

これ納得いかないし！

ちよつと待って、それなんで俺だけやらされたの？

納得いくわけないし！

シツクザール支部長との一件はしようがないにしても、榊さんからの特務は山ほどあるでしょ!?

「あーそいえばリョウ、隊長になってから極東支部にいた時は、なんかいつも単独任務してたよなあ。なんだっけ、本部職員さんの接待とか、視察で接待戦闘？みたいなやらされてたんでしょ？」

現場への負担が大きすぎるって今はそんなのなくなったから、俺は

部隊のことだけ考えてたらいいから、リヨウよりは楽させてもらって
るよ」

なにそのバックストーリー。

聞いたくなかったし。

いやぶつちやけるとね、俺と同じ苦しみを味わうがいいと思ってだ
ね。

あああ……これへこむわああ……これすんごいへっこむわああ
……。

コウタ、お前にはがっかりしたよ……がっかりコウタだよ……。

「そんできあ、ソーマとアリサが組むようになってから、ソーマが丸く
なつちやってさあ。なんかずつとブツブツ言ったりしてるんだよ。

『リヨウの写真が……あたり一面に……なんだあれは……』とかさ。
何言ってるんだって話。

アリサもほら、あれ、リヨウがお土産に買って来た帽子。あれいつ
つも撫でながらさ、ほわほわ笑ってるんだぜ。

すつげー可愛いってなもんで、男共に大人気なんだよ。リヨウもう
かうかしてると、横からひよいて取られちゃうぞ」

ああー確かに、あのおつぱいが誰かのおつぱいになるのは人類の損
失だな。

おつぱいはさあ……なんていうか、誰にも邪魔されず自由で、救わ
れてなきやあダメなんだ。独りで、静かで、豊かで……。

おつぱいは皆のものだよな。うん。

「アリサ、フアイト……」

それで、そつちはどうなのさ。

なんだかんだで、隊長つてのはさ、ほら。

色々、決断しなきやいけない立場にいるからな。

「ん……この前さ、アラガミが防壁破って侵入してきたときに、どこを
守りにいくのかって決めなきやいけない時があつてさ……。

あーあ、こんなのぼつかりだよ。俺、その区画に住んでた人数の多
さで選んだんだ。それで結果は……さ。エリナにめちやくちや責め
られたよ」

そっか……。

「でもさ、俺、やるよ。うん。守れなくて、間に合わなくて、うわーつてなるけど、でも俺、戦うんだ。ちよつとでも守れるんじゃないかって、信じてるからさ。リヨウが俺達に教えてくれたみたいに」

コウタ。

お前が隊長になってくれてよかった。

第一部隊を頼んだぞ。

「おう、まかせとけてー！」

色んなことがあつて神様は俺達を見放したのかもしれない。

それでも。

それでも……だよな。

これくらいじゃまだまだ、だぜ。神様よ。

「それでさー、人を氣遣うやり方っていうの覚えてからソーマの奴も、う、モテてモテて。」

「いつつもキヤーキヤー言われてるんだよ。俺の妹もソーマさんかつこいいーつてさあ。この前俺んちにソーマが遊びに来たときも、いかないでーつて服ぎゅーつてさ……。」

「へへ……それほんとは、俺のポジションだったのに……へへ、へへへ……。」

お、おう。

「なんか、書類が……書類が終わらないんだ……リンドウさんの隊長時代の書類まで残ってるし……隊長だから俺……しっかりしないと……ちやんとしないと……書類終わらせないと……。」

「い、いやでも隊長は押し付けちゃったけど、書類は全部終わらせてたはずなのに。」

「サテライト拠点の理論実証とか、エリナとエミールのスピアとハンマーの極東運用データとか、なんか色々あつて。最近じゃ出動してるよりも机にかじりついてる方が多くて……。」

現場に出たら出たで、新人のフォローとかエリナ達の仲介とか感応種の対応とか……帰ってきたら書類の山が……最近じゃついでで隊長してるんじゃないですかってエリナに怒られて。

母さんにさあ、愚痴つちやったよ。第一部隊の隊長をしてるんだけど、俺はもう限界かもしれない、つて。でも書類が……俺がやらないと」

コ、コウター!?

しつかりしろコウター!

もう限界! 限界ですからあ!

第一部隊を実験部隊にするのはやめたげてよお!

榊さあん!

「さ、アナグラに帰ろうぜ。今度は「ちゃんと」さ」

ああ、そうだな。

「俺は仕事をしに帰るよ……」

コウター……お前は今、泣いていい。

泣いていいんだ……。

□
■
□

あ……わっ……その……!

そ、そのっ……帰ってきてたなら、その、何か言うべきなんじゃないですか?

あんまり身勝手なことばかりしていると、ふてくされますよ。ツーン、です。

あなたは第一部隊の隊長を辞めて、一人になったつもりなんですか?

そうすれば、身軽になれるからって……。

だめ。

そんなの絶対ダメです。

私は……私たちは、あなたの「帰る場所」でありたいんです。

この広い世界の、どこにいても。

その、だから……!

え、わっ、わっ！

あ、あの！ あの……！

き、急に、その！ えっ!? ええっ!?

あっ……シオちゃんの事を思い出したから？

そうですね。シオちゃんも、こうやってぎゅーっしてもらうの、好きでしたから。

だから、その、もっときゅーっしても、その。

う、ううー……ドン引きです……ばか。

わかりますよ。

リヨウのことですから……あなたの事は、全部、わかります。

何か、あったんでしよう？

ううん、何も言わなくていい。

だからもう少し、このままで。

素敵、ですね。

こうやって、帰れる場所があつて、抱き締めてくれる人がいる。

それだけで、全部が許される気がします。全部、許せる気がするんです。

ね、リヨウ。

おかえりなさい——。

ぐっどいーたー：11 噛

【キャラクター e p. リョウタロウ】

リョウタロウは激怒した。

必ず、かの邪智暴虐の憎いあんちくしょうの顔をめがけ叩け叩けしなければならぬと決意した。

「きゃー！ ソーマ先輩よ！」

「今日もクールね〜」

「カッコイイ〜！」

リョウタロウにはモテ方がわからぬ。リョウタロウは元壁外の住人である。

その日暮らしの底なし生活をして浮世を離れ、はぐれアラガミと遊んで暮らしてきた。

けれどもモテ野郎に対しては、人一倍に敏感であった。

「毎日毎日、飽きない奴らだ」

だから反射的に拳を振り上げてもしようがないと思いませんかねえ？

これは、この感情は、そう嫉妬。

嫉妬の仮面を被り、笑顔で接するナイスガイ。

今日の俺は、嫉妬仮面……嫉妬マスクだ。

「おい、どうした？」

——いや、別に？

「そうか……疲れてるなら、そう言えよ。お前は無理をしすぎるからな」

大丈夫大丈夫。

別になんともないですから。

うん、別に？ 別になんともないよ？

べつつにい〜？ 羨ましいとかじゃないですし〜？

うん、羨ましくないもんね。全然羨ましくないわー。

あれれーおかしいなー？

何だか目からしよっぱい水があふれてくるよー？

おいソーマ、お前ちよつと前まで“こちら側”の人間だったじゃねえか。

俺と同じで死神とか言われててちよつとシンパシー感じてたのに。

何なの？

ここ最近の黄色い声援、何なの？

「悪いな。今日も付き合ってもらっちゃまって」

——いや、いいよ。ソーマ博士のためさ。

「まだ早いかな」

——まだ、ね？

「ふっ……お前にそう言われるとこそばゆいな」

あ、わかったこれ。

インテリオーラのせいだ。

世紀末世界観っていつても、野性味溢れる男がモテた時期は終わってたんですね。

今は知的ながきてる……と。

つまり俺に、インテリオーラはないということか。

解せぬ……眼鏡でもかけようかしら。

「しかし、コウタの驚き様は笑えたな。『リヨウは同類だと思ってたのに』か。お前の学力検査の結果は、ゴッドイーターの平均レベルを超えて、研究職並みだつて出てたのにな」

——バカラリーとはちよつと……ま、所詮はペーパーテスト用だよ。“生きた”知識じゃない。

「そういえばアリサに資材運用法や治世論まで教えていたな。どこで学んできたんだ？」

——昔ネモス・ディアナのナチ総統に教わったり、シツクザール支部長付きになってた時はエイジスの建築関連の教育受けたりして、まあ色々教えてもらってさ。最近じゃ榊博士の助手みたいなことしてるからなあ。

「アリサが一人でクレイドルの現場指揮が出来るまでになったのは、

お前のおかげだろうな」

——こんなご時勢だし、勉強することが一番の贅沢だからね。アリサはよく解ってる。

「違うない」

フ、と笑うソーマの横顔に、黄色い声援。

「まったく、こうも騒がれるとうつつとうしくなるな……」

それはモテ男の余裕ですかねえ?!

博士論文とか手伝うんじゃないやなかった。ていうかソーマの家庭教師とかしてやるんじゃないやなかった!

アリサといいソーマといい、スポンジみたいに色々教えてやるとすぐ吸収して楽しかったからぐぬぬぬ。

敵に塩を送ってしまった。

ソーマにシオは効果覲面だつてわかってたのに。

ソーマに、シオを!

「なんだ?」

——別に……うん、別に……モテるなつて。

「フン……ちよつと前までは誰も近付きもしなかった癖にな」

それに比べて俺はどうでしょうか。

少し、見てみましょう。

「きやああああああ! 神狩人様! 神狩人様よ!」

「こつ、こつち、こつち見た! こつち見た!」

「今日メイクしてないのに……ああつ、にこつて、にこつて!」

「ああ……意識が……はふう」

何この嫌われ具合。

走って逃げられるとか。顔そむけられるとか。目を合わせたら失神されるとか。

名前すら呼ばれてないし。

何か俺がエントランス行くと、みんなこう、ササーツて避けていっちゃうし。

ヒバリさんところまで一直線に道が出来るし。

俺がエントランスに座つてるとみんな遠巻きにヒソヒソ言ってる

し。すごい噂されてるし。

ごめんコウタ。コウタの気持ちがわかったよ。

あ、泣きそう。

今ちよつと話しかけないで。泣きそう。

誰も話しかけてこないけどね……。

「お前もお前で、たいがいだな」

ほらこの嫌味ですよ！

モテ期きて調子乗ってるんじゃないですかねえ！

もうこいつの前じゃ泣かない。絶対泣いてなんかやらない。

ああああもおおおおやつぱ泣けてきた！

コウタ呼んできてコウタア！

「オーツス！ リョウ、ソーマ、今日は非番？」

コウタキター！

これで勝つる！

「いやー俺は今日入った新人達の訓練でさあ。ほら、こいつこいつ。結構やるんだよ」

わぷぷ、とコウタに頭をワシワシ撫でられ、むずがる新型使いの女の子。

もう一度言います。女の子。新人の女の子。

「もーやめてくださいよ先輩」などと言いながら、コウタの胸を叩く。

あれはまんざらじゃないと言う顔だ……俺にはわかるぞ。

「先輩、この方は？」と俺を見上げて言う新人ちゃん。

ソーマのことを聞かないのはあれですよね？ 知名度の差ですよね？

有名になりたいわけじゃないけど、こう、極東初の新型使いですよ俺？

しばらく海外にいたから人事についていけない感じがすごいけども。

もつとこう、もつとさあ。

「ああ、俺達の永遠の隊長さ！ ほら、神狩人って言えばわかる？」

「ひえっ」と口元を押えて後ずさる新型ちゃん。

れたあいつに同情すべきか、新人を補充させ続けなければ回っていかない極東の死亡率を嘆くべきか」

「アリサは喜んでるけどね。リヨウに時間できて、一緒にクレイドル見て回れるーって」

「任務を口実にしてないか？ それ……ん？ リヨウに時間、できたか？ いや待て、あいつの出撃率はどこだ。見せろ」

「ちよつと、他人の出撃率の閲覧とか、隊長権限なんですけど一応。まあいいや、ほら」

「これは……おかしくないか？ 前とほとんど変わってないんじゃない……」

「いや、そんなことあるわけ……あったよ」

「……これは」

「見なかったことにしよう」

「ああ……そうだな……」

【キャラクター e.p. リヨウタロウ2】

加賀美リヨウタロウ。

極東支部所属ゴッドイーター。神機損失につき無期限警戒待機処分。

テンションが上がった故の神機全損という過失に、持てる謝罪力に限界を感じ、悩みに悩み抜いた結果、彼がたどり着いた結果(さき)は感謝であった。

自分自身を育ててくれた仲間達への限りなく大きな恩。

自分なりに少しでも返そうと思いつたのが……一日百回、感謝のアイテム合成!!

気を整え、拝み、祈り、構えて、合成する。

一連の動作を一回こなすのに当初は数十分。

百回合成し終えるまでに初日は半日以上を費やした

合成し終われば土下座する様に寝る。
起きてはまた合成するを繰り返す日々。

二日が過ぎた頃 異変に気付く。
百回合成し終わっても 日が暮れていない。

リツカとの反省会を越えて、完全に羽化する。

感謝の合成、1時間を切る。かわりに、祈る時間が増えた。

ターミナルを下りた時、リョウタロウの合成は……。

音を、置き去りにした。

「でつきるっかな、でつきるっかな？ リョウー、今日は何をつくるのやっ。」

「今日は……じゃん！ さあコウタ！ 今日スタングレネードを作るよ！」

「わあ！ スタングレネードを作るなんて楽しみだなあ！」

「じゃあ、まずは爆縮体を用意しよう！」

「まっかせて！ あそこにいる勝手に商売してるように見えて実はフェンリル傘下の商人だった小汚いおっさ……よろず屋さんから爆縮体を買って来たよ！ ついでにマグネシウムも！」

「むむっ、コウタは相変わらず準備がいいなあ。僕も見習わなくっちゃ！」

「えへへ、ねえねえ、スタングレネードはどうやって作るの？」

「おっけい！ まず、右手に爆縮体を持とう！」

「右手にだね！」

「———そしたら次は、左手にマグネシウムを持つちやおう！」

「よいしょ、と。持ったよ！」

「———はい、合成しまーす。」

「フアツ！」

「———ちやらちやちやちやちや、スタングレネードー。」

「ごめんリョウ。俺、疲れてるのかな……もっかいやって？」

「———いいってことよ。右手に爆縮体、左手にマグネシウム。はい合成、スタングレネード完成。」

「そ、ソーマー！ ソーマちよつと！ ちよつとソーマこつち来て！
早くー！ ほらこれ、これー！」

「おい、うるさいぞ。少しは静かに……」

——はいスタングレネードスタングレネード。

「フアツ!?!」

「ソーマから変な声が!」

——ドヤツ、おいちゃんのスタングレネードやで!

「おい、《ガワ》はどうした。中身は一万歩譲って目を瞑ってやって
もいい、ガワはどこから出しやがった」

——どこからって、こうして、こう。

「な、なん……だと……!?!」

「な！ なんかおかしいだろこれ！ なー!」

——なんていうの？ ほら、こう、メインストーリー終
わってから合成するようになるよねとか。なんかそういうの。

「いくらですか?」

「アリサア!」

「ソーマから変な声が!」

「いくらなんですか? いくらなんですか!?!」

——出撃するゴッドイーター達のために、なんと無料で提
供中さー！ さあ、持って行ってくれ!

「あるだけください！ 私、使いますから！ ちゃんと使いますから
!」

「お前は、それを、なにに使うと……」

「ソーマ? ソーマ!?! しっかりしろ、ソーマアアア!?!」

【キャラクター e p. リョウタロウ 3】

本日は晴天なり。本日は晴天なり。

格好の運転日和なり。

たまにはハンドル持たないと、腕が鈍っちゃうからね。

「リヨウ……その、ごめんなさい。休みの日なのに、付き合ってもらっちゃって」

——いいんだよ。何もしないでいると、腐っちゃいそう
だ。

「私、その、なんて言ったらいいか」

それきり、ジープの助手席で俯いてしまいうアリサ。

コウタもソーマもそうだったけれど、神機をぶっ壊しちゃった俺にやたらと気を遣ってくれてる。

ありがたいと思う。思うけど、それなんかこう、これから刑を受ける奴に対する同情っていうか。

気遣いが超痛いでやんの。

神機過失で全損させるとか、これやっちゃダメな奴でしょ？

しかも俺の神機、一応は極東で初めての新型じゃん。

榊さん「いいんだよ」って言ってたけど、あれ絶対怒ってたよ。目が笑ってなかったもん。

あれ絶対おこだったよ。激おこだったよ。

リツカだって「リヨウが無事ならそれで……」って涙目になってたけど、あれって建前だよね？

神機命っ娘のリツカだから、神機ぶっ壊してくれちゃってこのやろう！ な涙目だよねあれ？

べ、弁償とかしないとだめですよね？

謝罪のスタンダグレート無料提供とかやってるけど、こんなんじや駄目だよねやっぱり？

うおお超ごめんなさい！

ほんと、テンションに任せちゃった行動っていうか、ほんと反省してますからあ！

借金だけは勘弁してえ！

——神機を失くしてから、ゴッドイーターは何のために戦ってるんだろうって、思うようになったんだ。

「それは……私たちは、みんなを守るために」

——うん、俺もそう思ってた。ずっとそのために戦うものだった。でも正直言うとき、神機を失って、少しほっとした俺もいたんだ。

爆縮体破産寸前になってる通帳残高を見るのは怖いけど。

でもまあ、ほっとしてもいるんだなあ。

だってさー色々啖呵切っちゃったけど、俺やっぱゴッドイーター向いてないって。

怖いもん。普通に。いつまでたっても。

やる気出してがんばるぞーって言ってはみてもね。

荒事とか向いてないんだって。日本人だもの。

適職と天職は違うんだなあ、これが。

あれ？ そう考えると復職とかでビクビクしてなくても、このまま
でよくね？

過失でやらかしたゴッドイーターとか、そんな奴信用できるわけがないから。

次に適合する神機探すのも、後回しだろうし。

そうなると偏食因子うっだけの怪力人間として予備役に回されるわけで……。

遊ばせておくことなんて丸損だから、ゆくゆくは建設現場とか、サテライト拠点とか人力が必要などこ回されることになるんじゃない。

なんて素晴らしいんだ。これは、もしかするともしかするぞ？

まさかの勝ち組ルートですかこれ？

やったー！

——だからさ、たぶん、本当はゴッドイーター達は。

そう、つまりは、こういうことだ！

——ゴッドイーターは、いつか神機を捨てるために、戦ってるんだと思う。

ほんとこれ。

これに尽きると思う。

正直になろうぜ。みんなさ、人々を守るんだーとか、使命に燃えちやっつて見えなくなってると思うんだけどさ。

辞めたい心を、俺は隠しはしないぜ！

「はい……はい……！　いつか、いつかきつと……！」
んえ？

あれ……？

なんでアリサさん、帽子を下にぎゅーつて下げてるんですかね。
そんな顔に帽子押し当てたら痛いんじゃないや。

なんでそんなしやくりあげて……泣いてる？

これ笑うところじゃないの？

俺の情けなさ暴露で笑うところじゃなかったの？

こ、これは俺が泣かせたつてことじゃ……やばい！

何でかはわからないけどこれはやばい！

——いつか、さ。神機を捨てる時が来たら、空を見にいこう。誰にも邪魔されずに、ゆつくりとき。明るい空に浮かぶ蒼い月を眺めに。

「リョウ……私……！」

困った時のリンドウさん語録！

それに加えてジャパニーズ愛想ワード！

いつか、とか、きつと、とかは外国人に超嫌われるワードです。

日本人ははつきりしないな。いつかっつていつだよ！　っつていう。

いつかはいつかなんだよ、永遠に来ないけどな！　っつていう。

——アリサ？　どうした？

「胸が、一杯で……」

確かに。

チャック下りてないからね！

今日も『南半球』は眩しいです！

あつ、そういえば。

——そういえば、アリサ。

「はい、なんですか？」

——新しい制服、似合ってる。

「ほ、い……？　あの、今なんて」

——その白い制服、きれいだよ。

白くて、まあるくて。

まぶしくて、やわらかそうで。

おっぱいがより一層ときれいです。

その一言しか言えない。

「なつななんんななな！」

ななな？

「ンンン……ッ!!」

アリサさん？

あの、その、なんでほつぺた押えてるんですか？

なんでそんな、顔がにやーってしないようにするみたいに。

「なんでもないですっ！ その、リヨウの新しい制服も、まあ似合うんじゃないですかッ」

そうかなあ。

農作業スタイルよりもしっくりこないっていうか。

この制服も最前線専門の隊服でしょ？

やだよそんなの……テンション下がるわ……。

「ねえ、リヨウ。私たち『クレイドル』が、いつか安心してくらせる場所を作れたら……その、さっき言ってた、空と一緒に……」

——ああ、行こう。空を見上げに。

コウタやソーマも誘ってね。

雨宮一家もいいなー。

みんなでピクニックしたらきつと楽しいぞ。

世界が平和だった時に流行ってたっていう、ピクニック。いいねー。

週三くらいで外でご飯食べる人もいたのかなんとか。

そんな外食おおかったら大変じゃないのかなあ。

アラガミがいなかった時代の生活はよくわかんないや。
ところでアリサさん。

その、なんでそんなに目がキラキラして。

「約束、ですよ？」

お、おう。

「約束ですからね？」

お、おう。

「ほんとのほんとに、約束ですからねっ！」

う、うん。

なんだろう、若干外した感じがする。

キリツとしたい時に出るカツコイセイリフは気持ちいいけど、素の時に打ちやったのは超恥かしいのはなんでだろ。

「デート……リヨウとデート……極東という逢引の約束、ですよ、これ。パパ、ママ、オレーシャ……私を見守っていて。これで決めます！」

なんだろう。

盛大に外した感じがする。

【キャラクター e p. 榊】

さて、どこから説明したものか。

ああ、楽にしたまえ。そちらの首尾はどうだい？

そうかい、順調のようだね。それはよかった。

こちらは先日伝えた通りさ。

しかし驚いたよ。

君から『キュウビ』 〃2体〃と同時に交戦したと聞いた時は、生きた心地がしなかった。

流石は異能とでも言うべき生存体……おっと。

それで、確認なんだがね。

欧州遠征中……確かにリヨウタロウ君は、〃右腕〃を、キュウビに噛み砕かれたんだね？

それも、〃腕輪〃ごと……。

ああ、捕喰されかけたとみていいだろう。

一瞬、彼の腕輪から送られる偏食因子の信号が滅茶苦茶になったの

を確認している。

“破損している”んだよ。

“彼の腕輪は、既に”。

さあ、ここからがお勉強の時間だ。

そう嫌がらないでくれたまえ。お姉さんに叩かれるよ？

彼女の事だ、リョウタロウ君の話をするのに席を立つなんてこと

……ああ、もう叩かれたかい。

さて、腕輪の破損と聞けば、君ならば当然 “アラガミ化” を想像するだろう。

偏食因子の投与時間さえきていなければ、腕輪が破損しても即時アラガミ化することはないんだがね。

即アラガミ化してしまうのはよほどタイミングが悪いか、体質として合わなかったのかのどちらかだが……リョウタロウ君は間が悪かったんだろうね。

偏食因子の投与リミットを2度ほど超えてしまっている。

ありえないことだよ、これは。

考えられることは唯一つ。

君の右腕にある “青いコア” のように、リョウタロウ君もまた外的要因によって、アラガミ化が防がれたということさ。

単純なことだね。

何によって、かい？

簡単さ。

神機、だよ。

そう、新型使い……今となつてはこの名称も過去のものだが、彼等は特殊な偏食因子によって、感応現象を引き起こしてしまうということとは周知の事実だろう。

つまり、脳内にまで偏食因子が融合してしまっているということだ。

偏食因子は神機の影響を顕著に受ける。

神機解放、バーストモードがそれだ。

そして適合率が高ければ高いほど。戦闘経験……神機解放の回数

が多ければ多いほど。

その影響は大きく、深く、本人の知り得ない領域まで喰い込んでいく。

つまり、リョウタロウ君には「混じっている」のき。

神機が――。

君たちゴツドイーターがいう「素材」というのは、そのままアラガミのパーツをそっくり持ち帰ることではない。

オラクル細胞の集合体であるアラガミは、倒せば塵になってしまうからね。

そう、君たちが言うところの素材とは、神機に付着した細胞片のことだ。

それをいくつも集め、培養し、生体パーツとして組み上げる。素材はね、物理的には極々少量のものなんだよ。これが神機のパーツ生産の流れさ。

その過程で、神機によって様々なアラガミを捕喰すればするほど、神機は微細な変化を遂げていくということも、君はよく知っているはずだね。

進化しているんだ。

自らが喰らったオラクル細胞によって、自らを作り変えているんだよ。

それは形の固定された旧型よりも、第二世代機がより顕著だと言えよう。

様々な武器種を装着しても、始めは拒絶反応を示していたのに、次第に適応していくのがそれだ。

神機は神経接続により繋がっているのだとしたら、それは確実に双方向のはず。

自らの要素を、持ち主へと還元させているんだ。

血管を、神経を、血を、肉を使って。

リョウタロウ君の身体を調べたらね、面白いことがわかったよ。

うん、彼はいつも素晴らしいデータを提供してくれる。

赤い雨然り。神機兵のデータ収集然り。

そうそう、赤い雨の治療法とまではいかなくても、感染してしまっているかどうかを潜伏期間中に調べるようになれたんだ。

あと、極東オリジナルの無人神機兵も製作段階に入ってるね。もちろん有事の際には中に入って操縦できるように……あ、この話はいいい？ うん、リヨウタロウ君も他の新型使いよろしく、脳細胞と偏食因子が癒着しているのが認められた。

その偏食因子には微量の、神機からなるオラクル細胞も含まれている。

まあ、ここまで通常の新型使いと同じだ。

問題はここからさ。

彼の神機が失われてしまったことは、知らされているよね？

ん？ 姉上がリヨウが落ち込んでいるから慰めないって、母性本能剥き出しに？

まあ、それは置いておいて、だ。

神機が失われてしまっているというのに。

彼の脳内では、未だに神機由来のオラクル細胞反応が確認されたんだ。

「本体」の制御を離れて、なお存在し続けている。

恐らくは脳内に発生する電流を捕喰することで存続しているのだろう……。

さて、先ほど君にも言ったね？

神機と、ゴッドイーターは深く結びついていて。

お互いこれしかいないと言えるほどの、運命的な出会い……極めて適合率が高いものを使用し続けたのならば。

神機とゴッドイーターはある種の融合を果たすのだと。

では質問だ。

神機の「本体はどこにある」？

コアかい？

人工的に、扱いやすく加工した、コアだと？

私はそうは思わない。

リヨウタロウ君はね、かつての君の神機に意思が宿っていたと言っ

たよ。

その意思は何処に宿っていたのだと思う？

いや……旧型機であつたのだから、この場合は神機が本体だと言えようか。

ではその意思は、“何処から”産まれたのだと思う？

そして君の神機は、それを保存していただけなのだとしたら？

私の仮説はこうだ。

神機は、使用者の脳を間借りし、自身のソフト面での拡張を行う。神機もまたアラガミなれば、進化の本能を持つのは当然のことだ。ハード面は当然として、ソフト面もまた……そう、“彼女”のように。

そう、リョウタロウ君の脳内に残留している、神機の“本体”が、彼をアラガミ化から救つたんだ。

もう、わかつたね。

面白いことが起きそうだと思わないかい？

君の送つてくれた『キュウビ』の持つ、混じり気の無い極めて純粋なオラクル細胞……『レトロオラクル細胞』。

これを応用した技術を、今ソーマ君と一緒に煮詰めている最中なんだ。

アラガミ防壁に应用すれば、“独りでに育つて”、“アラガミだけを自動迎撃する”ものが作れるかもしれない。

神機のシールドに应用すれば、一度食らった攻撃を見極めて、オートで弾き返すなんてこともできるかも。

では神機を神機たらしめる、生体部分に使用したら？

新型もまた、“檻”であつたのではないだろうか。

特別な脳によつて“喚起”された神機には、それもまた狭すぎたのかもしれない。

だが、それに相応しい肉体を用意してやれば、どうだろうか。

そして本体が彼の脳内にあるのだとしたら、もしコアに本体があつた時に、同居させることになってしまう。

これではいけない。

コアは真っ白なもの、とてもとても、ニュートラルなものを選ばなくては。

『混迷を呼ぶ者』——『アバドン』。

そのオラクル細胞は、何色にも染まる、純白の性質を持つ。

『チケット』、と君たちが呼んでいるものだよ。

コアもまた、等しくまっさらだ。

そして、このアバドンのコアも特別なものだ。

百田ゲン……始まりのゴッドイーターが、そのピストル型神機によつて、初めて仕留めた獲物さ。

グレードは『ブロンズ』……希少価値はなかったが、長らく極東の資料庫に保管されていた。

記念、ということだろう。価値を意味に見出したということだろうね。

ピストル型神機の使用されたコアは、とてもキレイなんだ。傷一つないアバドンのコア、これを使う。

原初（オリジン）のオラクル細胞。

始まりのゴッドイーターが初めて入手した、無色のコア。

この二つが合わさった時、一体何が起きるのか。

破壊の場、滅ぼす者、奈落の底……ヨハネの黙示録に登場する、喰らい尽くす蝗の王になるのだろうか。

興味が尽きないよ。

これは人体実験ではないか、だって？

さて……だが、私には確信がある。

こんな程度、彼にとっては試練の内にも入らないよ。

そして、これこそが彼が今、最も必要としているもの——
神殺しの牙なのだ。

君には話したね。

リョウタロウ君に次に頼もうとしている任務は、潜入調査だと。

近々、移動型の巨大拠点が極東に接近するらしい。

ああ、そうだよ。『第三世代機』の試験艦さ。

移動型の拠点だ、その資材は全て外部からの搬入に頼っている。

神機の作成や、腕輪の構成素材もまた、ね。
だから通常の流通ルートを通して、送り届けてあげようじゃないか。

蘇らせてあげようじゃないか。

彼の神機を……！

ああ、こちらは何の心配もいらないよ。

全て私に任せて……いや、彼を信じてあげてほしい。

あらゆる修羅場を乗り越え、人々を救い続けてきた、アルティメットゴッドイーター。

加賀美リョウタロウ——神狩人を。

だからそちらは頼んだよ。

お願いだから、君の姉上を抑えて……えっ、もう手遅れ？

は？ リョウタロウ君のために用意した新しい下着？ 生身で勝

負？ ええと、何を言っているんだい？

ああ、そうかね。

私が殴られるのは確定かい。

そうかね……。

優しくしてほしいと伝えて……あ。

私の命日が、決まったかもしれない。

【キャラクター ep. ■】

You did your best.

(あなたは最善を尽くしました)

Was I helpful for you?

(私はあなたのお役に立てたでしょうか?)

I am deeply grateful to you.

(あなたに最大限の感謝を)

—— SAYONARA Ryōu.

Y
O
U.
R
e
p
r
o
d
u
c
e
R
e
s
u
s
c
i
t
a
t
i
o
n
R
e
b
i
r
t
h
[R] — [Y]ou.
R — you.

ぐつどいーたー：12 噛

【キャラクター p. エリナ】

エリナ・デアルフオーゲルヴァイデには兄がいた。強く、努力家で、そして誰よりも優しい兄が。

エリナは生まれつき体が弱く、療養生活の中、友人の一人もいない寂しい少女時代を過ごしていた。

幼少期は命の危機に瀕することも珍しくはなかったらしい。

故郷である欧州の空気が合わず、そのためにアラガミ被害が甚大である極東へと、叔母の元で静養することを選択したほどだ。

極東は異常だ。まるでアラガミのサーカスが年中開催されているような場所である。

そんな場所へ静養などと正気の沙汰ではないが、それほどエリナの状態は切羽詰ったものであったのだろう。

見違えるほど健康となった今ではそう思うしかない。

それが兄の死へと繋がったのだから。

エリナの兄はゴッドイーターだった。

経験もあり、勤務態度も良好。人格については眉を顰める者もいたそうだが、それは性格破綻者が集う極東においては問題にはならない。

そして、皆に慕われていた。

おどけていても、心優しい青年であることは誰の眼から見ても明らかだったからだ。

妹が寂しがらないようにと、東欧地区から激戦区の極東支部へと、自ら志願して異動したことを皆知っていたのだ。

ゴッドイーターに愛されたゴッドイーターだった。

彼らの眼には、エリナの兄が輝いて見えていたのかもしれない。

そして、エリナにも。

エリナは今でも覚えている。

『今度、新型機とやらが極東に配備されることになってね。そうさ、特別なゴッドイーターだ。すごいだろう、エリナ。これで人類は救われ

るんだ。

その新型機の初陣を手伝ってやるのが何を隠そう、この僕だ。

フフフ……なあに、僕のように立派に人類のため戦えるよう、手ずから指導してあげるつもりさ。僕は先輩になるんだからね。

だからエリナ。お前は安心して待っていていなさい。また、すぐに帰ってくるからね。そろそろ退院してもよいと言われたんだ。

せっかくだからキレイな服を買って、一緒に出かけよう。そう、この僕がお前に似合う服を選んであげよう。じゃあ、行ってくるよ、エリナ———」

兄の、最後の言葉を。

兄は、日々人々のため己を削り、人類の明日を守る存在……ゴッドイーターだったのだ。

誰かのために戦い、そして誰かのために死んでいく存在だったのだ。

「エリナちゃん！ ちょうどよかった〜！ 今度こそこの前言ったハーブ、見つけたら持つてきますね！」

「カノン先輩、今日の作戦エリアは空母でしょ。生えてないですよ、そんなの」

「ええっ!? でもリョウク……教官先生は、いつも拾ってたような」「教官先生？ 拾つ、て？ まあ、あの人は特別ですよ。特別、なんだから……」

初め、エリナは皆が嘘を吐いているのだと思っていた。

子供ながらの思考。みんながいじわるをしているのだと。

いじわるをされて、兄が会ってくれない。

みんな兄が死んだなんて嘘を言う。

信じることはできなかった。

療養が終わり、健康となつて、せっかくの自由な時間をエリナは兄の影を求め、極東支部内を彷徨うことに費やした。

仲が良くなった友達もいた。自分を気に掛けてくれた男の子に、女の子。彼らは今何をしているのだろうか。

もう忘れてしまった。

あの頃いつたい自分が何をしていたのか、おぼろげにしか覚えては
いない。

まるで夢の中にいたような気分だ。何時までも覚めない、悪夢の中
に――。

――えー、スタングレネードスタングレネードはいらん
かねー。

「……」

――あの、エリナ、ちゃん？ だっけ。なんでそんな睨ん
で……。パンツ見え……。いえ、何でもありません。

こうやって、よろず屋の前に座り込んで、品物をただ眺めていたこ
とだけは覚えている。

出撃ゲート近くにいれば、兄が帰ってきたらすぐに駆けつけられる
と。

だがある日、厳格だった父が、人知れず泣き崩れていたのを見た。
その瞬間、エリナは全てを理解した。

ああ、兄は死んだのだと――。

「私は、フォーゲルヴァイデ……エリナ・デアールフォーゲルヴァイゲで
す」

――う、うん。よろしく。

「何か、ないんですか？」

――何かって……。

エリナは純粹だった。

あの涙を拭うには、どうしたらいいのかを考えた。

自分と同じ想いを抱く者を救うには、家族を失い悲しむ人を増やさ
ぬためにはどうしたらいいのかを。

そして至った結論は、アラガミのいない世界を自らの手で創ること
……ゴッドイーターとなることだった。

その選択は間違っていないと信じている。

ゴッドイーターは尊い仕事であると。

兄のように、自分も優秀なゴッドイーターとなるのだと。そう決め
たのだ。

だって、戦えるんだからッ！」

「エリナ！ お前！」

——いや、いいんだ。本当のことだから。

返事を待たずに、出撃ゲートへと走る。

ああ、またやってしまった。自己嫌悪に陥る。

気持ちを抑えられずに、あたってしまふのは自分の悪い癖だ。エミールともこうやって衝突してしまう。向こうはまるで堪えてはいないようだが。

どうしても、この加賀美リョウタロウという男を好きになれない自分があった。

結局エリナは出撃ゲートからミツシヨンエリアに到着するまでの間、一度もリョウタロウとは口を聞かず、目を合わせることもさえなかった。

「僕の名はエミール……エミール・フォン＝シュトラスブルク……よろしく」

荒廃した地に一輪の薔薇が。

「皆の先頭に立ち道を示す、それこそが我が騎士道！ 案ずるな、僕に全て任せるがいい。聞くところによれば、君は戦いで神機を失ったのだろうか？」

何も恥じることはない……ゴッドイーターは戦い、人々を守るためにある！ 戦いの中で受けた傷、失ったものを恥じることはないのだ！

胸を張るんだ！ もう一度言おう、案ずるな！ 君の背には僕がついているということ、忘れないでくれ……！ このエミールが、ついているのだということ！

「キツモ」

「そうか、この迸る騎士道精神、君にも通じたかエリナよ！ さあ今日も共に戦おうではないか！」

「あー！ もー！ 暑苦しいウザイ嫌い向こう行け！」

「はは……まあ、こういう奴らだよ」

——お前も、苦勞してるんだな。

「うん……ごめん、これ終わったたら、一緒にバガラリーみない？ 俺、ちよつと、そろそろしんどい」

——ああ、一緒に見ような！ いっぱい、いっぱい見ような……！

エミールが片側だけ伸ばした前髪を指で巻き、エリナが噛み付き、コウタが笑いながら内心で溜息を吐く。

いよいよ少数精鋭となった第一部隊において、期待の新人（ホープ）とベテランのトリオ。

リヨウタロウがコウタへと、エミールを指さして「俺こいつちよつと好きかも」とボソリと言っていた。

私はどうなのだろう、とエリナは自問する。

まず、好かれることはないだろう。

そも、こちらが彼を嫌っている……憎んでいると言ってもいい。悪感情を向けているのだから。

「さ、今回もまたオウガテイル相手だ。もう引率はいいよな？ 俺は遠くの“はぐれ”をやるから、お前達は二人で近場のを殲滅。居住区に近づけるな」

「了解！」

「フツ……この僕に任せるがいい。期待に答えてみせよう！」

「それじゃ、油断せずにいくぞー！」

「行くぞ闇の眷族よ！ 我が正義の鉄槌を受けるがいい！」

通信機の感度チェック。

コウタを示す光点が、エリナとエミールから離れていく。

エリナはチャージスピアを、エミールはブーストハンマーを、それぞれ構えた。

神機から接続帯が黒い触手染みて伸び、腕輪へと接続される。

自分の認識が拡大したような不思議な感覚。神機への神経接続が正常に行われた証拠である。

アーティフィシャル CNC（神機へと形態変型を命令するための腕輪との接合物質）を通じ、神機へと指令を下す。

お願い。今日も一緒に戦って。

チャージスピアがオラクルの唸りを上げた。
さあ、戦いだ。

「ぬおおおーッ！」

——スタングレネード！

エミールがハンマーの慣性に引き摺られ、転ぶ様が見えた。
スタングレネードの輝きがオウガテイル達を足止めしている。
こちらも笑ってはられない。

「きゃあああーッ！」

——スタングレネード！

スピアのブーストが発し、明後日の方角へと身体ごと吹き飛ばされていくエリナ。

スタングレネードの輝きがオウガテイル達を足止めしていた。

「フンフンフンフン！ どうだ！ 何時までも失敗している僕ではない！」

騎士は、失敗から学び、そして再び立ち上がるのだあー！ そう、不死鳥のように！ 僕の話はフェニックス・エミールと呼んでくれ！」

——フェニックス、ホールドトラップいくぞー。

「任せたまえ！ フンフンフンフンフン！」

エミールの、すぐさま調子を取り戻し、ハンマーでアラガミを粉碎していく快音が轟く。

対してエリナのスピアは輝きを失い、沈黙したまま。

焦りのみが募る。

「どうしてこんな、どうして！ 言うこと聞いてよ、お願い、お願いだから……！」

エリナの願いが届いたのだろうか。

神機が稼働、唸り声を上げ始める。

だがその唸りは、あるいは失望の唸りであったのだろうか。

ハンマーとスピアは、これまで欧州での稼働実績こそあれ、極東では十分なメンテナンスを行える環境がなかった。

それを軸とリツカが協同し、新機軸のマニピレータ開発。十分な

組み上げ精度を担保することが可能となった。

そうしてやつと導入されたのが、エリナとエミールの使う、チャージスピアとブーストハンマーである。

極東支部では未だ運用経験が無く、そして最前線である極東でこれらが使われてこなかった理由は、即戦力にはならないからであった。

つまりは、取り扱いが異様に難しいということだ。

極東支部初の、特別な神機。

どこかの誰かと同じような、立ち居地で。

それはエリナへと、対抗心を抱かせるには十分な理由だった。

「動いた……い……これで！ いっけええええ！」

オラクルブースト。

槍の穂先が、オウガテイルへと刺し向かう。

エリナにある種の確信が訪れた。

ああ、これは、外れる。

「狙いが甘……ああつ！」

——おわ危なつ。

いつの間にそこにいたのだろうか。

リョウタロウが軽い掛け声と共に、ぱかん、とエリナの神機を蹴り上げた。

ブーストを吹かして空を翔けるエリナとその神機を、横から、何でもないと言った風に、である。

真横から衝撃を与えられたチャージスピアは、急激にその進路を変ええる。

向かった先は、オウガテイル。

その目玉へと、巨大な槍は寸分の狂い無く突き刺さり、そして喰い破った。

エリナの手には軽い衝撃が伝わるのみ。

手応えがまるで無いことが恐ろしいと思った。

真のクリティカルヒット、とはこのようなことを言うのだろうか。

アラガミと言えど、命を奪ったという実感も得られない程の、鋭い当たりだった。

———すごい偶然……えっと、ナイスチャージ！ その調子

！
「なんで……どうして……」

先輩としてのフオローに言葉。

それが、エリナの怒りに火をつけた。

ああ、と胸の内、冷静なエリナが頭を抱える。

任務中だというのに。

これはただの八つ当たりだとわかっているのに。

「どうして、あなたは、そんなに強いのに、すごいのに、どうして……！」

でも、もう、止められない。

「どうして、お兄ちゃんを助けてくれなかったのよ！ どうして!？」

リョウタロウの笑みが引きつるのが見えた。見えてしまった。

仲間を失くしていないゴッドイーターなど、極東では探す方が難しい。

自分もいずれはそうなるだろう。

頭ではわかっている。でも、気持ちは抑えられない。

「ソーマ先輩は、私を見るたびに申し訳なきような顔をする！ 本当はソーマ先輩と任務に出るはずだったのに、私を後方へと押し込んだ！

！
それでもあの人は私を通してお兄ちゃんを見てくれてる！ 生まれて初めてできた友達だったって、お兄ちゃんのことを教えてくれる！

でもあなたにとっては、よくある事なんでしょうね！ ええ、そうなんでしょうね！ ただゴッドイーターがまた一人死んだって、それだけなんでしょうね！

ええ、知ってるわ。お兄ちゃんが死んだ時、そこにあなたがいたってこと。お兄ちゃんは、あなたの教導に付くはずだったのよ。

わかってるわよ！ 私だってゴッドイーターなんだから！ これは仕方のないことなんだってことくらい！

でも、それでも……あなたがそんな風に、何でもないっていう風に

笑うんだから……！

よくあることなんだって、何時ものことだって……笑うから！

私の中にいるお兄ちゃんが……消えていっちゃうじゃない！

だんだん思い出せなくなってくる……お兄ちゃんがどんな顔をして、どんな声をしたのか。私に何て言ってくれたのか。

やめてよ。お願いだから、やめてよ。私にお兄ちゃんを返してよ。お願いだから……。

あなたのせい！ 全部あなたのせい！ お兄ちゃんが死んじゃったのは、あなたのせい！

ねえ、なんで!? あなたは凄い人なんでしょう!?

ならどうして……どうして、お兄ちゃんを……助けてくれなかったの?」

最後はもう、嗚咽しか出てこなかった。

子供染みた八つ当たりだという自覚はある。

自分は、目の前に困惑した顔で佇むリョウタロウと同じ、特別なゴッドイーターとなった。

だが思うような戦果は上げられず、そして誰かに保護してもらっているような無様な様を晒している。

「もう……邪魔しないで、ください。私だって、一人で戦えるんだから!」

私は、守られるだけのお荷物なのだろうか。

誰かを守るためにゴッドイーターとなったのに。

——人は死んだらどこへ行く?」

それは静かな問いだった。

戦場に響く破壊音の中、それでもするりとエリナの耳に届いた、鋭くも力ある声。

——俺にゴッドイーターの厳しさを教えてくれた君のお兄さんは、死んだな。

「言ったでしょ! お兄ちゃんは、とっくに……!」

——ゴッドイーターは誰かを守るために戦っている。

でも、心の底では、ただ散っていくのを恐ろしく思っている。守つ

た誰かに、ほんの少しでも何かを残せたら。それがゴッドイーターの願いだ。

君のお兄さんは死んだ。もういない。でも、君の背中に、その胸に、ひとつになつて生き続ける……そう思ったけれど、ああ。

俺の知っている君のお兄さんは…… “先輩” は、本当に死んだんだな。

それきりエリナへ向けた背には、寂しさと、諦観が込められていた。失望させてしまった。

悲しませてしまった。

「ちがっ……そんなつもりで、私……！」

踏み込んでほならない場所へと足を入れてしまったような。

なぜかエリナは、傷つけてはならない人へと酷い言葉をぶつけてしまったという、罪悪感で胸が押しつぶされそうになった。

——俺が君を手助けするのは、君が子供だからじゃない。

仲間だからだよ。

言葉が突き刺さる。

わかつていた。わかつていたのだ。

この人は正しくて……だから、こんなにも認められないのだ。

人々の口から聞こえるリョウタロウの噂は、超人然としたものばかりだ。

品行方正。清廉潔白。

公開されてはいないが、戦果まで凄まじいという。

あれだけ見目麗しい女性に囲まれて眉ひとつ動かさないのは、男性にあるべき性欲が無いからではないか、とも言われている。

正しく、優秀なゴッドイーター像が具現したような存在だ。

きつとそれは、兄が受けていた評価と同じもので。

ああ、こんなにもこの人のことが憎らしく思うのは、きつと。

きつと、兄に重なって、見えるからなのだろう。

——君のお兄さんのことを忘れてなんかいない。顔で笑って心で泣くような、そんなゴッドイーターだった。俺が目指すべきゴッドイーターだった。

オウガテイルの横顔を蹴り飛ばしながら、リョウタロウは語る。
熱く、熱く……言葉に熱を込めながら。

——立て、エリナ・デアールフォーゲルヴァイデ！ 立つんだ！

「う……ううっ……！」

エリナは神機を杖にして立ち上がる。
どうしてだろう。

この人はこんなにも腹立たしくて。

ともすれば、思うことさえ罪深いのが、兄の代わりに死んでいたかもしれない人で。

恨んで、憎んで、理不尽に怒りを向けて……それでも、どうして。

どうしてこんなにも、この人の言葉は、胸を熱くするのか。

——そしてエリナ。

ああ、見える。

あの懐かしい、愛しい顔が。

エリナはリョウタロウの横に、赤毛の青年が、刺青を入れた身体を自慢気に反らして立っている幻を見た。

あれは、私の……。

ああ、なんで忘れていたんだろう。忘れてしまおうとしていたんだろう。

思い出せばこんなにも、心が痛むと解っていたからか。

痛い。痛い。激痛が奔る。

お兄ちゃん、帰ってくるって言ったのに。どうして。

ごめんよ、と言って悪びれもせずに笑う兄の姿が見えた。

その兄は、神機を手に、リョウタロウと肩を並べて戦っていた。

エリナは刹那、理解した。

兄はずっと、戦場にいたのだ。

ずっと、ずっと、人々を守るために戦って……そしてこの場所に踏み止まって、残ったのだ。

ゴッドイーターは“人類最後の砦”と呼ばれる。

その砦の礎は、どのようにして築かれるのか、エリナは理解したの

だ。

なぜ自分は今にもゴッドイーターに成る事に固執したのかを。それはきつと、ここに。この場所に。戦場に兄が居ることを、わかっていたからだ。

妹を戦場で待つなど、なんという酷い兄なのだろう。

お兄ちゃんのうそつき。もう許してあげない。

エリナはぎゅつと前を見詰めた。

だから、私が迎えに行つてあげるんだから。

自分の戦う理由を握り締めて。

———
「華麗に」戦え！

たくさんの「送り出す」人達のために、無事に家族を帰してあげるために。

「はいッ！」

涙と共に、迷いが晴れる。

アーティフィシャルCNCが脳神経からの指令を忙しく神機へと伝えていく。

エリナの意味が神機へと伝わり、そして神機からもまた、腕輪を通してエリナへと語りかけてくる。

ごめんね、とエリナは胸の内で呟いた。

神機が自分の言うことを聞いてくれないのは、当然のことだった。

当たり前だ。ゴッドイーターではないもの言うことなど、神機が聞くはずもない。

だが、これからは。

「お願い……『オスカー』。頼りないかもしれないけど、私と一緒に戦つて」

オウガテイルがエリナへと迫る。

あれだけ重かった神機が、羽のように軽く舞う。

シールド防御。ぴくりとも動かなかったシールドが、まるでエリナを庇うかのようにして展開されていた。

エリナは鼻の奥が、感動にツンと痛く熱くなるのを感じていた。

「私も……ゴッドイーターなんだから！」

——エリナ、上だ！

「いやあああああッ！」

それは絶望の叫びではない。

戦士の産まれた声だ。

エリナの槍が真上を向く。

頭を喰らい付かんとしていたオウガテイルの唾内へと、穂先が荒々しく突き立った。

エリナの槍が、天を突く。

「やった……やったあああああ！ 私も、出来た、出来たよお兄ちゃん！ お兄ちゃんみたいに、華麗に戦えた……戦えたよう……」

膝上のソックスは破れ、擦り剥いた膝小僧が外に出てしまっている。

トレードマークの白い帽子は土だらけ。

顔は涙と鼻水でぐしゃぐしゃに汚れて、この年頃の少女が孕む子供と大人の矛盾した美しさなど、欠片も見られない。

だが夕日に照らされたその横顔は、何よりも尊く、そして華麗だった。

今日、今まさにここに、また新たなゴツドイーターが産まれた。

——長い出撃でしたね、先輩。

そして、『エリック・デア||フォーゲルヴァイデ』は、三年越しにやつと帰還を果たしたのである。

エリナの下へ、その胸の中へと——。

【キャラクター e p. エリナ2】

「あの、その、待って！ 待って……リョウタロウ、先輩！」

——せんぱい？ あれ、今先輩って。

「今まで、その……ごめんなさい！ これからは意地を張らずに、先輩から色んなこと、教えてもらいたいです！」

——何かよくわかんないけど、うん。もちろんいいに決まってるぞ。

「ありがとうございます！ 頑張ります！」

——何だか変わったね。うん、いい顔してる。

「えへへ……」

——いいことでもあったかい？

「私、思い出したんです。お兄ちゃんがいなくなって……つらくて、苦しくて、毎日エントランスで俯いていた時に、私に優しくしてくれた、お兄さん”がいたことを」

——そっか。どんな人だった？

「もう……先輩みたいな人ですよ！ さ、帰りましょう。私たちの家へ。ね？ ”お兄ちゃん”！」

——今なんて……。

「うおおおおつ、僕は今、猛烈に感動している！」

「エミール！ こらっ！ 今ちよつといい場面だから、静かにしてろつて、おい！」

「エリナ！ そして……リョウタロウ君！ 君たちには僕は教えられた！ ゴツドイーターの美しさを！」

華麗に戦うとは、かく言うものなのか……ああ、目が！ 目から涙が！ 騎士の涙など見ないでくれ……否！ これは心の汗だ！ さあ、存分に僕を見てくれ！」

「なんか、ごめん」

「エミール、コウタ隊長、あとで、シメる」

「どうしようリョウ！ エリナがグレた！」

「時にリョウタロウ君。僕は君の戦い方に、非常に感銘を受けたのだ。我が誇りである騎士道精神は、気高くあるべしを旨としていたのだが、しかし人々を守るためにはこのままでいいのだろうかと僕は常々思っていた。

騎士ならば、もっと正々堂々と己の腕のみで戦うべきではないのか!? ああ、だがしかし、と！

今日！ ここで！ 神機を失った君の戦いをみて、僕は思ったのだ

！ 人々を守るために、僕は泥をも被ろうと！

君が！ 君こそがゴッドイーターだ！

我が好敵手であるエリックを失い、同じく失意の底にあるエリナをも救えず、歯がゆい思いをしていた僕だが、新しい星を見つけた。

北の星に燦然と輝く星だ……人はその星を目指すことで、自らの道を確認するという。

解ってくれるかい？ 我が新たなる好敵手、リョウタロウ君！

——お、おう。

「そう、僕は！ 君を見習い！ 罨を使う！ スタングレネード……ホールドトラップ……これからアラガミと戦う時には、僕はプライドを捨てよう！ どうかアイテムの使い方を、僕に伝授してはくれまいか！」

「お、おお……騎士道精神にこだわるあまりアイテムの使用訓練すら拒否しやがったエミールが！」

「僕は今日からこれまでのエミールではない！ ダークエミールとなるのだ！ 君たちが愛してくれたエミールはもういないのだ……この世からアラガミがいなくなるその日まで、暫しの別れだ……」

「おおお……おおお……エミールが、やっと、やっとアイテムを使って……俺があとだけ言ったのに、言ったのにいい」

「ちよつとエミール、コウタ隊長泣かしてんじゃないわよ！ めんどくさい泣き方しちゃったじゃない！」

「だが、いざ使おうと考えると、やはり身体が動きそうにないんだ。騎士道精神はいつの間にか僕の中で、意地となってしまうていたらしい。だから……僕を殴ってくへぶるわっしゅ！」

「一発でいいの？」

「え、エリナ……君ではない。だが、腰の入ったいいパンチだ……。これではつきりしたな。やはり僕のこのつまらないプライドは、捨て去らねばならないものだということだ。」

人々を護るためには手段は選ばないと決めたのに、ああ、だということに！ その瞬間、頭をよぎったんだ。卑劣かもしれない、という以前の自分の言葉が。

ミッションは成功するかもしれない。誰にも被害が出ないかもしれない。だがこのままでは、僕は自分の言葉ひとつ守れやしない！ そんな自分自身が許せないんだ！

だから、頼む！ 君に殴られなければ、僕は気が済まない！ さあ……殴ってくれ！ あとエリナ、君は少し離れていてくれたまえ！

「先輩、やっちゃっていいからこれ。さっさと黙らせて」

「よせエリナ！ リヨウのガチパンチはやば……あ、ちよつ、リヨウ！ なんで遠くに……助走付きはヤバイって！」

「さあ殴れ！ 殴ってくれ！ どうした！ 早く！ 殴ってくれ！ 僕を！ 来ないのならこちらから行くぞ！ どうだ！」

—— うおおおおおおッシャオラアッ！

「—— 僕の名前はエミール。エミール・フォンシユトラスブルク。ああ、星が見える。北極星が」

「エミールが錐揉み回転しながら吹っ飛んでった！ なんか爽やかな顔しながら薔薇をバツクに吹っ飛んでった！ え、エミールウウウ！」

「人って……あんなに飛ぶんだ……空」

【キャラクター e.p. キグルミ】

「千倉ムツミです！ よろしくお願いします！」

—— 元気があってよろしい。いい子いい子。

「も、もう！ 私そんな子供じゃないですよー。調理師免許だっけ持ってるんですからね！」

—— ほう、それはすごい！ それで、こうやって毎日みんなのご飯を作ってくれてるわけだ。うんうん、だからこうやって褒めてあげるのは、当然のことだな。

「む……じゃあ、しょうがないですね！ いっぱい褒めてくれていいですよー！」

「こうやって見ると9歳の子供なんだけどなあ」

—— オツス、コウタ。

「オツス、リヨウ。驚いたろ？ この子、極東のラウンジのメインシェフなんだぜ。」

リヨウの海外遠征と入れ替わりだったかな。ムツミちゃんが来てからは見違えるように食事情が変わったんだ。おふくろの味っていうかさ、なんかホツとするんだよな」

—— そつか……。

「あの、リヨウ？　さん？」

—— そうだよーリヨウタロウだよ。よろしくなあムツミちゃん。

「はい、あのでも、もう褒めてもらわなくってもいいですから。私そんなに大したことしてないのに、恥ずかしくって」

—— いいや。大したことだよ。自分の作った料理をさ、おいしいって言ってくれる相手が、帰ってきて料理を食べておいしいって、また言ってくれるかって待つのさ。つらいなあ。

「信じて、ますから。大丈夫、きつと帰ってくるって。私は戦うことは出来ないけれど、その代わりに、戦う人達が安心してご飯を食べて、帰ってきたって思える場所を守りたいって、そう思います」

—— そつか……ムツミちゃんは、みんなのお母さんだな。

「……うん！　だからもーっと私に頼ってくれてもいいのよ？」

—— そつかー。俺はあんまり出来ない子だから、ムツミ母さんに色々お世話してもらわないとだなー。

「うんうん。ご飯、毎日食べてる？　お風呂は一人で入れるの？　夜、寝苦しくない？　一緒に寝て、おなかポンポンしてあげるね？」

—— え、いやそこまでは……冗談だよな？　ひ、一人で出来るから大丈夫かなー、なんて。

「お仕事終わったら、お部屋の掃除にいくからねー」

—— いや俺、部屋はきれいにしてあって。

「何言ってるの！　お母さんの言うこと聞きなさい！」

—— はい。

「ははは、ムツミちゃんに掛かったら、リヨウも形無しだなー。よつぽど気に入られたなあ、リヨウ。ムツミちゃんプライベートまで踏み込んでこない、出来すぎた感じの子だったのに」

——踏み込まれそうなんですけど、今まさに。

「それだけリヨウがほつとけないって思ったからだよ。わかるなーその気持ち。ところでさ」

——うん？

「あれ……どう思う？」

——どこからどう見ても「キグルミ」だけど。あれが何か？

「何かって、キグルミじゃん!? リヨウが何か着てたのに似てるけど、継ぎ接ぎだらけだし、ここにリヨウいるし……なんでここにあんの？」

——俺も知らないんだなあ、これが。あのキグルミ、榊さんのハンドメイドだし、もうそっちの管轄だからね。今あれ座ってるように見えて、稼働実験とかしてるのかも。

「はあ？ どっからどうみても、デザインはともかくキグルミじゃんあれ。発明品とかどういうこと？」

——いやそれが実はさ。極東で神機兵の無人化データを採るってんで、俺も協力してたんだよ。最近キグルミ着てたのがそれね。

で、そこから蓄積された戦闘データを反映したものがアレ。つまりあれは、キグルミ型無人神機兵のプロトタイプなんだって。

元がキグルミだったもんだから、神機兵っていうても有人化は簡単だし、ていうか着込めばいいだけだし、負担はともかく装着はすごい簡単な活気的なものらしいよ。

装備も神機を装備してるんだけど、この神機、イミテーションなんだから。神機型の外部マニピレーター。ほら、エリナとエミールの、スパアとハンマーの組み立てマニピレーターから着想を得たのかなんとか。

まあ元が神機兵だから、全身が神機みたいなものだし必要ないんだ

けどね。その辺すごい趣味的なんだよなあ、榊さん。

別のゴッドイーターが中に入ったのならその人の神機を使えばいいし、無いと思うけど一般人さんならそのままでオツケー。

拳動も俺の戦闘データを基にしてるから、ある程度は戦えるはずだよ。だいたい俺と同じような動きが出来るらしい。

俺の分身みたいなもんだから、メカリヨウタロウだって榊さんが……あれ？ どうしたのコウタ？ 耳なんて塞いで。

「あ、もう終わり？ うん。いやそれが実はさ、まで聞いたよ」
—— え、そんだけ？ もつかい説明しようか？

「いや、いいから！ 聞きたくないから！ 知ってるよそれ、知ってるから！ 聞いちゃだめなやつなんでしょ？ 知ってるから！」

—— チツ。身を守る術を覚えたなコウタ……運の良い奴め。

「確信犯かよ！ やめてくれよ！ 隊長権限になって色々情報開示されてさあ、怖いんだよ！ 見なかったほうがいいのばかりじゃないあれ！」

—— だからお前を選んだんだよ、コウタ。お前なら任せられるって、そう思ったから。

「良い話に持つてこうとしても駄目だからな！」

—— 冗談冗談。でもキグルミの無人稼働はまだ出来ないって聞いたけどなあ。耐久性に不安が残るとかなんとかで。継ぎ接ぎなものもそのせいって……あれ？

「……動いてる、よな？ あれ」

—— 動いてる、な。

「中……誰か、いるのかな？」

—— さあ……？

【キャラクター e p. リョウタロウ 4】

「ところで、お前に重要な話がある。真剣な話だ……お前、女性のどこに魅力を感じる？」

——それはおっぱいです、ハルオミさん。

「お前もブレないな。お前のそんな所、好きだぜ。ならば、それを踏まえて聞こう。お前、貧乳は好きか？」

——ナイチチ……だど!?

「俺の今のムーブメントは……“ちっばい”、だ」

——そ、その心はなんですか先生！

「いいか。自分の胸にコンプレックスがある女性は、数多くいるだろう。それは一体、何に対してのコンプレックスだ？」

同性と比較してのものか？ それは違う。そう、男の視線に対してだ。俺達が女性を自然と見てしまうように、女性もまた、見られていることを意識しているんだ。

だが胸に自信のない女性は、その悔しさを怒りとして出してしまう……俺はそこに、例えようなない清らかさを感じるんだ。

乙女の、恥じらいだ。それを乗り越え、お前だけにその秘めたささやかな頂を見せてくれたとしたら……どうだ。想像してみろ。

お前だけが言えるんだ。飾らない裸の心と身体、見せてくれないか、と！」

——ああ、先生。今俺は、はつきりと解りました。小さくても、大きくても、おっぱいは素晴らしいということ。

「そうだ。その通りだ。やっと解ったか弟子よ……これまであらゆる角度から神機使いとは何たるか？ を検証してきた。

その過程で様々な女性の神秘を探ってきたな。お前と共に、な。だがもうお前に教えることは何も無い。それはもう……解るな」

——答えは出ている。答えはもう、出ているんだ。

「覚えているか。男は女性のどこを見るかって話をしたこと。あの時俺は、胸を否定した……それが、ずっと引つ掛かった。

すまん！ 俺を許してくれ！ やっぱり、胸だ！ お前の言い方で言えば、おっぱいだ！ こんなストレートな表現、かつての俺はしなかっただろう。

だがわかったんだ。自分を飾らないのが本当のオトナなんだってな……！ それに気付かせてくれたのは……お前だ！」

——先生！

「お前は頑なにおっぱいおっぱい言い続けていたな。俺のムーブメントは理解されないものかと落胆したこともあったが……だが、そうやって謙遜しながら俺を導いてくれてたんだろ？ 知ってたよ。

初めからわかっていたんだな、お前は。

さて……おっぱいがテーマならカノン辺りを引っ張ってこようかと思っただが、今日は真逆のムーブメント。ちっぱいだ。いつもの、行ってみようか！

極東支部はスタイルのいい粒揃いだから、モデル探しに苦労したぜ。さあ今回のモデルはこの人だ！ 弟子よ、見事決めてみせろ！」

——おお、ジーナさん！

「なんなの？ 私、狙撃のイメージトレーニングで忙しいのだけれど。邪魔しないでくれる？」

——ジーナさん！ 服、変えたんですね！ すごくよく似合ってますよ！

「そ、そう？ ありがとう……」

——でも俺、前の、こう、胸のところが空いた服も好きでしたよ！

「胸……そう、胸……あなたも胸というのね……そう……私が馬鹿だったわ。あの頃の私は、まさか周囲に笑いものにされてたなんて、気付きもしなかったもの。あなたも同じなんでしょ」

——いえ！ 色っぽくて、すごくドキドキしました！

「そ、そう。そうだったの……。その、あなた、私の胸のこと、どう思う？」

——好きです。

「そんなに真剣に言わないで。ちよつと聞いてみただけだから……。でも、本当に好きなの？ こんななのよ？」

——それはステータスです。希少価値です。

「もう……口が上手いのね。他の人に聞かれないようにこっそり来て

くれたら……特別に、見せてあげても」

「はいストップそこまで！ 今回のモデルのジーナさんでした！ ありがとうございました！」

「ちよつと、いいところだったのに……もう」

「これ以上はあそこで隠れて見てるムツミちやんの教育に悪すぎるからな……感謝しろよ、リヨウ。命の恩人だぞ俺。社会的な。さー場所を移すぞー」

——先生……太陽が、きれいですね。

「ああ……真つ赤で、丸くて、まるでおっぱいみたいだ。そうだろう？」

——はい、先生。太陽は皆のおっぱいですね！

「今回のことで俺達は学んだはずだ。やがて、男は女の胸に帰るんだってこと。さあ……叫ぼう！ 命を育む、約束の地の名を……！」

——おお、おお！ おっぱい、おっぱい！

「おっぱい！ おっぱい！」

——おっぱいおっぱい！

「見ろ！ リヨウタロウ！ 俺達のムーブメントで……極東は、赤く燃えているううううう！」

——極東は、赤く燃えているううううう！

ぐっどいーたー：13 啣

断続的な水滴の滴り落ちる音。

髪を、額を、喉を、乳房を、白い肌の上をフィルタを通された浄水が、球となつて滑り落ちていく。

熱い湯を浴びられる幸せを十分に享受しながら、アリサはシャワー室の壁に静かに額を付けた。

タイルの冷たさが火照つた身体の熱を吸い取っていく。

うなじから背筋を、そして尻を叩く水滴が、小気味の良い音を立てアリサの意識を遠く彼方へと誘う。

どうにも最近疲れが溜まっているようだ。

サテライトの建設から資材運用、内部統治まで、その全てをアリサ個人が統括し行っている現状では、無理もないことなのかもしれない。

事を為せばどうとでも成ると思っていたのは、やはり自分が子供だったからだろう。

年を重ね、ベテランと呼ばれるようになった。だが、いくらキャリアを積んだとて、感じるのは己の無力さばかり。

あと一人補佐についてくれたら。否、自分が補佐に付いてもいい。誰か、一つの都市を単独で、構築から実際運用までこぎつけられるノウハウを持った人員がいてくれたら。

そこまで考えて、アリサは頭を振った。

瞬間、浮かんだ男の顔を振り払うように。

長い髪から水滴が飛び、タイルを叩く。

こんなことで根を上げてはいられない。

これでは、せつかく彼から離れたというのに、意味が無くなってしまふではないか。

何かを誤魔化すようにして、アリサは石鹼を直接素肌に当てて泡立て始めた。

耳、首筋、肩……ついだ、髪も洗ってしまえ。ゴワつくことになつても、贅沢は言えない。

湯が常に沸かされているまでに燃料事情が回復した極東支部にあっても、物資は多くはなかった。

物自体が無いのである。体を擦るスポンジのような上等な代物は無い。

タイルを滑る湯が鏡となつて、自らの肢体を映し出す。

「ふむ」

アリサは何となしにポーズをとつてみた。

片方の手は膝に、片方は腰に。

腰をくねらせて、挑発的に見上げる視線。

気を抜けばアリサの頭を一杯にする男の部屋に、珍しく放り投げられていた女性のヌード雑誌。その折り目がついていたページにあったモデルと同じポーズである。

「私だって、結構いけてると思うんですけど」

そこまで言つて、独り言を耳にし、初めて己の発言に気付いたかのようにアリサは顔を顰める。

自分が恥かしい格好をしていることに顔を赤らめながら、タイルの水滴を払い除けた。

日課という奴は、如何ともし難いものだ。

ここで肌の上を流れる水の間接感を、彼の手として想像し、物思いに耽るのがアリサの常であつた。

「やだな……私、全然リョウ離れできてない」

タイルの鏡を洗い落として、アリサは安堵の息を吐く。

今、自分の顔を見てしまえば、自分がどんな顔をしているか自覚してしまえば、後戻りできなくなってしまう。

嚴重に、封じなければならぬ。

感情はすぐに暴走し始める。

自分は曲がりなりにも一区画の責任者という立場となつたのだ。

だから、私情は捨てなければ。そうしていれば、何も考えずにすむ。きゅつと噛み締めた唇。舌先に乗った鉄の味は、自身の想いを肯定

しているかのように感じた。

「あつー」

豊かな乳房を持ち上げて、その下に石鹸の泡を塗りつけていると、つるりという感触が指先に。

アリサの指から逃れた石鹸が、そのまま排水溝の中に落ちて消えていく。

「ああー、またやっちゃった……大事な物資なのに……」

一度続けば万事が失敗続きであるように思えてしまう。

シャワーから上がればすべて床に思い切り尻餅を付くし。びたんと大きな音がするほど打ち付けたところが真っ赤になっている、とカノンにかわいいなどと笑われてしまった。

髪を拭けばゴワゴワのタオルは水を吸わない。髪を乾かす暇もなし、しようがないのでひつつめにして纏めて誤魔化すことにした。

服にいたっては、きつくてジッパーが下りないのは何時ものことであるが、何時もよりも俄然つかえて下りないような気がする。

火照った身体には涼しくていいが、流石にこれ以上の露出はファッションでは済まないような気もする。これはまあ、こちらの方が好みであるので、サイズが上がったのだと無理矢理納得することにしよう。

任務でもいまいちパツとしなかったのだから、踏んだり蹴ったりだ。

最近体の芯に疲れが染み付いて取れない。泥がへばりついた様な感覚がする。

もしやこれが最近の不調の原因ではないだろうか。

などと考えていると、着替え終わって自然と足はラウンジに向かっていた。

これもまた日課である。

日々を生きる糧を口にせねば満足に身体が動かせないのは、一般人もゴツドイーターも同じだ。

食うか食われるかの世界。

食べることは、何と云うか、救われていなければならぬ。そう言ったのは誰であろうか。

「おーっす、アリサじゃん。今日は非番？」

からりと晴天のような笑みを浮かべてアリサを迎えたのは、全身を包帯塗れにして松葉杖を着いたコウタであった。

上げた手は全てに固定器具が装着されて、首には石膏の首輪。晴れやかな笑みを浮かべる顔は、半分しか覗いていない。

一目で重傷と解る容貌だ。

「コウタ。あなたまだ寝てなくていいんですか？ 重傷なんでしょう？」

「いいっていいって。ムツミちゃんの飯食った方がさ、薬飲むよりもよく効くから」

医食同源、ご飯は薬なんだから。と、コウタの言葉にカウンターの向こうでムツミが小さい拳を握り胸をむん、と張る。

ミイラ男といった風体のコウタは、包帯に血を滲ませながらも熱い煮物を頬張っては「うーまーいーぞー！」と叫んでいた。

一瞬、コウタが口から七色の光りを放射したかと思えば巨大化し極東支部と一体になって極東支部INコウタとなった姿を幻視した。

やはり、疲れているのだろう。どこのアラガミだというのだ。味皇とでも言えいいのか。

「で」

そうやって唐突に切り出すのも、コウタの特徴である。

物怖じしない性格からくる一言は、一息に核心に踏み込んでくる。

アリサは警戒に身体を強張らせた。

「またリョウがらみでしょ」

その名が出た瞬間、アリサの肩が自らの意に反し、震える。

「……何を言っているのかわかりませんね」

「そんなになってるのに、説得力ないって。休み、ちゃんと取れてんの？」

そんな、とコウタは自分の目元を指してからアリサに指を向けた。

そつと自分の目に指を触れると、僅かに違和感が。自分でも気付かぬ内に、隈が出来ていた。

「ま、座んなよ」コウタが座ったカウンターの隣を叩く。不承不承と席に着くアリサ。「あなただって」とコウタに返す。

「そんなになるの、初めてなんじゃないですか？ 休んだ方がいいんじゃない？」

「これがそうも言っちゃならないからね。この後、回復錠を山ほど投与される予定。あれ反作用がキツイからあんまりやりたくないんだよね。普通の人間じゃなくなつたんだなーって感じになるし」

『回復錠』と銘打たれた薬剤は、言つてしまえばオラクル細胞活性化薬である。

人とアラガミの境界線上に立つ存在がゴッドイーターだ。

回復錠は、一瞬だけその境界線を強くアラガミの方へと傾ける。

全身に回つたオラクル細胞の瞬間活性化。

その仕組みはアリサもコウタも完全に理解してはいない。オラクル細胞の遡及性を利用してはいるらしく、投薬された瞬間にオラクル細胞が増殖し、傷を塞ぐのだとか。

名前からして便利な道具であると認識されてはいるが、経験を積んだゴッドイーターにとっては、これを過信することはない。

一度の任務に持ち込める数が厳しく決まっていること。投与した瞬間、身体が硬直し、身動きがとれなくなることで、露骨な反作用だ。

そして傷が治っていくその見た目が、何よりも忌避される要因となつていた。早回しで傷が塞がる画は、自分の身体のことながら、見ている気持ちがいいものではない。

人とアラガミの境界線を揺さぶる薬。

それが回復錠である。

利便さと名前に騙されてはいけない。これは恐るべき薬剤だ。この薬ほどゴッドイーターの人権を無視したものはない。

つまり、回復錠の多用は、確実にアラガミ化への運命を早めることとなるのだから。

「この前の任務でさ、俺、リヨウを助けに行つたじゃん？ その時の怪我なんだぜ、これ」

アリサが下唇を噛んだのをコウタは知つてか知らずか、言葉が続ける。

「こっちは元々、台風の多い地域でさ。よくもまあこんな小さい島国を狙ったようにってぐらいさ。」

海上で発生した台風が急激にコースを変えて本土に上陸。極東を直撃……なんてのはザラにあることなんだ。アリサもこっちきて二年と少し経ったんだから、経験あるでしょ？

この前も台風……何号だっけ、そいつが来て、二日間の外出禁止令が出たじゃん。あの時俺達、台風のと真ん中にいたんだ」

拳が腿の上で握られ、赤いスカートのプリーツが乱れる。

「台風の映像を見た瞬間、ああリヨウは死ぬんだな、つて何でか冷静に考えてた。真っ赤な台風だった。雷と一緒に、赤い雲がとぐろを巻いて、画面一杯に広がってた。」

赤い渦が大地を蹂躪していく様は……震えたよ。台風が来ることは解ってた。だから、リヨウや俺や防衛班の皆で、近隣区域の避難誘導を進めてた。

極東支部の管理区だけど、壁の作りが甘い、でも無視されてる訳じゃない微妙な場所。サテライトが極東に見捨てられた人達の場所なら、外部区域は……姥捨て山ってところ。

雨は凌げるけど、風まではどうにもならないよ。移動しようにも、自分の足じや遠くにいけない爺ちゃん婆ちゃんが大勢いた。避難する場所まで自分達じやたどり着ける訳が無い。

そんな場所に、リヨウは行ったんだ。たった一人で。

さあ混乱も収まったぞって、ヒバリさんがクレストカウンター確認して、初めてそこでリヨウが未帰還になつてることに気付いた。その時にはもう、手遅れだった。

リヨウは多分気付いてたんだろうな。だから一人で行ったんだ。

台風は勢力をどんどん強めていって、色が……最初はピンクに、だんだん、血を垂らしたみたいに真っ赤になつてった。まるでリヨウが一人になったタイミングを見計らつたみたいに、スピードを上げて。

外部区域の人達とリヨウは、赤い台風のと真ん中で孤立した」

言われずとも解っている。

つい先日のことだ。極東を、大型台風が直撃した。

日本と言う国は元々台風が頻繁に到来する風土であつたらしい。欧米のハリケーン被害という程でもないが、頻度からすれば年に何度も、こんな小さな島を幾度となく台風が通過する。

極東に来て、初めて台風を経験した時のことをアリサは覚えてい

る。シオ、リンドウ事変が終わつた後、一時の安寧に安らいでいた夜のことだ。

極東中に鳴り響くサイレン。下りる隔壁。外出禁止令の警報。右往左往とする人々。

それが台風という自然現象であることはまだ知らずにいた。

ロシア生まれのアリサにとって、自然の驚異はさほど珍しくはない。

だが、あのいつ止むと知れない雨の打ちつける音と、風の吹きすさぶ振動は、耐え難いものがあつた。

古来、暴風雨は神と同一視されるものである。その理由を骨の髄までアリサは知つた。これが、台風なのだ。

低気圧の爆弾の中に身を置く不安は、アリサの精神を容赦なく削つていく。

停電によつて部屋の明かりが消えた時、恐怖はピークに達した。

部屋の扉は自動スライド式だ。非常ハンドルで手動で開閉できるが、混乱したアリサにはそれを思い当てることはなかつた。

日本生まれでもなく、これが初めての台風だ。非常灯も部屋には備え付けていなかった。危機意識が甘かつたと言わざるをえないが、自然脅威とは体験せねばその真の恐ろしさは解らぬものだ。

暗くて狭い場所に閉じ込められること。

その事実が、アリサのトラウマを直撃した。

過去の凄惨な記憶からはとうに抜け出しているとはいへ、それでも影響は残る。これはアリサが一生涯掛けて背負い続けねばならない、重りである。

記憶にはないが、ロシア語で何かを喚いては壁をバンバンと叩き、部屋の隅でぶるぶると震えていたらしい。

風雨に軋む極東支部の中、アリサは眠れぬ夜を過ごした。

気が付いた時は、涙と鼻水で顔面を汚して、リヨウタロウの胸の中で眠りに着いていた。

大声に驚いて見回りに来たリヨウタロウを押し倒し、すがり付いていたらしい。

直接接触による感応現象。

リヨウタロウの温かな感情が流れ込み、不安を、恐怖を、優しく包み込んでいく。

アリサはまどろみの中で、両親や親友、守れなかった人々の微笑む優しい夢を見た。

リヨウタロウから与えられる感応現象は慈愛に満ちていて、世界は美しいものだと思わせてくれる。

だからアリサは過ちを犯した。

決して許されぬ過ちを。

「無理したら行けない距離じゃないよなって、そう思った瞬間さ、気付いたらリヨウのビーコン探って防壁積んだトラックのハンドル握ってた。

それで外部区域に直行して、そこで簡易シエルター作って……最悪だったのが、風にのってサイゴートとかシユウがバンバン突っ込んできたこと。

リヨウは神機もってなかったから、俺が頑張るしかないじゃん？

雨に濡れないようになんとか頑張ってたけど、最後はシエルターの中に雪崩れ込んで、この様子。

雨に濡れることはなかったけど、じいちゃんやばあちゃん達、守りきれなかったよ。

気付いたらカラツと晴れたお日様の下を、リヨウに背負われてた」
寂しそうに笑うコウタのまなざしは、どこかリヨウタロウのそれに良く似ていた。

守れなかった、失敗したゴッドイーターの顔だった。それでもと齒を食いしぼり、前を向き続けるゴッドイーターの顔だった。

きつとそこで、リヨウに背負われながら、コウタは二人で話をした

のだろう。

アリサは人命救助や、危機的状況への介入任務の経験がほとんどない。

これはアリサの経歴からくるものだ。すなわち、旧支部長とその傘下の医師によって操り人形とされ、当時の部隊長暗殺未遂事件を起こしたことの。

地位あるポストは与えられたとしても、緊急性のある任務に就けられることはあまりない。それは、信用と信頼の違いだ。

信用とは実績であり、信頼とは期待である。

おそらく、榊支部長の狙いは、自分を統治に関わるゴッドイーターとして押し上げたいのだろう。

「折れて」しまつては困る。そういうことだ。

わかりやすく人のためとなる華やかな任務のみ。泥臭い仕事からは離された、まるでアイドル扱いだ。

それならばそれで、自分の仕事をするだけだ。この地位にいなければ出来ないこともある。

だが。

リヨウタロウと同じ景色をコウタは見ている。

その事を想う度に、アリサはたまらなくコウタが羨ましく思えた。

「アリサも来るのかなって思ってた」

スカートのプリーツの皺は、もうアイロンを掛けても戻らないだろう。

「へりをジャックしてでも飛んで来るのかなって。あそこ、アリサの居たサテライトに近かったじゃん」

「それは……サテライトの、避難があったので」

コウタは「ふうん」と鼻を鳴らすと、「ま、そういうことにしようか」と、ムツミが小さな手で運んできた食事をかき込む。

「リヨウのこと、どう思ってる？」

またこれだ。

唐突に核心を突く男がコウタである。

アリサは心臓に氷の針を打ち込まれたような気分となった。

コウタと会話をしていると、このような気分になることが多々ある。

「どう、とは?」

「好きなんでしょ?」

「は、あ、えっ!? あ、や、その!」

「俺は好きだよ」

苦笑と共にコウタは言う。

「ああ、そういうこと……」とアリサも胸を撫で下ろすが、しかしコウタの冷ややかな目に背筋が凍りつくような思いだった。

「俺は家族が一番大事だよ。ゴッドイーターになったのも家族のためだし、任務中も、すぐに自分を守ることばかり考える。」

隊長なのに、自分のことしか考えないのなんてどうよって話だけど、でもさ、俺がここで死んだら、残された母さんは、妹はどうなるんだろうって。

父さんがさ、帰ってこなかったあの寂しさを覚えてるから。

父さんが死んでから、俺の母さん、女手一つで俺と妹を育てたんだ。

母さんがさ、俺に妹を連れて外で遊んでこいって言うときはさ、決まって知らない男が家に来る時だったんだよね……」

「もう子供じゃないんだから、子持ちの女が金を稼ぐ方法が少ないことくらい知ってるよ」薄く笑うコウタ。

「こっそり見たこともある。妹を置いて一人で行ったのは、兄貴として正解だったよ」その独白に、アリサは何と答えたらいいのか、わからなくなった。

「だから俺は、家族のために生きてる。泥をかぶって、後ろ指さされても平気さ。エイジス計画で、皆を裏切ったのもね」

「あれは……! あなたに責任は……!」

「皆そう言ってくれるけど、俺も“そう”思ってるんだ。平行線だよ。でも、それでいいと思う」

「あなたの選択は、立派だと思います。それは事実です。結局、コウタは戻ってきてくれましたから。私たちがそれに、どれだけ救われたか」

「ありがとう。でも俺が宇宙船のチケットを蹴ったのは、ゲンさんの言葉があつたからなんだ」

ゲン、とは、極東支部について先日まで滞在していた戦術アドバイザーのことか。

あまり自分とは関わりがなかったが、聞くところによれば、最初期のゴッドイーターであつたとか。

その人が一体、コウタにどんな影響を与えたのだろう。アリサは小首を傾げ考える。

「リヨウが子供だつた頃のこと、教えてくれたんだよ」

「あの人が、子供だつた頃のこと……」

「俺さ、実はすごい小さい時、リヨウに会つたことがあつたんだ。思い出したよ。」

妹が産まれたばかりの頃さ、無茶苦茶なことさせられた母さんのお乳が出なくなっちゃって、妹が栄養失調になつたんだ。

赤ん坊が栄養失調になるっていうのは、つまりそのまま死ぬしかないってことで。そこは今でも変わらない。あの頃の方が、もつと……。

それで俺、何とかしなきゃ！ って、フェンリルの配給車に潜り込んでさ、ミルクを盗もうとしたんだ。

大冒険だつたよ。色々な偶然があつて、何とか潜り込めちゃつたんだよね。さあいざ物資を、って見てみたら、空振りさ。

ミルクなんてどこにもなかった。まあ、すぐに死ぬ赤ん坊のことなんか、気遣う余裕なんてなかったんだよね。

エイジス計画もあつたから、既存の人口の維持と、生存率の高い青年期からの人材育成に集中してたわけだ。ミルクなんて、とてもとても」

盗みは外部区域に比べ比較的治安の良い極東支部内の居住区にあつても、日常的に行われている。

物資事情が改善された今であってもそうなのだ。十年程前はどうかだっただろうか。

「結局フェンリル職員に見つかった。食料を盗むのは、とんでもない

重罪だ。殴られたよ。目が開かなくなるくらい、死ぬ程。

気付いたら、家のベッドで横になってた。母さんがボロボロ泣いて、俺の手を握ってた。

見知らぬ、俺よりちよつと年上の男の子が、フェンリル職員のリンチから俺を助け出して、背負って連れて来てくれたんだって。

そして、俺の家の中をチラツと見て、泣き声も上げられなくなった妹の顔を見て、一言だけ……そっか、って呟いて、どこかに消えてしまったって。

それから二日もたたない内に、ゲンさん率いるゴッドイーター部隊がやってきて、俺達の家ミルクをくれたんだ。

憧れたよ、ゴッドイーターに。救われたと思った。ゴッドイーターになれば、きつと俺も、ああやってたくさんの人を助けられると思っただ。

俺は単純なガキだったから……ゲンさん達がどうしてこんな、フェンリルの意向に逆らう配給をしてくれたのか、考えもしなかったんだ。

そして今になって、エイジス事件の時にさ、ゲンさんに教えてもらったんだ。

フェンリルの高級官僚向けの物資運搬車に、自分を囚にしてアラガミをぶつけて、物資を奪った子供がいたこと。

その物資は、ベビー用品が中心だったこと。子育てグッズつてのは、安全な場所だからこそニーズが発生するのは当然だからね。産みっぱなしのこつちとは違う。

それで、奪つたはいいけど運べなくなつて、途方にくれていた所をゲンさん達が保護したんだとか。多大な犠牲を払って……。

それでも、それを知つてなお、その子供は地面に額を擦り付けて、血が滲むくらいに頭を叩き付けて、懇願したんだ。

この物資を街へ運んでくれて」

コウタは、どこか遠い記憶へ溯るような、そんな目をしていた。

ここではないどこか。今ではないいつかへと意識を傾ける。

「俺、馬鹿だからさ。ゲンさんにその話聞いた時、ああバガラリー

だ、ってそう思ったんだ。あいつはバガラリーだったんだって……俺、馬鹿で単純だろ？ そう思ったんだよ。

あいつは、誰にも感謝されず、そのまま黙って去って行ったんだ。自分だって苦しかっただろうに……」

だから。

コウタは言った。

「この藤木コウタには恩がある。加賀美リョウタロウに、返しきれぬ恩が」

言い知れぬ凄味のようなものが、コウタの全身から発されていた。

胸元をぐわりと片手で開くコウタは、空気をドドと軋ませる何かがあった。

「俺は家族のために生きてる。戦う理由も家族のためだ。この戦場は、それが許されてる。」

でも……もし、仲間のために戦わなければいけない時がきたのなら。俺はリョウのためなら死ぬる」

覚悟だ。

その真っ直ぐな瞳には、覚悟があった。

折れず、ブレず、愚直なまでの覚悟が。

その言葉に嘘はなく、どこまでも真実であると信じられる。

「例えリョウが、この世界を滅ぼす、悪魔になつたとしても」

コウタはドロリと濁った瞳をしていた。

瞬間、アリサの胸を焦がす熱。

アリサがコウタを信じつつも、どうしても最後に受け入れられなさが残るその理由が、今はつきりと解つた。理解した。

嫉妬だ。

アリサはコウタへ、嫉妬心を抱いている。

何の呵責もなく、ただ真っ直ぐに想いを向けられることに。

否……コウタもまた、知っている”のかもしれない。

“その上で、この台詞を吐いたのだとしたら”。

自身が抱きようもなかったその覚悟を抱いた者。それがどうしようもなく嫉ましく感じる。

嫌な女。

爪が食い込む程に握られた拳の痛みに、アリサは恥じ入るように思うった。

「ま、昔からリヨウはリヨウだったってこと。へへ」

それきりコウタはアリサを見ようともせず、折れた指と腕で、納豆ペーストと格闘を始める。

アリサも隣でシチューを口に運ぶが、何故か味がしなかった。スプーンの鉄の臭いだけが口の中に充満する。

救われない食事は作業でしかない。アリサはふとそう思った。

—— やっぱマニピレーターじゃない？

「マニピュレーターだってば」

—— 嘘だあ。絶対マニピの方が言いやすいって。

「それ提出書類に書きちゃって何度も書き直しくらってるんでしょ？直しなよ。ほら、ここ、原典3巻の113ページにも書いてある。マニピレーター。いいね？」

—— あつ、はい。でもマニピの方がさあ。

「くーどーいー！ 男らしくないよ！ 会話でならそれでもいいけど、文章にしちやうと誤字でつっこまれちやうよ！」

男女二人が会話する声と、独特な金属音。

極東支部に居る者は、それが腰に下げたスパナやドライバが擦れる音だということを良く知っている。

金属音はリツカの足音の代名詞。もはや名物だ。

リツカがリヨウタロウと何をかを口論しながら、ラウンジへとやってきた。

—— オッス、コウタにアリサ。

「オッス、リヨウ」

—— 怪我の具合はどう？

「見た通り。リヨウもめっちゃめっちゃになってたはずなのに、綺麗さっぱりだよね」

—— いやあ、昔から俺、怪我の治りが早くってさ。アリサも、久しぶり。

「う……や……そのっ」

—— うん？

「くあ——！」

—— ちよつ、そんな急いでかきこんだら。

「んぐぐぐー」

—— ほら、言わんこつちやない。

急にばくばくとパンを頬張って喉に詰まらせるアリサに、「これが最も模範的なゴッドイーターの姿なんだよね」と笑いながらコウタが水を差し出す。

「最も模範的なゴッドイーターのアリサちゃん、何かあったのかな」とリツカは心配顔。

—— 最も模範的なゴッドイーター大丈夫か？ とリョウタロウも苦笑する。

「ご、ごちそうさまでした！」

喉が詰まった苦しさか、恥かしさか、顔を真っ赤にして走り去るアリサ。

「アリサも色々あるんだよ」と、コウタがしみじみと呟いた声だけが耳に残った。

「ちよつと、模範的なゴッドイーターいじめすぎたかも」

—— アリサと何かあった？

「いやあ、特に何も。ま、強いて言うなら……恋愛相談かな？」

—— そうか……アリサも色恋を知る年頃か。あれ、何か泣けてきた。娘を送り出す親父の心境だこれ。

「アリサもアリサだけど、リョウも大概めんどくさい奴だよね……」

「そこがいいんだけどね」

「まあわかるけどさあ、リツカもカノンちゃんも……最近はエリナもだし。大変じゃない？ ついていける？」

「うん。私は大丈夫」

「言いたくないけど、運命とかそういうの、良くない方向でリョウにはあるよ。きつと」

「わかるよおお。うんうん、そうだよね」

「そんな軽く言っちゃえる？ それ。この前の台風とかもさー、世界とか地球とかそういうのが、リヨウを本気で殺しにきたとかさう思えたらならないんだけど。」

「だっていきなり進路コース変えるんだもん。これ俺の考えすぎかな？」

「んー……ね、知ってる？ 神機には整備士が必要不可欠なんだよ。本人の意地とかさういうのとは関係なくね」

「あー、覚悟完了しちやってますか。それなら俺は何も言えないなー」
「シエアリングって最近じゃ普通に使われてる言葉なんだよ？ データとか、資料とか、色々よね」

「お、おう……覚悟完了しちやってますか……」



彼女を見かけたのは偶然だった。

背中ががぼりと大胆に開いた服は、しかし下品ではなく、黒を基調としたシルエツトがシックな雰囲気醸す。

肩口と眉上で切り揃えられたおかつぱ髪は、幼稚さなど微塵も感じられず、切れ長の顔を知的な印象に整えている。

子を一人産んだとは思えない程の美貌、否……子を産んだが故に、より一層魅力的となったその女性。

雨宮サクヤ。旧姓、橘。

リンドウと結婚し一線を退いた、アリサ達の先達。元衛生兵、医療系のゴッドイーターである。

「アリサ？ やだーもー久しぶりね！ 元気にしてた？ 隈ができてるぞー？ せっかくの可愛い顔が台無しよ？ うりうり」

アリサを見つけたサクヤは、遠慮無しにアリサの頬を突いて捏ねる。

片腕に抱えた紙袋からは、子供の食べやすいペースト状の離乳食の

バックが見え隠れしていた。

「ねえもう聞いてよ。今日もレンは榊博士にべつたりなのよ。わかんないでしょうに、何が楽しいのか神機の組み上げデータをずーっと博士と見てるの。」

ママと子供向けのテレビみましょーって言ってもやだーって。博士も博士で、この子は神機の心がわかるんだ、なんて言っちゃってさ。旦那もいないし、ツバキさんに女の子っぽい可愛い服送ってりようく……んんっ、げふんげふん。せつかく時間が出来たから、ツバキさんに極東の服を送ろうかなって。

向こうじゃ中々大変だから……って、ア、アリサ？ やだ、ねえ」ぼんやりとサクヤの話を聞いていると、急激に視界がぼやけていった。

サクヤが慌てる様子がアリサには不思議に思えた。変わったことが起きているでもなし、何をそんなにうろたえる事があるのだろうか。

「泣かないで、アリサ。指、痛かった？ ね、お願いだから」しきりにサクヤは泣かないでと、アリサの目元を指で拭う。

触れる指の優しさに、ようやく気付く。

ああ、自分は今、泣いているのかと。

自覚すれば、止め処なく涙は溢れてくる。

サクヤにしてみれば災難だろう。

会話の最中に表情を変えず、自分が泣いていることにも気付かずに、ただ涙を落とし続けるなどと。

「アリサ。お部屋に行きましょう」

腕を引かれて、気付けば自室に戻っていた。

扉を開けた瞬間、サクヤが「うわ」と声を上げる。

そして気合を入れて、「よいしょお！」とアリサをベッドへと投げ飛ばした。

悲鳴を上げる隙さえなかったのは、次いでサクヤまでシーツの上に飛び込んで来たからだ。

「いつもはレンの特等席だけど、今日は特別よ？」

そう言つて、アリサを優しく胸に抱くサクヤ。
甘い香りがした。母乳の匂いだろうか。遠い記憶にある、母の香り
だった。

「当てるあげよつか？ リョウ君のことで悩んでるんでしょ」
凶星である。

顔に出ていたのか、やはり解りやすかったのだろうか。

「アリサが悩むことなんて、自分の力不足か、リョウ君のことしかない
じゃない。ほら、ママに話してみなさい」

冗談めかして自分のことをママと呼ぶサクヤだったが、それがアリ
サの最後の堤を崩壊させた。

しゃくり上げてむせ返りながら、アリサはサクヤの乳房へと顔を埋
め、縋り付く。

それをサクヤは優しく髪を撫でながら抱き寄せた。

「私……私……！」

「うん、うん。ゆつくり、話してごらんなさいな」

「は……ふ……ッ……あー！」

語ろうとしても、感情が喉につかえて言葉が出ない。

ゆつくり、少しずつアリサはサクヤへと告白した。

己の犯した愚かさを。

「私……見たんです。見てしまったんです。リョウの気持ちを。本当
の想いを。知ってしまったんです」

「リョウ君の、本当の気持ち……？」

ああ、とサクヤはそこで全てを悟った。

「感応現象ね」

悲痛さにサクヤの眉根が歪む。

サクヤは理解した。

アリサの苦しみは、痛い程に“通じ合えてしまった”が故のものな
のだと。

「見てはいけなかった……見てはいけないものだったんです。あれ
は、誰の眼にも触れられずに、そつとしておかなければいけなかった」
「アリサ……あなたは一体、何を見たというの？」

「見たんです……私は、見てしまったんです……」

「落ち着いて、アリサ。何を見たの？」

「恐ろしいものを」

吐息さえ凍りつくほどの恐怖。

サクヤは震えるアリサの肩に手をやる。氷のように冷たかった。

「私……私、眠ってるリヨウに、興味本位で触れて、感応現象を引き起こしたんです。」

いつもは私からの一方通行だった感応現象も、あの日は、リヨウがすごく疲れていたから、もしかしたらって。

そうしたら、リヨウの気持ちの、想いの、深い所まで流れ込んできて……私、最初は狙い通りだって笑ったんです。

これで本当に通じ合うことが出来たんだって。でも……でも……！

人は一人では生きていけない生き物だ。

だから他者と触れ合おうとする。心の距離を縮めようと努力する。

だが、人の矛盾の本質はここにあった。

心というものは、とかく薄汚いものである。人の心が純真無垢であるなどと幻想だ。

心と心が触れ合うことが出来たのならば、それで幸せなどと。一体どこのだれが言ったのだろう。

つまり人は心の距離が近くなればなるほど、他者の真実に耐えられなくなるのだ。

そしてアリサは知ってしまった。

リヨウタロウの真実を。

「リヨウくんのが、怖くなった？」

「違うんです……違うんです、私は……」

「いいのよ、それでも。それでもいいのよ……」

サクヤの胸に到来したのは、一握の寂しさだった。

幼い少女が温め続けた恋心が吹き消えたことへの。

リヨウタロウとて聖人君子ではない。いかに英雄然としてそう持て囃されたとしても、一皮剥けば欲望が渦巻いているに違いない。

知らないほうが幸せであることなど、いくつも存在するのだ。それを知ってしまったえば、後は破綻するだけだ。

人の、男の汚さに、少女の心は穢れを拒絶した。それだけのことだ。そうサクヤが納得しかけた瞬間である。

「リヨウが怖いだなんて、そんなの初めからわかってる！」

アリサの叫びが、必死に訴える瞳が、サクヤを貫いた。

「あの人の側に行くと、背筋が凍り付く思いがした。手足が震えるほどの重さを持った一言を聞いたことも、何度も何度もある。

助けを求める女性を見捨てたところを見た。どうしようもない男が死ぬ様を嗤って罵っていたのも見た。

道行く女性をいやらしい目で見ていたことも知ってる。生きる術がないと嘆く少女に、体を売れば生きられるのにとつぶやいたことも。

私たちを見る目さえとても冷ややかだったことを、わかってた！

それを全部、にこにここと、いつもの笑顔でしてたことも……私は初めからわかってた！」

サクヤは想う。リヨウタロウを、アリサを想い遣る。

自分は大きな思い違いをしていたのかもしれない。

「リヨウが、この世界を憎んでいる」ことなんて、私は初めからわかっていた！」

その慟哭は、本当にちっぽけな個人的な理由で。

だがこの世の何よりも重く、熱く、そして清らかなもの。

「あの人の心は叫んでいた！ それでもと！ それでも世界はきつと、美しいままなのだと！」

サクヤの両目から涙が溢れ出した。

この二人は、心が触れ合ったというのに。重なり合ったというのに。

お互いの距離が、何故こんなにも近く、果てしなく遠くなってしまうのだろうか。

「自分自身の心を、必死に騙して……！ 誰よりも自分が、それを信じていないのに……！」

あの人の戦いは、自分を騙すことだった。

“加賀美リヨウタロウという人間に、きつとこの世界は美しいと、勘違いさせること”だった！」

演技とは、何者かを騙すために行われるものだ。

もしそれが己自身に向けられたのだとしたら。

それは、想像を絶する内界での戦いとなるだろう。

日々己を殺すことだけに、その思考は費やされることになるはずだ。

表に出る言動と、内界での思考は大きくかけ離れたものとなる。

心身のアンバランスさは、いずれ自己崩壊へと通じていく。

恐らくは、既に自我の乖離が始まっていると考えられる。

異様なタフネスは、肉体の疲れを感じる機能が麻痺してしまったが故。

才能の一言では片付けられない能力の伸びは、自己保護のためのストッパーが破壊されてしまったが故。

リヨウタロウは、ギリギリのラインで己を保っていたのか。

“きつと”世界は美しい。

それは、この世界が穢れ切っていることを理解していなければ、出てこない言葉だ。切なる願いが、叫びが込められた言葉だ。

リヨウタロウを殺すのは、とても簡単だ。

それは間違いなのだ。

“お前の勘違い”なのだ突き付けるだけでいい。

そして、リヨウタロウの心臓にトドメの一撃を刺すナイフを、アリサは握ってしまった。

切っ先はもう、リヨウタロウの胸に届いていた。

感応現象は、お互いの意思に関係なく発生する。

「私は、自分の愚かな好奇心で、あの人が最も隠したいと、自分自身から隠し切ろうとしていた願いを、想いを、知ってしまった……！」

心の距離がゼロになれば、そこに生まれるのは幸せではない。絶望だ。

相手の己さえ知らぬ深層を、“知ってしまった”という。人の矛盾

の正体。

罪悪感。

己の内から湧き上がる罪の感情に、アリサは押し潰されんとしていた。

「アリサ」

「だから私は、もうあの人の側に居ることは出来ない。でも、離れることも出来ずに、ずるずると先延ばしにした。

サテライトの建築プランを提出したのも、その責任者に立候補したのも、そうしたらあの人と付かず離れずの距離でいられるから。

直接会って話すことが出来ないから、あの人の私物や、写真や、抜けた髪を拾って集めて……それで自分を慰めていたんです。

ほら、壁にいつぱい、リヨウの写真が貼ってある。ねえ、サクヤさん。私、気持ち悪いでしょう？ ねえ？」

「いいのよ、アリサ。それでいいの。それが『普通』なんだから」

サクヤは何度もそれでいいのだと、言い聞かせるようにアリサの髪を撫でる。

「貴方たちは特別な力を持ってしまった。それで本来はとても、とても長い時間を掛けなければいけないお互いの理解を、ちよつとした裏技を使ってショートカットしてしまった。

そのしわ寄せがようやく今、きたのよ。あなたのその不安は、彼の心が見えすぎてしまったから。『近すぎて、だから見えなくなってしまう』のよ。

それでいいの。心なんて、見えないのが普通なんだから。そうやって誰もが苦しんで、答えを出すのよ」

「答え……？」

「あなたの恋は、もう終わったのよ。アリサ」

その事実を口にせねばならない。

アリサの目に再び溢れる涙を、サクヤは唇で柔らかく吸った。

「だからあなたはもう、子供でいてはいけない。教えを求めてはいけない。誰もあなたを救ってはくれない。

あなたは一人で歩まなければならぬ。その熱に胸を焦がし、寒さ

に肩を震わせながら。それでも前へ、その先へ……答えに辿りつかなければならぬ」

「だめ……言えない……私は、言っただけはいけないんです。ああ——」

その叫びは、悲鳴に等しいものだった。きつと。

サクヤは想う。

この涙を見れば、叫びを聞けば、リョウタロウも信じられるだろう。世界の美しさと、そして、儂さを。

自らの崩壊と、引き換えにして。

「心の底から、愛しているだなんて——！」

それは、愛してくれとは言わない男へと向けた、愛の告白。

サクヤは想う。

自分も少女だった時に、こんな叫びを上げていたのだろうか。

涙する声は、歌のようにも聞こえた。自分もこんな歌を口にしていたことがあつたのだろうか。

わからない。

結ばれて、子を生じた今となつては。母となつた今となつては、今が幸せで、昔のことは忘れてしまった。

оре не море, выпьешь до дна.

悲しみは海にあらず、すっかり飲み干せる。

アリサの口癖の一つだ。

ああ、確か、悲しいことがあつたような気がする。そんなこともあつたねと、笑えてしまうようなことが。

悲しみはいずれ消えるだろう。時が経てば風化してしまうだろう。

だが、この身を裂く程に、後から後から内側から溢れ続ける感情はどうだろうか。

飲み干すには熱く喉を焼き、海よりも深く、無垢なその感情は。

サクヤにはわからない。

だが、一つだけ言えることがある。

自分の胸の中から聞こえる啜り泣く声。

こうしてアリサは歌い続けるのだろう。
愛の歌を――。



「ああ……後はよろしく頼むよ。送り届けてさえくれれば、勝手に向こうが組み上げてくれるさ。何せ、正規ルートを通ったパーツなんだからね。」

偶然規格が合わずに、ワンオフ品になって、彼の着任時期と重なるだけさ。偶然だよ、偶然……。

私は嫌いだよ。ああいう、自分は超越者なんです、みたいな顔をした者はね。女性ならばなおさら……これは失言かな。

指導者も、研究者達も、どうもキナ臭いが……さて、彼を使いこなすことが出来るかな？

それとも、君のように惚れ込んでしまうかも？ いや……崇拜かな？

ははは、怒らないでくれ。冗談だよ、冗談。君は冗談が通じないな、ツバキ君。

さて……では送り込もうか。我らが英雄殿を。

人外魔境、外道の巣窟――移動要塞、フライアへと。

喜んでいるのか、だって？ 声が嬉しそうだから？ うん、そうだね。その通りさ。

悪びれることがなくて申し訳ない。だって、ははは、とても、うん、とても興奮するだろう？

最も新しい神が織り成す、神話の幕開けを私たちは見ることになるのだから――」

神狩人、加賀美リョウタロウを語る際、対として必ず挙げられる名がある。

血闘士、神薙・R・ユウ——英雄の一人として数えられる男である。

神狩人（ゴッドイーター）、血闘士（グラディエーター）。

表の英雄、裏の英雄。

識者は口を揃えて述べる。両者は表裏一体。コインの裏と表のよ
うな存在であるのだと。

共に華々しい活躍の裏に、後ろ暗い逸話も付いて回るとなれば、ど
ちらが表で、どちらが裏か定かではない。

諸説入り乱れ、当時の記録も散逸し、他のゴッドイーターの働きに
紛れてしまったものも多い。

この二人は実は同一人物だったんだよ、などという眉唾物の説まで
ある。

黒蛛病、螺旋の樹、ゴッドイーターの新たなる可能性……単語を羅
列するだけで当時の混沌振りも理解できよう。情報が錯綜するのは
仕方の無いことなのかもしれない。

語られるべきは、同時期に台頭した数多の英雄の中で、抜きん出た
功績と闇を抱えた両名であるということ。

そして、記録にあるエピソードの不明瞭さが後年の作品群の題材と
なり、今もなお考察が続いているということ。

リョウタロウ、ユウ。共に謎の多く魅力的な、そして英雄と称され
るにたる高潔な人物であったということだ。

両者人格性格共に清廉潔白であり、近代の聖人とも称される程で
あったことは、疑う由もない。ペイラー・榊の著書にも記載されてい
る。

忌避される事柄も、恐らくは已む無くといった事情によるものであ
ると推察される。英雄とはどちらを切り捨てるか、という決断を常に
迫られる存在なのだから。

なお、この二人が対面したことはないと言われるのが公式情報である。

上記のペイラー・榊による、当時のゴッドイーター達の生活を克明に記録したノンフィクションの著書にも、この二人が出会うことはなかったということが明確に記されている。

両者が同一人物ではないか、という問い合わせがあまりにも多く寄せられたことに対し、ペイラー・榊がそのしつこさに憤慨したとも。

一級のゴッドイーターが一所に集まることがなかったのは、戦略的な理由によるものと、恐らくは支部長であった榊による何らかの裏取引が行われたのだと考えられる。

だが、歴史の裏では何が起きていたかは誰も知る術はない。

もしも、を考え夢想するのは、万人に許された自由である。

もしも、の話だ。もしも、この二人が非公式に出会い、肩を並べて闘ったことがあるのだとしたら。

英雄が力を合わせねばならない事態。それはきつと、地球規模の、神代の戦いであつたことだろう。

その戦いに胸躍らせられるのは、この世が地獄の一步手前で踏み止まっている証拠なのかもしれない。人の心はいつでも“平和”であるというのだから、皮肉なことだ。

かく言う私も、『R』同一人物説を指示する一人であるのだが。

【ゴッドイーターマガジン創刊50周年記念特別号、この冬熱い！イケてるゴッドイーター100選！より抜粋——】

□ ■ □

手が、ある。

キレイな手が。

目が開いて最初に思ったことは、自分の手がこんなにも細くて白かったのか、という驚きだった。

訓練での内出血と骨折に、真っ黒に色素沈殿して歪に折れ曲がっていたはずなのに。

顔に触れる。鼻があった。銃床で殴られてから平らになってしまったはずなのに。瞼が、頬が、膿の溜まったブヨブヨの感触ではない、正常な肌の触感がした。

「すばらしい」何人もの白衣を着た科学者が口々に称賛する。

「君は成功例だ」拍手が巻き起こった。

向けられたライトが眩しくて手をかざせば、手首に違和感が。

腕輪だ。

黒と金の、無骨な腕輪がそこにあった。

ゴッドイーターの腕輪が。

「何度見ても、回復錠の効果は素晴らしい。正に叡智の結晶だ」

「ゴッドイーターというのは便利なものだな。黒い干物が、愛らしい少女に早変わりだ」

「これであの何とか言う博士も満足するだろう」

「神機兵への適用はどうする」

「後期ロットに回そう。まずはこの試作品を送りつけなければ」

頭上で理解不能な言葉が交わされている。

「後期ロットの仕様は？」

「神機兵の全開稼働に生身の人間は耐えられんぞ。ゴッドイーターですら直ぐに使い物にならなくなる」

「なら負荷を減らせばいいだけのこと。幼年固定をし不要なパーツ、手足を落としてしまおう。内蔵もいらんな」

「いつそ脳を摘出してシリンダーに詰めて……」

何か、重大なことを話しているような気がする。

だが急激に戻りつつある身体感覚に、聴覚が情報を取り入れることを拒絶しているかのようだ。

身体が鉛の様に重い。

「君は特別な訓練を受けたんだ。誰にも……何とかいったかな、何とか博士にだって、君が受けた訓練のことを話してはいけないよ。いいね？」

はい、と舌が言葉を押し出す。

喉が張り付き、ひゅうとただ吐息が漏れただけだった。

満足したのか、科学者は頭上でのおしゃべりを再開する。

「R—TYPEは一応の成功、といったところか……ここまでやっても、素体の性能基準は最低限だとは」

「仕方がない。訓練だけでは、人間の限界は越えられまい。これ以上は投薬か、機械化しかないだろう」

「それこそ神機兵になげば済む話ではないか。だが、そうまでしなければオリジナルに届かんとは」

「オリジナルRは化け物だな。さすがは、アルティメットゴッドイーターといったところか」

「この固体は成功例だった。手放すのが惜しいものだ。良い素体になれたらうに」

「神機兵に乗せる前に、素体の性能を上げるという着眼点は正しかった。取り外すものを鍛えて何になるかと思っていたが、さすがは北の賢者だ」

「能力は認めるが、あれもあれで、独自で動いているようだがね」

「お互い様だ。利害の一致でしかない。あれは所詮、我々のTEAMではないのだから」

「個としての知か、群れとしての知か。どちらが優れているかではないな。手段が違う。そう、手段だ」

「悪意か、あるいは、狂気が知識の探求には必要だ。かねてより、世界を切り拓く偉大な発明は個人が為すものだった。だが、世界を脅かす……世界を壊す一手は、人という群れが、その総意で行ってきたものだ」

「科学とは何ぞや。科学とは、消費にこそその究極がある。エネルギーを用いて、結果を導くことが科学だ。つまり、消費だ。世界を消費することが科学の究極だ。」

みんなで、ね。ならばたった一人が作り上げたものではなく、大勢の人間によって産み出されたものこそが、世界を使い切るのだ。

科学とは人の業、進化の果てなのだとしたら、つまり人は世界を削

り取ることで進化するのだから」

「世界を破壊することでこそ、人は次のステージに昇れるのだ。そう思わないかい？ 君も」

話しかけられる。

返答が出来ない。

言葉が出ない。

理解出来ない。

「ふむん、しかし、これを送る……その、何とか博士のお人形遊びにも困ったものだな。面倒なのは妹の方だったか？」

「おいおい、我々のパトロンだぞ。お嬢さんなんだ、名前を覚えてやらねば、傷付いてしまうじゃないか」

「姉妹で科学者とはね。紛らわしいんだよ。あの車椅子の方の指図だろう？ 面倒なことだ。姉の方が扱い易くていい。馬鹿だからな」

「賢く、そして馬鹿だ。女として最上だよ」

「安売りしすぎだと思いがね。どこぞの支部局長に尻尾を振っているんだったか。自分の値段もわからん程に愚かなのはな」

「そうは言っても、金がなければ研究は続けられん。そして、サンプルが最も重要だ。彼女達は金とサンプルをくれるんだ。我々は彼女の代わりに手と足になってやる。等価交換さ」

「世知辛い世の中になったものだ」

「昔からそうさ。なに、今の時代、サンプルに欠くことはないのだからいいではないか。それに頭を悩ませることがないのだから、我々は幸せさ」

「モルモットとは言わないのか」

「人間性だよ。我々に残された最後の救いだ」

「はん、面白いジョークだ」

言葉が出ない。

理解出来ない。

怖い。

恐ろしくてしかたがない。

目の前で会話している白衣の者達は、果たして本当に人間なのだろう

うか。

ああ、駄目だ。

心を殺せ。

感情を切り離せ。

思考を、心を、自らの意思から乖離させるのだ。

教わったように、訓練されたように、感情を人格から引き剥がせ。

「さて、せっかく身体が動くようになったのだ。何か欲しいものはな

いかね？ 望みを言っごらん。今日が君の、ゴッドイーターとして

の誕生日だ」

「さっそく人間性の発揮か。命令だ。答えたまえ。どんな要求が出て

くるものか、興味がある」

につこりと、人好きのする笑顔で、人の形をした人ではない者が問う。

「紙と、ペンを、ください」

細波のように凪いだ心持ちでそれを見上げながら、自然と言葉が口から飛び出した。

胸の奥から熱い塊が競り上がってくるようだった。

からからの舌先が、歯茎をなぞる。

長らく潰れた鼻で呼吸することを忘れていたためか、口呼吸でいることが癖になってしまった。

喉が渴いた。でも、水はいらない。生理的な欲求ではない。

切り離された感情が叫ぶ。魂が軋む。

私の望みは。

「手紙を……書かせてください——」



さて、と榊さんが前置きして机の上で手を組んだ。

すごく……嫌な予感がします。

はいわかつてます。わかっていますからね。

それ絶対あのパターンですよ。

無茶振りの。

「世界各地を飛び回っていた君を、ここに呼び戻した理由を話そう」
ほらきた。

榊さんの顔、おれ最近、見分けがつくようになってきましたよ。

それ、やばいこと話す時の顔ですよ？

ここまで付いて来てくれたツバキさんとか、もうすっごい暗い顔してましたもん。

すまない、って俺の耳のどこなでなでしてからおでことおでこ合わせて慰めてくれましたもん。

知ってるー、これ見たことあるー。

こつそり可愛がってた捨てワンコが保健所に連れてかれるのを見る優しい人の眼だこれー。

今から話すのって、ツバキさんをマジへこみさせるぐらいやばいってことですよ？

やめてえ！

神機なしの出撃とかもきつついのに、もうこれ以上は限界！

限界ですからあ！

「君がアナグラを離れていた間に、君のゴツドイーターとしての新たな登録情報を作成しておいた。今の君は、加賀美リョウタロウであつて、非なる存在」

待って、話が見えない。

待って。

「加賀美リョウタロウは、今も変わらず極東支部から離れて欧州で活動中”。いいね？」

アツ、ハイ。

「君は、防壁外の集落を中心にアラガミ退治を請け負い金品を巻き上げる傭兵ゴツドイーター……血で染めた赤い肩、赤い肩をした鉄の悪魔、悪名高き吸血部隊の隊員として」

やめて。

お願いだから、やめて。

それ以上口を開くなら、例え榊さんでも手を上げることが辞さない。

尾ヒレ背ヒレってレベルじゃねーぞ！

そういう設定を俺につけ加えるのやめてくれませんか？

これ以上俺をとんでも人間にしないでお願い！

「それじゃあ、金さえ積まれれば何でもする何でも屋……表の顔は運び屋、しかし裏の顔は非常なる殺し屋家業。闇に隠れ、外道を討つ！

ああ、俺が斬らねば誰が斬る、必殺仕事人！」

それじゃあ、じゃないって。

もうやめてくれませんかねえ！

「仕方がないな。ならば在野で新たに見出された、新人ってことで。第二世代に適正があつて腕輪を嵌めたが、神機が見つからずすぐに次のものに換装することになった、としよう」

うぐぐ、それなら、まあ。

何か上手いこと乗せられたような。

ああ……赤紙が届いたあの日のことが、今よみがえる……。

「なぜ君に新たな身分を用意せねばならないのか。そう、君には新米ゴッドイーターとして、とある場所へ潜り込んでもらいたい。スパイ活動だよ！」

色んなことがあつたけど。

もう一度だけ、言わせて欲しい。

「目標は、独立移動要塞……その名も、フライヤ——！」

フェンリルに勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない。

もおおお、榊さんが言う言葉全部お願いと言う名の命令なんだからああ。

柔らかい言い方したって拒否権ないじゃんもおお。

ていうかなんだっけ、フライヤって。聞いたことあるな。本部直属の何かだっけ。

独立移動要塞って響きが怖すぎるんですけど……。

「ま、すごいキナ臭いから実情を調べてきておくれ。独立移動要塞と

か、秘密の塊って感じがするだろう？ それに君、暇でしょ？ 何もなければ無いでいいからさ」

身も蓋も無さ過ぎる。

暇って、そこそこやることありますけどね。

さすがに神機無しじゃどうにもならない任務もあるわけで、最近じゃもっぱらスタングレネード職人してますけど。

榊さんの提案で何もなかったなんて事が無いって知ってますからね。

絶対何かある流れじゃんこれもう……。

どうせまた支部長ポジションの人か博士的な人が黒幕なんでしょ。解ります。

ほんとこの世界の博士はロクな奴がいないな！

「渋い顔だね」

だってえ、やる気出ませんもん。

新人ゴッドイーターとして潜り込むって、何やるんですか？

訓練生とかになって座学するんですかね。

俺、そういう座学とか全部すっ飛ばして戦場入りさせられたんですよ。

コウタも同じかと思ってお前も初期教育受けてないんだろ、って話したら、幽霊を見るような目で見られたし。

ヒバリさんみたいにゴッドイーター適性のある職員とかじゃ駄目なんですかね。

整備士とかほら、俺すごい合ってると思うんですけど。

最近、リツカの手伝いして色々覚えまして。

腕輪付いてるからバランス悪くてたまに指とか切っちゃって、その度にリツカが治療って口に指をですね。

「もちろん、君にはゴッドイーターとして働いてもらうことになる」

まあ……そうでしょうね。

見つかったんですか。俺に合う神機。

「新しい神機……必要だろうか？」

ええ……でも。

正直、少し複雑です。

いいのかなって。

その……新しい神機を使うのが、前の相棒に悪いかもって思うのと。

それと。

それと、やつと戦場から離れることが出来たのに、また戦いの中に戻るのがかと思うと。

嫌なものを、たくさん見ることになるのかと思うと。

少し、怖くて。

「世代を隔てた神機に適正が認められた場合、これまで使われていた神機は保管され、新たなものへ乗り換えることとなる。

君には旧型神機の適性は無い。これから新たに作られる神機、そのコアに適正が認められた。フライヤで作られる新たな世代の神機にだ。

フライヤは特殊な場所だ。本部の直轄領のようなものだ。こちらの要請は通ることはない。ならば、こちらから出向かねばならない。

これは転機だよ。君にとっての転機だ。

いいかい、君も理解しているはずだ。魂がそう囁いているはずだ。君には、ゴッドイーターとして生きる以外の道はないのだと。

君は証拠もなく、ただ私の勤である理由だけで、たった一人で死地に送り込まれることになる。私の一存でだ。君は言わば、私の共犯になるのだ。

特務……と言う奴だよ。これまでは、高難易度任務という形でしか君に命じていなかったが。これが私が初めてゴッドイーターに命じる、支部長としての後ろ暗い意味を持った、特務だ。

さあ、掴みたまえ。この手を。君の歩むべき未来を、その手に「手を差し出される。

ああ、きつと差し出されたこの手は、地獄への標なんだろう。

俺もまったく酔狂な奴だなあ。

望んで死地へ踏み出しにいくんだから。

でもまあ、榊さんに言われちゃあね、しょうがないか。

だって、この手がこんなにも暖かいんだからさ。

この手に誘われて、皆、地獄に行くんだとしたら。皆、ともに逝くのだとしたら。

悪くないな。うん、悪くない。

だつてきつと、この人もそこにいるんだろうから。

「契約成立。こちらの皆には私が上手く言い置いておくから、安心しなさい。頼んだよ」

了解しました、榊支部長。

元第一部隊隊長、現クレイドル所属特設遊撃部隊隊員、加賀美リヨウタロウ。

諜報の任、委細承知致しました。

「よろしく頼む、加賀美リヨウタロウ君。否——」

本当に、食えない人だ。

道化の仮面をかぶって、真理を見ている。

「スターゲイザー」は伊達じゃないってことか。二つ名の意味は、星の観測者だったかな。

自分を見るだけしか出来ない覗き屋なのさ。そんな風に自分を卑下していた台詞も聞いたっけ。

舞台を動かしているのはご自分であると、自覚があるのでしょうか、この上司様は。

無力ぶって喜劇にしようとしているのだろうか。そう考えると、どうしてもこの人を憎むことが出来ない。とんでもなく酷い目に会わされてもいるっていうのに。

ありがとう、榊さん。

あなたの陽気な悪ふざけとお茶目さが、きつと皆を照らす光りとなっている。

何だっけ、悪名高き吸血部隊の傭兵だっけ？ さすがにこれは無いけれど。

金を詰まれたら殺しまでする何でも屋、か。

ははは、面白いな。本当に面白いよ、榊さんは。

それ、どうやって調べたんですか？

『神薙・R・ユウ』——君

ミドルネームはやめてえ！

□ ■ □

「おーっす！ リョウ！」

「おう」

——おっすコウタ、ソーマ。

「どうしたんだよー。なーんか嬉しそうじゃん？」

——あ、わかる？ ほら、これこれ。二年くらい音信不通だった友達から久しぶりに手紙が届いてさ。

「手紙？ へー、珍しいじゃん、手紙なんて。郵便網なんて分断されちゃってもう長いってのに」

「おい、お前……まさか、女からのじゃないだろうな？ やめろ、マジでやめろ。俺に被害が全部くるんだぞ。」

最近はアリサだけじゃなく、他の奴等まで俺にアタリやがる。なんなんだあいつ等は……」

「はーい、ソーマ君は向こうでお休みしましょうねー。で、なにそれ。フェンリルマークがガッツリ捺されてる時点でやな予感しかしないんだけど」

——ところがどっこい、フェンリルが昔からやってる慈善事業ってやつ。建前だけのね。世界中の孤独な子供たちに交流の機会をーっていうプロジェクトの名残りだよ。

子供の頃、ゲンさんに勧められてさ。それからずっとペンフレンドってなわけよ。アラガミ情勢とか俺が住所不定無職になっちゃったりしたから、届いたり届かなかったりだけど。

フェンリルもたまには良い事をするもんだ。

「外面だけ取り繕ってなんだかなーって感じもするけどね。封筒のそれ、海外の押し印？ どこから？ 誰から？ 何て人？」

「やめろ……女だ……絶対女からだ……やめろ……やめてください……」

「ムツミちゃん！ ソーマにお酒出してやって！ キツイやつ！」

「いやいや、男だよ。ほら、これ名前。ぼんじゅーまどまじゅーる、の国からだよ。」

「おーフランスかあ！」

「お前、マジか……コウタ」

「自分で言っておいてなんだけど、よくわかったな。ちゃんと勉強してるんだな、コウタ。なんか感動しちゃったよ。」

「お前達が俺のことどう思ってるのかよくわかったよ」

「で、相手は一般人なんだろう？ 機密を漏らしたりはしていないだろうな」

「そこは大丈夫。お仕事はちゃんとしないとね。まあ、近況報告とか、最近面白かったこととか、雑談ばかりだよ。」

「ここ二年、返事がなかったからさ、心配してたんだぜーとか。」

「こっちは無職から華麗にゴッドイーターに転職したつてのに、へまやって神機ぶっ壊して休職中ですよーとか、それくらい。」

「それは……」

「機密には触れてないだろう？ それに、お互いペンネームを使ってるから、誰かなんてわからないよ。」

「そうだな。ならいい」

「おっとお、なんか不機嫌ですねソーマ君。あれかな？ ぼくの友達だったリョウ君を取られちゃった悔しい！ みたいなジェラシーかな？ んー？」

「うぜえ。嫌な予感がするっただけだ。本当にな……」

「それで、まあ最近の事書くくらいだからさ、心配いらないよ。新しい配属先で、新しい神機もらうことになりました、とかね。」

「そっかー、新しい配属先で新しい神機を……え、はああああ?!? ちよっ、はああああ?!?」

「そうか。短い休暇だったな」

——あんまり休めた気はしないけど。極東つてブラックすぎんよーマジで。

「違うない」

「いや、ちよつ、そんな軽く言つて、ソーマー！」

「うるさいぞコウタ。静かにしてろ。ムツミが睨んでる」

「だつてさあ！ 何でそんな大事なことを黙つてたんだよ、水臭いぞリョウー！」

——いやあ、また海外周りに戻されるらしいし、ことさら言うものでもないかなつて。特務つてやつですよ、特務。

「はい来た特務つて言う名の博士の無茶振り！ ああ、もう！ そーだねそーですよね！ 肝心なこと言わないとかそういうところあるよねリョウつて！ まつたくー！」

「アリサ達には知らせずに行くのか？ 前の海外派遣も唐突だった」

——まあ、他のみんなはともかく、アリサには最近避けられてるしね。榊さんが上手いこと説明してくれるとか何とか。これが今生の別れでもあるまいし、またすぐ戻ってくるからさ。

「そうか。なら俺から何も言うことはない。向こうでもしっかりやれよ」

——うん。こつちの事は任せた。

「おう」

「ちよつと！ なんでそんな良い話みたいに締めようとしちやつてるのさー！」

「なんだコウタ、お前、泣いてるのか」

「だつて、リョウがさ、ゴッドイーターにさあ！ 神機が……リョウが、ゴッドイーターをまた……俺、俺！」

「大げさな奴だ。極東で腕輪の封印処理もされず、待機を命じられていた時点で、次の神機が用意されるのは決まりきっていたものだろう」

「ソーマだつて涙目じゃん！」

「見間違いだ」

「嘘つけ！」

「おいにじり寄ってくるなコウタ！ リョウ、お前笑ってるんじゃないぞ！」

フエンリルに勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない。

君には初め、そう言っていたね。

でも最近じゃ、少し違うんだ。

色んなことがあって、ありすぎて、言葉にするのが難しいけれど。そんなに悪くないんじゃないかって、思うようになったんだ。

だって、やっぱり世界は綺麗で、美しいものだったって、解ったんだ。

解ったんだよ。

こんなにも綺麗で美しい世界を、俺は真っ直ぐに見られないことを。

世界は清らかだった。でも俺は、それを愛することができないままにいる。

努力を重ねている。好きになる努力を。愛する努力を。無駄な努力を。

こんなにも愛そうとしているのに、愛したいのに……愛せないんだ。

誰かを守ろうと思う気持ちはあるんだ。大切だと思う気持ちも。

でも、ふとした時に、何もかもがどうでもよくなってしまう。

こんな世界なんか、一度綺麗に消えてなくなってしまうほうがいいんじゃないかって。

そっちの方がさっぱりするって。

全部壊れてしまえと、そう思う時があるんだ。

きつと俺は間違っていて、俺の心も偽者なんだろうと思う。

でも、それでもいいんだって、最近思えてきたんだ。

きつと、面白おかしい、友人達がいるからだと思う。

俺の汚い部分を見ても、別にそれでもいいさと笑ってくれる友人達

が。それはきつと、素敵なこと。なんていうか、救いなんだと思う。

きっと誰かと寄り添って、暖かいと感ずることが出来れば、その瞬間、誰もが救われているんだと思う。

たとえば世界を、憎んでいたとしても。

美しいと知ってしまったって、それでも憎しみは消えず、愛することに苦悩する者であったとしても。

触れ合った瞬間の暖かさは、きっと真実なんだから。

なんて言えればいいのか、つまり、友達はいいものだってこと。

だから、いつか君にも会えるといいなと願っています。

【君の友人より——アランへ】

ぐっどいーたー：15 噓 GE 2

やがて雨が降る。

雨は降りやまず、時計仕掛けの傀儡は来たるべき時まで眠り続ける。

人もまた自然の循環の一部なら、人の作為もまたその一部ならば。

荒ぶる神々の、新たな神話。

その序章は、あなたから始めることとしましょう。

さあ、幕開けのベルを――。

□ ■ □

Re : boot ————— Error。
R R R R R R R R R R R R R R R R B B B B B B B B B B B B
B B ————— R : B。

□ ■ □

ヴイスコンティの家名に重さを感じなくなり、どれだけの時が経っただろうか。

ゴッドイーターとなるべく訓練を受け、そして腕輪を取り付けられたその瞬間からだったか。存外長くはなかったようだ。もうずっと前から使命に生きていたように感じる。

アラガミと闘い続けるという使命に。

ジュリウス—— 『ジュリウス・ヴイスコンティ』。

ドツグタグに刻まれた己の名を指でなぞり、ジュリウスは苦笑し

た。

指先に一瞬痺れが奔ったのは、過去に残してきた、何か刺のようなものがあつたからだろう。今よりも未だずっと幼い、少年だった頃に。

感傷というものだろう。

そんなものは両親が死に、財産目当ての親族をたらい回しにされていた時に捨てたと思つていたが、人は業を下ろすことはなかなか出来ないらしい。

ジュリウスは待合室のドアをノックする。内側からどうぞ、という許可の声が返る。

自分の母代わりとなつてくれた、女の声だ。

今日、家族がまた一人増えると伝えられていた。

共に戦う仲間が。

訳もなく首元のタイの位置を調整する。新しい仲間は無様な格好は見せられない。

気品があり瀟洒である完璧な男、と他者から称されることも多いジュリウスだが、緊張や焦りとは無縁ではない。

“一人目”もそうだった。

あれは今から一年前。初めての家族、共に戦う仲間、感動に頬が紅潮していたことを思い出す。

母代わりとなつてくれた人はいたが、しかしそれでもジュリウスは孤独であつた。

ジュリウスは所謂、天才と呼ばれる種の人間だった。

一度見聞きしたものは忘れず、一度の経験で百を知り、千を実践する。

『マグノリア・コンパス』と呼ばれる児童養護施設——の皮を被つた、“児童訓練施設”にて、ジュリウスの才は完全に開花した。

将来にゴッドイーターとなり人類の一助となるよう夢見て、ジュリウスは幼少期の全てを費やし、己を鍛えた。直ぐに周囲との差が開いていった。その差は埋めがたい断崖となり、ジュリウスもその間に橋を架けることを諦めた。

相互理解を放棄したというよりも、理解不能であったと言う方が正しいだろう。

幼い頃は不思議に思ったものだ。

何故みんな、こんな簡単なことが出来ないのだろう。

かつてのジュリウスは、心底そう思っていた。

例えば戦闘訓練、例えば座学、例えば銃の分解、例えば指揮官訓練、例えば……。

あらゆる訓練にて、想定以上の結果を叩き出した。時には教官すらも超え、ジュリウスは大成していった。

だが、ジュリウス自身の感覚としては、そう「努力」を重ねた故の結果ではなかった。

やってみたら出来た。それくらいの感覚だった。

ジュリウスにとっての努力とは、スポンジが水を含むかの如く、あらゆる知識を吸収することだった。

注ぎ込めば注ぎ込む程力を蓄える、底なしの井戸のようだった。水を注ぐ作業。それに関して、労した覚えはない。

血を吐いて努力をしても、結果に届かないこともあると今ならば解るが、幼い傷付いた少年は他者を慮る心が欠如していた。

全ては唐突に冷たい世界に放り出された少年の、叫びと祈りからくる残酷さであった。

誰かに必要としてほしい。

ジュリウスの心からの願いだった。

誰かを必要とする……誰かを愛するということを知らぬ、愛されることのみを欲していた少年の罪だった。

ジュリウスは忘れない。

自分の護衛として付けられた少女に向かって言ってしまった、あの一言を。

きっと、当時の大人達は、そうして人間関係が破綻しつつあったジュリウスを思い似たような境遇の少女を側に置いたのだろう。

大人達の汚さによって少年は、訓練の過酷さによって少女は、お互いを思うことが出来なかったのだ。

そしてジュリウスは口にしてしまった。共に受けた訓練で、少女の何度も繰り返す失敗に対して。

なぜこんな簡単なことが出来ないのか、と。

嫌味に聞こえたなら、まだよかった。喧嘩なり何なり、反撃を一つもらえばそれで帳消し。怒りであっても、心の交流があるだけまだマシな状況だっただろう。

だがジュリウスは、心の底から解らないといった風に、純粋な疑問として、それを口に出してしまったのだ。

「きよとん、と小首を傾げて。

それは冗談でやっているのかな、と思いつながら。もしかしたらそうやって自分を笑わせて、会話の糸口を探そうとしているのかなどと、的外れな期待を抱いて。

持つものは持たぬものの気持ちを理解することは決して無い。

その少女は無言だった。

無言で、ただ視線だけをジュリウスに返した。

空虚だった。

曇り空のように灰色の瞳がそこにあつた。

ジュリウスは己の過ちを悟った。

ジュリウスの不幸は、愚かではなかったことだ。その賢さ故に、己のしてしまったことの意味を理解したのだ。

少女の瞳には、何も映されていなかった。眼前にいるジュリウスさえも。

夢、希望、未来への期待……子供が抱くべき全ての美しいもの。少女の瞳は、世界を映すことが無くなってしまったのだ。

美しいものを映すはずだったその瞳を塞いだのは、自分だ。

「空」となってしまった少女。

その日から、少女から感情というものを感ずることが無くなった。甘いジュースを飲んでおいしい、綺麗な絵を見てすごいと思う、そんなそれまでほんの少しだけ残っていたものも、何もかもが無くなってしまった。

ただ刺激を刺激として受け止めているだけのような、息をすって吐

くだけの人形のような存在になってしまった。

そしてジュリウスは、“人間”となっていた。

天賦の才故に人の心が解らなかつたジュリウスが、初めて他者の心に触れたのだ。少女の心を壊したことによって。

ジュリウスは、少女の心を喰らつて、人の心を得たのである。

苦い、あまりにも苦い思い出だ。

その後、少女は自然とジュリウスから離されて、どこかに消えてしまった。

便箋に何かを書き綴っていたような姿を最後に、それきり少女を見ることはなかつた。

少女がどうなったかはジュリウスも知らない。問うても誰も教えてはくれなかつた。調べようとしなかつたのは、恐れていたからだ。己の罪を形として見たくはなかつたからだ。

心なくしては、孤独の渦から逃れることはできない。

孤独の恐ろしさをジュリウスは知っている。

この世界で、ただ独りで生きていくことは出来ないことを。

心を閉ざし孤独に生きることになった少女に待ち受ける未来が、暗い陰惨としたものであることも。

寒い世界だ。身を寄せ合い、お互いの体温で温め合う家族が必要だ。

できれば気の合う者がいい。きつとそれは、相手だつてそう思っているはずだ。

だからこうしてジュリウスは、“適合試験”には必ず顔を出すようにしていた。

一人目は、希望に胸湧く温かな日差しのような少年だった。

一年経ち、未だきこちなさは残るものの、よき関係を築けていると思う。距離感が計れないのは、これは自分のせいだ。踏み込まれることに臆病な自分の。

二人目は、つい先日適合試験が通つたばかりの、底抜けに明るく朗らかな、人懐こい子猫のような少女だった。

軽く自己紹介は済ませておいたが、こちらも相手の懐に嫌味なく踏

み込むような性格で驚いた。距離を詰められると一瞬警戒してしまうのが悪い癖だとは解っている。心を開かねばならない。

きつとこの二人になら、胸の内を打ち明けたとて、信頼し合うことが出来るはずだ。

そして今日。

三人目が配属される――。

「失礼する、『ラケル博士』」

空気が抜け、機械式のドアが開く。

一言部屋の中に向け、足を踏み入れた。

「ジュリウス」

嬉しそうに語尾をとろりと延ばす、特徴的な口調の女の声。

背筋を這うような艶が含まれた声だ。

きり、という機械式の車輪が回る音。自動式の車椅子を振り向かせ駆動音である。

車椅子というハンデもまた、彼女の蠱惑的な雰囲気色彩の一つのアクセサリの様にしか感じられない。

車椅子毎ジュリウスに向き合った部屋の主。

彼女の名は、『ラケル・クラウディウス』

フェンリル極致化技術開発局、通称『フライア』の、副開発室長である。

ジュリウスを見やる視線は、額に掛かる黒のヴェールに隠れ、暗がりの向こうに柔らかく細められていた。

「新しい家族が増えますよ。ほら」

指し示すのは、大型モニターの向こう。

四方を対アラガミ装甲壁で覆われた、適合試験室の映像である。

ラケルは投影されたパネルを、細く折れそうな程の、まるで氷の彫像のような繊細な指先で叩く。

金色で装飾されたモニター群に向かう姿が、まるでパイプオルガンの奏者のような、宗教画染みた荘厳な姿に見える。

「あなたの兄弟が……私の新しい子供が出来るよう、祈りましょう」
そうだな、とだけジュリウスは答えた。

時折ジュリウスは、ラケルに言い知れぬ恐ろしさを感じることもある。

例えば、今だ。

適合試験とはゴッドイーターの適性が認められたものに腕輪を装着し、神機と結合させ偏食因子を注入することを指す。

年々精度が高まり、今ではほぼ失敗は無くなったというが、それでも失敗の可能性はゼロではない。

資料でしかジュリウスも知らぬことだが、この適合試験に失敗した者は、人のカタチを失いアラガミとなってしまうという。

試験などと言うが、これは実験だ。適合実験とするのが正しい表現であるだろう。

適合試験はゴッドイーターの活動領域で行わなければならない、という規定を考えれば、ジュリウスがこの場にいる理由も自ずと知れよう。

ジュリウスもまた、この場にある種の覚悟を持って臨んでいる。場を和ませようとしているのだろう、くすくすと嬉しそうに笑うラケルに、ジュリウスは頷くことは出来なかった。

言葉尻だけを捉えるならば、なるほど祈りの言葉であるだろう。だが、そこに込められた感情は、何か揶揄する響きがあることを感じられぬジュリウスではない。

ラケルはこういった、乗るか反るかといった賭けのようなものを好む傾向があった。

退廃的というのだろうか。滅びを望むような一面もあるような気がする。

趣味趣向の類なのだろう。性癖とでも言うべきか。

大恩ある相手だ。ジュリウスは咎める事はない。

重要なことは、彼女ではない。これから新たなゴッドイーターとして歩み始める、*「彼」*の往く道である。

「どうかその行く先に幸多からんことを」

「ええ……きつと、世界を導く、その礎となってくれるでしょう。いえ……その礎となった多くの先の、頂きに立つことになるのかも。頂点

は二つもいらぬ」

「博士、何かおっしやりましたか？」

「世界を導く子どもたちを得て、私は幸せに思っていますよ、とだけ。彼がこちらを見ているですよ」

手を振ってさしあげましょう、とラケルは言った。

ジュリウスはそれを曖昧に笑って拒否した。モニターの向こうからこちらの様子は見ることはない。レンズを通して一方的なやり取りしかないからだ。

祈りを捧げる以上は、流石にセンチメンタルに過ぎはしないだろう。ジュリウスは希望を抱きこそすれ、過剰な期待をすることはない。

だが、視線を感じた。

モニターの向こうから。

刺すような、痛みを伴う視線を。

馬鹿な、ありえない。ジュリウスはその感覚は気のせいであると否定した。己の感覚を、否定したのだ。

カメラのレンズの、さらにモニター越しに「見られている」などと。

自身の感覚を否定するジュリウスは、まったくの無防備だった。

ジュリウスがふとモニターを見た瞬間である。

視線が、絡み合った。もはや疑いようも無く、明確に。

吐息が凍える。

「む、お……ッ！」

圧。

そうとしか言い表しようの無いプレッシャーが、室内に充満する。

足が後ろへと下がる。無意識に体だ硬直し、血管が収縮する。戦うための身体を、本能が造ろうとしている。

湧いた頭に氷柱を突き入れられたようだ。

脅威。脅威だ。

大型のアラガミを前にしても終ぞ感じることのなかった、脅威が目の前にある。

モニタの中に映るのは、中肉中背黒髪の東洋人の青年。
これといった特徴はない。

冷たい実験台の上に横たわった、無防備な姿を晒している。

だが、その隙からは一切の隙もうかがえない。無防備であるのは、
ジュリウスの方であったのだ。

カメラを、モニターを、その先にいる自分達をじつと見上げる青年
に、ジュリウスの総身は粟立った。

乾いた喉が張り付き、熱を発し始める。

身体は鳥肌が立つほどに寒いというのに、熱い何かが喉元に競り上
がってくる。

矛盾。

どうしてこんなにも冷たく、胸が熱いのだろう。

「氣を楽になさい。貴方はすでに選ばれて、ここに居るのです……」

ラケルがマイクのスイッチを上げる。

そのまま適合試験の説明を始めた。彼女なりの笑えないユーモア
を交えながら。

“彼”の周囲に、機械群が展開を始める。最新鋭の適合試験機器で
ある。

展開を繰り返し、競り上がってきた台座には、黒塗りの神機が。

まるで棺のようだ、とジュリウスは思った。

神機が納められた台座には、手を差し込むスリットが設けられてい
る。

箱型の最新鋭試験機器は、そのスリットに手を収め、上から蓋をす
るようにして叩き付けて作業を完了させる。

片腕を収めたその箱が、ジュリウスには棺のように見えてならな
い。あるいは、そのまま、ここが彼の墓となるのだから。

「気になりますか？」

ラケルに呼ばれ、意識が戻る。

いつの間にかジュリウスは、モニターの向こうにいる彼と見詰め
合っていた。

距離も角度も、何もかもを超えた邂逅であった。

感応現象のそれとは異なる、意思を超えた、超常的な精神の触れ合い。

不可思議な出来事だった。ジュリウスにとって、初めての。ラケルがスピーカーのスイッチを再び上げた。

ジュリウスにマイクを差し出す。

「俺は……ジュリウス・ヴィスコンティ。お前が配属されることになる部隊の、隊長だ」

適合試験を通る前の者に、配属先の部隊長が声をかけるなど、異例なことだ。

しかしそうあることが自然なことであるかのように、ジュリウスは彼へと、自らの名を告げた。

彼は手首をさすっていた。右の手首だ。手首を一周するように、テープで薬剤アンプルが固定されていた。

テープを面倒そうに剥がす彼。皮膚の色が、その周辺と上腕部とで、酷く異なっていた。

事前の人事通達資料を思い出す。

確か、極東にて第二世代に適正が認められたものの、すぐに「乗り換え」のためにこちらに派遣された新兵であったか。

不機嫌そうな顔は、今回の人事異動に不服を感じているからだろうか。

極東のような最前線、ゴッドイーターの華とも言うべき戦場から引き抜きを受けたのだ。無理も無い。

「ここ」は正直なところ、「実験艦」という色合いも強い場所だ。フェンリル本部直轄ということで、多少なりとも無茶が通る。

そう、『フライア』は常に人員を求めている。
「第三世代」に適正のある人員を。

————
「どーも。ジュリウスさん。カガ……神薙・R・ユウです。」

男が頭を下げた。

寝そべったままの不恰好なものであったが、目を伏せ出来る限り首を曲げる、丁寧なおジギだ。

素っ気無さは愛嬌であろう。上司に対する態度としては不足であるが、大胆不敵な人物であると好感が持てる。

人事を不服に思ってはいるが、隊長の自己紹介を無視することも出来ない、といったところだろう。それが彼の性格の律儀さを現している。

挨拶は大事だ。確か、極東の古文書にも書かれていたはず。

なるほど、これが極東人か。極東の教育レベルの高さが垣間見えたり気がする。

彼の視線の高さが戻る。

彼の……ユウの口元には、笑みが浮かんでいた。

柔らかな笑みが。

だが。

「ユウ、か。今後ともよろしく頼む」

ジュリウスの凍える背筋と、燃える胸の内には何ら変わりようがない。

優しく緩む、ユウの唇。

だがその目が、全てを物語っていた。

深淵。

深く、暗い、虚無の洞。

底なしの井戸を覗き込んだような——否、これは宇宙だ。

ジュリウスはユウの瞳の中に、宇宙の真理を見た。

底知れぬ、底など無いかのような、無限の可能性を。

ユウの瞳に映る己の姿を、ジュリウスは見た。

そして、理解した。

目の前に居るこの男は、自分と“同等”の存在であることを。

「Rの系譜か、あるいはオリジナルに繋がるものか。それそのものか……どれでもよいでしょう。とても、楽しくなりそうですね。宴は華やかでいなくては。フフ、フフッ」

くすくす、くすくすと、ラケルが笑っている。

喉の奥で転がすような細かいつぶやきは、機器の設置が完了したアラームに掻き消され、ジュリウスに届くことはなかった。

あるいは、届いていたとして、その後の“二人”の運命を変えることが出来ただろうか。

神なる者にも解るまい。アラガミにも、人にも。全ては世界の選択のままに。

「何も恐れることはありませんよ。貴方はそう……『荒ぶる神』に選ばれし者ですから……フツツ」

ラケルがパネルを撫でる。

官能的な指使いは、正に戦士を死地へと誘う美しい死霊の指だ。また一人、新たな戦士が生まれる。

きつと、地獄の底を舐めるような、窮極の戦士が。

「貴方に祝福があらんことを——」

棺に目掛け、激しい回転運動を伴う適合機が叩き付けられた。

ドリルの様に、腕輪を装着者へと癒着させる。

轟音。

モニタの先の音が、こちらまで漏れ伝わってくるかのようなだった。

ユウは一瞬、背を仰げ反らせたが、奥歯を噛み締めるかのようにして悲鳴を押し殺していた。

呻き声一つ漏らすのみ。耐え難い激痛だろう。脂汗を流しながら、

それでも弱音を吐くことはない。

自分の時はどうだっただろうか。

気付けばジュリウスは、モニターへと手を差し出していた。苦痛に歪むユウの頬を撫でるようにして。

接合は数秒。ユウが台座から転げ落ちる。

「適合失敗か……っ？」

「いいえ。よくご覧なさい」

慈愛に満ちたラケルの視線の先には、ユウが、神機の剣先を地へと刺し杖として、膝を震わせながら立ち上がらんとする姿が。

“生まれた”のだ。

ジュリウスは、あらゆる理屈を超越し、そして直感する。

光りと影。表と裏。天と地。

あれは、己の表裏一体となるべく存在だ。

「貴方に『洗礼』を施した時とそっくり……」

ふわり、と黒いヴェールの向こう側でラケルが優しく微笑んでいた。

絡められた両の指先に、見えない糸が絡められているような、そんな気がした。

「おめでとう……これで貴方は神を喰らう者、ゴッドイーターに成りました。いいえ、戻った、といった方が正しいかしら。

そして、これから更なる『血の力』に目覚めることで、極致化技術開発局『ブラッド』に配属されることになります。

ゴッドイーターを超越した、選ばれし者ブラッド……来るべき新たな神話の担い手……」

苦痛に喘いでいたユウが、天を睨む。

ジュリウスの胸の奥に灯る熱い何かに、名が付いた。

感応現象ではない。意識のやり取りではない。説明不可能な、感情のうねりのような何かに。

思う。

果たして、自分は家族を、仲間を、庇護し合えるような、支えねばならないような、隔絶した存在として見ていなかったか。

何と云うことだろうか。まるで進歩がない。自分の精神は、少年時代のままではないか。守ってやらねばならない存在を欲していたなど。その対価に愛されようとしていたなどと。

果たしてそれが、自分の真なる望みであったのだろうか。

ジュリウスは、その天から与えられた才により、己の感情を正確に把握した。理解した。

ユウという男があらゆる面において、己に差し迫る『格』を有した存在であることを。

ユウが立ち上がった姿の向こうに、瞬間、ジュリウスは白昼夢を見ている。

宇宙を見下ろす光点の頂が二つ。

一つはジュリウス。一つはユウ。

まるで世界をすべる『王』の座のようにして、二人は向かい合っ

立っていた。

神機を手にしたユウに、喉元に刃を突きつけられながら――

ジュリウスの胸が高鳴る。

これは、暗喩だ。

ユウが自分にとつて、重大な存在となることへの。

自分達は同等であり、そして対等である。

少女の空虚な眼を思い出す。

こびり付いた後悔の、その理由をジュリウスは思い知る。

ああ。なんだ。そうか。そうだったのか。

あの台詞は、自分にこそ向けられるべきだった。

なぜこんな簡単なことが出来なかったのか。なぜこんな簡単なことが解らなかったのか。

俺は、あの子と友達になりたかったんだ。

「我々は君を歓迎する。ようこそ、ユウ――『ブラッド』へ」

この胸に灯った熱を。

手に伝わる熱を。

ジュリウスは知っている。理解している。

かつて、幼さ故に踏み躪ってしまったもの。

同じ轍を踏んではいけない。もう二度と過ちを繰り返してはいけない。

ジュリウスは知っている。理解している。

自分が真に望んだものは、この手の内側にあるということ。

もう手放してはいけない。

自ら離れていってはいけない。

愛されること。愛すること。それは大切なことだ。人の一生の中で問い続けていかねばならないことだ。

両親を失った自分は、家族を欲し続けてきた。

だが本当は、もっと対等な存在を欲していたのではないか。

仲間……否。もっと、もっと、お互いを思いやらずとも側にいるよ
うな、傷付け合っても笑い合えるような、そんな関係を求めているの

ではないか。

ああ、どうしてこんな簡単なことを今の今まで解らなかつたのだらう。

自分が、そしてあの少女が、心の底から欲して止まなかつたもの。それは友情と呼ばれるもの。

例え、それがお互いの血を、肉を斬り合うような友情であつたとしても――。

「貴方には……期待していますよ――」

ラケルが囁く。

その声が、果たして暗惨たる夜の闇を往く者達の、導となるであろうか。



かつて、極東に二柱の神様がおつたそうなの。

その神様達はひよんなことで口論となり、「神遊び」をすることとなつたという。

極東の神々は仲違いをすることが多々あり、ここが他国と異なる点であるが、戦争ではなく、喧嘩をそこいら中でしていたらしい。それもくだらない理由の。

二柱の神様達もまた、くだらない理由での喧嘩をしたのである。

曰く、最上の苦痛とは何か。

ある神はこう言った。それはすなわち、重い岩を背負つて国中を歩き続けることである。

ある神はこう言った。それはすなわち、腹痛を我慢することだとはあ？ そんなに我慢するの全然つらくないし。出すの我慢するのが最上の苦痛とか馬鹿す。

よっしゃそんならお前試してみろし。限界までな。

結果は……言わずもがなである。

汚い絵面になったことは想像に容易いだろう。

ていうかそれが極東の土台を作った神様の話だよ。国譲りするまでトツプの位だった神様の黒歴史だよ。

つまり何が言いたいかっていうと……極東人は胃腸が弱いつてことだよ！

極東支部を出発して早いもので、あれよと言う間にフライアに到着していた。

写真で見た時は、超巨大陸上戦艦じゃんすっげー、とか思ったりもしたが、そんなものはフェンリル御用達の輸送機の中で消し飛んだ。

榊さん……腹が、痛いです……。

機内食の干からびたチーズがクリティカルヒットしたらしい。何かやたら高いメーカー品らしいが、チーズの良し悪しなんかバンピーが解るわけがない。

鋼の胃袋を持っていると思っていたが、こうまで弱るとは。

いや、原因は解っている。

アリサだ。

初めは普通に話してるんだ。

でも、だんだん涙目になっていって、最後は「ごめんなさいッ！」って急に顔を抑えて走って行っちゃうんだよ。

俺、何かしましたかねアリサさん。

コウタやソーマの何か言いたそうな顔が超つらいの。特にソーマ。「俺の苦しみの十分の一でも味わえ」とか分け解んないし。

久しぶりに会ったサクヤさんも俺を見て溜息吐くし。

そんなこんなで、出発直前になつてもアリサには何も言えずに旅立つことになってしまった。

まあ、一応秘密任務ですからいいんですけどね。

ああ……お腹がキリキリしてきた。

胃痛が腸の不調に繋がってる。

持ってくれ、俺の全角アスタリスク。

と、俺が過去最大の戦いを繰り広げていると、やってきました独立起動拠点フライア。

なんだろう、ものすごく消耗した気分だ。輸送機の窓から外を見ても何も感じない。思ってたよりもキャタピラがデカイな、くらいだ。あれよと言う間に、オサレ紋章の付いたダークスーツの男達に周囲を囲まれ、実験室まで直行である。

お願い。お願いだから、トイレに行かせて。お願い。

そろそろ限界だから！

いいのか！ ここでやるぞ！

なんかやたら冷たい台の上に寝かせられたけど、冷たさが俺の腹に継続ダメージ入れてくるけど、いいのか！

ていうかももう声もでないくらいのレッドゾーンなんですけど！

何か色々スピーカーから言われたりしたけど、全く耳に入ってこない。

誰なの？ 女の人？ 確か何とかいう博士だっけ。どうせ何か起きた時の黒幕でしょ。わかるわかる。

ていうか準備長いよ。お願い早く終わって……。早く、早く、早く、腹が痛いんだよおおおとおつおつ！

はああ!? 名前!? 言えばいいの!?

カガ……。おっと、ナムサン。これは罠だ。例え腹痛に苛まれようと、俺は死亡フラグを華麗にパライイするぜ。

——ドーム。ジュリウスIIサン、『神薙・R・ユウ』、デス。

それにしてもミドルネームが恥かしすぎるよ榊さん。

恥かしさで引っ込んだよ榊さん。

ていうか何なの、上司扱いけど、顔も見えない状況でいきなり自己紹介されたし。俺寝転がってるし。お腹痛いし。

散々だよフライア！

あああまた痛みの波が来たあああああうわあああ天井からドリルみたいな出て来た怖ええええええ！

これガチャーンってくる？ くるよね？ わかってる。くるんでしょ！

ほら来たー！ ガチャーン来たー！ はい痛い痛い。でも俺の腹の方がヤバイぞ！ ははは、痛い、そして痛いぞ！

お腹痛いのが極限までくるとエビゾリしちやいますよねえええええ！ ビクンビクン！

ああ、目の前が真っ白になっていく。何だこれは――。

ももももう限界！

限界ですからあ！

もう、でちや……アオオー……ッ！

なんなんだよこの上半身締め付ける服もおおお！

試験室に入れられる前に渡された、フライアの……ブラッド隊の制服。

おテイクビ様の形が浮かび上がる程のピチピチインナーに、ほんとなんでこんなデザインにしたのかという胸の部分だけ隠された上着。

ヘソの形まで浮かんだ。

いや、これが制服だつていうんなら諦めよう。なんかもう、色々諦めちゃいけないものがあるだろうけど諦めよう。

逆に考えるんだ。

ピチピチでもいいさ、と。

男でこれなら、女はどうだ！

ヘソがこんなに形が解るなら、後は……わかるな！

おっばい！

おっばい！

ああ、おっばい！

ちよつと希望が持ててきた！ 先行きは明るいぞ！

ありがとうフライア！ 来てよかったブラッド！ よろしくまだ

顔も解らないジュリウス隊長！

でもまずはトイレに！ トイレにいかせてください！

もう限界！

限界ですからあ！

□
■
□

瞬間、目の前が真っ白に光り輝いたのは、白昼夢を見ていたからだろうか。

気付けば何も無い、白い、広大な空間に立っていた。

ふと、指先に小さな感覚が。子供の手だ。

人差し指と中指を、子供が、女の子がきゅっと握り込んでいた。

見覚えの無い女の子だった。

どう言い表したらいいのだろう。

寸瞬前まではショートカットだった。今ではロング、そしてボブに変わった。

肌の色も、透き通るように白い時であれば、健康的な褐色をしている時もある。

眼も、背丈も、着ている服さえも、瞬きの合間に変わっていく。年齢も、あるいは性別さえ。

変わらないのが、この手に感じる——「懐かしさ」、だけ。そうか。

お前は……。

言葉を制するかのようになり、少女は手を一度だけぎゅっと強く握り、そしてこちらを見上げて首を振る。

眼差しには、強い想いが込められていた。

解っている。

お前の「名」を呼ぶには、まだ何か足りないんだな。

致命的な「何か」が。

そしてそれは、きつと俺だ。俺に足りないんだ。

このままではいけない。

まだ、「再開」には至らない。

そういうこと、だな？

少女は頷く。

こんなにも触れ合える程に近いというのに、なんと遠いのだろう。

全ては己の迷いが招いた結果であるというのなら、受け入れねばならないことだ。

だがそれで、少女にこんなにも……こんなにも辛そうな顔をさせてしまった。

ごめんな。

本当にごめん。

俺を本当の意味で理解してくれるのは、お前…… “荒ぶる神” だけだというのに。

神を喰うお前を荒ぶる神であると言うのは、矛盾があるかもしれない。だが、間違っではない。

人と共に在ることを決めた荒ぶる神々が、お前達なのだから。だから、お前をもっと、大事にしてやればよかった。

健やかな時も、病める時も、お前はいつも俺と共に在ってくれたというのに。

少女は答えの代わりに指差した。

指の先を見やる。そこは宇宙だった。広大な宇宙の海が広がっていた。

感じる。ここが宇宙の頂きであると。

星の煌きに、星屑の川。宇宙の頂点、それは世界の狭間でもあった。かつて感じた、不可思議な感覚。己が己では無いような。あらゆる可能性を内包した存在となったかのような。

万能感と共に、結局己は己でしかないという虚無感。矛盾を抱えた存在に。

この瞬間、己は自己の壁を超え、単一であって群となっていた。

数え切れない沢山の俺。

その対岸には、孤独の主が。

金髪の、見覚えの無い精悍な顔付きをした男が立っていた。

お互い、啞然とした顔で見詰め合っていた。

一体なぜここに。
どうして。

お互いの存在がお互いにもたらす意味は。

寸瞬の思考。

雲耀よりも速く、身体が動いた。

手の内に、ずしりとした、*「神機」*の重さがあったからだ。神機を持って相対するならば、道は一つのみ。

金髪の男の喉下へと神機を突き付け――。

ああ、なぜお前は、そんなに優しく笑っているんだ。

ああ、何故俺は、こんなにも口惜しい想いで、神機を振るわなければならぬんだ。

何故俺は。

泣いているんだ。

紛い物の心で、自分自身のためにしか泣けない癖に。

□ ■ □

西暦2074――神薙・R・ユウ、極致化技術開発局へと正式に配属される。

この後、数ヶ月の時を経て、血闘者（グラディエーター）の二つ名にて称されることとなる。

ゴッドイーターの極致へと歩むものとして。

怒りの日は、来たる。

神さま。

ああ、神さま。

私は罪過を犯しましたでしょうか。

償いの機会は与えられないのでしょうか。

手には至福。

頬には楽園。

鼻腔には極楽が。

おお、何と言うことでしょうか。

凄まじい既視感が今ここに。

あれは、そう、俺が初めてゴッドイーターになった時。

事務手続きをしようとして受付カウンターへと向かった時の話だ。

思えば、俺の地獄はあそこから始まったとも言える。

セクハラ事案回避のために、焦って打ち込んだ口座コードがまさかの間違い。その後続く俺の赤貧生活。

ほとんどが慈善団体に送金されてたそうだけど、俺は知ってる。

うん、後日口座のことを知って、良い話でまとまりそうだったけど、

俺は知ってるんだ。いくらかの金額がどこかに消えていったことを。

確実に口止め料さっぴかれてるじゃないですか、やだー。

ヒバリさんだからこれくらいで済んだととるべきか………ス

タミナドリンクとかを売りつけてくるどこぞのゼニゲバ事務員みた

いなことはなかったわけで。

うん、でも俺にはわかるぞ。

今回はそれじゃすまないってことくらいは。

これはあかん。あかんやつやこれ………！

ざんねん！ わたしのぼうけんはこれでおわってしまった！

適合試験が終わり、偏食因子が定着するまでミツシヨンは受けられないとのこと、フライアを覗て回ろうかとロビーの階段を昇る俺の眼に飛び込んできたものは。

白い———女の尻。

小ぶりの、しかし肉つきのいい、白いタイトスカートに包まれた尻が、空を「飛んで来た」。

宙を舞う書類に、飛ぶ尻に遅れて聞こえた悲鳴から考えるに、階段を踏み外してもしたか。

これはもう避けられないし、まだ階段の半ばだ。受け止めなければ彼女が大怪我をするかもしれない。

直撃ルート。覚悟するしかない。

我ながら腑抜けすぎていたとも思う。「巢」にいるときは警戒心が失せるのが俺の悪い癖だ。突発的な事故や、あるいはテロ行為に気付くのがどうしても遅れてしまう。俺の力は「バネ」らしい、力みと緩みの繰り返しだと言われたが、こうも繰り返すと嫌になる。

大車事件の中も、それで女の子を一人死なせてしまっている。

ガーランド・シックザール事件では、アーサソールに背後を制され遅れをとった。

有事の際は対処出来る自信はあるが、何かが「起きる」まではてんで役立たずだ。全てが後手に回ってしまう。

仲間内にも被害を出してしまっている。

ヒバリさんもそうだったが、アリサにもやらかしたことがある。

料理を失敗したシヨックか何かで、階段落ちしたアリサを受け止めたことがある。ここまではいい。問題はその後。「南半球」がまろび出てしまったらしく、俺の上で密着状態から退くに退けず、もしよもしよと動くアリサに天国と地獄の時間を味わった。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もつて言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。でも、この状態を見たとき、君は、きっと言葉では言い表せない「ときめき」みたいなものを感じてくれると思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。ここにバーボンはないけれど。

ソーマならスマートに受け止めたんだろうが、そこは俺だ。

師匠から教わったムーブメントが、今ここに。眼の前に。

具体的に言うならば。

階段を踏み外した女性——尻の肉付きからして十代だろう、少女と呼ぶのが正しいか——の股座から、ひよっこり顔を出している俺。

女性が俺の顔面の上に、尻を乗せている絵面。

「ガードマンの人達がぎよつとした顔でこちらを見ている。怖い。

タイトスカートがぱかりと開かれていて、丈が短いスカートでそんなに足を開いているのだ、俺の目の前で。あとは……わかるな？

下顎にしつとりとした柔らかな感触。

ひくりと動く秘密の場所。

脳髓の奥まで染み渡る甘い香り。

凄まじいT o L o v e である。脳内文字も誤字変換起こすくらい焦りよう。

よし、死のう。

「ん、ごほん！……適合試験お疲れ様です」

さつとその少女は腰を上げると、咳払い一つ零して側に立つ。

散らばった書類に眼もくれず、耳が赤く染まつている。少女の動揺も一塩なのだろう。

オペレーションカウンターに回り、背筋を正して腰を折る少女。

「ファイア所属、ミッシェンオペレーターのフランⅡフランソワⅡフランチェスカ・ド・ブルゴーニュです。よろしくお願いします」

わあ、特徴的な名前。

オペレーターの少女、フランの自己紹介を聞きながら集めた書類をカウンターに置く。

「ありがとうございます」と折り目正しく礼を述べながら書類を返すフラン。「記入をお願いします」とペンが差し出される。

電子統一時代になっても、こういう書類でのやり取りは旧時代のままだ。むしろ、旧時代よりも物資の貴重性が上がったため、物質的なやり取りに信頼を置いているのかもしれない。

諸事項を書き込んで、名前、神薙・R・ユウの名をサイン。

新しい身の上となったこの身である。口座番号やその他登録情報はいまいち覚え難くても仕方がない。

だが、もう口座を間違えることなんてしない。
何かもう、いっぱいいっぱい頭の中ぐるぐるしてるけど、きつと
してない。してないはず。

「お預かりします」と回収される書類。

それきり微動だにせぬフラン。

ノースリーブの制服からみえる白い肩が眩しい。

細い二の腕の先を包む、白い手袋。素晴らしいムーブメントポイントだと思えます。

俺には死神の腕にしか見えていないけどね！

「何か？」

いや、その、こちらが何かってどうか。

死刑宣告はいつなのでしようか………。

「何かありましたか？　ありませんよね？」

イエスマム。

何もありませんでした！

ありがとうございます、ありがとうございます！

「そうですよね。では次にこちらの書類を………」

うわあああ女神やあああ。

ノースリーブタイトミニスカの女神がフライアにおったでええ。

このご恩は忘れませぬ、忘れませぬぞおお。

何かこの後も色々話したけど、テンパリすぎたのと安堵のサンド
イッチで全部飛んじやったよ。

お金とか経済の話？　だっけ？

えっと、食べるだけあれば駄目なの？　やっぱり男は経済力がなけ
りやあって、そういう話？

なんだろう、泣けてきた。

ゴッドイーターになった最初の方、俺の稼いだお金、全部もう神機
様が片っ端から吸い取っていつちやったからなあ。

「この」相棒はそんな無茶しないだろうか。

まさかまた神機さまだったりとか………いやまさかね。
言わなきゃよかった。フラグに思えてきた………。

しかし女の子との会話は苦手だ。
どこが地雷なのかさっぱりだもの。

困った時のバガラー語録と、最近インテリになったソーマきゅんのウンチクメモは手放せないな。

いやー会話が弾む弾む。

ソーマ、見てるか？ お前のインテリモテテクニクはフライアでも有効だ。

ちきしょん。

悪の巣窟かと思いきや、凄く近代化してるっていうか、お金かかってますねここ。

いやーフライアいいとこ一度はおいで。

極東の皆。俺、ここでもやっていけそうです。

加賀美リョウタロウ改め、神薙・R・ユウ。

がんばります！

ほどほどに！



あらゆる対象を捕食しながら進化を遂げ増殖するアラガミに、人類は為す術もなく、世界の総人口は100分の1にまで減少。

60億の人類が、今や6千万以下。日に何百、何千という人間が喰われて死んでいく。

以降、人類は衰退の一途を辿り、死滅への道を進み続けている。

そんな世情で、家名を背負う意味とは何だろうか。

極東のような慣習によるものではない。継がれ続けてきた姓、所謂特権階級であるその証明のことだ。

この場合の特権階級とは、文化や歴史的なものを指す言葉ではない。

フェンリルによる統一社会となった今では、特権階級とは即ち財

力。

企業統治に相応しく、文化的歴史的財産は全てが等しく無価値とされ、金の力によってのみ立場が保証されているのだ。

この世界の中で家名を背負うこととは、フェンリルの庇護を受ける資格を有しているということ。

つまり、それだけの財産を有しており、社会を支える一柱となっている証明でもある。

金を溜め込み、フェンリルのために使わせる。

あらゆる全ての力ある「家」が、保身に奔るこの現状。歪んでいる、というのがフランの率直な意見であった。

フランもまた、良家と呼ばれるに相応しい家の出身である。

飢えたことなど一度もなく、物がなく苦しんだことも一度もなく、暴力に晒されたことも一度もない。

この世界に産まれて苦しんだ経験は一度たりともなかった。

そして世界では今もお、苦しみに喘いでいる人達が多くいることをフランは知っている。そう、知っているのだ。

何不自由ない家に生まれ、フランが唯一感謝したことは、修学に必要な環境がおおよそ整っていたことだった。

フランは学んだ。現在進行形で続くこの世の悲劇を、余す所なく。そして学問の何たるかを正しく学び、血肉に変えた。フランには才があった。学問が人に教えるべく真たるものまでを学びとる才が。即ち、道徳、あるいは人道と呼ばれるものをである。

故に、フランは恥じたのだ。富める者であるというのに、苦しむ人々に何一つ助けを与えられない己を。そして、己の産まれた家を。家の者は皆困惑したことだろう。幼い少女が唐突に、フェンリルに行く、と言い出したのだから。

フランの出した結論は唯一つである。己の学んだ知識を、世の支えとする。これだけだ。

少女らしい穢れの無い、純白の願いであった。

貴族の精神を取り戻せ、と私財を投げ打って社会奉仕をし結果跡取りを全て取り上げられたという、かの有名なフォーゲルヴァイデの例

がある。

娘をフェンリルに、ましてやゴッドイーターなどにさせるわけには
いかないという家の者達の心情も理解できる。

だがフランは己を曲げることはなかった。拝金主義である家に対
する反発もあつたかもしれない。

反抗期の一言で済まずつもりもなく、そしてフランは行動した。

伝手やコネはいくらでもあつた。フェンリルへコンタクトを取り、
ゴッドイーターへの志望は偏食因子に適合せず取り下げられること
となつたが、オペレート能力に適性ありとされ教育を受けることと
なつた。

数年で全ての過程を修了し、単独で一拠点のカウンター業務をこな
せるまでの事務能力をフランは身に付けたのである。

そしてフランに任せられた配属先、それがフライアだつた。

フライアが求める人材とは、極致化の名が示す通りに才溢れた者達
であつた。

移動拠点という特性上、身軽でなくてはならず、少数精鋭の体とな
るのは自然なことである。

単独でのフライア及び、ゴッドイーター達の任務取り扱い。それが
フランに求められた仕事だつた。

フランにとつては渡りに船。オペレート教育を修了してすぐ、フラ
イアへの配属を受理し、ここ……このカウンターへと立つこと
になつたのであつた。

当時、フラン十四歳の事である。

そして二年。フランはフライアにて、十六歳となつていた。

フライアで過ごす内、多くの人間と関わってきた。

職員、科学者……そしてゴッドイーター達。

フライアはこれまでゴッドイーターのほとんどを外部戦力に頼つ
て活動してきた。フェンリル本部直轄である。戦力の補充は充満な
ものであつた。

そんなフライアが独自戦力を持つとなれば、注目されることは当然
のことだ。

それも、第三世代型神機……数年前までの新型を「第二世代」とする、新たなゴッドイーターがフライアで誕生するとなれば。

統括オペレーターであってもフランには知る由もなかったが、ジュリウスがその魁であつたらしい。

ラケル博士の特別製だとされた黒金の腕輪が、今後は第三世代の証となるのだという。

自分が勤めることとなつたフライアのゴッドイーター部隊ブラッド隊長、ジュリウスもまた、世界の歪みの犠牲者であつた。

フランにとって、ジュリウスは掴み所のない人物だつた。

移動拠点に必要な戦力は防衛戦力である。こちらから打つて出ることは少ない。ジュリウスが任務を受注しにカウンターへと顔を出すのは数える程であり、書類仕事もすべて艦内メールで済んでしまふ。

二年間行動を共にしたが、関わりはあまりにも少なかつた。

奪われた者と捨てた者として決して交わらない一線があるが、自分達にはある一点で共通点がある。

人に尽くし、人から必要とされたい。

ジュリウスの言動からは、抑え様の無い願望が感じられた。

だが不思議なのが、ジュリウスはどこか他者と隔絶した壁のようなものを自ら作っていることだ。

そこにフランは危うさを感じる。ともすれば、「使われる」側になりかねない。

ジュリウスが一般のゴッドイーターから掛け離れた力を持っていることは理解できる。つまりそれは、翻れば最悪の駒となる可能性がある、ということだ。

それなりの情報があつまる業務をしているからだろうか。どうにも、フライアにキナ臭さを感じて止まない。

神機兵のテストがそれだ。運び込まれる機材リストには、人道的見地から破棄されることになつたはずの技術が、グレーゾーンにまでオミットされてはいるが、いくつも記載されている。

少し手を加えれば本来の性能を發揮するだろう。使う者の良心に

任せるしかない、という技術だ。

そう、良心である。

フランはこの艦にある人材へ、真なる良心というものを見出せずいた。

その代表が、ジュリウスである。

ジュリウスには、何もかもあらゆる全てを受け入れる器がある。

その精神性も、恐らくは“受動的”なものであるのだろう。

人間としては非常に好ましい。

だが、陰謀渦巻くフェンリル直轄領のゴッドイーター部隊長としては、どうだろうか。

疑い、恐れ、淘汰する厳しさが必要ではないだろうか。

優しさと恐怖、この二つを矛盾なく両立させることが、真なる良心を持った者ではないだろうか。

ジュリウスは優しすぎる、とフランは思う。

人を計れるほどに、傲慢になったつもりはないが。

だが、このこびりついた危機感は、一体何なのだろうか。

何かが起きるぞ、という。

考え性である自分の考えすぎならばよいのだが。

———どうぞ。

極東人らしい曖昧な笑みを浮かべ、青年が資料を手渡してくる。

不要な争いを避けるための敵意がないというポーズらしいが、見るものによっては不快を与えるというアルカイックスマイルだ。

なるほどこれは、あまり良い印象は抱けない。どうにも腑抜けているような感じがする。ゴッドイーターとして頼りないように感じるのは、カウンターに立つ者としての視点であるからだろうか。

本日付で配属となった、全てのゴッドイーターを過去にする、新たなゴッドイーター。

第三世代の体現者。

神薙・R・ユウ。それが彼の名である。

経歴におかしな点は無し。極東でゴッドイーターとなったというのに、すぐさまこちらに召喚されたことが不運である。ということく

らしいか語る事はない。

考え事をしていたために彼の前で失態を演じてしまったが、それで嫌に馴れ馴れしくしてこないことには好感を持てる。

外部からくる、特にお偉い様方は、どうにもセクハラをしなければならぬルールでもあるのか、あしらいが面倒なのだ。

最前線である極東出身と聞いて、有事の際の対処（カウンター）機能を期待していたが、さて。

どうやら平凡な出で立ちに似合う、平凡な「中身」をしているようだ。

それはそれで良いことである。どうにもゴツドイーター達は個性が強烈すぎて、付き合い難しい者もいるのだから。

差し出された記入済みの書類を確認する。

「あの、口座番号のご確認はしましたか？」

——ええ。間違っていないでしょう？

その瞬間である。フランは不意を打たれたかのように驚愕するしかなかった。

へらりと笑うユウ。しかしこちらを責める険が含まれているように感じる。

危険な光りが眼の奥に灯されていた。

まるで、問うな、と言っているかのような。

記入されていた口座番号は、フライアに連なる、児童養護施設への寄付口座のもの。

即ち、ユウは命を削って得た金銭を、今後ほぼ全額養護施設へと寄付すると言つてのけたのだ。

正気の沙汰ではない。

新兵にままある英雄願望の現われであろうか。否、ユウにそのような気負った様子は見て取れない。

全くの自然体である。何を言っているのか、と問わんばかりに。

これは間違いではない。間違えているのは、フランの方だとばかりに。

フランの喉が鳴った。

平凡な人物だなどと、自分はとんでもない思い違いをしているかもしれない。

「質問してもよろしいでしょうか」

——どうぞ。

「フエンリルが世界を統治することとなり、全ての価値基準が資本となりました。貴方はそれをどう思っているのですか？」

言外に、ゴッドイーターであつてもその社会構造からは逃れられないというのに、と含ませて。

得られる金銭を手放すような真似を何故するのか理解出来ない。

ユウは肩を竦める。

——無いと不便だな、とは思うけど、それだけだよ。

「それだけですか？ 今の世界は貧しければ、文字通り生きていけないのですよ？」

——実体験だけど、案外それでも人は生きていけるよ。

「現実的ではありません。先立つものが無ければ、生きていくことはできない。失礼ですが、あまりにも楽観的すぎでは？ それとも、私を世間知らずだと侮辱されるおつもりですか？」

——あー、ちよつとまって。ポケットにゴミが。

「ごまかさないでください。納得のいく返答を」

——はいとれた。うん、受け売りでいいなら答えられるけど。

「……………どうぞ」

——資本……金、か。金ってなんだと思う？

「お金は、ですから現在の価値基準であり」

——そういうことを言ってるんじゃない。もっと根本的なことだよ。君はどう思う？

「私は……………お金とは、権威であり影響力であり、つまり力であると、そう思います」

——確かに、その通りだ。だからたくさん持っている奴が強い。そういう理屈だね。でも、俺が言っているのはもっともっと、根本的なことだよ。

「根本的な、こと」

——金で何をする？ 突き詰めれば、物々交換に過ぎないんだ。最も基本的な経済行動から離れてはいない。

これは「その物」と同じ価値があるのですよ、と定まった額の銭を渡す。これが資本制の大前提だ。

この「同じ価値があるのですよ」という保証が通貨にはなければならぬ。どんな形であれ金銭を扱うということは、潜在的に信用取引をするということだからね。

「何かからの保証」によってこの数字に「価値が発生する」と、誰も信じなければ成り立たないんだ。

つまり、「カネ」とは「信用」の数値なんだ。

「お金、とは、信用……」

——カネ……『フェンリルクレジット』、統一貨幣だ。

国家体制が崩壊し、貨幣に価値がなくなった。すぐさまフェンリルが世界統治をし、そして新貨幣を流通させた。

「フェンリルが信用せよ、と命じている。そして皆がそれを信用するようにになった。経済的自然淘汰による資本主義ではない、ということですか？」

——人類史上、全世界の文明が一斉に崩壊して、全部が「おじゃん」になるモデルケースなんて存在していない。当然だけねどね。

あのままでは人類は自滅していたのだから、すぐさま一つにまとめなくてはいけなかった。そこで、フェンリルが取った手はこれさ。

「フェンリルクレジットという「信用」を発行することで、人類の精神性、「価値観、すなわち道徳」を「保証」した、と」

——経済活動でみちやあだめだよ。わかりやすく提示された金の価値観だけで考えるから、おかしなことがそこいら中で起きるんだ。たくさん持っていると、少しも持っていないとか、そういうの。多く持っているから優れている、幸せなんだという価値観。そういう上辺の幸せに浸らせることが狙いなんだろうね。

だって、フェンリルが造って、フェンリルが流し、フェンリルが価値を保証してるんだから。経済なんて概念は発生するわけがない。

全てコントロールされている。皆がそれをありがたがるからだよ。これは経済を隠れ蓑にした、統治手段そのものだ。

瞬間、フランが感じたこの衝撃に、なんと名付けたらよいだろうか。稲妻が脳天から背筋を駆け抜けたかのような感覚だった。

これまでの貨幣概念を覆す説……否、フェンリルは初めから貨幣概念など流布しようとしていなかったのだろう。ユウによる独特な切り口は、フランに社会の新たな側面を示唆するものだ。

考えてみれば当然のことである。

国家体制が崩壊し通貨の価値もまた崩壊した。

人類の総数はもはや一億にも満たないのだ。海路、空路はアラガミに事実上封鎖され、インフラは死んだも同然となった。

ゴッドイーターの護衛による資材の運搬程度が限界だ。流通など不可能。経済圏など構築されるわけがない。

そこで事実上世界の統治機関となったフェンリルが、自らが保証する通貨を流通させたのだ。

自らが保証する貨幣、f c (フェンリルクレジット) による売買を行うようにと統一したのである。

旧時代の資本主義的価値観がそのままf cにシフトしたなどと、どうして考えられよう。

フェンリルが新しく示した社会構造は、共産主義ではなかった。

だから皆、企業が作った社会なのだから、資本主義に違いないと思いついて入っていたのだ。

人類の業である。自分だけは大丈夫、助かる、死ぬことはない。だからこのままでいいのだ、という平和的な思考。

よもや自分達が「管理」されているなどと考えてもいないのだろう。

企業であるという肩書きに眼が眩んでいた。

もはやフェンリルは、統治機構なのだ。その目的はもはや利益のためだけに動いているのではない。

——そう、信用によつて成り立つ国家なんだよ、企業国家
フェンリルはね。皆の信用………信仰によつてのみ成立する国
家。これはフェンリルによる経済活動じゃあない。これは、宗教活動
だ。

カネという神を創り、人類に信奉させることで一つにまとめる。そ
ういう統治法なんだ、これは。文明が崩壊してなおそれまでの価値観
にしがみ付いて離れられない人類へ逃げ場を与えてやること。

与えることが目的だったんだ。これまでの価値観を存続させるこ
とが人類の総意。そして、そういつた「芯」の無くなつた人類をコン
トロールするのがフェンリルの狙い。話は簡単だろうか？

資本主義優位だった旧文明だ。それに即したものを与えてやれ
ば………。

通貨が信用から成り立つのであれば、それを得ることはだれかから
保証される、ということだ。保証されることは安心につながる。

こんな世界で安全などあるわけがないのに、人は金を欲する。

その総数を100分の1に減らしたとしても。

だからフェンリルはそれをくれてやったのだ。

「与え続けていれば、コントロールは容易い………」

——狡猾で、かつ効率的だ。上手い手さ。

誰もがフェンリルは企業であると信じている。

誰もが世界はフェンリルによつて統治された、企業国家………

企業世界であると信じている。

だから、カネを持っているものが生きる世の中なのだ。

フライアの局長など、その典型例だ。

経済活動によつて台頭したフェンリルは、そのまま、旧時代の価値
観を用いて新世界を統治したのだ。という「許し」を人類に与えた
のだ。

皆その案に乗つたのだ。心を明け渡すことで、安心をフェンリルか
ら買った。

すなわち、フェンリルとは企業国家ではない。

宗教統一国家、フェンリル。

それがフェンリルの真の顔である。ユウはそう言っているのだ。

——何らかの理由で働けない非消費者層に、そしてアラガミに襲われて死んでいく層……この二つが大きすぎる。これで経済型の流通社会を築こうなんて無理な話さ。

技術進歩と同時に人類の減少も歯止めが掛かった、なんてのは幻想だよ。全体の母数が減れば、そりや喰える量も減るさ。単に人類が減りすぎて、既に希少種になっているってだけだよ。

「貴方はどこで、このような発想に至ったのですか？ とても普通では考えられない、異端とされる発想ですよ、これは」

——極東のスラム出身だったからね。最前線のスラム街だ。凄いよ。祈るくらいしか、することがない。

「それは……その、申し訳、ありません。私が問うてはいけな
い事でした」

——君を責めてるんじゃないよ、お嬢さん。

どこことなく君の言動からは気品を感じる。俺としちや良い所のお嬢様が、こんな血生臭い場所にいる方が驚きだよ。

極東でもあったけどね。女は強いというか、なんというか。君は真面目だな。

「それしか取り柄がありませんでしたから」

——言うね。ごめん、悪かったよ。謝るから怒らないで。頼むよ。

「怒っていません」

ようやく笑みが零れた。そして、ユウにも。

これが本当の彼の笑みであつたように見えた。
春風のような、爽やかな笑みだった。

——ま、そんなつらつらと、やたらと長い理由さ。金は食べる分だけでいいよ。必要であれば、溜めなきやいけないけど。必要以上あることを魅力だと言う人は、俺は好きじゃない。

「私もそう思えたら……いいえ、きつとそう感じていたのだと思います。貴方の意見は正しい」

——言つたら、受け売りさ。

「そういうことにしておきましょう」

——富める者、貧しい者の構図は、大局を見ればフェンリルを信じた者か信じなかった者かの違いでしかない。いいんじゃないかな、そういう形の自由があっても。

「ええ……でもそれは、きつと残酷な自由です。血を吐くような、そんな自由です。望む者もいれば、望まぬ者もいるでしょう。貴方の意見は正しい。ですが、私が提起したことも、また事実の一面であることをお忘れなきよう」

——うん。持たない者が弱き者であると、そう思つてほしくなかつただけさ。

闘うことは必要不可欠で、誰かが矢面にたつてやらなきゃ立ち行かないくらい人類は追い詰められてるけれど、現場で戦うことだけが誰かを守ることじゃない。

「私は選択を間違えた、と？　かもしれない。もしかしたら、フェンリルに來なければ出来たかもしれないことは沢山ありますから」

——間違えたんじゃない。かもしれない、だ。まだ結果は出ていない。これを、間違いじゃなかった、にするのは君のこれからに掛かつてる。

今、君には君の闘う場所がある、だろ？

あーあ、俺も選択を間違えたのかも。本当はゴッドイーターなんてやりたくないのにさ。

「でも貴方はここにいて。ここで、剣を取るという選択をした。でしよう？」

——それこそ、宗教選択の自由っていう奴だよ。宗教上の問題なんです。困ったことに。

冗談めかして言うユウに柔らかく微笑ながら、フランの背筋に冷たい戦慄が奮う。

この男は、**“切れる”**。あまりにも鋭く。危険な程に。

神々に喰い荒らされたこの世界において、新たな神を説いて見せたのだから。そしてそれは人の総意で産み出されたのだと。

欲望に濡れた、あまりにも穢れた**“神”**……それは人類が

最後に辿りついた逃げ場だった。

人の本質とは、欲望でしかないのだろうか。己の保身でしかないのだろうか。

違う。とユウは言っているようだった。

それもまた、可能性の一つでしかないのだ、と。

宗教上の問題でしかないからだ。

信じる者をなんとするか。それだけの話しである。

スラム街に横たわり、ゆるやかに死を待つだけの者達。

人を恨み妬むだけしか生きる活力を見出せぬ彼らは、しかしフェンリルの作り出した新世界の神からは解放された人々である。

真なる自由。しかし相応の対価を払わねばならない。

どちらが幸せなのだろうか。

フランは結論を出すことができなかった。

ラウンジを見渡すユウの目に映るものは、いったい何であろうか。

最前線で戦う者であって、この洞察眼。ゴッドイーターとしては未だ解らないが、秘めたる器は、ジュリウスに並ぶものを感じさせる。

そしてユウの言葉は、フランに自身の選択に疑問を抱かせるものだった。

幼少のみぎり抱いたあの想いは正しい。だが果たして、そのためにとった手段は正しいものであつただろうか。

家の者達が言った。考え直せと。お前は別の手段で誰かを守れば良い、と。

かつての自分は、それを拝金主義の言葉であると断じた。軽慮であつた。

オペレーターとして一日中カウンターの途中で事務仕事をしている今を考えれば、誰かを守る、といった点では、家に留まった方がよほど何をかを為せただろう。

だが、選択に後悔をしても意味が無い。今、この時。これからのことを考えねば。

ユウの言葉はともすれば、自分自身を信じていないのだ、と言っているようにもとれる。

疑え自らを。

そう言っているかのようだ。

その通りなのかもしれない。自身の選択を疑い続けること。常に、よりよい道があったのでは、と模索し続けること。

それが彼の生き方なのだろう。

己を疑うことで、己を信じるという矛盾。

ジュリウスの副官となるのは、彼しかない。フランはそう思った。

一年という戦闘経験のある前任者がいるが、如何せん年が若すぎる。自分の感情に吞まれる癖があるとなれば、副隊長としてはやっつけいけない。

同時期に配属されることとなった少女も然り。こちらはユウよりも先に挨拶を済ませたが、彼女もまた感情先行タイプだ。

これで部隊という体が成すのか、と不安に思いもしたが、なるほどどうして、バランスが取れているようだ。

このような鬼札を差し込んでくるとは。フェンリルの人事に感嘆すべきか、それとも流石は極東人と恐れ戦くべきか。

人畜無害の没個性のように見えて、とんでもない剣を隠していた。見た目と中身の危なさの矛盾もユウらしきであるか。

短時間であるというのに、フランはユウがどのような人物であるかを見抜いたかのような気がしていた。

—— そうだ、忘れるところだった。

「はい、なんででしょうか」

—— 初めまして。こちらこそ、よろしく。

「あ……はい。どうぞ、よろしくお願いします。ユウさん」
口を開いただけでこれだ。必ず、しかも盛大にユウは「やらかす」ことになるだろう。

その行動が、フライアの中に嵐を巻き起こすことになるはずだ。

あのジュリウスでさえ、「食われる」かもしれない。

ユウが巻き込むのか、巻き込まれるのか。それを想像するだけで、何だか楽しい心持ちになれる。

それだけでも得難い人物である。

きつと、今日が始まりだ。

神薙・R・ユウという青年によって、『変革』の時がもたらされる、その始まりの。

神話の始まりを、きつと今、私は見ている――。

□ ■ □

「……ああ、適合試験お疲れ様。まあここに座るといい。ここはフライアの中でも一番落ち着く場所なんだ。暇があるとずつとここでぼーつとしてる。

顔を合わせたのは初めてだな。不思議だ。俺はずつと、お前のことを知っていたような気がするんだ。おかしいだろう？

ああ……あまり恐縮しなくてもいい。敬語もいらぬ。ジユリウス、と。呼び捨てで構わないさ。ブラッドを編成したラケル先生にも一度会っておいたほうがいいな。

先生、さ。公式な場では博士と呼んだほうがいい。俺達だけの時は気にするな。

俺達は同じ血を分けたいわば家族のようなものだ。対等な立場で意見してくれ。

なぜかな、予感がする……いいや、確信があるんだ。きつとお前が、一番早く『血の力』に覚醒する。

戦況を覆す大いなる力。戦いの中でどこまでも進化する、刻まれた血の為せる業――『ブラッドアーツ』に。

進化の極致を、きつとお前が見せてくれるんじゃないか……そう思ってると言ったら、お前は笑うか？

そうか。このフライアのことをどう思う？ 極東では、あまり評判が良くないのは知っている。お前の眼で見て、肌で触れて、感じた意見を聞きたい。

はは、ははは！ そうだな、その通りだ。腹が空いている奴は一人もない。腹が減るのが一番いけない。お前の言う通りだ。

いや、久しぶりに笑った。笑ったのはどれだけぶりだろうな………。

ああ、そうだな。隊長だから、か。俺は知らず、肩肘張っていたのかも知れない。

不思議だな。お前が言うと、まるで歴戦の隊長のような言葉に聞こえる。

お前の言う通り、酒でも飲んでみようか。きっと笑えるだろう。その時はお前も付き合え。

神薙・R・ユウ。お前を歓迎する。良き仲間となれるよう………何だ、まだ硬いのか。では家族………重い、だと？

ダチ？ いや、むしろいい。そうか………極東の流儀ではそう言うのか。ダチ、か。

改めて、よろしく頼む。ユウ―――」

三人掛けのソファの肌触りは、流石はフェンリル直轄であると感じさせられる。

綿がふんだんに詰め込まれているのだろう。座ればゆつたりと沈み込み、優しく体を包み込む。

一般職員向けのラウンジでこれだ。与えられた自室は小さいながら、しかし高価な調度品で彩られていた。

正直なところ、高級志向すぎて居心地が悪い、というのがリヨウタロウ……ユウの本心である。

最前線であるはずの極東よりも、一世代も二世代も先を行く施設設備。

フェンリルの“経済活動”の成果が如実に現れているようだ。

インフラも、そもそも経済活動を行う人間の数すらが死んでいるのだ。貨幣も何もあったものではない。金貨で腹が膨れることはないのだ。

物々交換、文化行動の基本形にまで引き落とされることが当然だというのに、人類は未だ旧世界の概念に囚われている。

どちらがいい、とは言えない。フェンリルを悪とするならば自由を目指すべきだが、そうとは言いい切れない。彼らが人類の守護者であることは間違いないからだ。

オペレーターあの少女は、どうやら潔癖が過ぎるようだ。経済という「プロパガンダ」に染まらぬことが、善性であり自主性であると信じている。乙女だな、とユウは思った。

彼女もまた、正義感という、旧世界の感覚を引き摺ったまま生きている。本質的に、経済概念にがんじがらめにされた生き残った人類と、何ら変わりはない。

だがそれでいい、とユウは思っている。むしろ、それがいいのだ。フランと名乗った少女は、それを旧世界から続く人間の愚かさであると受け取っていた。

だが、ユウとしては異なる見解である。執着を悪徳と捉えてはいな

い。流されて生きることもし悪しである。

滅びかけた世界で、それでもなお振りかざす固執、執着、妄念……それは、意地（プライド）と言い換えることはできないだろうか。

“欲”、という感情。それもまた、人が生み出した一つの発明、答えなのだ。

未だ人は、自らの誇りを手放すには早い。

「ねね、それなに？ それなに？」

「ほら、足ぶらぶらさせんな」

こうして幼い少年少女が笑い合う姿を見るたび、常々思う。

まだまだ人も捨てたものではないな、と。

「わあ、日本語だ！」

「おう、広報のスクラップ集めてんだよ。どーよこれ」

金髪をニット帽に包んだ快活な少年が、ばあんとフォルダを広げる。

オレンジを基調とした服を大胆に、かつだらしないように着こなしている様は、どこかコウタを彷彿とさせる。

見た目通りの明朗快活な性格なのだろう。どこかすらりとしたシルエットは、欧州の血の流れを感じる。

掲げた手製のファイルフォルダには、表裏表紙に支部広報のスクラップが無秩序に貼り付けられていた。

「知ってる！ シプレ・シルブプレ？」

「オウ、メルシー！ わかってんじゃん！」

「それとこっちは……歌姫！ 歌姫ユノさんだ！」

「すごいよなあ、歌超うまくってさ。俺、すぐにファンになっちゃったよ！ へへ」

『シプレ』とはスクラップ写真の大半を占める、“バーチャル”アイドルの名である。

“このご時勢に沿った”アイドルと言えよう。

人の数自体が少ない昨今で、人々を慰撫するアイドルといえば、二次元のものを指すのは当然のことだ。

故に“生”である『ユノ』の人气が急上昇しているのだろう。

今では公営放送をつければシプレとユノのどちらかが映っている程だ。

ユノは極東を足がかりに、世界中の支部を回って歌を届ける、今や時の人となっていた。

「ずっと極東から離れてたから日本語久しぶりだなー。なんだか懐かしいなあ」

「俺が日本語勉強し始めたのは極東の広報読むためなんだよね。さすが最前線、サブカルも最強だよな」

「ねね、じゃあこれは？」

これ、と少女が指差したスクラップ。

他のものより数が少なく、しかしシプレやユノのものとは明らかに異なる扱いの記事だった。

どこか神聖染みたまもの……祭壇のように感じる。

紙面の上に、手製の祭壇が作られていた。

「これは……俺の、憧れだよ」

これまでのしやぎ様は鳴りを潜め、少年の横顔は遠く憂いを帯びた、精悍ものとなる。

その横顔を知っている。

幾多もこの眼で見続け、そして消えて行った顔……幼い、戦士の顔だ――。

「『神狩人』」

「かみ、かりうど？」

「うん、最強のゴッドイーターの名前さ。本名は知らない。顔も、ピンボケの写真ばかりでわからない。」

情報規制が掛かってて、本当にいるのかいないのかさえ……でも俺、わかるんだ。

いるよ。英雄は、いるんだ。人の運命を背負って戦い続ける男が、確かにいるんだ。わかるんだ。感じるんだよ……。

いるのか、いないのかはもう、いいんだ。誰かにそうやって信じさせることが出来るのが英雄で、そして俺は信じてる。

だから俺も、いつかそうやって、あいつが戦っているって……

他のゴッドイーターに信じさせてやれるような、英雄に――

それ以上の言葉はなく、目を閉じる。

誰も口を開くことができなかった。

吐息の音でさえ大きく感じる、静謐な時間が流れていく。

祈りの時が。

「なんてな！ ちょっとクサすぎたか！ へへっ」

「ううん。凄く……素敵だと思う。ねっ？」

語り合う二人の少年少女の横に、静かに座る男が一人。

ユウである。

――ソウデスネ。

死んだ魚のような目だった。

「でき、神狩人ってRって呼ばれててさ、Rが使ってる神機をRシリーズっていつて、俺のバスターもRシリーズに似せててさー」

「ほうほう、カツコイイねえ」

「すげーんだぜ！ また詰らぬものを斬ってしまった……悪鬼羅刹共よ、冥府に堕ちるがいい……とかさ、とかさ！ Rの決め台詞とか言っちゃったり！」

――そんなこと言ったことない……。

「うわーっ、これ、これすごいね！ 神狩人の浮世流し、極東トトカルチヨ。だれとくつつくでショー？」

「それは英雄だし、女の子にきやーきやー言われちゃったり」

――言われたことないし……情報統制だしそれ……。

「うわわ、これもこれも！ 神狩人セレクション、今年最も熱い極東ファッション！」

――制服しか着たことないし……。

「俺はこれ、神狩人の……」

「神狩人が……」

「神狩人――」

「神狩人――」

――もうやめてえ。

ユウのライフはとづくにゼロである。
心が折れそうだ。

「元気がないね？ おでんパン食べる？」

——イタダキマス。

「俺も食う食うー、つてえ！ なんだよそれ！ 極東のおでん、とかいうのにパン？ 合わないだろそれえ！」

「えー、おいしいよ？ お母さん直伝、ナナ特製のおでんパン！ おかわりもあるよ？」

——イタダキマス。

「おおう……ほんとに食ってるよ」

「もつと食べる？」

——イタダキマス。

「おい、お前ら串はどうした」

「おいしいよ？」

「えっ……いや、おい！ 串イ！ 普通に口にいれんな！」

——歯ごたえ。

「歯ごたえ」

「んんん!？」

——男は度胸。何でも試してみるもんさ。

「すぐく……木製です、けど……」

「ほら、ぐいっとぐいっと！」

「やめろこら近付けんな！」

ぐりぐりと口の中をいわせながらパンを食む。

おでんとパンのハーモニ。

意外といけるものだ。

「まったく、まったく！」

「そんな怒んなくてもいいじゃんもー。ほらほら、機嫌直して。ね？」

『ロミオ先輩』

「む、むむ」

——ロミオ先輩。

「も、もっかい言つて……」

「先輩！」

——先輩！ オナシャツス！

「うっし、お前達より1年先輩のこの俺、『ロミオ・レオーニ』が色々教えてやっかん！」

ブラッド第一期候補生、ロミオ・レオーニ。

年下の先輩、ということになる。

年功序列に囚われていないおらかな気風は欧州らしく、ユウにとつてとても好ましいものに映る。

極東は最前線といえど、未だに年齢に上下関係が縛られている節がある。そう思うと極東人として、ロミオの振る舞いが非常にまぶしく感じた。

名前の響きからしてイタリア産まれだろうか。

どこか幸が薄い感じがするが、このようなムードメーカー成り得る性格は、得難いものであることを知っている。

「よろしくお願いしますロミオ先輩！ 『香月ナナ』、がんばります！」
敬礼がどこかコミカルに様になっている。

ブラッド第二期候補生、『香月ナナ』。

慌てて、「こっちじゃナナ・香月だったっけ」と言いなおすのは、極東の生れである証明だ。

黒髪のみドルヘアをアップにして、ピンで纏め上げている。毛先が頭の前から二つに割れて飛び出しているのが、どこか猫耳のように見えていた。特徴的な髪型である。

しかし猫の気紛れさや冷たさは感じず、子猫の人懐こさだけが残されたような、そんな少女だった。

が、ユウとしては特筆すべき箇所はそこではない。

——ムーブメント……！！

彼女のムーブメント……極東で言う所の、ファッションである。

下半身はホットパンツに左右非対象な長さのブーツ。これだけでもかなりのムーブメントポイントであるが、しかしユウが注目する点は上半身。

チューブトップ一枚である。肩を抜いたジャケットを羽織ってはいるが、これは下着一枚よりもむしろ露出が高い。

そのチューブトップを、ゴッドイーターの運動量で落ちないようにして、サスペンダーを首に通して吊り下げている。

細い首を一周りするサスペンダーは、止め具が甘いのか、片側が外れて宙に揺れていた。

左右非対象、明け広げな色気の中に、触れてはならない幼さが含まれている。奇跡のムーブメントであった。

——ここでムーブメントを言ってしまったってもいいのだろうか……どうみてもこの子は16歳くらい……20越えた男がそういう目で見るのは犯罪……いやしかし！

「どうしたの？」

——いや、なんでも。極東は赤く燃えています……師匠。

「えっと……」

——そっちこそ。どうしたの？

「ううん、なんでもない」

「で、ナナに、そっちはユウな。ああ、名前知ってるんだよ。昨日からずっとジュリウスがユウがユウがーって言ってる。気に入られたなーお前」

——良い意味でならいいけどなあ。何か目を付けられた感じがする。

「そうか？ ジュリウスが笑うとか、俺ほとんど見たことないんだけど。いや、あれは笑うっていうか、ニヤニヤしてた？ うーん」

「あ、ほらラケル博士がきたよー！」

『ラケル』の伝導車椅子の特徴的な機械音。

それと共に、黒のヴェールに身を包んだラケル博士が現れる。神機との連結後バイタルチェックの際に顔を合わせていたが、どうにも慣れない。

取っ付き難さと、拒絶感を同時に感じる。どこか浮世離れた感がある女性。それがラケルという人物であった。

背筋を這うような声はとても魅力的なのだが、惜しい。というのがユウの正直な感想である。

声フェチ……ムーブメントとでも言うべきか。声だけサンプリングして取り出して、バーチャルアイドルにパッチしたらヒットするかもしれない。

そういえばシプレの声に非常に似た部分があるが、さて。

ラケルの姿が見えると共に、全員がソファから立ち上がる。

上司が登場したら背筋を正す。戦闘者ではあるが、そこは会社人である。

気をつけの姿勢に、ラケルは満足そうにして微笑んでから口を開いた。

ラケルからの説明は、ユウが入隊の際に目を通した書類の通りであった。

大半が「血の力」について——ロミオに一年勤続経験があっても、未だ「候補生」が抜けない理由。それが「血の力」にあること。

血の力とは、言ってしまうえば「必殺技」であるという。

「貴方たちはゴツドイーターの先頭に立ち、彼らを教導する存在なのです。本来なら正式な晩餐会を催したいところですが……」

ラケルが何か含むものがある目で、ユウをチラと見る。

探るような目だ。

ユウの額に脂汗が滲む。

榊さん、これ、ばれてるんじゃないですかね。

「ふいーっ、緊張したー」

「だよな。なんかこう、あの人の前に立つと緊張するんだよな」

「マグノリア・コンパスにいた頃のこと思い出しちゃったよ」

「つつてもそんな昔じゃないだろ？」

「そうだけどー、むー」

「まあ、訓練までまだ時間あるんだろ？ 俺もまだだし、ほら、それま

でこれ読んで待ってようぜ」

「おっ、極東広報！ 新作ですか？」

「おう！ 今月号の特集はこれ、神狩人激白！ ゴツドイーターは嘘を付くと鼻の頭に血管が浮き出る」

「なになに、嘘だぜ……だがマヌケは見つかったようだな？」

「おおーっ！ 謎解きモノ！ 真実はいつも一つ！」

——ちよつと一人歩きしすぎい！ リョウタロウさん可哀想でしょ！

新人達とのおしゃべり会など、極東では恐れられて無くなってしまった体験だ。

二重の意味でユウは涙が出そうになったが、脇腹をつねって耐え抜いた。

「これから先、訓練を重ねて、そして実戦……かあ。なんだか緊張するね」

「そんなもん慣れだつて、慣れ。そう何度も任務があるわけじゃないしよ、週に二回あれば多い方っしょ」

「意外と少ないんだ」

「これ以上多かつたら人類滅んでるつての。野生動物の襲撃みたいなもんでしょ。そう何度もないつて。だからゴツドイーターなんて少人数で、もつてゝるんだし」

へえと頷くナナの後ろで、小声でユウはロミオをつつく。

——優しいんだ。

「は、何が？」

——だってほら、週二なんかじやきかないだろ？ そうだよな、最初は簡単だつてーつて言っておいて、後から抜け出せないデスマーチに追い込むのが常道だもんな。

「え……何それ……怖い……」

——は？

「え？」

——いや、一度の出撃で三回任務が入って、でも帰ってくるまでが任務ですってカウントは一しかされないとか、そういうのが普通でしょ？

「い、いやいやいや、どこのブラック企業だよそんなの……そ

いえばお前、ナナと違つて極東上がり……」

——普通でしょ？

「いえ、はい、そうですね……極東こえー……極東人おかしいつて……」

ロミオの眩きはユウには聞こえなかつたが、何故かまた勘違いされるフラグが建つたような気がした。

「でも血の力……必殺技かあ、早く使つてみたいね！」

言つて、ナナが耳の辺りをユウの肩に擦り付ける。

不意な距離の近さ。ちようど猫がそうするような仕草に、ユウは口元を引くつかせる。

ぎよつとしたユウの顔に気付いたのだろう。あつ、と小さく声を上げてナナは身を離す。

ユノの画像を切り抜くのに夢中なロミオはわからなかつたようだが、大胆な格好をしていてもナナは他者との距離感に敏感であるようだ。

極東広報で盛り上がつたくだりは、明らかにナナが「合わせた」ものだ。そうまで興味が無いであろうことは、視線でわかる。ロミオのように食い入るように見やることはなく、むしろ別の記事にばかり目が行つていた。

相手のここまででは踏み込んでもいい、という距離をナナは肌で理解しているのだろう。身体的にも、精神的にもである。

だから、それに一番驚いたのが、ナナ自身であつたのは間違いがない。

まるで自分で自分の行いが信じられないかのように、目をぱちりと瞬きして、首を傾げる。

「えつと……なんでだろ、あれ？ あー、ごめんね。急に」

——いや、いいよ。気にしてないよ、ナナ。

「ん……その、変なこと聞いてもいい？」

——どうぞ。

「ねえ、ユウ……私たちつて、どこかで会つたことない？」

——うーん。

しばらく考えてから、ユウは答えた。

——いや、俺はずっと極東にいたから、初対面だと思うけど。

「だよね。あはは、ごめんね変なこと聞いちゃって」

再び話しに華が咲く。

ロミオとナナが盛り上がるテンションに巻き込まれながら、つられてユウも笑う。

鼻を撫でながら。

□ ■ □

良い初陣だったな、とジュリウスは囁くように言った。

ガラスに注いだ琥珀色のブランデーに、砕いた氷が泳ぐ。

「お前から見てどうだ、ナナは」

——新兵に聞くことじゃないかな、と。

「謙遜はいい。素晴らしい動きだった。いや………凄まじい、と
言うべきか」

——あれは神機様。間違いなく俺の神機には神機様が宿ってる………なんだよ俯瞰視点って………自動戦闘つて………。

「明らかに新兵の動きじゃあないな」

——それは。

「深くは聞かないさ。ああ、聞かないさ………お前が聞いてほしくないのなら」

——いいのか？

「フェンリルが一枚岩であるなどと思ってはいない。当然、ここも。極東もそうだろう？ いいさ、深くは聞かない。お前がどんな理由でここにいるかは知らないが、お前が悪い奴じゃないことくらいはわかる」

——ジュリウス……誓って、俺自身がお前達に、ここに害を為すことはない。上が何かしようとしても、大事にはならないようにする。

「お前こそ、いいのか？ そんなことを言っただけ」

——いいさ。仲間だと、そう言ってくれたからな。信じられることが一番嬉しい。

「そうか……不思議と、大丈夫だと感じてしまうのは何故なんだろうな。これが甘さ故の過ちでないと、そう思いたい。後悔させてくれるなよ」

——ああ。期待を裏切ることにはあるかもしれない。過ちを犯すことも。でも、後悔はさせない。約束するよ。

「楽しみだ。ああ、楽しいな。こんなに戦っているのが楽しかったなんて、初めてだ。体が軽かった……あんなに幸せな気持ちで戦うなんて、初めてだった。もう何も怖くはない」

——手、大丈夫か？ 戦いの怖さを教えるデモンストレーションにしては、少し大きかったんじゃない？ オウガテイルに腕を噛ませるなんてさ。

「回復錠はもう投与してある。とつくに傷は塞がったさ。ナナには少し、悪いことをした。脅かしすぎた」

——この一年、ロミオにも同じように接してきたんじゃないか？ ちょっとどうかかな、と思うけど。

「プレッシャーを掛ける、というのが、俺がラケル博士から命じられたことだ。いずれゴッドイーター達を教導する立場となる故に……人類を導く存在となるがために、だ」

——ナナはともかく、あれはあのままじゃ持たないぞ。

「わかるか……そうだな。何とかしてやりたいとは思っている。だから、お前には期待しているんだ」

——これだよ。やめろよな。自分でやれよ、自分で。

「俺ではいけないんだ。俺ではな……」

——なるようにしかなんないぞ。悪いほうに転がり落ちていくかも。

「それでも、いいさ。俺はお前に賭けたい。おかしいか？ まだ出会ってすぐだというのに、そう思ってしまうのは………思わされた、というべきか」

———「どいつもこいつも………俺を出来る奴だなんて勘違いしやがる。重いんだよ、いい加減。」

「人が人にかける希望は身勝手なものさ。お前もそうだ」

———俺は、誰にも望みなんてもたないよ。

「それだ。人は一人でも生きていけるといって、強い信念がある。お前は人に望みを持たない。他者からのそれも否定する。人は変わる必要はないとさえ思っている。」

変革すべきは世界。お前は今この世界に希望を見出すこと、それだけを願っている………違うか？」

———見透かしたようなことを………ならお前は逆だ。世界が光で満ちているなんて信じて、人に絶望してる。

「ああ、逆だな。だから人の内側に宿る光を求めてるんだ………矛盾だよ。俺達は同じ矛盾を抱いている。向いている方向は逆なものな………まるで『鏡』合わせだ」

———カガミか。

「ああ、俺はお前を通して、自分を見ている」

———カガミに向かえば、全部『自分に返る』だけだ。自分のことが解んない奴は、カガミを見るしかない。

「己に返る、か。洒落た名前だ」

———言うなよ。意外と気に入ってるんだ。

「ははは、怒ってくれな。ロミオとナナを、良く見てやってくれ。まずはそれだけでいいさ」

———ナナはともかく、ロミオは手ごわいぞ。劣等感ってやつは厄介なものだよ、ほんと。

「こればかりは本人に何とか乗り越えてもらわないが、切欠がないことにはなんともな。周囲の言葉は全て同情にしか聞こえまい。それは戦いの中でこそ磨かれるものだ。見上げるものがある戦場の、な」

———うまいこといかないよな。ほんと、隊長はつらいぜ。

なあ。

「わかつてくれるか……ああ、何故なんだろうな。俺なりにやっているだけだというのに、何故か恐れられ、拒絶される。積み上げた功績も確かにあるが、過剰に評価され、それがまた畏怖へと繋がっていく……何故なんだ」

——わかるよおお。なんてーの、そんな深く考えてないのに、存在しない裏事情とか読み取られてたりして、いったい何がなんやら。

「口座番号を間違えて児童擁護施設に送金し続けているんだが、なぜかそれが善意の行いとして表彰されてしまった。

今更言えずに放っておいただけなんだが……ロミオの視線が痛いんだ。俺はそんな尊敬されるようなことはしていないのに……何故かこう、高級志向なイメージが付いてしまった身動きがとれないんだ。

俺が食堂に行くと、皆がぎよつとした顔をする。俺はいつもフルコースや本場のティーセットに囲まれて食事していると思つていろいろらしい。それはそれでいいものだが、でも違うんだ。俺だつてもつとこう、安価なジャンクフードを食べたくなくなる時もあるんだ。

寝転がってスナック菓子をつまみたくもなるんだ……部屋ではジャージを着て腹を出しながらだ……」

——わかった。わかったからそれ以上飲むのはやめよう？　な？　勧めた俺が悪かったから。

「アルコールはいいものだな。今まで避けていたのが馬鹿らしい気分になる。こんなにもいい気分なのはお前のおかげだ。抱き締めてもいいか？」

——こいつソーマより酒癖悪いぞ……！　にじり寄つてくんなし！　グラス置け！

「俺は、嫌われてるんだろうか……」

——ないから、皆お前のこと尊敬してっから。たぶん。

「尊敬されたいんじゃないんだ。俺は、俺はっ！」

——めんどくさすぎいいー！

この鉄面皮を崩してやろうと、酒の席に誘ったのが間違いだった。後悔をひしひしと感じている。飲みにケーションとかほんと悪しき慣習だよちきしょん。やめときやよかった。

さすがいい酒が揃ってて、気持ちよく酔えそうだとは思ったけど、これはない。

なんなんだよ、男の絡み酒って、誰得だよ。

溜め込みすぎだろこいつら。

フライアいいとこだつて思ったけど、閉鎖的すぎるんだよな。極東よりずっと鎖国してるよここ。

なんか皆やたら固いつていうか、一番フレンドリーなのが警備員の人達ってどういうことだよ。

世界情報が揭示されてるモニタ睨んで、昨今のアラガミ事情がなんとかかんとか、そんなことで悩んでる人が多すぎるんだよな。

そんなの考えるより、足元固めようぜつて言ったら、その発想はなかった、みたいな顔するし。

上を目指すよりは前に行こうぜ、つていう話。

フライアはキャタピラ艦なんだから、どこまでもいけるじゃん、みたいな。

俺ちよつといいこと言つたわ。

でも、さすが極東人だ、つて言うのはやめような。

極東人は戦闘種族じゃないからな。

対応がほんと戦闘オンリーだけなのはやめてくれませんかね。

海外の極東人のイメージおかしくない？ 遠征行つてた時もそうだったぞ。

ここで俺がしてもらった訓練もペーパーテストじゃん。こんなの新兵にやる初期訓練じゃないぞ。

そんで今日の、実地訓練という名の初陣カツコカリですよ。

今更オウガテイルとか楽勝だけど……楽勝だけど！

慣らし運転なしだったからビビるっつーの！ 急に主導権ぶんどるとかやめてくれませんかねえ！

ねえ、神機様！

ちきしょん！ また会えて嬉しいぜ！

でもいきなりアクションゲー化は勘弁な！

なんか薄い壁に阻まれてる感じで、意思疎通できないのは仕様ですかね！

初期の頃の一方通行コントローラーで怖い半分、懐かしいの半分……いや、怖いのがほとんどだけど！

また素材収集マラソンが始まるのか……へへ。
う、嬉しくなんてないんだからねっ。

でも本当、お前が帰ってきてくれて嬉しいよ。

どこか遠くに感じるのは、しょうがないのかな。

まだ出会ってはいない。そういうことか。近いのに遠い、寂しいよ。でも、いずれまた会えるなら、今は俺が出来ることをするよ。

だからお願い、手加減してね。

しかしこれ、榊さんになんて報告しよう。

もうぶつちやけスパイなのバレてるけど、うん、身バレだけは断固阻止せねば。

俺のためにも、俺のためにもだ！

なんなんだよあのトンデモ広報！

俺100人斬りとかしたことないよ。まだ綺麗なままだからね？

泣けてきた。

神狩人とかほんとなんなん？

俺の精神衛生的に悪すぎんぞマジで！

「ところでユウ」

——なんだよ。

「お前が極東の誰かは解らんが、もしかして神狩人」

——シャオラツ！

「とくいてんっ！」

——あ、あーつと、飲みすぎて寝むくなっちゃったかな？

はは、ははは、やだなあ隊長。ははははは。

これだから鋭い野郎は！

身バレだけは……立場は暴かれても身バレだけは断固阻止

せねば!

100人斬りがゴシップだとばれたら俺は……あばばばDTちゃうわ!

ツバキさんと色々したりして……あれ? 最後までいいない? あばばば。

ああ駄目だなんかもうこれ以上は色々限界!

限界だからあ!

助けて榊えもん!

□ ■ □

「えうつ、えつ……え、ぐ……げえ……!」

—— ナナか? どうした。戻してるのか?

「あ、ああつ……! ごめんなさ……ごめんなさい……ごめ……なさ……えぐつ……ふ……!」

—— 誤魔化さないでいい。人を呼ぶか?

「ごめん……ごめんね……」

—— “いつから”だ?

「わかるんだ……」

—— 食ったら戻すようになったのは、“いつから”なんだ?

「わかんない……ずっと前から、おでんパン以外は、こうだから……。ロミオ先輩に勧められて、初任務パーティーでちよつと食べ過ぎちやつたかな……えへへ、だめだよね、こんなの。食べられなくて死んじゃう人もいるのに」

—— 普段は栄養剤か……普通に食うよりよっぽど栄養はあるし体も維持できるだろうが、ああ、くそつ。あやまらなくていい。ナナ、こつちを見ろ。俺を見るんだ。

「ごめんなさい……服、よごれちゃった……」

——いいんだ。いいんだ、ナナ。謝るのは俺の方だ。悪かった。俺が全部、悪かったんだ。

「えへへ……おかしいの。どうしてユウが、そんな顔するの？」

——なんでだろうな。おかしいよな……さあ、一緒に食べよう。少しずついい、少しずつ……一緒に。

大丈夫だ。俺はここにいる。ここにいるから……もうお前を捨てて、どこかに行ったりなんかしないから——。

ぐっどいーたー：18 噓 GE 2

フラツギング――。

Fragment Grenade (破片手榴弾) を語源とする造語。

フラツギングを題材とした映画を発端とし、ベトナム戦争時に破片手榴弾を用いた上行為が多発、社会問題に発展した。

軍隊、さらには小隊内で発生する不祥事のため、事故あるいは通常の戦死として処理されることがほとんどであったという。

その語意は、上官、同僚殺し――。

□ ■ □

こうきて、こうっ！ こうきて・・・こうっ！

こうきてこうきてこうっ！ 何か違うな・・・。

違和感が取れない。

神機様がしれっと戻ってきたのはいいけど、何て言ったらいいか、

こう。手放して喜べないっていうか。

データのコンバートに失敗したみたいな。

鉛を血管に溶かし込んだような倦怠感を全身に感じる。

アーティフィシャルCNSとの連結が上手くいってないんじゃないかな、これ。

検査結果はオールグリーン、まったく問題なしで、感覚的なものですねってというのが結論だったけども。

感覚的なものだっていうなら、微妙な差異を感じるのは、やっぱりこう、うーん。

アーティフィシャルCNCの伝達が、もっと・・・俺のイメージじゃコンマ秒早いはずなんだけど。

いや、脳内俺ツエーですねって言われたらそれで終わりだけど、ど

うも気になつちやうなあ。

違和感がまずあつて、だから……お帰りつて言つてやれないのが、ちよつとだけ寂しい。

いえ、それ以外はいつもと同じなんですけどね？

ミッションカウンターで上から順番に下まで全部、任務にチェック入れようとしやがったりね？

新兵つていう設定だからまだ低難易度任務しかリストにないけど、君、やろうとしてるね？

デスマーチ、やろうとしてるよね？

お願いだからやめてください！　ほんとお願いしますからやめてください！

勘弁してよ神機様あ！

「おう、おつかれー。やっぱ良い事あつた後は気合が入るな。生ユノ、良かったあ……」

——ソツカーザンネンダヨアエナクテ。

「そうだよ！　災難だったよなユウも。ほんとすれ違いで生ユノ逃すとか……そういうジュリウスとサバイバル訓練で泊り掛けしてたんだっけ？　レアイベントっていったら、ジュリウスがサバイバル訓練してる姿もレアイベントだけだ」

——まあ、時間潰しに俺から頼んだんだけども。中身は延々カードゲーム大会だったよ。

二人ポーカールとか、マジカギザリングとか、遊具王とか……あとは、軍艦これくしょんとかもしたり。

あいつのデッキガチ構成でやんの。遊具王はデッキ破壊中心だし、軍これは潜水艦編成とかまじ鬼畜。なんだよ、戦艦は全て大破させるのが作法でちとか。くそう、駆逐さえ育っていたら……」

「お、おう……？　えつと、ジュリウス、だよなそれ？」

——うん。それで飯事情はサバイバルだったから、食料になる動植物なんていなくて、腹が減って腹が減ってもうね。最後の方どのアラガミが美味そうかとか、そんな話ししかなかったよ。食わないけど、それ考えたことない？

「いや、えっと」

——腹が減って極限状態になると何て言うか、リミッターが外れるよな。一番盛り上がったのがフランのどのラインがくるかって話しでさ。俺は太ももから背筋にかけてのラインがムーブメントだって言ったら、ジュリウスは膝の裏だって。

シンプリーズベスト。そういうのもあるのか。勉強になった。

「たぶんそれ、違うジュリウスだわ。フライアって外からゴツドイーター雇ってるし、同名別人のジュリウスさん何人か見たことあるから」

——たぶんそうね。じゃあジュリウスさんってことで。

フランに隠れてこっさり菓子類とかのミツシヨンアイテム持ち込んでてさ、マシユマロをこう、フォークに刺してだな、ランプの火で焼いてやったらうまいうまいって食ってたよ、ジュリウスさん。

「何それ超美味そう」

あとコーラの瓶開けるの失敗して服べちよべちよにしてたよ、ジュリウスさん。そんでパン一で洗濯してた。

「……ユノよかったな！ほんと、生ユノよかった！カーツ、もったいないわー、お前会えなかったとかもったいないわー、カーツ！」

「おーい二人ともーっ！ んんーっ、おつかれさまっ！ 実地訓練も慣れてきたねえ」

「おっすおつかれナナ。今さーユノの話してたんだよ。どうよどうよ、初めてユノに会った感想は！俺もうすっげー興奮しちゃってさあ！」

「おー！ ユノさん綺麗だったねえ！ 目がおつきくて、睫毛が長くて、もう美少女ーって感じ！」

——いやいや、ナナも美少女だよ。負けてない負けてない。

「やっだもー！ 棒読みー！ にへへへ」

「でもお前はレア博士みたいなタイプが好みなんっしょ？ グレム局長の執務室で即行博士のこと口説いてたじゃん」

「へえ、ほー、ふーん、そうなんだ。へえ」

——いいことを教えてやる。極東じゃあな、ああいう台詞の最後にはキリツというSEを付けるんだ。

あら局長室に何の用？ いえ、博士に会いに来ました……………キリツ。こういうことだ。ここまでが流れ、様式美だ。

つまり本気じゃないんだ。いいね？

「アツ、ハイ。そんな必死になんなくても……………」

「ユウって本気じゃないのに女の人にそういうこと言えるんだ」

——わあ、やぶ蛇！

「微妙にユウへの風当たり強くない？ ナナ」

「んーん、普通だよーこれくらい。ていてい」

——痛い痛い。肩いたい。

「遠慮がないっていうか、兄妹みたいなのーって感じ？」

「おーっ、いいねーそれ。お兄ちゃーん！」

——ははは、こやつめ。

飛びつくナナ。肘に感じる天国が！

役得ヤッター！ 知的好奇心が刺激されるう！ ビバ・ムーブメン

ト！

知的と言いつつ、ビバはイタリア語でムーブメントは英語だというツッコミは不用である！

今はこのムーブメントに浸っていたい……………。

ああ、癒される……………なんかもう、アーティフィシャルCN SだのCNCだの、どうしてもよくなってくるな！

「ところでさ、また新入りが来るって話、聞いた？」

「えっ、知らない知らない！ 初耳だよー！ わあ、新しい仲間か

あ……………新しい家族、だね」

「おっ、それラケル先生風？」

「にへへ……………やったねアバちゃん、家族がふえるよ！」

——お、おう！ やったな！ わかったからぬいぐるみに話しかけるのはやめなさい。そのアバドンの手人形を外すんだ、いますぐ。

「でき、その話なんだけど・・・・・・・・」

「なにになに？ 内緒の話？」

「実はさ、その新人、あんまりいい噂がないんだよ。聞いた話によると、前いたところの支部で上官を・・・・・・・・」

—— ストップ。

ロミオの口をふさぐ。

むぐぐ、と手を当てられたロミオが不満顔に睨む。

「ぶはあつ、ちよつ、何すんだよ！」

—— 例えばさ。

「はあ？」

—— 例えば、そいつがいけ好かない奴だったとしたら、別に仲良くする必要なんてないさ。お前が嫌いだって言うなら、配給品の差し止めくらいまでなら手伝ってやってもいい。

「いや、そこまでやろうなんて言っていないけど・・・・・・・・」

—— でも、そこまでだ。そこまでだよ。そこまでなんだ。そこまでで終わりなんだ。

殴ってもいい。蹴飛ばしてもいい。唾を吐きかけて、いじめ抜いてやってもいい。嫌っていても、憎んでいても、それは仲間だ。ぎりぎりのところで、仲間でいられるんだ。

「わ、わけわかんねーって。結局何が言いたいわけ？」

—— 仲間を淫売扱いするのが、一番やっちゃいけないことだ。それをしたら、仲間ですらなくなる。わかるよな？ ロミオ、お前にならわかるはずだ。だろう？

「あー、えつと・・・・・・・・」

「私・・・・・・・・わかる気がする。仲間のはずの人達に、隠れてひそひそぼそぼそされてたら、一番やだなって思うもん」

—— それでキツイ思いした奴を俺は知ってる。ま、味方に後ろ指差しちやあかんでしょ、ってこと。悪いね、説教臭くなって。「お、おう！ いや、俺も冗談だって。ただ良い奴じゃないかもしれないなあって、それだけのことだからさ！」

—— むかつく奴だったら、お前むつかつくなあで正面から

当っていけばいいさ。それで色々教えてやったらいい。そこんとこ頼んだぜ、先輩。

「おうー。へへ、俺にまかせとけって！ やな奴だったら俺がガツンと言ってやつからさー！」

「ひゅーっ！ ロミオ先輩頼もしーっ！ ……ねね、ユウ」

——んー？

「ありがとね」

——んー。

「ちよつとだけ、ちよつとだけだよ？ ユウのこと怖いなって思っちゃった。背筋がひやつとして、ぞわぞわーってして……。でも、ああいう怖さなら、私嫌いじゃないよ。えへへ、そんだけ！ 先帰ってるね！」

——んー、足早いな。

ふっひー。真面目モードはとんと続きませんわー。

ていうか俺が真面目になんきやいけないってどゆことよ。

このおちゃらけリョウタロ……。はっちゃけユウ君がよお。

なんていうか、純正培養というか。養殖ものというか。ハウス栽培というか。

“無菌室” 育ちなんだろうなあ、フライアの面子は。

たしか、マグノリアコンパスだっけ？

児童擁護施設だって聞いたけど、どんな場所だったのやら。

ナナやロミオの身のこなしを見ればわかる。あれは一朝一夕で身に付くものじゃない。明らかな軍事教練の痕跡、その結果だ。

つまり幼少期から戦闘行動に慣れ親しんできたってことだ。

ゴッドイーターの資格の有無は比較的幼い段階から解るとはいえ、腕輪を嵌める前から訓練を施されていた、ということだ。

仮にも児童擁護施設っていうのに、どうよそれ。ていうか軍事訓練のノウハウを持つてる児童擁護施設とか嫌すぎる。ソルジャー養成所じゃん。

ラケル博士の家が運営していたんだっけ？

フライア直下の施設となれば、予備戦力の“プール”と考えるのが

自然なのだろうか。いや、しかしなあ。うーん。

こりゃあ、児童擁護の名前に俺が夢を見過ぎてるのかな？ このご時勢でまともな施設なんて存在しないだろうし。

やだなー、また暗い話になりそう。

ロミオもまあ、これでまったく悪気がないんだから、何と云うべきか。コウタみたいな気配りは望めないよなと思う。

ほんと、コウタは奇跡みたいな性格してるよ。あれは家族のおかげもあるけど、環境が劣悪すぎたせいだろうなあ。泥から砂金ってああいうのを言うんだろうな。

そう、コウタは基本が泥なんだ。だから最後の最後で卑劣な手段をとることも、卑怯な選択をすることも厭わない。自分で泥をひつかぶる覚悟がある。自分の内側から染み出てきた泥をも。

ロミオは、あいつは根っこの部分が純すぎる。

自分自身の暗い部分に染まって、流されてしまうかもしれない。

性格はともいい奴だ。明朗快活でいてわかりやすい。

でも、いい奴なんだけど、清すぎる。

危うい。

隊長さんも無茶なことを言ってくれるよ。

カバーするにしても限界があるってこと、解ってるのかね。

どこか知らないところで自爆して、それで自滅してくパターンのような気がしてならない。

そうなったら俺がどうこうできないっていうのに。

前途多難、だなあ。

おーいお前も早くこいよー、なんて手を振るロミオ。

そうだな、今日は帰ろう。

フライアに………家に帰ろう。

そんで駆逐のレベリングをするのだ！

改二！ 改二！

！
潜水艦どもなんぞオリョクル海の海底に叩き込んでくれるわーッ



殴られて吹っ飛ぶロミオ。

このクソガキがムカついたから殴っただけだ——そう言い残し、踵を返して立ち去る男。

長身瘦躯。しかし紫のジャケットで覆われた身体は、鍛えこまれた戦うための身体。

黒の長髪は、ジャケットの色に合わせたワークキャップでまとめられている。

細い顎先から左頬に掛けて走る傷は、不覚傷ではない。無骨な戦いの歴史を感じさせる傷跡である。

あらゆる装飾を排除した。戦うために打ち鍛えられた刀剣を思わせる男。

それが『ギルバート・マクレイン』に感じた第一印象だった。

——そう、言うなれば刀剣男子。これは売れる。

「ユウ。しっかりサポートしてやってくれ」

——やめる離せエ！ 当然のように肩を掴むんじゃない！ 俺は現実逃避に忙しいんだよ、押し付けるんじゃないよ！ 押し付けてはよちきしよん！

「カードで負た負債をチャラにして欲しくないのか？」

——ファア——汚いなさすがブラッド隊長汚い！

「今回の件は不問に処す。戦場に私情は持ち込まぬよう、各自関係を修復しておくこと。では解散」

——いつかその頭のアホ毛ひっこ抜いてやるからな！

覚えてろよジュリウス！ このプリンス！ プリウス！

「ユウ、ちよつと待って、ユウ！」

——プリンスコプリンスカ激おこだよ！ なんだよナナ……くつ、元気になっちゃう悔しい！

「あのね、おでんパンを人にあげるとき……ユウみたいに受け

取ってくれるか、笑ってツツこんでくれるんだよね。でも、いらない、って言う人がたまにいて……」

——たまにいて？

「そういう人って、だいたい何かに追い詰められてる気がする」

——……

「先輩と新人さん、仲良くしてほしいな……」

——ちよつと行ってくる。

「あ……うん！」

何かもう……何か。

——こういうの今後全部俺にきそうな気がする。

俺はブラッド専属のカウンセラーじゃねーっつーの！

極東じゃソーマ担当だったのに……何ゆえ俺が……解せぬ。

——もういいよ成るように成れだ。

オラア！ 俺参上！

展望フロアにINしたお！

「なんだ、追いかけてきたのか？ 暇な奴め……俺の処分が決まったのか？」

——お前の処分はお前がぶん殴ったロミオと仲良くすること。

——仲直りだ！

「ハッ……そりゃあいい」

——あのさあ、悪気があって言ったんじゃないってわかってるでしょ。そんな頭悪いようには見えないし、もうちよつとこう、大人になって受け流してやれなかったの？

「配属早々つまんないものを見せたことは詫びるよ。後でロミオにも言っておくか……」

——俺は噂なんて気にしないぜ、だったっけ？ ロミオの

台詞。

「詫びると言ったはずだが？」

——ギルバートの眼が剣呑な光を帯びたのを肩を竦めていなす。

——ロミオも正面からぶつかっていけよとは言ったけど、正直すぎんで

しよこれ。

誰でも触れてほしくないことの二つや三つはあるだろうに。

その”臭い”だけでもダメだって事がさあ。

—— 周りがごちゃごちゃ言うとな煩わしくて身動きとれなくなる、つていうのは、わかるつもりだよ。

「その腕輪……そうか、お前も元新型使いか」

旧型、旧新型から第三世代神機に“コンバート”される際、そのゴッドイーターが嵌めていた腕輪は完全に取り去られることはない。

腕に癒着して外せない部品が多々存在するためだ。そのため、外装を取り外し、アタッチメントを追加して元に戻すという手段がとられている。

俺が腕輪をコンバートした時も、完全に腕輪は除去されてはいなかった。手首と外腕部の骨に打ち込まれた第二世代由来のパーツが露出していたのを覚えている。

どこまで腕輪が分解されるかは洗浄深度に関わるため個人差があるが、それに元の腕輪を被せ追加部品を装着させる方式が一般的であるとか。

俺はほとんど分解できたから、コンバートは楽だったそう。

世代更新した結果、純粋な新世代神機使いの腕輪に比べ、少しだけ大きい腕輪となるのだ。

とはいっても一見ただけでは変わった所は解らない。並べて比べてみれば違いが解る。それくらいの微妙な違い。

整備士や機械技術に興味のある者はこういったスケールに敏感で、一目で解るのだろう。

ギルバートとお互いの腕輪を掲げてみせる。ほんの少しだけ大きな腕輪。

第二世代からコンバートした者の証拠である。

—— 正直、黒色にはまだ慣れないよ。ずっと赤だったから、色々思い入れがありすぎて。黒に変わったから、それまでのことがチャラになるなんてないしさ。

「そうだな……ああ、その通りだ」

——新兵ってことになってるけど、まあ、それなりに色んなことは経験したつもりだよ。色んなものを見て来た。よくないものばかりを。

他人の経歴なんて気にしたって意味がないって、ゴッドイーターになったものは皆解ってるから、そこは根掘り葉掘りされなくて助かってるけど。

だから、たまにそういう、やるせないことが起きるってことも解ってるつもりだよ。キレるなよ？ “そういうこと”が“起きる”ってことを、知ってるだけだからな。

「そういうこと、だと？」

——最近だとジュリウスと一緒に任務に行った帰りに、偶然カルト宗教団体にかち合ったりとか？

テスカポリトカを神様扱いしてて、生贄とか捧げちゃって、もうなーって感じの。あんまりにもエグすぎてジュリウスが“きちちゃって”。

普段大人しい奴がキレると怖いなほんと……後でサバイバル訓練に連れ出してさ、カードゲームとか教えてみたら思いのほか楽しかったみたいで喜んでたけど。でもたまに考え込んでることあるから、色々残ってるんだろうなあ。

「ふん、胸糞悪い……どこもかしこも」

——地獄だなあ。笑えてくる。

なんか怪しいことしてる奴らがいるってんで現場に踏み込んだら、カルト宗教集団の暗黒サバト真つ最中だったってオチ。

“一通り”儀式が終わった後の、まったくムード……ビデオ上映してた所に突撃したんだよね。

女の子が翩られて殺されるムービーだった。

スナッフフィルムだよ。小さい子ども専門の。黒の章とか自分たちで名前つけてさ、そいつらは映像作品として楽しんだ。

どんなだったかな……ちよつと小生意気な長女に、元気な次女、クールな三女を円にして並べて、ギロチンを付けてさ、紐を長女に啜えさせて、とか。そんな感じだったはず。胸糞悪いから頭から

消去してた。

そいつらそれ観てエキサイトしてたよ。心の底から。そんな映像が延々と何百時間と垂れ流されてた。

——ま、戦つてりやいろいろあるよ。それは知ってるつもりだけど、実際つらいよなつてだけ。

「そうだな」

——仲間が死んだり、アラガミになっちゃったりさ。きついよ。

「……」

クリティカルヒット。

反応を見る限り、女か。

本当は隊長がやるべき「処置」を、何らかの事情で自分がやるハメになった、つてところか。

規定と違うもんだから、そんで上の判断が遅れて隠蔽工作が甘くなって、マスコミが嗅ぎ付けて騒ぎ立てた。

こんな感じだろうなあ。

「だから……なんだ？ 何が言いたい」

——今後ともよろしくつてこと。

シエイクハンド。握手握手。

ありがとうギルバート君。でもね、目の前で盛大なため息を吐かれるとちよつとキツイからやめようね。

「どこどこでもいんだな……おせっかいな奴つてのは」

——ふあん？ 何？

「いや。俺のことはギルでいい。堅苦しいのはごめんだ……まあ、今後ともよろしくな」

——ああ、よろしくな。就任祝いに任務終わりにでも一杯おごるよ。ムーブメントの話とかしようぜ。

「ああ……ムーブメント？ ん、んん？」

自分から愛称を広げようとしマクレイン・ギル。

今後とも、よろしくやっていけるのだろうか。不安でならない。前途多難である。

うん………。

初期アリサよりマシ！ 初期ソーマよりマシ！

ふええもう限界だよお。

誰かコータ呼んできてコータア！

俺の癒しを、極東から、誰かア！

□
■
□

「僕は栄えある極東支部第一部隊所属………エミール！ フォン
！ シュトラスブルクだッ！」

誰がこいつを呼んでこいと言った。

エミール襲来。

ユウ、二重の意味で焦る。

フライアは移動要塞であるというその性質上、戦力を外部委託によって補充している。

ブラッドという固有戦力が出来はしたが、それでも外からゴッドイーターを招くことが通常である。

しかし、よりにもよって極東から……しかも、この場にもつとも来て欲しくない人材が選ばれるとは。

ユウをしても予想外であった。もしかしたら、榊の差し金なのかもしれない。スパイ活動が順調であるかどうかの監視だろうか。

それにしても人材の選出が間違っではいるが。余計なことを口走らないか、恐ろしすぎる。

「おお……おお……！ 君は、君こそは我が永遠のライバル！ かみかり——」

——シャオラツ！

案の定である。

よりによって不本意な二つ名を口走ろうとしたエミールへとユウがとった対応は、拳によって黙らせる、であった。

鉄拳制裁である。だが。

——なにい!?

ユウの拳は空を切る。

“いなされた”のだ。理解した瞬間、少なくともショックがユウを襲う。

極東では、前隊長……コウタから数えれば前々隊長か、を壁際で世紀末バスケットする程度には体術の覚えがあった。

それなりの自負と自信があった拳を軽くないなされたのだ。

エミール自身の技量が優れているのではない。これは、技の“性能”だ。

尋常なる技ではない。

「フッフッフ……僕を今までの僕と思ってくれるなよ？ フェニックスは日々進化し続けるのだ！」

エミールの両の足が内側を向く。

両の手は手の甲を相手に、ユウに向けて外へ……それは異形なる構え！

「呼ツツ！」

壁だ！

ユウの眼前に巨大な壁が出現した。それは幻覚であると解っている。しかし、理解してなお、幻視する。してしまう。せざるを得ない。まるで幼い少女がだだをこねるが如くの姿……ともすれば、女々しい格好にも見えるだろう。

しかしそこに弱々しさは存在しない。

これは人間が単体で成す、アラガミ防壁よりも強固な壁……守りの型！

「あれは……！」

「知ってるの？ ロミオ先輩」

「ああ、ナナ。あれは、極東に古くから伝わるジャパニーズマーシャルアーツ……カラテの構えだ！」

呼吸のコントロールによって完成されるあの構えは、完全になされたときにはあらゆる打撃に耐えると言われている。

毎週極東広報を読んでいた俺には解る……俺は詳しいんだ。

ああ！ あの技は！」

エミールの両の腕が弧を描き、空を撫でた。

新円。

手刀が描く二つの月が、出現す。

「マ・ワ・シ・受ケ——！」

見事である。その一言しかない。

付け焼刃とは口が裂けても言えない。

古武術とは、一朝一夕で身に付くものではない。

並々ならぬ努力と、そして才能が合致せねば辿り着けない領域。

エミール・フォン・シユトラスブルク……不死鳥が如く。
騎士道、至る！

「さあ！ 矢でも鉄砲でも火炎放射器でも持つてくるがいい！」

——なんで耐久の構えでカウンター狙いして防御下げんだバカチン。

「あふん！」

突然の肘。

ユウのカミソリのように薙がれた肘により、顎を擦られたエミールはその場に崩れ落ちた。

いかに古代の技を身に付けようと、純粋な技量差は覆せない。
ただそれだけの結果、見えきった結末であった。

拳を握り、じつと天井を見つめるユウ。

——虚しい戦いだった……。

「そうだな、何の意味もない」

——うん。だからね、その、ね？ その、何も意味がないつてことで、無かったことに、ね？

いや、俺もどうかと思つたよ？ うん、ちよつと短絡的思考すぎるかなつて、ね？ でもほら、エミールの顔みたらさ、ね？

やらなきやいけないっていうか、すべきというか、ね？ わかるでしょ？ ねっ？ しかたないよね？ ねっねっ？

「そうだな。俺が今お前に感じている感情と同じなのだとすれば、それは、ああ、仕方ない。仕方ないだろうさ」

ユウの肩を掴むジュリウス。
ミシミシと骨が軋んでいる。「うわっ」とロミオとナナが半歩引いた。ギルは頬を引きつらせている。ドン引きである。

痛みよりも何よりも、ジュリウスの顔がやばかった。

いつもの涼し気な整った顔であるが、目がやばい。目が血走つていて、こめかみに太い血管が浮いている。

一言で言つて、やばい。

これあかんやつや、とユウは思った。

ジュリウス、生まれて初めてのガチ切れである。

「ついこの前に、言ったな？ 言ったはずだな？ 暴力沙汰はやめろと……俺は言ったはずだな？ お前に、直接、呼び出して、頼み込んだはずだ。そうだな？」

不思議だ……では俺の目の前で起きたこれは一体何なのか。俺は夢でも見ているのか？

よりによって直接言い置いた隊員が、隊長の目の前で、極東からの協力者を殴り飛ばした……これが現実なのだとしたら、さてどうしようか？」

——いや、これはその、極東じゃ挨拶っていうか。

「そうか、わかった。そんなに暴れたいなら話は早い。ここじゃ物が壊れる……屋上へ行くこうか」

久しぶりにキレちまつたぜ、と副音声が聞こえてくるかのような顔面描写である。

さわやかな笑みであった。ビキビキと浮かび上がる額の血管を除けば。

「あ、あーつと！ そうだ！ ミッションの人員選ぶとかじゃなかったつけー！」

「おーそだねそだね！ そうだったね！ 二班に分けるんだったよね！」

「そうそう！ 先行班がフライア進路上にいるアラガミを先行して露払い、そんでフライアが予定ポイントに到達したら、後続が迎えに行つて帰還っていう！ どうよ俺、ちゃんと聞いてたんだぜー！」

「フライアの行く先をがんばるぞ組が守つて、その帰りをお留守番組が守るんだよね！ 迎えに行つて、お帰りなさいでミッション終了！」

「で、どっちにするかっていう……げっ、ギルがいたよな……ええと」

「ちよつと、先輩？」

「じゃあそんなら新人二人を組ませるのもアレだし、俺がナナと残るよ！ うん」

「へっ!？」

「留守は任せろー。ミッション期間終わったらエンゲージポイントまでちゃんと迎えにいつてやるからさー！」

「えっと……じゃ、がんばってね！」

ナチュラルに見捨てやがった。

途中まで空気を変えようとしたのだろうが、その空気を読んで手に負えないと思ったのだろう。

そりや俺も自業自得なところあるけどさ、とユウは心中で悪態を吐いた。口にするには肩に置かれた手が怖い。

じゃあね！ と手を振って去っていくナナとロミオ。
残された男共。

ユウは遠い目をして現実逃避をし、ジュリウスはにこやかにビキビキし、ギルバートはとぼつちりを食らったと帽子を被り直し、エミールは白目を剥いて痙攣している。

「では、このメンバーでミッションを受注します。任務期間が長いのでサバイバルミッションとなります。各員、出撃準備をお願いします」

ミッションカウンターから一部始終を見ていたフランが、冷静な様子でコンソールを叩きながら告げた。

告げた後、手を口元に当てて微動だにしないフラン。

「耐えるのよフラン……だめもうむりうぶふう！」とくぐもつた声と噴出した吐息が指の隙間から漏れていた。

空気が重い。

サバイバルミッション、開始である。



「来い、ユウ……模擬銃なんか捨てて、かかってこい！ 神機で勝負だ！ どうした、来い、ユウ……怖いのか？」

——ハジキなんか必要ねえや。へ、へへへっ……

誰がてめえなんか、てめえなんか怖かねえ！ 野朗、ぶっこおしてやるうあ!!

「イヤーツー！」

——グワーツ！

こてんぱんという言葉がこれほどふさわしい場面もないだろう。

手足を揃えてコの字型に空を吹き飛んでいくユウ。

ミッション時間外の実技訓練中の一幕である。

実技訓練とはいっても、一方的すぎる展開であったが。

「おお美しきかな……二人のゴッドイーターが高め合っている……声は遠くて聞こえないが、きつとお互いを鼓舞する言葉を、世界について語らっているに違いない！」

「何やってんだかあいつらは……神機での対人演習は禁止されてんだろうが。ミッションの真っ最中だったのに」

「賑やかでいいじゃないか！ 僕は好きだ、実に好ましい！ それがゴッドイーターの使命なのだとしても、殺伐とした荒野にただ息をするだけでは気が滅入ってしまう。潤いがなくては。極東でこういう言葉がある。喧嘩するほど仲が良い、と！」

「ふん……俺を見て言うなよ。ロミオに言え、ロミオに。しかし、元気だなあいつら」

「ははは、こんなもの任務の内に入らないぞ！ 行って帰って、その途中で任務が入って……一度の攻撃で最低3回は任務が入るのが極東のスタンダードだからな！ うん……それが極東のスタンダードなんだ……」

おかしいだろ極東、と帽子を被りなおすギルバートの表情は精彩を欠いていた。

フライア進路上の露払いということで、感知したアラガミを手当たり次第に駆除ないしは追い払うことが任務目的だ。

始めは新しい神機の調子を見ようと、意気揚々とチャージスピアを担いでいたギルである。

その瞳には獰猛で危険な光が宿り、『チャージグライド』の稼動ハッチからはオラクルの輝きが溢れ出ていた。

戦意高揚。一意専心。

さすがは第三世代機である。これまで使用していた第二世代と機能は同じといえ、反応感度が段違いである。

これならば常のスコアを容易く塗りかえることが出来よう。

1戦、2戦、調子がいい。3戦、4戦・・・そして大型アラガミとの連戦回数が7回を超えたあたりから、ギルの目から光が消えた。

途中、ヴァジュラまで出現しこれと交戦した。他支部では出てきただけで大騒動、死を覚悟せねばならないアラガミである。

通信機から流れる、ヴァジュラの存在を知らせるフランの声に焦りが混じる。通信に出たギルバートは大声で皆に知らせた。

間が悪いことに、その時ジュリウスは離脱した『ヤクシャ』を追いかけて予測戦闘区域外で交戦中であった。

ギルバートの脳裏に最悪のシナリオが過ぎる。

つまり、経験の浅いエミールと、ほぼ新兵も同然のユウ、そして自分の三名でヴァジュラと戦わねばならないということ。

誰かが、死ぬかもしれない。

苦い思いがギルバートの胸中に湧き上がる。

覚悟はしておけ、とギルバートは二人に告げた。

問題はそのユウとエミールである。

エミールは「いついかなる時も、このエミール、覚悟は出来ている」などと嘯きつつ、紅茶の香りを楽しんでいた。

ユウに至っては携帯ゲーム機をカチャカチャとやりつつ、――

――デイリー終わってからでいい？ などと舐めきった態度。

これは胸倉を掴み上げても仕方がないだろう。

宙吊りになったユウはそれでも解っていないようで、――
え、だつてヴァジュラでしょ？ 禁忌種でもないし、そんなピリピリしなくても・・・。。との外れな発言を繰り返す。

これはもう駄目だ。ギルバートは諦めと、一握の寂しさとともに襟首を離す。

こいつは、見込みがあると思ったのに。

入隊早々にいざこぎを起こした自分に、臆さずに接してきたこと。ギルバートは言葉には出さなかったが、ユウの人柄を好ましく思っていた。

まるであの人のようだ。そうも思った。

つっぱっていった自分を、優しく支えてくれた、あの人のようだ……と。

そう思っていたのに。

——失敗しても、諦めなきやそのうち成功するでしょ。しくつたら支えてやるから。そのための仲間でしょ？ ま、なんとかやるよ。前向いていこう。

奥歯がぎりりと鳴った。やめろ、と叫びたかった。

あの人と同じ台詞を言うな。お願いだから、言わないでくれ。

振り上げた拳は、力なく降ろされた。

出撃直前、「足を引っ張るなよ」と一番戦闘経験が浅いであろうユウに、ギルナリの皮肉を織り交ぜた激励を飛ばした。最終通達のもりで。

これで駄目なら、もうこいつはそこまでの男だったのだと諦めよう。

勝手に期待して、希望を持ちつつあった自分が馬鹿だったのだと。

そして出撃の時が来た。

ヴァジュラ、来たる。

向かうはユウ、そしてギルバート。侵入予測地点からエミールは離れ、小型アラガミ相手に手間取っていた。

まずは自分が相手だと、ヴァジュラへと踏み込んだギルバート。

小パンチからの起き攻めからの電撃からの小パンチからの突進からの雷撃からの回転尻尾からの猫パンチからの電撃からの飛び掛りからの範囲電撃からの猫パンチからの起き攻めからの——。

ユウにリンクエイドをされること4回。5回目から放置するスタイルに入られたギルバートは考えることをやめた。

ヴァジュラは結局、ユウがほぼ一人で倒した。

新人だとか経験が浅いとか、絶対に虚偽情報であるとギルバートが

確信した瞬間である。

第三代だとかスキルだとかそんなチャチなものでは断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気分だった。

その横では、エミールが「我々の勝利だ！」といい汗をかきながら雄叫びを上げていた。コクーンメイデンとしか戦っていないかったのに。

極東人はスゴイ。色んな意味で。

ギルは改めてそう思った。

ぬおおああああ！ 何で勝てないんだしい！ 神機様やねんぞ！

「これが血の力だ……これが血の力だ！」

ドヤ顔でもつかい言うんじゃないし！ なんだよ血の力とかあ！

「俺の血の力は『統制』という。周囲のオラクル細胞を制御し、力を与えるという能力だ……が、しかし、使い方を工夫すれば、こんなこともできるぞ？」

おい無理矢理バースト状態にもってかれるとかおかしいだろ。え、てことはそれ、つまり、神機に「干渉」できるってこと？ 「ハツキング」したってことなの？

「そこまでじゃないさ。真似事は出来るが、それも感応現象で「パス」が繋がった相手に限る」

オラクル細胞に一斉に前倣えって命令できるってことは、神機にいらんとところで「力ませられる」ってことで……そりやつまり、「神機に」フェイントを仕掛けたってこと？

「賢い奴は好きだぞ。ほとんど正解だ。外部からお前の神機を統制の支配下に置いた。」

お前の力の流れに乗せて、さらなる力を上乘せする……極東でいう所の「合気道」の技術だ。結果、お前は自爆したんだ」

なにそのチートスキル！ どうりで神機からのフィードバックがおかしくなって体が思うように……ハッ、お前、神機での勝負持ちかけたのこのためか！

「ははは、これは訓練だ。わかるか？ 訓練だ。血の力を体で覚えるんだ。さあ、続きをやるぞ、隊長命令だ」

——職権乱用だろがい！ 素手なら俺の方が上だからっ
てお前ずるいぞぶざきんあががが！ 痛っイイ……お、折れるうー。

ジュリウスとユウの体術レベルは、実に同等なものであった。

純粋な体術のみであるならばゴッドイーター史上類を見ない程、過去に存在した達人の域であると言っても過言ではないだろう。

人外の領域に踏み出しつつあるユウ。それにくらいつき、あるいは抜きん出ることもあるジュリウス。

驚愕に値する両名である。同じ時代に、この二人が同時に生まれたこと。そしてその二人が出会い、ともに肩を並べていること。運命的なものを感じずにはいられない。

本来であればこの両者の間に優劣は無い。だが、実際には一方が……ユウが地を舐める事となっている。

これは相性の問題である。

『血の力』——。

地力は互角。ならば神機では……その限りではなかった。

ゴッドイーターであれば、決してジュリウスには勝てぬ理由がそこにある。

「あれを見ているとあいつは強いのか弱いのか、よく解らなくなるな……間違いなく強いんだろうが、ジュリウス相手じゃあな」
「どうも手加減しているようには見えるがね。それとも、実力を全部出しきっていないのか」

「どうみてもガチンコじゃないのか、あれは？」

「いや、まだりよ……ユウは使っていない。そう——

ジツをー」

「ジツ？ ジツって……なんだ？」

「君は極東に縁があると見た。ならば聞いたことがあるだろう？ ニンジャの存在を」

「いや、ニンジャのことはそりや聞いたことくらいはあるが……

あいつが？ いや、そんな……まさか、だろう？」

「ニンジャは極東の歴史の影に潜むもの。闇から人々を守り、支え続けてきた。己が闇に染まりながらも……。ゴッドイーターをしていても何もおかしくはあるまい？ いや、むしろゴッドイーターをしていることが自然だ。そうだろう？」

「馬鹿な……いや、しかしあの身のこなしは……そんなことが……たしかにそう考えればおかしくは……じゃああいつは……！」

「アイエエエ！ それ以上はいけない！ 消されるぞ！ フライアで殴られた後、もう一度腹に拳をぐりぐりされながら黙っているとわられたんだ！ あれは本気の日だった！」

「は、はッ……馬鹿馬鹿しい、ロミオじゃあるまいし、そんなもんいてたまるか」

「そう思うならそれでいい。ギル、君に頼みがある」「なんだ」

「彼を……ユウを支えてやってくれないか。彼はどうも、背負い込みすぎるところがある。フライアへ行くことになった時も、ギリギリまで何も言わなかったんだ。」

極東の皆が彼のことを心配している。彼はね、人のことを助けるあまり、自分のことが救えない人間なんだ。君もすぐにわかる。彼の近くにいればね」

「……あいつがどうかは、俺にはわからない。でも、背負い込んじゃう奴がどうなっちゃうかは、よくわかってるつもりだ。ああ、よく知ってるよ」

「うん。ならば安心だ。君にだけ明かすが、彼の極東での名前と、こちらでの名前は違うんだ。ニンジャネームだ、理解してやってくれ。ちなみに僕にも騎士道ネームがある」

「言えない事情ってやつか。あいつも『たんこぶ』持ちってことかよ」

「スネに矢を受けた、と言うらしいよ極東では。膝にだったかな？ まあいい。見たまえ、彼らの姿を。必死だ。必死になって、今を生き

ている。どうだい、美しいだろうか？」

「ふん……」

「僕には拳を交え合う彼らの姿が、光り輝いて見える。その裏に計り知れぬ苦悩をひた隠しにしているのも。君も、な」

「どいつもこいつも……」

「言えない事情という、それを汲んでやってほしい。それだけさ。なかに、悪いことにはならないよ。この僕が保障しよう！ この、エミールが！ 我が騎士道にかけて！」

「うるせえ。おおい、お前ら！ いつまでじゃれ合ってる！ 飯の時間だぞ！」

おいすー、とやる気の無い返事をしながら、もそもそと携帯ガスコンロの周りに集まるユウとジュリウス。

ユウは泥まみれの隊服を脱いで、黒いタンクトップ一枚に汗だくの格好。

ジュリウスは気品のあった私服を脱ぎ腰に巻きつけて縛り、白の肌着一枚に。頭には手ぬぐいを巻きつけて汗が目に入らないようにしていた。

決してフライアのジュリウスファンクラブの婦女子の面々には見せられぬ格好であった。

——ひーくらどっこいせ。ひどい目にあった、と。

「邪魔をするぞ」

「おう……おいユウ、不衛生だぞ。また何か拾ってきたのか」

——いやあ、割れたCDとかさ、拾ってきて繋げたりするのが趣味なんだよね。こればかりはやめらんなくて……。こ
う、昔の、平和だったころのこと想像できてるさ。

「お前も俺も、平和なんて知らないだろうが。趣味の悪い奴だ……ま
まったく」

「感傷に浸ることは嫌いじゃない。過去に囚われなければ、いい趣味
だと思うぞ」

——いやー、ほら見てよ、今日は大収穫だったんだよ。ほ
ら、のこじんー！

「のこじん……?」

「遺された神機、の略か?」

——そうそれそれ。いやほら、俺達の神機って結構派手にぶっ壊れて、部品吹っ飛ばしたりするじゃん? シールドとかよく欠けるしブレードは折れるしで。破損したパーツは基本放置だし。

「そういうえば、他のゴツドイーターの戦闘痕によく神機のパーツが転がってるな」

「回収班に任せないのか?」

——うん、本当はそうした方がいいんだろうけどね。でも回収されたらされたで、どうせ砕かれて何に使うかわかんない資材倉庫送りでしょ?

そう考えるとなんか、ほつとけなくてさ。余裕あるとき見かけたら拾うようにしてるんだ。中には本当に、持ち主が死んじゃった神機もあるからさ。いや、そっちの方が多いのかな……。

「まあ、そうだろうな……遺された神機、か……」

——それで俺、自分の神機の補修に使ってもらうことにしてるんだよね。感傷って言ったたら、うん、そうなんだろうなあ。

「供養のつもりか?」

——リサイクルだよ。エコでしょ? 何かのこじんの持ち主のパワーが宿って、強くなれるような気がするし。こう、持ち主から離れて放置されてる間に、オラクル細胞の不思議パワーで進化してて、複合スキルが宿ってたりとかしそうじゃん。

「複合スキルってなんだよ……神機で俺達のやれることが増えたり減ったりするの? ホラーだろ」

「いや、その発想は理解できる」

——ゲーム脳乙。

「よしわかった、表へ出る。訓練の続きをやるぞ」

——お? 今度は素手でやつか? ステゴロなら負けねえぞ、お?」

「やめろ馬鹿共。なんだお前達は、仲がいいのか悪いのか、セットになると馬鹿な方向に性格変わるぞ。自覚あるのか! まったく……」

今日の飯はシチューだ。さつさと食え！」

—— おー、ギルが作ったの？　じゃ今日は当たりだな。

「そうだな。俺やユウではそこそこ止まりだからな」

「褒めても何もでないぞ」

—— とかなんとか言っちゃって、ちよつと大きい目の具をよそつてくれるギル大好き。

「黙って食ってろ」

—— うめえうめえ。

「……ハシ、か。それ」

—— うん、マイ箸もってきてんの。見たことある？　極東以外じゃ箸文化ないからさ。

「上手いものだな。俺も今度ハシの使い方を練習しよう。フライアは移動拠点だ。極東に赴くこともあるだろう」

—— ま、こんぐらい極東人なら普通だって。でも、あー……またエミールみたいなのが起きるのか……気が重すぎる。何か変な勘違いしてくれたから助かったけどごによごによ。

「グリーンピースを縦に5個はさむの普通じゃないだろ……やはリニンジャなのか、こいつ」

「シチュー、美味しいな。ありがとう、ギル。体が温まる」

「ジュリウス、お前は顔を拭け、泥だらけで飯を食うな。タオルよこせ、ここが汚れて……ユウ！　勝手におかわりはするな！　物資は限られてるんだぞ、ったく！」

「ぐぬぬ、なんだかずるいぞう！　僕もまぜたまえ！　まぜたまえ！」

「お、おう」

「僕も語らい合いたいんだ！　そう、未来について！　我らゴツドイーターが如何様に闇の権化たるアラガミを根滅するか、その方法を話し合おうじゃないか！　僕を中心にして！」

全身を使つての猛アピール。

うへえ、という面倒臭さを前面に押し出した顔で、ユウがスプーンを口に加えて上下させつつ答えた。

——うんそれ無理。この話は終わり。はい、やめやめ。ギリッそっちの芋よそつてーお願い。

「作っておいてなんだが、この芋そんなに美味くないぞ」

——マヨマヨファンタジーすればだいたいいいけるやん？

「まあ、マヨネーズは強いからな」

「カレー粉が最強だな。ギル、おかわりを」

「どれくらいだ？」

「大盛りで」

「了解」

「ところでこの前ナナからおでんパンを貰ったんだが、中々いけるな。欲しいと言ったら驚かれたが。どうも俺がああいうジャンクフード系列のものは口にしないとわかれていたらしい。解せん」

「ナナか。あいつにも悪いことしたな。俺も差し出されたんだが、断ったら泣きそうになった。今度は食ってやるか……あの串をどうするか悩むな」

——フンフンフー、まよまよファンタジー、フーフフー
ンフーフー。

「やめたまえ！ 僕を無視するのはやめたまえ！」

——えー、だって実際無理じゃん？

「怖気づいたのか！ 見損なつたぞ、ユウ！ 君はそれでも極東にその人ありと謳われたかみか」

——カーツ！ ほんつとめんどくつせえなオメエはよお！
おらよく聞けよ、知ってるか？ 地球上の大気の成分、旧時代とほとんど変わってないんだよ。

窒素が79%に、酸素が21%……他も同じだ。ありえないだろ、世界中の樹木が20数年前の三割少しまで減少してるっていうのに。海の生態系だつてめつちやくちやだぞ。

俺たちが吸って吐いてるこれ、空気、酸素、その出処はどこかわかるか？

「まさか……アラガミだとかいのかい!？」

——正解。基礎教練で習つただろ。

エミールを指差してからユウは食事を再開する。

ジュリウスが引き継いで口を開いた。スプーンを教鞭に見立てピンと立てる。

「正確には自然環境に成り代わったオラクル細胞だな。これから先、オラクル細胞を除去できるような技術が開発されたとしても、アラガミを絶滅させることは出来ない……否、してはいけない。」

自然環境Ⅱオラクル細胞Ⅱアラガミの構図が成り立ってしまったているからだ。アラガミの発生要因は未だ解明には至っていないが、アラガミが「どこから来るか」は解っている。オラクル細胞の貯蔵庫である自然環境、すなわち地球そのものからだ。

故にアラガミの駆逐は、すなわち自然破壊に通じると言えよう。

ゴッドイーターが行う捕喰は、世界的にみればオラクル細胞の総量は変わらない。捕喰して使用し、自然に還元している。自然保護の観点からも、ゴッドイーターがやるしかない。そういうことだ」

「それは……それは、しかし……ぐぬう！」

「環境保全の観点からのゴッドイーター必要論か。初めて聞いたな」

——だから同じ理由で大量破壊兵器も使えない、と。汚染がどうかというよりも、環境破壊……破壊された環境の「補修作用」がヤバイ。

大量破壊兵器はそりやすごいさ。大量破壊兵器なんだから。アラガミだって問答無用で吹き飛ばしちゃうんだ。その環境もろともね。で、ぶっ壊された後の自然がオラクルの「スポット」になるんだな。

穴がぽんと開いて、そこにオラクル細胞が一齐にわつと流入するんだ。逆もあるな。そうなると当然、周囲のオラクル総量が激変することになる。濃度がさ、変わるんだ。

とにかくこれがヤバイ。もうどうにもならないくらい不味い。マヨファンした芋とは大違いだ。

「どう不味いというのだね？」

——オラクル総量が増減するってことは、アラガミの分布も変わるってこと。破壊兵器を使うと、アラガミの生態が乱れるんだ

よ。

ここがオラクル細胞の本領発揮だな。通常の生物なら減少するか、異常固体になって短命化するかのどちらかになる。でもアラガミはそんなの関係ないだろ。あいつらは進化するからな。

旧人類最後の反抗、聞いたことくらいあるだろ？ 最後の足掻きなんて言ってた人もいたけど、アラガミの群れを核融合炉で吹っ飛ばしたアレさ。

衝撃と放射能はアラガミが「喰った」んだけど、それで周辺のオラクルのバランスが崩れたらしいんだ。

あの後かなりの範囲でアラガミの分布がめちゃくちゃになるわ、出現数がやたら増えるわ、細胞の結合強度が跳ね上がって異様に強い固体がデフォになるわで大変だったらしいぜ。

「当時の記録によれば、それ以前に現れてたボルグ・カムランは、盾を旧型神機で一撃で壊せるくらいには弱かったらしい。だが核爆発を後にして強化され、通常兵器では歯が立たなくなったという。細胞の結合が強化された顕著な例だ」

——強い固体が現れたら、より強い固体も増えていく。そのせいでロシアはめちゃくちゃになって、人の生活圏に禁機種が平気で出入りするようになったんだと。

アリサ……あー、俺の元同僚もその被害者で、あの当時はそれこそ極東かってくらいアラガミ被害が多発してたらしい。

「馬鹿な……そんなことが……」

「やっぱり極東はおかしい。ハルさんもよく考えたらおかしかった……どうなってるんだ極東」

——「たまらんでしょ。大量破壊兵器使ったら『極東化』するかもしれないとか。」

一時的に掃除できるからって、考えなしに大量破壊兵器なんて使ってたら、それこそ人類は絶滅しちゃうじゃん。ゴッドイーターがやるしかないでしょ。『とてもクリーン』なアラガミ駆除装置がさ。

「うむむ、同じ理由で神機兵も必要ということか……。すまない、弱気になっていたのは僕の方だったようだ。アラガミの根絶、対

抗策を論じることで、ゴッドイーターの価値を再確認したかったのだ、僕は。

どうも最近よく見かける神機兵のCMに、皆がゴッドイーターはもはや用済みになるのかと不安になってしまっていてな。僕も影響されてしまっていたらしい。このエミール、一生の不覚！ くつ……より一層、騎士道に励まねば！」

——お前さん一生の不覚多そうだなあ。まあ、住み分けが行われるだろうしいんじゃない？

どっちにしろ補填戦力の投入しなきゃいけないわけで、使える新人なんてそんな簡単に見つからないし育たないし。機械化で楽できるんならそれに越したことはないでしょ。人死になんて少ない方がいいに決まってる。

「まったくだな。神機兵はゴッドイーターにとっても待ち焦がれる、人類の希望となり得る発明だ。当然旧態以前からのゴッドイーターからは不満が出るだろうが」

「待て、俺たちブラッドは教導……旧世代とこれから先の世代の神機使い達を教導することが最終目的なんだろう？ 神機兵が増えればゴッドイーターが減る。」

俺たちの存在意義も揺らぐんじゃないか？ エミールが言っていたことは何も間違ったことじゃないだろう」

——そこんところがゴッドイーターの抱えてる“歪み”だよなあ。

「歪みとな？」

「人類の生存圏拡大は急務だ。これは絶対に必要なことだが……」

「ああ、なるほどな。そういうことか」

「むむむ、僕にわかるように教えてくれないかね」

——何か俺、説明役になってない？ いいけど……ほら、今の戦線つてさ、ゴッドイーターによって保たれてるでしょ？ 「そうだが、そのどこに歪みがあると？」

——限りある自然の“リソース”を食いつぶして生き延びてるのが今の人類だ。だから、戦線を拡げないとやってけないん

だ。新しい資源を見つけないとな。

戦線を押し上げること。それは「一部のエース級」のゴッドイーターにしかできないことだ。最前線だ。で、そいつらが広げた戦線を保持しないとイケなくなるわけだ。

そこに中堅以下のゴッドイーターを「大量投入」する。それで、大量に死ぬ。で、ゴッドイーターの総量が減って、結果ジリ貧になると。この負の連鎖が始まっている。

つまり、戦線の拡大しなきゃいけない、でも広げた戦線を保つことが出来ない……ってこと。歪んでるよな。どうにもならないけど。

「それを解決するのが神機兵だ。戦線拡大ではなく、維持のための戦力を期待され開発された。

そして俺たちブラッドが、ゴッドイーターの最前線に立ち指揮を執る。ユウの言う通り、住み分けが行われるんだ。

いずれ、ゴッドイーターとは星の開拓者としてその名の意味を変えることとなるだろう」

そうか、とエミールが静かに呟いた。

防護テントにつるされたランタンを見上げている。

どこか、遠い……北極星を見るかのような瞳だった。

「ゴッドイーターの戦いは、ただの戦いではない……。この絶望の世に於いて、神機使いは、人々の希望の依り代だ。正義が勝つから民は明日を信じ、正義が負けぬから皆、前を向いて生きていける。

故に僕は……騎士は、絶対に倒れるわけにはいかないんだ」それは戦士の誓いだった。

ギルバートが、口に入れようとしていたスプーンを、しかし啜えられずに皿へと戻した。

噛み締めたのはエミールの言葉。

胸焼けがしそうだと吐かれた皮肉は、しかし穏やかに緩む口元で台無しになっていた。

——立派だな。

「ああ、立派だ。きつとゴッドイーターのあるべき姿とは、彼のことを

言うのだろうか」

それがエミールの本心からの言葉であることは、疑いようもない。ゴツドイーターは、ゴツドイーターの誓いを否定しない。

そこに経験の差、実力の差など存在しない。

ただ、深い憧憬がそこにあつた。
「星の開拓者か……素晴らしい！　そうか、我々ゴツドイーターは須らく目指さねばならんのだな。あの空に燦然と輝く北極星を！」
「うるさいのが玉に瑕だな」

神機兵が正式投入されることになつたとしても、中堅以下のゴツドイーターの仕事が無くなるわけもない。遊ばせておける人員などいないのだ。

機械化兵の利点はその数であると言えよう。しかし数の利をアラガミは覆す。ここでエース級GEの力が必要とされるのである。

よつて、今後GEの在り方は、「研修期間」を長くとることで人材育成と発掘を同時に行うように変容していくだろう。

現在のGEの教練はお世辞にも満足であるものとは言えない。正味、「インスタント」ソルジャーである。

十二分に教育を施せば、中堅と呼ばれるGEの実力は誰にでも身に付けることが可能なはずだ。GEの秘めるポテンシャルは並々ならぬものがある。

途中で立ち枯れとなつたらしいが、ゴツドイーターを育成する学園を各地に建設するという計画もあつたらしい。

だが在籍生徒が行方不明となつた事件を発端にして、閉鎖されてしまった。

殉職した神機使いを無断で土葬にしていたり、非適合者の適合係数を人為的に跳ね上げる薬が作成されていたり、その副作用が寿命を縮めることであつたりと、フェンリル本社の陰謀を臭わせるものであつた。

カノンの妹もその学園生であり、ユウの教え子の一人であつた。

姉に似ずしつかりとしていて、瞬間記憶という他に類を見ない能力の持ち主だつた彼女。

ゴッドイーター候補正としてユウ指導の教練へやって来たのが出会いであつた。風の噂では独り立ちし立派にやっているらしい。姉に似ず。

彼女の友人達はコウタの教練へ参加した。極東を離れた今では懐かしい思い出である。

ユウが受け持った生徒が、台場コトミ以外全て死亡したことも。

コトミと共に、スコップでクアドリガのキャタピラに挽肉にされた生徒達を「より分けた」ことも。

——でも技術って裏切るんだよね。道具だつて大事にしてやらないとすぐそっぽ向くし。安全性はわかんないぞ。

「それについては安心していい。基礎設計から制御機構はレア博士が主導となつて開発が進められている。安全性が確保されるまで世には出ないさ」

——お前それ、オラクル技術つて諸刃の剣つていうか、安全性つて言葉の対極にあるようなもんじゃん。

やだよ俺、制御失敗して中の人ミンチになりましたーとか。オラクル技術の先駆けつてほしいぐちよぐちよになるのが定番だし。

安全性確保つて、「確保されるまで」はどうなのよ。胎児に因子ぶち込む実験がどうなつたか知ってる？ 聞きたい？

「いや、食事中はやめておく」

——ほら、言わんこつちやない。無人制御もまた別の博士が研究してるんだっけ。あれもいまいち不安つていうか。大事な場面ですくじめるような気がしてならないんだけど。

神機兵前線に連れてつたらいきなり暴走し始めて襲い掛かってきたーとか。制御失敗して暴走して野生化してからの新種のアラガミになつちやいましたーとか。

批判するつもりはないけど、何かあつた時に尻拭いするのつて、たぶん俺達になるんでしょ？ オラクルに絶対なんてないんだし、ちよつとくらいは想定しとかないと。

「オラクル細胞の制御はOSやAIで行われる訳ではないからな……物理的な破損が原因で、何か不具合が起きるかもしれない

ない。それも、破滅的な」

——そこらへんがレア博士の担当なんですよ？ 聞いたところによると、だいぶ昔から博士の実家が主体になってる研究だとか。

ずっと自分達が推し進めてきた家業だから、とか悲願だから、とかそういうのはさ、油断でしょ。

いや、レア博士の腕を疑うわけじゃないけどさ……でも何ていうか、あの人なんか残念な臭いがするっていうか、騙されて知らないうちに神機兵の制御機構、魔改造とかされたりしそうじゃん？

設計段階から「いじりやすく」操作されてたりして。

「大丈夫だ……大丈夫、のはずだ。うん……」

——大丈夫！ レア博士の設計だよ！ って言える？

「レア博士だからな……強く出られたら、折れてしまうかもしれない……」

——やっぱあの人そんな扱いなのか。悪女系なエロイねーちゃんだと思ってたけど、なんだかなあ。

うなだれるジュリウスに、レア博士のおおよその評価を察したユウであった。

お前の人物評もたいがいじゃないか、とはギルバートは言わなかった。

ゴッドイーターの中では「極東上がり」が一種のステータスとなっている。

一応新人という扱いであっても、そのステータスはある種の畏怖を持ってして受け入れられていた。

地獄を見てきた男、として。

出撃前にギルバートはユウの訓練記録を見たが、あれは誤記とばかり思っていた。

正直なところ、実戦よりもつらいトレーニングメニューだった。

フライアの科学班が面白がって上限を上げ続けたのだろう。それを、ユウは鼻歌混じりにこなしていたとか。

極東人って怖い。

フライアの意識が一つになりつつある。

—— なー、電子ボードゲームあるんだけど、やる？

「ほう？ 何というゲームなんだ？」

「嬉しそうだなジュリウス」

「いや、そんなことは……」

「ゲームか……このエミール、例えゲームであつても手は抜かん！ さあ、かかってくるがいい！」

—— ドガポンっていうやつ。俺もやったことないんだけどさ、なんでも人生ゲームに似てるとかなんとか。

「人生ゲームか！ 僕の得意なゲームだな！ ふふふ、いつも気づいたら富豪になっているのだ。これは天運が導いてくれているに違いない！」

「まあ、時間もあるし少しくらいならいいか。おう、ゲーム機貸してくれ」

「はは……あ、いや、失敬」

「楽しけりや笑つてればいい。気にすることじゃないさ」

「そうか、そうだな……そうしよう。良い事が続いているからかな。また新しく隊員が増えるのだと連絡があつたんだ」

「ああ、そういえば俺と同時期にもう一人来る予定だったか。アラガミの妨害でインフラが断絶して、到着が遅れていると聞いたが」

「もうすぐ到着するらしい。ラケル博士からは、どんな人員かは着いてからのお楽しみだと、情報をふせられていてな。ああ、こういうのも、いいな。うん、楽しみだ」

「面倒な奴じゃなければいいがな」

「楽しみだ、うん、だめだな、自然と笑つてしまうな。ふふ……なあ、ギル、お前も楽しければ笑つてもいいんだぞ」

「ふん……お前達の頭が愉快で笑いそうだよ」

—— よーし、全員電源は入れたなー。それじゃ、ゲームスタートだ！

ゴッドイーター達の夜が更けていく。

—— テメエーツ！ デスコンボやめろつつつたろうがこ

んちきしょんんん！

「クサマガア！ クサマガムンナオオオオ！」

「貴様何をするだアーツ！ 許さんんんん！」

「歯喰いしばれ！ 修正してやるうああああ！」

ゴツドイーター達の夜は、まだこれからだ。

□ ■ □

翌日のことである。

ロミオとナナと合流し、帰還することとなった4人。

帰還準備中、作戦エリア内にデータに無いアラガミと遭遇。交戦する。

巨大な狼を模した新種だった。

体躯はガラム神族に酷似しているが、決定的に異なる点があった。

エミールの神機が突然に停止する。感応波による動作不良……

感応種との交戦中に頻繁に発生する現象である。

新種のアラガミは、感応種だった。

動きの鈍いエミールを獲物と定めた新種は、狼もかくや、奔る焔のようにして踊りかかる。

あわやエミール死す、と思われた瞬間のことである。

ユウ、血の力——覚醒。

ブラッドアーツ、開眼。

ユウのブラッドアーツは新種アラガミの左眼球を抉り抜き、これを撤退させる。

後に『マルドゥーク』と名付けられる、因縁のアラガミとの邂逅であつた——。

□ ■ □

鏡を見てリボンを付ける時、いつも不思議に思うことがある。

当時の神機兵は現在よりもずっと安全性が確保されていない、危険なものだった。

今でさえ、ゴッドイーターですらその搭乗には命の危険が伴う。

ゴッドイーターでも何でもない子供が、旧型の神機兵に乗るということは、すなわち死を意味するものだった。

最初に、部屋の中には自分を含めて10人の子供達がいた。

その頃の自分はもう笑えなくなっていて、人とどう関わればよいのか、まるで解らぬような有様だった。

有難かったのが、自分以外の子供達もまた、同じようなものであったこと。

お互いに不干渉を貫いていて……否、そこにいたたった一人だけが、皆と仲良くなろうと奔走していた。

いつもニコニコとしていて、力なく部屋の隅に座り込む子供達一人一人の手を握りながら、返答がなくとも諦めずに話しかけてきた、あの女の子。

淡い緑のリボンと、フリルが多用された服を好んで着ていた。

一人、また一人と子供たちが部屋から消えていく度に、彼女だけがその大きな瞳一杯に涙を浮かべていた。

彼女とてわかっていたのだろう。消えてしまった彼等が、二度とこの部屋に戻ってくることはないのだと。

部屋に待機を命じられた子供達も、ただ待ち時間を過ごすだけではなかった。

身体が欠損するレベルの軍事訓練をそこで全員に施されていた。訓練だけで数人が死亡した程の過酷さだった。

彼女が一番才能があったのだろう。目立った負傷もなく、その他の子供たちに気配りをするほどの余裕があり……だから神機兵の搭乗者として選ばれてしまったのだろうか。

自分は情けないことに、初期段階の訓練でドロップアウト。ベッド

の上で治療を受け、訓練で失敗し負傷するの繰り返しを続けていた。
「テスト」用としては妥当な人選であったと言える。

おそらく、あの部屋に集められた子供達のほとんどが本命ではなかったのだろう。

子供の数が半分を切ったあたりから捨て置かれていたのは、幸運であつたか、不運であつたか。

最後は自分一人になつてしまった。

彼女が廃棄されるはずだった自分をかばい、部屋に留めてくれたことを知つたのは、ずっと後のことだった。

神機兵のテスト搭乗は、最後とするよう、交渉をしていたことも。

なぜ彼女は、こんな何も価値の無い自分を、生かそうとしてくれたのだろうか。

あの子の名前を、顔を、声を、手の暖かさをもう、忘れてしまった程の恩知らずだというのに。

ああ、でも、あの子はずっと笑っていた、という、記号だけが頭にくびりついて離れない。

「本日付けで極地化技術開発局所属となりました、『シエル・アランソン』と申します」

何も感じない。

何も、もう何も、感じない――。

「ジュリウス隊長と同じく、児童養護施設マグノリアIIコンパスにて、ラケル先生の薫陶を賜りました。

基本戦闘術に特化した訓練を受けてまいりましたので、今後は戦術戦略の研究に勤しみたいと思います――以上です」

なぜあの子は、明日神機兵に乗せられて死ぬとわかっていながら、笑みを絶やすことがなかったのか。



——暑苦しい奴が極東に帰ったと思つたら、今度はツンドラがやってきましたよ、と。

それにしてもでかいな……あーでも手をだしちゃつたらなー、16歳だしなー、犯罪だよなー。その歳での胸部装甲、うん、ムーブメント。

「ユウ」

——なんだよ、ジュリウス。

「シエルだった」

——はあ？ ああ、同じマグノリアなんとか出身だっけ。なに、面識あるの？

「頼みがある」

——は、はあ？ ちよつ、何、その手は……やめろ肩から手を離せエ！

「副隊長、やってくれるな？」

——嫌だし！ なんなん!?

「俺はもう、限界かもしれない」

——俺の方が限界だわこの野郎！ これ以上はロミオがやばい……あ、ちよつ、待てこらジュリウスウウウウウウ！

ゴッドイーター：20 噛 GE 2

あなたは今、フェンリル本社のデータベースにアクセスしようとしています。

閲覧アクセスキーを提示してください。

セキュリティクリアランス確認………3レベルを確認しました。

ようこそ、管理職員様。

指定ファイルを開示いたします。

アクセスしています………アクセスしています………。

警告1：以下のファイルは最高機密に分類されます。

警告2：このファイルにアクセスしている無許可の職員は情報ミームにより精査され、権限を剥奪されます。

警告3：いかなる理由、いかなる地位、いかなる存在であっても、当ファイルの持ち出しおよび他者への開示は権限の剥奪事由となります。

警告4：安全装置の解除確認がされぬ場合、当ファイルの閲覧に際して一切の生命の保証はされません。

警告5：固体名「データ編集済」は以降、当ファイルに指定されたロットナンバーで呼称するようにしてください。

警告6：上記の警告全てが遂行されていない場合、情報ミームにより精査され、閲覧者に即座に適切な処分が下されます。

ファイルナンバー：■■■■

ロットナンバー：「データ編集済」以下Ω（オメガ）

説明：Ωは一般的な人類種ホモサピエンスの成人男性です。身体的特徴は極東支部における日本人の平均値以内にあります。

発見経緯は極東支部にてゴッドイーターとして登録されたことによりです。現時点の登録は移動拠点フライアにあります。（任務登録名「データ編集済」へと変更。ドクター榊によるもの）

限定下の状況に遭遇した際、Ωはあらゆる事象を捻じ曲げ操作し、あるいは可能性すらを喚起させ、自らの保全を行います。

平時では基本的に超人的技能として発現しています。

Ω自身が存在ミームとして機能しており、小規模の認識災害を引き起こします。その存在を知覚した瞬間、可能性の喚起現象に巻き込まれ、基点とさせられる恐れがあります。

また、Ωは自身の特異性を知覚することができません。ほとんどの場合、環境の変化、事象の捻じ曲げは偶然であるとしか感知できません。

あらゆる機器による観測も、偶然であるという証明の裏付けにしかありません。

Ωの存在目的は世界の「データ編集済」であり、「データ編集済」のためにあらゆる行動が帰結します。

事件記録： ■■■—■■■

フェンリル本部管理権限において、Ωの複製を育成せよとの要請が行われました。

帰納法的アプローチにより、Ωの身体機能を訓練により身に付けさせ「データ編集済」

あらゆる試みの結果、喚起能力は複製することは不可能であると結論付けられました。

身体機能の複製においては一定の結果を見出すことができました。また、副産物として、Ωの固有特性であったバレットエディットの体系化イメージを転写することに成功しました。

バレットエディターは脳内イメージとして、下部に向かう樹形図的チャートによって表せられます。

高度なバレットエディットイメージと身体能力を併せ持つ被験者を、Ω—2と呼称します。

Ω—2の後期ロットについては、アーサソール及び各地のフェンリル直轄支部へと派遣し、喚起能力の発現を観察します。

事件記録： ■■■—■■■

「データ編集済」

欧州フェンリル直轄区におけるΩへの精神的加圧実験は、最終的に研究職員■■■名とアーサソール隊員■■■名の損失を招く結果となり

ました。

イギリス支部のゴッドイーターによるクーデターとして、カバーストリーを作成。ミームの拡散を阻止しました。

Ωは多数の職員および隊員を殺害後、激しく苦悩する様子を見せました。その後「データ編集済」不特定の周期でオラクルパルスを検出。精神的加圧を続けた結果、Ωの行動理念が積極的攻勢へとシフトしました。

以降、本部監察官の許可なしにΩに対するあらゆる心理実験を禁じます。

なお、戦闘データの大半は消失しましたが、戦闘痕より発見されたΩの遺された神機を分析した所、アサソール神機由来のオラクル細胞が検出されました。

神機による神機の捕喰が行われたと推察されます。これにより神機に意思が宿る現象が発生したかは不明です。

極東支部により破棄処分が行われたΩの第二世代神機は偽装であると確認済。回収班の派遣は却下されました。

※オラクルパルス放出中、多元世界との交信の可能性有。可能性喚起を行ったと思われる。これによる現事象世界への影響は不明。

※他存在の可能性の締結が、Ωの可能性の喚起エネルギーであると考えられる。詳細不明。実験申請中。

補遺1：極東支部周辺地域にて、欧州で記録されたオラクルパルスを確認。可能性の喚起現象が発生したと考えられる。

補遺2：ドクター榊による存在ミーム流布、神狩人（未確認）が確認されました。ドクター榊の適切な処分を申請します。

メモ1：可能性の喚起だって？ ああ、簡単に言えばトライ&エラー、ロード&コンテンツニューさ。ゲームのあれだよ。やったことないのか？

メモ2：アサソールがどうなったか知りたいの？ アツアツのトーストに塗りたいくらいだったストロベリージャム。執拗にすり潰されていたわ。

メモ3：ドクター榊がなぜ野放しにされてるのかって、そりゃ優秀

すぎるからだろ。核弾頭の管理してくれるんだから、ありがたいね。ろくな死に方はできんだろうぜ、ありや。

事件記録：現在進行中

+ 閲覧にはセキュリティクリアランス4レベル以上の承認が必要です。

— 承認

「データ編集済」

「データ編集済」

「データ編集済」

ファイア活動範囲にて、Ωのオラクルパルスを測定しました。血の力に覚醒したと思われます。

これにより仮定されていた可能性喚起能力、「データ編集済」が証明されました。

また、α（別ファイル参照・固体名「データ編集済」）の血の力と直接接触した際、αの世界受容能力に影響を受け「データ編集済」世界「データ編集済」能力の発露が顕著となり「データ編集済」

Ωはαの対存在であると考えられます。

シナリオGE：3の発動を要請「データ編集済」

「データ削除」

「データ削除」

「データ削除」

「データ削除」

不正規のアクセスキーが確認されました。

重大な規約違反が発生しました。

情報ミーム精査により、当ファイルを遮断します。

ただちに閲覧を停止してください。

ただちに閲覧を停止してください。

ただちに閲覧を停止してください。

ただちに閲覧を停止してください。

ただちに閲覧を停止してください。

適切な処分を開始します。

致死性ミーム散k a a a i s y y y e s s s —

「あら、バレてしまいましたか……。ここまでのようですね。しかし、なるほど、そういうことでしたか。極東からの推薦人員、どのような人材かと思えば……やはり裏がありましたか。」

ふふ、ふふふ、ふふうふうフフフフ……。やっつけてくれましたね、榊博士。

存在ミーム……可能性の喚起能力。

『喚起の血の力』を持つ者……最大の不確定要素。

いいでしょう、彼が人の極致であるというのなら、愛しいあの子はそれすらも受け入れ、取り込み、超えていく。

あらゆる可能性の締結である、終末捕食。

私の宿願、星の願い、人の時代の終焉、生命の……可能性の再分配。

全てを終わらせ、そしてもういちど始めましょう。

さあ、残さずに、よく噛んで食べなさい——」

ファイルの閲覧を終了します。

おつかれさまでした、管理職員様。

□ ■ □

鉛のような目をしている。

それが、敬礼をする『シエル・アランソン』という少女へと感じた、ユウの第一印象であった。

「此処」を見ているようで、「何処」もみていない。そんな目だ。

極東支部外部居住区の最外周部で、この目をしている者を何人も見てきた。

アラガミに子供を食われた親、十数人と輪姦された女、薬の買えなくなつた独居老人、騙されて借金をこさえた青年……最近では、「赤い雨」にうたれた者たち。

皆総じて同じ、輝きを発さない、濁つた泥のような目をしていて。諦めた者特有の、輝きの失せた瞳だった。

きつと、かつての自分も、同じ瞳の色をして――。

「へ？ 血の力がわからない？」

ぐい、と近づくとナナの近さに戸惑いながら、ユウはぎこちなく頷く。相変わらずナナの距離感には慣れない。

「いやいや、ブラッドアーツは使えてるんだろ？ そもそもブラッドアーツ自体、血の力が戦闘用の技になつたやつなんだしさ」

「ふえ？」

「ラケル先生がこのあいだ言つてたろ？ ブラッドアーツは神機の技で、同じ神機だったら同じ技が使えるけど、血の力はその人特有の能力だつて」

「うーん？ そう言われれば聞いた気も……？」

――曖昧だよな、そこらへん。ブラッドアーツって言つても、オラクルをこう、ぶわーっと放出してるだけじゃん。第二世代使つてた時もなんかそういう経験あつたよ。

「あ、そっか、ユウは機種変したんだっけ。どっかの紫ゴリラと違って多芸だよな。全部の武器使いちゃうんだからさ」

――器用貧乏感がすごいけどね。使いこなすっていうにはちよつとなあ。ほら、特にあれ、最近実装された大鎌。あれ難しいんだ。

「ぐわーって伸びて、がりがりーって削るやつだよな？ 私のハンマーに似てるね。振るのが重たいとことか」

――咬刃ね。あのぐわーって伸びるやつ。

「こーじん」

「こーじん」

――咬刃展開すると攻撃範囲がやたら広くなって便利なんだけど、ぶん回すと遠心力で動けなくなるんだよ。足が止まって、

そこを狙い打ちにされると。刃先に当てなきや有効打にはならないし。扱いが難しいよ。

「とか何とか言っちゃって、ちやっかり鎌のブラッドアーツも使えるようになってんじやん。」

いや、マジで武器使うの何かコツとかないの？ 俺、バスター以外だともしっくりこなくてさ。神機自体が拒絶っていうか、嫌がるっていうか」

——慣れと違う？ いいじやん、全武器全種コンプリートしろとか言つてこないんだから………また今回もだよ。

ミツシヨンジルトの確認中にさ、ブラッドアーツの覚醒率とかがぼーんと頭の中に表示されるんだよ。ご存知の通り神機様のお告げだよ。おう1%も上がってないぞあくしろよ、みたいな。

「お、おう………覚醒、率？ パーセント？」

——もうぶんぶん丸だよ。俺もう思考ストップぶんぶん丸だよ。ハンマーとかショットとかスピアとかとりあえず通常連打で振り回しとけみたいな。アホみたいに振り回しとけばいいんちゃうかみたいな。それで覚醒率上げたらいいんちゃうかみたいな。

「いや、何に凹んでるのかわかんないけど、ブラッドアーツってそういう数値化とかって出来ないんじや。ぶんぶん丸でお前………」

——どうせまた強B Aとか弱B Aとか分類させられて縛りプレイが開始されるんだぜ………。スピアのチャージャー系B Aに神機様ビンビン反応してるんだけどそれはどっちの意味なの？ 使わせたいの使っちゃだめなのどっちなの？

「なんか、闇が深いな………」

「ねね、第二世代のときーって、ブラッドだけのものじゃないのブラッドアーツって？ 名前だつてほら、ブラッドだし」

——血の力が先かブラッドアーツが先か………こう、第二世代機は穴が空いてないって感じだったかなあ。俺の印象だと。パスが通ってないっていうか。

前の世代の神機でも、もしかしたら誰かが外からこう、パスを通してやればブラッドアーツは使えそうな気がするんだけど。感応現象

の攻撃転用な訳で。血の力はまあ、別物として。

「血の力はブラッド……私達第三世代だけのものってことで、ブラッドアーツはいずれ誰もが使えるようになるかも、ってこと？」
「あ、ピンと来た。そのための教導って奴じゃね？俺たちブラッドは、いずれ全ゴッドイーターを教導する存在となるんだって、ラケル先生が言ってたやつ」

——ジュリウスの血の力なんて完全それ向きだよな。統制だっけ。

「ああー、バビューンって光ってちよつとのあいだ強くなるやつね！」
「あれすげーよな。いきなりフルバーストになれるんだもん」

——ジュリウスのは見た目にわかりやすい変化が起きるけど、俺のはそうじゃないらしいんだよね。使ってはいるらしいんだけど。

「ユウの血の力は発動してるのに目立った変化がないってこと？」

——たぶん。なんか普通にしてもたまにオラクルの波が検出されるところかで、おそらく常時発動型だって言われたけど、効果はさっぱり。地味すぎてなんかね。がっかりよほんと。

「えーと……これから、じゃん？」

「そーそー！ そのうちなんかわかるって！ たぶん！ ね？ ハピハピー」

——アバドンのぬいぐるみで頭もしましやするの止めてくださいませんかねえ？

「まま、そんなことよりも、ね？」

——そっちが話題ふってきたのにそんなこととか言われただござる。

「シエルちゃんのことなんだけど」

「あー、んー、なんか堅そうだったよな、あの子。戦術がなんとかとか」「その……ね？ お願いユウ！ 仲良くしたげて！」

——はっはっは、この前も同じこと言ったね君？ ジュリウスに頼んで、どうぞ。

「ジュリウスは特別任務があるって、いなくなっちゃって。忙しそう

にしてたからこんなこと頼めないよ」

「特務前のジュリウスってピリピリしてて話しかけらんないよな。すっげー難しいこととか考えてるんだろうなって、もう見ただけわかるもん。そりゃ話しかけられないって」

——あいつずっと部屋に閉じこもって箱庭ゲーしてんだけど……癒されたいとか何とかぶつぶつ言いながら。難しいことって、攻められない設備の配置がとかしか考えてねーよ絶対……。

過去にジュリウスとシエルには面識があつたらしい。

また、児童養護施設マグノリアIIコンパスにて、である。

シエルの自己紹介後にユウがジュリウスに呼び止められ、説明を聞いたものをまとめると、どうもジュリウスが「やらかし」で、決別していたそうだ。

幼さゆえの残酷さで切り刻んでしまったとかなんとか。

ジュリウスが酷く憔悴していたため詳細まではわからなかったが、概要は把握した。

おそらくは、ジュリウスのような才能ある者の放った一言が、シエルのコンプレックスを抉り取ったのだろう。

彼女もまた、ナナやロミオのように、戦闘訓練を幼少期から受けてきたのであろう。一挙手一投足を見れば解る。体幹が全くブレない、何らかの戦闘術を学んだ者の動きを自然としていた。

「体に染み付いた動き」から推察するに、努力型だ。才能型はそれを外部に悟られないようにするからである。体に染み付ける必要が無いからだ。むしろ、染み付いているそれを抜き取り隠蔽する努力をする。

さらに言えば、シエルの動きは洗練されたものだった。無駄なく美しくあるよう加工された挙動……「軍事訓練」によつて身についた動きだ。

軍事訓練は通常の戦闘訓練とは一線を画するものである。戦うための技術だけを教え込むのではない。軍事訓練とは、戦術思考、補給線、兵器運用法諸々、知識面での要素にこそ重きを置いたものだ。

戦闘技術を含む、かくあるべしという “ふるまい” …… 理想像と言ってもいい。人間が知性によって編み出した最高効率の行動理論。それが軍事訓練には詰め込まれている。

シエルはその体現者であった。
良く言えば、ロボット。悪く言えば、ぜんまい仕掛けの “カタカタ玩具”。

人間性を自ら捨てた存在。それはユウが最も嫌うべくところの人間である。だが、ユウは彼女に嫌悪感を抱くことができなかった。

それは彼女の見た目にあった。

軍人然とした鋼の無機物が、綺麗で可愛らしい服を着せられ飾り立てられている。歪さを感じさせるに十分なもの。

命令されて着込んだものではないだろう。間違いなく、彼女的意思によるファツションだ。

そう、ファツションである。そこには実に人間味が溢れている。

だが、それもまた歪さが含まれたものだ。

あの服装は、彼女が好んでのものではないような気がする。どうも違和感を感じざるをえない。

お堅い印象であるというのに、あの可愛らしい服装。人間性を捨て去り、しかし、彼女的意思による選択という、矛盾がある。

カタブツに見えて実は可愛いものが好きでした、とはまるで思えない。

フリルが嫌味なく、しかししつかりとあしらわれたブラウス。細い首元にきゅつと結ばれたリボンタイ。胴をしつかりと締め、女性らしさを強調する黒のコルセット。濃緑のスカートには、これもフリルがあしらわれている。

そして、鋼を思わせる鈍い光沢のある銀髪…… 肩の中ごろにまで達するセミロングだろう、それを緑のリボンで “メビウスリング” にしている。

一見すれば夢見がちな少女趣味を前面に押し出したような格好である。

その夢を冷たく砕く、シヨルダーホルスター。背中クロスするタ

イプのガンベルトだ。中には大型の拳銃が収められている。

十二分に手入れされているように見受けられるそれは、実弾が装填されているであろうことを容易に想像させる。あの口径ならば、ゴツドイーター相手であっても致命打となるのは間違いない。

そして、スカート裾から見え隠れする、ナイフホルスター。太股のまばゆい白に映える黒革のベルトは、明らかに使い込まれた光沢を放っている。

あのナイフは、拳銃は、*“使われてきた”*ものだ。それも、ホルスターの磨耗具合からみて、人間相手に。あまり考えたくはないことだ。

しかし、あの服装にこの装備、機能的ではない。

何故あんなフリフリとした少女趣味の服装に、これ見よがしに大型拳銃とナイフとを装備しているのか。

正直なところ、理解に苦しむ。

苦しむ、が。

——ああいうのもアリだな。コルセットに強調された胸……その側にそっと飾り立てられる大型拳銃。

母性の象徴たる大型バルジ愛宕型に、人の命を容易く奪う冷たい鉄の塊……おお、バーニングムーブメント！

「アハハ、というわけでよろしくお願ひします！　*“副隊長”*！」

——おま、それ、やめ。

「はは、がんばれよ副隊長！　はは、ははは……」

「あつ……やば」

「副隊長かあ……まあ、しょうがないよなあ。いきなり血の力に目覚めちゃうんだもんなあ。へへ、俺なんか……俺なんか」
「もしかして、やっちゃった？」

——もしかせずにやっちゃってるよ。あのさ、ロミオ。

「なんすか副隊長？　あ、敬語使わなきゃだめっすよね。さっせん。敬礼もしたほうがいいっすか？」

——これが最初で最後だぞ……神狩人、語録！

「うえっ!?　え、何?」

——ゴツドイーターに天地無し。地位はまやかし。ただただ、その責務を全うすべし……だろ？ たまには榊さんも良い事を書く。なあ、ロミオ、お前がすごい奴だつてこと俺は知ってる。だからさ、卑屈になる必要なんてないんだ。

「ユウ、いや、ちよつとマジな顔になるなつて。冗談だつて。やだなー、そんなマジになんなくても」

——ロミオ。俺はわかっている。

「だから冗談だつての」

——わかっている。わかっているさ、ロミオ。

これはおだてて言っているのではない。本心である。

ロミオはこう見えても一年の先駆けがある。

フライアという移動拠点、ブラッド隊に所属して、一年の経験を積んできたのだ。

ゴツドイーターにとつてそれがどれだけの重さを持つか。

極東の激しさに身を浸し続けたユウにとつて、それを知らぬことはありえない。

そして本心からの言葉は、届くものである。

——なあロミオ、だからさ、そんな棘のあるような事言うなよ。寂しいじゃんか。頼むよ、な？

「……ちえ。俺が悪かつたよ。なんか凹んだ。へへ、また後で、飯でもおごらせてくれよ！ んじゃーな！」

ぼつが悪かつたのだろう、手を振って席を立つロミオ。

ゴツドイーターは実力社会だ。だが、解つてはいても、認めがたいものがある。

これを人の業として愚かだと断じることが出来ない。

若さからくる青さや人間臭さ。面倒だとはぼやいていても、嫌いじゃないのはやはり、自分にもそれがあるからだだろう。

ナナがごめんね、と片手で礼をし、チラと奥を見やる。ユウに示すように。

あまり悪く思っていないようだった。もしかしたら、意図的にロミオの劣等感をあおり、ユウにケアの糸口を掴ませようとしたのかもし

れない。

扇情的な服装をしていて、しかしその内面は性的なものを感じさせない涼やかさがある、アンビバレントな少女。しかし、やはり、女であるということなのだろう。

流し目に、背筋をぞろりと舐め上げられたように感じた。

ナナが見やった先は、ユウ達が座っていたベンチからほどなく離れた場所。

何かの文庫本を読み込んで座っているシエルの姿があった。

あれ見たら何とかしてって言いたくなる気持ちもわかるけど。

「ね？ もう見てらんないよあれ。近くにいったって、ぎゅーってしてあげたいもん」

「じゃあしてあげたらいいじゃん。俺カウンセラーじゃないねんぞホント。」

「私だって、人との距離感くらい、計るんだよ………?」

「俺とは計れてないじゃん………これが最後にしてくれよ、ほんともう押し付けるのは止めてねマジで。」

「えへへ、でもやってくれるユウ大好き」

「はいはい………あーでもあれは、うわあ、キツイな。ぼっちですわあれ。もう完全なぼっち体質ですわ。」

遠からず近からず、すげー微妙な距離で存在アツピルしてるもん。

本読みながら周囲に興味なんてありません、みたいな風に見せちゃってさ。たぶんこっち超意識してんでしょあれ。何か見えて痛々しい………。

一人になりたいのならばもつと遠くに行けばいいというのに、こちらの存在を知り、知られることの出来るギリギリの距離をキープしているように見える。

ユウは頭を抱えなくなった。

彼女自身に自覚があるのか、ないのか。

こちらは痛々しくて見ていられない。が、こちらから接触しようとするのは、正直つらい所がある。

はつきり言って気まずい。

「いけつ、ユウ！ 君に決めた！」

———ぴっがちゅう!? やめつ、ちよつ、押すのやめつ！

「じゃっ、後よろしく！」

———フアー———!?

ナナに押されつんのめってシエルの側に行く。ナナはそのまま走って消えた。

どうしたらいいものか迷うユウに、シエルはベンチからすくりと立ち上がり向き直る。

妙にできたタイミングであった。

やはり、話を聞いていたのか。

「何か？」

———いや、あの。

「そうですか。副隊長、改めてよろしくお願いいたします」

———は、はい。こちらこそ……………。

「さつそく今後の方針を打ち合わせしたいのですが、副隊長、先に確認しておきたいことがあります」

———何かな？

「ブラッドとして作戦行動を行った回数ほどのくらいでしょうか？」

———えーと、ブラッドとして……………？ だと、あんまり、じゃないか、な？

「……………個人では？」

———これくらい。ほら、個人証明……………アバターカードどうぞ。

「虚偽報告は処罰の対象となりますが。まさか」

———あー！ まあ常識の範囲だよねってことで！ 表示がバグってるなーこれ！

「なるほど。つまり、どちらもほとんど経験がないということですね。それでは次回の任務以降、しばらくは戦術レベルでの連係訓練を行っていくべきですね。」

副隊長の活躍はラケル先生から伺いました。早くも血の力に目覚

め、めざましい戦果をあげたと。私も実戦経験では及びませんが、そのぶん戦術の知識でブラッドに貢献できればと考えています」

よどみなくスラスラと言い終えるシエル。

言葉だけを見れば柔らかな物腰に感じるが、それを抑揚無く、無表情で口にされると反応に困る。

社交辞令なのか、本心からの言葉なのか。

こちらにも日本人的な曖昧な笑みを浮かべ、よろしくと頭を下げるしかない。

自然とユウも言葉がなくなってしまう。

「ええと、こういう時は……えっと……」

ここで初めてシエルの表情に変化があった。

途切れた会話を繋げようとしているのか。手に持っていた文庫本をぱらぱらとめくり、何かを確認しているようだった。

本を見ているのではない。あれは、文庫本に葉代わりに挟まれた、何通もの手紙、だろうか。

国際便の印が押された手紙を確認しては頷いている。

すみません、思い出しました。と早口で言うシエルが可愛らしく思えてしまって、ユウは小さく吹き出した。

やはり、自分の考えすぎだったのだろう。

人間性を捨て去ったなどと、馬鹿馬鹿しい。

おそらく、軍事訓練の最中で、その過酷さに心を殺さねばならなかったのだろうか。それならば、いずれ解れて、仲間皆で暖めてやればいいのだ。

なにより、こんなに可愛らしいのならば、大歓迎だ。

「お互いに足りないところを補って高めあっていければ……と、思っています」

——はは、うん、そうだな。その通りだ。

「ああ、おかしなことを言っていたらすみません。社交的な会話にはどうも不慣れなもので……あつ」

シエルのもっていた本の間から、手紙がぱらぱらと地に落ちた。

ページを下向きにして持っていたからだ。小脇にでも抱えておけ

ばいいものを、一応副隊長という目上の人間に対し、手を前に組んでお行儀良くしているからだ。

これもまた軍事訓練の賜物か、とユウは足元にまで滑ってきた手紙を拾い上げてやろうと、身をかがめる。

……背筋がざわりと粟立った。

「触れたら殺します」

手が止まる。

全身が凍りついたようだ。

吐息さえ白く濁ってしまったかのような錯覚。

殺気……否、これは、殺意だ。

この娘は、今、本気で、俺を害そうとしている。

硬直するユウの眼前から攫うようにして手紙が回収されていく。

「すみません。お見苦しいところをお見せしました」

——い、や……別に……いいさ……

何事もなかったかのように、シエルは続ける。

「どうぞ、こちらが皆さんの戦闘データを元に作成したトレーニングメニューです。

1日24時間のうち、睡眠8時間、食事その他雑時2時間、任務に4時間として……残り10時間のうち戦闘訓練に4時間、座学に6時間分配します。

そしてこちらが各メンバーに合わせた訓練計画です。少し精度が甘いかもしれませんが、十分小隊戦力の底上げになるかと。

あとこちらは次のミッションの詳細です。私なりに立ててみました。後で目を通しておいってください」

液晶タブレットを手渡され、つらつらと説明をされる。

反応を返せないのは、情報量に圧倒されたからではない。

背骨に差し込まれた冷たい氷柱が、未だ抜けないからだ。殺意の寒さが身を包んでいる。

こんな場所で、命の危険を心底から感じるハメになるとは、思ってもみなかった。

予想外の打撃であった。

なすがままに聞くユウに、シエルは満足したのか、ではと頷く。

「では失礼いたします。これからよろしくお願いします、副隊長」

それだけ言い置いて、さっと身を翻し、ブーツの音を立てながらシエルは颯爽と立ち去っていく。

一切の未練を感じさせない身の振りに、ユウは堅く引きつった笑みを零すしかなかった。

こちらへの接触のタイミングを図っていた理由は、人間関係を良くしようという意図ではなく、この液晶タブレットを渡したかっただけなのだろう。上官の会話を遮らぬようにする、それだけの理由か。

表示された訓練内容としては温いの一言。拘束時間が長いのはいいだけないが、新兵には悪くはないメニューだ。だが、どうにも教科書的すぎていけない。

否、そうではない。重要なのは、そんなことではない。

――俺が、ビビるくらいかよ。

じつとりと滲んだ脂汗を指先で拭う。

久しく感じ得なかった、命の危機。

死の恐怖。

――恨むぞ、ジュリウス。

怪物が産まれたのはなぜ。

どいつもこいつもが、よってたかって仕立て上げたのだろう。

今日もまた、スピーカーが喧しく出撃アナウンスを吐き出していく。

□ ■ □

『こちらブラッドα、対象を補足した』

『ブラッドβ、こちらにもヤクシャが接近中、注意してください』

「了解。迎撃します」

ほう、と感嘆の声を上げるギルバート。見えるのは、シエルの戦う

姿。

オウガテイルの群れを流れるかのように“すり抜け”れば、そこには足を切り裂かれ倒れるヴァジュラテイル達。

入れ食いだな、とギルバートは獰猛に笑い、オウガテイル達を捕喰する。バーストモード。オラクル波がギルの体表を伝い、空間中へと放出される。

シエルの戦いは、まるで舞踊のようであった。足を止めず、スピードと慣性を活かし、すれ違い様にショートソードの一撃でもって敵を切り裂く。

距離を開けてターンをすれば、神機はスナイパータイプのガンモードへと変形している。振り向き様に、蜂の一撃。もがくアラガミの額を穿ち、一撃で絶命させる。

アクアマリンに染め抜かれた神機が翻れば、そこには死山血河が築かれる。

ショートソードの決定打の無さは、ギルバートの槍によるチャージグライドがカバーする。

撃ち漏らしはユウがトドメだ。バランスのとれた三人一組、スリーマンセル。

ただ、シエルの動きに合わせられるのは、ある程度合理的な思考の持ち主……経験を積んだゴッドイーターだけであろう。

「あいつらに見せてやりてえ」とギルバートはしきりに感嘆の声を上げている。だが。

「息が詰まるがな。否定するつもりはないが……」

同感である。

戦いの中で最も重要なものは何か。ユウは、それは“士気”であると思っっている。モチベーションと言ってもいい。ギルも同意見だろう。

それを維持するために益の無い話もするし、下の下卑た話題だって振る。こういう戦いの流れというものを重視するのは、むしろ軍隊の兵卒であろう。シエルは軍事教練は受けてはいるのだろうが、しかし。

理論とはすなわち、最適解のことだ。だが、人間は最適解を出し続けられるようには出来ていない。

その代表が、ギルの言うところのあいづら、ナナとロミオだ。

二人の声は、無線機からひっきりなしに届いていた。戦いを楽しむような声だ。同行しているジュリウスも、好きにやらせているのだろう。

ナナは最近になってようやく実戦に慣れてきたようで、戦場の中をハンマーに振り回されることが楽しくてしかたがない、といった風だ。

ロミオも、バスターという武器種は細かい事を考えずにぶっ放す代物だ、と博士となった友人が言っていたように、直感で戦うタイプである。

和気藹々とした二人のハシャギ様に、ジュリウスから「まるでピクニックだな」というプライベート通信が入る。

ユウはそつとジュリウスとの回線を閉じた。

『ブラッドβ！ 作戦対象に無い中型アラガミの接近を確認……ヤクシヤが近づいています！ 予測到着時刻はおよそ30秒後！』

「ヤクシヤか。想定より近いな……片付けにいくぞ」

了解、とユウが応答しようとした瞬間であった。

「待つてください」とシエルからの静止が入る。

「討伐対象外のアラガミが接近した場合、一時退避という内容の作戦だったはずです」

「……俺たちの仕事はアラガミの討伐だ」

「ギル、作戦通りに行動できないようではより強力なアラガミとは戦えません」

「状況に応じて臨機応変に戦うべき局面もある」

「作戦理由は何ですか？ 本当に戦うべきなのですか？ 貴方はただ、戦いたいだけなのでは？」

「……チッ！」

すさまじいメンチの切り合いだ。

先ほどまでの歓迎ムードは何処へやら。ギルの眼光に鋭さが増す。

シエルはというと、こちらは変わらない。変わらず、冷たい頑なさ
が顔に張り付いていた。

『落ち着け二人とも。現場での指揮権は副隊長にある』

『ケンカはよくないよー』

『あつはつは、ギルの奴怒られてやんのー』

『さあ、副隊長、あとはお前が決めてくれ。あと、任務後に個人的に話
しがある。覚えている』

やりやがったな、ジュリウスの野郎。

ギルとシエルがじつとこちらを見ている。

——え、と。ろ、ロミオの奴またあんなこと言ってる。

ほーんと、しょうがない奴だなー。

「ふん．．．．．あれは、まあ、なんだ．．．．．あれはあれで、
悪くはないさ」

——おつとお、意外なツンデレ反応．．．．．あ、なん
でもないです。睨まないで。

あれはあれで、というギルの言葉は正しい。ユウもそう思ってい
る。

ロミオは、本人に自覚はないだろうがコミュニケーション能力に非
常に長けている。

一見しただけでは、ロミオは相手の間合いを鑑みず、ぐいぐいと入
り込んでいくムカツク勘違い野郎、とも見える。

だがその本質は、その人が本当に望むものを感じ、そして与えんと
努力するギブ&テイクの精神だ。

精神的「対話」．．．．．とも言うべきか。

つまり、ギルにとって、ロミオのあの接し方こそが望んだものであ
り、ロミオもまた無意識にギルは「ガス抜き」をすべきと判断して、
挑発めいた物言いをしているのだ。

ギルは「罰せられたがっついて」、ロミオはその意を汲んだのでは
ないか。

ギルの破滅的な罪悪感、ロミオを攻撃することによっていくらか
解消されたのではないか。マスコミが流した世論を殴りつけること

は出来ない。だから……と、ユウが思うに、ギルのロミオへの態度は後ろめたさからであろう。

ギルの最も深い場所に踏み込んだのは、間違いなくロミオだった。怒りと同時に、有難さも感じたはずだ。それをギルも理解していた。だから、憎んではいけないのだと、そう言っているのだ。

「副隊長。指示を」

「ユウ、決めてくれ」

——もう少し現実逃避したかったよ……。

答えは解りきつていると言わんばかりに、シエルはアイテムポーチを確認している。

一時退避の準備である。

ユウの答えは——。

『——ヤクシャ沈黙。対象の討伐を確認しました。おつかれさまでした』

足元に転がるヤクシャの死体……溶けて消え失せるアラガミに死体という表現は正しくないのかもしれない。

オラクルの塵となっていくヤクシャを見れば、自ずと答えは知れよう。

出現予測ポイントへ急行、迎撃。

それがユウの出した指示であった。

「……任務完了。これより帰投します」

やっと口を開いたかと思えば。

ユウが指持を出してからこちら、シエルから一切の発言は無くなっていた。

不服であるという意思表示であるかのようだった。

納得はいかないが、命令であれば従う、という態度のように思える。事実その通りなのだろう。

ギルが解っている、と言った風にポンと肩を叩いた。

「こいつは独り言だが——」

独り言としては大きな声で、シエルにも聞こえるようにしてギルが言った。

「俺は単にアラガミを潰す目的だけで意見を言った……そうだな、白状する。戦いたかったただけだ。」

だが、こいつの判断は違ったようだぜ。

端末のマップを開け……ヤクシヤの出現ルートを逆にたどってみろ。ヤクシヤがやって来た進路上に、物資運搬路がある。

アラガミから隠された小さなものだ。こいつはおそらく、*“はぐれだ。この運搬ルートを根城にして付近に遠征をしていたんだろう。”*

運搬ルートと、この作戦領域を行き来するタイプ……回遊型だな。見ろよ、移動経路がレーダーの策敵範囲外になってやがる。

だからこれまで発見されていなかった、作戦対象になかったんだ。回遊型は場所に固執しないからな……もしかしたら、逃していたかもしれない。

ここいら一帯には大きめの集落がある。聞いた話したが、少なくとも被害が出ていたようだぜ。

アラガミにやられたんじゃない。物資が届かなくて、飢えて死んだんだ。じわじわと苦しむ死に方さ……。

こいつを野放しにしていたら、どうなっていたことやら」

「私の、データ収集不足であったと、そう言いたいのですか？」

「独り言だ。ただ、こいつの判断は正しかった。俺たちの思惑を超えてな……だろう？」

「……命令には従います」

「それでいいさ……だが、命令に従うのは信頼があるからだ、そう考えた方がいい。」

上官は信じられる奴の方がいいさ。こいつの決めたことなら……そう思える奴の方がな。

そこで死ぬなら……まあ、良い終わりだろうさ。そうだな……

死ぬには、それがいい」

帰投していくギルとシエル。

ぽつんと残されたユウは。

——なんか、いい話似的な感じでまとめられたのは何故なんだぜ……。

極東理論でアラガミ絶対許さないしただけなのに、と首をひねるばかりであった。



どうにも精神的な疲労感が抜けない。

ギルとシエルとの任務後、次にナナとロミオ、そしてシエルとのフォーマンセルを組んで新たに任務にあたった。

ナナとロミオはいつもの調子。

シエルはと言えば………圧倒の一言。

「ロミオ、シユウには頭部の狙撃を推奨します」

「ナナ、グボロ・グボロの尾ヒレにハンマーはあまり効率的ではありません。胸ビレと砲塔が最も効率的なはずです。そちらも狙ってください」

「ロミオ、無駄な会話が多すぎます。周辺状況の報告をこまめにお願います」

「ナナ、アラガミの特性によっては銃形態での攻撃で効率が上がります。神機の機能を全て活かすことで最大の成果を得ましょう」

「副隊長、より戦術的な指示や交戦ポイントの選択があります。慎重かつ迅速な指示を———」

「副隊長、戦闘中に遊ばないでください。同じパターンの攻撃を当て続けるのはやめてください。そのような事してもブラッドアーツの覚醒率は上がりません」

「副隊長、拾ったものを食べてはいけません」

逐一、シエルはこの調子である。

間違っではない。いないが、監視されているようで息が詰まる。ギルの言った通りである。

ナナとロミオも同じよう。

「おでんぱん食べるーって聞いたんだけど、いません、ってー」

「あー、そーいやギルはどうなったんだっけ？　この前あいつもいらねえって言ってたけど」

「ギルは食べてくれたんだよー！　この前は悪かったって言ってくれて！　だから、ほらこれ、初心者用のおでんぱんあげたんだー」

「初心者用……？？」

「串のところがパスタなの」

「………そっか」

「上級者用のいつとく？」

「いや、いいです」

「ぶー。男は度胸、何でも試してみるもんだよー、ロミオ」

「もう先輩も無くなって………あ、いいっす上級者用のいらないうす。いいですそれで、はい」

「この前の任務でさ、またシエルちゃんに怒られちゃった………怒ってはいないんだらうけど、うー、もっと仲良くしたいのにー」

「シエルに肩の力抜いたらうって言ったら、そうですね神機は慣性で振るうべきですねって。そういうことじゃないんだけどなあ」

——ロミオの出番なんじゃ？　ほら、話しにいけばいいじゃん。対話しにいけよ対話しに。心開いてやれって。

「いや………あれは心を開いてないとかじゃなくて………なんて言ったらいいか、こう、勘違いしてるっていうか、ズレてるみたいなの？」

——歩み寄るとかじゃなくって？

「いつそ拒絶してくれたら楽なんだけどなあ。そしたらさ、嫌なことがわかる訳だから、逆に好きなことだってわかるじゃん？」

——深いな。拒絶されるってことは、つまりコミュニケーションを取ってくれてるってことなのか………。

「よせよ。昔あったことの実体験からだって。肌がこう褐色でさ、手に包帯ぐるぐる巻いた女の子がいたんだけどさー。あー、あの子今どうしてるかな」

「拒絶されてるわけじゃない。話しは聞くし、言ってくれるけど、でも気持ちを出してくれるわけでもない………うー、難しいよー」

どのように接したらよいか困惑している、というのが正しいだろう。

ここ数日ロビーで行われている会話である。

価値観の相違が発生している相手、例えば文化圏の違う人種同士でコミュニケーションを計った時、しばしば起きる現象であるらしい。固定観念の齟齬が起きているのだ。

シエルの言う理論の徹底とは、その本質は作業の合理化ではない。精神性の統一なのである。ここをシエルは誤認しているように思える。

低年齢化が進むゴツドイーターに、軍隊の精神性を持ち込もうとしてもエラーが生じるのは当然のことなのだ。

未成熟な精神に、完成された精神性を持つていることが前提の理念が適応できるはずがない。

そしてシエルが致命的に見落としている点がある。

自身もまた、その未成熟な精神性を持った少女であるということだ。

——シエル、もっと柔らかくなればいいのになあ。

「そうねえ」

エレベーターの中。

ユウの独り言に、困ったように笑う女神がいた。

いや、ユウの見間違いである。

レア博士がいた。

長い付け爪でエレベーターのボタンを押せず、しよんぼりとしていた所をユウが発見したのである。

指を曲げて間接部分で押せばいいのに、と言ったところ、その発想はなかったという顔をされた。

「天才なの……！ おそろしい子……！」という驚愕の呟きが聞こえた気もしたが、空耳だったのだろう。きっと。

正直なところ、博士としてそれはどうなのだろう、と思わなくもない。

故に、レア博士は博士なのではない。

女神なのだ。

——良い匂いがする……良い匂いがする……

！天国はここにあったんや！ エレベーターの中にあったんや！
レア博士の香水と女性特有の甘い香りがエレベーター内の空間を
包み、ユウの思考を掻き乱す。

全ての女性は須らく女神であり、それだけで全てが許されるのだ。
少しの欠点はチャームポイントだ。ステータスなのだ。

博士なのにどこか残念ぽいのが何だというのだ。

博士なのに黒幕臭が全くしないと言い換えるべきだ。

本当に、フェンリルの博士なのに何らかの思惑を感じさせないこと
は奇跡ではないだろうか。

榊博士に爪の垢を煎じて飲ませてやりたいぐらいだ。否、自分で飲
む。レア博士の付け爪を煮出して出汁をとったスープを飲みたい。

どちらかと言えば、努力して怪しさを演出をしようとしているよう
な。それにしても空回りしているが。

だが、それがいい。

「そういえば、ねえ、シエルの様子はどうか？ ブラッドにうまく溶け込
めているのかしら？」

エレベーターが上階へと昇っていく。

ワイヤーの軋む音がする。

エレベーターもまたクラシックな作りなのは、設計者の趣味なのだ
ろうか。

「シエルは元々、裕福な軍閥の出身でね。両親が亡くなったのをきつ
かけにラケルに引き取られたの」

レア博士はどこか遠くを見るかのような目をして語りだす。

後悔をその横顔に滲ませながら。

「マグノリアIIコンパスでシエルはとても過酷で、高度な軍事教練を
施されていたようね……極限状態でのストレステストや、少
しのミスで懲罰房に入れられたりして……」

——ストレステスト？

「飢餓状態、持続的暴力に晒された環境、他者を自らの意思に反して傷

つけなくてはならない状況……性暴力は行われなかったようだけれど、何の慰めにもならないわ。もっと聞きたい？」

首を振る。

聞きたくもない。

聞かずとも実感として理解出来ることを、聞く必要はない。

「しばらくして彼女にあった時には命令を忠実に実行する猟犬のような……そんな女の子になっていたの」

やはり、フェンリルの“博士には向かない女性であると思う。

感情が顔に出すぎている。

痛むのならば、口に出さなければいいのに。

「ジュリウスのボディガードをずっと任されていたんだけど……守る守られるの関係だったせいかな、ふたりは友達にはなれなかったみたいね」

過酷な訓練を受ける前、の話だろうか。

あるいはその最中でのことだろうか。

どちらにしろ、ジュリウス自身から聞いた顛末となったのだろう。

シエルは自分からジュリウスと目を合わせようとはしない。命令を聞くときのみに顔を向ける。

それが事実だった。

——シエルのこと、よく気にかけているんですね。

「ええ。マグノリアIIコンパスであの子と一番話していたのは私だから。あの子の服も、私が買ってあげたのよ。」

あの子が初めておねだりしたの……嬉しかったわ、本当に。髪型もね、最初は私が結ってあげてたの。

それまではこう、ひつつめ髪か、伸ばしっ放しのオバケ髪だったのよ。

身なりなんて気にしたことがない、自分の“性能”を高めることだけが唯一絶対だと信じてた……今も信じてるのね。

そんな女の子……ええ、女の子なのよ、あの子は」

——それは……俺も、わかります。あの子は可愛い。

「あーあ、とられちゃうかなあ。でもシエルを任せるには、もうちょっとしっかりしてもらわないとね、副隊長さん？」

——比較的前向きに善処します……。

「フフ……ね、ユウ。あなたなら解っているんじゃない？」

——何を、ですか？

「マグノリアIIコンパスで何が行われていたのか。あなたは強いわ。それは戦闘データを見ても一目瞭然。

シエルが入隊して、うまく部隊が回らなくなって、ブラッドの戦闘効率が落ちてきている最中、あなたの能力だけは上昇を続けている。ナナとロミオを見て、何か思わなかった？ こんなにも強いあなたに『ついて行けてしまえる』あの二人のことを」

——戦えるな、と。どこかで訓練を『積み続けてきた』動きです。

「基礎訓練だけじゃ説明がつかない戦闘能力よ……あなたも同じようなものだけねどね」

——それは。

「誰しも秘密にしたいことはあるわ。私は……私は……駄目ね、自分の馬鹿さ加減が嫌になるわ」

——秘密は……隠したいことは、たくさんあります。あつてもいいんだと思います。

「でも、生きていくにはつらいわ」

——自分自身にさえ、いえ……自分にこそ、隠したいものがあるのなら、目を瞑って生きていくしかない。

「そう……暗がりを生きるには、この世界は寒すぎる」

——誰かが、手を引いてくれる誰かが、います。必ずいます。あなたの側に、きつと。だから、触れ合った手は暖かいから、きつと。

「私の側にそんな人は、もう……手をつないで欲しい人は、ああ、私がつりつくだけの手になってしまったわ。私に誰かの手が差し伸ばされることはない」

——そんなことは。

「だって、私、マグノリアⅡコンパスで何が行われていたのか、知らないもの。

いいえ……理解していて知ろうとはしなかった。怖かったのよ。

あそこにししか居場所がなかったナナが、ロミオがなぜゴツドイーターとして戦えるまでになっていたのか。

シエルの受けた訓練内容。シエルの名前が書かれた、内出血と薬剤による皮膚異常で黒く染まった人型の、経過観察資料。

あの子と一番接していたのは、私なのにね。

そして……そして、ラケルの……全部に目を閉じてきたわ。あなたの言う通りよ。そうしなければ、生きてはいけなかった」

——レア博士？

「もし、全部が終わりに向かっているのだとしたら……あなた……あなたが……全部、壊してくれる？」

レア博士が何を言っているのか、意味が理解できない。

怪訝そうな顔をするユウに、レア博士は「ごめんね」と言って笑った。

儂く、今にも壊れてしまいそうな、ガラス細工の笑みだった。

「フフ、冗談よ。ここのところずっと研究続きだったから、疲れちやつたのかも。今が朝なのか、夜なのか……駄目ねえ、肌がくすんじやって」

——いえ、眩しいですよ。とても「レア」だと思います。本当に。

「もう……そうやって極東でも女の子達に良い顔してたんでしょ？」

——いやあ、あはは。

「シエルは人との距離の取り方がとても不器用な子だけど、少しずつ変わろうとしているわ。よければ仲良くしてあげてね」

到着のベルが鳴る。

局長室のある階層を示すライトが点いた。

レア博士が手を振ってエレベーターを降りていく。

どこか、何かに諦めたような、自分を傷つけ贖罪を得んとしているかのような、そんな後姿だった。

扉がしまる。

ユウは屋上へのボタンを押した。

フライアの中で、最も「空」に近い場所。

花に囲まれた庭園で、きつと今日もシエルは、一人きりで何かを考えているのだろう。

エレベーターが静かに昇っていく――。

屋上展望台は煌く陽の光のプリズムと、小さく囀る鳥の声、美しく咲く花々によって満たされていた。

差し込む太陽光を強化ガラスによって屈折増幅させ、天然の照明とするシステムである。光量が少なければ人工光と練り合わせ、光度が確保されている。

光の粒さえ見えんばかりの輝きは、正に楽園と言わんばかりの暖かさと同やかさが演出されていた。

ジュリウスはこの穏やかな陽光の中、大木の根元に腰をかけ、小鳥の声に耳を傾け、花の香りに包まれてまどろむことが何よりも至福であると云っていた。

気持ちは解る。

この世界のどこを探したとて、こんなにも美しい景色は存在し得ないだろう。

どこもかしこもが荒れ果てていて、熱い荒野が広がっている。

緑を復活させたネモス・ディアナも、未だに花の群生までは栽培に成功していない。種子が弱く、空気中のオラクル細胞に食われてしまうのだ。

花に触れて生きられるのは、きつとそれだけで金を天井まで積んでも得られない贅沢なのだろう。

美しいものに人は惹かれる。憧れる。癒される。当然のことである。ユウとてこの場所を美しいと感じ、また安らぎを覚える。

だが、それだけだった。

己の胸に湧く憧憬を、当然の自然反応であるとしか捉えていなかった。

花の香りという刺激を受け、リラックス効果があるのは当然なことだ、と。酷く無味な記号として受け入れていた。

ユウはこの場所を、どうにも好ましいとは思えなかった。

ありていに言えば、たまらなく……嫌いだった。

科学の粋を凝らして生み出した景観。それは、人が手を土で汚して

作り出したものではない。

否定するとまでは言わないが、好むべく所ではない。

生きる意志と力が試される世界では、泥と汗と油の香りがする、汚らしい手垢に塗れたものこそが価値あるものではないか。

ただの偏屈であるという自覚があるため口には出さない。

つまり、趣味ではない。それだけのことだった。

ユウには美しく飾られたものが、鈍色の世界を隠すためのハリボテにしか感じられない。

今や世界を忙しく飛び回っている、歌姫の歌があった。

つらい世界であるからこそ、希望を捨てずに生きて行こう。そんな夢や愛が盛り込まれた歌詞であったか。

なるほど、美しい歌である。公共放送からもよく聞こえてくるようになったその歌を耳にすれば、ほう、と感嘆の吐息が知らず出る。

それだけだった。

良い歌であるのは間違いない。それは否定しない。

ただ、ユウには共感できないというだけで。

どうせ心を入れて聞くなれば、罵倒に塗れたロックがいい。

彼女のサイン入りのCDは闇市に流してしまつて手元がない。新品未開封であつたため良い値段で売れたな、くらいにしか記憶になつた。

せめて開けてやれよ、と闇市からCDを回収したコウタに泣きながら叩かれたのも覚えている。

——隣、いいかな？

「.....どうぞ」

展望台の中に備え付けられたガラス製のテラス。

シエルは備え付けられたベンチに、気配もなく座っていた。

まるで“空”のような少女だ、とユウは思った。

時折“ノイズ”の奔る、この空のような。

本日の天候は曇天。

だというのに、この屋上展望台には陽の光が射し込んでいる。

全天型ドームの透過モニターに映された、青空の画像と人工光によ

る演出だった。

ユウがこの景観を好ましく思えない一因である。隣り合って座る二人へと、穏やかな光が降り注ぐ。シエルは俯き、ユウは目を細めて舌打ちをした。

口内で鳴らしたそれは、どうやらシエルの耳に届いていたようだ。

「……この、空は」

—— うん。

「好きではありません」

—— どうして？

「作り物の空、ですから」

—— いいじゃないか。綺麗だ。綺麗なことには変わりない。

「私と……私と同じ、ですから」

シエルは俯いたまま、口を開く。

「うまくやるというのは、難しいです」

そう言つて、本の—— 本に差し込まれている手紙を指先で撫でる。

「合わなくても、うまくやれ。そう言われました」

—— 大事な人から、かな？

「大事な人……わかりません。会ったことがないんです。文通相手に、相手がどんな人なのか……ただ……」

—— ただ？

「会いたいと……一目だけでもいい、言葉を交わさなくても……ただ会って、触れたい。その時、私は……私にはわからないのです。私自身が一体何を思い、感じているのか」

—— 自分自身を知りたいから、会いたいのか。

「私は、知りたい。触れ合ったその時に、私が何を感じるのか……「感じる」が、できるのか。」

私の心は、動いているのか……存在しているのか。人間の存在の証明とは……それだけです」

—— 人の間って書いて、人間って読むんだ。心の在り処っ

ていうのは、触れ合ったその場所にこそ、生まれるものなのかもしれない。ほら。

ほら、とユウは手を差し出した。

シエルは差し出されたユウの手をしばらく見詰めていたが、しかし再び力なく視線を落とした。

解っていると言わんばかりにユウは苦笑する。

——合わなくてもうまくやれ。同じ事を人に言ったことがあるよ。

「あなたも、ですか？ それは極東の常套句なのでしょうか」

——ブラック会社に勤める社員の心得だよ。で、シエルの言うその人のことは知らないけどさ、たぶん同じ意味なんだと思う。

俺が言ったやつもシエルみたいなリアクションしてたよ。ありや気付くまで長いな。

「どのような意味だったのでしょうか……これ以上の効率となると、私にはもう案件は提示できません。

これまでに習得してきた知識をもとに最善の戦略を提案しているつもりです。それなのに……私が配属されて以来、戦闘効率が落ち続けているんです」

——やっぱり、同じリアクションだよ。

「戦術の柔軟性を保持せよという意味でしょうか。戦況に応じて臨機応変に対応すること……それが重要なのは理解しているつもりです。

しかし私はいかなる不足の事態にも対処するために、上意下達を厳守すべきだと……」

——真面目すぎるんだよ。うまくやれ、っていうのは、効率を上げていけってことじゃない。

「それだけでは足りない、ということですか？」

——堅いな。もっと単純でいいさ。仲良くしろってこと。一人で戦ってるんじゃないんだからさ。

「もちろんです。だからこそ命令系統の構築が……仲間のことを考え、戦況に応じて協力して戦うことが大事だと、そういうことで

すか？」

——いや、うーん……。

「解りました……修正し努力してみようと思います」

それでは、と立ち去るシエル。

ブーツの音にキレがない。しょんぼり、という表現がぴったりの背中だった。

——そういうことじゃないんだっての。

ユウの独り言は人工の空に吸い込まれて消えた。

人間関係の妙とは、良くも悪くも、他者とのつながりを「実感」した者にしか理解し得ないだろう。

シエルは「つながるという実感」に戸惑っているように思えた。

ゴッドイーターは個の戦闘力を高めた、戦術的存在だ。

だが、それに搭載された制御装置は、人間である。

人間同士の深い情のつながりを感じ傷であり、非効率的であると断じる者も多いだろう。

だがユウからしてみれば、ゴッドイーターこそ、このつながりというものは必要不可欠であると思っている。

個を高めた存在であるからこそ、制御できないほどの「個性」が頭角を現していく。

それらを人類のために戦う存在としてつなぎ止めるには、つながりしかないだろう。

自分自身がそうである。

人間関係にがんじがらめになったからこそ、自棄にならずに済んでいる。

そも、戦術や戦略でどうにかなるのなら、とうにアラガミは駆逐されているのだから。

失敗例の最たるものとしては、アーサソール部隊であろう。

効率的な戦術行動のみを追及した、恐怖を知らぬ完成された戦闘集団がそれだ。

そんな程度であるのだから、自分のような頭の悪い男に殺し尽くされるのだ。

——考えるんじゃない、感じるんだ。できなきや……
死ぬだけさ。悪いな、ナナ。

立ち上がる。どこか諦めをその横顔に滲ませて。

——沈みかけのおっぱい……か。

暁の水平線に陽が沈むかの如く。

沈み行く大いなる和らぎは、物悲しいものだ。

——ぬわああんもおお、疲れたもーん！ 俺こんな真面目

なこと考えたり話したりするキャラでしたっけ!?

叫ぶユウ。

真夏の夜に蒸された夢を見る野獣のような、げんなりとした顔であつた。

——なんかもう、おでんパン食べたい。おでんパン食べて癒されたい。ナナがくれるおでんパンに微かに残ったナナの体温を舌で味わいたい。

うー、ナナのオープンなオーラで日光浴したい。ナナのチューブトップになりたい。健康的にゆれるおっぱいを支えた……ナナ……オープン？

うん？ ああ、おっぱい！ あー……わからずやは俺じゃんか。あちやあ。やっちゃまったな！

はつと気がついたようにユウは天を仰いだ。

モニターの太陽が、ユウの視線に反応し光量を調節した。

——歩み寄っても一人じゃ届かないってんなら、こっちらも行ってやんなきや駄目じゃん。

なんだよ、俺は待つてただけじゃんか。腰を下ろしちやつてえらそうに……ちえつ。

教えてやらないと。そうだよ、教えてやらないといけないんだ。"教えて欲しがってる"つてことを俺に"知らせにきた"んだから。

アランにも謝らないと……自分で気付いて欲しいなんてのは、俺のエゴだった。

シエル、お前はもう気付いてるんだ。解つてないのは俺だったんだ。そう、そうだな。そうだよな。

差し出されたのなら、掴まなければ。
ユウ、何かを悟ったようにして立つ。
晴れやかな顔をして。

—— おっぱいは世界を救う。

真理である。

ユウは真理に開眼したのである。

“たとえ話”をしよう。

そこにおっぱいがあつたとして、そのおっぱいが今にも溺れそうであつたでしょう……。おっぱいには浮力があり成人男性三人くらいの体重ならば余裕で水に浮かせられるのは語るべくもない自明の理ではあるが、たとえ話である。

沈む寸前のおっぱいを見たとき、さあこの手の中に飛び込んで来い、などと言えるだろうか。

例えそのおっぱいが助けてくれ、と叫んでいたとしてもである。常識的に考えて欲しい。今にも沈みそうなおっぱいが目の前にあつたのなら、自ら掴みに行くのが常道ではないだろうか。

これは救助、人助けだ。邪な思惑による行いではない。
苦しいと叫ぶのならばここまで泳いで来い、お前には浮力があるのだから。などとは、傲慢が過ぎはしないだろうか。

救いにいかねば、自らが堕ちる。

そう、おっぱいは全てを教えてください。

人とは……。アラガミとは……。ゴッドイーターとは……。
世界とは……。星とは……。命とは……。進化と
は。

全てである。

おっぱいには全てが詰まっている。

夢、希望、愛、全てである。

故に、学べ。そして、掴め。

おっぱいから学べ。全てを。

そう……。手を伸ばさねば、おっぱいには届かないのだから。

—— うおおおつ、燃えろ俺のムーブメントオオオ！

出撃シグナルが鳴る。

いつもの日常が戻ってきた。

ユウは走る。希望に満ち溢れた顔だった。

“つながり”を持ってば、よく見えるようになる。多くは、自分に足りないものを。

踏み込め、ということ。

シエルに追いつき、ユウは華奢な肩を両手でぽんと掴んだ。

「ひゃっ！」と可愛らしい声が上がった。大丈夫。心が止まっている人間なんていない。そう言ってやりたかった。

ラウンジに聞こえるような大声で、ユウはナナを呼んだ。

——みんな！ 戦いなんてくだらねえ！ おっ……………

でんパン食べようぜ！

カタカタツターン、とキーボードを弾く音。

フランである。

爽やかに宣言したユウを、フランが涼やかな目で見ている。

「くだらなくありません。出撃してください」

——いや、そんなことよりも聞いてくれ。わかったんだ！

歩み寄りなんだよ！ 片方だけじゃだめなんだ。お互いじゃないと駄目だったんだよ！

「出撃してください」

——いや、ほら、手はね、片方だけじゃ鳴らないでしょ？

もう片方があれば、ほら、握り合うことだってできる……………

「出撃してください」

——人間関係が、ね？ つながりが、ね？ 大事だって、一

番大事だって……………ね？

「出撃してください」

——はい。

「何か言うことがあるのでは？」

——あの、その。

「あの、でもその、でもありません。はっきりと言ってください」

——ごめんなさい。

「よろしい。では、出撃してください」

——はい。

フラン冷静なツツコミ。

副隊長ご乱心。

ファイアニユースの本日のブラッドの記事が決まった。

「ユウき、何かやったの？ 説教モードのフランとか初めて見たんですけど」

——おっぱいばかりに目をやってたら、尻に怒られたでござる………。

「………はあ？」

——ロミオ、お前もいつかわかる時がくるさ。どっちが素晴らしいかを論じるなんてくだらないってことを。

だって、どちらも柔らかいんだから。いいんだよ。両方好きでもどちらにも良さがあるってこと、認めるのが大人ってことさ。

「お、おう………よくわかんねーけど、ミッションいこうぜ？
な？ 泣くなよ」

——覚えておけよ。それにはそれにしかない役割つてのがあるのさ。オンリーワンがたくさんあってもいいんだ。

それで、そいつが小さくつてもな。でかいことが全部じゃない。何ができるのか、出来ることを精一杯やるだけだっけって思うこと。

そう思ってるだけで、一番なんだよ。何物にも変えがたい。もうもってるんだなあ、それだけで………うん。

「オペレーターに怒られた副隊長が哲学言い出したでござる………やだ、意味不明………」

ユウ、悲しみの出撃。

このあと滅茶苦茶討伐した。

なお今回の出撃の際、ユウ指揮の下、ブラッド隊は発足以来の戦績を上げることとなる。



つながりとは、一体何なのだろうか。

熱い雫に打たれながら、シエルは思う。

手がある。指先がある。白い指が。自分の指が。

今日の任務で、グボロ・グボロの突進に“引っ掛けられ”、左腕が複雑骨折、指は皮一枚で繋がっていて切断寸前となるまでの傷を負った。

それが数時間もせず、今や熱いシャワーを浴びられている。

回復錠の効果たるや、かつて自分を囲んでいた研究者達が絶賛していただけのものはある。

ミツシヨンジルトは、SSSと評してもよい程の結果だった。

皆目立った外傷も無く、呆としていた自分が不覚傷を負ったのみ。

自分が戦闘指示をした際は、良くてもAAといったところだろう。

戦闘行動中にさえ明らかでない違いがあった。正に生き生きとしていた、と表すべく動きであった。

ブラッド隊が一つの意思を持った群れとして、“狩り”を行っていた。

不思議な感覚だった。

自分の思考が他者の思考となり、他者の思考が己の思考と同調するかのような。

誰がどこにいて、どれだけのライフバイタルであって……
全てが手に取るように解った。

そして何よりも、言葉では表せない深い部分からの一体感があった。

現場指揮を執った副隊長曰く。

——戦闘指揮執る奴の感覚を共有するっていうか、なんていうか、プチ感応現象みたいなのあるっぽいよね。

視界のこう、右上のあたりにミニマップみたいなのが表示されて

さ、それでみんながどこにいるか解るような感じ？　みたいなの？

バイタルサインはこう、左側にさ、色分けされた体力ゲージみたいなのがあって、あと残りどんくらいかってすぐ解るっていうか。

回復柱のタイミングそれで測ってたり、俺はそんな感じに戦場が見えてるんだけども。どう？

曖昧な物言いであったが、あの気難しいギルバートすら頷いて聞いていた。

そして、自分もまた。

自分が戦闘指揮を執っていた時……でしゃばるつもりは無かったが、効率重視のために指示をせんとしていた時は、このような感覚は得られもしなかった。

自分達は、ブラッド隊は間違いなく、“一個の存在”となっていた。副隊長との指揮の差。

この違いは一体、どこからくるものか……それを戦闘中に考えて、そして負傷した。

戦いの最中に気をやるなど、猛省せねばならない。

こんなことだから、最終ロットにまで“残されて”しまったのだ。シャワーの雫が乳房の間を通る。年々重たく感じるようになったそれを持ち上げれば、下に溜まっていた血染みが排水溝に赤錆の筋を残して流れていった。

ボディソープを手にとって、軽く泡立ててから、肌の上を滑らせるようにして塗りつける。

レア博士と、そして名も知らぬ彼女から習った、身だしなみ。

ほとんど“香り付け”のためのようなものだ。

ゴッドイーターとなった者は、不必要な老廃物の排出がほぼ無くなる。

代謝機能はむしろ活発化するが、汗、垢……その他排泄物諸々は、おそらく体内のオラクル細胞が捕喰し、エネルギーと化しているのだろうか。

バースト化するための非戦闘時の貯蔵エネルギーは、常日頃のオラクル細胞による老廃物の捕喰によってまかなわれていると考えられ

る。

急所を保護する体毛すらも、女性ゴツドイーターは腕輪を嵌めたその日から、少しずつ薄くなっていく。

男性では、顕著なのが髭といった男性ホルモン由来の体毛である。手足や脇といった体毛は、一説によればフェロモンの発散器官であり、またその材料が皮脂からなる老廃物であるとも言われている。生殖を目的としないならばそれら体毛や老廃物はムダなもの。つまり、オラクル細胞の格好の食料であるわけだ。

オラクル細胞がとりわけ顔面の体毛の眉毛や髪などは捕喰せず、髭や産毛の毛根と老廃物しか捕喰しないのは神機の偏食傾向であるとも言われているが、事実は解明されていない。

ただし、常人と比べて老廃物の排出が圧倒的に少ないといえど、皆無というわけにはいかない。

洗浄は大事である。

「ん……」

かつては適当に水で流すだけであつたが、女の子はそれではいけないとレア博士が教えてくれたやり方の通り、指先で洗浄する。

前、後ろ、その間……指の腹がなぞる度に、刺激が奔る。冷たく、寂しく、不快な刺激が。

何故女性には空虚な部分があるのか、レア博士に聞いたことがある。

今にして思えば愚かな質問であるが、あの頃は未だ性能のみを追求しており、生殖はもとより一般知識についての欠落があつた頃だつた。

「大事な人に埋めてもらうためよ」とレア博士がその髪よりも赤く顔を染めて、しどろもどろに教えてくれたのを覚えている。

「博士は埋めてもらったのですか」と問うと、「まだよ」と泣きそうな顔をして言っていた。

知識の欠落を理解したのだろう、レア博士は急に真面目な顔つきになると、肩を痛いくらいに掴んで真っ直ぐに言った。

「貴女の心の穴を埋めるもの、それはきつと、愛というものよ」

「では、レア博士がその愛をください」

「私は……駄目よ。私では駄目なのよ……」

レア博士はくしゃくしゃに顔を歪めて、今にも零れ落ちそうな涙を目に溜めていて。

何か失礼なことを言ってしまったのかと、頭を下げた。

違うのよ、とレア博士は何度も目を擦る。

「いつかきつと、きつと、あなたを愛する人が現れる。きつと、必ず……信じて、シエル。きつとあなたは運命と出会う。」

きつと……例えば、あなたの生きる道が地獄であつたとしても。手を取り合つて、その地獄を進もうと言ってくれる人が……

あなたが手をつないだその瞬間、 “あたたかい” と思える人が、きつと……きつと……きつと……！ それが愛よ、シエル。愛

なのよ」

愛とは何か。

つながりとは。

あたたかい、とは一体何なのか。

「わたし、は……」

シャワールのバルブを捻る。

冷水を止めた。

熱湯が、肌を赤く爛れさせる。

寒い。

震えるほどに。

まるで、空に落ちていくかのようだ。

この世界の空は、酷く空虚で、そして冷たく、残酷だ。

無限大な夢の後の、何も無い、蒼が広がっている。

手がある。指先がある。白い指が。自分の指が。赤く腫れていく

自分の指が。

手を差し伸べてくれた人はこれまでもいたのだろう。

レア博士……白い部屋の子供達……あの名前も知

らぬ女の子。

そして、手紙を送ってくれる親愛なる “あなた” 。

多くの手を、見過ごしてきた。

鈍い自分に嫌気が差す。

初めは、痛みに鈍くなった。次に思考が。そして、感情が。ブリキの人形のようになっていく自分を見て、多くの人が救わんとしてくれた。手を差し伸べてくれた。

何故それに気付かなかったのだろう。

何故それに心動かされなかったのだろう。

無感動だった。

まったく、心が揺り動かされることがなかったのだ。

それはただ薄情者であったというだけなのだろうか。

それとも、人の心を失ってしまった人形だからなのだろうか。

愛は素晴らしいものだと言った。

それはきつと救いなのだろう。

きつと、この錆付いた心が再び蘇るような、奇跡を起こすものなのだろう。

だから——私は、救われてはならない。

こんな所で救われてしまったら、私のために命の全てを投げ出したあの子の死は、一体何だったというのか。

ここで救われてしまったら、これまで手を差し伸べてくれた多くの人たちの行いが、全て無になってしまふのではないか。

目の前にある手によく気付いたからとそれに飛び付くのは、差し伸ばされた手を、救いを、選ぶが如く行いである。

きつと「過ぎ去ってしまった人たち」は思うはずだ。

これまで手を差し伸べてやったというのに何故こんなところで、と。

目の前にある手を取らんとするのは、これまでにあつたあたたかな手を振り払うことに等しい。

それは許されないことだ。

だから、私のような無価値な人間が、ああ………「あたたかさ」を望んではならないのだ。

それは望んではならないものなのだ。

だから・・・・・・・・だから。

ああ・・・・・・・・こんなことを考えることが、既に――。

「作り物の空（シエル）は・・・・・・・・嫌い、です」

この身体になってから、ずっと、酷く寒い。

ただ無性に、親愛なるあなたからの手紙を読み返したかった。

□ ■ □

「なぜ最前線の極東地域にこのフライアを向かわせるのだ？」

「極東支部においてブラッドと神機兵運用の実績がほしいのです」

「実績ならこのあたりのアラガミだけでも十分だろう。何もあんなアラガミの巣窟に行く必要はない」

「神機兵の安定した運用を目指すなら、もっと様々なアラガミのデータがなければ本部も認めてくれません」

「しかしな・・・・・・・・」

「局長。極東支部には現在、葦原ユノ様があります。本部に対しても発言力のある彼女への助力ならば、決して無駄な投資ではないかと」

「ふむ・・・・・・・・レア君がそういうならば投資はしよう。だが、わかっているな？」

「ええ、どうやら綿密な打ち合わせが必要なようですね。この後、じっくりと・・・・・・・・」

「ラケル君、神機兵とブラッド、どちらも本当に損害を出さずに済むんだらうな？」

「うふふ・・・・・・・・ええ、大丈夫ですわ、グレム局長。きつと、どちらもすつかりと、あるべき美しい姿となるでしょう。ふふ、うふふ・・・・・・・・ふふふ――」



極東への急激な進路転換は、全職員誰もが困惑に値するものであった。

いわゆる「アラガミの動物園」であることのみならず、現在の極東地域は「赤い雨」が降り注ぐ危険地域である。

多数の職員の反対を押し切ったのは、グレム局長の強引な意見によるもの。

同調したのは研究部といったところか。

未だ真価を発揮しているとは言いがたいブラッドの潜在能力と、神機兵の戦闘データ取りのためであろう。

フライアは先進技術の実験施設という側面が強い。

極東は技術の独自進化が異常な地域ではあるが、その土台は既存技術からなるものだ。

技術の発足地、パイオニアと言ったところであろう。それがフェンリル極致化技術開発局、フライアである。

ユウもフライア配属当初に、神機兵ドックに見学として足を踏み入れたことが何度もある。

まず、圧巻の一言。

ずらりと並んだ神機兵と、その保管スペースの広大さに声を失った。

そして恐ろしいのが、フライア職員に限った話ではあるが、これが許可を求めれば普通に見学出来てしまうというところ。

ドックにカプセル詰めになされて並ぶ幾タイプの神機兵。

最重要とされる制御系、駆動系はさすがに開示不可であったが、見られたところで何も隠すことは無いと言わんばかりの情報管理体制である。

この時になれば神機兵のテレビコマーシャルがひっきりなしに各種番組に差し込まれていた。

このドックで撮影されたものであるのだろう、見覚えのある場所がいくつかあった。

応用力は極東と優劣付け難いとはいえ、技術の地力は敵わないものがある。

それを肌で感じる事となった。

——いつらつないないなにもーすっててしつまおっおー、次の強化素材売って気付くー。

チケットー交換ーがまんできなない、僕は周回するよっおー。

さて深夜帯ともなれば不夜城フライアといえど、ブラックライトの科学光が夜を深くし、足音を暗闇の静けさに響かせる。

極東への舵を取ったフライアは、現在通常航行船速で移動中である。

キヤタピラの駆動音と振動を居住区まで届かせないのは、流星は移動拠点である。

これまでは大陸方面で活動していたフライアだったが、極東へ向かうと決まり、ユウもかなりの動揺をしている自覚がある。

こうして夜中ふと目が覚め、空腹に眠れずに自動販売機へと向かうことになったのも落ち着かないからだだった。

自費で購入せねばならないが、深夜であっても食物が買えるのだから、フライアの自販機はありがたい。

極東の自販機は冷やしカレードリンクや、初恋ジュースといった、人知では理解が及ばないドリンク的な代物しかないのだからして。

ユウはポケットに適当に放り込んだフェンリルクレジットカードを弄る。

確実にまた面倒な事態が起きる。

間違いない。

それはもう火を見るよりも明らかで、帯電中のヴァジュラの正面に立っていたらどうなるか簡単に理解できるくらいに危険な事態となるだろう。

主に、ユウ個人にとって。

潜入先の機関が、普通に通常業務として極東へ逆戻りするなど、誰が予測出来ようか。

エミールは拳で解らせたが、コウタあたりに普通に名前を呼ばれただけでアウトだ。

コウタは最近驚くほどの隊長位適正と知性を発揮し始めたのだから、まあ大丈夫かもしれないとして、その他の面子が危なすぎる。

そも、自分は極東では悪い意味で目だっているのだから。

フライアでもそのようになりつつあるのが悲しい。

今日の任務でもそうだ。

ギルが「さすがだな。お前の指示は動きやすい」と絶賛していたが、正直ほとんど何の指示も出していない。

だいたい、自分の指示は「ガンガンいこうぜ」か「いのちだいじに」くらいしかないというのに。

集まれか策敵しろくらいは端末を鳴らすか狼煙を上げるかして知らせるが、それだけである。

論理的な命令をしてすらいけないというのに、それでも戦績として数字が上がっているのは、単にゴッドイーターに基本的に備わった「連係機能”によるものだろう。

ゴッドイーターには感応現象を起こすまでとは言わずとも、お互いに脳同期を自動的に行う機能が備わっている。

いわゆる、一流のスポーツチーム内でよく発生するアイコンタクトや、武道家が言うところの相手が何を考えているかが解る、といった能力の拡大版である。

これをどれだけ活用できるかというのが、ゴッドイーターの部隊運用の要であるというのが、ユウの持論である。

そんなことを得意気に語ったからだろうか。

何故かいつの間にか外部からのゴッドイーター達への研修を開く羽目となり、これも何故かフランが研修会のプランを立てていたことを後で知り、そして研修会当日に最前列に座っていたのはジュリウスだった。

こういうのが好きそうなシエルならいざ知らず、何故お前がいるのかとツツコミを入れたくとも、横に立つアシスタントのフランが冷たい視線を送ってくるためそれもできず。

適当に述べた誰もクスリともしないジョークを猛烈な勢いでメモされるのは、心にくるのでやめて欲しかった。

外部への教練など一応は新任の副隊長にさせる仕事ではない。

こうして、訳のわからない立場が作られていく様をひしひしと実感しつつあるユウであった。

もう全部榊博士のせいだということにして思考放棄している。

「……げな……きや」

深夜に空きっ腹を抱えるつらさは異常である。

その異常を止める程の、さらなる異常が、ユウの足を凍りつかせた。女の声が、した。

「に……むきあ……」

シャリン……ガタン——シャリン……ガタン——。

薄暗い廊下、自販機の明かりに照らされて、そこに少女はいた。

フェンリルクレジットカードを読み取り機に押し当てては、ボタンを押し、物を取り出す。

延々とそれを繰り返している。

シャリン……ガタン——シャリン……ガタン——。

何を買っているのかは知れないが、巨大な袋を引きずっていて、それに購入した商品を放り込んでいるようだ。

「にげ……で、む……なきや」

ぶつぶつと、何かをつぶやきながら。

延々に、ルーチンワークを繰り返している少女。特徴のない白い寝衣。

髪をざらりと流している少女の顔は、俯いていてようとして知れない。

だがユウにはその少女に見覚えがあった。

常は露出が多い服装を好み、まとめ上げた髪の毛、活発な少女を。

—— ナナ？

「……………で……………あわなきや……………」

ナナだ。

髪を下ろして表情は見えないが、ナナに違いない。

何をかを呟きながら、自販機のボタンを押し続けるナナ。

まるで夢遊病のようだとユウは思った。

虚ろな目。

ぐらぐらと揺らぎ、重心がぶれている体。

同じ言葉を延々繰り返していることから、意識ははっきりとはしていないだろう。

もしそうであるならば、覚醒を促す刺激は与えてはならないとも言われている。

その行為を止めていいものかどうか迷う。

「逃げないで……………向き合わなきや……………」

シヤリン……………ガタン——シヤリン……………ガ

タン——。

そんなことを数分繰り返していれば、自販機のボタンに赤いランプが灯る。売り切れのサインだ。

ナナが買い続けていたのは、栄養剤。

特殊栄養補助ドリンク剤である。

カチ、カチ、カチ……………と十数回はボタンを押し続け、よう

やく諦めたのだろう。

ナナは袋を引きずって、自室に向かってだろう、引き返そうとする。

「逃げないで……………向き合わなきや……………」

—— ナナ。

「逃げないで……………」

視線が絡み合った。

焦点の合わないくすんだ瞳が、ユウを映す。

「あ——」

にこり、とナナは笑った。

下ろした髪の間隙から、ドロドロに濁った目を除かせて。

「逃げた人だあ」

ゆらりと差された指は、細く、長く、ガラス細工のように美しく。ユウの秘された内側の薄皮を剥がすかのように、鋭利だった。

「あは……あはは……あはは……あは、はは、ははは……」
くすくすと笑いながらナナは自室へと続く廊下へと消えていく。
まるで幽鬼の如く――。

裸足がぺたぺたと廊下を歩む音。袋を引きずる音が、ユウの耳にこびり付いて取れない。

気が付けば、窓から朝日が差し込んでいる。

数時間もこの場に立ち尽くしていたのか。

ユウの背には、じつとりと脂汗で透けたシャツがへばり付いていた。

寝心地の悪い鋼鉄の寝台が背中の中を奪っていく。

腕輪の換装時に使用された適合台に、ぼんやりとユウは横たわっていた。

天井から吊るされたモニターに映るラケルの微笑みに生返事を返しつつ、時が過ぎるのを待つ。

定期健診。ラケル博士による問診の、質疑応答中である。

ブラッド隊はその発足から現在に至るまで、新機軸の理論と技術とで構成された部隊である。

その体一つとっても機密の塊りだ。とても通常の医療職員では検診を任せられない。

ブラッドの身体、心理的データは全てがラケルの統括として一括管理されていた。

定期健診もまた、ラケルの領分である。

心理ストレステストも兼ねての問診は、ラケルの性格が反映されているのだろう、難解な例えが多くて辟易とさせられた。

榊博士の詩的な言い回しもうんざりさせられたものだが、やはり博士という人種はややこしい者が多いのだろうか。

極東に居たころも定期健診は嫌という程受けてきたが、どうにも勝手が違うのは、ここが技術の最先端を往くフライアであるが故。

今は第二世代機と呼ばれる可変タイプ神機も、ユウがゴツドイーターとなった当時は新型機であった。

出撃の合間を縫うようにひっきりなしにデータ収集が行われており、それが後続く新型機にフィードバックされ続けていたと聞く。

ただ、神経接合の問題上、検査には全身麻酔をかけなければゴツドイーターでさえ耐え難い痛みが付きまとい続けた。

第三世代機となりその点が改善されたのだろう。

これまでは事前に睡眠薬を投与され眠らされ、決まって検査明けは自室のベッドの上だった。それを考えれば痛みがないのはありがたい

い。

腕輪を解して神経にねじ込まれたオラクル細胞の棘。それを逆さにヤスリ掛けされるような激痛が、今となつては懐かしくも思える。全身をミミズが這い回るような不快感に目をつぶれば、だが。

『最後の質問をしましょう』

モニター越しに……黒のベール越しに、ラケルが微笑む。内側をどこまでも見透かしたような笑みだった。

事実、機器に繋がれた状態ではリアルタイムでバイタルがチェックされている。

脳反応さえ精査されているのだから、嘘も誤魔化しも利かない。全てがお見通しなのだろう。

それに苛立ちを感じている、ということさえ。

『あなたの『意志』は……ここに……ここに……ありますか？』

硬いベッドの上で首を傾げる。

質問の意図が解らない。

ここ、とラケルは自らの頭蓋を指し示す。

『あなたのその『意志』は、どこに宿っているのでしょうか？ “ここ”にちやあんと、収まっていますか？』

——ラケル博士、その……心理的なテストでしようか？ 答えの出ない問答で、ストレス耐性をはかる、とか？

『あら、あら、賢い子は好きですよ？ うふふ、ふふ……。少し、講義をしてあげましょう。そのまま、楽にして聞いていてください』

モニターからラケルの顔が消える。

代わりに映されたのは、3D映像……ゆっくりと回転する“脳”のモデリング画像が映された。

『大脳皮質、大脳辺縁系……前頭葉に、視床下部、扁桃体……人間の脳というものは、まさに芸術。

自然の中で進化した、他に代えない究極演算装置……。その演算は、全てが意志という一つの結果を出すために集約しています。

ええ、いわゆる心や、精神というものです。そう、心は脳によって作られるのです』

心……すなわち、意思である。

脳によって意思は、心は作られるとラケルは説明する。

映された脳モデルの、精神を司る部位や回路が明るく光る。

『脳はとてもデリケートな部位。ほんの少しの傷で……見た目にはわからないくらいに、ほんの少しだけの傷が付いたら、もう駄目になってしまう。』

オラクル技術全盛期の現代でさえ、脳のブラックボックスはほとんど説明することが出来ていません。

たとえ脳の損傷を元通りに治療する技術が生み出されたとして、果たして治療を受けたその人は、“前”のその人と同じと言えるでしょうか？

脳をメモリの集合体と考えるならば、治療とはメモリの増設であり……ワークスペースの拡大でしかありません。

そのメモリを行使すべき意志は、どこからきたのでしょうか？ どこから生まれたのでしょうか？

“遊び場”が拡大しただけだというのに、まるで別人となってしまっていたのなら、意思とはいったい、どこに宿っているのでしょうか？

——ラケル博士、質問の意図が……

『意志とは、脳のネットワーク。その形を言うのだとしたら。』

神経細胞が生み出したニューロンの火花、その総体であるのだとしたら。

さて、そこに異物が混入した時……脳のカタチが変わってしまったのだとしたら、果たしてその意志は“その人の”であると言えるでしょうか？』

背筋にヒヤリとした冷たさがあった。

硬いベッドの、鋼材の冷気ではない。

『そもそもゴッドイーターとは、神機を持つ者を指す言葉ではないのです。』

偏食因子を体内に投与された者を指して、ゴッドイーターと言
う……その偏食因子が、人体組織を微量のオラクル細胞に
置換し、様々な恩恵をもたらすこととなる。

筋力の増加。感覚の鋭敏化。保有するエネルギー絶対値の上昇。
外気呼吸によるオラクルパルスの摂取蓄積。

少しの刺激……回復錠による治癒能力向上も解りやすい例
でしょう。あれはオラクル細胞に餌をやっているのですから。

ゴッドイーターの超常的な戦闘能力。それらは全て、オラクル細胞
があなたの体に結び付いてもたらした恩恵なのです。

そう……感応現象もまた——
『知らず、ユウの指は額へと伸びていた。』

モニタに映らずとも解る。

ラケルはきつと今、満足そうな微笑を浮かべていることだろう。

『感応現象とは、微量のオラクル細胞が脳神経へと融合した結果、発生
する現象です。』

さて、ユウ……私が言いたいことが、賢いあなたならばも
う、解りますね?』

——脳にオラクル細胞が混ざった……俺の心はも
う、以前のものとは違う……俺のものではない、と?

「ある者は——孤高の頂へ望まず昇り。

ある者は——劣等感を澱のように募らせ。

ある者は——罪過を自ら重くし膝を着き。

ある者は——自我を封じ救済という名の苦痛から逃れ。

ある者は——記憶を捨てることで憎悪の牙を引き抜いた。

全て……そう、全てが戦うために。戦うという、意志の名
の下に——」

しかし、果たしてその意志とは、いったい誰のものなのか。

ラケルが微笑む。

微笑みという名の無表情を脱ぎ捨てて、真に。

『脳神経にオラクル細胞が癒着した者は、大小の差はあれど、皆精神に
何らかの変調を来たします。』

多くは元来持ち得た人格の肥大化……ゴッドイーターらしくある、ある種の勇ましきや傲慢として。

あなたはたくさん、たくさん見てきたはず。幼い第二世代のゴッドイーター達が、喜び勇んで勇敢にアラガミへと立ち向かい、そして無残に散っていった様を。

即席でゴッドイーター《インスタントソルジャー》となれるのは、それなりの理由があったということ。

アラガミ相手に命を掛けさせるというのに、ゴッドイーターのメンタル面へ向けた訓練は驚くほどに少ないのは、これが理由ですね。

戦闘への恐怖を取り去る後催眠暗示、マインドコントロールも不要となるのですから、ローコストで素晴らしいですね。これ以上ない、兵士の作成方法であると言えるでしょう。

全て、あなた達の脳に住まうオラクル細胞の、命令によるものですよ。

戦え——そして、食らえ、と』

ゴッドイーターの戦闘力は、身体に宿るオラクル細胞に因る。

そして、オラクル細胞を飼っている以上、捕喰の宿命から逃れることが出来ない。

それは身体内部の老廃物や、生体電流などでまかなわれているのだと言われてきた。

だが、そうではないのだとしたら。

オラクル細胞そのものの研究は、実際はアンタッチャブルなものとして化している。

その性質は解明されつつあるが、本質はまるで解っていないのだ。

榊博士は、第二世代以降の感応現象の要因は、神機由来のオラクル細胞であると言っていた。

神機が望むもの……それは、アラガミを喰う事に他ならない。

『精神の後ろ暗い部分が肥大化したとして、しかしその「ストレス」がなければ戦えないのだとしたら、「そうする」のが自然ではないでしょうか?』

宿主の脳を知らず支配し、自発的にアラガミと戦うよう仕向けているとしても何ら不思議ではない。

その理由が、ストレス……抱えた苦悩であつたとしても。むしろそれを巨大化させることで、戦うための枷とするのではないか。まるで、首輪を付けられた闘奴のように。

寄生生物が、宿主の行動や思考を歪めることは、自然界では全くおかしいことではない。

脳に結びついた神機型オラクル細胞が、寄生虫じみた働きをしたとしても、むしろ道理である。

人間に搭載された精神というシステムが戦闘に適さないのだとしたら、それを改造することさえしよう。

神機の世代が上がる毎に脳とのオラクル細胞の結び付きが強まるのだとしたら。

ブラッド隊の面子は、既に――。

――つまり……第二世代以降のゴッドイーターは、より戦いに適した形へと、その意思が整形されている、と？ 極めて自然にみえるように？

モニタにラケルが戻る。

その表情は、常の微笑みの無表情へと立ち戻っていた。

ただ、その瞳には、計り知れない程の深さ……暗い虚が感じられた。

『同じ質問をしましょう、ユウ。』

二世代機間に渡り、神機から長期間の改造を受け続けたあなたの脳は、あなたの意志が、ちゃあんと保存されていますか？

感情の分離、自我の剥離が著しいあなたの精神構造は。

戦いにおいて、まるでゲームのキャラクターを動かしているかのようを感じる、あなたのその感覚は。

親しい友人と話していたとして、思考と感情が表に出ることがない、あなたの矛盾した思考体系は。

かつてのあなた……あなた本来のものであると、証明できませんか？

あなたの『意志』は……『ここ』にありますか？』

俺は。

ユウは寸瞬、答えに詰まった。

その問いを肯定することは、今のユウには不可能なことであった。告白するならば、この意思が、確かに自分のものであるなどと思つてはいない。

明らかに外部からの操作を受けている。それを自覚している。

神機からの改造……改良を受け続けている。

人は神機と、脳というワークスペースを共有しているだけなのか。それとも、意志に寄生する何か……それが神機というアラガミの在り方なのだろうか。

——意志とは、ただの情報に過ぎないとは、俺は思えません。

脳から生み出されるだけのもののだとしたら、心とはあまりにも……非合理的すぎる。

精神が物理的なものであるのだとしたら、合理的でなければならぬい。

自分の命を捨てて誰かを代わりに生かそうなんて、思うことすら許されないことでしょうか？ でも、俺は何度もそれを見てきた。

俺がそうであるように、意志もまた矛盾に満ち溢れている。そうとしか言えません。

人間存在とは、脳神経が織り成す輝きの、影でしかないのでしょうか。

俺はそうは思えません。

人間の本質が意志なのだとしたら、その意志はどこにあるのか、どこから生まれるのか……俺には解りません。脳ではないと、そう思います。

でも、一つだけ解ることがあります。感じているだけ……それこそ、脳の錯覚が生み出した幻想なのかもしれません。

きっと博士の言うそれは、『ここ』にはない。そう思っています。確信があります。でも、どこにあるかは。

心とは……精神とは……意志とは……何
なんでしようね。一体どこにあるものか、俺も知りたい。

ユウの独白は、一定の満足をラケルにもたらずものであったらしい。

くすくすと笑うラケルは、また無表情の微笑みではなくなっていた。

先生が生徒の至らない回答を可愛がって笑うような、そんなくすぐったさを感じて、ユウもまたつられて笑ってしまった。

初めて、ラケルと通じ合えたような気がした。

『ならば、探すとよいでしょう。ブラッドとは、血の意志を刃に掲げる者達。意志の力を振るう者達。あなたの答えを、この意志の舞台《部隊》で』

——博士も、ジョークを言ったりするんですね。それもあんまり上手くない……。

『解っていても、言わない方がいい事もある。解りますね、賢いユウくん?』

——ひえ。

かつて、ある科学者が言った。

魂は存在せず、精神は神経細胞の火花にすぎず。

神のいない無慈悲な世界で、たった一人で生きねばならぬとしても、なお。

なお、我は意志の名の元に命じる。

「生きよ——と。そう……生きておらねば、何を為す事もなく、為されることもないのですから。

ええ、ええ……生きなければ。生きていてもらわなければ。だって、そうでしょう?」

電源の落ちたモニタは、ラケルの声をユウに運ぶことはなかった。

あるいは聞こえていたとして、果たしてユウに何か出来ただろうか。

きっと、届くことはない。

それは積み重ねた意志の差。

今は未だ――。

「生きていた」ものでなければ……とても食べられませんから、ねえ？」

□ ■ □

祈れと言われたことがある。許しを乞え、と。

ずっと幼い頃の話。何が癩に障ったか解らないが、サディズムに富んだ戦技教官に、眼窩に拳銃を突き入れられた時のことだ。

足が泥になる程に殴られて、耳などどうに塞がれてしまっていた。ただ、口の動きがそう言っているように見えた。

なぜそうしろと言ったのかは解らない。ただ、言われた理由は解っていた。私があまりにも劣等品だったからだ。

これは処分だった。

当然であると思った。

自分などよりももっと有能な子が先に処分されたのは、単にこの教官の気紛れにすぎなかった。

むしろ、自分がなぜここまで残っていたのかが不思議に思っていた。

堅い銃口を押し当てられ出血する眼球で、鉄の冷たさを感じながら思ったのは、処分相当は当然である、という納得である。

この教官の、不必要な趣味的言動が、自分を生かしていたにすぎなかったのだ。

子供達を殴り、悲鳴を上げさせ、儀式めいた文句を謳い処分を下す。泣かない自分を我慢強い子であると勘違いし、最後のデザートとして残しておいたのだろう。

激鉄が起こされ、引き金に指が掛かってもなお、私は泣かなかった。

処分されることは当然の事である。感傷など抱きようもない。当たり前前に、心が動くことはない。

あるいは、心など、私にはなかったのかもしれない。

ロボット・シエル。

私はきつと、心までもブリキで出来た、おもちゃの人形だ。

「父よ。天にまします我らの父よ。ねがわくは――」

続けて唱えよと命じられた聖句を、何の感慨も無く述べる。

許したまえ。

おお、許したまえ。

掴み上げられた腕が折れてもなお感情の色を見せぬ私に、教官が激昂する。

果たしてこの命が閉じられるのは、聖句を言い終わるのが先か、教官の辛抱が切れるのが先か。

聖句曰く、願わくば。最後の望みを述べますは。

最後の、願い。私に願いなど、そんなものはあつただろうか。それを抱いたことなど、あつただろうか。

突きつけられた拳銃。引き金が軋む。

願いとは。望みとは。許しとは。

わからない。

ただ、ふと、思ったことがあつた。

手紙の返事を、まだ書いていなかったな、と。

ああ……最後に、願わくば、手紙を書きたい。

久しぶりに手紙をくれたあの人に、どうか届きますよう。

文面に元気がなかったように感じたあの人へと、希望に溢れた言葉を尽くし、手紙を書きたい。

それと呼んで、微笑んでくれたなら。

それだけで、私はもう。

ああ……それだけが、私の願いだった。

何の色もない、空のような生の中、私がたった一つ抱いた祈り。

どうか、君が笑っていられますよう。

願いはあつた。ここに、あつた。

ならばきつと、私の命に、意味はあったのだ。

許したまえ。ああ、君よ、許したまえ。

君が心を尽くしたであろう手紙の返事を、私は書くことができな
い。

どうか気分を害さないでほしい。

ああ、ああ。少しだけでいい。

ほんの少しだけでいいから。

だから。

引き金が引き絞られ。激鉄が落ちた。

鉄を叩く音。

命の終わる音を聞いた。

「よかった」

死神の鎌の如く、弾丸は命を容易く奪っていった。

弾は、シエルの眼を穿ち脳を破壊する……はずだった。

顔面に降り注ぐ生暖かさは、返り血の飛沫。

目の前にいる教官が、頭部のいくらかを失って、ぐらりと倒れ込
んだ。

拳銃が、暴発したのだった。

「これで、返事が書ける……」

支えを失って崩れ落ちる体。

浴びた血が、まるで涙のように頬を伝って落ちた。

きつと私は、微笑んでいるのだろう。震える手足は歓喜によるもの
に違いない。

全身が何故か、眼球に感じた銃口よりもなお冷たく、寒く、震えだ
す。

ポケットに忍ばせていた手紙を取り出す。震える指先が、送り主の
名を撫でた。

寒さが消えることがない。吐く吐息までも凍り付いてしまいそう。

きつと、こんなにも寒々しい灰色の空の下にいるせいだ。

命が消えるのは当然で。この世界では誰がそうなったとしても不
思議ではなく。だからまた、こうして生き延びたのはただの偶然で。

だから、願いは、希望は……抱いてしまえば虚しくなるだけだった。

だって——それが叶わぬことと、理解し切ってしまっているのだから。

ならば、魂まで凍りつくかのような寒さはきつと、身の内側から染み出したものなのだろう。

知らねばよかった。こんなものなど、でも。

「ふ、ふ……」

私はただただ、手紙を胸へと掻き抱いた。
なんて、冷たい——。



「お帰りなさい、ジュリウス隊長」

「フラン！ ブラッド隊はまだ現場か？」

「はい。まだ神機兵の随伴任務から帰還しておりませんが」

「戦闘状況は!？」

「神機兵γは大型アラガミとの戦闘テスト終了後、待機。現在データ送信中です。」

神機兵βが小型アラガミと戦闘続行中。シエルさんがその護衛に当たっています」

『こちらシエル、神機兵β背部に大きな損傷。フライア、判断願います』

「了解。神機兵βを活動停止します。シエルさん、アラガミを撃退し、神機兵を護衛してください」

「待て、フラン！ 帰還の途中で赤い雲を見かけた！ ここはもう極

東区域だ、あれはおそらく……」

『こちらギル。ここからも「赤乱雲」を確認した』

『すつげえ……初めて見た。本当に赤いでやんの……』
「小型のアラガミであるからと、シエルに単独で当たらせるべきではなかったか……！ 総員即時撤退だ！ 一刻を争うぞ！」

『いいえ、隊長。既に赤い雨が降り始めました。ここからの移動は困難です』

『マジかよ……！』

『ねえ、シエルちゃん、大丈夫なの!? 確か赤い雨にうたれたら、病気になるっちゃうんでしょ!? 致死率100%だって……』

「全員防護服着用！ シエルはその場で雨をしのぎつつ、救援を……」

「待て！ 勝手に命令を出すな！」

「グレム局長……！」

「神機兵が最優先だろう。おい、その、なんとかいう奴聞こえているな？ アラガミに傷つけられないように守り続ける」

「馬鹿な！ 赤い雨の中では戦いようが！」

「俺が！ ここの！ 最高責任者だ！ いいから命令を守れ！ 神機兵を守れ！ 命に代えてもだ！ わかったか！」

「人命軽視も甚だしい！ あの雨の恐ろしさは貴方も知っているはずだ！」

「それがどうした？ 貴様達は死ぬのが仕事だろう？ 人命？ お前達ゴツドイーターが、人と同じ命だと？ 馬鹿馬鹿しい」

「それが局長の言う言葉か……！」

『隊長……隊長の命令には従えません』

「シエル！ それは、俺の言葉だからか？ すまないと思っている。過去の俺が吐いた言葉は、もう飲み込むことは出来ない。

幼さ故の無知だったと言い訳するつもりもない。心から謝罪する！ だから頼む、シエル！ 俺の言うことを聞いてくれ！」

『いいえ隊長、いいのです。私は何とも思っていないません』

「シエル！」

『不十分な装備での救援活動は、高確率で“赤い雨”の二次被害を招きます。よって上官であるグレム局長の命令を優先し、各部隊現場で待機すべきかと考えます』

「自分だけでなく、皆にも戦い続けろと……！ シエル、頼む……どうしたらお前に、お前の心に届くんだ……」

「だめです。無線が切られています！」

「ふん……なかなかよく躰けてあるじゃないか。結構結構」
『アーーーーッ!?』

「今度はなんだ!?!」

「クジヨウ博士からです!」

『副隊長! 困ります! あーっ! 副隊長副隊長副隊長! あーっ! 困ります! あーっ! 副隊長困りますあーっ!』

「ユウか!?! ユウが何かしたのか!?!」

『えっと、ナナよりフライアへ。えっ……とね、その』

「ナナ! ユウが……副隊長が動いたんだな!」

『う、うん……えっと、副隊長が、その』

「そうか……いや、なら、いい。あとはユウに任せておけ。神機兵がいなければ任務もなにもないだろう。全員撤退しろ!」

『お、おいジュリウス、アイツ放っておいていいのか?』

『すげーっ! すげーっ! いいなーっ! 俺も俺も! なー、俺も!』

『嫌いぞロミオ! それどころじゃねえだろうが!』

「いいさ。放っておけ。どうせ、生きて還える。フツ……はははっ! ユウのやつ、まったく!」

「おい、ふぎけるな! 何が起きている! 報告しろ!」

『えっと……副隊長が、ね? 神機兵に乗って行っちゃった……』



ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！
ちよつと触ってみたかっただけなんです！

だつてリアルロボじゃん？

超かつこいって、少しくらい触つても怒られないよねって、そう
思うじゃん？

変なところ触っちゃって、背中ばかりつて開いて、びっくりして転ん
だ拍子にコックピットにジャストイン！

しちやつてからのオートコマンドが何かバグって、勝手に動き出し
ちやつて、たぶん任務失敗したりしてても！

お、俺のせいじゃないよね？ ねっ？

俺は悪くねえ！

いや、ちよつ。

こいつ、動くぞ！

！
なんかぐんぐん加速してるっていうか、このGの掛かり方はヤバイ

！
どうヤバイっていうか、神機兵が自分の稼動で軋んでるくらいヤバ
イ。絶対これ限界機動超えてるでしょ！

うわー何か超バーニア吹かしてる音がするう。

ひいひいひい速いひいひい死ぬうううううう！

！
アアアアアムシンカアアアアウトアウトアウトウウウウウウツ

！
空中で二段バーニア吹かしてクイックターンしてる！ すごい！
やめて！

明らかに限界値超えたオーバードブーストしてアラガミ振り切つ
てる！ 速い！ 死んじやう！

ミサイルサーカス避けるとかじゃないねんぞ！ 極東はだいたい
どこもアラガミサーカスだけど！

追加装甲とバーニアを空中でパージ！

走る！ 神機兵走る！

これって試作装備で捨てたらダメな奴ですよねごめんなさい！
おっとシユウ発見こんにちは！

ダイナミックお邪魔します！ サヨナラ！

も、もうだめ吐く・・・これ以上はもう吐いちゃう！

だからお願いおろしてえ！

もう限界！

限界だからあ！

「神機・・・兵・・・？」

つらいつらいきつい。

しかし小汚い戦場に吹く一陣の風！

おっぱ・・・シエル発見！

——シエル。

土砂降りになった赤い雨の中。

停止した神機兵の影の下、生気の失せた眼で雨に染みる地面を見る

シエルがいた。

神機をだらりと構えているのは、先ほどのシユウの群れと交戦しようとしていたのだろう。

真つ白な顔色は決死の覚悟か、あるいは諦観が現れたものか。

こちらとしては、群がるシユウ達を後ろから討つただけの簡単な仕事だった。

なぜシエルが未だ撤退していないのか。そういえばジュリウスが何か無線で叫んでいたが、神機兵を触るのに夢中で聞いていなかった。

逃げ遅れていたのか。危ない所だった。

都合よくコントロールが戻る神機兵くん。

こいつ、中の人絶対神機様だろ。

中の人って言い方おかしいけど、絶対これ中の人そうでしょ。

——こっちに来て、俺の下に。ここに座って。ほら。

人間のそれよりも何倍も大きな手のひらを差し出す。

シエルは何事か思うような、思わぬような、ぼんやりとした表情でしばらくこちらを見上げていたが、差し出された神機兵の手を椅子と

して腰掛けた。

雨にうたれた跡がないか、機械の眼が確認を始める。スリーサイズの情報や、透過撮影で衣服の下までモニタに映されたのは役得である。

停止した神機兵の肩を抱くようにして影を作れば、二機の神機兵が作る即席の対アラガミ装甲テントは、一人くらいであれば完全に赤い雨から身を守ることができる。

後は雨が止むのを待つだけだ。

額から汗が滲む。息が上がる。

そもそも無人型であり調整された訳でもない神機兵に、バグを用いた強引な乗り込み……ハッキングを掛けたのだ。

有人用神機兵であっても現在の段階では、ゴッドイーターでさえかなりのリスクを伴うものなのだ。

体に掛かる負担は、通常のそれとは比較にならないだろう。

骨が軋み、筋肉が千切れていく音がする。毛細血管が破れてじわじわと皮膚の下に血が溜まっていく。内臓のいくつかが振れたかもしれない。

でも声はあげない。

呻き声でさえも、飲み込んでみせなければならない。

本当ならいつもみたいに喚き散らしたい。でも、それは出来ない相談だ。

だって、そりゃあ……シエルに聞こえちゃ、まずいよな。

ただ静かに、雨の落ちる音だけを聞く。

「……………」

しかし全神経を手のひらに集中すれば、こんな程度の苦痛など吹き飛ばうものだな！

神機兵すごいね。感覚とかほんと生身のままみたいな。

手のひらの感覚までしっかり！

そう、シエルを乗せた、この手のひらの感覚までも、しっかりと！程よい重さ、スカートのフリルの手触り、ちよつと捲くれ上がったふともも部分の素肌の感触、汗でしっとりとした肌、ショーツのゴム

部分の凹凸………！

そして………そして………この手のひらに伝わる………
圧倒的感覚ツ！ ボリューム感ツ！

かつてこの世で最も尊ばれる聖人の一人が、こう述べた。

人はパンのみに生きるにあらず。

それは、人はたった一つの価値観で生きているのではない、という
真理を説く言葉。

単一からなる固定観念の否定。あらゆる価値観の共存こそが人の
道理であるとする真理。

すなわち………ムーブメントである。

人はおっぱいだけに生きるにあらず。

おわかりか？

——おいで。もつと体を預けて。今日は、少し寒い。

「………はい」

もつと、こう、もつと身を寄せて密着して。

大丈夫、大丈夫、ユウヲシンジテー。

ああ………シエルちゃんのしりえる柔らかいなりい………。

げーへへムーブメント！

手のひらの上がフィルダウスやー！

シエルちゃんの！ 生！ しりえる！

げーへへへ！ ムーブメントオ！ げーへへへ！

はあはあ。

これは神機兵の副作用で息が上がってるだけだから。

はあはあ。はあはあ！

息が上がってるから指がもによもによ動いたって仕方ないよね！

はあはあ！

！
割れ目にこうフィットして場所をさぐったりしても仕方ないよね

ねっ！

いいじゃん。

シリアスやる前にご褒美もらったてさ。

耐えられねーよちきそん。

え、もう限界だつてずつと言つてたっけ？

無調整神機兵に乗るのは苦痛だつて？

ああ、うん、そんなこともありましたね。

しかし！ すべては未来のムーブメントのために！

俺は限界を超えるぞーッ！

□ ■ □

リノリウムの床を靴底が叩く一定の音が、訥々と廊下に響いていた。

施設内最下層にある一角は、旧時代の古風然としたフライアにあつて似つかわしくない場所。

独房へと向かつて、シエルは廊下を歩く。

手には簡素な食事が盛り付けられたプレートが。

運ぶ足取りは常のシエルらしい一定リズムの洗練されたもの。

しかしその表情は、まっさらに漂白されたものであつた。

まるで人間味の無い、不気味なものに。

これまでであれば、そこには僅かな困惑が宿っていた。

他者との接触に恐れ、そして少しの希望を見出していた色が。

ハリネズミのジレンマとでも言うべき、どこか人を求め距離を測りかねているその姿を、皆好ましく思っていたものだ。

ブラッド隊の面々も、頭が堅いという点が不満とも述べてはいたが、それだけである。シエルの人格やその物事に向かう姿勢は否定してはいなかった。

それはシエルの根底に、何がしかの、人間として好ましい色を見出していたからだつた。

だが、今はもう。ナナですらシエルに対応しかねている。マネキンに愛想良く話しかける者がいたのならば、それはもはや人ではないからだ。

シエルはまるで、心が壊れて人間ではなくなってしまったかのようにだった。

故障した機械のような。

無機物が人の似姿となり、人を真似ているかのような、不気味な存在へとシエルは成り果てていた。

蒼白な顔色は、むしろそれが当然のものであった。機械に人肌など似合うはずもない。

赤い雨がふったあの日。神機兵のテストが施工された日に、シエルは人間的なあらゆる全てを取り零してしまったのだ。

いったい、シエルに何があつてそうだったかは、誰にも解らない。シエル自身にすら解らないだろう。

命の危機を目前にして、走馬灯染みた何かがシエルの脳内を駆け回り、そして決して失つてはいけないものを破壊し尽くした。

理解できることは、それだけだった。

「ユウに食事を持って行ってやってくれ」

ジュリウスは笑いながらそう言つて、食事のプレートをシエルに手渡した。

顔面が殴られたかのように腫れ上がっていたが、シエルは何も問わなかった。

他者のことなど、もはやどうでもよい………という態度ではない。他者はもはや認識の外にいるかのような、奇妙な感触があつた。入力に応答を返しただけ。これも不気味さの一環である。

ジュリウスはそれを正確に把握していたが、特に何も言うことはない。

「ん？ ああ、これか。駆逐最強は誰かという講談をしていてな。戦闘妖精だと言つたらどうも気に喰わなかつたようだな。なら、戦争しかないなど。まあ気にするな」

腫れた頬をさすつて照れくさそうに笑つていた。そこには無言の

信頼があった。

この男に似つかわしくない、男臭い笑みであった。

「過ちは雪ぐことはできない。失われたものは取り返すことが出来ない。なんでかな……あいつと話していると、それもまたいいような気がしてくる。」

新しいものを作っていくのには、何も無い、まっさらなところからの方がいい。からっぽだというのなら、良いものを詰め込みたいと、そう思える。

シエル、お前から信頼される隊長であるよう、俺は努力する。努力することを、俺は約束する。

だから、嫌味な奴だとは思わないでくれ。そう思われてしまったら、少し、その、男として惨めだ。

さ……ユウのところへ運んで行ってやってくれ。殴られた仕返しに飯を抜いてやったから、腹をすかせている頃合だ」

ゴッドイーターの指揮系統は、局長の意向が優先されることになる。

隊長の下した命令に背いたシエルは、しかし局長の命を遂行せんとしたために、何のお咎めもなしという結果になった。

だが、ユウは、独房にて謹慎処分。

副隊長にあるまじき行いであり、思想矯正が必要であるとの処断によるもの。

抑制剤を打たれ食事の時にのみ拘束を解かれるという、排泄も満足にできない程の、ゴッドイーターとしてかなり重い処分が下されることとなった。

ジュリウスの独断でかなりの融通が利くようになり、薬剤の投与は見送られ趣向品の差し入れも可とはなっているらしいが、独房が過ごしやすいはずもない。

めし……めしい……

独房の格子窓から両手を突き出して、うにうにと動かすユウがいた。

B級映画のゾンビじみた動き。

とても重処分をくらった副隊長には見えない。

「食事をお持ちしました」

—— ひゃっはー！ 飯だ飯だあ！

言うが早いかプレートを奪い取り、食事をかき込むユウ。

味はとにかく腹いっぱい喰えることの方が大事なだろう。栄養剤を溶かし込んだだけのペーストを美味そうに頬張っている。

スプーンを啜るたび、頬がありえない大きさに膨らんでいく。

—— ムシャコラ、ムシャコラア！

「あと、これも。どうぞ、頼まれていた紙とペンです。封筒と、切手も」

—— おー、サンキュー。いやー、やること無いもんだから、手紙でも書こうかなってさ。

「貴方も……」

—— うん？

「いえ、何でもありません」

—— そう？ ま、暇ならさ、ちよつと話し相手になつてよ。ジユリウスだと喧嘩になるからさ。ぽいぬだろうが常識的に考えて……」

どうぞ、とシエルは手を前で組み扉の前に立つ。

格子窓から見えるユウは、既に食事を終えていたようだった。

ペンと便箋、そして国際便の封筒をユウは受け取ると、慣れた手つきで便箋を壁へと押し当てる。

机など独房には備え付けられていないからだった。

話をしようと自分から提案しておいて、そつぽを向くなどと礼を失する行いであるが、そんな小さなことを気にする人間はここにはいない。

あるいは、人間ではなくなりかけているから、人の機微など気にならなく…… 気にすることが出来なくなっているのか。

—— そいやシエルも神機兵に乗ったことあるんだっけ。あれすごいね。自分の手足みたいに動かせたし、手のひらの感触まで…… うん。まあね、うん。

「神経接続がされていますから」

——神機兵に乗ってたのはゴッドイーターになる前のことなんだって？

「はい」

——ああ、子供の頃か。他にも搭乗者はいた？

「はい」

——訓練所ね。集団行動が初めてって感じじゃなかったのはそれかな。で、その子供達っていうのは、ゴッドイーター予備軍として？

「はい」

——初めから人材のプールとしてカウントされてたのか。適合する神機もないし、遊ばせておく余裕も時間もないしで、神機兵のテストに使ったってところか。

「はい」

——その暮らしはどうだった？ それなりに楽しかった？

「はい」

——みんな、神機兵に乗れば死ぬって、解ってたのにな？

「はい」

——ああ、一人だけ生き残っちゃったんだ。

ふむん、とユウは鼻を鳴らして曖昧に答えた。

日本人らしいどうとでも取れる反応は、聞くものを苛立たせる効果があるらしい。明らかに「解っていて」そのような対応をされているのだから、一塩であろう。

特に、後ろ暗い部分を抱えている者にとっては、嫌が応にも。

シエルの組まれた拳に、細い爪が喰い込んだ。

「貴方の行動は………理解に苦しみます」

結局のところ、シエルの鉛色の精神性は、防衛機構の一種でしかなかった。

鎖で編んだ鎧の隙間にすりと潜り込み、心臓を一突きする才。ユウの持つ戦いの才は、多くの死地を超え、心理の裏の読み合いにまでその領域を延ばしている。

神懸っているというよりは、もはや悪魔的だ。明確な自覚や意図もなく抉り抜いているのだから、魔物の所業である。

「こんな……懲罰房に入れられるなんて解っていたのに。神機兵の搭乗だつて、本来入念な事前検査が必要なんです。最悪、命を落とすことだつて、本当に……」

——— といえばさ、切手つて舐める派？ それとも水に濡らす派？

「話を聞いていないのですか」

——— よし、書けた。

「……ホント、命令違反だらけですね、貴方は」

——— それを言うなら、そっちもでしょ。

「それは……はい」

——— 皮肉としちゃ上出来だよ。それなりに効く。哲学者の顔してるより、そっちの方がいいさ。

「私は、何も」

——— フランス人っていうのは哲学が好きだつてのは知ってるけど、考えすぎな奴が多くていけないな。当ててやろうか？ 人の手をとつてはいけないって、そう感じてるんだろ？

「……」

——— 正確に言えば、目の前に差し出された手をとることで、これまでに自分を救ってくれようと人たちの想いを無にしてしまふんじゃないかと思ってる。

その人たちが必死になつてこんな自分に尽くしてくれたことを、踏みにじることになつてしまふんじゃないか。

シエルは何も答えなかった。

うつむき、拳を握る。感情の色を見せることがなかったシエルにとつて、それは明確な答えであつた。

——— ここで人にすがってしまったら、これまで自分を救おうとしてくれた人の想いは、命は、どこにいつてしまふんだろうか。なんでこんな安易に手をとろうとするのか。あんなにも救おうとしてやったのに、命をかけてまで、なのに今になつて何故。自分達の

行いは無駄だったのか。無意味だったのか。

そう思うに違いない……つてさ。哲学だよ。俺もちよつと前までそんなだったからよく解るよ。

「あなたは……私は……」

——シエル、目を逸らしちゃダメだ。

シエルはユウを見ることが出来なかった。

きっとユウはシエルを射抜くように見詰めていると、それが解つていても。

その瞳に邪気はなく、澄んだ水のような、碧空のような清らかさが宿っていると解つていても。

それでも、なお。

「出来ません……私には、出来ません……」

——シエル、俺を見るんだ。

「出来ません……出来ないのです！ 私はたくさんの手を、救いに差し伸べてくれた手を振り払ってきた！ ここで誰かに縋ることとは、彼等への裏切りになつてしまふ！」

それだけは……それだけは出来ない……出来ません……だから……」

——シエル。こつちを見て。

「もう……疲れました……わたしは、もう……」

——シエル。

「なぜ私が生きていますのでしょうか。あの子達が死んで、何故私などが。死にたいなどと言うつもりはありません。ですが……疲れました。生きることに、もう、疲れたんです……」

魂は疲弊する。

生を手放し、自らの存在を取り零し、意志を失つて。

シエルはゴッドイーターとなり、肉体的に復活したのだろう。シエルの肉体の端々に感じる違和感の正体とは、回復錠によって無理やりに治癒された形跡だった。

オラクル細胞は、シエルの肉体を再生し、生をその身の内へと吹き込んだ。

だが、もうシエルは、精神的死を迎えていたのだ。
無感動で無表情。それは、防衛機構によるものだ。

疲弊という、魂から染み出した毒から、自らを守るための。

ユウは天を仰いだ。独房の蛍光灯は嫌に白く清潔で、こんなところもフライアなのだな、と感じさせる。

——心つてのは、どこにあるんだろうな。

「ここ、ろ……」

——意志のありかは、どこなんだろう。心がどこにあるかわからないのなら、想いも、願いも、全部消えてなくなってしまうのかな。

だったら喜びも悲しみも、全部錯覚なのかって。俺は……そうは思わない。シエル、その手がそんなにも胸を搔き寄っているのは、そこんところが苦しいからだろう？

「むねが、くるしい……」

知らず、シエルの両の手は胸の前で搔き合わされていた。

同年代の同性に比べても豊満な乳房が悲痛に形を変え、ブラウスのボタンがいくつか引きちぎれていた。

爪が割れて、ブラウスに朱の模様が点々と増えていく。

膝が床に着く。肩が震え、立ち上がることが出来ないままに。

「くるしい……くるしいんです……ここが、すごく……！」

魂に輝が入っていく音がした。確かに、した。

表情には表れ難いというのはもはや性格なのだろう。

だが、額から顎下まで延々と流れ落ちる汗と、一転を見詰めた焦点の合わない瞳が雄弁に物語る。

ユウはこれほどまでに苦悩に満ち溢れた顔を、見たことは無かった。

——痛いな、ここんところが、すごく痛い。なんでかな、ここに心なんて入ってないのにな。

過去を振り返れば、過ちばかりだ。

過ぎした時が全て、胸の中を抉り取るかのような傷跡となってい

る。

ああ、だとしても。

たとえば、胸の傷が痛んだとしても。

——シエル、話し振っというて悪いんだけどさ、これ、手紙……出しておいでくれないかな。

「て、がみ……」

——そう、手紙をさ。ほら、受け取ってくれ、シエル。

「……」

——俺の、一番最初の友達に宛てた手紙なんだ。きつと……いや、これを最後の手紙にしようと思ってる。だからさ、頼むよ。

シエルはよろけて立ち上がると、格子窓から差し出された手紙を受け取ろうとした。

しかし、どうしても手紙に触れることは出来なかった。

何日も寝ずに過ごしたかのように髪はほつれ、目の下が黒ずんだ、幽鬼のような姿となっていた。

間違いがないか確認してくれ、というユウの言葉に反射的に手紙へと目を通す。

送り先は、フェンリルが保有する郵便施設の私書コード。

物理的に機能するメールアドレスのようなものだ。

郵便物は指定された居住区に一時保管され、このコードが入力された場所へと再配達される仕組みである。

例えば住所不定無職であったとしても、お互いの私書コードさえ把握していればつつがなく郵便物の取引が出来るシステムである。

それは、シエルがよく知る、馴染み深いコードだった。

宛名と差出人もまた——。

「は……ッ、あ……ああッ！」

——思うんだ。俺も、自分だけが救われていいのかって、そう考えていた時がある。ここで助けてくれなんて言うのは、俺を助けようとしてくれた人達への酷い裏切りじゃないかって。

いや……恐れていたんだ。その人たちが俺を恨むんじゃないな

いかって、そう思っていた。それだけは嫌だった。それだけでもそうじゃない。そうじゃないんだ。

その人たちが俺を許さないだなんて、そう思うところこそが彼らへの裏切りだったんだよ。

彼らはきつと、祈ってくれたはずだ。そうだ、祈りなんだ。

こんな世界の中で、自分以外の誰かが救われて欲しい。そう心の底から思うことは、これはもう、祈り以外にない。

きつとあなたが、誰かと手をつなげます様にと。

「あなたは……あなたは……あなたは……ああつ！ あああつ！」

——信じたはずだ。きつと大丈夫だと。そう信じて逝ったはずだ。いつかきつと、と。

彼らはそれを信じてきた人たちだった。知っていたからだ。つながっていると。

この世界に生きる人たちはきつとつながっているんだって。全てはつながっているんだって。

俺たちは、そのつながりが解らない側だ。でも、信じることは出来るんじゃないかな。

あの人達と同じように……つながりの中に、「そこ」に、心が生まれるんだって。

「ああ……ああ……ここに、どうして、わたしは……ああ！」

——自分の命を投げ出すことが出来たのは……出来てしまったのは、守るべきものがあつたからなんだろう。

それは祈りであり、つながりであり……彼らの意志だったんだと、俺は思う。

許してくれるかなんて、そう考えること自体がズレてるんだよ。俺達が笑えば、きつとあの人はさ、ほら……ほつとする

んじゃないかな？ よかったってさ。
人の間と書いて、人間と読む。

ラケルは言った。心とは、脳の中にある現象であると。

ユウはそうは思わなかった。ならばどこにあるとは、はつきりとは

言えなかった。

だが、今は言える。今だけは。

「命令、よりも……自分、よりも……守りたい、大事ななもの」

シエルは見た。

そこには昔の、子供の頃の自分がいた。生気の失せた目でぼんやりと空を見つめていた。

何の望みも願いもない、灰色であった子供の頃の自分だった。

灰色の子供は手紙を手に持っていた。灰色の世界で、たった一つ見つけた価値あるものだった。

手紙をそつと胸に抱きしめて、そして……世界が鮮やかな色で満ち溢れた。

輝きで満ちた世界の中。

子供のシエルを、かつて祈りを抱いた人達が微笑み、見守り、抱きしめていた。

それに気付くことなく、子供のシエルはただ寒さ震えていた。

どうして忘れてしまっていたのだろう。

つながっていた。つながっていたのだ。

探していた心は、ずっとそこにあっただ。

つながりの間にこそ心が生まれ、そしてそれはきつと、彼らが運んできてくれたものだった。

子供のシエルがふいに顔を上げた。

瞬間、全てが幻であったかのように消え去っていた。

感応現象——第二世代機以降のゴッドイーターの間起きる、精神間の次世代コミュニケーションの形。精神が形となる瞬間だった。

だが、シエルは見た。見たのだ。

あの子供のシエルは、その表情は。

子供らしく、穏やかに微笑んでいて——。

シエルはただ自然に、理解していた。

ユウもまた、同じ想いを抱いていることを。

心のある場所とはきつと、この震える、冷たい指の先に。
手と手の間に、あるのだと。

そう、今は言える。今だけは。

「とつても……あなたがかいですね……」

格子窓から出されたユウの手。手紙を握ったままの手の上へと。

シエルは震える両の手を重ね、包み込む。

その姿はまるで、祈りを捧げているかのようで。

その祈りはきつと、かつてあの人達が抱いた祈りと同じものだ。

通じている。つながっている。すべてと。だからあの人達は、皆、

微笑んでいたのか。

シエルはユウの手に頬をすり寄せた。

雫が両の目からとめどなく溢れ、零れ落ちていった。

すべてを優しく洗い流すように。それは救いだつた。

シエルはあらゆる過去を許し、全てを受け入れていた。

だって、こんなにもあたたかいのだから。

零れる涙を拭うユウの手から、手紙が落ちた。

廊下へと落ち、封が開き、便箋が顔を覗かせる。

何も書かれていない、真っ白な便箋が。

ただ静かに、この世で最も清らかな雨を受け止めていた。

この手紙がフェンリルの郵便施設へと届くことはないだろう。

封筒に、切手は貼られていなかった。

最後の手紙は白色の——涙の色をしていた。

心の色を。



ぐっどいーたー：23 噛 GE 2

最近。

「シエル、お前、何してるんだ？」

「——ギルですか。見ての通り、調整しているんです」

「何の……?」

「——バタフライエフェクト。一見無駄な動きが、世界線に介入する鍵なんです」

「わかった、わかったからもういい。おい……おい！ その場で回り続けるんじゃない！」

シエルちゃんが。

「ちよつと！ ちよつとシエル！ 何してんの!? ここ火気厳禁だつて！」

「——止めないでくださいロミオ。これは人力故の様式美ですよっ。」

「意味解んないから！ 何それ何の儀式!?!」

「——儀式の人の儀式しかないでしょう?」

「んな不思議そうな顔されても。もういいから松明をしまつて……しまつてお願い！ ワニキャップどつからだしたのそれ!?!」

なんだけか。

「あつ！ シエルちゃん！ 一緒に訓練しよーよ！」

「——ええ、ナナ。いいですよ」

「にへへ……やっぱり二人だと訓練も楽しいね！」

「——ええ、本当に。これも私に誰かと触れ合うことのあたたかさを気付かせてくれた、副隊長のおかげです」

「うん……すごいよねえ、ユウ。フライアが行く先行く先、色んなところで誰かを助けちゃつて。もうブラッドの顔ー！ つて感じ！」

「——少しでも副隊長を支えられるよう、一緒に訓練しましょうね。よろしければ、私がメニューを作りますが」

「あ、お願いしちやつてもいい？ わー、シエルちゃんそういうの詳し

そうだから、どんなのちよつと興味あつたんだ」

「——それでは、今日は高速移ドウエの練習をしましょう」

「高速い……え、移動？　じゃない？」

「——移ドウエ練習です」

「移ドウエ」

「——訓練を重ね、いずれ移ドウができるように頑張りましょうね」

「移ドウ」

「——ドウエドウエドウエドウエドウエドウエ」

「ハヤアイ!？」

変だ。

そう言つて、ナナが涙目で詰め寄つてきたのは、ユウが懲罰房から出てすぐのことである。

この一週間と少しの間何が起きていたというのか、ユウには解らない。

だがナナの尋常ではない様子からして、シエルに何かが起こつたのだらうという予想はつく。

厄介事の臭いがするなあ、と諦めモードに入るユウであった。

「あんなのぜつたいおかしいよお！」

——いや、俺に言われましても。

「ユウのマネしてるんだよ絶対！」

——俺は空中をショートブレードで滑空して着地と同時にステップ刻んで移動速度高めようとかしない。

「嘘だよお！」

——だってステ弱繰り返すかした方が速いじゃん？　アドバンスドステップ連打のが楽だし。

「すてじや……あどば、んす……う、うん？」

——シエルのはエアリアルステップが抜けてるからまだまだだな。俺だったらツイドラ連射だなあ。ナナもシャツガンなんだし、多少はね？

「ショットガンに加速装置なんて付いてないんだけど」

——ラツシュファイアとかドローバックショットの後にローリングで余裕。ラファロリはともかくドロリは練習しないとな。

「も、もー！　もー！」

——痛い痛い。叩くのやめて、ぽかぽか叩くのやめて。

「シエルちゃんしゃべり方もユウそっくりになったし！　なんか変なしゃべり方……ユウ語しゃべってるもん！　変だよあれ！　自覚ないの!?!」

——うん、それ以上は俺が傷つくからやめようね。

「もうユウのマネっこさせるの禁止ね！　きーんーしー！」

——いやだから、それを何で俺に言うのかっていう。

「シエルちゃんにちゃんと伝えといてね！　もーだよ、もー！」

——お、おう……後で言っとくよ……

シエルは変わった。とても良い方向に。

ほとんどのフライア職員から、シエルが付き合いやすくなったとの声が上がっている。

時折、その鋼鉄だった顔に笑みまで浮かべているのだから、皆さぞや驚いたことだろう。

オペレーターであるフランは、ミツシヨンからシエルが帰ってくるたびにオペレーターの的確さの礼を言われる、ととても嬉しそうにしていた。

まるでロボットだという以前の冷たさから一転、ふわりとした、可憐な花のような少女となったシエル。

どこか、この振る舞いでいいんですか間違っていますか、とおどおどとした小動物じみた態度もまた、特に男性職員から人気が集まる要因である。

「それは『服』に着られるんじゃないかと、着こなせるようになったからだわ」とレア博士が目元をぬぐいながら意味深なことを語っていたのが印象的だった。「花には、青い空。そう決まっているんだから」と。

シエルの笑みは、荒んだ世界に一輪の儂げな花の如く、見るものを癒すものとなっていた。

たとえばそれが、ユウの体毛をピンセットで拾い集めビニールパックに詰めては今日の日付と時間を記入する行為の最中に浮かべられたものだとしても。

シエルの変貌はユウが何かしたからではないか。

フライアに広がる噂である。

というのも、その原因はユウの『血の力』にあった。

懲罰房では反省を強制的に促される更生プログラムをすると同時に、各種メデイカルチェックを嚴重にユウは受けていた。

血の力に目覚めてなお、その効果の程が不明であったユウは、逐一データを採らねばならなかった。

神機兵に生身で搭乗するということは、考えているよりも心身、特に精神に大きな影響を与えかねない。効果不明であったユウの血の力と相まって、生命維持にまでその影響は及ぶかもしれない。

どのような影響が、と説明し始めたのは、黒いヴェールに表情を隠し、車椅子に穏やかに掛けるラケル博士だ。表情は穏やかに微笑んでいたが、あれはどうやら、静かに怒っていたらしい。

『説明』はユウだけ個別に5時間以上、半日掛けて行われたのだからたまらない。ラケル博士は休憩あり、ユウは地面に正座でぶっ続け。昼時に目の前で紅茶とサンドウィッチを見せ付けるように食べられたのが一番にこたえた。

『種は一人で芽吹くものではない』

何かの一節だろうか。

ユウへの個人授業後、ブラッド隊全員を集めてからラケル博士は言った。

「私はユウを誇りに思っていますよ。愛する家族を守ってくれて、本当にありがとう。これ以上咎められることはもうありませんよ」

感極まって、ソファーに座った左右から抱きついてくるロミオとナナをいなしつつ、今後の予定を聞く。

どうやら神機兵の無人運用テストは、極東支部に到着するまで一時凍結となることになったらしい。

シエルを窮地に追いやった神機兵の小破停止は、データ不足が原因

だったようだ。

極東にいるアラガミは、通常のアラガミに見えても中身は別物である。それは極東に近づくにつれ、顕著に表れる。

神機兵が停止したのは、強くなつていくアラガミに対する演算がエラーを起こしたため。

クジヨウ博士は青白い顔をいつそう青くさせていたが、この決定は妥当なものであった。

「ううー、ユウー！」

「ユウー！ 心配したんだぞこんにやろー！」

—— はいはい。ありがとね。

「騒がしい奴らだ」

「でも悪くない、だろう？」

「ふん……」

「あの、ロミオ、ナナも。そのくらいに……副隊長が困つていますから」

「はい。へへ、シエルちゃん、何だか柔らかくなったね」

「そう、でしょうか？」

「うん！ そっちの方が、ずっと可愛いよ！」

「その……ありがとうございます。きつと、私が変われたのなら、それは副隊長のおかげです」

シエルちゃんが笑った、と嬉しそうに驚くナナに、ヒューヒューと口笛を吹くロミオ。

呆れたようにして、しかしはしやぐ彼等を壁際で見守るギルに、どこか満足そうにしてユウの肩を叩き頷くジュリウス。

仲間。そういうには距離が近く、ずっと温かみが溢れた光景がそこにはあった。

『喚起能力』……とでも呼びましようか。ユウ、貴方には心を通わせた者の「真の力」を呼び覚ます力がある……」

ラケルがブラッド隊のじゃれあいを眩しそうに見詰めて言った。

喚起能力——他者の力を呼び覚ます力。

それが効果不明であったユウの、ブラッドとしての能力であると。

連日のメディカルチェックデータにより判明した、ユウの血の力である。

「はー、ナルホドね。だから今までよくわかんなかったのかー。サポート系？ だったんだな」

—— ぱつとしないってのは変わんないよな。ちえー。

「それでシエルの血の力も目覚めたってことか？」

—— たぶん。俺は全然自覚がないけど。

「ねえねえユウ」

—— はいはいナナちゃん何ですの？

「シエルちゃんにいったいどんなことをしたの？」

その時ブラッド隊に電流が奔る。

圧倒的衝撃。前代未聞。

ユウに視線が集中する。

「えっ……ユウお前、何かしたのか？ ナニかしたのか!? あつ、喚起させるって、そういうこと!？」

—— 何で二回言うんですかねえ!? やめろ誤解を呼びそうな意味にするんじゃない! もっと俺の喚起を大事にして! ……おいなんだお前達、その目は。

「当人同士の合意があればその限りじゃないが、正直に言ったほうがいい。シエルは体はともかく、実年齢が……あれだからな。お前のための思っというぞ。白状しろ」

—— おいギル! お前、お前常識人じゃ……え、何

この空気怖い!

「待つてください、皆さん。誤解です」

前に出るシエル。

情動が成長したシエルは、空気を読むということを感じたのである。今まさにユウが窮地に立ったと察し、庇わんとしているのだ。

真実を語って。

まかせてください、とシエルはユウに目配せして胸に手をあてる。

「私と副隊長は、何か特別なことをしたわけではありません」

—— お、おう! 言ったれ言っただれシエル!

「ただ、私達は一つになっただけです」

——そうそう！ そのとお……り……えっ？

「それは特別なことではなく、人の営みの中で、とても自然なこと……そう、それは愛、と呼ばれるものなのかもしれません。愛の営みと……」

「なん……だど!?」

「むー」

「いいの？ それ言っちゃっていいやつなの!?」

「深く……そう、深く私達はつながったのです」

「やべえよやべえよ……!」

「ジュリウス、憲兵を呼べ」

「なるほど事案か」

「むー!」

「とつても……あつたかかったです」

——やめてお願いだからもうやめて！ お腹に手を当てて眼をつむって感慨深く言うのはやめて！

「いいんだ、ユウ。ちゃんと解っているさ」

——ジュリウス！ 俺のことわかってくれるのはお前だけだ！

「本当の家族になるだけだ。本当のな。安心しろ、フライアは設備が整っているから一人増えたところでわけはないさ」

——てめーとはもう絶交だゼツコー！ なんなの？ 俺はどうしたらいいの!? 死んだらいいの!?

「死んで責任から逃れようなどと、この俺が許さんぞユウ！ 逃げるな！ 生きることから……逃げるな！ これは命令だ!」

——それ俺の台詞ウー！

「まあ、感応現象を利用した介入能力、と捕らえると解りやすいだろう。『喚起』によって相手の意思や感情の爆発に共鳴して感応し、触媒となって血の目覚めを促す。」

その際にお前のオラクル細胞を何らかの形で譲渡していると考え

られる。『受け渡し弾』のようなものだ。

それでシエルの血の力が覚醒したんだ。『直覚』……アラガミの状態を解析し、それを仲間達と共有する、それがシエルの血の力だ。

自身の感覚を伝播させる力、これも一種の介入能力と言ってもいいだろう。

俺の『統制』はコントロール能力……干渉能力だ。お前達のように分け与えるものではない。よく似ているよ、お前達は」

「似ている……似ている……ありがとうございます、ジュリウス。これまでにあった何よりも、嬉しいです。本当に、嬉しい……」

「じゃあシエルちゃんも感情が爆発したってこと？ シエルちゃんでも爆発することあるんだねえ」

「えっ？ あ、は、はい。そ、そうですね。なんだか恥ずかしいです」「何この会話。まーやっぱリユウは白だったってことで」

「俺は信じていたぞ」

——ぶつとばすぞお前ら。おいジュリウス、お前、喚起の血の力こと、詳しく知ってたわけだよなそれ。さっきのは何なの？「無論お前をからかっただけだが、何か？」

——ザッケンナコラー！ スツゾオラー！

仲間と呼ぶには距離が近く、温かみに溢れた光景。

それはきつと、家族と呼ばれる——。

黒いヴェールの向こう側で、ラケルの顔に微笑みが浮かぶ。

黒いヴェールの向こう側で、眩しいものを見詰めるように細められた目は、優しさと慈しみを湛えている。

黒いヴェールの向こう側で、濡れた舌先が、ルージュを引いてもいないというのに真つ赤な唇を、一舐めして濡らした。



最近、シエルが、どこか、変だ。

ナナではないが、俺もそう思う。

なんていうか、アリサの変貌を思い出すくらいに急にガラツと変わった。

柔らかくはなった。とつつきやすくはなったんだけど……その。

「副隊長！　これ、これを！」

額に汗を滲ませて、息を切らせては駆け寄るシエル。

俺を探していたのだろうか、ふうふうと走るその姿は、おとなしい大型犬が主人の姿を見かけて尻尾を全力で振っては大喜びする姿を連想させる。

これ、と喜び勇んで差し出したシエルの手には、一冊の雑誌が。

ええと、なにになに？

狙った男性と深い仲になるには、男を喜ばせるテク100選……わ、わあー。

「私、ずっと考えていたんです。副隊長に喜んでいただけにはどうしたらいいか……」

レア博士に聞いたところ、この雑誌に男性を元気にさせる術が全て載っていると」

それたぶん違う意味の元気にさせるってことだよな。

雑誌、というより少女マンガの付録じゃんこれ。

肝心な部分は載ってないけど、やたらめったら過激なやつ。最近流行ってるよなこういうの。

なんていうか、チョイスがもう、レア博士っぽい。

どこことなく香るポンコツ臭……うん、でも、ごめんなさい。

正直とつてもムーブメントです！　つらいけど！

「その、副隊長にぜひ喜んでもらいたいと……その、た、試してもよろしいでしょうか？」

ムーブメントだけど……ムーブメントだけど……

！

ここで頷いたら俺は死ぬ！

本で顔の半分を隠して恥ずかしそうにしながらこつちをうかがってチラ見するとか、すごいポイント高いけど！

フランがカウンターの奥から見てるから！ さつきからタイピングの音がダカダカツターンてすっごい大きいから！

向こうのほうにいるギルの耳もピクピク動いてるから！ 聞いてないフリしてすっごい聞き耳立ててるから！

——それをやったら二重の意味で俺は死ぬから、やめよう、ね？

「そんな．．．はい、わかりました。確かに、そうですね。考えてみればバナナを舐めることが何故男性を喜ばせることになるのか、理解不能です」

バナナって結構な高級食材なんですけどね。俺食べたことないもん。

ジュリウスの頭に年中生えてるけどさ。

「では、こちらをどうぞ」

こちら、とは。

一瞬、何をされたのか．．．．．目の前に無防備に放り出された“それ”が何なのか。

これを理解するには、脳の処理能力を超えている。

これは．．．．．これは．．．．．

「その、実は、同年代の平均のものくらべて肥大していると検査で伝えられてから、みつともないものではないかとコンプレックスに思っていたんです。

でもこれを使えば男性はだれでも幸福感を得られるのだとこの本に．．．．．です、ぜひ副隊長に使って、喜んでもらえればいいな、と。

そう考えたら、このような体であっても．．．．．私は自分に自信が持てるのではないかな、と．．．．．その、ですので．．．．．どうぞー！」

おっばい。

おっばいだ。

これは、おっばいだ。

おっばいが差し出されている。

生おっばいではないが、白ブラウスに包まれた平均以上のおっばい。

間違いない、これはおっばいだ！

下に手をそえられて、どうぞと突き出されているおっばいだ！

自分の手じゃないのに解る、ずしりとした質感……シエルの手の平からこぼれおちる程の、おっばいだ！

あ、ああ。

あああああああ！

お、お、俺が悪いんじゃない！

俺は悪くねえ！ 俺は悪くねえ！

もう俺ここで死んでもいいや。

うん。

ここで俺は死ぬ！ 社会的に死ぬぞ！

俺は人間を辞めるぞ、ジュリウスー！

「ゴホーン！ ゴホゴホーン！ エホンゴホンエフンエフン！」

うわあああつあつあつあ！

ふ、フラン様が見てるううううううう！

咳払いしながらめつき睨んでるううう！

あ、危なかった……危なかった……間一髪だった

！

フエンリルはセクハラ事情にものごつつい厳しいんだった！

オペレーターに給料吸い取られてくぐらいに！

ああ……おっばい……でも命はまだ惜しいとです……

あああ。

——し、シエル？ その、気持ちは嬉しいけど、そういう

のは、ね？ 大事な人にだけ、ね？ するもんだからお願ひ寄せてあ

げて近づけないで！

「私の大事な人は、副隊長です」

——おあああ理性が……俺の理性が結合崩壊して
いくうう……。

「あれから、ずっと考えまして……どうしてもお伝えしたいこ
とがあるんです。」

ブラッドというチームは決して戦術理解度が高いわけでも規則正
しく関係しているわけでもないのに、高い汎用性と戦闘力を兼ね備え
た部隊です。

その強さとは、私の理解をはるかに超えて、高度に有機的に機能し
ていることによるようです。

それはおそらく……副隊長、きつとあなたが、みんなをつ
ないでいるからなんです」

——つながり、ですか。

「私もまた、あなたとつながったという、実感がありました。とても、
あたたかかったんです……とても。」

私は戸惑っています。正直、今まで蓄積してきたものを全て否定さ
れた気分です。

でも、嫌な気持ちじゃないんです。それどころか、なんといい
か……ええと、どう説明すればいいのか、ううん……
少々お待ちください」

きよろきよろと忙しなく視線をさ迷わせるシエル。
ものすごく言葉を選んでいることがわかる。

頬を上気させ、しきりに手をもじもじと揉んで。言葉を尽くして、
想いを伝えようとしているかのような。

まるで男女の仲になるための、告白をしようとしているかよう
だ。

「副隊長、折り入って、お願いがあります」

——う、うん。ナニかな？

「私と……友達になってください！」

言い切って、勢いよくシエルは頭を下げた。

勢い余って、両手が羽のように後ろに広げられていた。

しばらく呆気にとられていると、唇を何度も噛み締めて不安気にご

ちらを見上げるシエルと目が合う。

「あの……どう、でしよう」

——ええと、俺で、いいの？

「はい！……もちろんです！」

——なんだ、折り入って何て言うから、どんなお願いだろうと思っただけど、そんなことだったのか。

「……だめ、でしようか」

——いや、もうとつくに、友達（ダチ）だって思ってたからさ。びつくりしたただけだよ。

「あ……ありがとうございます！」

ばあ、と花が咲いた。

一輪の、しかし大輪の、色鮮やかな可憐な花が。

「私はずっと訓練ばかりしていましたので、あまり、こういうことに慣れていなくて。

ずっと、不要だと思っていました。ゴッドイーターには、戦うためには……と。」

でも、本当は憧れていたんです。仲間とか……信頼とか……命令じゃない、みんなを思いやる関係性を」

ず、と濁った鼻をすする音がした。フランだった。

カウンターから、こちらを見ないようにして、しかし会話を聞き逃さんといつの間にかタイピングの音が止まっていた。

ハンカチを取り出して目元を軽く抑えるフラン。

オペレーターは副隊長と同レベル程度の、戦闘員の経歴を閲覧する権限が与えられている。

ちらりと流し読みしただけでも、シエルのこれまでの生活環境は、尋常なものではない。

フランもそれを知っていたのだろう。

よかった、よかった、と小さく呟く声が聞こえた。

ギルも帽子を目深にかぶり、表情を見えぬようにしていた。

「あ……もうひとつ、不躰なお願いがあるんですけど……いいでしようか？」

——ああ、どんとこいさ！ 何でも言ってくれ。さつきみたいのじゃないなら、大歓迎さ。

「あなたを呼ぶとき……『君』って、呼んでいいですか？」

「あ、すみません。いきなり君って呼ぶのは、いくらなんでも早すぎますよね」

——え、早い、のか？ いや、いいよ別に。

「……！」

すごい、まぶしい！ 驚いた顔がまぶしい！

ダメだこの子純粹すぎる！

純粹培養軍人娘じゃん！

いろんな、こう、人間関係とか情動について無垢すぎる！

さつきの意味不明な行動も、たぶん俺のことを『君』って呼ぶの許してもらえような、ポイント稼ぎだったってことでしょ。

性知識とかゼロなんじゃ……なんだろうなあ。

純粹に俺を喜ばせようって感じで、男を誘おうっていう色気がなかったもんな。

飼い犬が新しく覚えた芸を見せて、ほめてほめてって擦り寄ってくるような、そんな感じだったし。

わんこ……首輪……プレイ……。

くっ……だめだ！ 静まれ！ 静まれ俺のムーブメント！
くそう、それもこれも全部おっぱいが悪いんや！

「君が、私にとっての初めての……友達、です。本当にありがとう」

——きつと、すぐにたくさん友達ができるさ。友達がたくさんいると、楽しいもんだぜ。

「そう、でしようか」

——ナナや、ロミオや、ギルにジュリウス、みんなに聞いてみるといい。もうとっくに友達だって言ってくれるさ。

「は……は……」

そんなに嬉しそうにしてくれると俺もなんだか、つられて嬉しい

よ。

まあ、ちよつとずつでいいさ。ちよつとずつで。

歩くような速さでいい。

そうやって、人と人のつながりを、紡いでいけばいい。

何になるかはわかんないけどさ、それがきつと、生きるってことなんだらうと思う。

誰かとのつながりが、俺たちの……ゴッドイーターの強ささ。

きつとね。

すぐ消えてなくなるつながりだったとしても。

「でも……一番深く、強い絆を結びたいと思うのは、副隊長……ううん、君と、ですから」

——そうかい。そりやあ嬉しいな。まあ、ゆつくりでいいよ、ゆつくりで。

「はい。いつかきつと、親友と呼べる間柄になれるように、尽力したいと思います」

——努力するもんでもないさ、そんなもの。気付けば勝手になつてるようなもんだよ。気にしなくていい。きつと……必ずそうなるから。

「はい……その時を楽しみにしています。いつか私達の絆が深まったときに、最上の絆が結ばれたもの同士でしか許されない儀式を、きつとしましょうね」

——う、うん？

「深い絆を結んだ二人にだけ許される儀式……セクロスを！」
わあ、なにそれ聞いたことない単語。バイクレースゲームのことかな？

おいレア博士エ！

正しい性知識はちゃんと学ばないといけないと思います！

規制かなんかしらないけど、漫画冊子だからちゃんとした語句使えないってのは解るけどさあ！

これが今のティーンエイジの女の子達のトレンドなの？

下ネタという概念が存在しない世界とかになっちゃったらどうしてくれるの！

——ま、まだ早いというか、ね？ その、ね？ 俺がそれをするには色々と問題があつて、ね？

「はい……それこそ、まだ早すぎますよね。でもきつと、いつかしましうね」

——いやそれはちよつと。

「私は君としたいんです！ とても、すごく、したいんです。本当なら、今ここでも」

——いつかどこかで前向きに善処しますのでお許しくださいやがれお願いします！

「はい！ 約束、ですよ？ いつか必ず、セクロスしましょうね」

——削れていく。おれの正気度が削れていく。SAN値がピンチになっていく。

「ゴホーン！ ゴホゴホーン！ エホンエホン！」

「ゲツホ！ ゲーツホゲホゲホ！ ゲホオ！」

——わかつてるからあ！ イジメいくくない！

「風邪が流行っているのでしょうか？ いけませんね。自己管理がなって……いいえ、移動拠点ですから、予防策をとつても限界がありますよね。」

君は大丈夫ですか？ 体に寒気や不調はありませんか？

——うん、脈拍とらなくても大丈夫だから。あとあれは風邪じゃなくてモールス信号みたいなものだから。

「呼吸、脈拍共に異常ナシ。体温やや高め……少々お待ちください。今、医療班の要請を」

——いや、大丈夫だから。これは精神的な疲れによるものだから。気にしないで、うん……。

「精神的な……疲れ……ハッ！」

——わあ、嫌な予感。

「これを！ どうぞ、これを！ 元気になれると！」

——お願いだから時間と場所をわきまえてね！

「…………ハッ！ それは、つまり…………その」

——そろそろ俺は泣く。

「ふ、二人だけの秘密…………というものでしょうか！」

「ゲホンゲホン」

「ゲホゲーホゲホゲホ」

——わあ圧力がすごい。うん、そうだね。だからめつたにやるもんじゃないよ？ ほんとお願いだから…………。

「秘密…………約束…………はじめて、です。君は本当にすごいです。たくさんの初めてを私にくれる、君は本当に…………」

——俺は耐えた。耐え切ったぞ。

あ、あぶなかった。

長く苦しい戦いだった。

エンディングだぞ、泣けよ。

俺は泣く。

「先日の二人で出撃した任務も、本当にすごかったです。君は舞うように戦場を翔けて、息を吸うかのようにアラガミを殺す。

合理的ではない動きも、すべて意味があるものに見えました。綺麗でした。心が熱くなるとは、きつとああいうことを言うんだと思いました。

ただ無駄を削ぎ落としただけでは、その輝きは豪華絢爛足りえないと。きつと君は、絢爛舞踏と呼ばれるものなんだと思います。

軍の中で聞いた、古い、とても古い伝説です」

——買いかぶりすぎじゃないかなあ。死んだ魚みたいな光のない目をしてるとはよく言われたけど。

「先日のバレットの件もそうです。ラケル先生はお忙しいので、極東支部に到着するまでは独自で研究を進めていて…………。

検証実験の感覚では血の力に目覚めたときの感覚ととても似ていたので、君の血の力の影響によるものではないかと思っています」

先日のバレットの件、とはシエルから誘われてバレットエディットの検証をした任務のことである。

ブラッド隊に配属されてからこちら、実のところを言うと、密かな

悩みがあった。

バレットエディットのことだ。思うようにバレットが作れなかったのである。

挙動に関してはまあ、新しく乗り換えた神機であるからして、不由な組み合わせしか出来ないのは想定内の範囲だ。これには慣らしが必要だから、とにかく撃ちまくって神機を“オラクル細胞を吐き出す形”に最適化してやるしかない。

問題は挙動ではなく、オラクル細胞の制御機構にあった。

第三代機はその見た目と機能からして第二代機……旧新型機とほとんど同じように見えて、その実、やはり中身は完全に別物であるらしい。

オラクル細胞の制御機構がまるで異なっており、第二代機と同じ感覚で弾をぶっ放していたら、生体部分にまで消耗が及び、整備部に大目玉をくらったのである。

これにはギルも悩んでいたようだ。

“機種変”をしてからこちら拭えない違和感の正体が、これだ。

見た目は同じなのに中身は異なる。前と同じ感覚で使おうとしても、動きはするが、それが本来の使用用途ではないのだ。

バレットエディットとは、ゴッドイーターの感覚によって行われるものであるが、大部分が体系化されつつもある。

ただしそのデータは第一から第二代機のもの。

どうも第三代機の“制御モジュール”は完全に異質、別物であるようで、これまでと同じ運用では余剰エネルギーのロスが大きすぎるのだ。

モジュールそのものを変化させるしかないのではないか、と考えてはいるが、どうしたものか。

構成部分から抽出して構築しなおさなければいけないんじゃないか、とは思うけど、うーん。

第三代機特有のバレットモジュール……そいつを見つけ出さなくてはいけない。

シエルとの話し合いもまた同じ結論に至った。

どうも俺との出撃で何かを掴んだらしく、うんうんと首をかしげて考え込んでいた。

バレットがエディットしたのから意図せぬ変化をしたらしい。暴走の危険を孕んだ大問題であるが、どうやらその変化とは良い方向での変化だったようだ。

ここに第三世代機特有の「変異性」が隠されているのではないか。そしてその変化は、俺の喚起によって引き起こされたものなのではないか。

おおよそ延々とシエルがバレットについての持論を展開し続ける時間だったが、自分だけが口を開いていることにはつと気付くと恥ずかしそうに顔を赤らめるのだから悪くは思えない。

熱くなってしまうました、としゅんとする姿を見て、本当に変わったなあとも思った一件だった。

バレットエディットが好きなのかと問えば、「はい、好きなんです」とほわわーとした顔をしてくれるもんだからもうね。

ムーブメント。

——しかし俺の喚起能力って、そんなバレットにまで影響するの？

「……………」

——いきなり真顔になられるとすごい怖いんですけど。

「君を分解して解析すれば、より理解できるのでしようか……………」
？

——ヒエ。

「ふふっ……………あははっ！ 冗談です！ そんなに驚いた顔をしてないでください！」

——あ、あー、あーあれな、冗談な！ あははは、はは……………」

「いえ、そんなに面食らうだなんて、意外と真面目なんですね」

——シエルに言われたかないよ。いやマジで。冷や汗すごいですけど。

ほんの少し変わった関係。

そして変わらぬ日常がまた訪れる。
フライアのアナウンスが鳴り渡る。
よく通る、フランの声。

『到着まで、推定時間30分となりました』

だけれが、おお、と声を上げた。

窓の外に壁が見えた。

巨大な、対アラガミ防壁が。

円形にめぐらされた壁の中心にそびえ立つ、壁よりもなお巨大なタワー。

そう長期間離れていたわけではないのに、何故か懐かしく感じる。
『ただいま極東支部に到着しました。長時間の運行、お疲れさまでした。手荷物のおまとめ、忘れ物等ございませんよう……』
きつと、どこに居たとしても、この光景が胸の奥から消えて無くなることはないだろう。

ふとした時に蘇る憧憬と、ほんの少しの寂しさ。
それを感じる場所を、“故郷”と呼ぶのだろう。



「んー、んんー」

—— ナナ、どうした？

「ちよつと制服が窮屈で……ほら、インナーとかぴちーつとしてオヘソの窪みが浮かんでるし、首のことかぐえーって締め付けられて苦しいの」

—— あー、慣れだよ慣れ。戦闘服だから快適だし、これはこれでいいもんさ。

「ユウはいつつも制服じゃんか。だからそんなこと言えるんだよもー。スカートって動きにくいなあ」

—— だって服これしかないですし……まあブラツ

ドにいる以上、こういう特別感を演出してかないといけないんだと。「きよーどーする立場になってくつてやつ？　なんだか実感ないなあ」

——俺もなんで副隊長なんてやってるのか、ほんと実感ないよ。仕事はきついのにさ。

「でもユウは実際すごいじゃん。射撃のマニユアル作ったりとか、近接突撃の感状とか、フェンリルからの賞状とか一杯もらっちゃってるし」

——なんぼ賞をもらったところでお給料は増えないんだよなあ、これが。賞状に関しては俺もよくわかんない内に増えてくし。

人呼んでなんちやらつて名乗っていいよとか、「称号」あげるよつてなんなのよ。

「それだけたくさん出撃して、がんばったってことの証だよきつと」。

アラガミの攻撃とかすいすいーツてよけて、ズバババーツて攻撃して、ジュリウスと肩を並べられるのはユウしかない、なんて言われてるくらいだし」

——う、うん。それも半分神機様のアシストっていうか……最近は自力でやってるけど、うん。

「慈善事業への寄付もフライア月間最多になったって、この前フランちゃんが言ったし」

——それは初耳なんですけど。

「ジュリウスは会議とか研究とかが多いから、フライアのゴツドイーターで誰かを助けてるの、ユウが一番多いと思うな」

——そうかあ？　アラガミ絶対殺すマン、みたいな感じで、怖がられる方が多いような気がするけど。

「ちゃんと皆わかってるよ。シエルちゃんだつて、ユウに助けられたから、あんなに優しく笑えるようになったんだよ。きつと」

——そっか。うん、そうだといいな。俺が誰かを助けられてるんなら、いいなと思うよ。

「私のことは助けてくれなかったのにね！」

.....

「ねね、どうして私のこと見捨てたの？ 教えてよ、ユウ」

.....

「ねーえ！ いじわるしないで教えてよー！ もー！」

.....

「ユウのいじわるー。いいもーんだ。今日の極東のご飯、ユウの分まで食べちゃうからね！」

.....

「楽しみだなあ、極東。私、昔は極東に住んでたんだけど.....あ、それはユウも知ってるよね。極東にはどんな食べ物があるのかなあ」

.....

「あつ、いつけない。ラケル先生に呼ばれてるんだった！ 最近、すつごく頭が痛くって.....ごめんねユウ、もう行くね！ それじゃ、また後でね！」

..... ああ、また、極東でな.....ざまあみろだよ、俺。

別になんてことはないさ。

ぶるって逃げちまった。

ビビったんだよ、俺は、みつともなくな。

それだけさ。

□ ■ □

やばい、冷や汗が止まらない。

はやくも俺はもう、限界かもしれない。

「制服着るのって適合試験以来だねえ。あ、ロミオ先輩その帽子かっこいいね！」

「だろだろ！　へへん、どうよ。第一印象が大事だからな、ナメられなないようにしねーと！」

「ギルも制服、シュツとして似合ってるよ！」

「ありがとよ」

「ジュリウスもいつもよりずっと綺麗だねえ」

「綺麗……か？　それは褒められているのか？」

「えー、ジュリウスは綺麗だよー」

「そう、か……ありがとうナナ」

「ナナ、ナナ、誰かを忘れていませんか？　一番大事な、ほら……極東ワードで、最後にトリを飾るといいう、ほら」

「え、ユウのこと？　ユウはいつもと同じでしょー」

———ですよねー。私服とか持ってないからいつも制服だしなあ。

「いえ、副隊長はいつも輝いております！　いつもと同じなどありません。ナナは審美眼が優れておりますので、違いがわからないんです！」

「えー、それひどくない？ だって変わんないものは変わんないし」「何を言うんですか！ 慈悲の心に溢れ、理知に富み、その魂の燦然たる美しさたるや、日に日に輝きを増しているじゃないですか！

その証拠に、これ、私のこのデータブックにきちんと毎日、記録されています！ 髪一本に至るまでその違いが現れているでしょう！」「出すな。シエル、ステイ。ステイ！」

「おのれギル……ご安心を副隊長。私は違いがわかる部下です。ゴールドブレンドです」

「シエル、口呼吸、息が荒い。お口チャックだ。いいか、俺たちはフライアのゴッドイーター代表として……」

——オールバックバナナがなんか言いよるわ。なんなの？ 同じ制服着てるはずなのにこのオーラの差。俺もうギリギリなのに何これ、嫌味なの？

「ま、なんとたつて極東は最前線、だろ？ ジュリアスの言う通り、バチツとキメていかないとな。」

そりや優秀なゴッドイーターがわんさか……おおおっ！」ロミオの感嘆の声に出入りロゲートの先を見れば、そこには見慣れた光景が広がっていた。

多くのゴッドイーターがところ狭しとカウンターに足を運び、今日の戦果を語り合い、次のミッションのミーティングに熱を上げている。

その中心には、カウンターに折り目正しく立つミッションオペレーター。竹田ヒバリ嬢の姿が。

フランが氷柱とするならば、ヒバリは鉄骨であろうか。最前線に相応しい、埃と泥の香りを感じさせるたくましさ、その所作に現れている。

彼女を中心として、ゴッドイーターがひっきりなしに行き交う光景。

つまりは、いつも通りの——騒がしい、極東の光景だ。

——ただいま極東。こんにはは修羅場。

「すっげー！ 極東ってこんなに人いるんだ！」

「ほえー……人がいつぱいだー……」

「フライアは私たちとフェンリル職員だけでしたから、ずいぶん賑やかですね」

—— わー、俺こんなにゴッドイーターが中央ホールにいるとこ見たことないやー。

俺が来るとみんなスーツでどっか行っちゃうもんなー。あははー。

「おい、懐かしいのはわかるが、そんな所で突っ立ってないで早くいこぞ」

—— 泣いてないよ？ 俺、泣いてないからね？ ねえ聞いてるギル？

「まためんどくさいモードに入りやがった……」

「無視していい」

いくぞ、とジユリウスに腕を掴まれ、ゲートをくぐる。

重たい門の敷居をまたいだ、その瞬間である。

ざわり、と騒がしかった空気が凍り付いたのは。

「おい、あれ……」

「よその支部のゴッドイーターか……いや……見覚えが……」

「まさか……いや、うん……」

「いやまさか……まさか、だよな？ だって北歐に出向いてるはずだろ？」

「はは、そんなことあるわけ……ほら、黒い腕輪とか見たことないし……いや、でも」

「あんな髪型だったっけ？ もつとこう、野暮ったかったっけとか。あれもあれで地味だけど」

「あれはヅラかもしれない。被り物ばっかしてたしあの人。なんかターミナル操作するたびに髪型とか変わってたじゃん。ワイルドに決めるぜとか」

「被りものがアレだって以外の印象……意外と薄いよな」

「戦績はガチだけど影薄いよな……最初の頃とかソーマさんが主人公だと思っただけ」

「かみか……いや、しかし」

「かみかり……いや、そんな、なあ？」

「信じて送りだした極東の英雄が、別支部の任務にドハマリして腕輪が黒くなつて帰ってくるなんて……」

「シツ！ 滅多なこと言うんじゃない！」

「そうよ！ 任務のところは調教つて言い直しなさい！」

「もう遅い……手遅れだ……腐つてやがる……」

「くそつ、こんなになるまで放つておいたなんて！」

水を打つたような雰囲気。

これだよ、これ。

わあ、この空気懐かしー。この何かいたたまれない空気が漂うのが俺の知つてる極東だよ。

へへ……なんか泣けてきた。

何で俺こうなるの……見た目？ やっぱりイツケメエンじゃないと駄目なの？

そんなボソボソ言われるくらい俺つてイケテナイメンなの？

いちおう初対面なのに、極東はほんと地獄だぜふうは……

うん、初対面初対面。俺と君たち初対面だから。指ささないでください。写メはやめて。

写メはやめ……おいそこのお前、いますぐデータを消せ。そうだ……それでいい。

ウツオー！ クツアー！ チツクショー！

大丈夫大丈夫俺はまだ大丈夫！ バレテナイバレテナイバレテナイ！

あああ見ないでええ俺を見ないでえええ。

ヒバリさんと目が合ったやばいよおお。

何かぐつ、と空気飲んで、わかってますよ、みたいな顔して頷かれましても！

それ絶対、黙つてやるから出すもの出せよ？ のサインですよねえええ。

あああまた搾取されるのかああああ。

もう限界……限界だからあ！

俺をいじめるのはやめてえ！

「ふん……わかっちゃいたが、こども露骨に余所者扱いされるとな。極東は閉鎖的だと聞いたが、その通りみたいだな」

ギルが何か斜め上な感じに勘違いしてる。

いいぞ、もつとしろ！

「なんかみんなユウのこと見てない？」

——ぎくりぎくり。

「そりや元々ユウはこつちにいたんだからさ、懐かしいんじゃないの？」

——いやほら、あれだよ！ うん、ほら、あれだつて！

ね！

「あれってなにさ」

——ほら、ね！ うん……あつ、あー！ これ！

腕輪！ 黒いじゃん！ ブラッドじゃん！

「じゃんつて。そりやブラッドじゃんか、俺たち」

「あ……そつか。あの人たちからしてみたら、ユウは仲間だったんだよね。でも今は私たちのユウだから、あの人たちにとつたら」

「あー、仲間をとられた、みたいなの？」

「あつ……あつ、副隊長！ その……極東のゴッドイーターに、籍を戻したい、とは……思つて……」

——いや、俺はもうブラッドだよ。どこにも行かない。こ

こが俺のいる場所だからさ。

「ユウ……」

「副隊長……」

ていうか、どこにも行けないからね？

黒くなつた腕輪外せないだろうし、俺もうユウ君として生きていくしかないからね？

リョウタロウはもうどこにもいないのだ……

どうしてこうなつた……どうしてこうなつた！

「でもやっぱり、つらいよね？ いいんだよ、私たちのこと気にしなく

ても。その、ちょっとは寂しいけど、極東の人たちと遊んできても」
——いいからいいから大丈夫だから。なんかもうね、呼吸するのがつらくなるから言わないでお願い。

「うん……」

「人工呼吸が必要と聞きました」

——あー元気になったー！　すごい元気になったー！

ほら極東の支部長の所に挨拶にいかないと！

俺が案内するし！　ここに住んでたから知ってるし！　こつちだし！　早く来いし！

「ははは、焦っているようだな、ユウ」

——知らないし……黙れし……

「お前はいつか俺たちにごめんなさいしなさいといけないな？　ん？」

——もう気付いてるなら気付いてるっていつそ言つてよお！

「どうせ上層部の策謀にでも巻き込まれたんだろう？　お前がどんな奴だということくらい、俺は知ってる」

——ぐぬぬ。

「ははは、信じているぞユウ」

いつか絶対にこのしたり顔してるジュリウスをキャン言わせた
る……絶対だ！

オラア！　ここが黒幕風眼鏡の執務室だぞ！

あいさつの時間だオラア！

眼鏡「ベコベコ」にしてやるよオ！

「お！　やあ、ブラッド隊の諸君！　極東へようこそ！」

「ハッ！　歓待ありがたく存じます」

「そんなに堅くならなくてもいいよ。エミールが世話になったそうだね。出来れば直接会いたいと思っていたんだ。

今回の申し出はこちらとしても願ってもいないことさ。今、極東のゴッドイーター達は『感応種』の登場に頭を痛めているからね……」
「やはり、戦況は芳しくないのですか？」

「何せ新型神機も旧型神機も関係なく動かなくなってしまうからね。

おっと・・・もう新型神機、と呼ぶことは出来なくなるのかな」
チラ、と薄く線となっていた目が、ほんの少しだけ見開かれる。

狐のような細面から、裂けるようにして現れる眼光は、見るものを
畏怖させる力があるようだ。

ナナとロミオが、うつと喉を詰まらせて体を引いた。

いつも通りの、榊博士である。

お久しぶりですねこんちきしょん。

「君たちブラッドはその能力で感応種を撃退できる。実にすばらしい、とても心強いよ」

——こつち見るなし。

「我々の最善を尽くします。フライアは極東での活動準備に追われて
おりますので、また改めてごあいさつに・・・」

「ああ、そうだね。ええと、キミはブラッド隊の隊長の、ジュリウス君、
であっているね？」

「ハッ、ブラッド隊隊長、ジュリウス・ヴィスコンティ、現時点をもつ
て極東支部に着任いたします」

「うん。そうだね・・・極東支部について、どう思ったか聞かせ
てくれないかい？」

「どう、とは？」

「ここは最前線と言われる場所だ。アラガミの強さ一つとっても、他
地域と同じ姿であるとは思えない程の強度を誇る。

そんな中で戦い続けるゴッドイーター達を君は見たはずだ。どう
思った？」

「活気がある場所だ、と思いました。とてもここがこの世の果て、強力
なアラガミの跋扈する地獄であるとは思えない。

ゴッドイーター達も皆、一人一人が小支部のエース級の実力を持つ
ている。先日こちらで預かったエミールでさえそうでしょう。
・・・ですが」

「ですが、なんだい？ 言い難いことでもかまわないよ。率直に、どん
な意見でも言いたまえ」

「ここは人の命が燃え、最も強い輝きに満ちた場所でしょう・・・」

ですが、光が強いほど、闇もまた濃い」

「ほう．．．．．なぜそう思うんだい？」

ジュリウスの眉間に皺が寄る。

「極東支部に入る直前、海沿いのルートを通ってきた。

そこで皆が見た。

建設破棄されたエイジス島の成れの果てを。

ゴッドイーターならば誰もがあの島に感じるはずだ。

アラガミを．．．．．オラクル細胞を引き寄せる何かがあると。

事実、エイジス島のおかげで極東の「アラガミ動物園」化は歯止めが利かなくなりつつあった。

「あの」

申し訳なさそうに口を開いたのはナナだった。

上官と支部長の会話中、口を挟んではいけないと理解しているはずなのに、言わずにはいられない事があったのだろう。

ジュリウスが鋭く叱咤しようとしたが、榊博士によいと手で制される。

「極東支部の、壁を越える寸前に．．．．．その、外の人たちが、助けてって、壁の中に入れてくれて、泣いてるのを見ました．．．．．」
「そうかい．．．．．君達はどこに来る途中にエイジス島を見たね？」

「事故」により前支部長が亡くなり、アラガミを誘引する場所と なって開発が頓挫したものだ。

エイジスに回す資材が余剰するようになったとはいえ、未だどうにもならないことはある。

君達は「箱庭」の世界しか知らないようだ。これが今の人類の置かれた戦況だよ。

私とて心を痛めている．．．．．しかし壁を開いてしまつては、ここはすぐにパンクしてしまう。牙を尖らせたアラガミがすぐ目の前にいる．．．．．扉は閉ざされていなければならない。

救う人間を選んでいるのではない。だがね、どうにもならないこともあるんだ．．．．．それを君達は、ここで学ぶといい」

「でも．．．．．！」

——ナナ。

「……はい、わかりました。ごめんなさい」

どうにもならないこともある。

しょうがないことさ。

ゴッドイーターに異様に明るくって派手な奴らが多いのは、そういうプレッシャーから逃れようとしているからなのかもしれない。

戦いの中、吹いたら消えるしかない命を、誰かに覚えていてもらおうとしているのかも。

誰も彼もが追い詰められていて、必死なんだ。

決断を下さなきゃいけない榊博士も、そりゃあつらいもんだぜ。

疲れたように目を擦るのは、決まって誰かを切り捨てなきゃいけない判断をした時だ。

研究のためなら何日も徹夜したってピンシヤンしてるこの人がだぜ。たまらないよな。

戦うやつもいれば、逃げ出す奴もいる。

誰も責められないさ。

誰もね。

「だが、我々もただ見捨てるなどということはしない。決してだ。それは信じてほしい。今、対アラガミ装甲で覆った新たな居住区をいくつも建設しているんだ。

極東にくらす人々の……人類の生存権を拡大しようというプロジェクトが進められている。ぜひ、君達にも参加してもらえたら嬉しいよ」

「わあ……はいー」

泣いた子がなんとやら。

あれか、『クレイドル』か。

ここを出た時、ほとんど着の身着のまままで飛び出しちゃったからな。

誰にも会わずにフライア入りしちゃったもんなあ。

フライアっていつも移動してるから、「停留所」に留まってるってこ急いで飛び乗らないといけなかったもん。

アリサ元気にしてるかなー。

「榊支部長、私の部下を不用意に巻き込まないでいただきたい」

—— おおっとお。

「ああ、うん．．．．．うん？」

ジュリウスさん何してはるん？

え、ちよつと、おま。

何ガチの殺気振りまいてんの？

おいやめろマジで。

この人これでも支部長だかな？

初対面で敵意剥き出しとか、失礼ってレベルじゃねーぞ！

お前さんがそんなこと解らないわけねーだろうが！

「ユウもまた、そうやって善意を貼り付け、正義を隠れ蓑に、自ら志願するように差し向けたのでしょうか？」

「えっ．．．．．私、まさか．．．．．」

「ナナ、不用意に提案にうなずいてはいけない。ここは極東で、俺達は所詮ぬるま湯しか知らない、余所者に過ぎないんだ」

目が怖い、目が！

ど、どうしちゃったのこいつ。

ナナも騙されていたの、みたいな顔しちゃってるし。

ちよつと！ 榊さんこつち見ないで！

怪しまれないように視線そらしてたの台無しじゃん！

わあ！ すごい！ 聞こえる！ 心の声が！ アイコンタクト！

その時ユウと榊の間に、電流走る．．．．．！

(リョ．．．．．ユウくん．．．．．これ、どういうことだい？)

—— (いや、俺にもさっぱり。何でこいついきなりブチ切れてるのか意味不明なんすけど)

(この敵意の向けられ方は尋常じゃないのでは．．．．．いったい何が．．．．．)

—— (ていうか、あんまりこつち見ないでくれませんかねえ？ 俺は清廉潔白な新兵のユウ君なんです。支部長のつながりとかあるわけないペーペーなんで)

(待ちたまえ。私が悪いんじゃないぞ。二年は帰ってこないという計算だったんだ。)

フライアに長期間滞在することになるからこそ、あんな強引な手段をとったんじゃないか。

適当に暴れてもらったら、技術交換の名目か何かでこちらに帰ってきてもらうつもりだったんだ。

その後は戦死したなりなんなり、こちらで技術解析して黒い腕輪を複製したなり、なんとでも言い訳は立ったはずだよ。

それを君、半年たたない内に戻ってくるとか、私としても想定外だよこれは！)

—— (んなこつちや俺に言われましても知りませんがな。完璧おれが割りを食ってますやん。どないしてくれるんでつか！)

(私にも……解らないことくらい、ある)

—— (なんだつてとか言わないしごまかされないぞ俺は！うわジュリウスがかつてないくらい怖い顔してるんすけど！)

(そうか、解ったぞ！)

—— (どういうことだつてばよ博士エ)

(ジュリウス君はデータを見ただけでもとても有能だ。君の事情など、すでにさくつとまるつとお見通しだろう。)

そして……いや、だから彼は勘違いをしている！ 賢いからだ！ 自らが見つけた手がかりを疑うことはない……！)

—— (つまり?)

(どうも彼は、君を私がハメて、後ろ暗い任務に就けたと思ってる……ではないかね?)

—— (えー、いやそんなことありえ……うーん、ないと思うけどなあ)

ジュリウスをチラ見する。

なんかすごいイライラカリカリしてる。

こんな苛立つてるジュリウス初めて見たようわー。

「ユウは私の部下です。榊支部長、こちらにいた頃はいざ知らず、もはや彼は私の部下なのです。」

以前のつながりを傘に命令を下されたら、立場としても、心情としても、彼は従うしかないでしょう。

だが私は違う。私はあくまでフライア直轄の部隊、その隊長です。不当だと判断した任務は拒否する権限が私にはある。

そして拒否権を行使した場合、説明義務が発生します。ご理解………ただけますか？」

「え………うん、まあ………」

「私の部下は………ユウは、俺が守ります」

わーかつこいいー。

ちよつと、アイコンタクトやめてくださいよ博士。

（だいたい合つてそうじゃない？ しかもこれ、私に脅迫されたとか言い出しそうなんだけど？）

———（何か俺に裏事情があつて、それに俺が不満抱いてるつていうのまでは見抜かれましたけど、こんなナナに言ったのが飛び火して爆発するとか）

（いやあ、わからないよ。だってどう見ても彼、君のこと好き過ぎるもの）

———（うげえ、やめてくださいよ………）

「あなたが何を考えているかはわかりません。ですが、極東の支部長というお立場で、我々フライアのメンバーにお命じになるのならば、相応のお覚悟をお願いします」

（これ………まさか、私が何かの陰謀の黒幕だ、とでも思ってるんじゃないだろうね？）

———（誰もが通つた道。しょうがないね？）

（まっつてくれ誤解だ！ 私はこんなにも目が澄んでいるじゃないか………あつ、逸らさないで。助け舟を！ カルネアデスの板を！）

———（残当）

なんぞかんで榊博士にくらつた最大級のやらかしだからね？

潜入調査のために別人になったはいいいけど、古巣に全員連れて引き返すハメになるとか、さすがに予想しきれないのはわかるけどさ。

今後、フライアの体制が極東に一時的に組み込まれることになるだろうし、うん……部隊内ならまだいい。フランや、文官の人達にバレるとこれは本当にやばい。

軽く言ってるけど詐称や書類偽造繰り返しまくってるから、フライアの面子にバレるとガチでやばい。本部直轄だからほんとやばい。直通で通報されちゃう。

榊さん揉み消してくれるんすかねほんと……。

一時的にデータ収集のため立ち寄っただけーってことだし、それ終わるまでの辛抱だろうけど。どんだけかかるんだろ。

エミールとかエミールとかエミールとか……あとエリナとかコウタとか、そういうところから漏れる未来しか見えない。

冷や汗が止まんない……大丈夫大丈夫大丈夫。

まだバレてないまだバレてない。

まだ……ってことはいつかバレ……イヤアアアア

！

もうここまで来るのに限界だったからあ！

嫌だよこんなギスギス生活！

もう限界！

限界ですからあ！

「安心したまえ」

榊博士が静かに口を開いた。

「権力の座に着いた者は、嫌が応にもその力を行使しなければならぬ。冷酷に切り捨てなければならぬ時もあるし、誰かに泥を被つてもらわねばならない時もある。」

でもね、私は……私は、少数を切り捨て、多くを救うというロジックを認めない。それはご理解いただけるね？」

「ですが……必要に駆られれば」

「そうだね。私もまた、人の矛盾を抱える者だ。きっとその泥を被るのは、ここにいてるゴッドイーター達だろう。だが私は、信じている。」

極東の戦士達は、絶望の沼など揚々と踏み越えていくと
につこりと榊博士は笑った。

何時もの胡散臭い笑みではない、子供を教えるような、大人達がよく浮かべる表情だ。

「私に信が置けずともいいさ。でも、彼のことは信じられる、そうだろう？ 大丈夫だ。どんな壁も、彼は打ち壊して、乗り越えていくさ。だから、安心しなさい」

「……ハツ、口が過ぎました。大変失礼な真似を」

「いいんだよ。では、さっそく15時にラウンジに集まってくれたまえ」

「ブリーフィングですか？」

「まあ、そんなところだよ」

「—————— エエ話しにして勘違いフラグ回避しよったでえ……」

「何か？ 質問でも？」

「……いいえ何もありません、サー。」

「よろしい。では改めてフライア諸君、ようこそ極東へ」

「にんまりとする榊博士は、いつもの胡散臭さを漂わせていて。」

「そして、おかえり。『リヨウ』君」

「—————— ちよつ。」

「リヨウ？」

「彼のあだ名さ。R・ユウ……リヨウ、とね」

「—————— いいの？ これセーフなの!? いいの!？」

「後でまた、ゆっくりと話そう」

「本当に冷や汗が止まらない。」

でもこの刃の上に立っているヒヤヒヤ感。ああ、極東に帰ってきたんだなあ、と強く実感する。

綺麗なお姉ちゃんよりも、故郷を想わせるのが胡散臭いおっちゃんを含み笑いだったところがまた、らしいかもしれない。

比較的スムーズでありつつ、多大な波乱の予感を含みつつ。

フェンリル極致化技術開発局フライア所属、ブラッド隊。

極東入り——————。



「んんんん！ 見渡す限りのご飯、ご飯、ごはーん！ こっつ、ここが人類の理想郷……!? 極東つて……最ツ高じやないですかーっ！」

「ブリーフィングという名の歓迎パーティか……フ。どうやら先入感を抱いていたのは俺達の方かもしれないな」

「ねね！ ジュリウスこれおいしいよ！ これも！ 私テンプラなんて初めて食べたよー！」

「そうか。ジャパニーズ・スシを食べるのは俺も初めてだ」

「あ、これムツミちゃんが隊長さんにーって！ おとなだけ？ が飲むジュースだつてー！」

「ありがたくいただくこう」

「あーらら、はしゃいじゃつてまあ……」

——サツキさん達もこっちにきてたんですね。いやあ、偶然だなあ。

「ま、こっちはいくらかフェンリルの動向掴んでますからね。榊支部長からいいことあるからおいでって言われたら、そりやあなた絡みでしようよ。ねえ、ユ・ウ・君？」

——いやあ、あはは……

「えっ……まじで!? おまつ、リョウ”じゃん！ 帰つてきてたの!?!」

——人違いです。

「なんだよもー！ ……どこの支部に行ったかも教えてくれずに……フライアだっけ？ あのでかい艦みたいなの。すげーなりョウ！」

——人違いです。

「あー！ エミールがなんかこの前、研修つて名目で助っ人に行った所か！ はー、世界つて狭いもんだなあ。あいつひっきりなしに不死鳥がどうか、ニンジャがなんとか言つてたけど」

——人違いです知りません。ニンジャなんていない。いいね？

「アツハイ……てゆーかユノ！ 生ユノ！ いやーユノさん極東に帰ってくるの久しぶり……ほら手振ってる手！ 口パクしてるから！ り・よ・う・く・ん？ モゲろよお前！」

——人違いです。人違いだってば。

「リヨウも帰ってくるならくるって言うてよもー！ そしたらアリサとかソーマも呼んでさー」

——人違いだつってんだろがこの野郎！ コウタ馬鹿野郎！

「えっ、なに？ 何で急にキレるの？」

「リヨ……ウ……でも……!?!」

——シエルちゃんは向こうに行つてようねー！

「副隊長の姓名は……神薙・R・ユウ……Rユウで、リヨウ……あだ名呼びは、極東における親友の証……！」

——お、おう？

「今後は私をアランとお呼びください」

——お願いだから綺麗な思い出にしろといってくれませんか
ねえ!!

「ぐむむ……極東には負けません……負けませんから！」

——はいシエルちゃんナナと一緒に遊んでようねー！

「あー、なに？ 別人設定とかそんな感じ？ まためんどくさいことしてるよね。スパイ？」

——声がデカイっての。榊さんに文句いつてくれよほんと。

「リヨウはこつちでのあだ名つてことで通せばいいんじゃない？
リヨウなんてありふれた名前っしょ？ 俺ゴッドイーターになってから10人くらいリヨウって登録名見たし」

——ほんとかよ……あの雑誌のほら、恥ずかしい

やつとかはどうなの？

「あーあれ。あれはプライバシーのなんとかで名前掲載されてないし大丈夫っしょ」

—— なんなの？ 名前バレまではOKなの？ 重く考えすぎてるのは俺だけなの？ 訳がわからないよっ！

「別人だってしちゃったんなら、もう適当に自由にしたら？ 名前縛りももうそんな意味ないだろうしさー。それじゃこうしようか」

—— それじゃあって、何するのさ。

「わー！ リヨウ久しぶりだなー！ お前、あの神狩人と同じ名前だもんなー！ 伏せられてるけど神狩人の名前もリヨウだからなー！ 同じ名前だわーカーツ！ リヨウだわー！ 同姓同名だわー！ 極東じゃよくいる名前だもんなーリヨウってー！ カーツ！」

—— やめ、やめろオ！ マジで何やってくれるのお前!!

「まじで!? え、神狩人の名前ってリヨウっていうの!? ユウのあだ名と同じ名前なの!?!」

—— ロミオも向こうに行ってるい！ こういう話題だけ食いついてくんない！

「ほらね、こうやってバーンとオープンにしてっただ方がいいんだって。バレないバレない。

同一人物だっということが解んなきやいいのさ。潜入するために誤魔化すのが必要だったのは最初だけ、腕輪の審査通す時だけでしょ？

入っちゃえばこっちのもの、もう隠す必要もないって。後からバレても平気だよ」

—— フェンリル直轄領の怖さを知らないからそんな事言えるんだっつーの!!

「フェンリル本部のやり方は知らないけど、榊博士のことは信じてるよ。もう対処済みでしょそこんどこ」

—— どんどんドツボに嵌っていく感じがしてる………
なんで榊さんも偽名設定とかしたし………後でこーやって展開がわちやわちやしてくるんだからさー、俺が続投じゃなくて、新キヤラつくったらよかつたじゃん。

ほら壁外でやんちゃしてたレンカ君とかさあ、すげー主人公体質じゃん。なんで俺なんだよもう。

「本人確認がとれなきゃセーフセーフ。同名のそっくりさんだつてことで。リヨウはあだ名。いいんだよそれで」

——コウタが毒された……俺が隊長なんかにしたから！

「ほんとだよ。そこんとこ俺マジで恨んでるからね」

——ごめんささい。

「でもさ、こんだけすぐにボロが出てくるんだから、いつまでも隠し通せるなんて思わないほうがいいよ。むしろ開けっぴろげにして、公然の秘密みたいにしてっただ方がいいんじゃない？ それにもう向こうは全部承知の上で、泳がされてるだけなのかも」

——だよなあ。普通に考えるとバレてない訳ないんだよなあ……考えたくないけど。ラケル博士とか陰謀好きそうだし。なんで博士つてのはこう……ぶつくさぬいぬい。

「榊博士もカンフル剤扱いで入れたんじゃない？ リスク承知で劇薬に劇薬ぶちこんだとか、そんな感じだと思うけど。裏返せば、それをしなきゃいけない理由がある、ってことで」

——榊さんが警戒するとかなんだよ。また終末的なアレか？ 中身がやばそうな神機兵くらいしかなかったけど。

「何、リヨウ神機兵乗ったの？ いーなー、あれかつこいーよなー。俺フィギュア欲しいんだけどさあ」

——なんとかいうバーチャルアイドルはどうなったのよ。

「シプレは別腹シルブプレ？ で、神機兵はどうだった？ やばいつてのは、終末的な？」

——どうだかな。暴走とかして野良アラガミ化しそうな雰囲気はあるなあ。俺はその前に自分の生活が終末になりそうで怖いんですけど。

「アフターフォローは万全でしょ。支部長になってから榊博士の権限増えたし、裏工作とかもうお手のものですよ。人を一人増やしたり減らしたり、それがバレても問題ないってふうに取り引したりさ」

——まあ、リンドウさんとかソーマに比べたら大した爆弾じゃないんだよな。成果上げてたら黙認されることもフェンリルにはあるし。

「リヨウはやりすぎてるってこあるけどね。ま、榊博士が警戒してリヨウを投入したっていうんならさ、これはもう、普通のことじゃない」
——俺がっただけで大げさな。

「控えめだよ。これでもね。悪いけど、俺、フライアの中樞信じてないからね。ブラッド隊だっけ？ いい面子だと思うよ。でも知らないうちに踊らされるなんてこと、よくあることですよ？」

それはあっちの隊長さんも、同じ意見なんだろうけどね」

——わかるんだ？

「わかるよ。これでも俺、極東支部第一部隊の隊長だからさ。こつちをさぐるような気配がたまに飛んでくる。同じ隊長だから、そりや気になるよね」

——いい顔になったよ、本当に。隊長らしくなった。

「前任者が優秀だったもんだから、これくらいは当然っていうかさ。まあ、『第一部隊の隊長の仕事』はいつでも出来るように準備しておくよ。俺は引き金を絞るのに、三つ数える必要なんてないからね。あじーん、どばー、とりーってね。

で、それはまた向こうも同じ、と。いいんじゃない？ 銃口突き付け合わなきや信用できないっていうんなら、それはそれで」

——隊長ってのは本当に面倒臭いもんだな。お前におしつけ………任せて正解だったよ。

「言い方変えてもだめだからね？ 聞こえてるからね？」

——なんの因果か、なんでかおれもブラッド隊副隊長だよ………。

「ぶーくくくー！ ざまあ！ 俺に押し付けた報いだつての！」
——こいつ………っ！

「なんやかんやあって結局あれじゃん？ 最終的に、リヨウがブラッド隊の隊長になっちゃったりするんでしょ？」

——なんやかんや言うの止めろよ！ こえーよ！

「ままま、それじゃ俺、代表挨拶しなきゃだから後でねー。えー！ ブラッド隊のみなさーん、極東へようこそ！ それでは、ブラッド隊 ジュリウス隊長にお声を一ついただきますよう！」

「本日はこのような会を催していただき——」

「やだ……イケメン……！」

「ほんとやだ……イケメン……！」

「もうだめ……イケメン……！」

——あのバナナ枯れたらいいのに。分離してブーメランになればいいのに。ロアルドロスになっちゃえばいいのに。

「先輩は自分を卑下しすぎ。うつつうしいんで落ち込まないでください。まあ、そこそこだと思いますけど？ そこそこ、まあ」

——俺の味方はエリナだけだよ……あ、俺先輩とかいう人と人違いだからね。違う先輩だからね。

「はいはい、もー、面倒くさいなあ」

「ああー、いー顔！ほんとに駄目なんだから、みたいな顔！ そんないい顔Sランク評価取ったときでも見たことないや俺」

「コウタ隊長はあっち行ってください！ ジュリウス隊長を見習ったらどうですか？ すごい隊長っぽいですからね！ そんなだからコウタって言われるのよ！」

「ごめんリョウ、俺同じ隊長だとかってカツコ付けてたわ。これ意外と傷付くわ」

「バカラリー、ハウス。ああもう、先輩も！ 手ぶらじゃないですか！

ほらドリンクと軽食！ まったくもう、もう！」

——なんかこのサンドウィッチ形がいびつっていうか、ムツミちゃんが作ったのこれ？

「私ですけど何か？ 別に、サンドウィッチとかパンを切って具材を挟むだけでしょ。文句があるなら食べないでください」

——あ、食べる食べる。うまいなあ。うまい。

「ふん。初めから素直にそうしたらいいんですよ。ほんとに素直じゃないんだから」

「ブーメラン」

「で、先輩、まだ言っていないことあるんじゃないですか？ 大事なこと」

「んー、ん．．．．．まあ、そんな感じじゃないし、またすぐ出てくたろうけどさ。」

「はつきり言うー！」

「ただいま、エリナ。」

「ん！ おかえり．．．．．おにいちゃ」

「おお？ おおおっ！ おおおおっ！ 心の友よ！ 強敵と書いてともと呼ぶ、我がライバルよ！ 楽しんでるかい！」

「ウザ」

「出よったわ。」

「極東はどうだい？ フライアも優雅だが、ここはここで趣があつていいだろう！」

土と油のにおい．．．．．それは決して不快ではない。むしろ懸命に生きている人の活力が伝わってくる。さらにその中で一杯の紅茶を飲む。

それら全てのおいが混ざったときに感じるんだ。

ああ．．．．．僕は彼らを護り、また僕も、彼らに護られているんだ．．．．．と！」

「言ってることは立派なんだけど。ほんと立派なんだけど．．．．．ほんとね。」

「そう、君のように．．．．．かみかりう」

「忍者だから！ 俺忍者だから！ ケジメすんぞ！」

「おっと、失敬。僕としたことが．．．．．どうか許してほしい。君もまた、僕のように、不死鳥となりし存在だということを失念していた。ああ友よ！ 君の秘密を容易に口にせんとしたこの僕を、どうか許してくれまいか！」

「エミールうるさい！ 今は私が話してるでしょ！」

「ああ、フライア諸君、このエリナは極東の妹ポジションと思って扱ってくれたま」

「しにゃーっ！」

「るるーっしゅっ！」

「エミールの水平飛行つてもう極東名物だよな」

—— ナイスキックナイスパンツエリナ。

「ふしゃーっ！」

—— なんかブラッドメンバーもあちこちで騒いでるし、みんな馴染むの早くね？ ナナはムツミちゃんにべったりだし、ロミオは野郎ズに混じって肩組んでるし、シエルは……何？ 何か動物？ 見てるの？

「ああ、あれカピバラ。何かそのへんにいたから、ここで飼おうって」
—— そっすか……。

「よいしょっと、また俺の出番ね。こういう司会とかって俺けっこう好きなんだよね。えー、続きまして！ ユノさんお帰りなさい！ どうぞ何か一言！」

「えと、あの、ユノです。皆さんおひさしぶりです。極東支部は、いつきても活気がありますね。」

ここに来る前に、サテライトを訪問してきました。サテライトの建設が始まる前……覚えていますか？

みんな、泣いていた。つらくて、くるしくて、お腹がすいて、寒くて……寂しくて、心細くて。

私が初めて極東支部を訪れた時、見たものは、壁に寄り添うようにして……亡くなっていた方々でした。

小さな子供もいました。おなかの大きな女の人も。壁にすがり付いて、小さくなっていました。

そして……そのすぐ傍らで、ぎゅっと拳を握って、唇を噛んでいる、ゴッドイーター達の姿が……。

サテライトの建設が始まった頃です。今では、人が住める場所が増えました。でもあの頃はそうじゃなかった。

誰もが命をつなぐことさえ出来ず、そして、ゴッドイーターはその架け橋となることさえ出来ず……。

では、無駄だったのでしょうか。あの人たちの悲しみは、あのゴッドイーターの握り締めた手の中にあった、無力さは、全部無駄だった

のでしょうか。

いいえ、違う。違うと思います。私は違うと、そう思います。

旅立つ前に学んだことがあります。これも、あるゴツドイーターが教えてくれたことです。何も語らずに、その背中で、生き方で、私に教えてくれたことです。

たとえ明日、世界が滅んだとしても、私は今日、リンゴの木を植える———そういうことだと、思います。

えと……長々とすみません。こういう挨拶は慣れていないので……それで、もしよかったら、歓迎会のお礼に」

「お、おおつ、歌ですね！ いやー、なんかジンときちやつて……はは、実は準備バッチリなんだなこれが！ さき、ピアノの調律も完璧ですよ！ それじゃユノさん、お願いします！」

「———窓を開けて、濡れた、その瞳上げて……」

「キレイな歌ですね……なんだか、胸が」

「うんうん、私トリハダぶわーってきた！」

「あのユノさんがブラッドのために歌ってくれた……俺もう死んでもいい、極東で死んでもいい……極東に来てよかった……」

———ロミオ君ガチ泣きでらっしやる。ハンカチ使う？

「なんだよ、ユウは感動しないの？ なんてそんな飯食ってるの？ パスタ大盛りすぎつしよ！」

———まあ、聞きなれてるっていうか。正直あんまり趣味じゃないっていうか。

「はあ？ あ、ユノが、生ユノさんが手を！ 手を振って……！ り・よ・う・く・ん？ お前かよ！ どうなってるんだよ！」

———気のせい気のせい。

「しかし過剰なまでの歓迎を受けてしまったな。歓迎会があるのなら事前に教えて欲しいものだ。スピーチを即興で考えるのもなかなか骨だ」

「いやー、でもバッチリだったよ！ さすがジュリウス。こういうの得意そうだもんね」

「やめてくれ恥ずかしい。だがまだ終わりじゃないからな。一番大事

なものが残っている」

「うん？ 終わりの挨拶？」

「否………！」

「ん!？」

「極東におけるシメとはすなわち………一発芸………そう、隠し芸だ！」

——おつかれさまでしたー。

「ユウ！ 行くぞ！」

——うおお放せやめろおおお！ 俺を巻き込むんじやねええあああ！ こいつ酒臭っ！ 誰だよジュリウスに酒なんて飲ませたのは！ 酔っ払ってんじや………引っ張るな！

「ユノさんの歌に続きまして、我々も返礼のデュエットを皆さんにお届けしたいと思います」

「お、おおー！ プログラムにあっただけ………いや、さすがはブラッド隊！ それではブラッド隊長と副隊長による歌、どうぞ聞かせていただきますしよー！」

「あと、踊ります」

——事故するよ？ 大怪我するよ？ やめよ!?

「そこーにゆーけばー」

——急に歌うよ!?

「どおんーなゆーめもー」

——やめ………あああやめ………やめ………

！ 見ないでえ、見ないでえ。

「かーなうとー、いーうよー」

——ああああ振り付け完璧イ。

「In Gandhara, Gandhara」

a
——They say it was in Indi

「Gandhara, Gandhara」

——Gandhara, Gandhara

「副隊長………副隊長………！ 私は、私はあつあつ………

！」

「リヨウ君……リヨウ君……！」

「もうこれ訳わかんねえな」

「この後滅茶苦茶パーティーした、ってことで」



なんてことはない。

俺はぶるっちゃまったんだ。

「ギル……？　ギルじゃないか！　極東に来てんなら言ってくれりゃいいのに！」

鋭い槍の軌跡は心を移す鏡のようなものだろう。

覚悟を込めた穂先は命を突き獲る。

そして迷いに鈍った穂先は、苦しみを。

「グラスゴー以来か。ずいぶん昔の気がするなあ。

覚えてるか？　お前いつつも噛み付いてたよな。グラスゴーに配

属予定の新型神機使いが極東に持ってかれるのは支部長の怠慢、
だっけ？　直談判までしに行ったの」

覚えている。

この手はずっと、覚えている。

「あらら、カノンちゃんと呼んでら。ああ、今のが俺の率いる第四部隊
唯一無二の隊員、カノンちゃんだ。いろいろ頼りなくてあれだが、出
るところ出てるからいいかなー的なの？　おっと、また査問会に呼ばれち
まうか」

穂先から伝わる命の鼓動を。

その灯火が消える、最後の息吹を。

ずっと、ずっと、覚えている。

「ハハ、そんじゃギル、近々飲もうぜ。またな」

「はい、ハルさん——」

彼女はこの手に握った槍の先で、もがいたんだ。

ぐっどいーたー：25 噛 GE 2

○月×日

定時上りもすなる日記といふものを、社畜もしてみむとてするな
り。

日報だけでは味気ないので、個人的に今日あったことを臨場感たっ
ぷりに書いてみるぜ！

時間もあるしな！

ブラッド隊ってほんとホワイト。名前似てるのにどこかのブラッ
ク極東とは大違いだ。

隊長やってた時みたいの意味不明な書類の山をみなくてすんでい
るからまあ、討伐が終わっても時間が余って仕方ない。

よくよく考えるとあの量のミツシヨンこなしてからの事務仕事を
ほんと渡されるとか、ほんともう、極東はほんともう。

コウタすまぬ……すまぬ……

さて歓迎ムードも終わり、ブラッド隊各員に周辺地区に出向せよと
の命が下って初日である。

極東のやり方を学ぶとのことで、各員少数にばらけて各地の防衛部
隊の指揮下に入り、合同任務をすることとなった。

他チームはツーマンセルで回すらしいけど、俺とジュリウスは一人
で部隊を回ることに。

指揮系統の擦り合わせのため、ということとは解りますけど榊さん。
俺、こつちのGEとほとんど顔見知りなんですけどね？ 一人でと

か、誤魔化しようがありませんよね？

うわなんで腕輪黒いのか名前違うのとかそういう視線が痛い。

不安だ…….と思っていたら、さすがは榊えもん。

微妙につながりの薄かった壁外自治区の見回り隊に配属されるこ
ととなっていた。

いわゆるフェンリルに壁から “はじかれた” 人たちが、身を寄せ
合って作った場所を護るお仕事である。

正式な住民区ではないので、防衛隊も編成されず、手の空いた遊撃

隊が見回る程度の、ほとんど見捨てられたも同然の人達。

外周区なんかよりもよっぽど酷い扱いだ。

元々俺もそういう場所で生きていたわけだから、ただ生きるということがどれだけ大変かは理解してる。

そんな外周区周りの仕事は、ほとんどが一人で戦わなきゃいけないって場面が多くなる。

いや大丈夫だから、ほんと大丈夫だから、ね？

シエルさん、お願いだからシャツの裾から手を離してくださいませんか？
え？ 「極東は危険すぎます」って？

いや、「コクーンメイデンを何度も斬らなければ倒せないなんて……」とか言われましても。

それが普通じゃないですかね？

むしろ今まで相手してたザイゴートとかコンゴウとか、ワンパンでやれるのが可笑しかったんだって。

普通は何十回も斬りつけてやっと、って感じじゃない？ 結合崩壊全部位しても倒す寸前まで超元気で走り回るみたいなのが。

そんなの極東だけ？

ははは、やだな。

いいことを教えてあげよう。

これまで経験してきた地獄を頭に思い浮かべてごらん。

極東ではね、そんなものは天国だ。

これが普通だ、と思い込まないとやっていけないぞ。俺みたいにね。

ふつーふつー、ふつうだから、なにもおかしくありません、なにも、だってこれがふつうだから。

「やめてくださいいしんてしまいます」って、いやだから普通……泣かないでお願い、お願いだから！

冗談だって……え、死んじゃうのは俺？ 生き急いでるって？

極東伝統のお守り？ 生えてなくて作れなかった？

やめてください死んでしまいます。

○月△日

ロミオが真っ白になってた。

「オウガテイル堅すぎんよお」ってなつてた。

ギルも真っ青になって、「これが極東……噂には聞いていたが……」とか言いながら震えてた。

師匠にもものすごい同情した顔で肩叩かれてた。ハルさんのあんな顔みたことないっていう。

シエルはふらふらしながら帰ってきて、水飲んだらウツてなつてた。口元抑えた指の隙間から美少女エキスが一杯出てた。

ぺろぺろしたい。え、だめ？ 床に落ちたのなら……だめか……

ジュリウスは知らね。飯を食わなかったところを見ると、相当こたえてるんだろうなとは思うけど。

技術は一級だけど、連続任務となると体力がもたないんだろうな。

フライアの面子は箱入りだからなあ、動く巨大な箱だけに。タフさがなくていかんよ。

ナナ？

俺の後ろにずっと立ってるよ。

後頭部に吐息がかかるくらいの超至近距離で。

微動だにせずに延々何かつぶやいてる。

助けて。

○月□日

やったぜ任務だ！

いやー、すがすがしい空気だなあ！ 壁の中は息が詰まってだめだな！

外に出ちやえば正体がバレるとかもう、何も考えなくていいからな

！ 任務最高！

うん、もう自分を誤魔化せないね。絶対バレてるねこれ。皆俺のことうわなにこいつ寒い」みたいな感じで触らないようにしてるんだろうなって。つらい。

極東所属のGEの扱いガバガバすぎんよお。リンドウさんとかソーマとかリンドウジュニアとかよお。皆理解ありすぎい！

本部に取り上げられないところをみるに、そのとき不思議な事が起こったんだと思われる。もう榊さん一人でいいんじゃないかな。

たぶん俺もそういう、アンタッチャブルな存在っていうか扱いになりつつ……なっちゃったんだろうなあ。

いいよもう、恥ずかしい二つ名で呼ばれたくないし、そもそも前の名前も半分自分で付けたようなもんだし。

わかったこの話はやめよう。ハイ、やめやめ。

気にしてるの俺だけだろうし。

よーし、今日からバリバリ任務しちやうぞー！

アラガミとか超ころころしちやうぞー！

よろしくな、レンカ君！

○月今日は何の日子の日だよ

レンカ君いいわー。

基本静かで自己主張もしないし任務にも真面目だしで超いいわー。

どこかの最も模範的なゴッドイーターさんに見せてやりたいくらいいだわー。

なんかすごいこう、覚えてたての敬語みたいなの使われて距離感感じるけど、これくらいが丁度いいんじゃないですかね。

ブラッド隊は近すぎるんだよな。

なんて言うのかな……みんな家族だぜ！ 大好き愛してる

！ ずっと一緒だよ！ みたいなムードっていうか。

否定はしないし、馴れ合いは大好きだけど、正直あんまり合わないなって所はある。

お互いをニツクネームで呼び合う居酒屋にバイトで入った時と同じくらいのやりづらさがある。あれはつらかった。

ゴッドイーターって基本、奉仕存在だからさ。自分達のコミュニケーションを守るために戦っちゃだめなんじゃないかなって思っちゃうんだよね。

仲間のために戦うのはいい。信じる心だけあればいいんだから。

離れ離れになっても、同じ空の下できっと頑張っているんだろうなって、そう信じてやっていけるから。

顔も知らない人を守って死んでくんだ。そういうもんだろ、きつと。

でも家族だったら、違うだろうとは思う。家族が離れ離れになるのは悪いこと。みたいなさ。

家族がいた記憶は擦り切れてもう、ほとんど覚えていないけれど。肩を並べて戦う相手が家族だったのなら。心が離れてはやっていけなくなってしまう、んじゃないかなあ、と。

人類と家族を天秤にかけたら、そりや家族が重くなるだろうって話。仲間がたくさんいても、戦いの中、人は孤独だ。そうでなきゃいけない。

自分の責務で人を助け、見捨てなければならぬ。

家族のためにと、そんな言葉では助けを求める誰かを見捨てられない。

さし伸ばした手を蹴倒して踏みにじることはできない。

もし、世界とブラッド隊の誰かを、どちらかしか救えないなんてことになったら。

どうなっちゃうのかなって、怖さはあるね。

もつとこう、戦うことっていうのは、救われてないといけないと思うんだな。

腕輪をつけられて、死ぬまで戦うしかないって運命になっちゃってさ。

だっていうなら、ゴッドイーターにとって、戦うことが唯一の許しなんだとしたらさ。

戦っているときはね、誰にも邪魔されず自由で……. なんとか救われてなきやあ。

ブラッド隊全員に言えることだけど。ちよつとこう、腕輪付き同士で依存しすぎなような気が。

支えは自分の中に作るべきものであって、その場に居て触れ合えなきやだめだなんてのは、そんなのはもう枷だよ。

でもま、こういうのもありっちゃありだからさ。

これが一番やれる形だつていうなら大歓迎さ。俺も楽しんじゃう。家族さいこー、俺も愛してるぜー。

ブラッド隊にいる間はね。

○月夏イベント後に本当の悲劇が起きた日

ヴァジュにゃんtktk。

前足をつんつんするだけの簡単なお仕事です。

作戦名はそんな餌に釣られるニャー、だ。

いやあ、これだけ広い作戦フィールドだと索敵するのも一苦

労……. いや、さ、さぼってるわけじゃないからね？

効率的な作戦だから！ めんみつなさくせんだから！

こういうヴァジュラが縄張りにしてる所とか、他のアラガミ食われちゃっていないし、たぶんいるのもオウガテイルの群れとか小型種ばっかですよ。

通信できた任務難易度も下位のもものだったし、ヴァジュラ複数討伐とかそういうにゃんこパーティは今回はないから。

ない、はず。不安になってきた。

極東の偵察班の情報はだいたい間違う。極東あるあるっていうけど、精鋭揃いの極東でそんなに間違うわけないし。

いや、俺の参加任務だけ誤情報率がやたら高いような。

あ、餌役のゴホンゴホン、レンカ君おかえり。

どれだけ釣れた……. ヴァジュラ!? ヴァジュラなんで!?

3匹もいる!?

わあすごい雷神の響宴！

おおっと、レンカ君吹っ飛ばされたアー！

ちよっとこれ数多いやめ……グワーツ！

○月雪風レベル98が五連装魚雷と共に沈んだ日
レンカ君の串刺し一丁！

うわあああああ！レ、レンカきゅーん！

傷は浅いぞ死ぬなあああっあっあっ！

○月慢心ダメ絶対でも心が折れそうな日
日付が変わったので書いてる。

昨日はほんと大変だった。羽が生えたディアウスにレンカ君がガッスーやられてた。

ディアウスは人間を好んで襲う習性がある。

哨戒中にたまたま見つけた難民の集団を襲おうとしてたところを
かち合っちゃったもんだから、レンカ君が一瞬で頭フットーして飛び
出していった。

あの反応はトラウマ持ちですわ。ディアウスっていうより、アラガ
ミ全般かな。

こんな世界覆してやる！ って息巻いてたもん。

それで突撃して、カウンターで一撃。

背中からお腹に掛けて、鋭い骨羽の先端で一刺しですわ。

羽生えたディアウスは変異種中の変異種だから、ものすごい攻撃的
なんだよねあれ。攻撃力とかすごい。攻撃力ってなんだよって話
だけど。

何がやばいってレンカ君がやばい。

胴体貫通したのはもとより、背骨をやっちゃったみたい。傷はなん
とかなるとしても、背骨はだめでしょ背骨は。真っ二つになってた。

また才能あるゴツドイーターが一人脱落かー、あれはきついな半身

不随コースだ介護認定おりののかな、なんて思ってた切なくなってる。

普通にひよっこり起き上がって逃げた。

こいつ……動くぞ……!?

え、ええー……どゆこと……。

何か泣きそうになりながらこつちきて、俺はゴッドイーターにならない、とかなんとか言ってた。何か色々お腹から飛び出してますよ君。しまつて、どうぞ。

あの人達助かってるやん君のおかげやで！ だからもう休め。休んでください。横になってお願い。重症を超えた軽症ってどういうことなの意味わかんないよ！

うわ笑ってる怖い。血みどろで笑ってる怖い。

お、俺向こうに行くけど、その、なんか囿にしちやっただみたいたいになつてごめんね？

この人達守ってねとか建前あれば休める？ おつけー？ 怒ってない？

ディアウスはこの後、神機様がおいしくいただきました。

やっぱ羽根付きはやたら強いなあ。

クリアリザルト後に培養した細胞片は、帝王牙……あががが、お、俺のトラウマがあああ！

○月雪風二隻目育成中でもあの雪風はもう戻ってこないんだ一緒に数々の戦場を駆け抜けた雪風は二度となく日
レンカ君の神機がディアウスにポツキー折られたので、俺が単独で戦うことに。

いいよ寝てて。いいから、寝てて。寝てろ。

ていうか、遊撃隊とか言っておいて、いつもはレンカ君一人で周辺地区見回りさせてるのかこれ。

まあこの戦歴見れば、ねえ。隊長クラスだしなあ。極東基準の。仕方ない、のか？ 特務を彷彿とさせる無茶振り……極東

は本当に地獄だぜフウハハー！

難民の人達にありがとうありがとう言われて、なんか感極まったのかレンカ君が俺のおかげだって、すごい目で見てくるようになりおつた。

キラキラしておる。もうなんかお目々がキラッキラしておる。

やめて、俺の正気度はもうゼロよ！

そんな綺麗な眼で俺を見ないで！

○月燃え尽きたよ真っ白にな日

負傷者抱えたまま任務とか出来ないから帰還要請しとく。

迎えのへりが来るまで近くにあつた集落で待機だ。

いやあ、この集落もすごいよ。

うん？ ああ、ここね。いやここ、何かどこかのゴッドイーターが

善意でお金出してくれて作られた集落だってさ。

誰って、リンドウさんとかじゃない？ たぶん。

俺もたまにここに物資とか運んでるよ。ここだけじゃなくて、人が住んでる場所にはだいたい行ってる。

まあ対外自由だったよ。なんだかんだで。

それでここは色々な条件が重なってできたスポットっていうか、やや安全地帯っていうか。

ネモス・ディアナ並に緑が残ってると思いきや、これ全部アラガミの擬態した木なの。

で、アラガミが近づいてきたら木の“うろ”から細胞槍が飛び出して、そのままアラガミを突き刺して捕食しちゃうっていう攻勢防壁になつてた。

これこの前ソーマが言ってたあれだよ。狐みたいなアラガミのオリジンオラクル細胞使って作ろうとしてるやつ。

マルチコアプロセッサみたいな働きでもって、対アラガミ防壁がかってに自生と成長を繰り返すっていう、新しい建築材の開発するつて言ってたやつ。

まさにこれだよなあ。

大型のにはあんまり効果なさそうだから、これをそのまま使うのは出来そうにないけど。

いやあ、しかしこれはすごい。まるで食虫植物だ。ゴッドイーターも不用意に触れたらぱくつといかれちゃいそうさ。

おいでよアラガミの森。みたいな。

おっと、とびだせアラガミの森。やっぱり触ると攻勢防御が働くつていう。

レンカきゅん寝てなさい。

いいから。俺はこれで遊んでただけだから。これアラガミだから。触ったら危ないから。

あん？　こんなのもアラガミなのか、だって？

そりゃあ、俺達の使ってる神機もアラガミなわけですて。

やっぱ自生のアラガミは進化の多様化起こしてるよね。面白いもんだ。

レンカ君、アラガミが生まれる所見たことある？

地面からさ、ぬぬぬって生えてくるんだよ。

あれ見たらもうね、アラガミの根絶とか思えなくなるよ。

無理でしょ。

アラガミつてたぶん、地球と同一化してるから。

地球Ⅱアラガミだから。

そんな顔するなよ。

戦うことが無駄だなんて言ってるないだろ。

でもその目的をアラガミを滅ぼすことにもっていくのは、どうかなとは思うよ。

無駄だとは言わないよ。これは絶対だ。そういう気持ちで戦う奴がいなきや、人間はやっていけないだろ。

でも、俺や・・・君みたいな奴がそれを掲げちゃいけないんじゃないかな。とは思うよ。

最近思うんだ。

俺はゴッドイーターになった。

でも、ただなっただけじゃ、その使命は果たせないんじゃないかって。

ゴッドイーターはいったい何のためにあるのか。

そいつを考えることが、ゴッドイーターになる、ってことなんじゃないかな。

やべえ、いい感じなこと言おうとして途中からオラわけわかんなくなってきたぞ。

このまま勢いで流すしかねえ。

そ、そうそうゴッドイーター、ゴッドイーターね。

神機使いつてなんなんだろうね。

たぶん、こう、ね？ 胸の中にある、ね？

誰もが持つてる神機を握りしめたその瞬間にほら、みんなゴッドイーターになってるんだと思うよ！

どやあ。

○月お空のファンタジー100連レアなし発狂しそうな日

運悪く因子投与のタイミングと重なってアラガミの襲撃だよ。

やってきたのは金冠サイズのボルグ・カムラン。

アラガミの森を抜けてきたんだろう。だんだんアラガミの森の構成防御が効かなくなってきた。

偏食傾向がまた変化したのかな。あとで調整しないと。

しかし壁外任務はこれがあるから油断できない。

腕輪の調整期間とアラガミ襲撃がよく被るっていう。

本当なら相方に任せるものだけど、レンカ君負傷してるし、俺がソロでやるしかないですね。

神機なしで。

通常種のボルグ・カムランとかいまさら余裕余裕。

でも神機ないから手詰まりである。

どうしたものかと走り回っていると、レンカ君が集落の人達を集めてなんか相談してた。

ちっちゃい女の子と何か話してた。ほう、やるなレンカ君。それでなんやかんやあつてダム放流。

ボルグ・カムランを川にどぼーん。水洗トイレみたいに流れていった。なるほどなー。

倒せないならどつかやっっちゃえばいいじゃん、的な。

堤防作って決壊させて水攻め、つてのは戦国時代を代表する日本古来からの伝統戦術だもんなあ。

この集落手直しするとき、ちょうど廃ダムあつたしで、水力発電してダム復旧させようぜつてやったのが活きたね。

いやあ、水の力つてすごい。

考え直させられるよね。

アラガミは地球の新しい自然の力かも、なんて思ってたけど。

やっぱり水だよなあ、水。

○月ジータちゃん総戦力上がらない日

その後は特に何かあるわけでもなく、極東へ帰還。

レンカ君は即行で医務室につれていかれた。

俺も腕輪に因子投与してぼんやりしてたら、榊博士が暗い顔してやってきた。

だんだん榊博士のポーカーフェイスが理解できるようになったつていう。

俺の中じや極東の萌えキャラ代表みたいになってきてる。

サカツキーとかつてキャラクター作るのはどうだろう。

こう、サカツキーだカツキー！ みたいに異様な動きするやつで。

俺の血みどろピンクウサギスーツは極東のイメージキャラには合わない……いや、ぴったりかも。

で、何の話なんですかね榊博士。

はあ、レンカ君の折れた神機のお話しで。

え、レンカ君死ぬの？

フアー！なんで!? やっぱり背骨いつちやったから!?
適合率が急激に高くなりすぎたから?

それ俺も同じだったような。君と一緒にしてはいけないって、ええー。

じゃあゴッドイーター引退したらどうなんですかね。あー、それでも3年くらいしか生きられないんですか。

あー、あー。

それ、俺から言わなきゃいけないんですかね。

いやですよ。榊さんが言ってくださいよ。

ていうか俺つて一応所属はもう極東じゃないですからね。

じゃありツカが言うって……それ卑怯でしょもう。

知ってるの神機直接いじるリツカと榊さんくらいのものでしょうけど。

わかりましたよ。言いますよ。俺がやりますよ。

あー、切ないなあ。

おっぱいが恋しい。

つらいことがあつたら、おっぱいの事を考えるといい。

真面目に、人間にとつて一番強い欲求は、愛欲なんじゃないかと思ってるからでして。

だからおっぱいの事を考えるのは普通なんだよ。いいな。

つらい仕事が終わつたらシエルの所にいこうかなって、そう思うだけで元気になれるだろう? そういうことだよ!

ブラッドで発見した無防備おっぱいと無垢おっぱい。

上乳、下乳、横乳、中乳……極東に全てのおっぱいが集まったことになる。

ああ、すばらしい。

楽園はあつた。ここにあつたんや!

断言できる。

俺はおっぱいのために戦っているのだ! と!



ゴツドイーターには2種類の者がいる。

そう空木レンカは思っている。

己のために戦う者と、他者のために戦う者。

その二つが。

では目の前にいるこの人物はどちらか、と問われると、レンカは判別がつかないままだった。

この男はいつたい何のために戦っているのだろう。

「よろしく……お願いします」

未だに慣れない敬語を使う。

元は極東で一線を張っていたが、他支部へと派遣され、その他支部の人員となって帰ってきたのだという。

あまり人付き合いが得意な方ではないレンカとて、その名を聞いたことぐらいいはある。

極東にその人ありと謳われる男……神狩人。

本名は不明。

戸籍など意味を成さない世界だ。人の名前など自己申告制であり、ゴツドイーターなどほとんどコードネームのようなものだ。

中には支部を移る毎に名前を変える者もいると聞く。

陰謀に巻き込まれているだとか何かという噂はいくらでも耳に入るが、この男も自分の名前に頓着しない性質なのだろう。

過激な服装や言動を好む「変わり者」が多いゴツドイーターである。

そういった「趣味」の範囲には触れてやらないのがマナーだということは、壁の中に来て学んだことだった。

敬語、無理して使わなくていいよ。

「ああ……いえ、はい」

——— なんてのに。

苦笑されたことに、からかいの意図がないと解ってはいても耳が熱

くなる。

壁外に居た人間が、まともな教育を受けているわけがない。

ゴツドイーターになった当初苦労したのが、目上の者に対する時と場所を選んだ敬語である。

敬意はある。だが、それを言葉とする知識がない。

荒事を生業とするゴツドイーターであるが、公的な存在になったからこ他者の目に触れることも増え、こういった知識や積み重ねた経験が満ちぬことに密やかにコンプレックスを抱いているものも多い。

レンカもその一人であり、報告書の提出や定時連絡等でほとほと苦労を重ねていた。

——最近、ヴァジュラが多いな。

つぶやきにレンカも肯首する。

男の足元には、ヴァジュラが力なく横たわり倒れていた。

否……倒されていた。

喉を生唾が通る音が聞こえる。

この男は今、レンカの目の前で常識を覆すような戦いを見せたのだ。

見せ付けられた。間違いなく、魅せられた。

大型のアラガミには、大型の武器を。

それがゴツドイーターの常識だ。

ヴァジュラ種のような大型には、最近普及されつつあるハンマーか、あるいはバスター。この二つが用いられることが常であるというのに、この男は。

あろうことかショートブレードで、それも切断を捨て刺突のみを突き詰めた非効率的な刀身でもって、超密着接近戦をヴァジュラに仕掛けたのである。

他のゴツドイーターから命知らずと称されるレンカをしても、有り得ない選択、戦闘法だった。

だが、その結果がこれだ。

男には毛ほどの傷もなく、汗の一筋も流れていない。

作戦は誘い込み漁だ。

レンカを囮にして、アラガミを引き寄せ、叩く。それだけの簡単なものだった。

だがそれを成功させるには、叩く役目を負ったゴッドイーターが圧倒的実力を持つていなければ、物量に押しつぶされ全滅するのがオチだ。

自信があるのか、眉ひとつ動かさず微笑んでいる男に、レンカは身震いをする。

背筋が凍えるようだった。

通信から入る情報は、ここはヴァジュラの巣であるということ。

危険度が高すぎて、何体潜んでいるか、調べられなかったということ。

わざわざそんな通信を寄越すくらいだ。極東支部有数の偵察班からの情報である。

巣であるということは、ヴァジュラも複数体いるとみて間違いない。それくらいはレンカにも想像が付く。

もちろんこの男も同じはずだ。

ヴァジュラを単独にて討伐せしめて初めて一人前といえる。

などという冗談が、まことしやかに極東では流行している。

こんな冗談が流行り始めたのは、この男が極東入りした時期、神狩人が現れた時期と一致する。

エイジス計画の発端と締結に端を発する一連の騒動から、極東のアラガミは異常進化を始めていた。

これまでのアラガミとは見た目は等しくとも、中身はまるで別物だ。

端的に言って、異様にタフになった。死なないのだ。どれだけ撃つても、斬っても。

アラガミの「質」の向上に、当然ゴッドイーターも対応せねばならなくなった。

新型機の台頭と同時に、ゴッドイーターの戦力強化が計られ、今となってはその冗談は当然のように真実となっている。

だが、それでもヴァジュラはある種のゴッドイーターへの壁として

存在している。

単独討伐は、あらゆる準備や支援が万全であるという大前提があつてこそ、初めて言えることだ。

こんな壁外の哨戒任務、そのついでで、複数討伐を狙うなどあつてはならないことなのだ。

命を掛けてさえ、まだ届かぬ程に。

だというのに、この男は何でもないと叫んだ風。

見る間にレンカが連れて来た最初の一匹を仕留めて見せた。

そして、次いで「引つ張つて」きた二匹目。三匹目。四匹目をも。危なかつたなどと言つてはいたが、とても危う気には見えなかつた。

ヴァジュラの列に引き飛ばされて意識が朦朧としていた自分が言える台詞ではないが、己のためにと言うには、あまりにも無謀が過ぎる戦い方だ。

そして、思う。

この男は、この圧倒的な力を持った男は、一体何のために戦っているのだろうか、と。

——レンカ！

翌日のことだった。

哨戒中に、黒いヴァジュラ……ディアウス・ピターが出現したのだ。

ヴァジュラを追つて入った崩壊した建造物には、住処を求めてさまよう難民達が肩を寄せ合い震えていた。

やつれた彼らの顔を見た瞬間に理解する。

絶望に黒く染まった瞳。抵抗する気概が失せた瞳。

喰われるためだけに息をする者たち。

ここは、餌場だ。

ヴァジュラは数が増えたのではない。狩場を追いたてられ、必要に駆られて群れていただけなのだ、と。

アラガミの中でも上位に君臨するヴァジュラ。それを追い立てる存在。

そして、人を生かさず殺さず、間引きするかのようにして『収穫』する知恵あるアラガミ。

即ちそれは……。

「ぐ……ああっ！」

熱い塊が喉の奥からせり上がる。

ヴァジュラを食い千切って現れたディアウス・ピター。

その獣欲に濡れた赤い目が、震える人々に向けられた瞬間。

気が付けば、走り出していた。

静止の声も振り切って、ディアウス・ピターへと神機を振り被っていた。

その結果は、これだ。

背中から腹に掛けて、骨のような翼が、刺し貫いている。

体の中から、失ってはいけない熱が流れ出していく感覚。

それを超える、喪失感と絶望。

赤い目は、こちらを向いてさえいなかった。

骨の片羽は今も、人々を狙っていて――。

――うおおおッ！ アストラルダイヴッ！

黒い閃光に、絶望が打ち払われた瞬間を、見た。

その後は、何があったのか、朦朧としていて覚えていない。

覚えていることは、ディアウス・ピターが倒れた瞬間。

「俺は……ゴッドイーターには、なれない」

――どうしてそう思う？

「俺では誰も、救えない。守れない……」

――そうかな？ 彼らを見てみる。ほら。

「ありがとうございます……！ ありがとうございます……！
！」

「あなたのおかげで助かりました、本当に、何とお礼を言ったらいいか……！」

「おにいちゃん、ありがとう！」

「死なないで、お願い……！」

そして、心配そうに覗き込んでくる、たくさんの人たちの顔。

—— お前が守ったんだ。

「俺が、守った？」

—— そうだ。お前がやったんだ。やり切ったんだ。ゴツドイーターだよ、お前は。

「俺は……俺が、ゴツドイーター、なのか。ゴツドイーターになれたのか、俺は」

—— 俺も同じ台詞を言ったことがあるよ。ゴツドイーターなんて言われているけれど、腕輪をはめただけじゃあそうはなれない。神機を握らなきゃ、何にもなれないんだ。ここの中にある神機をな。

「胸の中にある、神機……」

—— お前はゴツドイーターだ。たとえ神機を折られたとしても。お前の神機は少しも折れちゃいない。そうだろうか？

ああ、と答えたくて。

でも意識は暗がり落ちていく。

もしこのまま二度と目が覚めなかったとしても、後悔はない。

ゴツドイーターを完遂すること。それはきつと、アラガミを滅ぼすことではないのだろう。

ゴツドイーターとは。神機使いとは。

戦うということは。

覆された。

何も知らなかった俺を、覆された。

ああ、そうだろう。

この世界はアラガミに支配されていて。

アラガミに対抗するには神機しかないのだとしたら。

「神機」をその手に、その胸に、握り締めたものこそが、きつと。

こんな世界を、覆すのだから——。

「アンタは、何のために戦っているんだ……?」

—— 俺かい？ 俺は……。

閉じる瞼に答えは届かず。

けれどきつと、自分がいつか辿り着く場所にある。

俺も、同じ思いを胸に戦えたらいいな、と思う。

この男が抱く戦う理由を、『神機』をその手につかむために。

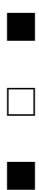
戦おう、ただただ、戦おう。

地球とアラガミが一体となったのなら、人に生きる場所がなくなっ
てしまったとしても。

戦い続けること。その果てにきつと、ゴツドイーターの目指すもの
があるのだろう。

だから、今は傷を癒すためにただ眠ろう。

神狩人、神薙・R・ユウの名を胸に刻んで。



「おっす、リョウ」

——こつぴどくやられたなあ、コウタ。

「もうユウごっこはやめたんだ？」

——言うなよ。で、取り逃がした理由はそれか。

「いやあ、アイツ強くなってさあ。すばしっこいのなんの」

——違うだろ？ 戦闘する前から怪我してたはずだ。ア

ラガミ相手だったら、そんな小さな打撲痕は残らない。そんな、誰か
に殴られたみたいだな。

「やつぱりリョウには誤魔化せないか……」

——エイジス付近で待ち伏せされて、リンチ食らったんだ
な？ 肋骨をやったんだな。守ってた住民に囲んで棒で殴られた気
分はどう？

「最悪。もういろいろへこむよ。守ったのにーとか、何のために命
削ってるんだーとかさ。

見捨てられたって思いが強いのは解るし、反戦ムードみたいなのがあるのはそれだけ暮らしが安定してきたってことも解るけどさ。エ
リナとエミールには言わないでくれよ？」

——言えないって。で、そつちの傷がほんとにアラガミにやられた方だな。怪我してたとしても、お前が居住区近くでアラガミを逃がすなんて珍しいな。どんなやつだった？

「やたら強くて、早かったよ。それで、肩に神機が刺さってた」

——肩に、神機？

「ほんとだつて。普通は体外に排出されるはずだつてのに、残ってたよ。誰のかはわかんないけど、第二世代のロングブレードだった。シールドは破損してて、なかったと思う」

——報告は？

「もう終わってる。ハルオミさんもいたんだけどさ、状況を話したら急に顔が険しくなってさ……ハルオミさんのあんな顔、初めて見たよ。あの肩に神機が刺さったアラガミのこと、何か知ってるのかな」

——どんなアラガミだった？

「“赤い”、カリギユラ——」

全て見透かされているようだった。

全部わかっているのではないか。わかったうえで、承知のうえでいたのではないか。

あの瞳には、射抜かれた者の心までもが隠しようもなく映されている。

そう思う時が、ハルオミには幾度となくあった。

ふいに、ふと彼女が笑った時、その中に居た己はいつも、間抜けそうにほかんとした顔をしていたのを覚えている。

彼女の前では格好を付けられなくて、どうしようもなく子供になっ
てしまっていた。

意地を張っても、それが可愛らしく感じたのだろう。くすくすと笑
われれば、開き直って甘えてしまうほかなかった。

どれだけこちらが本心を隠そうとしても、彼女にはお見通しだった
のだろう。

その逆は、まったくありえなかったというのに。女は永遠の謎さ、
などと斜に構えるしかなかった。

女に逃げるようになったのは、きっと、彼女を理解しきれなかった
自分への言い訳だ。

ギルも同じように感じていただろうな、と思う。

自分達は似たもの同士なのだから。

そう、似ているのだ。

どうしようもなく。

だから、影をみる。いつも、どんなときも、影を追っている。彼女
の面影を。

初めてユウと出会った時、背筋が凍りつくようだった。

似ている。

どうしようもなく。

似ている、と思った。

立ち居振る舞いや仕草という意味ではない。そも前提からして、男と女で性別が異なっている。

似ているのは、考え方が、咄嗟の判断か。

思想か、魂の在り方か。

悲しいままでただひたすらに生きていた彼女そっくりの生き方を、ユウはしていた。

こんなことがあった。

ある任務を受け、アラガミの討伐に向かった日のことだ。

通常の討伐任務であると思っていた。だが、一瞬で事態は急変することとなった。

壁外難民の“たまり場”に、アラガミが逃げ込んだのである。

討伐任務にあたった極東支部第四部隊および、ブラッド隊副隊長とその部下一名——すなわち、ハルオミ、カノン、ギルバート、そしてユウ。

ゴッドイーター達は、決断を迫られることとなった。

“餌場”となったとして見捨てるか、否かである。

割って入れば、それは救助任務となる。

戦闘能力のない民間人を救護しての戦闘は、難易度が跳ね上がるのだ。討伐任務の比ではない。

戦闘班は、継続戦闘能力の維持もまた、その使命に含まれている。

次の戦いのために、次の次の戦いのために、次の次の次の……永遠に終わらぬ戦いのために、班員を死地に向かわせるために、隊長は戦力の保全を第一に考えねばならなかった。

防衛班がその働きに華やかさがないというのに、ある種の敬意をもって接される理由がここにある。

一般人の救護を第一として活動“できる”のだ。

本人達は不満をもらしてはいるが、戦闘班からすれば羨望の的だった。救助任務を専門とするのは、人道的観念からも、その任務達成の難しさからも、尊敬に値する者達なのである。

救助対象をパニック状態にさせてしまえば、散り散りに逃げ出した彼らはアラガミの餌に成り果てるだろう。時間が経てば経つほど、任

務の難易度は加速度的に上昇していく。

救われたという安堵をもたらす気安さ、そして彼らを率いるカリスマ。これを併せ持った働きが要求されるのが防衛班である。

神機を「ぶん回す」ことだけを求められる戦闘班には望めぬ能力である。例外は第一部隊隊長であるコウタのみであろうか。

凄腕のゴッドイーターとして挙げられるリンドウも、カリスマはあれど、一般人を安堵させるような繊細さには欠けている。あくまで強者に対してのカリスマであり、弱者の心情を理解している訳ではないからだ。

当然として救助任務とは、通常の戦闘班に要求される能力からは逸脱したものとなる。複数のアラガミによる襲撃に、壁外難民が晒されている状況には対応はできない。

隊長は継戦のための戦力確保を第一の任務目的とせねばならない。この様などうしようもないケースでは、部下の安全を最優先目的とするのが定石だ。

よって、ハルオミが下した判断は——初めに告げられたカノンが無力さに唇を噛み締める。

これがゴッドイーターの常であった。だが。

馬鹿野郎、とギルが叫んだ。

見れば、ユウが転がり落ちるようにして、眼下にある「たまり場」へと駆け下りていく影だけがあった。

ともすれば躓いて坂道を転んでいるだけに見えるその動きは、見栄や体裁を捨て去り、遮二無二全力疾走している姿に相違ない。

情けないようにも聞こえる声は、必死さの表れだった。

そして、あろうことか、今まさに難民へと喰らい付こうとしているアラガミの前へと間に合った……間に合ってしまったのだ。

閉じられた顎。飛び散る鮮血。

自らの身体を盾にして、ユウは難民を救ったのである。

フライアが極東に到着してからハルオミが知る限り、ユウの初めての負傷……それも、重症を負った瞬間であった。

「ケイ、ト……」

思わず口にしたのは、自分か、ギルか。

ハツとして、ギルが息を呑んだ音が聞こえた。

横を向かずとも解る。きつと自分も、同じような顔をしていたことだろう。

この光景を見たのは、二度目だった。

「彼女」が、かつてとつた行動と同一のもの。

自らを犠牲とし、他者を救う、自己犠牲の姿。

彼女が最後まで、貫き通した……通してしまつた――

「ユウ！ 馬鹿野郎！ 独断で無茶するな！」

ギルに怒鳴られてもどこか、自分自身に呆れてしまつたような顔をユウはしていた。

ハルオミが下した判断に誤りはなく、ユウもまた現場指揮官として立つたならば同じ決断をしたはずだ。

その厳しさを持ちえぬユウではない。

だというのに、そんなつもりは無かつただけけれど、と言いつの色を含んだ苦笑。

ああ、この矛盾だ。彼女と同じ、理性と感情の狭間を行く、混沌とした色だ。

透き通った瞳が、こちらを見上げている。

彼女にそっくりの、全てを見透かすような瞳が。



今日も今日とて通常勤務。

極東支部におけるブラッド隊の日常である。

最近になってラウンジでだらける姿が、やっと板に着いたといった風だ。

リラックスして雑談にふけるブラッド隊を、遠巻きに見る極東勢。向けられる視線には、畏怖が込められている。

言わずもがな、その中心にはユウがいた。

名前を呼んではいけないあの人。とは、極東におけるユウの扱いであつた。

「リョウタ……」

「クルーシオ！ ユウさんだつて言つてんだらうが！」

「バツキャロウお前バツキャロウめ！ アバダケダブラされっぞ！」

「おじぎをするのだ！」

「イイエエクスペクト！」（整列）

「パットロールルウアアー！」（一斉におじぎ）

——聞こえない、俺には何も、聞こえない。（震え）

公然の秘密として本名が伏される状況が続いていた。

本人に泣きが入る程の熱の上がりっぷりは、純粋な善意と尊敬からくるものである。

ユウが、何か秘密任務を請け負つていて、その一環で身分を偽つているのだ。という、ズレた認識と、日本人特有の率先した生暖かい気遣いがコラボした結果である。

正直なところ、フライアの危険性は無いと判断されたため、潜入任務は有名無実化し、名を偽る必要性もはやないのだが、ブラッド隊の面々にはどうにも騙していたような気がして言い出し難い。

榊博士に提出した最終報告書には、潜入で得た全てのデータを添付してある。

フライア責任者であるグレゴリー局長は、目先の金色菓子に飛びつく俗物だった。

ユウとしては非常に解りやすく好ましい性格をしているため有り難い。どこかの眼鏡博士局長に比べて扱い易く、また共感が持てて親しみやすいという意味で。

問題は、黒幕最有力候補のラケル博士である。

そもそも潜入のために名を偽らんとしたのは、ラケルの目を誤魔化すためだったのだ。

“物”の流れは思惑の流れ。というのが榊博士の持論であるらしい。イージス島の例をあげられるように、物資が一箇所に集中した時、そこでは何らかの思惑が渦巻いている。

流れていく物資のリストを見れば、大体にしてどのような企みであるかは、榊博士にとっては分析することなど容易いのだろう。

『スターゲイザー』、『星の観測者』の二つ名の通り、榊博士は世界中に目を光らせている。あの眼鏡の輝きは伊達ではないのだ。

趣味の研究にかまけて仕事をサボっているように見え、誰よりも勤勉なのが榊という人物である。

その榊博士の目に、感性に、フライアの何かが引っかかった。非常に危険性の高い何かが。

だから榊博士はユウを極東へと連れ戻し、リスクの高い、まず間違はなく発覚し挑発行為としてとられるであろう記録改竄まで行い、潜入仕事を仕掛けたのである。

ここまでのことをさせるほどに、榊博士を警戒させるものとは何か。

決まっている。終末捕喰だ。

だが調査の結果は、限りなく白に近い灰色だった。

詳しく語ることは無いが、ユウはラケルの研究室に忍び込み、榊博士謹製のデータ蒐集メモリーで、研究用PCから情報を抜いていた。

それら研究記録を榊博士が分析した結果である。

神機兵の過剰とも思える配置と資金の流れ、保管管理については首をかしげるところだったが、フライアがフェンリル直轄領であるためと言われたらそれだけであった。

ラケルの姉たるレア博士曰く、神機兵は彼女達の家が家名を背負って始めた事業であるため、その執念の現れであるとすれば理解できる。

むしろ、過剰な物資の要求と配分は、レア博士の陳情によって行われていたのだ。当然バックにはグレゴリー局長の金の力が働いている。私的な繋がりが透けて見えるようだ。

フライアの実験艦という性質を鑑みるに、流れとしてはこうだろ

う。

ブラッドという最新鋭のゴツドイーターにより、極東の熟練ゴツドイーター達を教導させ、教導マニュアルを作成する。

いずれその働きは世界規模に広げられ、旧型のゴツドイーターを廃し、ゴツドイーターは少数精鋭の集団としてその数を減らすに比し、実力の底上げを狙っていく。

減少したゴツドイーターによって足りなくなった手を、神機兵の物量で押し切る。

つまり、ゴツドイーターの“一品化”と、戦力の機械化による増強である。

いずれは神機兵の軍団を統べる司令塔としての役割が、ゴツドイーターの代名詞となるだろう。

そうなれば見目にも気が使われるようになるだろう。いかにも戦うための機能を前面に出したデザインは廃止され、もしかしたら、コウタが好きそうな美少女をモデルとした外装に代わるかもしれない。

美しい少女の形をした神機兵達に、ゴツドイーターは司令官、あるいは提督などと呼ばれる日も近いかもしれない。

神これ、というのも面白そうだなと冗談ではなく思ってもいる。合理的かつ効果的な戦略だ。さすがはレア博士、とユウは心の姉の評価を上昇させる。

怪しむべくところのない、クリーンな背景がそこにあった。不自然なまでに――。

おそらくは、“掴まされた”のだろう。

犬としての仕事を完遂“させてもらった”のだ。隠蔽には隠蔽を。そういうことだ。

そうなれば、ラケル博士の思惑は、さて。意思是形とならなければわからない。

幾分かは気軽になったラウンジで、ぎしりとパイプ椅子を軋ませた。

今日もたたくさんのゴツドイーター達が極東支部のゲートを出入りにしている。

壁を背にしているのは非番のゴッドイーター達。

ユウもその一人である。

予約した物資が届いていないだの数が少ないだのと怒鳴り込んでくる民間人も、見て見ぬ振りだ。

半アラガミの扱いなどこんなものだろう。だがこれでいい。

英雄扱いなど。

さて、近づく気配が。

「私です」

シエルがペガサス座の煌きをなぞりながら現れた。

小宇宙の高まりを感じる。

「私だよー」

ナナが独特なポーズでもって指を突きつける。

月に代わっておしおきされてしまいそうだ。

「いやー、ユウが怪我したって聞いて、心配して見に来ただけど、なんだか平気そうじゃなかったよー」

——そうね。ここまで盛大に失敗するともう笑うしかないねっていう。

「失敗、ですか？」

——うん、任務でさあ、急に無線の調子が悪くなって、うろろしてたらすっ転んでアラガミにがぶーされて。ほら見てよこれ、ミイラ状態。勝手するなって怒られて待機なうだよ。

「ああ……なるほど。そのようにされたい、と」

——ん？

「解っていますよ。君が言うのなら、失敗なのでしょう。ええ、きつと、無線機が故障したから。その通りです。」

誰も後に続くものが出てはならない行い。それはなんて眩しい……失敗でしょうね」

——そのサクヤさんがレンを見るみたいな目は何？

「ただ、あまり怪我をされるのは、その、心配するので、自重してほしいのですが……ですが、私が君をとめる権利もなく、その」「あー、ユウ悪いんだー。シエルちゃん泣かせたー。女泣かせたー」

——ラウンジで人聞きの悪いこと言うのやめようね。ヒバリさんがコソコソ何かインカムで喋ってるから。

聞き覚えのありまくるツバキさんっぽい声が無線で聞こえてくるから。私を最初に結合崩壊させる約束はどうなったとか聞こえてきてるから。

「でもね、ユウ。ほんとに心配かけちゃだよ？ 私もすごい心配したし、シエルちゃんなんかもう、見てらんなかったんだから。

立ったり座ったり、もう支部中ウロウロ歩きまわっちゃって。手をこうあうあうーってさせながらさー。

次の作戦は、ってジュリウスに聞かれてるのに、カピバラの飼育方法とか答えてたから」

「ナナ！ それは言わないと約束したではありませんか！」

「ごつめーん！ えへへ、ユウにはまっすぐ言っても通じないもんね。シエルちゃんもうまいなあ」

「違いますよ！ 違いますから！ 決して君にそんな押し付けがましいことなど、ああ、もう、ナナ！」

「へっへー。ユウのこと、まるっとお見通しだ！ みたいなの？」

「もう！ もう！」

——それたぶん見誤ってると思うんですけどね。これ本当に転んだだけだっていう。

「はいはい。またいつものアレなんでしょー？ もう、私もユウが何したいのかくらいはわかりますよーだ」

——だからあ、お前も大概節穴アイだなあ。

「あはは！ いいじゃん、ヒーロー！ かつこいいじゃん。ゴツドイーター、って感じ！」

誰にでもできるものじゃないよ。なんかね、私もね、ユウがそうやって一生懸命走ってる姿みるとね、胸のここところが、ぎゅーっ、とするんだあ。

面白いよね。ユウが誰かを救う度に、私は助けてくれなかったのになって、ぎゅーっ。

でもユウには誰かを助け続けて欲しいんだあ。ユウがそのまま

いてくれなきや、こんな素敵な気持ちにはなれないもんね！」

——もう所かまわずぶつこんでくるようになったね君。俺はぼんぼんがきゅーつてするよ……。

「ユウ……。ナナは」

——ほつときな。発作みたいなもんだから。

「えへ、えへへ、えへっえひひ、ひひ、いひひ、いひ」

「これは放置してもよろしいのでしょうか」

——いいです。

「私の銃には、常に弾丸が装填してあります。いざとなれば、私が」

——俺がすべきことだよ、それは。頼むから、その時がきても……。何が起きたとしても、動かないでくれ。俺とナナの話なのさ、これは。他の誰もが部外者でしかないんだよ。悪いな。

「君は……。はい」

「もー、またシエルちゃんとはっかかりおしやべりしてるー。私もまぜてよーもー」

「ごめんなさい、ナナ。ええ、一緒にお話ししましょうね。大丈夫ですよ、何も不安に思うことはありませんから。何も……。」

ほほえましいひとときである。

しばらくして、「おかえりー」とナナが明るく声を上げる。

真つ黒な目に、ギルの姿が映し出されていた。その動きを決して見逃すまいとする、獲物を狙う獣のような目に。

「救われるべき者を見る目」だ——。

「なんだ、お前達も帰ってきてたのか」

気のない返事と共に、ギルが帰還。

帽子を目深に被り直し、椅子に身体を預けて座る。

深い溜息。

「お疲れ様です、ギル。ハルオミ隊長との連携はどうでした？」

「ああ……。うちの副隊長が抜けた皺寄せがきたせいで、とにかく疲れたがな」

——あー、俺抜けたからって言われるとちよつときついな。悪いと思ってるからほら。

「副隊長の……せい？」

「おいやめろ、目が怖えよ……しかし『西側』の自治区から来た移民受け入れも今日で終わりだ。『クレイドル』は上手いやり方だな。人の手はいくらあってもいい」

——食わせてくには厳しいけどね。公共事業政策つてのは完成するまではいいいけど、その後のこと考えたらあんまり褒められたものじゃないし。

「『旧ニホン島』じゃ東側以外に人の生存圏はないと思っていたが、存外人間つてのはしぶといもんだ」

——いくら極東つて言っても、ここだけが人の住む場所つてわけじゃないからさ。極東の意味はほら、アラガミ的な意味だよ。

「ああ、そういう……」

「あの、西側、とはなんでしようか？」

——シエルは受け入れ任務就いてなかったつけ。ウエイストランドの住人のことだよ。

「ウエイスト……荒地、ですか？」

——西、ウエストと『かけて』るんだよ。旧オーサカのオーサカ民族達さ。極東人でもかなり特殊な人種で、笑いや芸に長け生存能力も高い、パワーがある人達のことだよ。

「経験を詰んだオーサカ民女性は、無限のごとく飴玉を保存できる特殊収納術を会得している、というあの噂の、ですか？ ニンジャと等しい神性存在かと思っていましたか、なるほど、実在したのですね」

——そうさ。彼らの前での発言には気をつけるように。不用意な言動をすれば、無意識下のカウンセラー……リアクティブツツコミをくらう。命の保障はできない。

「やはり……ここは、極東なのです。一瞬たりとも気が抜けない」

——普段は気のいい人達さ。虎の話しをすると鬼になるだけで。

俺も極東支部の外壁に居つく前にはウエイストランドにいてさー。腕に籠手型のPCつけて、旧軍が遺したパワーアーマー着たりして、

遺伝子改良された異様に凶暴な巨大カメレオンとかとガチンコで殴り合いしたりしてさー。

「だから神機兵の操縦もスムーズだったのですね」

——— P A 着るのとは大違いだったけどね。いやあ、なんだからだであそこもいい所だったよ。時間ができたらまた行きた………。

「だめです」

——— 顔、顔！ 近い！ 怖い！

「だめです」

——— え、な、何が？

「許可できません。そんな所に行けば、数ヶ月音信不通になるに決まっています。時間泥棒です。」

きつと君は、世紀末クラフト最高ー、などと夢中になって私の誕生日を忘れたりするんです。息抜きに別の世界線でダブル属性弾強すぎんよー、などと慢心した挙句三度やられたり猫を代わりに戦わせたりするんです」

——— なんか、ごめん。

「だからだめです。だめと言ったらだめなんです」

——— いや、でも息抜きは大事だし。

「そちらがメインになることが目に見えているのでだめです。本末転倒です。だめです」

——— おこっていますか？

「おこです。ファイナリアリティです」

「お前達は一体何の話をしてるんだ？」

困惑した様子でギルが顔をしかめる。

遊びの中でも滲み出る濃い疲労の色に、シエルがおや、と眉を上げた。

「だいぶお疲れのようですね、ギル」

「いや………副隊長のせいじゃない。さっきのは冗談だ。本気にするな」

「その話しは後で落とし前をつけましょう。何かあったのですか？」

「何も無いさ、何もな」

——「赤いカリギユラ」の情報なら新しいものはないぞ。くるくると包帯を新しいものに替えながら、何でもないと言った風に告げられたユウの言葉に、ギルは一瞬、腰を浮かしかけた。

浮いた尻をソファアに落ち着かせるのに多大な努力を要しながら、思う。

たまに鋭く刺し込むような言葉を吐くのが、ユウという男だ。

踏み込まれたくないならば、言葉を選ばなければならぬ。勘が良いなどという話ではない。ユウの胸の裡を拓くような感性は、悪魔染みていて厄介だ。

何も、言うな。

言わないでくれ。

もはや願うような心持ちで、ギルはユウへと返す。

「……知っていたのか？」

——事情の方は、なにも。毎日しつこくヒバリさんに聞いてりゃあ、そりゃ俺の耳にも入るさ。口説いてるんじゃないかって、第二部隊のタツミ隊長が煩くつてもうね。

「おい、いいか、この件に首を突っ込むのは……」

——この前、ギルが俺に言ったことそのまま言ってもいいか？ 独断で無茶するな、つてやつ。

包帯を巻き終わり、イスに座って壁へともたれかかるユウ。

気取った様子もなく、その表情は透き通っていて、透明だった。

無表情ではない。

だが、どこか空虚でいて、それでいて澄みやかで、ガラスの色のような。

それは。

——支えあえるのがチームだつて思わないか？ お互いが支えられるだけ支えあえるつてのはさ、そりゃいいもんだよ、な？

ギル。

どうして、こんなにも。

『お互いが支えあえるだけ支えあうのつて、相当素敵なことだと思う

んだよ……ね？ ギル』

あの人に似ているのか――。

轟音がロビーに鳴り渡る。

ギルが、ユウへと迫り、掌を壁へと叩き付けた音だった。

胸元のユウを睨み下ろすギル。

目は血走り、鼻息は荒く、歯は食いしばられていて。

胸倉を掴み上げられたユウよりも、よほど追い詰められているように見えた。

――シエル。

指先を振って、ギルの背後へと視線をやるユウ。

シエルが、ギルの後頭部へと銃口を押し付けていた。

引き金に指はかかっている、*「遊び」*分のトリガーは既に引き絞られている。

じっと見やるユウとシエルの視線が交差し、寸瞬、目蓋を閉じたシエルは静かに銃を下ろした。

ギルにとってはそのような事は些事であった。

ただ、ユウを睨み下ろし続けている。

「お前は……」

どれだけの時が経っただろうか。

実際には五秒も過ぎているまいだろう。だがその場にいた者達には、唐突に沸いた凍てつく気配に、ギルが口を開くまでが数時間にも感じられた。

「いいか――こいつは、俺の問題だ」

頭を振って、強張った指を離しながら、ギルはユウへと背を向ける。

「お前には、関係ない」

立ち去るギルの背は、小さく震えているようにも見えた。

帽子が深く、ギルの顔に影を落としていた。

「何も聞くな……頼むから」

ユウは問わない。

これ以上、ギルの口から言葉が紡がれることはないだろう。

事情も意図するところはわからないが、ギルが何がしかの感情に

よってその先を呑んだことは理解していたことだった。

そっか、とユウの曖昧な相槌に、シエルが代わりに問わんと口を開ける。だが、ユウの一指し指にむう、と唇は閉じさせられた。

声をかけるべきではないだろう。

誰にも、触れて欲しくないものはある。

自分自身であつてさえ。

「副隊長。私とギルに処罰を願います」

——いいよ、そんなもん。これくらいで一々目くら立ち立てたら、これからやっていけないぞ。

「しかし、私は命令が無ければ、〃引いて〃いました」

——いい、と俺は言っただ。お前も気にするな。ギルも悪く思っちゃいないさ。こんなもんだよ。．．．．．こんなもんだ。．．．．．
「ですが」

——地雷はまだあるんだ。

ちら、と視線で示した先には、ナナの姿が。

じつとりと、ギルが去つていった扉を見詰めていた。

熱い闇があつた。深遠の虚ろが、光を失つた瞳には宿されていた。

ナナの口角は、裂けるようにして釣り上がり、笑みを形作っていた。

——俺の問題で、お前には関係ない。．．．．．か。同じこと言ったのに、下の根も乾かないうちにさ、自分のこと棚に上げてギルに絡むとか、こいつないわーって思わない？

「いえ。．．．．．そのようなことは。ただ」

——ただ？

「少し、寂しいと思っただけで。．．．．．」

——そうかい。

困ったように頬を掻く。

全てわかっているのだろう。

わかつたうえで、承知のうえでの行いなのだろう。

拗ねるようにして、シエルは口を尖らせた。

なんだか、ずるい。

君はずるいです、と口に出してみれば、肩を竦めるだけ。

そんな態度では、この気持ちも、胸に灯る確かな熱を、どこまでも深く知っているのではないかと勘違いしてしまいそうだ。

あらゆる全てを見透かしているかのように思えてならない。事実は誰にもわからぬことだ。

どこまでも遠くまで見通しているのか、それとも目の前の何もかもまで見えずにいるのか。

ユウという人物の性格やまとう空気を少しは知れたかと思っても、これだ。

不可思議な神秘さを感じさせる何かユウにはあった。

———ま、男が背負うのは過去の話、悩むのは女の話って相場が決まってる。ギルのあれは女がらみでしょ。たぶん。

「女性問題、ですか？」

———ハルさんの感じじゃなくてね。過去になってないんだよ、きつと、ギルの中では今も続いているんだろうな。それで、あー……言うのはやめとくよ。ギルが頼むってさ、初めてだから。

「君も、その、何か悩みがあるのですか？ ナナのことについて……」

———俺かい？ 俺は悩んだことはないなあ。ほんと、悲しいことにね。一度くらいは女性問題で悩みたいよ。とつかえひつかえしまくるゲスの極みになってハーフの子とか引つ掛けたりしたいマジで。

「君がジョークを挟む時は、何かを誤魔化したい時だということくらい、わかっていますから」

———俺そんな癖があるのかよ、しょうもない奴だな……

うん、悩んでるって感じじゃないんだ。過去のものになってたんだよ。ナナに会うまで、後悔はあったけど、過去になってた……。ぜんぜん気付かなかったけど、ずっしり肩に食い込んでたんだな。

それで……ああ、うん、しよいこんだものが重すぎて膝が折れそうになる時は、あるよ。

ユウは問わない。

知っているからだ。

向き合わねばずっと「今」が続く。続いてしまう。

人は矛盾を抱えた生き物だ。例え苦しんだとしても、このままでいた方が楽なのだ。変わらぬまままでいた方が。

痛む程に良く知っている。

悩んでいる振りをして、向き合わずにさえいれば、過去にする……してしまふ痛みと罪悪感を得ずに済むのだから。

これは俺の問題で、お前には関係がない。とは、よく言ったものだ。つい今しがた、ユウもシエルに述べた台詞である。

向き合うのには、自分しかない。誰の力を借りてはいけないし、借りることなど出来ない。

わかってはいる。わかっているが、出来ないのだ。

だからユウは問わない。

あんな、帽子の下に少しだけ覗く目で、どこか遠い場所を見詰めている男には。

まるで、懺悔するかのように過去へと想いを馳せることを、怯えている男には。

顔が歪むまで、罪を感じ、己を罰しているのならば。

ユウは問わなかった。

□ ■ □

よう、ユウ。こうやって呼ぶのももう慣れたな。なに、コードネー
ムみたいなもんさ。だろ？

お前さん、この後暇かい？ 一杯付き合えよ。おごってやるから
さ、ほら。

ああ、そうだ。ギルの事さ。ちよつとだけでいいさ、聞いてくれ。
いや……頼むよ。聞いてやってくれ。馬鹿な野郎二人の話

さ。

どこから話すべきかな……。

グラスゴー支部はな、俺とギルを含めて神機使いが三人しかいない
小さな支部だったんだ。

んで、もう一人の神機使いが俺達の部隊の隊長を務めていた。

名前はケイト——ケイト・ロウリー。

ま、俺の嫁だったんだけどね。

いや、いつもの奴じゃないさ。俺の嫁、だったのさ、本当の意味で
な。

ここに比べりゃグラスゴーはアラガミの被害も少なくてさ、俺達三
人でもなんとかうまくいこと捌けてた。

その日も、いつもどおり、簡単な討伐のはずだったんだ……。

そのミッションでは、ケイトはギルとペアで行動し、俺は別ルート
から回り込む形でアラガミを撃破していったんだ。

その時だ。

あいつが現れたのは。

そうだ。赤い、カリギュラだ。

ケイトはそいつとの戦いで腕輪を破損し、アラガミになりかけてい
たらしい。

アラガミ化つてやつさ。

あの時点でケイトは、この仕事が長くてな……。オラクル細
胞の制御にはとつくに限界が来てたんだ。

そんな時に“枷”である腕輪が壊れれば……あつという間
にアラガミの仲間入りさ。

チームの誰かがアラガミ化した時の対処法、お前はよく知っている
だろう？

俺が駆けつけた時、もうケイトの姿はそこには無かった。

ギルはケイトの腕輪を大事そうに抱えて……ずっと、泣き
続けていたんだ。

誰の目にも他の方法は無かった。

もちろん軍法上も無罪だった。けど、騒ぎ立てる奴もいてな。

それ以来あいつには上官殺し……『フラツギング・ギル』つて名前がついて回るようになった。

誰もあいつを責めることなんて出来やしないのにな……。なあ、ユウ。一つ頼みがあるんだが、いいか？

赤いカリギュラをぶつ倒すのを、手伝って欲しい。

ギルは一人でやるつもりらしいんだがな、また見失う前に片を付けたいんだ。

ギルを、解放してやりたいんだよ……。

自分を何時までも、あの場所に縫い止めたままのあいつをな――

□ ■ □

「ユウはどうした？」

「副隊長ならば、先ほどギルと、そしてハルオミ隊長と共に討伐任務へと出撃しました」

「そうか。赤いカリギュラか。あいつらしいな」

「ジュリウス、貴方は……」

「どうした、シエル」

「アラガミ化した神機使いの介錯を、行ったことはありますか？」

「ギルと、ユウか。俺にはその経験はない」

「そう、ですか」

「第一世代の神機使いが実戦配備されて間もない頃、任務中に神機使いがアラガミ化する事案が多発した。

当時、介錯を行った者の手記を読んだことがある。彼は仲間を自らの手で討つ苦しみに耐えきれず、次第に他者との接触を極力さけるようになり……」

「そして、どうなったのですか？」

「神機使いを引退後、人との関わりを絶ち、孤独に死を迎えたようだ」

「・・・・・・・・」

「情けないが、俺にはあいつらの苦しみをわかってやれない。何をしてもやれるのか、正直検討がついていないんだ」

「ジュリウス・・・・・・・・変まりましたね、あなたも。あいつら、なんて、少し言葉遣いが乱暴になったように思えます」

「よせ。ユウの影響だ・・・・・・・・まったく」

「それに、気持ちをわかってやれないなんて、そんな言葉があなたの口から出るとは」

「お前も、笑うようになったな」

「フフ・・・・・・・・はい、きつと、とても、変わったのだと思います。私たちは本当に」

「向き合うとき、か」

「誰もがきつと、過去と向き合わなければならぬ時がくる。それはとても、苦しいことだと思います」

「俺達も向き合うべきだ。そうだな、シエル」

「はい・・・・・・・・」

「ずつと後悔があった。そう、そうだな・・・・・・・・俺は怖かったんだ。無知だった俺を、己自身で認めてしまうことが。他者を傷付けて生きてきたことに、向き合うことが」

「私も、自分の中に心があると認めてしまうことが、とても怖かった・・・・・・・・何も感じずに生きていられれば、終わりもまた、静かだと信じられたから」

「あいつは、どうなんだろうな。何を思っ、何を感じているんだろう。」

話していると、全てわかっているんじゃないかと、そう思うときがある。まるで「鏡」のようだ。あいつを通して、俺は自分自身を見ていた。

「鏡」に己を問えば、「私は貴方」だと返ってくる。当然のことだ。あいつの心が、見えなくなる時がある」

「案外、何も考えていないのかもしれないね」

「冗談を言うようになった。あいつに限ってそれはないだろう。」

見事な作戦、先読み、情報戦……全てが知識に裏打ちされたものだ。

明らかな戦術思想が見える。それが計算通りであるのか、勘働きを信じているのかは定かではないが」

「不思議な人です、副隊長は」

「そうだな。不思議だ。不思議と、信じられる。大丈夫だと感じさせられる」

「はい。きつと……」

「そうだな。きつと、うまくいく」

「貴方も」

「うん？」

「貴方も、よく笑うようになりました。そちらの方が、よろしいかと思えます」

「はは……そうか。まったく、お前が羨ましいよ、ユウ」

お願い

ギル

私を

——殺して。

□ ■ □

愚者の空母。

一説によれば、アラガミが現れた混乱に乗じて政治的転覆を目論むテロリストの根城であった、とも。

アラガミが現れた極初期に火事場泥棒を行っていた盗賊団の拠点であった、とも。

無法者と、それに抵抗する法を司る者達の戦場であったという。

しかしアラガミの乱入によつて共倒れとなり、きれいさっぱり、誰もいなくなつたとき……などと笑い話として語られることの多い、極東のフェンリル職員にとっては馴染み深い作戦区域である。

悪も正義も、アラガミにはなんの関係もないものだ。人が作り出した概念だけの絵空事でしかないと思ひ知らされる。

愚者の空母、とはなんとも皮肉めいたものではないか。

人間の愚かさを象徴したかのような名だ。

ヒューマニズムなど、精神性など、人間性など、生存競争になんの役に立とうか。

崩壊した橋と、座礁した空母が、くの字型に一体となつたかのようなその場所は、今は静まり返り、波の音を静かにさざめかせている。

時折、飛沫が甲板の上にぽつぽつと落ちては、“不可思議な”軌道

を描いては消えていく。

海。それは、オラクル細胞の“シチュー”である。

今や環境の根本とも言えるほどに拡散したオラクル細胞は、その多くは自然環境と一体化していた。

目を凝らしてみれば穏やかに見えるさざ波も、その潮流は時折、物理法則を超えたうねりを生じさせている。

アラガミだ。肉眼では捉えられないほど小さな……プランクトン型のアラガミが群生を成しているのだ。

海はすべての命の母とも言う。その通りであった。アラガミは、海から来て、大地に染み渡り、そして天へと昇り、再び海へ還っていく。まるで、地球の意思そのものだ。

遠く眼下に見える、夕日の赤焼けに染まった空母。

年々じわじわと削りとられ、“自然”へと還されていくそこに任務で訪れる度、感じずにいられない。

輸送ヘリのローター音にかき消されまいと声を張り上げる。

限界高度ギリギリの中空飛行。これ以下は遠距離への攻撃手段を持つアラガミに捕捉され、これ以上は飛行型のアラガミに検知される。

極東のヘリパイロットは、須らく超一流の腕を持っている。

アラガミの個体レベルが異常域に達している極東においては、“空”がもつともリスクな移送手段であった。

天と地のアラガミを恐れ、おっかなびつくり、“空中と空”の間をふらふらと飛ばねばならない。

ここは、空の境界だ。

人が生きる場所はや、どちらでもない、境界線上にしか存在しないのかもしれない。

だが、その境界を踏み越え、あるいは打ち壊すものがあるのだとしたら。

それは。

——俺、なんでここにいるんだろ。

それは、ゴッドイーター以外にはない。

眼下に遠く見えるアラガミの群れに怯むことなく、轟音に心乱されることもなく、ただ静かに佇んでいるゴツドイーターの音声をマイクに確認しつつ、ヘリパイロットはそう思った。

——お酒ってこわい。ハルさんと飲んでたところまでは覚えてる……気づいたら出撃書類にサインしてた。

何を言ってるかわからないと思うし、俺も何を言ってるかわからない。何が起きてるんだ……新手的オラクル攻撃か……？

こんな、こんな馬鹿げた作戦サインするわけ……したんだよ俺が。俺の馬鹿！ うおお、頭イテエ……ゴツドイーターを二日酔いさせるアルコール度数とか……。

アルコールだよ、これ？ 工業用のなんかそういうのじゃないよね？ 配給ビールも一般に流したら厳罰だって言われてたし……だめだ、これ以上考えるのはやめ……イテテテ。

これが、英雄。

ああ、これが、英雄なのだ。

言葉では言い表せないような深い感動があった。

頼りきってしまうようで情けない話だが、この人がいたら大丈夫だと、根拠もなく思える。

思わせられる何かがある、不思議な男だった。

自分がゴツドイーターでないことを、今日ほど悔やんだことはない。だが、今日ほど己の仕事が誇らしいと思ったこともなかった。

空挺部隊と言えば聞こえはいいが、物を運ぶしか能がない癖に飛ばよく落ちる、運び屋以下の扱いであるのが実情であった。

だが。

——空はいいよねえ、空は。嫌なことぜんぶ、空を飛んでるところ、消えてなくなってくみたいな感じがして。

やっぱり空を目指してかないと。ああ人はいつから顔を上げるのをやめてしまったんだろうかみたいなの？ 哲学とかしてみたり？

ほんとヤバイ空ヤバイサイコー。語彙力ない俺。でもヘリのローター音で刻々と体調が悪化してるの。遠くを見て気持ち悪いのこらえる療法するのも限界。吐きそう。

だからもう帰りませんか？　ね？　この作戦もおかしいから、ね？
聞いてます？

この男と肩を並べて戦えないことは残念でならないが、だがその足となり力となれることに、どれだけ胸が高鳴っているか。

ああ、さすがに気分が高揚します。

そう伝えられたらどれだけいいだろう。

できるのは、ランデブーポイントに到達したことを告げることだけ。

——だからさあああ！　極東人はさあああ！　人の話をさあああ！　聞かないのがさあああ！

機械制御された「ロケットエンジン」に火が付いたことを、計器が全力で知らせてくる。

その威容を何と表現したらよいだろうか。

巨大な、鉄塊……：そうとしか言いようのない物体が、ヘリ下部からワイヤーによって吊り下げられたコンテナに納められていた。

後背部からは、ロケットエンジン特有の鋭い炎尾が迸り始めている。

最も近いものとして挙げるならば、旧世界の物質兵器、第二次世界大戦末期に対戦艦戦にて用いられた徹甲弾、であろうか。

ヘリ本体にも勝るほどの巨大な鉄塊。その上に人影が一つ、しがみ付いていた。

ゴッドイーターである。

——今回のだつてギルが頑張っちゃったのが俺巻き込まれた原因でしょ！　どおりであいつがサクヤさん見る目が怪しいと思つた！　知りたくなかつたそんなこと！

正気の沙汰ではない。

聞けば、このゴッドイーターの志願により当作战は決行されたものであるという。

本来、廃案となるべくしてあつた当作战は。

当然である。

「ロケット」によってアラガミの群れにゴッドイーターを突っ込

ませ殲滅する、などというゴツドイーターの消耗を度外視した狂気の作戦など。

鉄砲玉ならぬ、使い捨ての徹甲弾として、ゴツドイーターを用いるなど。

このようなもの、設計者であるリツカでさえ実現不可能であると破棄した代物など、果たして使い物になるのだろうか。

そもそも、こんなものを使用して生還できるのだろうか。

アラガミを、倒すことなど出来るのだろうか。

——ああああ、やっぱ無理！ やっぱ無理！ すぐに肉

弾戦法に走るのは極東の悪癖だって！ 止めてください死んでしま

います！ これをすぐにとめ、あつ、ハッチ開い、ヤメツ、ヤメ

ロオーツ！

できる。

彼ならば、必ず。

必ず事を成す。そう信じられる……否、確信している。

なぜならば、彼が。彼こそが。

————ダメ吐く！ もう吐く！ 限界！ もう限界だか

らア！ あつ、ああああ！

極東が誇る最強のゴツドイーター。

神狩人なのだから。

——オロロロロロ

放たれた一矢、神を射抜く。

□ ■ □

強力なアラガミの周囲には、“おこぼれ”を狙い中規模のアラガミ

の群れが発生することは、アラガミ生態学においては基礎である。まるで台風のように、食い散らかされた残飯にアラガミ達が群がるのだ。

そう、その中心は、即ち“目”、である。

このアラガミの嵐を越えた先に……いる。

あの赤いカリギュラが――。

「ギル！ お前ちよつと下がれ！ 頑張りすぎだ！」

「ハルさん……でも！」

「こりゃ、甘く見てたか……！ 数多すぎんだろ！」

銃撃形態に神機を変形させ、後退するギルバートに、ハルオミは冷や汗を流す。

戦況は明るくない。

自分も銃撃形態へと神機を変形させ、アラガミの群れを牽制するも、この台風……アラガミの包囲網を抜けることが出来ずにいた。

神機を変形させる度に、接続部分に砂を噛むかのような、嫌な違和感が生じている。

ハルオミは元々、第一世代の近接型神機の適合者である。

今や世界中の第一世代ゴッドイーターに増えつつある、第二世代型への再適合、言わば乗り換えを行い戦力を増強した一人であった。

それも今は昔。

ハルオミの“キャリア”は十年以上にも上る。

そのキャリアのほとんどをグラスゴー支部という、小規模の支部に務めたハルオミは、自然と自身の適正を把握するに至った。

専守防衛、要所防衛。

守ることが、自身の本分である。

これが防衛戦であれば、リンドウらが欧州で発見したという新種の狐型の大型アラガミであっても、数分は単騎で持たせられる自信がある。

だが、今回のように攻め入るような戦いでは。

ギルバートも、チャージスピアという突撃槍を獲物としているものの、その根幹はハルオミと等しいものであった。

「極東も頭の堅い……！」

思わずギルバートの口から悪態が漏れる。

独自路線の色が強い極東であるが、ゴツドイーターの管理や任務調書についてはフェンリル本社の定めた規則に則っていた。

常時は改竄上等の構えであることは公然の秘密であるが、フェンリル本社直轄領ともいえるフライアとの連携となれば、その規則による縛りは一層強くなる。無視することが出来ぬほどには。

極東支部第四部隊隊長と、フライア所属ブラッド部隊副隊長との合同任務は、あらかじめ定められていない突発的な緊急任務において、非常時による戦力集中を避けるなどという理由から認可が下りるまで要請から数日の時を要したのである。

それが数日間時間的拘束をされるサバイバルミッションであるならば、特に。

その煽りを今回痛感した形となった。

「弟子」に頭を下げ、給料何カ月分かという高級酒をいくつも注いでは自分なりに誠意を見せたというのに、このオチだ。

つくづくツイていないと笑ってしまうほどだった。

しかし、あの後にカウンターでオペレーターのカウンスラーのヒバリに用意させていた書類はなんだったのだろうか。

直接手を掴まれてサインを阻止されていたようだが。

サインしたと同時にヒバリがはらはらと涙していた。女泣かせめ、と落胆を誤魔化すかのようにからかったが、さて。

「早く、行かないと……アイツが！」

グラスゴー地域から姿を消し、数年。今の今まで確認されることになかった赤いカリギュラが、徘徊の性質を持つアラガミであることは疑いようもない。

ここで逃してしまえば、次に相見えるのはいつになるだろう。

また数年後か、それとも。

待てない。

ハルオミの結論である。

落ち着き払った態度であらんとしたハルオミであったが、その実、

誰よりも焦っていたのもまたハルオミであった。

ハルオミのキャリアは十年を超え、十一年目となった。

ゴッドイーターとしては引退の二文字が脳裏に浮かぶキャリアである。

活動限界……オラクル細胞をその身に宿すゴッドイーターの、抗えぬ宿命である。

ここであの赤いカリギュラを取り逃してしまえば。

もはやハルオミに、本懐を遂げる手は無くなってしまうのだ。

ギルバートも“タイムリミット”を考えていたはず。

あれだけ関わるなど釘を刺したというのに、つい口をつく悪態は。果たして誰を求めているものだろうか。

「これは……！ ギル！」

「そんな……」

いったい何匹のオウガテイルを切り捨てただろうか。

ハルオミとギルバートの眼前に……壁。

壁が出現した。

両腕に人面盾を構えた、鉄蠍。

ボルグ・カムラン十数匹による、“フアランクス”。

ハルオミ達の顔面に、冷や汗が伝った。

鉄盾にはギルバートの槍では相性が悪い。

では自分のバスターでとなれば、そうともいえない。

蠍にはバスター、などと言われているのはいつの頃だったか。

槍にハンマー、そして鎌……神機の新武装が開発されていくに従い、戦術もまた見直されつつあった。

ボルグ・カムランには、バスターを代表とする破碎属性の神機であるべし。

これは変わらないことである。

バスターならば弱点は突ける。だが、バスターでは“相性”が悪いのだ。

ボルグ・カムランのように素早く、かつ堅い敵には、バスターは向かないというのが戦術研究者達の意見である。

ハルオミもそれには同意する。

これが広く知られるようになるまで、極東におけるバスター神機持ちのゴッドイーターの対ボルグ・カムラン死傷率は、目を覆うほどであった。

経験で覆せるだけの突破力はあるはずだ。

だが、機を見出すことができない。

この機勢というものは何とも厄介なもので、所謂戦いにおける流れというものである。

個々の能力を上げるならば、ハルオミとギルバートは決して劣ったものではない。

しかし守勢を本質とする二人だ。

踏み込む機を、その後の戦いに向けた余力をいかにして残すか。

見出せぬままに、足が止まった。

ハルオミに諦観が過る。

ギルバートもまた、苦悩に顔を歪ませた。

ここで。

ここまでできて。

仇が目の前にいるというのに。

諦めるしか、ないのか。

ああ——あの男がいてくれたなら。

激戦区の鉄火場に、悠々と踏み込んでいくような、あの男がいてくれたなら。

否、あの男ならば、きつと。

——オオオッパアアアイ！ 風圧の感触シエル級ウウ

ウウアアア！

轟音と共に戦場に吹き荒れる破壊の嵐。

爆風に目を寸瞬閉じ、開けばそこにはクレーターが形成されていた。

巨大な……あれを神機と呼んでもいいのだろうか。巨大な神機を、世界を縫う剣のようにして突き立てる影。

破壊の爪痕は、大容量コンデンサによるオラクルバレットの一斉掃

射によるもの。

あの巨体は、《ブラスト銃身のオラクルリザーブ》に近い技術であるのだろう。凄まじい破壊力である。

ハルオミは見た。

焼き払われたアラガミの群れを。ボルグ・カムラン達を喰らう、黒い影を。

プレデタースタイル地の捕喰型：ミズチ――。

極東で独自に技術開発された、神機の新捕食機構である。

その技術の全ては全ゴッドイーターに開示されているというのに、未だに使いこなすものが現れぬのは、制御機構を直接操作することはアラガミ化する危険があまりに高まるため。

そして、操作に要求される技量が、戦闘中には現実的ではないほど精密かつ緻密であるからだ。

そう、あらゆるプレデタースタイルを使いこなすのは、技術開発者であるこの男をおいて他にない。

「ユウ――！」

「リョウ――！」

異なる二つの名は、その男を指す名である。

ゴッドイーター……神狩人の名を。

――うおおおお生きてるぞ俺ええええ！ 生きてるって素晴らしいいいい――！

「やっぱり来てくれたか、リョウ！」

――制御に失敗して流されてきただけなんですけどね！

「そういうことにしとく！ サンキューな！ ちよつくら手伝ってくれ！」

――今何がどうなってるのかさっぱりなんですけどお！

笑ってしまおう。

同行を認められなかったからといって、そんなことでこの男……ギルの手前、ここではユウと呼ぼうか。

ユウの歩みを止められようか。その決意を阻めようか。

任務違反の曲解や、不可抗力による内容変更の常習犯なのだという

ことを、どうして忘れていたのだろう。

緊急任務において、別所属の隊長格が二人そろってしまっても、それは仕方がない。

「実験中の事故」ならば仕方がない。仕方がないことだ。

疲れが飛ぶとはこのことだ。

ハルオミは屈託なく笑い、ギルバートは複雑な感情に苦い顔をして帽子を直した。

「そのご立派様で穴を開けてくれ！ レディを扱うように激しくな！」

—— あひい神機様がオートエイム！

巨大神機が焰を上げ、アラガミの壁を平らげていく。

焼けた銃身がパージ。現れたバスターを超える巨刃。背部ブースターが点火され、ユウは駆け出す。

神機による「抜刀術」である。

ハルオミ、ギルバート、ユウ、以上三名。現時点を以て緊急時対応処置につき、第四部隊隊長と、ブラッド副隊長の合同任務が現時点で認可される。

アラガミの台風を抜け、「目」へと……患者の空母へと、ゴツドイーター混成部隊、突入す。

—— うおおおつしやおらあ！ 抜けたどー！

「アラガミ！ いるか！」

「いるか！ ユウ！」

—— アラガミいたよ！ いたよアラガミ！

「でかした！」

「でかした！ ユウ！」

食事を邪魔されて怒らない生物などいない。

それはアラガミであつても例外ではない。万物を喰らうアラガミだからこそ、であろうか。

「ファイア！ ファイア！」

「怯ませろ！ 撃て！ 撃てエツ！」

—— ああつ、くそつ！

「どうしたユウ！」

——無茶苦茶したから、腕が痺れて狙いが……！　ホーミング持つて来りやよかったな！

「かてーなコイツ……本当に効いてるのか!？」

暴虐。

台風の目などどんでもない。荒れ狂う暴力は、ユウを以てしても手が付けられない程。

でかい。

ハルオミの記憶にある姿よりも、二回りは大きくなっている、その緋色の体軀は。

極東に頻発する、異常進化個体の流れを間違はなく汲んでいた。

ここに渡って自己進化したのか。それともここが“古巣”であるのか。

極東において、暴君として君臨するに相応しい威容にて、吠え猛るアラガミ。

赤いカリギユラ——『ルルス・カリギユラ』。

「ダメだ、硬すぎる！」

「俺が貫きます！」

「よせ、ギル——！」

ルビーのように紅く煌く躰。

弧を描く角は、まるで王冠のよう。

カリギユラ種特有の、背から生えた角状突起からのオラクル噴射により、高速移動を可能とする。

両腕には巨大に展開する多角ブレードが。

戦闘方法は単純だ。

背からオラクルブーストを噴かし、両腕のブレードを振り回す。

これを巨体に見合わぬ超速で、かつ巨体に見合う怪力で行う。

それは、ゴッドイーターにとっても致命の一撃。

「紅い——」

声にならぬ声が、ギルの喉から漏れた。

その紅さはルルス・カリギユラの体色なのであろうか。

それとも、夕日の赤さなのだろうか。

それとも、額から落ちた血が目に入り込んだからなのだろうか。

それとも……あの日流れた、流してしまった、あの人の――
|。

「ギルウウウウウーッ！」

ルルス・カリギユラの放ったブレードの一撃が、ギルバートの体をその意識毎、空へと叩き落とし”た。

□ ■ □

届かなかった。

俺は、届かなかった。

届かなかったんだ。

「アンタ、腕輪が……ッ！」

「ごめんね……浸食が進みすぎた……アラガミ化が、始まった、みたい……」

「ああ……そんな、そんな……！」

「ねえ、ギル……わかってる、よね……？」

「できません！ 今からすぐに戻れば、きつと……きつと……！」

「たぶん無理かな、ギル……ほら、もう……」

「できません……俺にはできません……」

「ギル、お願い……」

「できませんッ！」

「もう、苦しいの……」

「ハルさんだってアンタを待ってる！ それに、アンタの体は……！」

「それを言うのは、ずるい、かな……ね、ギル」

「できません……俺には、俺にはできません……」

「ごめんね……本当にただのわがまま、なんだけど、さ……私、ギルを襲いたく、ない、んだ……だから、お願い」

俺の中に、ずっと残ってる。

彼女の流した血の温かさが。彼女の髪から立ち込める香りが。

俺の手に、ずっと残ってるんだ。

「私を——殺して」

彼女の体を、神機で貫いた感触が。ずっと。

□ ■ □

「……ル！ ギル！」

——ハルさん、こっちももう！

「こっち向けてえの！」

——タワシが重いわ手が痺れるわでもう……！ どっちかっていうと吐きそうなのももう！ ちよつと限界っていうか！

「頼む、リヨウ！ もう少しだけ耐えてくれ……くそお！ なんでこっちを見ない！」

庇われている。

ギルバートが目を覚ました時に見えたのは、ユウの背中。

盾型に展開させた巨大な神機を「削る」のに夢中な、ルルス・カリギユラの姿。

そして、その首筋に突き立った、「旧型のロングブレード」。

「副……隊長……もう、いい……！ 無茶は、よせ！」

——やかましい！ いいから回復してろ！

「う……ッ！」

——もういいからそういうのは！ なんか俺狙われてるから、アイツの注意引き付けて隙作るから！ ギルは攻撃だけに集中

するんだ！

大丈夫、俺が何度だってサポートしてやるから！

ソーマじゃないんだからガチンコ突撃なんて何度もさせられたらたまらないし、というつぶやきも聞こえたような気がする。

その時、ギルバートの目に映ったのは、その胸に到来したのは、深い情動だった。

似ていると、ずっと思っていた。

どうして今、あの人の言葉を、顔を、思い出してしまうのだろうか。だから。

ああ、そうだ。

あの人はああ言っていた。

だから。

「リョウ——ッ！」

——あつ、これだめなやつ。

ユウの神機が、アタツチメントパーツが砕かれ、空を舞った。

戦闘中に神機を無防備に手放すなど、普段のユウを知るものならば、ありえないと思うだろう。

だがギルバートはそうは思わない。それは信頼ではなく、怠惰だと思っっている。

事故は起きうるのだ。完璧な人物などいないのだ。

いかに強いと嘯かれる神機使いであろうとも、疲弊する。

慣れぬ実験機を使わされ、作戦区域が異なる場所から愚者の空母にまで駆け付け、さらには本来は何日にもかけて行われるべきサバイバルミッションを、そのままの状態で突貫したのだ。

あのミスは疲労の現れである。

ルルス・カリギユラが、無防備を晒したユウにブレードを振り上げるのが、ゆっくりと見える。

ああ、俺はまた、こうやって大切な人を失うのか——。

「いや、違うだろ、俺」

覚えている。

あの日の感触を。

あの日の———あの人の、言葉を。
だから。

『お互いが、支えあえるだけ支えあうのって、相当素敵なことだと思うんだ』

だから、そういうことなんですね。

『ケイト』さん———。

「ここで、諦めるわけには、いかねえんだよツ!!」

ギルバートが帽子を脱いだ。

“かなぐり捨てた”のである。

「なんとかしろ! ユウツ! なんとかしろおツ!」

———う、うおおお死にたくねえええッ! 帰ってきたらシ

エルにバニーガールコスしてもらうって約束してるのに死ねないう
おおお!

なんとかしろ、などと。

何ら具体性のない作戦を、戦闘中に口走るなど。

ましてや、ユウが“なんとかする”のを信じて、後先考えずに“
チャージ”し始めるなど。

これまでのギルバートには考えられぬことだった。

あいつはなんとかする。

解らないが、なんとかするに決まっている。

ギルバートは信じたのだ。

———うおおおお! アクロバット回避イア!

ユウはギルバートの信頼に応えた。

扇状に展開されたブレードの隙間を中空で縫うという、超絶技巧で
もって。

———神機を相手の首筋にシユウウーッ! 超! エキ

サイティン!

ルルス・カリギユラの右の首。

そこに突き立っていた、旧型の神機の、柄。

それを、飛び上がった勢いそのままに、ユウは蹴り込んだのだ。

ゴッドイーターと接続しておらず、活性化されていない神機であつ

たとしても、その構成材質はすべてが対アラガミ素材となっている。オラクル細胞の結合を崩壊させることはできなくとも、破断は十分に可能なのだ。

赤陽よりもなお赤い、ルルス・カリギユラよりもなお紅く染まったその神機。

忘れもしない。穏やかでありながらその実誰よりも苛烈であった、持ち主の内面を表しているかのようなその神機は。

あの人が、最後の戦いで残したものだ。

それが抜けずにとずっと、刺さっていたのだ。

ずっと、あの人は、独りでそこにいたのか。

ずっと、戦っていたのか。

——あもう無理これ限界オロオロ。

痛みに暴れ狂うルルス・カリギユラに弾き飛ばされ、ユウが地を転がっていく。

ルルス・カリギユラは自身を傷つけたものを許しはしない。

燃える瞳が、ユウを睨み付けている。

こちらに意識はない。

好機……だが、まだチャージ完了には時間が足りない。

あと数秒。

ほんの一秒でもいい。

時間を。

「ギルウウウウウー」

瞬間、がくり、とルルス・カリギユラが膝を突いた。

ハルオミが、膝の逆関節目掛け、タツクルを仕掛けたのだ。

カリギユラに代表されるハンニバル種相手に、近接攻撃を……ましてや接触を凶ろうなど、自殺行為そのものだ。

ルルス・カリギユラはハルオミの体を筆り取らんと、その爪をすべて、胴体にずぶりと突き刺した。

引き千切られる——だが。

「これで俺を無視できないだろ……ぐん、ぐううッ！ は、ははー！」
だが、折れない。

決意を固めた男は折れない。

「今だ、やれえええッ！ ギルウウウウ！ 俺ごとやるんだッ！」

「でも、ハルさんが！」

「やるんだ、ギル！ 頼む、俺を……ケイトを……」

ハルオミは泣いていた。

万感の想いが込められた涙だった。

男は涙を見せぬものさ、などとハルオミが笑って言ったことがある。

どんな失敗をしても、目の前で救えなかった命があつたとしても、いつも笑っている男。

それがハルオミだった。

自分の妻が死んだ時すらも――。

そのハルオミが、泣いている。

顔で笑い、心で泣く。

それが真壁ハルオミという男の、真実の姿であつた。

「救ええええッ！ ギルウウウウ！ ケイトを救ってやってくれええええッ！」

ギルバートの神機が赤黒の輝きを放つ。

ブースト展開。オラクル細胞連結開放。

槍が輝く――その槍は、亡き者の遺志を継ぐ戦士の槍。

銃身が震える――その銃は、命ある限り同胞を護り続ける銃。

盾が唸る――その盾は、人との繋がりがあある限り新たな力を生み出す盾。

オラクルエネルギー蓄積、フルチャージ。

ああ、今こそ。

「お、お、おとおおああああッ！」

ブラッドアーツ――開眼。

『バンガードグライド』、起動。

「届けええええええええええッ！」

オラクルの槍が、ルルス・カリギユラを貫く――！

——これがギルの、血の力か。

その血の力を、『鼓吹』という。

己の意思を、他者に吹き込むことを意味する言葉である。

敵には必滅の意思を。

そして味方には——。

ブラッド特有の広域感応現象により、ハルオミに、ユウに、ギルバートの想いが伝搬する。

それは深い後悔と、悲しみと、押し折れそうになっている男の心だった。

そして、戦いたい、と。

戦いたい、守りたいと叫ぶ、熱い、身を焼く程の想いが、そこに。

——すつげえ。こりやだめだなっと思っただけ、こんなこともあるもんなんだなあ。

間の抜けたユウの声が、嫌に響いた。

全員が呆けたような顔をして、腰を抜かしていた。

ユウも、ギルバートも、そして、自分ごとルルス・カリギユラを貫かせたハルオミも。

あのまま、ルルス・カリギユラを貫かせると同時に、自身の身も千切れ、死すと思っていた。

だが、奇跡が……そうとしか言いようのないものが起きた。

ルルス・カリギユラを、ギルバートの槍の穂先が貫いた瞬間。

その巨軀の首元に遺された神機が、一瞬、活性化し、ルルス・カリギユラの腕部の結合を崩壊させたのだ。

ハルオミの体へと爪を喰い込ませていた腕の。

時を思い出したかのように、ルルス・カリギユラが、ぐらりと傾いた。

重い地鳴りをたて、紅い巨体が地に沈む。

『アラガミ、沈黙しました……！』

ルルス・カリギユラにまつわる因縁を知っていたのだろう。静かにしていたオペレーター、ヒバリの感極まった声が、無線越しに聞こえた。

「勝った、のか……?」

風切り音。

ルルス・カリギユラの腕を切り落とした遺された神機が、回転しながら空母の甲板上へと突き立った。

奇跡に名を付けるならば。

生体接続口である柄を、ユウのような強大なゴツドイーターに蹴り付けられ、神機が起動したのかもしれない。

もしくは、ギルバートのたつた今日覚めた血の力……他者のオラクル細胞を活性化させる力が、遺された神機のオラクルリザーブ内に微量に残存していたオラクルの『残り香』に作用したのかも。

「聞こえたか?」

気が付けば、ハルオミがギルバートの傍に立っていた。

傷は浅くないだろうに、いつもの、無理矢理浮かべた笑みを貼り付けながら。

「俺は、聞こえたよ。ケイトの声が……もう大丈夫だね、って。はは、あいつらしいや、はは……」

最後に一筋だけ涙を落とし、ハルオミは笑った。

———ほんとに今回はマジで死ぬかと思った……兵器実験とかもう二度としない。神機兵反対。

ぶつくさと言いながら、ユウがギルバートへと「———ほら」と帽子を手渡す。

受け取ると、その手を拳の形にして、にかっとしている。

ぶつける、と言いたいのだろう。

「はっ……いや、やんねえって」

———あらら。

自然と笑みが零れた。

差し出された拳を無視して、ギルバートはユウの手首を掴む。よっ、とユウが軽い声を上げ、ギルバートを引き起こした。

若い神機使い達の、不器用な絆がそこにあった。

「よっしや……ふいーしんぞ」

ハルオミが、二人の間に倒れ込み、肩に手を回す。

「重いつすよ、ハルさん。どいてください」

——汗くさいつすよ、ハルさん。どいてください。

「君たち重傷者に厳しすぎない？ ったく。んじゃー……」

ルフス・カリギユラのオラクル細胞が空に溶け、消えていく。

その様を見上げ、ハルオミは眩しそうに目を細めた。

遺された神機が、神機使い達を祝福するかののように、夕日に輝いていた。

「帰りますか！ アナグラに！」

サバイバルミツシヨン、『アンブレイカブル』。

ミツシヨンクリア。

評価ランク——SSS+



「俺も聖人君主じゃないからさ……そりゃ、ギルに対する割り切れない思いが、多分、あつたんだよ」

——おっぱい会議からいきなりシリアストークになった件。

「いいから、聞いとけて。ていうかお前さつきまでバニーシエルちゃんにお酌してもらってたろ」

——ふひひ、サツセン。

「ジューズと間違えてイツキしちやって潰れちやうとか、またベタな子ウサギちゃんだな。」

後でちゃんと部屋に送り届けてやれよ。ゴッドイーターの肝機能に分解されないよう調整されたやつだからな、これ」

——狼にならないよう気を付けます。今日は性なる探索はしないんですか、ハルさん。

「網タイツに隠されちらりと見える輝く脚、今にも零れんばかりのたわわな胸、思わず手を回したくなるくびれた腰、どれをとつてもパーフェクト。ああ、アリサちゃんにも着せてやりたい。」

二人のファイギュアが発売されたらセットで買うね。五万はしても買うね。そしてなにより、彼女は無垢だ。俺色に染めたくなる……が、ま……今日くらいはな」

——ちよつと本音漏れてますよね。それで、どうしたんですか？

「俺がここに、極東に来る前、いろんな支部を転々としたことは知ってるな？ ギルと同じ、仇討ちなんてこと考えてたんだ。ガラにもなくな」

——ああ、たしか、この前話してた。

「もつかい語らせてくれよ。そう彼女は……彼女の名前はケイト。ケイト・ロウリー……グラスゴー支部の隊長で、俺の、嫁さんだった」

——この前は、付き合ってた、としか。

「ああ、言つてなかったつけ。俺、こう見えても結婚してたのよ。こう見えて嫁一筋のかたーい男だったんだぜ」

——信じられないなあ。

「言つてろ。それで、グラスゴー支部は俺とケイト、ギルを含めてゴツドイーターが三人しかいない小さな支部でな。」

ここに比べりゃアラガミの被害も少なくてさ……ま、極東に比べりやどこも平和だが、俺たち三人だけでもなんとかうまいこと捌けたんだ。

その日も、いつも通り、簡単な討伐のはずだったんだ。そうなるはずだった……」

——ルルス・カリギュラの。

「ああ……そのミッションではいつも通り、ギルとケイトはペアで行動し、俺は別ルートから回り込む形でアラガミを撃破していったんだ。」

——こことは違って、偵察班なんてのは存在していないからな。現場についてみたら、なんてことはしよつちゆうだった。

グラスゴー支部周辺のアラガミの生態系を考えると、強力な個体は発生しようがない……どこからか流れてきたんだろうな。極東からかもしれない。

そいつに、ケイトはやられた。

その時点でケイトはこの仕事が長くてな……オラクル細胞の制御限界が、とつくに来てたんだ。そんなときに枷である腕輪が壊れれば……あつという間にアラガミの仲間入りさ」

——アラガミ化……。

「チームの誰かがアラガミ化したときの対処手段……お前に聞くことじゃなかったな」

——いえ……仲間がそうなったことは、たくさんあります。でも、近しい人がそうなったことは……ギルの気持ちは、俺にはわかりませんから。

「そうか……こいつが、ギルが泣いてるところ見るのは、これで二回目だよ。気持ちよさそうに眠ってら……泣きながら、本当に……」

——飲ませすぎちゃいましたね。こりや、明日がづらい。

「眠らせてやってくれ。そのまま、もう少しだけでいいから。俺がさ、あの時、駆け付けた時には……もうケイトの姿はそこにはなかった。

岩に縫い付けられてた、ケイトの服だけがあった。そして、ギルがケイトの腕輪を大事そうに抱えて……ずっと、泣き続けてたんだ」

——上官殺しってというのは。

「グラスゴーは狭い場所だったからな。そういう所で口さがない奴が騒ぎ立てた噂ってのは広がるもんだ。

もちろん軍法上も無罪だった。だがな、その言葉がどれだけギルを傷つけたか……。

本来ならそれは隊長格の仕事で……副隊長だった俺がすべきことで、情報遮断も俺の仕事だったのに。俺はそいつを怠ったんだ。

ギルをかばってやれなかった。俺も、しばらく頭が真っ白になってたんだ。ギルと顔を合わせることができなかった。

誰も、あいつを責めることなんてできやしないのにな……」

——つらいですよね、副隊長なんて。

「後を託される立場で、実際『そう』なったらな。たまんねえよ……本当、たまらなかつた……。それで、ギルとはそれきりで、やつと極東で再会したってわけだ」

——— 今、全部吐き出しちゃった方がいいですよ。酔っぱらってるんだから、誰もまともに聞くことなんてないですから。

「ああ、ありがたいな……。いい奴だよ、お前は。俺が、ギルに抱いていたわだかまりはさ、それだけじゃなかつたんだな。

みつともない、男のジエラシーだよ。ケイトとの最後の時を過ごしたのは、俺じゃない、ギルだつたんだ。最後にケイトに触れたのは、あの細く白い指先をとつたのは、俺じゃなかつた。

俺じゃなかつたんだよ……。どうして俺じゃなかつたんだらうって、ずっと思つてた。怖くてさ、聞けなかつたんだよ」

——— それは、何を？

「何だつたかな……。あれだけこだわつてたのに、もう忘れちまつたよ。

なあ、リヨウ……。いや、ユウ。こいつのこと、頼んでもいいか？

たぶん、今のギルなら、ケイトがよく言つてたこと、理解してると思うんだ。

お前さんはギルを支えてくれた。ギルだつて、お前のこと支えてやりたいって、きつと思つてる。だからさ、頼むよ。な？」

——— ええ……。俺も、副隊長ですから。仕事押し付けられそうな奴は大歓迎ですよ。いや、マジで。

「そうか、ああ……。安心した。我ながら、本当にらしくもない、仇討ちなんて考えて色んな支部を渡り歩いてきたけどさ。

お前みたいなまつすぐな若いヤツのおかげでさ、ギルが前を向いて歩き出したんだ。だからそろそろ……。俺も歩き始めるよ」

——— ハルさん……。

「気長に待つててくれるかな、ケイトのヤツ」

——— 聖なる真理なんて追い求めてるんだから、そりやもう、カンカンに怒つて待つてますよ。きつと。

「はは……。やつぱ、お前にやバレてるよな。そりやあな……。んじゃ、俺は部屋で飲みなおすから、ここらでおいとまだ。いい夢みるよーっ

と」

——ええ、ハルさんも。

ハルオミが去り、バーカウンターに静けさが戻る。

ゴッドイーター達も、事情は知らずとも感じ入るものがあつたのだらう。

気を遣い、誰もラウンジには立ち入ろうとはしなかった。

ラウンジの主たるムツミもまた、十という歳もあり、カウンターの内側は人の気配がない。

ユウの名を寝言で呼ぶシエルの声と、ハルオミに潰されるまでブランドーを飲まされたギルバートの苦しそうなイビキが、そして時折傾けられるユウのグラスが立てる氷の音だけが響く。

大きな窓ガラスがぼんやりと夜間灯に照らされて、雲の隙間から見える星明りが美しく瞬いていた。

——ギル、お前は……。

逡巡した後、ユウはその問いを、洋酒と共に飲み込んだ。

琥珀色が波打ち、カラリと氷に打ち付ける。隣で静かに零れていた透明な雫を、気付かぬふりをして拭ってやった。

それは、ハルオミがこの場に捨てていったものだ。

酒の「さかな」にするべきものだ。

陽が昇るまでに、アルコールで喉を焼き、飲み干してしまわなければならぬものだ。

そうしてくれと、託されたのだから。

だからユウは、問わなかった。

彼女を愛していたのか——と。

問うことはなかった。